口上

本月分配本大藏經經部第十三卷（本行集經）は**六百五十四頁**となつて、やゝ豫定の頁數に滿たざるものがありますが、これは本行集經を兩卷に分つて刊行したために、第十四卷（本行集經）も同じく**六百七十八頁**となるやうな始末で、他に頁數を增すといふ譯にも參らず、已むを得ざるに出た結果と御諒承を願ひたう存じます。然し、來月來々月と引き續いて配本準備中の第十二卷（法句經、長老偈、長老尼偈、彌蘭陀王問經）は**八百四十頁**、第八卷（大涅槃經）は**九百〇六頁**と相成り、共に豫定の頁數を超過する次第で御座いますから、そのお含みにて、不惡思召し置きの程を懇願する次第で御座います。　敬白

昭和二年七月

國民文庫刊行會

國譯大藏經

經部
第十三卷

目次

以上

寂後約百五十年にして同國に出世し、本經の始に歸敬語として、歸命大智海毘盧遮那佛の語句を加ふ。蓋しこれ彼が信念を表白せるものにして、如來藏教系の學者たりしを卜するに足らん。

【經名】本經末尾に、經名に關して、五部の異説を掲ぐ。

(一)大事(Mahāvastu ?)—摩訶僧祇師(Mahāsaṃghika)
(二)大莊嚴(Mahā-vyūha or Lalita-vistara ?)—薩婆多師(Sarvāstivāda)
(三)佛生因緣(Buddhaś former Nidāna or Avadāna)—迦葉維師(Kāśyapīya)
(四)釋迦牟尼佛本行(Buddhacaritra)—曇無德師(Dharmagupta)
(五)毗尼藏根本(Vinaya-Piṭaka-mūla)—尼沙塞師(Mahīśāsaka)

本經は、その名稱よりせば、曇無德部所傳のものたるを想像せしむ。果然、經中、摩訶僧祇・迦葉維兩師の異説を擧ぐる事最も多く、尼沙塞之に次ぎ、薩婆多師をも引證すと雖も、遂に曇無德師の名を出さず。且つ、曇無德師の四分律中の佛傳と、必須の關係あり。これ、本經の底本が、曇無德師の所傳たりしを暗示するものなり。

【內容】六十品の名稱、左の如し。

(一)發心供養・(二)受決定記・(三)賢劫王種・(四)上託兜率・(五)俯降王宮・(六)樹下誕生・(七)從園還城・(八)相師占看・(九)私陀問瑞・(十)姨母養育・(十一)習學技藝・(十二)遊戲觀矚・(十三)捔術爭婚・(十四)常飾納妃・(十五)空聲勸厭・(十六)出逢老人・

(十七)淨飯王夢・(十八)道見病人・(十九)路逢死屍・(二十)耶輸陀羅夢・(廿一)捨宮出家・(廿二)剃髮染衣・(廿三)車匿等還・(廿四)觀諸異道・(廿五)王使往還・(廿六)問阿羅邏・(廿七)答羅摩子・(廿八)勸受世利・(廿九)精進苦行・(三十)向菩提樹・(卅一)魔怖菩薩・(卅二)菩薩降魔・(卅三)成無上道・(卅四)昔與魔競・(卅五)二商奉食・(卅六)梵天勸請・(卅七)轉妙法輪・(卅八)耶輸陀因緣・(卅九)耶輸陀宿緣・(四十)富樓那出家・(四十一)那羅陀出家・(四十二)娑毗耶出家・(四十三)教化兵將・(四十四)迦葉三兄弟・(四十五)優波斯那・(四十六)布施竹園・(四十七)大迦葉因緣・(四十八)跋陀羅夫婦因緣・(四十九)舍利弗目連因緣・(五十)五百比丘因緣・(五十一)斷不信人行・(五十二)說法儀式・(五十三)尸棄佛本生地・(五十四)優陀夷因緣・(五十五)優波離因緣・(五十六)羅睺羅因緣・(五十七)難陀出家因緣・(五十八)婆提唎迦等因緣・(五十九)摩尼婁陀・(六十)阿難因緣

その名稱の如く、諸本行を集成せるものにして、數多き佛傳中、最も浩瀚なる、六十卷の長きを以てして、漸く成道第六年(或は第二年)の諸釋出家に至り、遂に佛陀の一生に亙らざるは遺憾なり。殆んど凡ての佛傳が、此時代又はその以前に擱筆するより見れば、佛傳作者は、これを以て佛陀の面目を傳へ得たるものと思惟せるや疑なく、飜譯の未完の爲に非ざるべし。

本經中、受決定記品の雲本生、上託兜率品の護明本生、阿羅邏・鬱頭羅二仙人を以て、毘舍離・王舍の二城邊居住と爲すこと、阿羅邏仙が數論の教義を擴說すること、成道後の佛陀を供養せる斯耶那耶婆羅門の四女の名義は、本經の成立を闡明すべき材料たり。大體よりいへば、小乘曇無德部所傳の佛傳を基礎とし、之に大乘大莊嚴經所傳のものを加味せりと見ば大過なし。其關係は、次章、佛傳系統の下に概說すべし。

【佛傳及び佛傳資料】大藏經中より、佛傳全部、及び佛傳の名稱なきも、佛傳の實あるものを、網羅し來る時は、左の如き多數となる。

一　曇無德部四分律受戒犍度中の佛傳。—罽賓國沙門佛陀耶舍（Buddhayaśa 覺稱）が、弘始十年（西暦四〇八）を以て譯せる所。釋種の系譜に筆を起し、成道第一年の王舍城化導、舍利弗目連の出家に及ぶ。甚だ簡潔なれども、古傳を含むものとして、特に尊重すべし。

二　彌沙塞部五分律受戒法中の佛傳。—法顯三藏が、師子國より將來せる梵本を、罽賓國沙門佛陀什（Buddhajīva 覺賢）が、景平元年（四二三）を以て、譯せる所。釋種の系譜より始めて、舍利弗目連の出家に到る事、四分律に同じ。古傳を含むものとして尊重すべきこと、また四分律に同じ。

三　有部律毘奈耶雜事中の佛傳。—唐の義淨三藏が、景龍四年（七一〇）、大薦福寺翻經院に於て譯せる所。下生・託胎より、鹿園說法に至る。

四　長阿含中の遊行經。—罽賓沙門佛陀耶舍が、弘始十四年—十五年（四一二—四一三）の間に、涼州沙門竺佛念の傳譯、秦國沙門道含の筆受によりて、譯出せるもの。佛陀入滅の二年間を敍する事、甚だ詳密なり。入滅の事跡は、此の經を外にして、他に求むべからず。左の諸經は皆その異傳なり。

西晉白法祖譯　佛般泥洹經一卷
東晉法顯(?)譯　大般涅槃經三卷
失譯　般泥洹經二卷
唐會寧等譯　大般涅槃經後分二卷

最後の後分は、普通に大乘涅槃經を完成せしむるものとして、大乘に屬せらるれども、義淨三藏がいひけんやうに、小乘涅

業經の荼毘に關する部分の別譯なり。

五　僧伽羅刹所集經三卷。—罽賓國沙門僧伽跋澄（Saṁghabhūti 衆現）が、建元二十年（三八四）に譯せる所。佛本生及び佛陀に關係ある委曲の説明を爲し、簡略に佛の一生を叙す。適當の意味に於ける佛傳に非ざれども、説法四十五年を總説する如き無比の好材料を含む。西藏大藏中には、之を缺くといふ。羅刹は、須賴國の人、佛滅七百年の出。諸邦を遊敎して、甄陀越土に至り、甄陀罽貳王の師たり。修行大道地經を集め、また此の經を著はせり。道安いふ、「雖下普燿・本行・度世諸經、載二佛起居一、至謂上レ爲レ密、今覽二斯經一、所レ悟復多矣」と。罽貳王は迦膩色迦大王ならんと推定せらる。然らば、羅刹は馬鳴と同時なり。馬鳴の佛所行讃が、佛傳中の最たらば、此の經もまた佛傳研究者の缺くべからざる所なり。

六　佛所行讃（Buddhacarita-kāvya）五卷。—佛教界空前絶後の大文豪馬鳴菩薩（Aśvaghoṣa-bodhisattva）の造。中印度沙門曇無讖（Dharmarakṣa 法豐）が、元始三年—十五年（四一四—四二一）の間に譯せる所。或は佛所行讃經とせられ、または佛所行讃傳とせらる。生品に始まりて、分舍利品に至る。佛生より佛滅に至る完全なる佛傳は、獨、此書のみといふも不可なし。梵本現存すれども、漢譯が二十八品なるに異り、僅に十七章あるのみ。西藏大藏中に、之を缺くといふ。印度文學の資料を活用して、藻思縱横、現實の立脚地を失はずして、讃嘆の妙を盡す。

七　普曜經（Lalitavistara）八卷。—燉煌菩薩竺法護（Dharmarakṣa）が、永嘉二年（三〇八）、天水寺に於て、沙門康殊・白法巨等の筆受によりて、譯せるもの。一名方等本起といふ。方等（Vaipulya）は、大乘の義、卽ち大乘佛傳なり。兜率天子本生に始まり、成道第六年（或第二年）の歸鄉に至る。梵本現存。此經に四譯あり。第一譯、蜀普曜經八卷、第三譯、普曜經八卷、西涼州沙門智嚴、共寶雲、元嘉四年（四二七）譯の二者は、共に闕本と爲り、第二譯たる本經と、第四譯たる次出とが、現存す。

八　方廣大莊嚴經十二卷。—中印度沙門地婆訶迦（Divākara 時照）が、永淳二年（六八三）、西太原寺歸寧院に於て、

沙門復禮の筆受によりて譯出せる所。一名神通遊戯(或神童遊戯)といふ。前掲普曜經の異譯。方廣は方等と同義なり。淨檀本生に始まり、歸郷父王化度に終る。西藏大藏中のものに一致すといふ。

九　過去現在因果經四卷。―國譯の底本なり。委しくは解題の下を見よ。開元釋敎目錄に據れば、本經は左の六譯三存中の一なりとせらる。

(い) 小本起經一卷。西域沙門支曜が、中平二年(一八五)を以て譯せる所。或は修行本起又は宿行本起といはる。闕本。

(ろ) 太子本起瑞應經二卷。康居國人を祖とせる沙門孟詳が、興平元年　建安四年(一九四―一九九)の間に譯せる所。或は瑞應本起といはる。闕本。

(は) 修行本起經二卷。次に出づ。

(に) 太子瑞應本起經二卷。次に出づ。

(ほ) 過去因果經四卷。迦毘羅衛國甘露飯王の苗裔たる、北天竺沙門佛陀跋陀羅(Buddhabhadra 覺賢が)、隆安二年―永初二年(三九八―四二一)の間に譯せる所。闕本。

(へ) 過去現在因果經四卷。

右の中、(ろ)は、康孟詳の度語によりて譯出せられたる中本起經を指すものにして、別に此經ありしに非ず。(ほ)は、費長房の目錄に見ゆ。果して、此の經ありしや否や疑はし。(は)(に)の二經は、後出によりて必ずしも因果經の異譯といふを得ず。されば、一經六譯三存にあらずして、實は三經三譯三存なりといふべし。

十　佛本行經七卷。―涼州沙門寶雲が、元嘉年中(四二四―四五三)の間に、六合山寺に於て、譯せる所。或は佛本行讃經、または佛本行讃傳とせらる。佛生より佛滅に至る。普通に佛所行讃の異譯とせらるれども、小同大異なり。西藏大藏中

に一致のものを有すといふ。

十一　修行本起經二卷。―西域沙門竺大力(Mahābala?)が、建安二年(一九七)を以て、康孟詳の度語によりて、譯せる所。或は宿行本起と稱せらる。梵本は、曇果と共に、迦毘羅衛國より齎し來れるものなりといふ。現變・菩薩降身・試藝・遊觀・出家の五品より成り、定光佛本生に筆を起し、降魔成道に終る。開元目錄には、因果經の異譯と爲せど、蓋し同原より派生せる別種の佛傳といふを可とす。次の中本起經と合して、佛傳を成す。

十二　中本起經二卷。―西域沙門曇果(Dharmaphala?)が、建安十二年(二〇七)を以て、康孟詳の度語によりて譯出せるもの。轉法輪に始まり、大迦葉化度に至り、其後に佛滅の年に起れる度奈女を加へ、また自還國見・佛食馬麥の二品を加へ、總計十五品より成る。前揭修行本起經と合して、佛傳を成す。內典錄は、十一を孟詳譯中本起經、十二を曇果譯修行本起經と爲し、名稱全く顚倒す。經中、魏魏に細註して、晉云賓稱といひ、また菩薩嘆德文が法護譯のに同じきより見れば、晉譯ならんか。

十三　太子瑞應本起經二卷。―大月氏の歸化人、優婆塞支謙が、吳の黃武年中(二二二―二二八)、陳郡の謝鏘・吳郡の張洗等の筆受によりて譯出し、魏の河東王柜の詳定せるもの。また太子本起瑞應ともいはる。品を分たず。定光佛本生に筆を起し、降胎・胎生・試藝・遊觀・納妃・出家・降魔・成道・梵天勸請・度五比丘・度三迦葉に終る。前半は修行本起經に同じく、後半は因果經に類す。次の異出本起經と同本異譯なり。

十四　異出本起經一卷。―竺法護の譯經に參與せる淸信士聶道眞が、法護の寂後、建興年中(三一三―三一六)に於て、譯出せる所。極めて簡潔に、誕生より五比丘化度までを敍す。前揭瑞應本起經と、結構を同じくす。西藏大藏中に、之を缺くといふ。

十五　十二遊經一卷。―西域沙門迦留陀伽(Kālodaka 時水)が、太元十七年(三九二)を以て譯せる所。極めて簡明に、

成道後の十二年間を敍し、系譜・國名等を概括的に記す。西藏大藏中に、之を缺くといふ。目錄によれば、是より先、同名の經が、西域沙門彊梁婁至（Ka'aruci 眞喜）に因りて、太康二年（二八一）、廣州に於て、譯せられ、兩譯は小異大同なりきといふ。

十六　衆許摩訶帝經十三卷。—中印度摩竭陀國那爛陀寺の沙門法賢が、開寶六年—咸平四年（九七三—一〇〇一）の間に譯せる所。本生より始めて、歸鄉化度に至る。西藏律藏中所傳の佛傳と、同樣の結構を有す。西藏大藏中に、之を缺くといふ。

十七　佛本行集經六十卷　—國譯の底本なり。委しくは、解題を見よ。

【佛傳四類】　法を中心とし、涅槃を理想とするを、羅漢敎とし、佛を中心とし、菩提を理想とするを、菩薩敎とす。羅漢敎は所謂小乘なり、菩薩敎は所謂大乘なり。菩薩の稱は、その初、本生の佛陀を指すに起り、本生文學の發達と共に、次第に其內容を深めたり。本生の佛陀、卽ち菩薩を以て、修道の模範とする事は、大小二乘に共通すと雖も、法を中心とする敎徒は、智慧の一面のみを主とし、智慧の一面のみを主とする結果は、必竟羅漢敎の域を脫せず。佛を中心とする敎徒は、悲智の二面、殊に慈悲の他面を主とし、慈悲の他面を主とする結果は、菩薩大乘の域に進めり。大小二乘共に適當の發達を遂げたる菩薩觀を有せりと雖も、その間に自ら差異あり。その差異は要するに佛陀觀の相違に基づく。本生文學に於て、初めて成語せる菩薩は、漸く深奧の意

義を加ふるに及びて、大乘教を誘發し、更に大乘教の發達に伴ひて、次第に佛傳の色彩を異らしめたり。以上各種の佛傳、及び佛傳史料は、之を四類に分つを得べし。(一)小乘的、(二)大小未分的、(三)大乘的、(四)大小調和的、これなり。以上各種の中、闕本を除き、現存本のみに就きて、之を四類に分てば、

第一　小乘的―四分律・五分律・有部律・遊行經及びその異譯。

第二　大小未分的―僧伽羅刹所集經・佛所行讃。後者は本生を交へず、不思議の事蹟を加へず、飽くまで人間佛を描かんとし、前者は本生に重きを置き、相當に發達せる菩薩觀を加ふ。共に、小乘より大乘に移る過渡期のものたり。

第三　大乘的―普曜經・大莊嚴經。

第四　大小調和的―過去現在因果・佛本行・修行本起・中本起・瑞應本起・異出本起・佛本行集の諸經は、すべて之に屬す。中に於て、前六者は大乘の立脚地に立てるもの、本行集經は小乘佛傳を底本として、之に大乘を加味せるものなり。

【佛傳系統】　四分律中の所傳は、小乘佛傳の代表なり。その要目、概ね五分律所傳に一致すと雖も、五分律とも異り、他の佛傳とも異る特色に三あり。(一)定光本生中の彌却(Megha)摩納の名。これ普通善慧(Sumedha)の名によりて傳へらるるものにして、本生そのものは、因果經の善慧・佛本行經の善思・修行本起經の無垢光と同一なれども、彌却の名を以てするは、四分律及び本行集經のみ。但、本行集經にては、之を譯して雲と爲す。(二)菩薩に心を繋けたりといふ鬱轉羅

大將の四女。四分律が、降魔の事跡を傳へず、大將の四女のみを傳ふるは、注目に價す。この四女は他の佛傳のいづれにも傳へられず。獨、本行集に於て、佛成道の後に、之を供養せる斯耶那耶婆羅門の四女として傳へらる。(三)三迦葉化度の神變中に於ける忉利天の花。これを傳ふるは、獨、本行集經のみ。以て、本行集經が、四分律を祖述せるを卜知すべし。兩者共に曇無德部所傳なれば、其間に密接の連絡あるも、素より當然なり。

大小未分の佛傳の代表といふべきは、佛所行讚なり。同時の僧伽羅刹經を一見する時は、馬鳴の時に於て、進歩せる菩薩觀あり、大乘教義の發展しつつありしは明白なれど、馬鳴は、現實に立脚し、人間佛を傳へんと苦心せるものの如く、本生を交へず、不思議の事蹟を加へざるを本讚の特色とす。中に於て、他との關係上、注目すべきは、(一)阿羅邏仙人に數論の教義を加へたる事。この教義に言及するものは、多くの佛傳中、本讚の外には、因果・佛本行・本行集の三經のみ。中に於て、因果經のは簡に過ぎ、佛本行經のは異れる概括を爲し、本讚の後を繼げるは、獨り本行集經のみ。(二)五比丘の中に十力迦葉の名を加ふる事。この名を傳ふるものは、他には、獨、中本起經あるのみ。

大乘佛傳の代表たる普曜經に於て、他との關係上、注目すべきは、(一)上兜率天の菩薩を傳ふる

事。これ善慧としての修行を終りたる後の、託胎以前の補處の一生を傳へたるものにして、本經には其名なく、因果經には聖善慧と爲し、未だ特別の名を見ざれども、本經の異譯たる大莊嚴經に至りて、淨幢（Svetaketu）の名を以てし、本行集經は、一方に彌却本生を繼紹しつつ、他方に淨幢本生をも繼紹し、兩傳の本生を調和統合するの跡歷然たり。

大小調和の佛傳多數あり。因果經も、本行集經も、共に之に屬す。

因果經は、其結構に於て、馬鳴の佛所行讚を繼紹せるが如しと雖も、六度・十地・阿宇不可壞・一切法空の如き大乘分子を加ふ。これ、當時次第に醱酵しつつありし大乘教義との接觸より來り、現實の釋尊傳は全く小乘的なるに關らず、本生の上に於て大乘分子を加味せんと試みたるものなり。中に於て、阿羅邏・迦蘭を以て二仙人と爲す事は、注目に價す。其後に、之を繼紹せるは、佛本行・修行本起・中本起の三經なり。

本行集經は、縱横に本生を挿入せる最長編の佛傳なり。中の雲本生は小乘四分律の彌却本生を受け、護明本生は、大乘大莊嚴經の淨幢本生を受け、以て本生に於ける大小兩傳を調和せしめ、阿羅邏仙人の數論の教義は、大小未分の佛所行讚を繼紹して、更に之を敷衍し、二仙人の住處は大莊嚴經を受け、佛成道後に、之を供養せる斯耶那耶婆羅門の四女は、四分律を受け、以

て大小兩系を折衷す。卽ち、一方には小乘系の四分律を受け、他方には大乘系の大莊嚴經を受け、加ふるに大小末分の佛所行讃を受くる所あり。斯くて、諸種諸系の佛傳が、本經に至りて調和せられ、集大成せられしを知る。然も本經の、大乘的色彩に乏しき所以は、もと、曇無德部所傳の佛傳を基礎とし、之に大乘所傳の佛傳を加味せるが爲なりとす。

譯者　常盤大定識

國譯佛本行集經(一)

卷の第一

(二)發心供養品第一の上

大智海(三)毘盧遮那佛に(四)歸命し奉る。是の如く、我聞けり。一時、(五)婆伽婆、王舍城の迦蘭陀鳥竹林の內に住したまひて、大比丘僧五百人と俱なりき。爾の時に、如來は、佛行に住して、復煩惱なし。故に(六)耆那と名く。一切の智を得、一切の智を行じ、一切の智を知り、天行に住し、梵行に住し、聖行に住して、心に自在を得、諸の世尊に依り、諸行を行ぜんと欲して、悉く皆行ずることを得たまへり。比丘及び比丘尼、諸の(七)優婆塞及び(八)優婆夷、(九)四衆の中に在りて、大供養と恭敬尊重とを受けたまふ。又諸の國王、大臣、宰相、種

【一】本行。釋尊が過去世に菩薩たりし時の實修行跡。
【二】發心。發菩提心の略、佛果菩提を求めんとの大心。菩提(Bodhi)とはさとりの智慧。
【三】毘盧遮那(Vairocana)光明遍照、遍照、又は大日と譯す。
【四】歸命は敎命に信順するを
【五】婆伽婆(Bhagavat)。世尊と譯す。

種の外道、及び諸の沙門、婆羅門等より、佛、是の如き種種の利養を得たまひ、飮食、衣服、牀鋪、湯藥の四事充滿し、皆悉く具足し、最勝最妙にして、與に等しき者無く、智慧第一の名稱遠く聞え、利養を受くと雖も、心に染なきこと、猶ほ蓮華の水に著せざるが如し。世尊の名號、說法の音聲は、世間中に於て、最上最勝にして、更に過ぐる者無し。是の如く、世尊・〔一〇〕多陀阿伽度・〔一一〕阿羅訶・〔一二〕三藐三佛陀は、十號具足し、能く現在の天・魔・〔一三〕梵・〔一四〕釋・沙門・婆羅門等、一切天人世間の中に於て、神通もて徧く知り、知り已りて說法し、世間に行はしむ。前後及び中の言語皆善く、文義巧妙、理趣精微、〔一五〕相好〔一六〕莊嚴、具足して缺くることなき淸淨梵行もて、宣揚顯說し給ふ。

爾の時、尊者〔一七〕大目揵連、晨朝の時に於て、衣を整へ、鉢を持し、王舍城に入りて、乞食を行せんと欲す。時に目揵連、獨立ちて思惟すらく、『今日、晨朝の乞食尚早し。我、今、先づ當に〔一八〕淨居天に至るべし』と。尊者目連、是の念を作し已るや、譬へば力士の臂を屈伸す

【六】耆那(Jina)。勝者と譯す。

【七】優婆塞(Upāsaka)。清信士と譯す。

【八】優婆夷(Upāsikā)。清信女と譯す。

【九】四衆とは比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷をいふ。衆とは僧伽(Saṃgha)の譯。三人以上の團體をいふ。

【一〇】多陀阿伽度(Tathāgata)。如來と譯す。

【一一】阿羅訶(Arhat)。應供と譯す。

【一二】三藐三佛陀(Samyaksaṃbuddha)。正等覺と譯す。以上の三は、共に佛の稱號にして、これに七號を加へて十號となす。

【一三】梵(Brahmā)。梵天のこと。

【一四】釋(Śakra)。帝釋天のこと。

【一五】相好とは三十二相、八十種好の略、具足圓滿なるすが

る如き頃に、王舍城より身を沒して現ぜず、淨居諸天宮の所に至り、忽然として立ちて住しぬ。

爾の時、無量の淨居諸天、既に目連の安庠として至るを見て、心に歡喜を生じ、各相謂つて言はく、『我等、今、共に往いて尊者目連を迎ふべし』と。是語を發し已り、相隨つて目揵連の所に至り、頭面もて目揵連の足を頂禮し、却つて一面に住し、目連に白して言さく、『尊者目連、希有なり、希有なり。尊者目連、世間中に於て見難く値ひ難し。謂く、佛・世尊・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀は、無量百千萬(一九)劫に於て、諸行を勤修したまへり』と。かくて、偈を說いて言はく、

『百千劫中に於て、(二〇)菩提の道を勤求し、多時を過ぐるこのかた、
衆生の中の大寶、世間の見難きものは、唯佛世尊のみ有り。』

爾の時、尊者大目揵連、淨居天より是の偈を聞くや、徧體戰き慄ひ、身毛皆竪ちて、是念を作す、『希有なり希有なり、不可思議なり。見難く値ひ難し。謂く、佛・世尊・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀は、世間に逢ひ難し。無量百千萬億劫中、時に一たび出現したまふ。』爾の時、尊者大目

たにいふ。

【一六】莊嚴とはカザリ。

【一七】目揵連（Mahāmaudgalyāyana）略して目連といふ。十大弟子の一人。神通第一の稱あり。

【一八】淨居天とは色界第四禪九天の中、上方の五天をいふ。聖者の居る所なるを以て、この名あり。色界とは三界の一。

【一九】劫は劫波（Kalpa）の略、譯して時といふ。

【二〇】菩提（Bodhi）は、さとりの智慧。諸法の實相を觀照する智慧をいふ。

揵連、淨居天に於て、彼の天衆の爲に、無量種の微妙の法を說き、無量の清淨法義を顯現し、無量の深密法要を宣通し、諸天をして心に各歡喜を生ぜしめ、敎化し顯示し、法を尊重し已るや、卽ち身を沒して此 (二一) 閻浮提に廻り、譬へば力士の臂を屈して還た舒るが如き一念の頃にして、王舍城に到り、次第に乞食して、還た本處に至るや、飯食し訖りて、衣鉢を收め、足を洗ひ已りて、佛所に詣り、佛所に到り已るや、佛足を頂禮して、却つて一面に坐し、復た自ら坐し已りて、佛に向つて行來せし處を說く、『世尊、我、旦に乞食して、王舍城に到り、便ち (二二) 首陀婆娑天上に至るに、天、我に語りて言はく、「如來世尊は、世間の中に於て、見難く値ひ難し」と。』前の所說の如く、具に佛に白して言ふ、『世尊、我、是の如き希有の語を聞き已る。實に思議し難し。謂ゆる諸佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀の、無量百千劫中に於て、時に一たび出世したまふことや。』

爾の時、佛、目揵連に告げたまはく、『目揵連、少知少見の淨居諸天が、狹劣の智を以て、乃ち能く百千劫の事を知るを得る所以は何に。目揵連、我、往昔を念ずるに、無量無邊の諸世尊の所に於て、諸の善根を種ゑ、乃至 (二三) 阿耨多羅三藐三菩提を求めたり。目揵連よ、我、往昔を念ず

(二一) 閻浮提(Jambu-dvīpa)は、須彌山の南方にある人間世界。

(二二) 首陀婆娑(Suddhavāsa)は淨居と譯す。

(二三) 阿耨多羅三藐三菩提(Anuttara-samyak-sambodhi)。無上正遍知と譯す。

るに、轉輪聖王の身と作り、三十億の佛の、皆同一號に、釋迦如來と號せると、及び〔二四〕聲聞衆とに値ひ、尊重し承事し恭敬し供養して、謂ゆる衣服・飲食・臥具・湯藥の四事具足せり。時に彼の諸佛は、我が與に、「汝當に阿耨多羅三藐三菩提・及び〔二五〕世間解・天人師・佛・世尊を得、未來世に於て、正覺を成ずるを得べし」と〔二六〕記したまはざりき。』

『目揵連、我、往昔を念ずるに、轉輪聖王の身と作り、八億の諸佛の皆同一號に、然燈如來と號せると、及び、聲聞衆とに値ひ、尊重し恭敬し、所謂、衣服・飲食・臥具・湯藥・旛蓋・華香の四事もて供養せり。時に、彼の諸佛は、我が與に、「汝當に阿耨多羅三藐三菩提・及び世間解・天人師・佛・世尊を得べし」と記したまはざりき。目揵連、我往昔を念ずるに、轉輪聖王の身と作り、三億の諸佛の、皆同一號に、弗沙如來と號せると、及び聲聞衆とに値ひ、四事の供養、皆悉く具足せり。時に、彼の諸佛は、我が與に「汝當に佛と作るべし」と記したまはざりしこと、上の所說の如し。目揵連、我、往昔を念ずるに、轉輪聖王の身となり、九萬の諸佛の、皆同一號に、迦葉如來と號せると、及び聲聞衆とに値ひ、四事の供養皆悉く具足せり。乃至、我が與に「當に佛と作るべし」と授記莂したまはざりしこと、

【二四】聲聞(Śrāvaka シラーヴカ)とは、說法の聲を聞きてさとるもの。
【二五】世間解、天人師、佛、世尊の四は、共に佛の十號中のもの。
【二六】記とは、あらかじめ言くこと、豫言なり。委しくは、記莂。之を說くを授記、又は授記莂といふ。

上の所說の如し。』

『目揵連、我、往昔を念ずるに、轉輪聖王の身と作り、六萬の諸佛の、皆同一號に、燈明如來と號せると、及び聲聞衆とに値ひ、四事の供養皆悉く具足せり。乃至、我が與に「當に佛と作るべし」と授記莂したまはざりしこと、上に說く所の如し。目揵連、我、往昔を念ずるに、轉輪聖王の身となり、曾て一萬八千の諸佛の、皆同一號に、娑羅王如來と號せると、及び聲聞衆とを供養し、四事の供養、皆悉く具足し、然る後に出家して是の如きの念を作せり、「未來世の爲に、當に佛道を得て、禁戒を護持すべし」と。時に、彼の諸佛は我が爲に、乃至佛と作るを記したまはざりしこと、上に說く所の如し。目揵連、我、往昔を念ずるに、轉輪聖王の身と作り、曾て一萬の諸佛の、皆同一號に、能度彼岸如來と號せると、及び聲聞衆とを供養して、四事の供養、皆悉く具足せり。乃至、我が與に「當に佛と作るべし」と授記莂したまはざりき。』

『目揵連、我、念ずるに、往昔、轉輪聖王の身と作り、曾て一萬五千の諸佛の、皆同一號に、日如來と號せると、及び聲聞衆とを供養して、四事の供養、皆悉く具足せり。乃至、我が與に「當に佛と作るを得べし」と授記莂したまはざりき。目揵連、我念ずるに、往昔、轉輪聖王の身と作り、曾て二千の諸佛の、皆同一號に、憍陳如如來と號せると、及び聲聞衆とを供養し、四事の供養、

皆悉く具足せり。乃至、我が與に「當に佛と作るを得べし」と授記莂したまはざりき。』

『目揵連、我、念ずるに、往昔、轉輪聖王の身と作り、曾て六千の諸佛の、皆同一號に、龍如來と號せると、及び聲聞衆とを供養して、四事の供養、皆悉く具足せり。乃至、我が與に「當に佛と作るを得べし」と授記莂したまはざりき。目揵連、我念ずるに、往昔、轉輪聖王の身と作り、曾て一千の諸佛の、皆同一號に、紫幢如來と號せると、及び聲聞衆とを供養し、四事の供養、皆悉く具足せり。乃至、我が與に、「當に佛と作るを得べし」と授記莂したまはざりき。』

『目揵連、我、念ずるに、往昔、轉輪聖王の身と作り、曾て五百の諸佛の、皆同一號に、蓮華上如來と號せると、及び聲聞衆とを供養し、四事の供養、皆悉く具足せり。乃至、我が與めに「當に佛と作るを得べし」と授記莂したまはざりき。目揵連、我、念ずるに、往昔、轉輪聖王の身と作り、曾て六十四諸佛の、皆同一號に、螺髻如來と號せると、及び聲聞衆とを供養し、四事の供養、皆悉く具足せり。乃至、我が與に、「當に佛と作るを得べし」と授記莂したまはざりき。』

『目揵連、我念ずるに、往昔、轉輪聖王の身と作り、曾て一佛の、正行如來と號せると、及び聲聞衆とを供養し、四事の供養、皆悉く具足せり。彼の佛は、亦我が與に「當に阿耨多羅三藐三菩提・及び（三七）明行足・一切世間解を得べし」と

【三七】明行足、一切世間解の二、共に佛十號中のもの。

授記したまはざりき。目揵連、我念ずるに、往昔、曾て八萬八千億の辟支佛を供養し、旛・蓋・香・華の四事具足せり。乃至、彼の佛(二八)滅度の後、爲に塔廟を起し供養せること前の如かりき。而れども我が與に「汝當に阿耨多羅三藐三菩提を得べし」と記莂を授けたまはざりき。』

『目揵連、我念ずるに、往昔、一如來の號して、善思多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰へるありき。彼の佛の所に於て、(二九)彌勒菩薩・最初に發心し、諸の善根を種ゑて、阿耨多羅三藐三菩提を求む。時に彌勒菩薩・身、轉輪聖王と作りて、毘盧遮那と名く。爾の時、人民、壽、八萬歳なり。目揵連・彼の善思如來の初會の說法に、九萬六千億人、阿羅漢道を得、第二會の說法に・八萬四千億人、阿羅漢道を得、第三會の說法に、七萬二千億人、阿羅漢道を得たり。目揵連、彼の毘盧遮那轉輪聖王は、彼の善思如來・及び聲聞衆を供養して、恭敬尊重し、旛・蓋・華・香の四事、具足せり。目揵連、時に毘盧遮那轉輪聖王、彼の如來の(三〇)三十二大人相、八十種好を具足せると、及び聲聞衆と、佛

【二八】滅度とは涅槃(nirvāṇa)の譯。かくれたまふこと。

【二九】彌勒(Maitreya)。慈氏と譯す。等覺とて殆ど佛陀に等しきさとりを得、釋迦に次いで成佛すべく、今現に兜率天にありて修行しつゝありと信ぜらるゝ菩薩の名。菩薩は菩提薩埵Bodhi-sattva。譯して覺有情といふの略、或は大心有情ともいふ。廣大なる願を發し、廣大なる行を爲す人をいふ。

【三〇】三十二大人相は、佛陀又は聖王の如き大人の具足すと信ぜらるゝ三十二種のよきすがた。八十種好は、同じく大人の具足すと信ぜらるゝ三十二相以外のよきすがたの八十種。兩者を合し、略して相好といふ。

刹の莊嚴と。壽命の歳數とを見て、卽ち道心を發し、自ら口稱して言はく、「希有なり、世尊、願くは、我、當來、佛と作るを得て、十號の具足すること、還、今日の善思如來の如く、大衆聲聞人天に恭敬圍繞せられ、佛の說法を聽いて、信受奉行すること、一種も異る無からん」と。彌勒又言はく、「願くは、我、當來、多衆生の爲に、諸の利益を作し、安樂を施與し、一切天人世間を憐愍せん」と。目揵連、彌勒菩薩は、我前に在ること四十餘劫に、菩提心を發し、我、然る後、始めて道心を發して、諸の善根を種ゑ、阿耨多羅三藐三菩提を求めたり。」

『目揵連、我、念ずるに、往昔、一佛あり、示誨幢如來と名く。目揵連、我、彼の佛國土の中に於て、轉輪聖王と作り、名けて牢弓と曰ふ。初めて道心を發し、諸の善根を種ゑて、阿耨多羅三藐三菩提を求めたり。我、時に、彼の佛世尊を供養すること、一千年に滿ち、及び聲聞衆を恭敬・尊重・禮拜・讃歎して、四事充足し、五百具の妙好の衣裳を以て、一時に布施し、乃至、彼の佛、(三一)般涅槃の後に、舍利塔を起しぬ。高さ一由旬、廣さ半由旬。金・銀・玻璃・瑠璃・赤眞珠・硨磲・碼碯等の七寶を以て、莊嚴し、校飾せり。復、種種の旛・蓋・幢・鈴・香・華・燈・燭を持して、以て供養せり。目揵連、我、是の如き諸供養を設け已り、晝夜に精勤して、廣大の誓願を發せり、「當來、佛と作るを得ん時

【三一】般涅槃（Parinirvāṇa）譯して滅度又は圓寂といふ。佛陀のかくれたまふこと。

に於て、諸の衆生有り、父母に孝ならず、沙門及び婆羅門を敬せず、家内の親疎尊卑を識らず、信敬の心なく、三世の（二二）因緣業果を信ぜず、現在に聖人の有るを信ぜず、一の法行なくして、唯（二三）貪欲・瞋恚・愚癡を行じ、（二四）十惡を具足し、唯雜業を造りて、一の善事なくんば、願くは、我、彼の世界の中に於て、當に阿耨多羅三藐三菩提を得て、彼等諸衆生を憐愍するが故に、說法敎化して、多くの利益を作し、衆生を救護して、慈悲拔濟し、諸苦を離れしめて、樂中に安置し、彼の天人の爲に、廣く法を說くべし」と。』

『目揵連、諸佛如來に、是の苦行希有の事あるは、諸の衆生の爲なり。目揵連、諸菩薩等に、凡そ四種の微妙の性行あり。何等をか四と爲す。一に自性行、二に願性行、三に順性行、四に轉性行なり。目揵連、云何なるをか名けて自性行と爲す。若し諸菩薩、本性已來、賢良質直にして、父母の敎に順ひ、沙門及び婆羅門を信敬し、善く家內の尊卑親疎を知り、知り已りて恭敬し、承事して失ふなく、（二五）十善を具足し、復更に廣く其餘の善行を行せば、是を菩薩の自性行と名く。云何なるをか名けて願性行と爲す。若し諸菩薩、是の如きの願、「我何の時に

【二二】因は直接原因、緣は間接原因、業は所作、果は結果。
【二三】貪欲・瞋恚・愚癡を三毒の煩惱といふ。
【二四】十惡とは殺生・偸盜・邪婬・妄語・綺語・兩舌・惡口・貪欲・瞋恚・愚癡をいふ。
【二五】十善とは十惡の反對、殺生・偸盜・邪婬・妄語・綺語・兩舌・惡口・貪欲・瞋恚・邪見なきをいふ。

於て、當に佛・阿羅訶・三藐三佛陀と作るを得て、十號具足すべきか」を發せば、是を菩薩の順性行と名く。云何なるをか名けて順性行となす。若し諸菩薩、〔三六〕六波羅蜜―何等をか六と爲す。所謂、〔三七〕檀波羅蜜、乃至、〔三八〕般若波羅蜜なり―を成就具足せば、是を菩薩の順性行と名く。如何なるをか名けて轉性行となす。我の、然燈世尊を供養し、彼の因緣に依つて、讀誦して則ち知れるが如き、是を菩薩の轉性行と名く。目犍連、是を菩薩の四種性行と名く。」』

爾の時、世尊、舍衞國〔三九〕祇樹給孤獨園に在り。作物を得たるを以て、佛行に住す。略說上の如し。時に、佛、食し訖つて、七日入定し、往昔の諸佛・世尊・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀を念ず。爾の時、〔四〇〕阿難、七日を過ぐるの後、佛の所に詣り、佛足を頂禮し、却つて一面に坐し、佛に白して言さく、『世尊よ、希有なり、如來、身體淸淨に、面色巍巍たること、我が前に見たるが如く、今復常に倍して、光明增盛し、世尊の〔四一〕諸根・無量寂靜なり。何の〔四二〕三昧に坐し、何

〔三六〕六波羅蜜とは、布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧なり。波羅蜜(Pāramitā)。譯して、到彼岸又は度といふ。生死の此岸より涅槃の彼岸に到らしむるものをいふ。

〔三七〕檀(Dāna)。譯して布施といふ。

〔三八〕般若(Prajñā)。譯して智慧といふ。

〔三九〕祇樹給孤獨園とは、祇陀太子が樹木を布施し、給孤獨長者が、精舍を建立布施せるもの。普通に略して祇園精舍といふ。

〔四〇〕阿難(Ānanda)。十大弟子の一人。常に佛に侍せるを以て、多聞第一の稱あり。

〔四一〕諸根とは眼耳鼻舌身意の六根をいふ。

〔四二〕三昧(Samādhi)等持と譯

の(四三)法相をか念じたまへる』と。爾の時、世尊、阿難に告げたまはく、『是の如し、阿難、汝が說く所の如し。多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀は、定に入り住して、往昔の諸佛如來を念じ、大自在神通智を得已りて、一劫に住し、若くは一劫を滅せんと欲す。百千億の諸佛の智慧を念じて、如來智に障礙あることなし。何を以ての故に。如來は諸佛の智慧を具して、彼岸に度るを以ての故なり。阿難、如來は、一食し訖りて或は一劫に住し、或は一劫を滅ず。住の多少を欲すること、隨意自在にして、疲倦あることなし。何を以ての故に。如來は具に諸佛の三昧を得て、彼岸に度り、諸三昧中、此を最も勝ると爲せばなり。』

佛、阿難に告げたまはく、『我、念ずるに、往昔、無量無邊(四四)阿僧祇劫の時、世に佛有り。帝釋幢多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と號す。能く一切無量の(四五)衆生の爲に、歸依處と作り、能く衆生の爲に、慈悲の宅と作り、能く一切の衆生を憐愍し、能く一切の衆生に安樂を與へ、大威德有り、無量の聖衆、前後に圍繞せり。阿難、彼の帝釋幢如來に、五百億の諸聲聞衆あり。悉く皆(四六)阿羅漢果を證し得て、壽、五千歲なり。彼の帝釋幢如來は一菩薩に、記を授けぬ、『次で當に佛

す。精神の極めて統一せられたる域に名く。

【四三】法相とは、法門の義相。相はすがた、あや、模樣。

【四四】阿僧祇(Asaṃkhya)、無數と譯す。

【四五】衆生は舊譯、新譯に有情といふ。いきとしいけるもの。

【四六】阿羅漢(Arhan)應供と譯す。供養を受くるに堪ふべきさとりを得たるものをいふ。

と作つて、上幢如來と號すべし」と。阿難、彼の上幢如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、幢相如來と號すべし」と。阿難、彼の幢相如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、喜幢如來と號すべし」と。阿難、彼の喜幢如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、十幢如來と號すべし」と。阿難、彼の十幢如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、難伏幢如來と號すべし」と。』

『阿難、彼の難伏幢如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて明燈如來と號すべし」と。阿難、彼の明燈如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、善明燈如來と號すべし」と。阿難、彼の善明燈如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、建立如來と號すべし」と。阿難、彼の建立如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、善建立如來と號すべし」と。阿難、彼の善建立如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、龍仙如來と號すべし」と。阿難、彼の龍仙如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、無比威德如來と號すべし」と。』

『阿難、彼の無比威德如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、聖所生如來と號すべし」と。阿難、彼の聖所生如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛となつて、妙勝如

來と號すべし」と。阿難、彼の妙勝如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、仙勝如來と號すべし」と。阿難、彼の仙勝如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、普陰如來と號すべし」と。阿難、彼の普陰如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、預相如來と號すべし」と。阿難、彼の預相如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、上族如來と號すべし」と。阿難、彼の上族如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、自境界如來と號すべし」と。』

『阿難、彼の自境界如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛となつて、無等如來と號すべし」と。阿難、彼の無等如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、拘留孫如來と號すべし」と。阿難、彼の拘留孫如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、大光明如來と號すべし」と。阿難、彼の大光明如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、離憂如來と號すべし」と。阿難、彼の離憂如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて捨洪水如來と號すべし」と。阿難、彼の捨洪水如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、大力如來と號すべし」と。阿難、彼の大力如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、至彼岸如來と號すべし」と。』

「阿難、彼の至彼岸如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、日如來と號すべし」と。阿難、彼の日如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、寂滅如來と號すべし」と。阿難、彼の寂滅如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、大震聲如來と號すべし」と。阿難、彼の大震聲如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、自王如來と號すべし」と。』

『阿難、彼の自王如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、寶王如來と號すべし」と。阿難、彼の寶王如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、宿王如來と號すべし」と。阿難、彼の宿王如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、微妙如來と號すべし」と。阿難、彼の微妙如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、梵音如來と號すべし」と。阿難、彼の梵音如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、功德生如來と號すべし」と。彼の功德生如來に、七十億の聲聞弟子有り。皆悉く阿羅漢果を證せり。其の佛の壽命、七萬年に足り、般涅槃の後、正法の世に住すること、滿三千歲なり。』

『阿難、彼の功德生如來、復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、龍觀如來と號すべし」と。彼の龍觀如來、菩提を得已りて、諸の衆生の爲に、世に住すること一劫なり。阿難、彼

の龍觀如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、無畏上如來と號すべし」と。阿難、彼の無畏上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、龍上如來と號すべし」と。阿難、彼の龍上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、天德如來と號すべし」と。阿難、彼の天德如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、身分上如來と號すべし」と。』

『阿難、彼の身分上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、無比月如來と號すべし」と。阿難、彼の無比月如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、因上如來と號すべし」と。阿難、彼の因上如來に、一千六百の聲聞弟子あり、皆阿羅漢なり。阿難、彼の因上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、紫上如來と號すべし」と。』

『阿難、彼の紫上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、多伽羅尸棄如來と號すべし」と。阿難、彼の多伽羅尸棄如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、蓮華上如來と號すべし」と。阿難、彼の蓮華上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、憍陳如如來と號すべし」と。阿難、彼の憍陳如如來と同名號の者、一百佛あり。所住の劫を小蓮華と名く。彼の憍陳如如來、各各皆三百億衆の聲聞弟子あり。皆阿羅漢なり。彼の諸の如來、

一一住壽・各三百歳、佛涅槃の後、正法の世に住する、亦三百歳なり。阿難、その最後の憍陳如如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、栴檀如來と號すべし」と。阿難、彼の栴檀如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、明燈如來と號すべし」と。」

「阿難、彼の明燈如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、利益如來と號すべし」と。阿難、彼の利益如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、善德如來と號すべし」と。彼の善德如來は佛眼を以て一切衆生を觀じ、諸の衆生を憐愍せんと欲するが爲の故に、佛種を斷せずして、世に住する千劫なり。彼の善德如來、多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀に、三十二億〔四七〕那由他の聲聞弟子あり。皆阿羅漢なり。阿難、彼の善德如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、明星如來と號すべし」と。阿難、彼の明星如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、護世知足如來と號すべし」と。彼の護世知足如來は無量那由他劫を過ぎて、然る後に佛と作れり。阿難、彼の護世知足如來に、二十億の聲聞弟子有り。皆阿羅漢なり。」

「阿難、彼の護世知足如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、尸棄如來と號すべし」と。阿難、彼の尸棄如來の成佛の處、劫を蓮華と名く。彼の劫內に於て、同號の尸棄多陀阿

【四七】那由他（Nayuta）或は千億と譯す。

伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、六十二あり。次第に佛を得たり。阿難、その尸棄如來の、最も後に在りて、菩提を得たる者は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、出生如來と號すべし」と。阿難、彼の出生佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀は、一切の諸衆生を憐愍するが故に、住世教化すること、滿二千劫なり。』

『阿難、彼の出生如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、善目如來と號すべし」と。阿難、彼の善目如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、商主如來と號すべし」と。阿難、彼の商主如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、善生如來と號すべし」と。阿難、彼の善生佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀は壽命少時にして、唯住すること一日なり。その中間に於て、八萬四千の聲聞を教化し、悉く皆阿羅漢果を得しめたり。阿難、彼の善生如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、梵德如來と號すべし」と。阿難、彼の梵德如來に、三十二億の聲聞弟子あり。皆阿羅漢なり。彼の梵德如來の般涅槃の後、正法の住世すること、滿三萬歲なり。阿難、彼の梵德如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、青蓮花如來と號すべし」と。阿難、彼の青蓮華如來は復た一菩薩に記を授けぬ。「次で當に佛と作つて、善見如來と號すべし」と。阿難、彼の善見佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀に、三

千億の聲聞弟子あり。皆阿羅漢なり。」

「阿難、彼の善見如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、見眞諦如來と號すべし」と。阿難、彼の見眞諦如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、根如來と號すべし」と。阿難、彼の根如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、紫色如來と號すべし」と。阿難、彼の紫色如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、爲他如來と號すべし」と。阿難、彼の爲他如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、南斗宿如來と號すべし」と。阿難、彼の南斗宿如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、婆羅如來と號すべし」と。阿難、彼の婆羅如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、主領如來と號すべし」と。阿難、彼の主領如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、大主領如來と號すべし」と。阿難、彼の大主領如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、智勝如來と號すべし」と。阿難、彼の智勝如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、普賢如來と號すべし」と。」

卷の第二

發心供養品第一の中

『阿難、彼の普賢如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、月如來と號すべし」と。阿難、彼の月如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、分陀利如來と號すべし」と。阿難、彼の分陀利如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、無垢如來と號すべし」と。阿難、彼の無垢如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、證我如來と號すべし」と。阿難、彼の證我如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、大雨如來と號すべし」と。阿難、彼の大雨如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、無畏如來と號すべし」と。阿難、彼の無畏如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、自光明如來と號すべし」と。阿難、彼の自光明如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、大力如來と號すべし」と。』

『阿難、彼の大力如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、日如來と號すべし」と。

阿難、彼の日如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、秋光如來と號すべし」と。
阿難、彼の秋光如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、熱光如來と號すべし」と。
阿難、彼の熱光如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、相如來と號すべし」と。
阿難、彼の相如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて無比如來と號すべし」と。』

『阿難、彼の無比如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、勝上如來と號すべし」と。阿難、彼の勝上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、相上如來と號すべし」と。阿難、彼の相上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、娑羅王如來と號すべし」と。阿難、彼の娑羅王如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、身上如來と號すべし」と。』

『阿難、彼の身上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、無處畏如來と號すべし」と。阿難、彼の無處畏如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、化如來と號すべし」と。阿難、彼の化如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、寂定如來と號すべし」と。阿難、彼の寂定如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、勝王如來と號すべし」と。阿難、彼の勝王如來、成佛の處、其劫を賢と名け、三百佛あり。皆同一號に、勝

王如來と號しぬ。阿難、彼の勝王如來、最後の佛は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、一切事見如來と號すべし」と。阿難、彼の一切事見如來に、三億衆の聲聞弟子あり。皆羅漢なり。』

『阿難、彼の一切事見如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、無憂如來と號すべし」と。阿難、彼の無憂如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、龍上如來と號すべし」と。阿難、彼の龍上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、閻浮上如來と號すべし」と。阿難、彼の閻浮上如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、尼拘陀如來と號すべし」と。阿難、彼の尼拘陀如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、廣信如來と號すべし」と。阿難、彼の廣信如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、救脫如來と號すべし」と。阿難、彼の救脫如來は復た一菩薩に記を授けぬ、「次で當に佛と作つて、勝上如來と號すべし」と。阿難、彼の諸の世尊・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、各各次第に、轉た相授記して、最後の勝上如來に至れるを、我身、悉皆供養承事せり』と。爾の時、世尊、偈を說いて言はく、

『彼等諸の如來を、釋迦大師子は、佛の淸淨眼を以て、一切皆覩見したまへり。

是の如き如來の智と、不思議の佛行とを、諸天・諸人等は、悉く得て知る能はず。因果及び佛智、諸法顯現の相は、唯諸佛の（一）境界のみ、凡夫は知る能はず。（二）所說の諸佛名と、顯現せる諸佛行の、大威德相あるとを、佛眼もて普く見たまふ。

若し智慧有るの人、菩提を求めんと欲するに當りては、應に此佛名を讀むべし。久しからずして佛と作るを得ん。』

爾の時、阿難、佛に白して言さく、『世尊、我、曾て佛金口の所說を聞き、聞き已りて繫心し、憶持して忘れず。謂ゆる諸佛の智は、無有礙、（三）無等等、無障礙なりと。世尊、如來は實に是の如きの智を知りたまふや否や。』

爾の時、世尊、阿難に告げて言はく、『如來の智慧は具足了知す。是の故に知見は無障無礙なり。如來、境界の寬狹を作らんと欲して、諸佛智を念ずるに、分齊少多、意に隨つて皆得べし。』爾の時、阿難、復、佛に白して言さく、『世尊は、猶、尊者（四）阿尼盧豆の、淨天眼を得ること、人眼に過ぐるが如し。是の如く、尊者阿尼盧豆は、淨天眼を以て能く一千世界を見るを得。如來は說いて「我見無邊なり」と言

【一】境とは客觀。境界とは心智の對象即ち客觀界をいふ。

【二】所說以下の四句の原文左の如し　所說諸佛名、顯現諸佛行。有大威德相　以佛眼普見。

【三】無等等とは佛智に等しきもののなきを無等といひ、佛と佛との智が互に等しきを等といふ。

【四】阿尼盧豆（Aniruddha）。十大弟子の一人。天眼第一の稱あり。

ふ。此義云何。」佛、時に默然たり。是の如く再び問ひ、乃至三びを過ぎて、然る後に方に答ふ。

佛、阿難に告げたまはく『汝、聲聞の智慧を以て、如來に比せんと欲する莫かれ。何を以ての故ぞ。我、今、清淨の天眼の、人眼に過ぎたるを以て、此の東方恒河沙數の佛(五)刹の中、諸菩薩等の、初めて道心を發して、諸善根を種うるを見、或は、東方恒河沙數の諸佛刹の中、無量菩薩の、記別を得受するを見、或は、東方恒河沙數の佛刹の中、諸菩薩等の、菩薩行を行ずるを見、或は、無量の諸菩薩等が、諸佛の邊に於て、梵行を修行して後、(六)兜率天宮に生ずるを得、兜率より下りて母胎に入るを見、或は、菩薩の、母の右側より誕育して生るるを見、或は、菩薩の、童子法を行ずるを見、或は、菩薩の、宮內に在りて、行欲の法を示すを見、或は、菩薩の、轉輪聖王の位を捨てて、出家修道するを見、或は、菩薩の、(七)四種の魔を降すを見、或は、菩薩の、阿耨多羅三藐三菩提を證得するを見、或は、菩薩の菩提を得已りて、解脫の樂を受くるを見、或は、菩薩の、端坐思惟して、(八)二種分別するを見、或は、菩薩の、(九)轉法輪の時を見、或は、菩薩の、諸の衆生の爲に、壽命を捨

【五】刹は梵語（Kṣetra）の略。國土のこと。

【六】兜率（Tuṣita）、欲界六天中の中央に住す。下生成佛すべき位にある菩薩、必らずこの天にありて、修行すべしと信ぜらる。

【七】四種の魔とは、蘊魔、煩惱魔、死魔、天魔なり。

【八】二種分別とは、十二因緣を順觀し、逆觀するをいふ。

【九】轉法輪とは說法のこと。輪に一切を破碎する力用あり、以て一切の障礙を摧破する法に譬ふ。

て【一〇】無餘涅槃に入らんと欲するの時を見、或は、菩薩の、般涅槃の後【一一】正法住世、像法住世の、久近多少延促の時を見る。阿難、我、是の如く、東方佛刹の恒河沙等の諸佛の成道、及び滅度の後、正法像法の、悉く皆沒盡するを見る。東方刹の如く、南西北方、【一二】四維上下も、亦復是の如し。』

爾の時、世尊、阿難に告げて言く、『阿難、我、念ず、往昔、無量無邊・阿僧祇・不可數・不可説劫を過ぎて、是の時、一轉輪聖王あり、名けて善見と曰ふ。四方を降伏して、如法に治世す。彼の王の統ぶる所、悉く皆豐樂、鞭杖を行はざるも、亦殺害無く、兵戈偃息して、如法に人を化す。阿難、彼の善見王の居住する所の城を、閻浮檀と名く。其の城、東西十二由旬、南北の面、各七由旬あり。』

『阿難、彼の閻浮城は、清淨の莊嚴、殊特妙好、悉く四寶を用て、莊飾する所―黄金・白銀・玻瓈・瑠璃なり。其の外、別に更た七重の城あり。彼の城、皆悉く七尋より高く、各厚さ三尋にして、彼の城頭の周帀に、皆七重の欄楯あり。彼の諸の欄楯、雕刻精麗にして、殊妙雙び少なり。亦た四寶を用て、成就する所―黄金・白銀・瑠璃・玻瓈なり。若くは、黄

【一〇】無餘涅槃とは有餘涅槃に對する語。前業の惑果たる肉身の滅盡するを無餘といふ。

【一一】正法とは佛滅の後五百年間をいひ、像法とはその後の一千年間をいふ。像は似の意で正法には教あり、行あり、證あり、像法は之に似て、教あり行あれども、證なし。

【一二】四維は四隅、東北、東南、西南、西北なり。

金の欄、黄金の鈎杆、白銀の窓臺。若くは、白銀の欄、白銀の鈎杆、黄金の窓臺。若くは、玻瓈の欄、玻瓈の鈎杆、瑠璃の窓臺。若くは、瑠璃の欄、瑠璃の鈎杆、玻瓈の窓臺なり。而して、彼の七重の一一の城内に、皆七重寶の多羅樹有りて、行列圍繞す。彼の樹の枝葉華果は、扶疎蓊鬱として敷榮し、人の樂み見る所。其の樹の根莖は、皆是四寶—黄金、白銀、玻瓈、瑠璃なり。金多羅樹は、金根、金莖、金枝、金葉にして、華果悉く銀なり。銀多羅樹は、銀根、銀莖、銀枝、銀葉にして、華果悉く金なり。若くは、是れ玻瓈の多羅樹と爲りて、玻瓈の根莖、瑠璃の枝葉、瑠璃の華果なり。若くは、是れ瑠璃の多羅樹と爲りて、瑠璃の根莖、玻瓈の枝葉、玻瓈の華果なり。彼の多羅樹には皆(一三)羅網あり。其羅網の間、悉く寶鈴を懸く。其の諸鈴網は、皆七寶より成る。所謂、金・銀・瑠璃・硨磲・碼碯・珊瑚・玻瓈なり。彼の諸城の外に、七重の壍有りて、周帀圍繞す。彼の壍は甚深く、(一四)八功德水、湛然として盈滿し、種種の名華、所謂(一五)優鉢羅花・(一六)波頭摩花・(一七)拘勿頭花・(一八)分陀利花、水上を彌覆す。彼の諸壍の底は、皆是れ金沙、彼の壍の岸邊周帀は、皆七寶の羅網ありて其上を彌覆す。」

【一三】羅網はあみ、浄土のかざりの一。
【一四】八功德水とは澄浄・清冷・甘美・輕軟等の八の功德を具へたる水。
【一五】優鉢羅(Utpala)。青蓮華と譯す。
【一六】波頭摩(Padma)。紅蓮華と譯す。
【一七】拘勿頭(Kumuda)。白蓮華と譯す。
【一八】分陀利(Puṇḍarīka)。白蓮華と譯す。

『阿難、彼の閻浮城の四面に、各一十六門あり。彼の諸城門は、四寶の成せる所—黄金・白銀・玻瓈・瑠璃なり。金門・銀扇・銀門・金扇。若くは玻瓈の門に瑠璃を扇と爲し、若くは瑠璃の門に玻瓈を扇と爲す。彼の諸城門に、各各皆却敵樓櫓あり。層閣の飛簷に、珠の羅網を垂る。亦、七寶を以つて、莊嚴する所、微妙精奇、人の喜び見る所。其の諸城門に、皆七重の四寶の門障有り。安住して動かず、發起開閉に、顯耀する光明、愛す可く、樂む可し。所謂金・銀・玻瓈・瑠璃なり。彼の諸城門は、遠觀洞徹す。門若し開く時は、風自ら吹いて開き、門閉ぢんと欲する時は、風自ら吹いて閉づ。彼の七重の障は、風若し開く時は、門門相當りて、悉く皆通見し、門閉ぢんと欲する時は、風自ら吹いて閉ぢ、七重の門障、遠然として還遮る。阿難、彼の閻浮檀城の處、中に一大池有り、名けて歡喜と曰ふ。彼の池の東西、廣さ一由旬、南北廣さ半由旬なり。其の池の四岸に、四重の塼壘あり。彼の塼、端正微妙喜ぶ可し。四寶の成す所——黄金、白銀、瑠璃、玻瓈なり。彼の池の四面に、皆閣道有り。彼の閣道や、端正喜ぶ可く、亦四寶の合成する所、——黄金、白銀、瑠璃、玻瓈なり。黄金の閣道に、白銀の階級あり。白銀の閣道に、黄金の階級あり。瑠璃の閣道に玻瓈の階級あり。玻瓈の閣道に、瑠璃の階級あり。彼の閣道の上に、悉く却敵有り。而して彼の却敵や、嚴飾喜ぶ可く、七寶の成す所——黄金・白銀・硨磲・碼碯・珊

瑚・琥珀及び瑠璃を以てす。彼の池の四邊に、皆欄楯有り。端正喜ぶ可し。亦皆四寶共に合成する所――黄金・白銀・瑠璃・玻瓈なり。其の池、東面は黄金の欄楯、其次の南面は白銀の欄楯、其次の西面は瑠璃の欄楯、其次の北面は玻瓈の欄楯なり。黄金の欄楯は、黄金を柱と爲し、白銀を窓臺とす。白銀の欄楯は、白銀を柱と爲し、黄金を窓臺とす。玻瓈の欄楯は、玻瓈を柱と爲し、瑠璃を窓臺とす。瑠璃の欄楯は、瑠璃を柱と爲し、玻瓈を窓臺とす。』

『阿難、彼の歡喜池を周帀圍繞して、多羅樹あり、七重に行列す。彼の樹間の中、悉く羅網有り、七寶もて莊嚴し、其の羅網の間に、皆寶鈴を懸く。多羅樹の外に、七重の塹有り。端正喜ぶ可し。然して彼の池中に、種種の華、所謂、優鉢羅華・波頭摩華・拘勿頭華・分陀利華有り。其の池の岸上に、陸生の華、所謂、〔一九〕瞻婆華・〔二〇〕阿陀目多華・〔二一〕婆利師華・揵陀婆利師華有り。彼の歡喜池は、八功德水の充滿する所、諸鳥渴する時は、皆平飲を得べし。彼の池水の底は、皆金沙を布き、七寶の羅網を以て、池上を覆へり。彼の妙羅網は、節節皆七寶の鈴を懸く。』

『阿難、彼の閻浮城は、街巷平整、其の街の兩邊に、多羅樹有り。多羅樹の間、悉く羅網有り、其の羅網の間、節節皆七寶の鈴を懸く。其の七寶の鈴、微風に吹き動かされて、妙音聲を出し、

〔一九〕 Campaka.（チャムパカ）
〔二〇〕 Atimuktaka.（アティムクタカ）
〔二一〕 Varṣikī.（ヴールシキー）

人をして樂み聞きて、心に歡喜を生ぜしむ。譬へば、人の五種音樂を作すが如し。阿難、彼の閻浮城の、有ゆる人民は、皆悉く純直なり。彼の諸の人民、相娛樂せんと欲するも、更に別音無し。彼の鈴聲を聞けば、卽便ち歡喜し、自然に歌舞して、更に其の餘の音樂を憶はず。阿難、彼の閻浮城には、常に種種微妙の音樂あり。所謂、鐘・鈴・螺・鼓・琴瑟・箜篌・箄篥・笳簫・琵琶・箏笛、諸の是の如き等の種種の音聲なり。復、無量の微妙の鳥音あり。所謂、鶬鴰・鸚鵡・孔雀・〔二〕拘翅羅鳥、命命鳥等、無量無邊の種種の諸鳥、皆微妙殊異の音聲を出して、暫くも息む時無し。地上には皆種種の妙華を散ず。所謂、優鉢羅華・拘勿頭華・波頭摩華・分陀利華、及び諸の陸地の種種の雜華なり。阿難、彼の城には、苦惱・逼切・不如意の事あることなし。一切備りて、悉く減少する所なく、是物豐饒に、飲食乏しき無く、衆味是れ足る。悉く家居を滿して、空地有るなく、人民熾盛に、威德巍巍たり。所住の城は、譬へば、北方〔三〕毗沙門王の阿羅迦城の如く、等くして異ること有ることなし。』

『阿難、時に彼の世中、一佛の出るあり、名けて寶體多陀阿伽度・阿羅迦・三藐三佛陀と曰ひ、十號具足す。阿難、彼の寶體佛、未だ道を得ざるの前、菩薩たる時、常に淸淨を樂しむ。彼の城の

〔二〕拘翅羅（Kokila）鵲鴝と譯す
〔三〕毗沙門（Vaiśravaṇa）。須彌山の四方天の一。北方に居す。

乞食を行ぜんと欲して、城邑聚落の中に入れば、則ち無量千萬の諸天有り。下り來つて供養圍繞し、寶體如來を侍衞す。城に入らんと欲する時、足、城門を按ず。時に、彼の城内の有ゆる人民、皆悉く諸天護持の神通力によりて、彼の寶體佛を供養せんが爲の故に、糞穢を掃除し、香湯を地に灑ぎ、香泥を地に塗り、雜香華を散じて地上に滿て、處處に皆妙好の香鑪を安じて、無價の香を燒き、種種の旛・幢・蓋等を張懸す。是の如き無量供養の具を以て、寶體如來を供養す。』

『爾の時、城外の一村人あり。城内の人と婚娶を結ばんと欲し、來つて城邑に入る。彼の人、城を見るに、端嚴殊妙、世に希有なる所、小より已來、眼未だ覩ざる所、心大に驚怪して、城内居住の人に問うて曰く、「此の城、今、何事をか作さんと欲する」と。彼の城内の人、村人に報げて言く、「此の處、一如來ありて、世に出づ。名を寶體多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰ふ。久しからずして、此の城に入つて乞食せんと欲す。是の如きの故を以て、灑掃莊嚴す」と。更に、復、村人に向つて、廣く如來の功德の、無量無邊なるを說き、亦、佛德――多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀は十號具足す――を讚ず。是の如く、復、法寶の有德を歎じ、是の如く、復、僧寶の有德を稱す。彼の人、三寶の功德を聞き、心に歡喜を生じ、踊躍無量にして、是の如き念を作す。「寶

禮世尊・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、希に世に現じたまふ。我、今、寶體佛の所に詣るべし」と。彼の人、内心に是の念を作し已るや、即ち、城邑諸聚落の人と共に、相將ゐて往いて寶體佛の所に詣る。佛所に至るや、是の如き念を作す、「若し、是の如來、一切智を得て、我心を見ば、應に先づ我と共に語言慰喩すべし」と。』

『時に、寶體佛、彼の人の心を知り、先づ即ち彼の村人と語る。時に、彼の村人、彼の如來の、先に於て語るを得已りて、心に歡喜を生じ、踊躍無量、既に其の願を滿して、即ち、如來に、後日、食を施さんを請ふ。時に佛、默然として彼の人の請を受く。時に、彼の村人、如來の、己が請を受くるを得て、已に、復、歡喜を生じ、速に、自家に向ひて、具さに飲食を辨ず。時に、四天王、及び、梵・釋等、諸天大衆、種種の天の諸供具を齎持し來りて、如來に獻ず。時に、彼の村人、自家に至りて、其の夜種種の美食、飡噉舐嗽、食ふ可きの味を辨具し、辨具し已訖るや、明の清旦に起きて、家地の上を掃除し、清淨の香泥を地に塗り、妙香水を以て重ねて其上に灑ぎ、復、種種の雜妙好華を散じて牀座に敷置し、即ち使人を遣はして、往いて佛に白して言さく、「如來、若し時節の至るを知り給はゞ、願くは我家に赴かれんを」と。時に寶體佛、晨朝時に、衣を著け鉢を持し、千億衆の聲聞比丘に前後圍繞せられて、受請の家に到る。彼の家に到るや、諸の比丘

等、各大小に隨ひ、次に依りて坐す。時に彼の村人、寶體佛の安坐せるを見訖り、即ち種種妙好の飲食を將つて、自ら手もて擎持して、如來に奉り、白して言さく、「世尊、唯願くは佛及比丘僧の意に隨つて、飲食せんを請ふ」と。及び諸大衆、受食し訖るも、食盡く可らず。彼の人念を生ず、「此の百味の食、既に盡す可らず。必らず是れ如來の威神德力の充溢せしむるなり。餘食既に多し。我、今、如來を看る所の白衣の人衆を喚び、此食を布施すべし。皆食して飽滿せば、然る後に我が心大歡喜を得ん」と。復此念を生ず、「希有なり希有なり、不思議の法なり。此寶體佛の威德力大、我が眷屬をして、喚ばずして自ら來つて我を佐助せしむ。我、亦、曾て一人をも借倩はず。又、我、亦復、多功を用ひずして、衆事一時に辨具するを得たり」と。時に、寶體佛、飲食し訖りて、彼の村人の爲に、應の如く說法し、其をして歡喜して希有の心を生ぜしめ、彼の人を正法中に安置す。及び彼の大衆、皆說法を聞きて、悉く各歡喜し、或は道を得る者あり。乃至、起つて、還、本處に歸向す。』

『時に、彼の村人、寶體佛の說法教化を聞き、法を聽受し已りて歡喜踊躍し、心に〔三四〕弘誓を發し、是の如き言を作しぬ、「願はくは、我、未來に、寶體如來所得の一切諸法に似たるを、皆具足せん。又願くは我、大衆の中に於て、是の

【三四】弘誓は大なるちかひ、大なる理想に對するちかひ。

如く法を說き、一切の人をして歡喜信受せしむること、今の世尊寶體如來の、比丘衆を將ゐ、安庠として行くが如く、一種も異なる無けん。」時に、彼の村人、如來を供養し、尊重恭敬の心を具足し已り、佛に隨つて寺に向ひ、鬚髮を剃除し、俗を捨てて出家し、比丘と成るを得たり。時に彼の寶體如來、世に住して、諸の衆生の爲に、說法し訖りて、般涅槃に入る。涅槃の後、無量無邊の天人衆等、佛身を〔二五〕闍維し、復、無量の供養具を以つて、闍維所に於て供養を設く。時に彼の比丘、既に如來の般涅槃に入りたまへるを聞き、大憂惱を生じ、是の如き念を作す、「我、今、闍維所に往き至るべし。若し彼の處に至らば、應に異法を得べし」と。是の時、比丘、速疾に彼の闍維所に往き詣り、彼の處に到り已りて、卽ち異寶を得たり。初めて得るの時、謂へらく、「彼の珍寶、甚だ淸淨ならず。少しく塵垢有り」と。』

『爾の時、比丘、細かに刮拭して看るに、卽ち淸淨の眞瑠璃寶の、價、數百千兩金に直るを知りぬ。彼の〔二六〕摩尼寶、安置の處、晝夜異なるなく、夜も日の現ずるが如し。一切の房舍、一切の院落、皆悉く光明あり。是の時、天人、彼の寶體佛の舍利を收め已りて、塔を起造す。時に彼の比丘、亦、心念を生ずらく、「我、今、此の摩尼寶を以て、〔二七〕浮圖に安置し、承露盤の上

〔二五〕闍維は茶毘に同じ。
〔二六〕摩尼（Maṇi）。如意寶珠と譯す。
〔二七〕浮圖は塔なり。

に、寶瓶を作るべし」と。此の念を生じ已りて、塔所に至る。彼の所に至るや、是の如き念を作す、「我が此の摩尼の寶珠は、價直百千兩金なり。我、今、是の摩尼の寶珠を以て、塔上に安ずるは、彼の如來の爲なり。是れ我が師なり。是の故に、我、今、此の摩尼を持して、塔上に置かば、彼の摩尼寶の光明、彼の塔の上を照して、無量千歲ならん」と。彼の比丘、又、無量種の燈明を然し、千年に足り滿ちて、彼塔を供養し、恭敬尊重すること、千年に滿ちて、心常に念佛三昧を捨てず。彼の比丘、(二八)淸淨戒を持するが故に、加ふるに、復、如來の塔を供養するが故に、是の因緣を以て、命終の後、生死中に在りて、無量無邊百千萬世に、人天の福樂果報を受けて、曾て惡道中に墜墮せず。』

『阿難、時に彼の比丘、百千無量無數阿僧祇劫を過ぎて、復、一佛の世に出現するに値ふ。號して能作光明如來と曰ふ。時に、彼の比丘、佛を供養し、禁戒を修持し、梵行淸淨にして、出家すること前の如く、復、此の心を發す。「願くは、我、未來、此の功德に藉りて、生生世世、惡道に生るること莫らんを」と。時に、作光佛、彼の比丘の、心に願ふ所を知り已りて、卽ち授記を與へて、語つて言はく、「仁者、汝、來世に於て、百千無量無數阿僧祇劫を過ぎて、當に佛・多

【二八】淸淨戒を持すとは如法に戒を持ちて、毫も犯さざるをいふ。

陀阿伽度・阿羅迦・三藐三佛陀と作るを得べし。號して然燈と曰ふ。彼の然燈佛、菩薩たる時、末後の身に於て、兜率天に生れ、兜率天より降神來下して、右脇より入りて母胎に託し、住居する十月、十月を滿じ已りて、一心正念に、生れんと欲するの時、光明を放ちて、彼の佛刹を照すに、皆悉く徧滿す。』

『爾の時、菩薩、既に、將に生れんとす。其の母、王――智者主に語りて言く、「大王、當に知るべし。我が意、園林の内に往いて、遊戲を觀看せんと欲す」と。王、夫人の、是の如く語るを聞き、即ち、敕を出して、城内の大臣、及び、諸豪富、長者、(二九)居士、商賈人に告げて言く、「我、今、夫人を園林に出して、遊戲を觀看せしめんと欲す。汝等、家に當つて、各、城内の街衢を莊嚴し、悉く淸淨ならしむべし。有ゆる穢惡・瓦礫・糞壌は、並に宜しく除却すべし。香湯を辨具して道に灑散し、香泥を地に塗り、妙香華を以て其上に布散し、處處に妙寶の香鑪を安置して衆名香を燒き、又、復、種種の寶瓶を安置して諸香水を盛り、好淨華――優鉢羅華・波頭摩華・拘勿頭華・分陀利華を著けて瓶内に置き、處處に芭蕉の樹を安置せよ。芭蕉樹の大小高下に隨つて、各雜色種種の幡幢を懸け、其諸幡幢は衆色間り雜え、其の幢樹の内、復、各七寶の網羅を垂れよ。眞珠瓔珞の、網羅の節目、悉く寶飾あり

【二九】居士とは普通の家主をいふ。

て、夜、淨天に、星辰の出現するが如くせよ。又、處處に於て、悉く、各、衆寶の明鏡を施懸すること、猶、日月の如くせよ。或は種種雜色の流蘇を懸け、或は處處に金銀の寶帶を垂れよ」と。彼の城の街巷の、是の如き種種の精麗なる莊嚴は、彼の天神(三〇)揵闥婆城に等しく、一種も異ることなし。』

『時に、王夫人、千の左右と、寶輦轝に乘じ、伎樂に引導せられ、種種の音聲、前後を圍繞し、街巷を塡滿して、宮殿より出で、四面を觀看し、安庠として行くに、威德特尊、勢力廣大、衆中に處在して、與に比する者なし。彼の園林に向ひ、既に園林に到りて、漸く河岸に趣く。河岸に至り已りて、卽ち船に上り、河中に遊入して、中流に至り已る。忽然、自ら、一大燈明有り、上下縱廣十二由旬、其の燈明內に。莎草の叢有り、高下四指、其の色の艾白柔輭なる、猶、迦耶隣提の如く、妙香氣を出すこと、又、瞻婆・波利師華の如し。其の園林內に、種種の華、及び種種の果、種種の樹木を出し、天上人間の有ゆる樹木・名華・美果、悉く此園に滿つ。時に、菩薩の母、仰いで虛空を觀、安庠として、右手に樹枝を攀引するに、枝卽ち垂下す。王夫人、卽ち右手を以て樹枝を捉ふる時、右脇の間より一童子を出す。端正喜ぶべし。名けて然燈と曰ふ。自然に手の十指の掌を合す。童子生るる時、大光明を放ち、

【三〇】揵闥婆(Gandharva)。天帝の樂神。七部の一。

彼の佛刹を照して、皆悉く充滿し。天上より無量の諸華を雨す。所謂、〔三一〕曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・〔三二〕曼殊沙華・摩訶曼殊沙華・優鉢羅華・波頭摩華・拘勿頭華・分陀利華なり。又、無量の栴檀散香を雨して、充滿徧布すること、十二由旬なり。復、種種無量無邊の天の諸伎樂を雨し、鼓せずして自ら鳴る。又、無量の歌讚の音聲を出す。音聲の内に、言辭に唱へて云へらく、「無量に燈明と作らん、無量に燈明と作らん」と。是、彼の菩薩、瑞應の號、故に然燈と稱す。』

『爾の時、然燈菩薩大士、諸根具足し、相好圓滿、乏少する所なく、日日長大して、樓上に在りて、五欲の樂を受く。然るに、彼の童子、五欲を受くる時、復、歡樂すと雖も、忽ち自ら念を生ずらく、「世間の愛欲は虚幻のみ。暫時須臾にして破壞し、久しからずして磨滅す」と。此く思惟し已りて、家内より出でて、鬚髮を剃除し、身に袈裟を服して、出家するを得たり。出家の後、菩提を求めんと欲し、漸く樹下に向つて、正覺を修習す。正覺を證せる後、佛眼を以て一切世間を觀て、卽ち此の念を生ず。「誰有つてか最初に正法を聞くを得ん」と。卽ち、世間を見るに、空にして化者無し。再觀し三觀して、亦、世間を見るも、聞法及び可度の人有るなし。彼の佛、在世、三千年を經て、獨一無侶にて端坐し、三千年を過ぎて後、彼の然燈佛・多陀阿伽

【三一】曼陀羅華（Mandārava）は天妙華と譯す。

【三二】曼殊沙華（Mañjūsaka）は如意華と譯す。

度・阿羅訶・三藐三佛陀、是の如き念を作す。「此の衆生の輩は、五欲に躭著して、放逸多時、迷荒厭く無し。我、今、當に化して彼をして覺知せしむべし」と。此の念を作し已りて、燈炷城より出で、空中に住して、一城を化作し、閻浮壇と名く。彼の城内に於て、種種の瑠璃の諸屋を化作し、其の城外に於て、又、復、種種の七寶の多羅樹を化作して、七重に行列せしむ。七寶の莊嚴は、上に說く所の城の莊嚴事の如し。其の城、縱廣、東西南北、五千由旬、又、其の城内の莊嚴の具は、(三一)忉利天の如くにして、一種も異るなし。彼の城内の人、壽、三千歲なり。此の閻浮提の諸衆生等、悉く遙に彼の一切人民の、歡樂を受け、自ら五欲を恣にするを觀、悉く見、悉く知り、悉く聞き、悉く羨む。時に、然燈佛、是の如くにして三千年を過ぎて後、是の念を生じて言はく、「我、今、神通、變化を作し、閻浮の人をして厭離の想を生ぜしむべし」と。』

『時に、閻浮の人、然燈佛所居の城の、四壁より皆、猛火焰熾を出すを見て、大恐怖を生じ、共に相謂って言く、「嗚呼、彼の城、自然に燒盡し、久しからずして漸く滅びん。」時に、閻浮提の一切の人民、諸根成熟して、應に佛化を得べし。彼等人民、彼の化城の、四面に火起り、熾

【三一】忉利天(Trāyastriṁśa)譯して三十三天といふ、六欲天の第二にして、須彌山の頂上にあり。

盛に燒然するを見て、怖畏驚恐し、歸依の處を求むるも、救護する者なく、(三四)解脱を求めんと欲するも、能く度する者無し。此の言を發し已りて願ふらく、「彼の城、下り來りて此に至れ。或は復、此城、上りて彼に至れ。我等一切、當に彼の火を滅すべし」と。是の時、天・龍・夜叉・乾闥婆・人非人等、彼の城を出でて、我等に告げて言く、「何の故にか此の城、自ら火を出して燃ゆる」と。時に、彼の城の前に、忽爾として自然に三閣道を出す。一は金の成せる所、二は銀の成せる所、三は玻璨より成る。其閣道の間に、各、雜寶の多羅樹ありて行る。彼の多羅樹、大聲を出して云く、「汝等人輩、宜しく速かに聚集して一處に會すべし。若し、汝の心、然燈佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀を見んと欲せば、彼の佛、久しからずして、閻浮提に下らんと欲す」と。時に閻浮提の一切の人民、皆悉く往いて彼の閣道の所に詣るに、然燈佛の、城内より出でて、閣道より下るを見る。諸の梵・釋・四天王等、前後に圍繞す。閻浮提の人、彼の佛を見已りて、皆大に歡喜し、各、是の心を生ず、「我等、前に如來を覩んと欲して、今已に見ることを得たり」と。復、更に、念を生ず、「我、各、先に佛に是の事を問はん。此の城、何が故に、是の如く火に燃ゆるぞ。如來、應に我等の爲に解釋すべし」と。時に、然燈佛、足もて地を踏み已るや、其の諸の人民、悉く皆「我、獨、頭面に佛を頂禮せ

【三四】解脱とは、苦惱よりまぬかれて自由の境に入ること。

ん」と念じ、而して此の言を發す、「我、先に於て、佛足を頂禮するを得ん」と。』

『時に、然燈佛、師子座に坐し、坐し已りて、彼の衆生の爲に說法したまふ。所謂、布施の事、持戒の事、離欲の事、(三五)漏盡を得るの法を讃歎し、出家功德の利、助淸淨の法を說きたまふ。如來、此の閻浮提の人の、佛の說法を聞きて、信樂聽受し、歡喜心を生じて、心意柔輭に、心に無礙を得たるを見、如來、更に、復、諸の法を說くこと、往昔の佛が、衆生の機根を知りて說法し、其をして歡喜せしめたるが如く――所謂、(三六)苦集滅道――世尊、今、復、閻浮人の爲に、具足して、此の(三七)四諦の法を說きたまふ、時に、然燈佛、初日の說法に、敎化度脫する、六百億人、悉皆漏盡して、阿羅漢を證し、心に自在を得たり。第二日に五百億人を化し、第三日に四百億人を化し、第四日に三百億人を化し、第五日に二百億人を化し、第六日に一百億人を化し、第七日に五十億人を化し、悉く皆上の如く阿羅漢を得しむ。第二の一七日內に至りて、一百億人を敎化度脫し、最後第三の一七日內に、復、七十五億の衆生を度す。悉く、上利・漏盡・意解を得て、阿羅漢を成せり。彼の然燈佛、住世一劫。諸比丘、聲聞弟子と共に　世間人の爲に、利益を作すが故なり。』

【三五】漏とは身口より出でて他をけがすの意。煩惱の異名也。
【三六】苦は人界の果報、集は苦の原因、滅は涅槃の果、道は涅槃に至るの道、苦集は迷界の因果、滅道は悟界の因果。
【三七】四諦とは四重の眞理、卽ち苦集滅道をいふ。
【三八】迦葉遺は小乘の分派たる十八部中の一。飲光と譯す。

〔三八〕迦葉遺師、是の如き說を作す。「阿難、諸佛は次第に相傳授記す。其の然燈佛は、初、善根を種ゑて、阿耨多羅三藐三菩提を求め、乃至、法輪を轉ず。住世一劫、衆生を化するが故なり。』〔三九〕摩訶僧祇師、是の如き說を作す。『阿難、其然燈佛、菩薩たりし時、船上にありて、五欲を受くと雖も、世間の中に於て、深く厭離を生じ、是の如き念を作す、「我、船に坐して、河の彼岸に渡るべし」と。亦、此の心を發するや、卽ち一大淸淨の蓮華を生じ、然燈童子、其の華上に於て、結跏趺坐し、坐し已りて、蓮華卽ち自ら還合する、猶象蓮の如し。時に、諸の婇女、童子を求覓めて、所在を知る莫く、卽ち大王に奏す、爾の時、大王、使を四方に遣はし、東西南北を推求し尋覓するも、其の所を知らず。乃至、四維も、亦、處を知らず。然燈菩薩、大威德、神通力を以ての故に、彼の船上の蓮華臺中に在り、結跏趺坐して、身現はれず。卽ち、〔四〇〕五通を得て、虛空に飛騰し、乃至、菩提樹下に向つて、一切智を得、及び法輪を轉じて說法し、六十八億百千人を度脫す、倶に皆悉く世間に共住して、衆生を敎化したりき。』〔四一〕尼沙塞師、是の如き說を作す、

【三九】摩訶僧祇は小乘分派たる十八部中の一、大衆と譯す。

【四〇】五通とは五種の神通。天眼・天耳・神足・宿命・他心の通力をいふ。宿命とは宿世の命運を洞觀するをいふ。

【四一】尼沙塞は小乘十八分派中の一、化地と譯す。

卷の第三

發心供養品第一の下

爾の時、世尊、舍衞城に在り。阿難に告げたまはく、『阿難、諸佛菩薩は、晝夜常に一切諸法を說き、四種攝ありて衆生を攝す。何等をか四と爲す。一には布施、二には愛語、三には利益、四には同事なり』と。

爾の時、阿難、座よりして起ち、衣服を整理し、右肩を（一）偏袒し、十指掌を合せ、右膝を地に著け、佛に白して言さく、『世尊、如來は往昔、幾の佛を供養して阿耨多羅三藐三菩提を求め、何の佛の邊に於て諸善根を種ゑて、未來世の爲に菩提を求めたまへりや』と。佛、阿難に告げ給はく、『諦に聽き諦に受けて、善く之を思念せよ。今、當に汝の爲に、彼の如來諸佛の名字、幷に及び善根を種うる所の處を說くべし。』『阿難、我、念ずるに、往昔、佛有りて世に出づ。號して然燈多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰へり。彼の佛の邊に於て、諸善根を種ゑて、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。次で、

【一】偏袒とは片袖ぬぐこと。

復、一佛、世に出現して、世無比と號しぬ。我、時に、彼の佛世尊を供養して、諸善根を種ゑ、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。次で、復、一佛世に出現して、蓮華上と號せり。我、時に、彼の佛世尊を供養して、諸善根を種ゑ、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めたり。』

『次で、復、一佛、世に出現して、最上行と號しぬ。我、時に、彼の佛世尊を供養して、諸の善根を種ゑ、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めたり。次で、復、一佛、世に出現して、德上名稱と號す。我、時に、彼の佛世尊を供養し、諸の善根を種ゑて、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。次で、復、一佛、世に出現し給ひて、釋迦牟尼と號す。我、時に、彼の佛世尊を供養し、諸の善根を種ゑて、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。次で、復、一佛、世に出現し、號して帝沙と曰ひぬ。我、時に、彼の佛世尊を供養し、諸の善根を種ゑて、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。』

『次で、復、一佛、世に出現したまひ、號して弗沙と曰ふ。我、時に、彼の佛世尊を供養し、諸の善根を種ゑて、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めたり。次で、復、一佛、世に出現して、見一切利と號し給ふ。我、時に、彼の佛世尊を供養し、諸の善根を種ゑて、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。次で、復、一佛、世に出現して、毗婆尸と號せり。我、時に、彼の佛世尊を供

養し、諸の善根を種ゑて、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。次で、復、一佛、世に出現し、號して尸棄と曰へり。我、時に、彼の佛世尊を供養し、諸の善根を種ゑて、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。』

『次で、復、一佛、世に出現したまひて、毗沙門と號しぬ。我、時に、彼の佛世尊を供養して、諸の善根を種ゑて、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めたり。次で、復、一佛、世に出現して、拘留孫と號しぬ。我、時に、彼の佛世尊を供養して、諸の善根を種ゑ、乃至、梵行もて、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。次で、復、一佛、世に出現して、拘那含牟尼と號せり。我時に、彼の佛世尊を供養し、諸の善根を種ゑ、乃至、梵行もて、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。次いで、復、一佛、世に出現し、號して迦葉と云ひぬ。我、時に、彼の佛世尊を供養し、諸の善根を種ゑ、乃至、梵行もて、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めたり。阿難、我、彌勒菩薩の邊に於て、諸の善根を種ゑて、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求めぬ。』而して偈有りて說く、

『此佛の大威德あり、離欲・寂靜を得たるを、釋迦牟尼佛、皆悉く供養し來りぬ』

爾の時、阿難、佛に白して言く、『世尊、如來は、彼等諸佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀を供養したまふに、何等供養の具を將つて、彼の佛を供養し、諸の善根を種ゑ、未來世の阿耨多羅

三藐三菩提を求めたまへりや。』

佛、阿難に告げたまはく、『我、念ずるに、往昔、無量世を過ぎて、一國王有り。名を降怨と曰ふ。是れ〔二〕刹利種にして、〔三〕灌頂位を紹げり。其の王、福德壽命極めて長く、端正にして喜ぶ可く、名稱遠く聞えぬ。阿難、彼の降怨王居住の處に、一大城有り。名けて蓮華と云ふ。彼の王、此の城中に於て治化して、宮殿を安置す。彼の城、東西十二由旬、其の南北面は、七由旬に經る。土地調適にして、雨澤時を以てし、五穀豐熟し、乏少する所無し。多く人民有りて、塡滿充塞し、間に空處無し。園苑の樹林、華果具足し、泉流池沼、水常に湛然たり。街巷の兩邊は、皆店肆を安んじ、去來の市買、暫時も停る無きこと、猶ほ北方毘沙門の城の、阿羅穇と名くるが如し。東西南北、等しくして異ること有るなし。彼の蓮華城は、是の如く、莊嚴して種種具足せり。

阿難、彼の降怨王に、一豪富大婆羅門有り。名を日主と爲す。勇健强力にして、多饒の財寶あり、象馬奴僕、六畜牛羊、種種皆豐にして、乏少する所無し。其の庫藏內は、純ら是れ異類の黃金・白銀・眞珠・珍寶・硨磲・碼碯・珊瑚・琥珀、悉皆備具して、一に北方毘沙門王の如し。阿難、時に、彼の日主大婆羅門、特に彼王の爲に、心に愛重せられ、恒に相伴偶して、曾て暫も離れず。日

【二】刹利は刹帝利 Kṣatriya の略。四姓の一。武士階級。

【三】灌頂とは、四大海水を以て頂に灌ぐこと、王位を繼紹する時の禮式。

日相見ゆるも、厭倦の心無し。阿難、彼の降怨王、時に一事有り、將に日主婆羅門に付して、判じて好く斷決せしむ。日主、法の如く、分判し已り、彼の王の意に入る。王、日主婆羅門の所に於て、倍〻歡喜を生じ、半國を分割して、婆羅門に與へ、封授して王と爲し、其をして治化せしむ。時に降怨王、彼の日主婆羅門王の爲に、別に更に城を立て、名けて埏主と爲す。東西南北の街衢巷(四)術、城郭の莊嚴なること、蓮華城の如く、一も異ること有る無し。阿難、彼の日主王に、一の夫人有り。名けて月上と爲す。阿難、然燈菩薩、兜率より下り、降神の時、日主宮の月上夫人の右脇に於て、入胎して端坐し、出生し、成道し、說法して、人を化し、皆阿羅漢果を得たること、上の因緣然燈菩薩本行經に說くが如し。時に、然燈佛、彼の二城に在りて、次第に居住し、說法して人を度したまへり。』

『時に父日主、常に四事を以て彼佛を供養し、尊重恭敬すること、佛の歎ずる所の如し。阿難、其の降怨王、漸漸傳聞す、「彼の埏主城、日主王宮の第一大妃、月上夫人、一童子を生み、名けて然燈と曰ふ。端正にして喜ぶ可く、世間無雙に、衆相具足すること、譬へば金像の如し。童子生るるや、將ゐて相師たる、國內の大智婆羅門の所に詣り、敎令して、童子の是の如き相貌云何を占相せしむ。』彼の相師言く、「此童子は福德もて莊嚴す。若し家內に在らば、轉輪王と爲りて、四天下を

【四】術はみち、又はちまたのことなり。

化し。大地主と作つて、七寶を具足すべし。——一に金輪寶、二に神珠寶、三に玉女寶、四に象寶、五に馬寶、六に主兵臣寶、七に主藏臣寶なり。復、千子あり、悉皆端正にして、丈夫の相を具し、能く怨敵を摧きて、威大地を被ひ、四海山林、降伏せざるなく、國土安寧、雨澤時を以てし、五穀豐熟し、人民安樂に、苦惱有るなく、疾病有るなく、兵戈を用ひずして、法の如く治化せん。若し、家を捨出せば、當に佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と作るを得て、十號具足し、名稱遠く聞えんこと、上に說く所の如し」と。』

『時に降怨王、是の如き念を作す、「希有なるかな。世尊の出世は甚難し。時時一び聞くも、復、覩見し難し」と。卽ち使人を遣はして日主の所に向ひて、是の如き言を作さしむ、「我、今、王の大夫人が、好童子を生み、衆相具足、上に說く所の如きを傳聞す。我、今、彼の然燈佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀に請せんと欲す。我が所に至り、蓮華城に住して、我が微供を受けたまへ。王若し遣はし來らば、彼、此の益を蒙らん。如しそれ我に放さずんば、當に四種の兵を嚴備して往くべし」と。時に、彼の使人、此の語を受け已るや、埏主城、日主王の所に往き、具さに此の語を以つて日主王に白す。』

『時に日主王、此の語を聞き已り、悵快憂愁し、心懷樂まず。時に、日主王、群臣を集聚し、具さ

に上の事を以て、向つて之を說くらく、「汝等、思惟せよ。彼、是の言有り。何に報答せんと欲するぞ」と。時に、諸群臣、王に白して言く、「大王當に知るべし。此の如き事、還つて然燈佛に請問すべし。何を以ての故に。然燈世尊・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀は大慈悲あればなり」と。時に、日主王、諸臣に報へて言く、「我が心、亦、是の如きの憶念有り」と。時に、日主王、諸群臣と、躬自ら然燈佛の所に往詣す。」

『乃至、彼の佛、王を慰喩して言く、「大王、心を安じて驚く莫く、怖るる莫く、憂愁を生ずる勿れ。何を以ての故に。我、今、他國に遊行し、民人を敎化し、一切の諸衆生を慈愍せんと欲するが故に」と。』

『時に、然燈佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、彼の國に遊向し、衆生を化せんが爲の故に、卽ち無量無數百千の諸比丘衆と共に、相隨ひて行く。時に、日主王、然燈如來を供養供給して、四事具足して、乏少する所無し。後に在つて隨從し、佛を送つて自らの境界に到るや、佛足を頂禮して、三帀圍繞し、泣淚して、還、本宮に歸りぬ。』

時に、降怨王、然燈佛の蓮華城に來り、及び無量の聲聞比丘百千の衆は、皆是(五)漏盡の大阿羅漢なるを聞き、聞き已りて喜歡し、道路を嚴治し、有ゆる雜穢を悉く

【五】漏はけがれ、煩惱の異名。

耘除せしめ、校飾荘嚴すること上に説く所の如く、乃至、彼の乾闥婆城に等しく、一種も異ること無し。時に、降怨王、敕を出し、其の城の内外十二由旬に告示して、一切所有の人民に禁斷すらく、「私に諸の香・華・鬘を賣るを聽さず、其のこれある處は、我、自ら採買して、持つて彼の然燈佛を供養せんと欲す」と。時に、降怨王、四種の兵を將ゐ、大威徳を具し、城より出でて、然燈佛を迎へたてまつりぬ。〔三〕

受決(一)定記品第二の上

「爾の時、彼の國の雪山の南面に一梵志有り。名は珍寶と曰ふ。父母は清淨婆羅門の種、乃至、先祖七世已來、曾て(二)穢を雜へず、人能く輙ち敢へて譏毀すること有る無く、然して其の種姓は、皆智者の讃譽する所たり。又、其の餘の諸導師等の恭敬する所たり。三種の行具はり、能く一切の(三)毗陀の論を教へて、四種の毗陀、皆悉く收盡し、又(四)闡陀論、字論、聲論、及び、可笑論、呪術の論、受記の論、世間相の論、世間の祭祀呪願の論、(皆悉く收盡し)大丈夫の相を具足して、自ら善家に生る。復、五百の善姓家の兒あり。其の弟子と爲り、圍繞供承す。阿難、當に知るべし、爾の時の珍寶婆羅門は、現今の彌勒菩薩是なり。時に、彼の五百の諸弟子等、常に是の師に從ひて、祭祀呪術の法を讀誦す。時に、彼の五百弟子の中に、一大姓婆羅門の子有り、號名けて(五)雲と爲す。彼の衆中に於て、上首と作り、衆行具足し

【一】記とは記別のこと。行者の未來の證果を、一一區別してあらかじめ記說すること。未來成佛に對する豫言にいふを普通とす。受決定記は、決定せる成佛の豫言を受得すること。

【二】穢を雜ふとは血統に不純の血液を加ふること。即ち婆羅門外の三姓に娶り、他姓の血を交ふること。

【三】毘陀(Veda)、婆羅門教の根本聖典、これに四種あり。梨俱毘陀(Rig-veda)、耶柔毘陀(Yajur-veda)、三摩毘陀(Sāma-veda)、阿闥婆毘陀(Atharva-veda)これなり。

【四】闡陀論(Chanda)。聲詮と

て、少小より師に從ふ。時に年十六、端正にして喜ぶ可し。善種に生るるを得て、父母清淨に、乃至、七世まで穢濁有る無く、能く其家の種族を譏訶するもの無し。乃至、大丈夫の相を具足して、世間に比なく、身は黄金色、頭髪も亦然り。其の聲清淨にして、梵天の音の如く、彼の珍寶仙人の邊に從ひ、呪術を受誦するに、捷利速疾、所得眞正にして、一び聞きて便ち領す。語言辯了、字句分明にして、有ゆる一切の婆羅門家の、種種の呪術・工巧・技能、皆悉く洞解し、解し已りて彼の(六)梵志師に語りて曰く、「大師和上、我、今、習學し、已に、和上の有ゆる德術を盡しぬ。意に家に還らんと欲す」と。其の和上、心に雲童子を戀ひて、別離を欲せず、卽ち之に語つて言く、「汝、(七)摩那婆。我に一論有り、名けて毗陀と爲す。乃ち是れ往昔諸仙の說く所、一切の外道婆羅門等、未だ曾て知聞せず、況んや、復、見、及び他に教ふるを得んや。」摩那婆言く、「唯、願くは和上、我が爲に解說し給へ」と。』

『時に彼の梵志、卽ち、復、更に、彼の摩那婆に祕要の呪術を教ふ。時に、摩那婆、亦悉く受得して、復、更に、重ねて彼の梵志に白して言く、「我、今、已に、和上の呪術の方法を盡く解する

譯す。音韻の學なり。

【五】雲は四分律に彌却（Megha）に作る。

【六】梵志はBrahmacarinの譯。婆羅門學者のこと

【七】摩那婆(Manava)。また摩納縛加(Manavaka)に作る。儒童、年少淨行と譯す。青年の行者を指す。

を得たり。復、更に、何をか作さん。」梵志、復、摩那婆に告げて言く、「我が婆羅門は、種姓相承けて、復、家法有り。若し、弟子有り、師に從ひて學問せば、必ず恩を報ず須し。諸の財物を將つて、以用て布施す。」摩那婆言く、「和上、我が爲に家法を解說す。何を將つてか恩に報せん。和上、今、心に、何等を須ひんと欲するか。」梵志語つて言く、「汝、摩那婆、我に報せんと欲せば、一好を將つてすべし。淸淨の繖蓋・革屣・金杖・金三叉木・金瓶・金鉢・上下（八）舍勒、五百の金錢、是の如きを我に與へよ」と。』

『爾の時、童子、梵志に白して言く「和上大師、我上に說く所の如き物の、和上に奉る可き無し。請乞ふ、我を放して、四方に求索めしめよ。得ば、即ち、將來して、和上に供養せん。」梵志報へて言く、「汝、若し時を知らば、當に去る所に隨ふべし」と。時に、雲童子、師の足を頂禮し、圍繞三帀して、辭別して行く。時に、雲童子、一處有るを聞きぬ。此の雪山を去ること五百由旬、其の城名けて輸羅波奢と爲す。時に、彼の城內に、一の種姓大婆羅門有り、祭祀德と名く。大富饒の財あり、甚資產足り、彼の城に居住す。六萬の諸婆羅門の爲に、一年（九）無遮の會を奉設せんと欲して、六萬の布施の具を備辨す。一一人人の爲に、一の傘蓋・一の三叉木・

【八】舍勒はCola、即ち袍ならんか。

【九】無遮會とは、如何なるものにも自由に布施するの會の意。一年無遮會は、毎年擧行するもの、五年無遮會は五年毎に一度擧行するものなり。

革屣瓶鉢、上下舍勒、及び錢物等、供身の具、皆悉く備足す。別に上座の一婆羅門の爲に、金柄上妙の傘蓋、最勝の革屣を造り、純金を杖と爲し、金の三叉拒、金瓶金鉢、上下の舍勒、價數各百千兩金に直す。五百の金錢、一千の牸牛、各犢子を幷せ、一牛一犢より一斗の乳を得、其の牛角の上を、皆金を以て裝ひ、五百の童女、皆、珠の瓔珞もて、其の身を莊嚴す。其の諸女の中に一童女有り、名けて善枝と曰ふ。最も上首たり。時に、〔一〇〕般遮會、年歳已に滿ちて、唯一日在るのみ。』

『時に、雲童子、雪山より下り、安庠として輸羅波城の無遮會の所に至る。時に、彼の六萬の諸婆羅門、遙に童子を見、卽ち大聲を發して、唱言すらく、「善哉、是の處に、善く此の般遮會を造ること。今梵天自ら來至して、此の般遮の布施を受く」と。時に、雲童子、彼の六萬の婆羅門に語りて言く、「汝等、我を喚んで梵天と作す莫れ。我は是れ人なり。實に梵天に非ず。」婆羅門言く、「汝は是れ誰ぞや。」雲童子言く、「汝等聞かざるべし。雪山の南面に一梵志有り。名を珍寶と曰ふ。種種通達して、門徒の五百弟子を教授し、乃至、上に次第に說く所の如し。彼の衆中に、一上足の弟子有り。雲と名く。年始めて十六、智慧聰明、德術具足して、師と異る無し。

【一〇】般遮會（Pañca-varṣikā-mahā-pariṣad）は五年一大會なり。前に一年無遮會もあるに關らず、般遮會の名を掲ぐるを見れば、無遮の性質を有するものを、一般に般遮會といへるものか。

乃至、其の聲は梵天の音の如し。汝等聞しや否や。」婆羅門等、皆各答へて言く、「聞けり。」雲童子言く、「卽ち此身なり」と。是の婆羅門衆、旣に識知し已りて、更に、復、歡喜し、大聲を發して言く、「善哉、善く此の無遮會を建立して、雲童子の來りて此の供を受くるを得たること」と。』『時に、祭祀德婆羅門の女、善枝の身、及び諸の童女、樓上より遙に雲童子の、端正雙び少きを望見し、見已りて四方に向ひ、諸天諸神を禮し、心に自ら密念すらく、「願くは此の童子、論議第一にして、舊上座の諸婆羅門に勝り、我をして此の不善の人を遠離し、此の如き不善の人と、夫婦たること莫らしめよ」と。時に、雲童子、會所に至り、圍繞すること三帀、三帀を繞り已りて、上座婆羅門の前に至り、美言慰喩して、問うて言く、「仁者、何の論をか誦持し給ふ。」時に、此の六萬の諸婆羅門、聲を同うして、共に雲童子に答へて言く、「仁者、我が此の上座に、何の論を誦するかを問ふ勿れ。何を以ての故に。今、此の上座は、是れ我家の婆羅門法の呪術、諸論、悉皆誦持す可ければなり。」雲童子言く、「婆羅門輩。汝が此の上座は、復、(二)師資の婆羅門の學に、別に自ら法要有り。須く相問ふべし。汝等、論の先有と名くる有りや否や。」時に、彼の六萬の婆羅門衆、各共に答へて言く、「我等此の名をすら、尙未だ曾て聞かず。何に況んや有るを得

婆羅門家の醫方技藝を誦念すと雖も、但、我が

【二】師資は師弟相承くるをいふ。

んや。何に況んや誦するを得んや」。雲童子言く、「我が師の法中、我に教ふるに此の一毘陀論有り。名けて先有と爲す　我も亦た誦するを得」と。時に、彼の大會の婆羅門言く、「請ふ解説を爲せ。我等聞かんを樂ふ。」時に、雲童子、上座敷設の處に在りて立ち、梵音聲を以つて、彼の先有毗陀の論を誦す。時に、六萬の婆羅門衆、歡喜踊躍して、同聲に唱言すらく、「我が心に稱適ひ、我が意に稱適ふ」と。甚大に歡喜し、雲童子に告て言く、「汝、摩那婆、今我が爲に上座と作り、我が座首に坐し、我が上座最勝の水を受け、我が上座最初の食を受くべし」と。時に、雲童子、彼の上座を推して下座に向はしめ、即ち勝座に於て、最初の水を承け、先食を受けて、稱意の食を食し、食し訖りて後に、其の須ふる所に隨ひ、布施の具、上座法に依りて之を受くるを爲し、其の須ひざるは、辭して受けず。時に、祭祀徳大婆羅門、心に自ら念じて言らく、「我が今建てし此の無遮の會は、聖法に依らず、有ゆる一切布施の物は、聖教に依らず。何を以ての故に。此の會の(三)達嚫、有ゆる一切布施の物を、雲童子、我が意を領して、具足して受けざるが爲なり」と。』

【三】達嚫。梵語 Dakṣiṇā 布施と譯す。

『時に、祭祀徳大婆羅門、長跪して雲童子に請うて言く、「大徳童子、汝、此の我の布施一切の物を受くべし。我が會の施をして、具足せざらしむる勿れ」。時に、雲童子、祭祀徳婆羅門に語つて

言く、「大婆羅門、汝、善く布施して、衆事具足しぬ。是の不善なるに非ず。此の無遮會は、闕少くる有る無し。唯我が須ふる者は、我今之を受けぬ。須ひざる者は、徒に取るも益なし」と。時に、彼の上座の舊婆羅門、心に此の念を生ず、「我久しき時、是の如き布施の具を得んを乞願ひ、決して先取を望めるに、云何ぞ、今、此の幼歳の摩那婆、來りて、我を推して向下せしめ、我が利養を奪ふを爲すか。若し我が生來の一切の持戒精進苦行の果報、是の果報の緣もて、生生世世、此の童子と共に相會集せん所に、その我が利養の事を奪へるが爲に、此の怨讎を報じて、終に相捨てざらん」と。阿難、當に知るべし。爾の時の雲童子は、我身是なり。祭祀德は現今の（三）檀陀波尼、是なり。時に、彼の上座婆羅門は、卽ち今の（四）提婆達多是なり。阿難、是の因緣を以て、提婆達多愚癡の人は、往昔、我と共に、生生世世、恆に怨讎を作して、相捨離せざるなり。」

『時に、雲童子、其の得たる所の種種の施物を將つて、雪山に向ひ、以て梵志に奉せんと欲し、諸の聚落、村邑、國城を過ぎて、或は住り、或は行く。是の如く觀看し、後に於て漸漸蓮華城に至り、彼の城內に入りて城の莊嚴の、殊特妙好、不可思議なること、上に說く所の如くなるを

【三】檀陀波尼（Daṇḍapāṇi）。執杖と譯す。

【四】提婆達多（Devadatta）。天熱と譯す。

見、卽ち是の念を生ず。「何故に、今、此の蓮華城は、是の如く莊嚴不可思議なる。或は、當に人有りて、此の城に於て無遮會を作さんとすべし。或は、復、諸の星宿天を祭祀するか、或は吉祥をなすか、或は福業を作すか、或は是れ時節の婆羅門會か。或は當に是れ此の城内の人民、多解多知なりとの我が名聲を聞きて、我、此に來つて諸の婆羅門と問難論義せんとすと謂ふべし」と。而して、復、一人の我を念ひ、或は、復、我を恭敬し禮拜するものあるなし。」

『時に、我、卽ち、彼の一人に問うて言く、「仁者、此の城、何が故に、莊嚴是の如く微妙なる。」爾の時、彼の人、卽ち、我に報へて言く、「大智童子、汝、聞かざるべし。然燈世尊・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、久しからずして此の蓮華城に來りたまひて、說法教化せんと欲す。是の事の爲の故に、我が王、降怨、人民に約令して、各莊嚴せしむ。時に、諸人等、〔一五〕福業を造らんと欲して、是の如き種種の雜飾を布設し、然燈如來を供養せんと擬へ欲す」と。阿難、我、時に、念を生ずらく、「我が法中、此の言說有り。若し、人、三十二相を具足せば、彼の人、卽ち、二種の果報有り。若し在家せば、必定に轉輪聖王と作るを得ん。若し捨てて出家せば、聖道を修學して、必定に當に阿耨多羅三藐三菩提を得て、名稱遠く聞え、威德自在なるべし」と。此はこれ疑無し。阿難、我、爾の時に於て、更に是

〔一五〕福業とは人生上の福德を將來すべき作業。

の念を生ず、「我、今、先づ、應に此に向つて停住し、然燈世尊を供養禮拜して、未來の阿耨多羅三藐三菩提を求め、然る後に、別に梵志の師恩に報ゆべし」と。我、又、念を生ずらく、「何等の物を將て佛を供養し、何の事業を以て諸の善根を種ゑん。」爾の時、我が心に、是の思惟を作しぬ、「諸佛世尊は錢財を尙んで以て供養と爲さず。唯、法供養のみ聖の稱譽する所。我未だ法有らず、義として空しく見る無けん。今、上妙の好華を買覔め、持して以つて奉獻し、未來世に佛と作るを得んを願ふべし」と。我、時に、卽ち、一鬘師の家に至り、彼の人に言つて言く、「仁者此の華を賣つて我に與ふべし」と。爾の時、彼の人、我に報へて言く、「仁者童子、汝は聞かざるべし。降怨大王、勅を出し、下に告げしを――有ゆる華鬘、悉く他人に賣與するを聽さず――何を以ての故に。王、自ら、取りて持て佛を供養せんと欲すればなり。」我、彼の人の是の如く語るを聞き已り、復更に、餘の鬘師の店に至り、華を買はんことを求索む。彼、還我に答ふること、前の如く異ならず。是の如く、處處華を買はんとすれども得ず、街巷の裏を私竊に訪ひ求む。水を取る一靑衣の婢子、名を賢者と曰へるが、密に七莖の優鉢羅華を將つて瓶中に入れ、前よりして來るを見る。我、彼を見るや、心に歡喜を生じ、卽ち之に語つて言く、「汝、此の華を將つて何事を作さんと欲するか。我、今、汝に五百の金錢を與へん。汝、我に、瓶內の七莖の優

鉢羅華を與ふべし。」彼の女、復、言く、「仁者童子、汝聞かざるべし。然燈世尊・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、今、城に入り給ひて、此の地主降怨王の請を受けんと欲し給ふ。王、佛の所に於て、尊重の心を生じ、復、諸の功德を建てんと欲す。故に國內十二由旬に宣令し、有ゆる香油華鬘の屬、一人の私竊に盜賣するを聽さず。若し、賣る者あれば、唯、王のみ買うて、自ら將つて供養するを得。我が比舍に一鬘師有り、名を怨讐と曰ふ。彼に一女あり。私に我が邊より五百錢を取り、卽ち我に此の七莖の華を盜與せるを以て、我、既に、禁に違ひて、此の華を得、自ら、然燈世尊・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀を供養せんと欲す。實に得べからず」と。時に、我、復、更に、彼の女に語つて言く、「善女、所說の因緣は、我、今、已に知れり。汝、我が五百の金錢を取り、我に五莖の優鉢羅華を與ふべし。兩莖は汝に還さん。」爾の時、彼の女、卽ち、我に答へて言く、「仁者童子、汝、此の華を取りて、何の用をか作さんと欲するぞ。」我、時に、報へて言く、「如來の出世は、見難く、逢ひ難し。今、既に、遭遇す。此の華を買ひて、然燈如來・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀に上り、諸善根を種ゑて、未來世の爲に、阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲す」と。爾の時、彼の女、復、我に語て曰く、「我、童子を觀るに、內外の形容、身心勇猛、愛法[二六]精進なり。汝、必ず、當に阿耨多羅

【二六】精進とは、心を精一にして、進みはげむをいふ。

三藐三菩提を得べし。摩那婆よ、汝、若し、未だ聖道を得ずんば、中間に於て、生生世世、汝の爲に妻と作らん。若し、汝、得道せば、我、當に剃除出家し、道を學んで阿羅漢を求め、汝の弟子と爲つて、沙門の行を修すべきを、我に許せ。若し、是の如くんば、我、今、汝に、此の五莖の華を與へん。しからずんば、與へず」と。我、時に、復、更に、彼の女に語つて言く、「善女、我、今、此の身は是れ婆羅門なり、種姓淸淨にして、四種毗陀の論に通達す。我が毗陀の中、是の如きの說を作す――若し、人、阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲して、菩薩行を行せば、彼の人、應に一切衆生に於て、憐愍の心、安樂の心を生ずべし。來り求むる所の者は、悋惜むべからず。乃至、身命も亦須く人に施すべし。況んや、復、愛する所の婦兒・妻子、及び、餘の財物に慳貪なるを得ざれ――と。善女、我、今、發願して、菩提を求め、諸の衆生を安樂ならしめんと欲するが爲の故に、一切の衆生を憐愍し救濟す。或は、人有り、來つて我が妻子を索めば、我、以て、布施せん。(この時)汝の愛戀心、若し障礙を作さば、則ち、我、割捨せん。(我が)心願成らすんば、復、汝の邊に於て、無量の罪を得ん。汝、若し、作願して、能くその時に於て、一切あらゆる資財寶物を、我が布施せん時、難を作さずんば、我、當に、汝の、我が爲に妻と作るを許すべし」と。』

爾の時、彼の女、卽ち、我に語つて言く、「摩那婆、假令、人有り、來つて汝の邊に向つて、我が身を乞ふとも、我、亦、慳貪の心を生せじ。況や、復、男女及び餘の財物をや。」我、彼の女に語るらく、「必ず能く是の如くば、汝の願ふ所の如く、當來の世、我がために妻と作るを許さん。」是の時、彼の女、我が邊より、五百の金錢を受けて、卽ち、五莖の優鉢羅華を授け、持して以て我に與へ、其の餘の兩莖は、我が爲に布施して、「汝と與に同じく未來の因緣を作さん」と(いひ)、復、我に語つて言く、「汝が善根を種植ゑんと欲するの處、此の二華を將つて、其の上に散じて、常に汝と共に生生同處して、相捨離する莫らんを願ふ」と。』

『時に、然燈佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀・外より來りて、蓮華城中に入る。我、時に、此の七莖の蓮華を齎して、遙に佛の來るを見、漸漸至り近いて、彼の佛身を視るに端正にして喜ぶべく、清淨の光明、世を照耀して、諸根を調伏し、其の心寂定に、安住して動かず。六根の澄靜なること、瑠璃池の如く、進止の威儀は、猶ほ象王の如し。復、無量百千萬億の諸天大衆有りて、前後に圍繞し、各無量の天の諸雜華、及び、無量の天の栴檀末香・優鉢羅華・波頭摩華・拘勿頭華・分陀利華を、然燈佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀の上に散じて、尊重供養しぬ。時に、降怨王、羽儀四種の兵種を備へ從へ、彼の城門を出でて、然燈佛を迎ふ。爾の時、彼の處に聚集せ

る無量無邊異類の人、及、非人・天龍・(一七)八部の諸鬼神等、將てる所の香末、種種の雜華を以つて、佛上に散ずるに、一華の地に墮つる有るなし。並に然燈如來の頂上なる虛空の中に在りて、大寶蓋を成し、佛行けば隨つて行き、佛住まれば隨つて住まる。我、時に、彼の然燈如來を見て、信敬の心を生じ、殷重の心を生じ、敬心を生じ已り、此の七莖の優鉢羅華を將つて、佛上に散じ、此の願を發して言く、「若し、我、來世に佛と作るを得ん時、今の然燈如來の得たる法及び大衆の如く、異るもの有る無けん。」(時に)散ずる所の華、虛空中に住まりて、華葉は下に向ひ、華莖は上に向ひ、佛の頂上に當つて、華蓋を成し、佛に隨つて行住す。我、是の如き神通德力を見て、倍復、信敬の心を生じぬ。』

『阿難、時に、彼の無量無邊の人衆、各無價の妙好の衣裳を將つて、道上に布く──所謂、微細の(一八)迦尸迦衣・細白の氎衣・細(一九)芻摩衣・微妙細輭の(二〇)拘周摩衣、及び妙繒綵の(二一)憍奢耶衣──然燈佛を供養せんと欲するが爲の故に、地を覆うて滿たしむ。阿難、我、是の時に於て、彼の無量無邊の人衆を見るに、無價の衣を將つて、悉く皆地を覆へり。時に我が身上には、唯一の鹿皮あるのみ。我、鹿皮を將つて、地上に布くに、我が鹿皮の地を覆へる處、彼の人衆惡罵瞋嫌し

【一七】八部とは天・龍・夜叉・乾闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽。
【一八】Kāsikā-sūkṣma（カーシカスークシマ）
【一九】Śauma ?（シヤウーマ）
【二〇】Kṣauma（クシヤウマ）
【二一】Kauśeya（カーウシエーヤ）野蠶絲衣と譯す。

て、我が鹿皮を推きて、遠く他處に擲ちぬ。我、此の念を生ずらく、「嗚呼世尊然燈如來は、我を憐愍し、慈念せざる可けんや。」此の念を生じ已るや、佛、我が心を知りて、我を憐愍するが故に、時に、然燈佛、神通力を以て、一方の地を變じて、稀土の泥の如くす。時に、彼の人衆、此の路泥を見て、各避行し、一人の泥に入る者有るなし。我、時に、行き見て、速かに泥の所に往き、彼の泥を見已るや、卽ち此の念を生じぬ、「是の如き世尊を、云何ぞ此の泥中を踐んで行かしめん。若し泥中に行かば、泥、佛脚を汚さん。我、今、乃ち、臭肉身を將つて、此の泥土に於て、大橋梁と作り、佛世尊をして、我が身を履んで過ぎしむべし」と。我、時に、卽ち、所有の鹿皮を鋪き、髮を解いて布散し、面を覆ひて伏し、佛の爲に橋と作る。一切の人民、未だ踐み過ぐるを得ず、唯佛のみ最初に我が髮上を蹈む。是の如く然燈佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀を供養するが故に、復、是の念を生ず、「願はくは此の然燈如來世尊、及び、聲聞衆の足、我が身、及び頭髮の上を踏んで、此の泥を渡らんことを」。復、此の願を發しぬ、「願くは未來世に佛と作るを得ん時、今の然燈如來の如くにして異る無からん。是の如き威德、是の如き勢力もて、天人師と作らん。又、願くは、我、今、此の身命を盡すまで、若し然燈佛、我に記を授けずんば、我は終に此の泥中より起きざらん」と。是の童子が身髮を布ける時に當り、是の時、大地六種に

震動す——所謂、東涌西沒・西涌東沒・南涌北沒・北涌南沒・中涌邊沒・邊涌中沒なり。」

卷の第四

受決定記品第二の下

「爾の時、然燈如來・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、我が心を知り、大比丘百千人と倶に、及び、彼の天龍千萬億衆、左右に圍繞し來り、我が所に向つて、足もて我が身及び螺髮の上を蹈み、安庠として行くこと、大龍王の如し。左右を觀看て、諸の比丘に告げ給はく、「汝等比丘、我と共に路を同うして行くを得ず。この摩那婆の身及び螺髮は、一人の蹈むべきに堪ふる者有ることなし。この人の身髮は、唯如來のみ、乃ち踐むに堪ふ。何を以ての故に。これは是、菩薩の身及び髮の分なればなり」。時に、然燈佛、則ち我に語つて曰く、「善い哉、善い哉、汝摩那婆、廣大の心を發し、誓願海の如し。汝の求むる所の者は、諸衆生の爲に、利益を作すが故に。諸衆生の爲に、安樂を作すが故に。摩那婆、汝、既に此を求めぬ。是の如き大願は、一切世間を利益し、安樂して、無量無邊衆を憐愍するが故に。能く天人の爲に引導を作すが故に。大精進勇猛の心を起して乃ち能く是の如き等の法を滿足して、志求金剛、身命を惜まず。是の故に、汝、今、身を以て、

如來を荷負して行く。汝、當來に於て、乃至、身命を慳惜むを得ざれ。何に況んや、餘の財をや。汝摩那婆、阿耨多羅三藐三菩提を求む。此は是初相なり。汝は能く是の如き弘願を發起し、汝は所有の物を一切捨てぬ。汝、摩那婆、行ふ所の布施は、未來世の報を求むるを得ざれ、唯出世無上の菩提を求めよ。貪心を生ずる勿れ、他の資財を見て奪取するを得ざれ。汝禁戒を持して缺犯せしむる勿れ。穢濁するを得ざれ。相を取るべからず。自ら譽讃して、他人を誹謗し及び自身を毀つ勿れ。汝當に忍辱すべし。設し、他の來つて打罵・禁繫・殺害する者有らば、皆須く忍受すべし。乃至、汝の身體を節節支解するの時、汝は是の如き怨讎等の邊に於て、當に忍辱して慈悲心を生ずべし。殺生するを得ざれ。他の身命財を劫奪するを得ざれ。他の財物に於て、常に遠く捨離し、自らの營求に於て、亦當に足るを知るべし。他人の婦女妻妾に近づく莫れ。自らの所有に於て亦須く貪らざるべし。妄語を遠離せよ。乃至、命盡くるまで、他に向つて非實を說くを得ざれ。鬪亂して、親しき者を疎からしむるを得ず。破壞人を見ば、恒に和合せしめよ。惡口するを得ざれ、常に美言を以てせよ。綺語するを得ず、必ず利益有らしめよ。時語し、法語せよ。汝正見を行じて、一切の邪道、皆當に捨離すべし。汝摩那婆、若し能く是の如き諸事を荷擔せば、汝の求願する所、具足せざる無けん。汝當に彼の一切衆生に於て、一子の想を生ずべし。衆生を

哀愍し、心口を調伏し、諂曲を作す莫れ。當に人を尊重し供養すべし。汝、傲慢にして心を放逸ならしむる莫れ。常に須く寂定にして、三昧正受もて、無我の法を觀ずべし。未來の菩提種性を斷ずる勿れ。汝當に是の如く、衆生を利益して一切を安樂すべし。摩那婆、汝若し能く是の如き等の事を辨ぜば、口に自ら唱稱へて、我能すと言ふべし」と。時に、我、爾の時、即ち、佛に白して言さく、「世尊、我能くせん」と。』

『時に、然燈佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、既に我が心を知り、即時に微笑したまふ。彼の佛に、一侍者比丘有り。座より起つて、衣服を整理し、右臂を偏袒し、長跪合掌して、白して言さく、「世尊、何の因縁を以て、如來は微笑したまへるか」。時に、然燈佛、比丘に告げたまはく、「汝是の摩那婆を見よ、七莖の華を持して、我を供養し、身を伏せ、髮を被つて、泥上に橋と作り、我をして踐み渡らしめぬ。是の事を以ての故に、此の摩那婆は、阿僧祇劫を過ぎて、當に佛と作り、釋迦牟尼・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と號して、十號具足すること、我が如くにして異ることなきを得べし。」と阿難、我、是の時に於て、然燈佛の、我が爲に決定記を授くるを聞き已り、身心輕便に、覺えず自ら虛空中に騰ること、高さ七多羅樹なり。清淨心を以て、十指の掌を合せ、佛に向つて禮を作す。阿難、我、彼の時に於て、偏身喜悅して、自ら勝ふる能はざりき。阿

難、時に、然燈佛、卽ち、我に告げて言く、「摩那婆、汝、東方世界を觀る可し」と。時に、我卽ち、彼の東方恒河沙等の(一)刹土の諸佛を觀見せしに、皆悉く我が爲に決定記を授けぬ。――「汝摩那婆、未來世に於て、僧祇劫を過ぎなば、當に佛と作つて、釋迦牟尼と號し、十號具足するを得べし。」――此の如く、東方・南・西・北方、四維・上下、亦、復、是の如し。』

『阿難、我、爾の時に於て、空よりして下り、定立して地に住まり、然燈世尊佛の足を頂禮し、却いて一面に住して、卽ち此の念を生ず、「我今、然燈佛の邊に於て、出家を求索むべし」と。卽ち、佛に白して言く、「唯、願くは、世尊、我が出家して具足戒を受くるを聽し給へ。我佛邊に於て梵行を修行せん」と。佛、我に語りたまはく、「汝摩那婆、今正に是の時、卽ち出家して、鬚髮を剃除するを得。」鬚髮を除き已るや、無量の諸天、我が髮を取り、供養の爲の故に、十億の諸天、共に一髮を得たり。阿難、我が阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得てより已來、一の衆生だも、諸佛を供養して安樂を得ざる者を見ず。是の處有ること無し。阿難、我、彼の時に於て、猶未だ諸煩惱の縛を具足し、貪欲・瞋恚・愚癡、未だ盡きざりしも、無量百千億の諸衆生、我が髮を取り、各持し供養して解脫を得たり。況や、復、今日、欲瞋癡を離れて、我が邊に於て、諸の功德を作し

【一】刹、Kṣetraの略、國土のこと。

て、解脫を得ざること、是の處有ること無し。是の故に阿難、一切の衆生は、應に當に發心して如來を供養すべし。』

『阿難、我、彼に從つて來かた、煩惱中に在つて、菩薩行を行じ、精進勇猛の心を捨てず。常に布施を行じ、常に功德を作しぬ。我、是の如き諸の善業を以ての故に、彼の無量百千の世中に於て、梵王と作り、帝釋と作り、或は百千の轉輪聖王と作るを得、彼の善根の因緣力を以ての故に、今、佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と作るを得て、無上最妙の法輪を轉ずるを得たり。阿難、我、福德智慧力を以ての故に、現今有ゆる一切の刹利、及び、婆羅門・長者・居士・沙門・智人は、我が語を信受し、我が法に依りて行ず。阿難、汝、我が語の、終に二言無きを觀よ。然燈佛の、我に決記を授け、我に敎示せしが如し「我に依りて修行し、今、阿耨多羅三藐三菩提を得たり」と。』爾の時、世尊、偈を說いて言はく、

『假使天・地に落ち、此大地變壞すとも、一切の諸の衆生、猶し常住の身を得んとも、
須彌山王崩れ、大海の水乾き竭くとも、阿難汝當に知るべし、諸佛に二言なきを。』

爾の時、世尊、此の偈を說き已り、復、阿難に告げたまはく、『諸佛世尊は常に此行有り。假使光明無量無邊なるも、諸の衆生の爲に、一尋を住持し、是の一尋より、諸の衆生の爲に、復、無量

無邊の光明を現ず。何を以ての故に。諸の衆生の、晝夜を知らざるを畏るればなり。一月・半月・一年・半年、春夏秋冬の四時八節、其の忘失せんことを恐るればなり。阿難、彼然燈佛は、十號具足して明照にして業成り、常光にして暗無し。是故に、彼佛は號して然燈と曰ふ。常に光明有りて、天下を照耀せり。自餘の因緣は、上に說く所の如し。』

『阿難、我、念ずるに、往昔、一如來有り、世に出現して、勝一切多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と號せり。我、金華を以て、彼の佛の上に散じて、是の如き言を發しぬ。「願くは、我れ未來に、微妙身を得て、相法を具足すること、今の世尊の如くならん。」爾の時、彼の佛我が心を知り、即時微笑したまふ。侍者比丘、衣を整へて佛に白す。乃至、佛、彼の侍者に告げたまはく、「比丘、汝、是の人の金華を將つて、我が上に散ずるを見しや否や。」彼の比丘答へて言く、「我見たり」と。佛、比丘に告げたまはく、「是の人、一億劫を過ぎて後、當に佛と作るを得、釋迦牟尼多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と號し、十號具足すべし。」阿難、我、彼の時に於て、授記を得已り、精進勇猛の心を捨てず、倍更に增長して、餘の福業を修めぬ。我、是の如きの善因緣を以ての故に、無量世中、梵天の上、及び帝釋、轉輪聖王に生れぬ。又一王と作れり、名を善見と曰ふ。彼の王の城郭、却敵、門樓、宮室殿堂は、純ら是れ黃金なり。園苑樹林、泉流池沼は皆金もて校飾せ

り。彼の業因緣にて、我、今、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得て、無上の清淨法輪を轉ず。』

『阿難、我念ずるに、往昔、一如來有り。世に出現して、蓮華上多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と號しぬ。我、銀華を將つて、彼の佛上に散じ、是の如き願を發しぬ、乃至、彼の佛、侍者に告げて言く、「汝是の人の、銀華を將つて、我を供養せるを見しや否や。」比丘の言く「見たり」と。佛、比丘に告げたまはく、「是の人、未來十萬劫を過ぎて、當に佛と作るを得て、釋迦牟尼多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と號すべし」と。我、彼の時に於て、授記を聞き已りて、精進勇猛の心を捨てず、倍更に增長して、諸の功德を作せり。我、是の如き善果報を以ての故に、無量世中、梵天王、及び、帝釋、轉輪聖王と作りぬ。又、我、過去に、曾て、一王と作り、大善見と名けぬ。居る所の城を拘尸那と名けたり。彼の城の樓櫓、却敵、窓牖は、皆白銀の成就する所、園苑樹林、泉池諸水は、悉く是白銀もて莊嚴し校飾せり。乃至、彼の業因緣の報の故に、今、佛多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と作るを得、乃至、無上の法輪を轉ず。』

『阿難、往昔以來、是の如きの法有り、凡そ諸菩薩初生の時、人の執持する無くして、東西南北、各七步を行く。阿難、彼の蓮華上佛は初生の時、兩足地を蹈むや、其の地、處處、皆蓮華を生じ、而も七步を行くに、東西南北、所踐の處悉く蓮華有り。故に此の佛を號して、蓮華上と爲す。

彼の時に當りて、無量無邊の百千萬衆、(二)天・(三)龍・(四)夜叉・(五)乾闥婆・(六)阿修羅・(七)摩睺羅伽・(八)人非人等、一時に大唱して、處處聲を出し、是の如きの言を發しぬ、「此の大菩薩を、蓮華上と名く」と。天人此の聲を唱ふるが故に、因つて、彼の佛世尊を蓮華上と號せり。』

『阿難、我念ずるに、往昔、一如來有りて、世に出現し、最上行多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と號しぬ。爾の時、我、一把の金粟を將つて、彼の佛の上に散せり。乃至、彼の佛、侍者に語つて言はく、「是の人一千劫を過ぐる後、當に佛と作るを得て、釋迦牟尼と號すべし」と。我、彼の時に於て、授記を聞き已りて、精進を捨てず、善業を增長せり。彼の功德の果報因緣の故に、無量世中、梵釋天、轉輪聖王と作れり。又、復、曾て、一轉輪王と作り、名を頂生と曰へり。我、彼の時に於て、宮殿の内に、七日を經由して、金粟の雨を雨らし、人の膝を沒して、縱廣彌滿しぬ。是の善業の因緣力を以ての故に、我今、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、乃至、無上の法輪を轉ず。阿難、彼の最上行如來は、聚落城邑に至りて乞食せんと欲したまふに、足、虛空を步して、地を去る六尺なり。是時、天龍人非人等、高聲に唱言すらく、「此の佛世尊を最上行と名く」と。是の因緣を以て、是の如來

【二】Deva
【三】Nāga
【四】Yakṣa
【五】Gandharva
【六】Asura
【七】Mahoraga
【八】Kiṃnara

を號して最上行と爲せり。阿難、我念ずるに、往昔、一如來有り。世に出現して、上名稱多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と號しぬ。我、時に、彼の佛に一室を布施し、及び比丘僧に（布施して）、乞願して言ふ、乃至、彼の佛、侍者に告げたまはく、「是の人、五百劫を滿つる後に於て、當に佛と作るを得て、釋迦牟尼と號すべし」と。我、彼の時に於て、授記を得已りて、精進を捨てざる業因緣の故に、無量世を經て、梵釋天・轉輪聖王と作り、又、是の報の故に、我、時に、一轉輪聖王と作りて、名を善見と曰へり。時に、天帝釋、（九）毗首羯磨、下り來り、我が爲に一殿を化作して、一切勝と名けぬ。是の善業の果報因緣を以て、我、今、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、乃至、無上の法輪を轉ず。』

【九】 毗首羯磨（Viśvakarma）。工巧天と譯す。天地を造作せる神話に基き、工匠を司る神と仰がる。

『阿難、我念ずるに、往昔、一如來有り、世に出現して、釋迦牟尼多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と號せり。我と同號にして、種姓・父母・名字・壽命、一切悉く我に同じ。一掬の蘇摩那華を以て、彼の佛の上に散じ、（伽葉遺師、說いて言ふ、金の一掬を將つてすと。）是の如き願を發す。乃至、彼の佛、侍者に語りたまはく、「是の人、一百劫を滿つる後に於て、當に佛と作るを得て釋迦牟尼と號すべし。」我、彼の時に於て、受記を得已りて、精進を捨てず、功德を增長せしかば、無量世中、梵釋天、轉輪聖王と

なりぬ。是の善業の因縁力を以ての故に、〔一〇〕三十七助菩提分法を以て、我身を莊嚴し、我をして阿耨多羅三藐三菩提を成じ、乃至、無上の法輪を轉ずるを得しめたり。』

『阿難、我念ずるに、往昔、一如來有り、世に出現し、號して帝沙多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰ひぬ。我、一掬の碎末旃檀を將つて、彼の佛の上に散ず、乃至、彼の佛、侍者に告げて言はく、「此の人、九十五劫を過ぎて、當に佛と作るを得て、釋迦牟尼と號すべし。」我、彼の時に於て、授記を得已りて、精進を捨てず、功德を增長せしかば、無量世中、梵釋天、轉輪聖王と作りぬ。是の善業の因縁力を以ての故に、我、名けて最上戒行淸淨具足とせらるるを得、是の善業の果報因縁を以て、我、名けて最上智見功德具足とせらるるを得、（伽葉遺師、是の如く說いて言く、我、善業の因縁力を以ての故に、最上戒行の功德名稱、遠く聞ゆるを得、乃至、最上智見の功德遠く聞ゆるを得たり。）我、今、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、乃至、無上の法輪を轉ず。』

『阿難、我念ずるに、往昔、一如來有り、世に出現して、號して弗沙多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰ふ。時に、彼の佛、雜寶窟內に在せり。我、彼の佛を見て、心に歡喜を生じ、十指の掌を合し、一脚を翹ぐること、七日七夜にして、此の偈を將つて、彼の佛を讚歎せり。而して偈を

【一〇】三十七助菩提分法とは、菩提を助成する三十七件、また三十七道品、三十七菩提分といふ。四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺支・八正道分これなり。

説いて言はく、

天上天下佛に如くものなし。十方世界にも亦た比なし。

世界の所有我盡く見つれど、一切佛に如く者有ることなし。』

「阿難、我、此の偈を以て、彼の佛を歎じ已りて、是の如き願を發す、乃至、彼の佛、侍者に語つて言く、「是の人九十四劫を過ぎて、當に佛と作るを得て、釋迦牟尼と號するを得べし。」我、彼の時に於て、授記を得已りて、精進を捨てず、功德を增長せしかば、無量世中、梵釋天、轉輪聖王と作りぬ。是の善業の因緣力を以ての故に、我、四種の辯才具足するを得て、一人の能く我と共に論じて、我を降伏する者有ること無し。我、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、乃至、無上の法輪を轉ず。」

「阿難、我念ずるに、往昔、一如來有り、世に出現して、見眞理多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と號せり。我、爾の時に於て、種種の華を將つて、彼の佛の上に散じ、（迦葉遺師、說いて言く、彼の佛號して見一切理と曰ふと。）乃至、彼の佛、侍者に語つて言はく、「是の人、九十三劫を過ぎて、當に佛と作るを得て、釋迦牟尼と號すべし。」我、彼の時に、受記を得已りて、精進を捨てず、功德を增長せしかば、無量世中、梵釋天、轉輪聖王と作りぬ。是の因緣を以て、我、今、最上の名を具持し、戒行を獲得し、乃

至、解脱知見一切具足の名を得、阿耨多羅三藐三菩提を證し、乃至、無上の法輪を轉ず」

『阿難、我念ずるに、往昔、一如來有り、世に出現して、(二)毗婆尸多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と號せり。我、爾の時に於て、一掬の小豆を將つて、彼の佛の上に散ず、乃至、彼の佛、侍者に告げて言はく、「是の人、九十一劫を過ぎて、當に佛と作るを得て、釋迦牟尼と號し、十號具足すべし」と。我、彼の時に、授記を得已りて、精進を捨てず、功德を增長せしかば、無量世中、梵釋天、轉輪聖王と作りぬ。是の善業の因緣力を以ての故に、我、又、曾て一轉輪聖王と作り、名けて頂生と爲して、四天下を得、復、帝釋の半座を得て坐せり。是の果報を以て、今、阿耨多羅三藐三菩提を成じ、乃至、無上の法輪を轉ずるを得たり。』

『阿難、我念ずるに、往昔、一如來有り、世に出現し、號して(三)尸棄多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰へり。我、彼の時に於て、無價の衣を將つて、彼の佛の上、及び聲聞衆を覆ひて、是の如き願を發す、乃至、彼の佛、侍者に告げたまはく、「是の人、三十一劫を過ぎて、當に佛と作るを得て、釋迦牟尼と號すべし」と。我、彼の時に於て、授記を得已りて、精進勇猛の心を捨てず、常に布施を行じて、福業を造作しぬ。我、是の如き善業の因緣を以て、無量世中、大梵王、

【二】毘婆尸(Vipaśyi)。過去七佛の第一

【三】尸棄(Sikhi)。過去七佛の第二。

及び、天帝釋・轉輪聖王と作り、今日、復、種種の衣服を得たり——所謂、(一三)迦尸迦衣、(一四)芻摩妙衣・(一五)劫波妙衣・(一六)憍奢耶衣・(一七)拘沉婆衣——我、今、阿耨多羅三藐三菩提を成じ、乃至、無上の法輪を轉ずるを得たり。』

『阿難、我念ずるに、往昔、一如來有り、世に出現して、(一八)毗舍浮多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と號しぬ。我、爾の時に於て、種種百味の好飲食を以つて、彼の佛及び聲聞衆に布施し、是の如き願を發せり、乃至、彼の佛、侍者に告げて言はく、「是の人、三十劫を過ぎて後、當に佛に作るを得て、釋迦牟尼と號すべし。」我、彼の時に於て、授記を得已り、精進勇猛の心を捨てず、常に布施を行じ、福業を造作しぬ。我、是の如きの善根の因緣を以て、無量世中、大梵王と作り、或は帝釋・轉輪聖王と作り、今、種種百味の飲食を得、乃至、阿耨多羅三藐三菩提を成じて、無上淸淨の法輪を轉ずるを得たり。』

『阿難、我念ずるに、往昔、(一九)拘婁孫多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀の邊に於て、梵行を行ぜしは、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求むるが故なり。阿難、我念ずるに、往昔、(二〇)迦那迦牟尼多

【一三】Kāsikasūkṣma

【一四】Kṣauma

【一五】Kalpadūṣya

【一六】Kauśeya

【一七】Koṭambaka

【一八】毘舍浮(Viśvabhū)。過去七佛の第三。

【一九】拘婁孫(Krakucchanda)。過去七佛の第四。賢劫千佛の第一。

【二〇】迦那迦牟尼(Kanakamuni)。過去七佛の第五。賢劫千佛の第二。又拘那含牟尼に作る。

陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀の邊に於て、梵行を行せしは、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求むるが故なり　阿難、我念ずるに、往昔、〔二〕迦葉多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀の邊に於て、梵行を行せしは、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求むるが故なり。』

『阿難、我念ずるに、往昔、彌勒菩薩の邊に於て、種種微妙なる四事供養の具を齎持して、供養・恭敬・尊重・讃歎し、自ら恣に奉獻せしは、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求むるが故なり。阿難、我念ずるに、往昔、無量種の供養の具を將つて、至到する所の處に、卽ち持して過去無量の諸佛菩薩、及び、聲聞衆を供養して、諸の善根を種ゑしは、未來世の阿耨多羅三藐三菩提を求むるが故なり。』

『阿難、往昔、百阿僧祇劫を過ぎて、是の時に佛有り、世に出現し、號して〔三〕然燈多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰ひぬ。阿難、是の如く、次第に、百億劫を過ぐる時、一佛有り、世に出現して、一切勝多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と號しぬ。阿難、是の如く、次第に、五百劫を過ぐる時、一佛有り、世に出現して、最上名稱多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と號しぬ。阿難、是の如く、次第に、一百劫を過ぐる時、一佛有り、世に出現して、釋迦牟尼多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と號しぬ。阿難、是の如く、次第して、九十四劫の時、一佛

〔二〕迦葉（Kāśyapa）過去七佛の第六、賢劫千佛の第三。

〔三〕然燈（Dīpaṃkara）又定光といふ。

有り、世に出現して、號して弗沙多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰へり。阿難、是の如く次第して九十三劫の時、一佛有り、世に出現し、號して見義多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰ひぬ。阿難、是の如く次第して九十一劫の時、一佛有り、世に出現し、毗婆尸多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と號しぬ。阿難、是の如く次第して三十一劫の時、一佛有り、世に出現し、號して尸棄多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰ひぬ。同じく是の劫の中、又、一佛有り。復、世に出でて、號して神聞多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と曰ひぬ。阿難、是の(三)賢劫の初、第一に拘婁孫駄如來、世に出現せり。第二に拘那含牟尼如來、世に出現せり。第三に迦葉如來、世に出現し、第四に我身。釋迦牟尼如來、今現に世に在り。』

「阿難、彼の然燈多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、世に出現して、大婆羅門家に生れ、一切勝佛、世に出現して、大刹利王家に生れ、蓮華上佛、世に出現して、大婆羅門家に生れ、最上行佛、世に出現して、大刹利王家に生れ、德上名稱佛、世に出現して、大婆羅門家に生れ、釋迦牟尼佛、世に出現して、大刹利王家に生れ、帝沙如來、世に出現して、大婆羅門家に生れ、弗沙如來、世に出現して、大刹利王家に生れ、見眞義佛、世に出現して、大婆羅門家に生れ、毗婆尸佛、世に

【三】賢劫。現在の劫をいふ。千佛の出現あるべきを以て、この名あり。之に對して過去を莊嚴劫、未來を星宿劫といふ。

出現して、大刹利王家に生れ、尸棄如來、世に出現して、大刹利王家に生れ、神聞如來、世に出現して、大刹利王家に生れ、拘婁孫駄佛、世に出現して、大婆羅門家に生れ、拘那含牟尼佛、世に出現して、大婆羅門家に生れ、迦葉如來、世に出現して、大婆羅門家に生れ、阿難、我、今、刹利種姓大王の家に在りて生れ、世間に出現せり。』

『阿難、然燈佛多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀は、壽命八百四千萬億歲、世に住せり。諸の世間を利益するが故なり。（尼沙塞師、是の如く說く、迦葉遺師、復言く、然燈如來、及び聲聞衆と、壽命一劫、世に住す。諸世間を利益するが故なり。）阿難、一切勝如來、世に住する八萬億歲。一切諸世間を利益するが故なり。（尼沙塞師、是の如く說く、迦葉遺師、復言く、一切勝如來、住世一劫、世間を利益するが故に。）蓮華上佛、世に住する八萬歲。利益を爲すが故なり。最上行佛、世に住する、八萬歲。利益を爲すが故なり。上名稱佛、世に住する、六萬歲。利益を爲すが故なり。釋迦牟尼佛、世に住する、八萬歲。利益を爲すが故なり。帝沙如來、世に住する、六萬歲。利益を爲すが故なり。弗沙如來、世に住する、五萬歲。利益を爲すが故なり。見眞義佛、世に住する、四萬歲。利益を爲すが故なり。毗婆尸佛、世に住する、八萬歲。利益を爲すが故なり。神聞如來、世に住する、六萬歲。利益を爲すが故なり。拘婁孫駄佛、世に住する、四萬歲。利益を爲すが故なり。拘那含牟尼佛、世に住する三萬歲。利益を爲すが故なり。迦葉如來、世に住する、二萬歲。利益を爲すが故なり。阿難、

我、今、多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀、世に住する八十歳。利益を爲すが故なり。』而して、偈を説いて言はく、

『佛有り神通を以て、世に住して供養を受け、或は神通と業と、盡き已りて涅槃に入る。』

『阿難、然燈如來に、二百五十萬億の聲聞弟子大衆の集會有り。如來の滅後、法世に住して、七萬歳を經、末後の十年、諸比丘等、敬信を生ぜず、慚愧の心なく、世務を營理して、諸業を樂み、所有の持疑も、相諮問せず、各己が能を恃んで、互に憍慢を生じ、恆に非法を聚め、諸の惡知識不善の人を以て朋友と爲し、共に相狎習して、圍繞遊從せり。是等の癡人、行、純ならざるが故に、彼の如來の佛法僧寶をして、速疾に隱沒して、世間に現せず、有ゆる經書、悉く皆滅盡せしめぬ。』

『一切勝佛に、萬四千の聲聞弟子大衆の集會有り。如來の滅後、正法世に住して、少時を經たり。蓮華上佛に、七萬衆の聲聞の集會有り。如來の滅後、正法、世に住して、十萬歳を經たり。上行如來に、六萬衆の聲聞の集會有り。如來の滅後、正法世に住すること、七萬七千歳なり。德上名稱佛に、二萬衆の聲聞の集會有り。如來の滅後、正法世に住して、五百歳を經たり。釋迦牟尼佛に、一千二百五十の聲聞の集會あり、如來の滅後、正法世に住して、五百歳を經、像法

の世に住すること、亦五百歳なり。帝沙如來に、六萬億の聲聞の集會有り。如來の滅後、正法世に住して、二萬歳を經たり。弗沙如來に、無量億の聲聞の集會有り。如來の滅後、正法・像法、乃至、法住し、乃至、法滅せり。見一切義佛に、三十二億那由他衆の聲聞の集會有り。如來の滅後、正法暫時にして、久しく世に住せざりき。毗婆尸佛、三會に說法して、聲聞衆を度せり。第一の大會に、一百六十八百千人、第二の大會に十萬人有り。第三の大會に八百千人あり。如來の滅後、正法世に住すること、二萬歳を經たり。神聞如來に唯二會のみありて、聲聞衆を度せり。第一會に度するもの、七萬人有り。第二會に度するもの六萬人有り。如來の滅後、正法世に住して、六萬歳を經たり。拘婁孫駄佛に、四萬衆の聲聞弟子有り。如來の滅後、正法世に住して、五百歳を經たり。拘那含牟尼佛に、三百萬の聲聞の集會有り。如來の滅後、正法世に住すること、二十九日なり。迦葉如來に、二萬衆の聲聞の集會有り。如來の滅後、正法世に住すること、七日を經たり。阿難、我、多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀に、一千二百五十の聲聞の集會有り。我が滅度の後、正法世に住して、五百歳有り、像法世に住すること、亦五百歳なり。今當に(二四)優陀那偈を畧說すべし。』而して、偈を說いて言はく。

【二四】優陀那[Udāna]。集施と譯す、多義を縮めて、僅少の語句に收めたる韻文。

『施と及び年數と、種姓と幷に壽命と、聲聞衆の集會と、正法と像法と、
彼等諸世尊の、住世と般涅槃とを說き、釋種大師子は、總て說きて悉く已に訖りぬ。』

(一)賢劫王種品第三の上

爾の時、佛、王舍大城の、(二)竹林精舍迦蘭陀鳥所居の處に在し、大比丘五百人と倶たり。爾の時、世尊、諸佛の法に依り、乃至、淸淨梵行を說いて、諸の比丘に告たまはく『汝、諸の比丘、諦かに聽き、諦かに受けて、世尊の敎の如くせよ。』諸の比丘、言へらく、『我等、歡喜して、信心もて奉持せん。』佛、比丘に告たまはく『此の賢劫の初、地、建立し已りて、一最尊、豪勝富貴の大首領人、轉輪王種あり。名衆集置して、既に安置し已る。時に諸の大衆、地主に白して言く「我が大地主よ、當に我等の爲に、惡人を治罰し、良善を賞すべし。仁者、當に稻田を分つて、我に與ふべし。我各之に種ゑ、我等種ゑ已りて、當に各割分して、仁者に奉輸すべし」と。時に、彼の地主、大衆の請を受け、卽ち爲に法の如く、平に依つて撿挍し、惡き者は治罰し、善き者は之を賞せり。人、稻田を得て、各守護を加へ、佃熟し已りて後、分に隨つて之を受けぬ。』佛、比丘に告たまはく『時に彼の大衆、是の如く集會和合し、共に彼の仁者を推扶し、持して地主と爲り、大衆の商量によ

【一】賢劫とは現在の劫名にして、過去莊嚴劫、未來星宿劫に對する名稱、千佛の出世あるを以て、此稱あり。

【二】竹林精舍 Venuvana-vihāra 摩揭陀國王頻婆沙羅の建立布施せる所。

りて擧げられしを以ての故に、彼を號して大衆平章と爲しぬ。又、彼の地主、諸の大衆の爲に、法の如く治化し、衆をして歡喜し、同心に愛樂し、共に和合するを得て、各各處分せしめたり。故に名けて王と爲しぬ。又、復、一切の稻田を守護し、熟すれば、衆人、稻田の分を取るが故に、刹利王と名けぬ。刹利王をば、名けて田主と爲す。汝等、當に知るべし、是の因縁を以て、劫の最初の時、大衆立つる所の王種は是なるを。』

佛比丘に告たまはく、『時に、彼の大衆立つる所の王、後に一子を生めり。名けて眞實と曰ふ。轉輪王と爲りて、四天下に王たり。大地主と作りて、七寶自然に、千子具足し、三十二大丈夫の相を備へ、威德勇猛にして、能く怨賊を摧けり。彼の王の治化在世の時、大地及び海に、荊棘丘陵高下有ること無く、五穀豐熟し、人民安樂にして、諸の恐怖及び艱難無く、兵戈を用ひずして、諸方自ら伏し、法の如くに治化せり。諸の比丘、彼の眞實王の千子の內、一長子有り、名けて意喜と曰ひ、亦た自用と名く。此子、亦、轉輪聖王と作りて、上に說く所の如く、七寶、千子、乃至、大地、法の如く治化せり。諸の比丘、彼の自用王の千子の內、一長子有り、名けて智者と曰ふ。衆人之を號して、名けて受戒と爲せり。彼の智者王も、亦、父の位を紹ぎて、轉輪王と作り、上に說く所の如く、七寶、千子、乃至、大地、法の如く治化せり。諸の比丘、彼の智者王の

千子の內、最初の長子を、名けて頂生と曰ふ。亦、父の位を紹ぎて、轉輪王と作り、上に說く所の如く、乃至大地、法の如く治化せり。諸の比丘、彼の頂生王の千子の內、最初の長子を名けて大海と爲す。亦、父の位を紹ぎて、轉輪王と作り、上に說く所の如し。諸の比丘、彼の大海王の千子の內、最初の長子を、名けて具足と爲す。衆人、又、喚んで之を名けて敷と爲す。次いで王位を紹ぐこと、上に說く所の如し。諸の比丘、彼の具足王の千子の內、最初の長子を、名けて養育と爲す。次いで、王位を紹ぐこと、上に說く所の如し。諸の比丘、彼の養育王の千子の內、最初の長子を、名けて福車と曰へり。次いで王位を紹ぐこと、上に說く所の如し。諸の比丘、彼の福車王の千子の內、最初の長子を、名けて解脫と曰へり。次いで王位を紹ぐこと、上に說く所の如し。諸比丘、彼の解脫王の千子の內、最初の長子を善解脫と名く。次いで王位を紹ぐこと、上に說く所の如し。諸の比丘、彼の善解脫王に子有り、名けて逍遙と曰ふ。次いで王位を紹ぐこと、上に說く所の如し。諸の比丘、彼の逍遙王に子有り、大逍遙と名く。次いで王位を紹ぐこと、上に說く所の如し。諸の比丘、彼の大逍遙王に子有り、名けて照耀と曰へり。次いで王位を紹ぐこと、上に說く所の如し。諸の比丘、彼の照耀王に子有り、大照耀と名く。次いで王位を紹ぐこと、上に說く所の如し。』

巻の第五

賢劫王種品第三の下

『諸の比丘、彼の大照耀王に子有り、還、意善と名く。次いで王位を紹ぐこと、上に説く所の如し。諸の比丘、彼の意善王に子有り、名けて善喜と曰ふ。次いで王位を紹ぐこと、上に説く所の如し。諸の比丘、彼の善喜王に子有り、名けて滿足と曰ふ。次いで王位を紹ぐこと、上に説く所の如し。諸の比丘、彼の大滿足王に子有り、還、養育と名く。次いで王位を紹ぐこと、上に説く所の如し。諸の比丘、彼の養育王に子有り、還、福車と名く。次いで王位を紹ぐこと、上に説く所の如し。諸の比丘、彼の福車王に子有り、人首領と名く。次いで王位を紹ぐこと、上に説く所の如し。諸の比丘、彼の人首領王に子有り、名けて火質と曰へり。次いで王位を紹ぐこと、上に説く所の如し。諸の比丘、彼の火質王に子有り、名けて光炎と曰ふ。次いで王位を紹ぐこと、上に説く所の如し。諸の比丘、彼の光焔王に子有り、善髻冠と名く。次いで王位を紹ぐこと、上に説く所の如し。諸の比丘、彼の善髻冠王に子有り、名を空冠と曰ふ。次いで

王位を紹ぐこと、上に說く所の如し。諸の比丘、彼の空冠王に子有り、名を善見と曰ふ。次いで王位を紹ぐこと、上に說く所の如し。諸の比丘、彼の善見王に子有り、大善見と名く。次いで王位を紹ぐこと、上に說く所の如し。諸の比丘、彼の大善見王に子有り、名けて須彌と曰ふ。次いで王位を紹ぐこと、上に說く所の如し。諸の比丘、彼の須彌王に子有り、大須彌と名く。次いで王位を紹ぐこと、上に說く所の如し。』

『轉輪聖王、四天下を統べ、海と大地と、七寶を具足し、乃至、法の如く、人民を治化せり。諸の比丘よ、是の如き等の王は、皆是れ過去の轉輪聖王なり。無量の福業を具足修習し、深く善根を種ゑ、是の果報を以て、並に此の四天下の一切の大地に食を得、諸の福樂を受けて、壽命量り難く、算へ計るべからず。諸の比丘、汝等當に知るべし。我、今、更に、彼の轉輪王の種姓、苗裔、世世の相承、幷に、餘の小王子孫の繼襲、住處名字、次第の少多を說かん。(先づ)汝の爲に、略彼等の氏族を說かん。汝等善く聽けよ。』

『諸の比丘、大須彌王、治化已來、世世相承け、子子孫孫、一百一の小轉輪王有り、悉く皆住して褒多那城に在り、人民を治化し福業を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を師子乘と名く。師子乘王世世相承け、子子孫孫、六十一の小轉輪王有り、悉く皆住して阿踰闍城に在り、人民

を治化して、福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を、名けて女乘と曰へり。彼の女乘王、世世相承け、子子孫孫、五十六の小轉輪王有り、悉く皆住して阿踰闍城に在り、人民を治化し、福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を、嚴熾生と名く。嚴熾生王、世世相承け、子子孫孫、合せて一千の小轉輪王有り、皆悉く住して迦毗梨耶城に在り、人民を治化して、福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を、名けて梵德と曰ふ。彼の梵德王、世世相承け、子子孫孫、二十五の小轉輪王有り、皆悉く住して阿私帝那富羅城に在り、人民を治化し、福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を名けて象將と爲す。彼の象將王、世世相承け、子子孫孫、二十五の小轉輪王有り、皆悉く住して德叉尸羅城に在り、人民を治化して、福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を、號して護と名く。彼の護王、世世相承け、子子孫孫、一千二百の小轉輪王、皆悉く住して奢耶那城に在り、人民を治化して、福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を、能降伏と名く。能降伏王、世世相承け、子子孫孫、合せて九十の小轉輪王有り、皆悉く住して迦那鳩闍城に在り、人民を治化して、福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を、名けて勝將と爲す。彼の勝將王、世世相承け、子子孫孫、二千五百の小轉輪王、皆悉く住して瞻波城に在り、人民を治化して、福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を、名けて龍天と曰ふ。

彼の龍天王、世世相承け、子子孫孫、二十五の小轉輪王有り。皆悉く住して王舍城に在り、人民を治化し、福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を、名けて作闍と爲す。彼の作闍王、世世相承け、子子孫孫、二十五の小轉輪王有り、悉く皆住して拘尸那竭城に在り、人民を治化して、福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を、大自在天と名く。彼の大自在天王、世世相承け、子子孫孫、二十五の小轉輪王有り、悉く皆住して菴婆羅劫波城に在り、人民を治化し、福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を、還、大自在天と名く。彼の大自在天王、世世相承け、子子孫孫、二十五の小轉輪王有り。悉く皆住して檀多富羅城に在り、人民を治化して、福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を、名けて善意と曰ふ。彼の善意王、世世相承け、子子孫孫、二十五の小轉輪王有り。悉く皆住して多摩婆頗梨多城に在り、人民を治化して、福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を、無憂鬘と名く。彼の無憂鬘王、世世相承け、子子孫孫、八萬四千の小轉輪王、皆悉く住して寐湙羅城に在り、人民を治化して、福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を、毗紐天と名く。彼の毗紐天王、世世相承け、子子孫孫、一百一王、皆悉く住して毗褒多那城に在り、人民を治化して、福樂を受けたり。彼の諸王の內、最後の一王を、還、大自在天と名く。彼の大自在天王、世世相承け、子子孫孫、合せて八萬四千の諸王有り、

還、彼の寐演羅城に在りて、人民を治化し、福樂を受けぬ。彼の諸王の內、最後の一王を、名けて魚王と曰ふ。比丘、當に知べし、諸の是の如き等の小轉輪王は、悉く福德有り、皆善根を種ゑて、世間の福報を具足して受くること、與に等しき者無し。其化の被る所、大地及び海、一切の諸山、悉く皆統攝せり。諸比丘よ、彼の轉輪王に、各皆粟散の諸王有り。我今之を說かん。』

『諸比丘、魚王に子有り、名けて眞生と曰へり。彼眞生王、父祖已來、善根を修習して、王を紹繼するを得、福報盡きたるが故に、便ち王位を失へり。時人、彼の王化の道を失し、福德有る無きを見て、共に相謂つて言く、「此の王は人中の最好貧劣、人中の單薄、人中の可愍、人中の可掘なり」と。是の故に、世人皆之を號して、可掘の王と爲せり。掘王に子有り、名けて平等行王と爲す。平等行王の子を、闇火と名く。闇火王の子を、名けて焰熾と爲す。焰熾王の子を、名けて善譬と爲す。善譬王の子を、名けて虛空と爲す。虛空王の子を、名けて戒行と爲す。戒行王の子を、名けて無憂と爲す。無憂王の子を、名けて離憂と爲す。離憂王の子を、名けて除憂と爲す。除憂王の子を、名けて勝將と爲す。勝將王の子を名けて大將と爲す。大將王の子を、名けて胎生と爲す。胎生王の子を、名けて明星と爲す。明星王の子を、名けて方主と爲す。方主王の子、號名を塵と爲す。彼の塵王の子を、名けて善意と爲す。善意王の子を、名けて善住と爲す。善住

王の子を、名けて歡喜と爲す。歡喜王の子を、名けて大力と爲す。大力王の子を、名けて大光と爲す。大光王の子を、大名稱と名く。大名稱王の子を、名けて十車と爲す。十車王の子を、二十車と名く。二十車王の子を、妙車と爲す。妙車王の子を、名けて歩車と爲す。歩車王の子を、名けて十弓と爲す。十弓王の子を、名けて百弓と爲す。百弓王の子を、二十弓と名く。二十弓王の子を、妙色弓と名く。妙色弓王の子を、名けて罪弓と爲す。罪弓王の子を、名けて海將と爲す。海將王の子を名けて難勝と爲す。難勝王の子を、名けて茅草と爲す。茅草王の子を、大茅草と名く。大茅草王、世世相承け、子子孫孫、苗裔合せて一百八王有り、還、住して彼の褒多那城に在り、人民を治化し、福樂を受けたり。』

『彼の一百八の、最も後に在る王、大茅草なるもの、子なし。是の如きの念を作しぬ、「上世已來、我の種姓、粟散諸王は、自らの頭鬚に、白髪を生ずるを見るの時、各諸子を以て、灌頂して王と爲し、別に勝上最好の一州を取り、以つて布施に用ひて、鬚髪を剃除し、王位を捨て、出家して道を修めたりき。我、今、兒なし。當に誰を以て我の後を繼嗣すべき。誰か我の種姓を增長するに堪へたる。或は、復、我、今、諸王種を斷せんか」と。後、此の念を生じぬ、「我、今、若し、出家修道せずんば、則ち一切諸賢聖の種を斷ぜん。」是を思惟し已りて、時に大茅草、即

ち王位を以て、諸大臣に付す。大衆圍繞し、王を送つて城を出で、鬚髮を剃除し、出家の衣を服しぬ。王、出家し已るや、持戒清淨、專心勇猛に、(一)四禪を成就し、(二)五通を具足し、王仙と成るを得て、壽命極めて長く、年衰老するに至つて、肉消え背曲り、復、杖に拄ると雖も、遠行する能はず。時に、彼の王仙の諸弟子等、東西に往きて、飲食を求覓め、好輭草を取りて籠裏に安置し、用て王仙を盛りて、樹枝上に懸けんと欲す。何を以ての故に。諸蟲獸の、來りて王仙に觸るるを畏るればなり。時に、諸弟子、乞食に去れる後、一獵師有り、山野を遊行し、遙かに王仙を見て、是白鳥と謂ひ、遂に卽ち之を射る。時に、彼の王仙、既に射られ已るや、兩滴血有りて、出でて地に墮ち、卽ち命終す。彼の諸の弟子、乞食より還り來り、彼の王仙の、射られて命終せるを見、復、兩滴血有り、地に在るを見るや、卽ち彼の籠を下し、王を將て地に置き、柴木を集聚して、王の屍を焚燒し、骨を收めて塔を爲り、復、種種雜妙の香華を將て、彼の塔を供養し、尊重し、讚歎し、承事し畢れり。爾の時、彼の地の兩滴の血より、便ち二甘蔗の芽を生出しぬ。漸漸高大し、時に至りて蔗熟し、日に炙られて開剖し、其一莖の蔗より、一童子を出し、更に一莖の蔗より一童女を出す。端

【一】四禪は禪定の四階級。初禪、第二禪、第三禪、第四禪これなり。三界說にては、之を色界と爲す。

【二】五通は五種の通力。(一)天眼、(二)天耳、(三)宿命、(四)他心、(五)神足、これなり。

政にして喜ぶ可く、世に雙有ること無し。時に諸の弟子、心に、王仙の世に在りし時、兒子を生まざりしを念ひ、今是の兩童は、是王仙の種なりとて、養護看視して、諸臣に報じ知らしむ。時に、諸の大臣、聞き已りて歡喜し、彼の林に往き至りて、二童子を迎へ、將て還りて宮に入り、解相の大婆羅門を召喚し、占相せしめ、幷に名を作さしむ。彼の相師言く「此の童子は、既に是れ日に炙られて熟せる甘蔗の、開いて出生せるが故に、一に善生と名く。又、其の甘蔗より出づるを以ての故に、第二に、復、甘蔗生と名く。又、日に炙られし甘蔗より出づるを以ての故に、亦、日種と名く。彼の女の因緣も、一種も異ることなし。故に善賢と名く。復、水波と名く。時に、彼の諸臣、甘蔗種所生の童子を取り、幼少年の時、即ち其頂に灌ぎ、立てて以て王と爲す。其の善賢女は、年長大するに至つて、伏事に堪能なり。即ち拜して王第一の妃と爲しぬ。」

「時に（三）甘蔗王に第二の妃有り。絕妙端政にして、四子を生む。一を炬面と名け、二を金色と名け、三を象衆と名け、四を別成と名く。其の善賢妃は、唯一子を生む。名けて長壽と爲す。端政にして喜ぶ可く、世間に雙少なし。然れども、其の骨相、王と作すに堪へず。時に善賢妃、是の如く思惟すらく、「甘蔗種王に、此の四子有りて、炬面等の輩、兄弟群强なり。我、今、唯、此の一子有るのみ。極めて端正にして、世に

【三】甘蔗王は梵語 Iksvāku（イクシユヴーク）の譯。

雙有ること無し。然れども、其の性分、主たるに堪へず。何の方便を作してか、我が此の子に王位を繼ぐを得しめん」。復、此の念を作しぬ、「是の甘蔗王は、今、我邊に於て、無量敬愛、深心染著して、情を縱にし意を蕩かす。我、今、更に、婦人莊飾の法を窮極すべし。所謂、淨潔に身體を摩拭し。香湯に沐浴して氣を芬芳ならしめ、髮に㊃澤蘭を塗り、面に脂粉を著け、華鬘瓔珞もて、種種に莊嚴し、甘蔗王の心をして、我邊に於て、重ねて耽湎、愛戀、娛樂を生ぜしめん。若し心の如きを得ば、我、屛處に於て、當に乞ひ求めて願ふべし。」是を思惟し已りて、上に說く所の如く、自身を莊嚴し、極めて殊絕ならしめ、王の邊に至る。王、妃の來るを見、重愛敬を生じ、其の心を縱逸にす。妃、王の是の如き心を生ぜしを見已りて、二人眠臥し、妃、王に白して言く、「大王、當に知るべし、我、今、王より一願を乞ひ求めん、願くは、王、我に與へよ。」王言く、「大妃、意の隨に逆はじ。心の欲する所に從ひ、我當に妃に與ふべし」と。時に、妃、復、更に、重ねて、王に諮つて言く、「大王自在、若し我に願を與へば、變悔するを得ず。若し變悔すとも、我は此を須ひず。」王、妃に語りて言く、「我、一たび、妃に、心の願ふ所を與へぬ。後、若し、悔いば、當に我が頭をして、破れて七分と作らしむべし。」妃言く、「大王の四子、炬面等の輩、願くは國より擯出して、我が生子長壽をし

【四】澤は香油。

て王爲らしめよ」と。時に、甘蔗王、卽ち妃に語つて言く、「我が此の四子、過失あることなし。横まに財を求めず、罪愆有ることなし。豈辜無きに枉げて驅遣し、遠く他土に擯くるを得可けんや。我が治化する國境の内に於て、何の非祥ありてか、其の住むを聽さざる。」妃、又、白して言く、「王、已に、先に、誓語せり。若し、悔いば、頭破れて七分せん。」王、妃に告げて言く「我が言へるが如く、妃の願ふ所を與へん。」妃、若し、時を知らば、妃の意に任隨せん。」時に、甘蔗王、此の夜を過ぎて後、明の淸旦に至り、四子を集聚し、敕を告げて言く、「汝四童子、今、我が治化の内を出で去るべし。居住するを得ず。遠く他國に向へ」と。』

『時に、四童子胡跪合掌して、父王に白して言く「大王當に知るべし、我等四人、罪惡有ることなく、諸の過咎無し。非法を作して、他の錢財を取らず。又、復、其餘の惡業を造らず。云何ぞ父王、忽然我を擯けて、國界より出すか。」王、子に敕して言く、「我、汝等の實に過失なく、横に財を取らざるを知る。上に說く所の如きは、此れ我意より汝を駈擯するに非ず。此は是善賢大妃の意なり。我、彼の妃の乞願に違はず、汝をして國を出でしむ。」時に、四王子所生の母、甘蔗王の、其の子を擯けて、國界より出でしめんと欲するを聞き、聞き已りて、速疾に王の所に往至し、王の所に至り已りて、大王に白して言く、「聞ならく、王、我の四子を逐ひて、國界より出で

しめんと欲すと。實に爾りと爲すや不や。」王言く、「實に遣るなり。」諸妃、各、復、王に白して言く、「善い哉、大王、我等は、各、兒に隨つて去らんを求め乞ふ」と。』

『王、諸妃に報ふらく、「汝の意の隨にして去れ」と。時に、諸妃の妹、復、白して言く、「我姉の外甥、今、已に、國を出でば、我も、亦、去らんを乞ふ」。王、各、報へて言く、「汝の意に任隨す。」時に、諸の大臣・公卿・輔相、亦、王に白して言く、「王、今、此の四王子を斥け遣りて、國を出でしめば、我等諸臣も、亦、隨ひ去らんを求む。」王言く、「意に任せよ。」時に、王の諸象馬を典當せる臣も、亦、隨從せんことを求む。王言く、「意に隨へ」と。復、弓將、弩將、諸の羊畜牧等を典當せる將の諸臣の子有り。又、復、諸餘の主藏・兵將・遊軍・壯士・善財の將、奴婢僕使、及び其子等、甘蔗王の、四子を逐ひて國界より出でしめんとするを聞き、俱に王に白して言く「我等、竝に、王子に隨從し、東西に去らんことを求む。」王言く「意に隨へ」と。又、復、國内の竹匠・皮匠・瓦師・塼師・造屋木師・造酒食師・剃鬚髮師・染洗衣師・屠兒・按摩・治病・合藥・釣魚等の師、王が四子を驅りて、國を出さんと欲すと聞き、是の如きや不やを審む。王曰く、「實に爾り」」「我等も去らんを求む。」王言く「意に隨へ。」時に、甘蔗王、諸の王子に敕して、是の如きの言を作しぬ。「汝等王子、今よりして已去、若し婚姻を欲するも、餘の處にて他の外族を取るを得ず。還つて

自家の姓内に於て取り、甘蔗の種姓を斷絶せしむる莫れ」と。時に、諸の王子、父王に白して言く、「大王の勅の如くせん。」彼の諸の王子、父の敎を受け已りて、各各自ら所生の母、幷に、姨姉妹、奴婢、資財、諸馱乘等を將て卽ち北方に向ひ、雪山の下に到り、少時を經て住まる。一大河有り、婆耆羅湊と名く。彼の河を渡りて、雪山の頂に上り、游渉して久しく停る。時に四王子、彼の山頂に在り、射獵して諸の禽獸を捕へて食し、漸漸に前行して、山の南面に至る。見やれば、川は寬く平かにして、諸の坑坎・堆阜・陵谷・丘壑・溝渠・荊棘・塵埃、及び、沙礫等無く、其の地、唯、輭細の青草を生じ、清淨にして愛す可く、樹林華果、蔚茂敷榮して、猶ほ黑雲の如く、光澤(五)儵爍、林木遍滿して、其間空少し。所謂、(六)娑羅樹・(七)多羅樹・那多摩羅樹・(八)阿說他樹・(九)尼拘陀樹・(一〇)優曇婆羅樹・千年棗樹(一一)迦梨羅樹等、諸の枝柯を垂れて、各相蔭映す。又種種諸雜の妙華有り、所謂、(一二)阿提目多華・(一三)瞻波華・(一四)阿趣迦華・(一五)波多羅華(一六)婆利師迦華・(一七)拘蘭那華・(一八)拘毗陀羅華・(一九)檀奴沙迦梨迦華・(二〇)目眞隣陀華・(二一)蘇摩那等、一切の諸華、或は已に開ける有り、或は未だ開かざる有り、或は初めて開かんと欲し、或は開き已りて落つ。復、無量衆の雜果樹

【五】儵はあをぐろなり。
【六】Sāla シャーラ
【七】Tāla ターラ
【八】Aśvattha アシュヴァッタ
【九】Nyagrodha ニヤグローダ
【一〇】Udumbara ウヅムバラ
【一一】Karīra カリーラ
【一二】Atimuktaka アティムクタカ

有り、所謂、(二二)菴婆羅果・(二三)閻浮果・陵拘闍果・(二四)波那娑果・(二五)鎮頭迦果・(二六)呵梨勒果・毗醯勒果・(二七)阿摩勒等、種種の諸果、或は始めて子を結び、或は子熟せんと欲し、或は子已に熟して、食噉すべきに堪へたり。』

『復、無量諸雑の野獣有り、所謂、(二八)伊泥耶獣・麞鹿・水牛・那羅迦獣・野牛・白象・及び師子等なり。復、無量種種の飛鳥有り、所謂、鸚鵡、及び(二九)拘翅羅・鸛鵒・孔雀・(三〇)迦陵頻伽・命命・鵁鶄・山鶏・白鶴・(三一)遮摩迦鳥・及び蘭摩等、一切の雑鳥なり。復、無量諸水の陂池有り、其の池に各各種種の雑華有り、所謂、(三二)優鉢羅華・(三三)波頭摩華・(三四)拘勿頭華・(三五)分陀利華、悉く諸池に満つ。池岸の四邊、復、諸華有り、池上に垂覆す。其の水清淨にして、濁穢有ること無く、湛然として彌滿し、深からず淺からず、度り易く行き易し。四邊を周帀して、種種の諸樹有り、池内に、復、種種の諸蟲有り、所謂、魚・鼈・黿・鼉。龜・鼇・螺・蜯など、一切の水性なり。復、水鳥あり。所謂、鳬・雁。鵝・鴨・白鷺・

【一三】 チャムパカ Campaka
【一四】 アショーカ Asoka
【一五】 パータラ Pāṭala
【一六】 ヷールシキー Vārṣikī
【一七】 クランダ Kuraṇḍa
【一八】 コーヸダーラ Kovidāra
【一九】 ダーヌシカーリー Dhānuṣkārī
【二〇】 ムチリンダ Mucilinda
【二一】 スマナ Sumana
【二二】 アームラ Āmra
【二三】 ジャンブ Jambu
【二四】 パナサ Panasa
【二五】 チンヅカ Tinduka
【二六】 ハリータキー Harītakī
【二七】 アマラ Āmala
【二八】 アイネーヤ Aiṇeya
【二九】 カウキラ Kokila、杜鵑
【三〇】 カラヸンカ Kalaviṅka
【三一】 チャルマチャタカ (Carmacaṭakā、春鶯)
【三二】 ウトパラ Utpala、青蓮花。
【三三】 パドマ Padma、紅蓮花。

鸕鷀・及び、鴛鴦等、一切の諸鳥なり。然るに、其の彼處に、舊と一仙有りて、中に在りて居止す。(三六)迦毗羅と名く。彼の諸王子、是の處を見已りて、共に相謂つて言く、「此の間に於て、城を造りて治化すべし」と。』

『爾の時、王子、既に安住し已りて、父王の語を憶ひ、自姓の中に於て、婚姻を求覓むるに、婦を得る能はず、各、姨母及び其の姉妹を納れて、共に夫妻と爲り、婦禮に依る。一に父王の敎令に隨從せんと欲し、二に釋種の雜亂、相生ぜんを恐れたるなり。爾の時、甘蔗王、一國師の大婆羅門を召し來り、之に謂つて言く、「大婆羅門、我が四王子は、今、何處にありや。」國師答へて言く、「大王、當に知るべし、王の四子、已に、各、自ら、母、姨、姉、妹、駄乘、人物を將て、遠く國外に出で、北方に向ひ、乃至、已に端政の男女を生めり」と。時に、甘蔗王、自ら愛する所の諸王子なるが故に、心に見んと思欲し、意情歡喜して、是の言を發しぬ、「彼の諸王子、◎◎能く國の計を立て太だ好く治化す。」彼等王子、是の故に、姓を立て、稱して(三七)釋迦と爲す。釋迦、大樹の蓊蔚たる枝條の下に住めりしを以て、是の故に名けて奢夷耆耶と爲しぬ。其の迦毗羅仙の所住に本づき、城の名を立てしが故に、(三八)迦毗羅婆蘇

【三四】Kumuda、黃蓮花。
【三五】Puṇḍarīka、白蓮花。
【三六】迦毗羅（Kapila、數論の開祖ならんと推定せらる。
【三七】釋迦（Sākya）能と譯す。
【三八】Kapilavastu

都と名く。時に、甘蔗王の三子沒して、復、唯、一子在り。尼拘羅（〔隋〕に別成と云ふ。）と名く。王と爲り、住して迦毗羅城に在り、人民を治化して、福樂を受けたり。其の尼拘羅王、一子を生む。名けて拘盧と曰ふ。還、父王の迦毗羅城に在り、治化して住せり。其の拘盧王、復、一子を生む。瞿拘盧と名く。亦、父の城に在りて、王と爲りて治化しぬ。其の瞿拘盧王、復、一子を生む。（三九）師子頰と名く。還、父の城に在りて、人民を治化せり。師子頰王、四子を生む。第一は名けて（四〇）閲頭檀王と曰ひ、（〔隋〕に淨飯と言ふ。）第二は名けて（四一）輸拘盧檀那と爲し、（〔隋〕に白飯と言ふ。）第三は名けて（四二）途盧檀那と爲し、（〔隋〕に斛飯と言ふ。）第四は名けて（四三）阿彌都檀那と爲す。（〔隋〕に甘露飯と言ふ。）復、一女有り。（四四）甘露味と名けたり。師子頰王最初の長子、閲頭檀、次いで王位を紹ぎ、還父の城に在りて、人民を治化して、福樂を受けたり。』

『時に、迦毗羅と、相去ること遠からずして、復、一城有り。名けて（四五）天臂城と曰ふ。彼の天臂城に、一釋種の豪貴の長者あり。名けて（四六）善覺と爲す。大富多財にして、諸の珍寶を積み、資産豐饒にして、威德を具足し、稱意自然にして、乏少する所無し。舍宅は、猶、毗沙門王の宮殿の如くにして、異ることとなし。彼の釋長者、八女を生めり。一を名け

【三九】Simhahanu シンハハヌ
【四〇】Suddhodana シユッドーダナ
【四一】Suklodana シュクローダナ
【四二】Dronodana ドローノーダナ
【四三】Amrtodana アムリトーダナ
【四四】Amrta アムリター
【四五】Devadaha デーヴァダハ
【四六】Suprabuddha スプラブッダ

て(四七)意となし、二を無比意と名け、三を大意と名け、四を無邊意と名け、五を髻意と名け、六を黒牛と名け、七を痩牛と名け、八を(四八)摩訶波闍波提と名く。（隋）に大慧と言ひ亦、梵天と云ふ。而して、此の梵天は、諸の女中に於て、年最も幼少なり。初生の日、諸の能相を爲す婆羅門師、其體を觀占して云く、「此の女嫁して、若し兒を生まば、必ず當に轉輪聖王と作り、四天下に王たるを得て、七寶自然に、千子具足し、乃至、鞭杖を用ひずして、民を治すべし」と。時に善覺の女、年漸く長成して、行嫁を欲するに堪へたり。白淨王、自國の境内に、一の釋氏有り。甚大の豪富にして、八女を生む、端政雙少れに、乃至、相師其女を占觀して、當に貴子を生むべしと（言へるを）聞き、時に、淨飯王、是の語を聞き已り、是の如き言を作しぬ、「我、今、當に、是の女を索めて、妃と作し、我が甘蔗轉輪聖王の苗裔をして絶えざらしむべし」と。』此は是律家に是の如き説を作す。又言く、大慧は是菩薩の母とは、此れ阿波陀那經文に依れり。又言く、輸頭檀王はこれ我の父、摩耶夫人はこれ我の母と。阿波陀那經に説くが如し。諸經文を檢するに、此義は是實なり。『時に、淨飯王、卽ち使人を遣はし、善覺大長者の家に往き詣りて、大慧を求索め、「我が爲に波闍波提と作さん。」波闍波提は（隋）に生活本と言ふ。爾の時、善覺、彼の使に語つて言く、「善使仁者、我が爲に、大王に是の言を諮啓せよ。我に八女有り。一の名を意と爲し、乃至、第八の名を大慧と爲す。何

【四七】末那(Manas)の譯

【四八】マハープラジャーパティー Mahāprajāpati

故に、大王、最小者を求むるか。大王、且く待つべし。我、七女を處分し竟りて、當に大王に大慧を與へて妃と作すべし」と。時に、淨飯王、復、更に、使を遣はし、長者に語つて言く、「我、今、汝が、一一、七女を嫁し訖りて、然る後に、大慧を取りて、妃と作すを待つを得ず。汝が八頭の女、我盡く皆取らん」と。時に善覺、釋大王に報じて言く「若し是の如くならば、大王の命に依りて、隨意に將て去れ。」時に淨飯王、即ち使人を遣はし、一時に八女を迎へ取りて、宮に向ひ、宮に至り已りて、即ち二女を納れて、自ら用て妃と爲す。其の二女とは、第一を名けて意となし、及び第八を大慧と名く。自餘の六女は、三弟に分與し、一人に二りを與へて、並に妻と妃とせり。時に淨飯王、意の姉妹を納れて、宮中に内れ、縦情嬉戲し、歡娛受樂し、諸の王法に依りて、四方を治化しぬ。』

上託兜率品第四の上

爾の時、護明菩薩大士、迦葉佛世尊の所に從ひ、禁戒を護持して、梵行清淨に、命終の後、正念にして兜率陀天に往生しぬ。何を以ての故に。或は衆生有り、命終の日、風刀に節節支解せられて、楚痛を受け、或は氣盡きんと欲して、喘息安からず。是の因緣を以て、大苦惱を受け、本心を失ひ、其の〔一〕宿行を忘れ、其の心を專正寂定にする能はず。菩薩は然らず。命終らんと欲する日、正心に思惟し、其前世の託生の處所に緣りて、是の如き等の希奇の法有り。又、諸菩薩に、復、一法有り。命終の後、必ず天上に生る。或は高く、或は下く、一天を定めず、而して、其の〔二〕一生補處の菩薩は、多く必ず〔三〕兜率陀天に往生し、心に歡喜を生じ、智慧滿足す。何を以ての故に。〔四〕在下の諸天は、多く放逸有り。上界の諸天は、禪定力多し。（在下の諸天は）、寂定輭弱なれば、生るるを求めず。樂を受くるが故に。（上界の諸天は）又、復、一切衆生の爲に、慈悲を生ぜざるが故に。

【一】宿行とは、宿世の行業。

【二】一生補處とは、一生を終れば、前聖の後を嗣ぎて、佛處を補ふ域にあるをいふ。

【三】兜率陀天（Tusita）。六欲天の中、第四位にあり、一生補處の菩薩は、必ずここにありて修行し、下生成佛の時を待つと信ぜらる。

【四】（原文）在下諸天、多有放逸、上界諸天、禪定力多、寂定輭弱、不求於生、以受樂故、又復不爲一切衆生生慈悲故。

るが故に。菩薩は然らず。但、諸の衆生を教化せんが爲の故に、兜率天に生る。下界の諸天は、聽法の爲の故に、兜率天に上りて法を聽受し、上界の諸天は、復、法の爲の故に、亦下つて兜率天に來つて、法を聽受する有り。

然るに、此の菩薩、亦、兜率に生る。其の兜率陀に居る所の諸天、即ち菩薩と呼び、名けて護明と爲す。是の因緣を以て、號して護明と爲す。諸天展轉して、護明と稱喚す。其の聲、上に徹して淨居天に至り、及び(五)阿迦膩吒天の頂に到る。時に、諸天等、皆同く唱へて言く、『護明菩薩、已に來つて兜率天中に生る』と。此の聲、下つて三十三天に至り、乃至、四天王天に達到し、幷に、復、諸の阿修羅宮に徹す。各共に相謂へらく、『護明菩薩、已に兜率陀天に上生するを得たり』と。極下は阿修羅宮に至り、最上は彼の阿迦膩吒に到るまで、皆悉く兜率陀天に來集し、護明菩薩の宮所に聚りて、法を聽受しぬ。護明菩薩、既に兜率に生るるや、其の兜率陀諸天の宮殿は、光明照耀して、自然に莊嚴し、更に、復、無量無邊の莊嚴を出す。皆護明菩薩の功德威神力に由るが故に。大梵天王、及び、大威德阿修羅等、皆悉く集つて、兜率天中に來り、前後に護明菩薩を圍繞す。復、無量無邊の衆生有り、兜率に託生して、最勝最妙の五欲を見るを得、心迷ひ忘失して、

【五】 阿迦膩吒(Akaniṣṭha)。色究竟天と譯す。色界十八天の最上に位す。

本行及び先業を憶はざるも、護明菩薩は、兜率天に生れ、設ひ最勝最妙の五欲を見れど、心迷惑せず、曾て忘失せず、本緣を正念し、乃至、諸衆生を化せんが爲の故に、兜率天に住し、天數壽命、滿四千歲、彼の諸天の爲に、說法敎化し、法相を顯示して、心をして歡喜せしむ。自餘の衆生は、彼の天に生るるも、或は往昔の不淸淨業を以ての故に、其中に生れて、或は、復、橫死して天壽を滿せず。護明菩薩は、過去修行の淸淨の業因と、復、諸の衆生を敎化せんが爲の故に、兜率天の所有の壽命を盡す。是の故に、稱言すらく、『希有、希有、不可思議なるかな。』又、復、不思議法、得て、護明菩薩、彼の天年を盡す』と。爾の時、護明菩薩大士、天壽滿ち已り、自然にして五衰の相を現ずる有り。何等をか五と爲す。一には頭上の華萎み、二には腋下より汗出で、三には衣裳垢膩し、四には身に威光を失ひ、五には本座を樂まず。時に兜率天、彼の護明の衰相現せるを見已りて、大音聲を出し、『嗚呼嗚呼』といひ、共に相謂つて言く、『苦しい哉、苦しい哉、護明菩薩、久しからずして、應に此の兜率天宮を捨離して、威神を退失すべし。我等、今は、何ぞ住するを得べき。』是の時、彼の處の兜率天衆、唯哭聲を聞くのみ。諸天の宮殿、聲響相接して、此の聲乃ち上の色界の頂〔六〕首陀會天に至る。〔七〕阿迦膩吒の諸天衆等、各相謂つて言く、『嗚呼哀しい哉。護明菩薩、今、已に、五種の衰相を

【六】首陀會天。淨居天と譯す。色界の頂上にある阿迦膩吒天

現じ、久しからずして墮落せん』と。兜率より下、修羅宮に及ぶまで、嗚呼の聲、徧滿して、處處唯『久しからずして、墮落せん』の音を聞くのみ。是の時、諸天、此の聲を聞き已り、阿迦膩吒・(八)他化自在・色欲、(九)(一〇)天等、竝に各下り來りて、兜率天に至り、夜摩諸天、四天王天、此の聲を聞き已りて、皆悉く集聚して、兜率天に上る。是の如くにして、乃至・(一一)龍王・(一二)夜叉・(一三)乾闥婆・(一四)阿修羅・(一五)迦樓羅・(一六)緊陀羅 (一七)摩睺羅伽 (一八)鳩槃茶・(一九)羅刹等、地居の諸天の、色欲界諸天の攝に屬するもの、皆悉く飛騰して、兜率天に上り、一處に集聚して、共に相謂つて言く、『我等、今護明天子を見るに、兜率より下りて、人間に生れんと欲す』と。其の兜率天の、衰相現ずる時、卽ち人間の數、十二年有り。時に、首陀會の一切の諸天、是の如き念を作す、『我、昔、曾て、補處の菩薩の、兜率天より下りて、人間に生るる時を見しが、此と異ること無かりき。』彼等諸天、今、護明菩薩大士の五衰の相現ぜるを見て、閻浮提に下るを必定して知り、卽ち大聲を

以下の五天又は六天の總稱。

【七】阿迦膩吒(Akaniṣṭha)は、色究竟天と譯す。色界十八天の最上に位す。

【八】他化自在天(Paranirmita)は、欲界六天の最上に位す。

【九】欲天に六あり、(一)四天王天(二)忉利天(三)夜摩天(Yama)(四)兜率天(五)化樂天(六)他化自在天。

【一〇】天(Deva)。

【一一】龍(Nāga)。

【一二】夜叉(Yakṣa)。

【一三】乾闥婆(Gandharva)。尋香神。

【一四】阿修羅(Asura)。

【一五】迦樓羅(Garuḍa)。金翅鳥。

【一六】緊陀羅(Kiṃnara)。疑神、人非人。

【一七】摩睺羅伽(Mahoraga)。大蟒神。以上を天龍八部といふ。

【一八】鳩槃茶(Kumbhāṇḍa)。人

發して、是の如き言を唱ふ。「人等、此(二〇)刹土を莊嚴せよ。菩薩大士、久しからずして彼の兜率天より來りて、此の處に下生せん。掃治せよ、掃治せよ。佛、下生せんと欲す。」是の時、此の間の(二一)閻浮提地に、五百の(二二)辟支佛有り、一林中に在りて、修道居住せり。時に、彼の五百の辟支佛、此の聲を聞き已りて、虛空に飛騰し、相共に(二三)波羅㮈城に往詣し、彼處に至り已りて、各各五種の神通を示現し、身を虛空に踊らし、煙焰を出し、次第に偈を說き、壽命を捨て(二四)般涅槃に入りぬ。爾の時、護明菩薩大士、彼の天衆、及び、梵・釋天・護世の諸龍、(二五)毗舍闍等を見、彼の衆を觀察し、心意泰然として、恐れず驚かず、疑はず畏れず、柔軟の語を出して、之に告げて言く、『汝、諸の仁者、各各當に知るべし、我の今の如く、此五種の衰相の出づる有るを見る時は、久しからずして兜率天より下りて、人間に生れん』と。時に梵釋等の諸天、報へて言く「尊者護明、尊の所見の如く、五種の衰相出現すれば、尊は必ず、久しからずして當に兜率を下りて、人間に生るべ

の精氣を噉ふ鬼。

【一九】羅刹（Rākṣasa）。

【二〇】刹は（Kṣetra）の略、國土の義。莊嚴はかざること。

【二一】閻浮提は（Jambu-dvīpa）の略、贍部洲の中、南方にある人間世界。もとは雪山の南方に位する印度をいへるなり。

【二二】辟支佛（Pratyeka-buddha）。獨覺と譯す、無師獨悟の聖者。

【二三】波羅㮈城（Vārāṇasī）。中印度にある古都、今のベナレス市。

【二四】般涅槃（Parinirvāṇa）。煩惱も肉身も一切滅盡する最後の涅槃。

【二五】毘舍闍（Piśāca）。噉人精氣鬼又は食血肉鬼と譯す。

【二六】本行願は、菩薩としての前生に於ける行法及び誓願。

し、尊よ、昔の(二六)本行願を憶念すべし』と。時に、彼の無量百千の天衆、是の語を發し已りて、徧體戰慄し、身毛皆竪ち、心大に驚怖し、十指の掌を合して、護明を頂禮す。

爾の時、護明、彼の衆に告げて言く、『我、今、必ず、下らんこと決定して疑ひ無し。時、今、已に至りぬ。是の故に、汝等、應に無常を念ずべし。當に未來恐怖の事を想ふべし。汝等善く自體の穢汙を觀ぜよ。(而るを)心に強く愛著し、是の諸欲の、共に相纏繞するを以て、生死中に於て、出離するを得ざるなり。是の如きの影形、甚だ厭惡すべし。汝等一切、十指の掌を合して、我が身體、及び諸の衆生を觀ぜよ。相與に未だ此法を免脫する能はず。是の故に、汝等、我が爲に愁ふる莫れ。我が爲に苦しむ莫れ。』彼の諸天言く、『尊者護明、唯、願くは、尊者、慈悲普く覆ひて、亦、更に其餘の諸心を生ずる莫れ。但、往昔の本誓因緣を念ぜよ。(二七)億劫の生身に、尊も、亦、曾て天人の業果を受けたり。往昔造す所の善業の因緣もて、彼の施せる善根法行を憶念して、諸の衆生に於て、慈悲心を生ぜよ』と。護明菩薩、諸天に報へて言く、「汝等當に知るべし、(二八)一切の衆生は、世間中、及び生處に於て、但、是有ならしめ、但、是生れしむるだも、分離を免れず。況んや、復、(大悲の爲に

願は理想、行は之に應ずる實行。

【二七】(原文)億劫生身、尊亦曾受天人業界、往昔所造善業因緣、憶念彼施善根法行、於諸衆生、生慈悲心。

下生する）我に（分離する）をや。又、諸の衆生は、皆悉く無常なり。恩愛別離、云何ぞ脱するを得んや』と。

是の時、諸天、復、更に白して言く、『希有なり、希有なり、尊者護明は、思議す可きこと難し。能く無常境界の中に於て、捨壽の時に臨み、心に辯才を得、一種の達解、尊者護明に別異有ることなし。』又、復、一切自餘の諸天、此の五種の衰相現ずるを見る時、心即ち憂愁し、正念を失へり。護明菩薩、復、更に諸天衆に告げて言く、『一生補處の諸菩薩等は、善根增長して、諸（二九）有の處を知り、功德中に於て、其の心を寂定にし、苦來りて逼切するも、諸惱を生せず、乃至、諸苦に隨つて行せず、能く一切諸衆生の邊に於て、大慈悲を起す』と。時に、諸天言く、『是の如し、是の如し。尊者護明よ。一切衆生、彼の人間に於て、諸の善根を種ゑて、此の天宮に生れ、此の處の福盡きて、還、即ち退下す』と。

護明菩薩、復、天に告げて言く『我、是を以ての故に、人天中、是の過失有るを見る。我、今、此より人間に下生し、諸世間の一切の衆生の爲に、諸苦を滅盡せん。』是の時、彼の中に一天女有り、護明菩薩に愛樂戀著し、復、更に、別を一天女に告げて言く、『我等、閻浮提中に至りて我が（三〇）大

【二八】（原文）一切衆生、於世間中、及以生處、但令是有、但令是生、不免分離、況復於我。

【二九】有とは存在。存在は迷界なれば、之に三種あり。三有又は三界といふ。

【三〇】大家とは檀那といはんが如し。

家、護明菩薩の、何處に於て生るるかを觀るべし。』彼の天女言く、『我、今、亦、閻浮提を樂む。何を以ての故に。我の大家、彼處に生れんと欲するが故に、我も、亦、彼の間に在らんを願ふ』と。時に、二天女、復、相謂つて言く、『我も、亦、此の大家の爲の故にあらずして、往いて彼に生れんを願ふ。何を以ての故に。我が此の大家、閻浮提に往けば、則ち無量無邊の衆生有りて、諸の善根を種ゑ、中に於て信受して、敎化を行じ、復、無量無邊の衆生有りて、諸の福業を修め、此處に來生すればなり』と。

巻の第六

上託兜率品第四の下

爾の時、兜率天衆の中に、一天子有り、名けて金團と曰ふ。往昔已來、數曾て下りて閻浮提の地に到る。護明知り已りて、金團に告げて言く、『金團天子、汝、數下りて閻浮提中に至れり。汝、應に彼の城邑・聚落・諸王の種族を知るべし。㈠一生菩薩は、當に何れの家にか生るべき。』金團天子、報へて言く、『尊者、我、甚だ之を知れり。尊者、善く聽けよ。我、今、應に說くべし。』護明言く、『善し。』金團說いて言く、『此の三千大千世界に、一菩提道場の處所有り。彼の閻浮㈡摩伽陀國境界の內に在り。是れ、昔、諸王、阿耨多羅三藐三菩提を成せる處なり。尊者護明よ。彼の中に河有り、名けて㈢恒河と爲す。其の河の南岸に、一山有り。是、舊と仙人の居停せし處、然して其の彼處を㈣毗闍羅と名け、亦た㈤般荼婆・㈥毗富羅・㈦耆闍崛山

【一】一生は一生補處の略、一生の後に佛處を補ひて、下生成佛するの謂。
【二】摩伽陀國(Magadha)。中印度の境。
【三】恆河(Gaṅgā)
【四】Vijala ?
【五】Paṇḍava、黄白色と譯す。
【六】Vipula
【七】Gṛdhrakūṭa(巴、Gijjhakūṭa) 靈鷲と譯す。

と名く。共に相圍繞して、以て眷屬を爲す。彼の山や、牢固にして、其の色、猶綠摩尼寶の如し。中に聚落有り、名けて山饒と曰ふ。山を去る遠からずして、一大城有り、名けて（八）王舍と爲す。其の城に、往昔、一王仙有りて、優荼波梨と名けぬ。種姓ありて以來、常に王治を爲せり。妃は是れ善見大王の族にして、大夫人たり。其の子王と爲り、婆奚迦と名く。今、現に、摩伽陀國に治在して、彼の優荼王仙の後を繼ぐ。尊者護明、閻浮に往生せば、彼の王の爲に長子と作るに堪へん』と。護明菩薩、金團に報へて言く、『此の理有りと雖も、但、彼の王種の父母不淨にして、其の城處の邊、地勢堆阜、高下平かならず、純ら是れ溝坑・土沙・礫石・荊棘・諸草のみにして、泉池・諸河・流水・樹木・苑囿・華果・園林有ること少なし。是の故に、汝、今、更に、別に、餘の刹利種を觀ずべし。』金團天子、復、是の言を作すらく、『尊者護明、彼の（九）迦尸國・波羅柰城・善光王仙に子有り、名けて善丈夫王と爲す。彼の王は、尊者の爲に、父と作るに堪へたり。』護明菩薩、金團に報へて言く、『此の理、然りと雖も、但、迦尸國、善丈夫王に、四種の法有りて、邪見に染著す。是の故に、汝、今、更に、別に、其の餘の王種の、我が生處に堪へたるを觀ずべし。』金團天子、復、是の言を作すらく、『尊者護明、（一〇）憍薩羅國（一一）舍婆提城

【八】王舍城は Râjagṛha の譯。五山に圍まるるを以て或は五山城ともいふ。
【九】Kâśî
【一〇】Kosala
【一一】舍婆提(Śrâvastî)。或は舍衞城に作る。

に王有り、岐羅耶と名けぬ。是れ憍薩羅大國の主、其の身巨力にして、多く人民有り。尊者、彼の王の爲に子と作るに堪へたり。』護明菩薩、金團に報へて言く、『此の理、然りと雖も、但、彼の國主、憍薩羅王は、是れ(一二)摩登伽の苗裔種類、父母不淨雜穢にして生れ、兼て上世より來た、是、王種に非ず。小心下賤にして、意氣高からず。又、其の家中の資財薄少、七寶の金・銀・瑠璃・瑪瑙・眞珠有りと雖も、具足する能はず。是の故に、汝、今、別に、更に、我が爲に、諸の刹利の、我が生處に堪ふるを觀ぜよ』と。

金團天子、復た、是の言を作すらく、『尊者護明、彼の(一三)跋蹉國・(一四)拘睒彌城王を千勝と名く。其の王に子有り、名けて百勝と爲す。彼の王、多く、象馬七珍を有して、四兵具足す。尊者、彼の王の爲に、子と作るに堪へん』と。護明菩薩、金團に報へて言く、『此の理、然りと雖も、但、跋蹉王の母、賢良ならず。他の丈夫に從つて、是の子を生めり。正しき王種にあらず。然るに、其の彼の王も、亦、長く、斷見の事を宣說す。是の故に、汝、更に、餘の刹利を觀ぜよ。我、何れの處にか生れん。』

金團天子、復、此の言を作すらく、『此の金剛國に一城邑有りて、(一五)毗耶離と名く。穀米豐饒

【一二】摩登伽(Mātaṅga)。賤種の一。或は旃陀羅族の一種ともせらる。屠膾を業とす。
【一三】Vatsa
【一四】Kauśāmbī
【一五】Vaiśālī

にして、饑饉有ることなし、人民安樂、國土莊嚴にして、譬へば天宮の如く、一種も異ることなし。彼の城の國王、樹王の子、種姓清淨にして、穢嫌すべき無し。彼の國の王宮庫藏の內、多く金銀珍寶等の物有り。一切具足して、乏少する所無し。尊者、彼の王の爲に、子と作るに堪へん。』護明菩薩、金團に報へて言く、『此の理、實に然り。毗耶離主は、上世已來、眞に是れ王種なり。但、彼の國人、心性剛强、各各自ら用ひ、我は是れ王なりと稱し、憍慢熾盛に、放逸自ら高うして、其の餘と共にせず。異類相雜り、又、尊卑大小の禮節無し。自ら我解せりと言ひ、自ら我知れりと言ふ。復、王有りと雖も、承事を肯せず、自法は是他に從つて求めずと云ふ。是の故に、汝、今、更に、餘の處の刹利王種を觀ぜよ。我、何れの家にか生れん。』金團天子、復、是の言を作すらく、『尊者護明、彼の〔一六〕摩波槃提國に〔一七〕優闍耶那城有り。〔一八〕明燈王の子、名けて滿足と爲すもの、彼の城に居住す。其の王、身體大にして、威力有り、諸の左右多く、能く一切の敵國怨家を破れり。尊者、彼の王の爲に子と爲るに堪へん。』護明菩薩、金團に報へて言く、『此の理、然りと雖も、但、彼の國王に、執す可き行、一法だも有ることなし。嚴酷暴惡にして、因果を信ぜず。是の故に、汝、今、更に、別に、餘の王種姓の、我が生處に任ふるを觀ずべし。』金團天子、復、是

【一六】 Mahāvantī
【一七】 Ujjayinī
【一八】 Pradyota

の言を作す、『尊者護明、彼の閻浮提、(一九)摩頭羅城に、一大王有り。名けて善臂と曰へり。其の子を稱して自在健將と爲す。尊者、彼の王の爲に子と作るに堪へん。』護明菩薩、金團に報へて言く、『此の理、然りと雖も、但、彼の國王は、邪見の家の生なり。是の如きを以ての故に、一生補處の菩薩大士は、彼の邪見の家に生るるを得ず。是の故に、汝、今、更に、別に、餘の王の種姓を觀ぜよ。我、何れの處にか生れん。』金團天子、復、是の言を作すらく、『尊者護明、此の(二〇)白象城の(二一)般紐王種は、勇健威猛、憙ぶ可く、端正、世に雙び有ること無し。能く強隣一切の怨敵を破れり。尊者、彼の王の爲に、子と作るに堪へたり』と。護明菩薩、金團に報じて言く、『此の理、然りと雖も、但、般紐王は種姓清淨なれど、彼の雜類の爲に、擾亂せられたり。何を以ての故に。彼の王の長子を、(二二)踰地師絺羅と名く。是れ梵天法王の子。第二を、名けて、(二三)毗摩斯那と爲す。風神王の子。第三を名けて(二四)頞純那と爲す。是れ帝釋の子。復、二子有り。別母より生る。一を(二五)那拘羅と名け、二を(二六)娑呵提婆と名く。此の二子は、是れ星宿天阿輸那の子なり。是の故に、汝、今、更に、別に、餘の王

【一九】Mathurā（マツラー）
【二〇】Hastinapura（ハスティナプラ）
【二一】Pandu（パンヅ）
【二二】Yudhiṣṭhira（ユディシュティラ）
【二三】Bhīmasena（ビーマセーナ）
【二四】Arjuna（アルジュナ）
【二五】Nakula（ナクラ）
【二六】Sahadeva（サハデーヴ）
これ等は般紐王の子にして、大婆羅多譚の中樞を爲す英雄。就中、中子頞純那は、理想的武士の典型にして、後世神化せらる。

種姓を觀ずべし。我、何れの處にか生れん。』

金剛天子、復、是の言を作すらく、『尊者護明、彼の閻浮提、(三七)寐洟羅城の寐洟羅種、王を善友と名く。象馬・車乘・牛羊多饒にして、一切の資生、悉く皆具足し、無量の衆寶もて、庫藏豐かに盈ち、金銀眞珠、未だ嘗て乏少せず。彼の王善友、常に樂んで法行の事を勤修す。尊者、彼の王の爲に、子と作るに堪へたり』と。護明菩薩、金剛に報へて言く、『此の理、實に然り。其の善友王に、是の如き具足の法有りと雖も、但、彼の國王、年老衰邁し、更に復、國務を營理する能はず。又、其の王、今、諸子多饒なり。是の故に、汝、今、更に、別に、餘の王種類を觀ずべし。我、何れの處にか生れん。』

金剛天子、復、是の言を作すらく、『是等は、並に是れ中國の王なり。復、更に、別に、邊地の國に、邪見の諸王有り。毗紐海洲に、一國主有り。婆羅門種なり。治化、毗紐の上に在り。月支王と名く。父母の種姓、淸淨具足し、兼ねて祭祀諸天の法を解し、四毗陀論、皆悉く了知す。尊者、彼の王の爲に、子と作るに堪へたり。』護明菩薩、金剛に報へて言く、『此の理、然りと雖も、但、我が下生、出家成道は、要らず須らく刹利たるべし。彼の婆羅門の家に生るるを欲せず。是の故に、汝、今、唯、刹利を覓めよ。我、何れの處にか生れん。』

【三七】Mithila

金剛天子、復、是の言を作すらく、『我、閻浮一切の諸國に於て、處處の聚落の處處の諸王として、處處の村舍、處處の城邑、處處の刹利として、各諸城に住せり。而して是の刹利として、種種の業を造れり。我、尊者の爲に、經歴せし已來、無量の疲極、苦惱を生じ、心迷ひ意亂れて、更に、復、餘の處を觀看る能はず。設し、復、觀察するも、口に、亦、是の如く宣說する能はず。』護明菩薩、金剛に報へて言く、『實に汝の語の如し　然れども、汝、要らず須らく我が爲に、一の刹帝利、清淨の家の、我が生處に堪ふるを選び覓むべし。』金剛天子、復、是の言を作すらく、『我、尊者の爲に、苦惱愁憂し、處處觀察して、忽然として一刹利の家を忘失しぬ。』護明菩薩、金剛に問うて言く、『其の名、何とか言ふ。』金剛白して言はく、『一刹利有り。元本より已來、大衆に從つて、平量安立し、世世轉輪聖王の種、乃至、(二八)甘蔗の苗裔已來、子孫相承けて、彼の(二九)迦毗羅婆蘇都に在り。釋種の生む所、其の王の名を(三〇)師子頰王と爲し、其の子の名を(三一)輸頭檀王と爲す。一切世間の天人の中に、大名稱有り。尊者、彼の王の爲に、子と作るに堪へたり』と。護明菩薩、金剛に報へて言く、『善い哉、善い哉　金剛天子、汝、善く、諸王家の種を觀察したり。我も、亦、此の家に在つて生れんを念ふ。我、今、深心は、汝の說く所の如し。

【二八】Ikṣvāku
【二九】Kapilavastu
【三〇】Siṁhahanu
【三一】Śuddhodana　淨飯或は白淨と譯す。

金剛、當に知るべし、我、定めて、往いて彼の家に生れて子と作らん。金剛、往昔、一切補處の菩薩の託する所の家は、六十種の功德ありて、具足して彼の家に滿てり。何等か六十なる。彼の家、本來清淨の好種なり(一)。一切の諸聖、恒に彼の家を觀ず(二)。彼の家、一切の惡事を行せず(三)。彼の家の所生は、悉く皆清淨なり(四)。彼の家の種姓は、眞正無雜なり(五)。彼の家の體胤は、嫡嫡相承けて、斷絕有るなし(六)。彼の家は、昔より王種を斷せず(七)。彼の家に生るゝ一切の諸王は、皆是往昔、深く善根を種ゑたり(八)。彼の家に生るゝ者は、常に諸聖の爲に讃歎せらる(九)。彼の家に生るゝ者は、大威德を具ふ(十)。彼の家、多く端正の婦女有り(十一)。彼の家、多く智慧ある男兒有り(十二)。彼の家の所生は、心性調順なり(十三)。彼の家の所生は、戲調有ること無し(十四)。彼の家に生るゝ者は、畏る可き所無し(十五)。彼の家に生るゝ者は、曾て怯弱ならず(十六)。彼の家に生るゝ者は、聰明多智なり(十七)。彼の家に生るゝ者は、多く工巧を解す(十八)。彼の家に生るゝ者は、皆過罪を畏る(十九)。彼の家の所生は、世間の工巧と雜合せず。亦、貪財以て活命を爲さず(二十)。彼の家の所生は、常に朋友を存す(廿一)。彼の家の所生は、諸蟲・諸獸を殺害して、以て自ら活命せず(廿二)。彼の家の種姓は、恒に恩義を知る(廿三)。彼の家の種姓は、能く苦行を修す(廿四)。彼の家の所生は、他に隨つて轉せず(廿五)。彼の家の所生は、曾て悵を懷かず(廿六)。彼の家の所生は、癡心を結

ばず(廿七)。彼の家に生るる者は、怖畏を以て他に隨順せず(廿八)。彼の家に生るる者は、他を殺害するを畏る(廿九)。彼の家に生るる者は、罪惡有ること無し(三十)。彼の家に生るる者は、乞食して得ること多し(卅一)。彼の家に至る者は、空しく發遣すること無し(卅二)。彼の家剛強にして、降伏すべきこと難し(卅三)。彼の家の法則は、恒に禮律に出づ(卅四)。彼の家は常に樂んで衆生に布施す(卅五)。彼の家、因果勤功を建立す(卅六)。彼の家の所生は、世間に勇健なり(卅七)。彼の家は恒常に一切の諸仙諸聖を供養す(卅八)。彼の家は恒常に神靈を供養す(卅九)。彼の家は恒常に諸天を供養す(四十)。彼の家は恒常に大人を供養す(四十一)。彼の家は歷世、怨讎有ることなし(四十二)。彼の家の名聲は威十方に振ふ(四十三)。彼の家は、一切諸家に最たり(四十四)。彼の家に生るる者は、上世已來、悉く是れ聖種なり(四十五)。彼の家に生るる者は、聖種中に於て、最も第一たり(四十六)。彼の家に生るる者は、恒に是れ轉輪聖王の種なり(四十七)。彼の家に生るる者は、是大威德の種姓なり(四十八)。彼の家に生るる者は、多く無量の眷屬有りて圍繞す(四十九)。彼の家に生るる者は、有らゆる眷屬も破壞す可らず(五十)。彼の家に生るる者は、有ゆる眷屬、一切人に勝る(五十一)。彼の家に生るる者は、悉く母に孝養す(五十二)。彼の家に生るる者は、皆父に孝順なり(五十三)。彼の家に生るる者は、悉く皆、一切の沙門を供養す(五十四)。彼の家に生るる者は、悉皆諸の婆羅門を供養す(五十五)。彼の家に生るる者は、

豐饒の五穀もて、倉庫盈ち溢る（五十六）。彼の家に生るる者は、多く金・銀・硨磲・碼碯有り、一切の資財、乏少する所なし（五十七）。彼の家に生るる者は、多く奴婢・象馬・牛羊を畜へて、一切具足す（五十八）。彼の家に生るる者は、曾て他に事へず（五十九）。彼の家に生るる者は、是の如き一切の衆事具足して、世間中に乏少する所無し（六十）。』

『金剛天子、凡そ是の一生補處の菩薩の、母胎に處るや、彼の母、若し、三十二種の相ありて、具足せば、乃ち能く菩薩の胎に在るを受くるに堪ふ。何等を名けて、三十二事と爲すか。一に、彼の母人は正德にして生る。二に、彼の母人は支體具足す。三に、彼の母人は德行缺くるなし。四に、彼の母人は所生、處を得。五に、彼の母人は行を爲すこと庶幾し。六に、彼の母人は種類淸淨なり。七に、彼の母人は端正無比なり。八に、彼の母人は名字德稱あり。九に、彼の母人、身體形容、上下相稱ふ。十に、彼の母人は未だ曾て產生せず。十一に、彼の母は大功德有り。十二に、彼の母は恆に樂事を念ふ。十三に、彼の母の心、常に一切の善事に隨順す。十四に、彼の母は邪心有ること無し。十五に、彼の母は身口及び心、自然に調伏す。十六に、彼の母は心に畏るる所無し。十七に、彼の母は多聞（三）總持なり。十八に、彼の母は極めて女工に巧なり。十九に、彼の母は心に諂曲無し。二十に、彼の

【三】總持とは無量の義理を持して、散失せざること。

母は心に誑詐無し。二十一に、彼の母人は心に瞋恚有ること無し。二十二に、彼の母人は心に嫉妬有ること無し。二十三に、彼の母人は心に慳悋有ること無し。二十四に、彼の母人は心に急速有ること無し。二十五に、彼の母人の心は廻轉すべきこと難し。二十六に、彼の母人の體に、至德の相有り。二十七に、彼の母人の心は能く忍辱を懷く。二十八に、彼の母人は心に慚有り愧有り。二十九に、彼の母人の行は婬・怒・癡薄し。三十に、彼の母人の行に女家の過なし。三十一に、彼の母人は行、恭順にして夫に向ふ。三十二に、彼の母の出生は、一切の諸德、一切の諸行、皆悉く具足す。是の如き母人は、乃ち能く一生補處の後身の菩薩を受くるに堪ふ。菩薩、母胎に入らんと欲するの時、鬼宿日を取りて、然る後に、乃ち母胎中に入る。其の一生補處の菩薩を受くる胎母たる已前、其の母、必ず、須く八關齋を受け。然る後に、菩薩、彼の胎に入るべし』と。

護明菩薩、復、是の言を作すらく、『我が今の受有は、世間一切の錢財、五欲、快樂の爲の故に、人間に下りて、此の一生を受けず。唯、諸衆生を安樂にせんと欲するが故、苦惱の諸衆生を哀愍するが故なり。』

爾の時、衆中に一天女有り。其餘の一天女に告げて言く、『我等の大家護明菩薩は、必ず人間に下らん。我等の此の宮、護明菩薩大士に違離す。云何ぞ我が心をして此の處を樂ましめん』と。

第二の天女、卽ち之に報へて言く、『奈何、奈何、我等、今共に何事を作してか、我等をして人間に往きて、善く彼の家、護明菩薩所生の處を觀るを得しめん。』第三に、復、一天女有りて、言く、『願くは、我等、今、此の天壽を捨て、我等をして、彼の處に往きて、生を受けしめん。何を以ての故に。我等も、亦、彼の處に至りて我が護明菩薩と共に、同じく生れんを願ふ。』第四に、復、一天女有りて言く、『汝等、相共に悔ゆる心を生ずる莫れ。何を以ての故に。我等の大家護明菩薩すら、尙ほ天壽を捨てて人間に生るるを。況んや、復、我等をや』と。更に、復、一天女有りて、稱言すらく、『尊者護明、今、はや閻浮提に下生したまふ。唯、願くは、大士、我等を忘るる莫れ。』時に、護明菩薩、彼等諸天女に告げて言く、『汝等、大に苦惱を生ずる莫れ。我、前に、已に、汝等の爲に、一切の有處、皆悉く無常なり。芭蕉の莖の如く、堅實有ること無し。物を借りて用ふるが如く、必ず他に還す可し。我の己が有に非るは、猶、陽焰・幻化・水泡の如し。一切の有處は、皆是れ誑惑なり。愚癡の人のみ、謂ひて常生と言ふ』と。

爾の時、衆中に、一天子有り。悵怏として心愁へ、口に、復唱言すらく、『此菩薩の所說を觀ずるに、生處は無常不眞なり。嗚哉、我等、何ぞ假りに此生處を樂しむべき。我等、今、護明菩薩を見るに、是の如き功德具足の體もて、兜率天に生れ、此の兜率宮や、是の如きの福聚、是の

如きの端正、是の如きの微妙、是の如きの莊嚴あるに、護明菩薩・捨離して下生す。咄哉、我等、云何ぞ、獨、此の無常の境に在らんや。』爾の時、復、第二の天子有り。彼の第一の初天子に答へて言く、『善い哉、天子・是の如く、是の如し。汝の說く所の如し』と。偈を作して言く、

『我が此の護明大菩薩、往昔諸有の中に有りて、常に捨てたり極めて愛せる婦・兒、奴僕・象・馬・財・珍寶を。

或は復割截せり身骨・肉、頭・目・髓腦・血・皮膚を。

是の如く求索むるに悉く違はず。或は百或は千皆施與せり。』

爾の時、衆中に、復、天子有り、偈を說いて言く、

『咄哉我等の身。此の天宮に在つて生れ、常に恐る今當に墮つべきを。

人の死を怖るるも亦然り。

何ぞ有らん生法の中に、福業の盡きざる者や、諸の是の無常の界、衆生は悉く命終す。』

護明菩薩、諸天に告げて言く、『汝等天人・須く知るべし。一切世間は、別離生死を本と爲す。汝等、我が爲に、苦み憂愁すること莫れ。何を以ての故に。我、往昔より來かた、凡業を造らず。今、我をして、久しく世間に任せしめんと欲するも、終に得可からず。我、過去の佛法僧の邊に

於て、諸の善業を種ゑ、常に道心を發して、大願を乞ひ求め、今、善報を得て、當に菩提を成ずべし。汝、應に歡喜すべし。何ぞ苦惱するを得ん。』時に、彼の諸天、是の語を聞已りて、各相謂つて言く、『汝等諸天、護明菩薩大士を熟視せよ。此の護明菩薩大士、今は久しからずして人間に下らん』と。口に、復、唱言すらく、『尊者護明、尊者久しからずして人間に生れ、此の兜率宮の有らゆる威德、及び諸の天福は、尊悉く將て去り、尊の人間に受くるは、末後の有身なり。我等諸天、云何ぞ奉事せん。』護明菩薩、彼の一切の諸天衆に告げて言く、『我が前に生ぜる所の五種の衰相は、汝等（が爲に）、復、無常の因緣を說けり。是の如きの法門、汝等常に繫念して心に在るべし。忘失せしむる勿れ。我、今、此處より人間に下生して、當に阿耨多羅三藐三菩提を得て、無上最妙の法輪を轉ずべし。汝等諸天、各人間に下りて、身を受けんことを願ふ可し。彼處に生じ已りて、汝等。當に一切の諸の、煩惱苦を解脫するを得べし』と。

爾の時、護明菩薩、生家を觀じ已る時、兜率陀に一天宮有り、名けて高幢と曰ふ。縱廣正に等しく六十由旬なり。菩薩、時時、彼の宮中に上りて、兜率天の爲に、法要を說けり。是の時、菩薩、彼の宮に上りて、安坐し訖已り、兜率の諸天子に告げて言く、『汝等諸天、應に來つて聚集すべし。我が身久しからずして人間に下らん。我、今、一法明門の、入諸法相方便門と名くるを說き、

留めて汝を教化する最後ならんを欲す。汝等、我を憶念するが故に、汝等、若し、此の法門を聞かば、應に歡喜を生ずべし』と。時に兜率陀の諸天大衆、菩薩の、此の如き語を聞き已り、及び天の玉女、一切の眷屬、皆來りて聚集し、彼の宮に上る。護明菩薩、彼天衆の聚會、畢るを見已りて、説法を爲さんと欲し、即時に、更に、一天宮を化作して、彼の高幢の本、天宮の上に在り。高大廣闊にして、四天下を覆ひ、喜ぶ可きの微妙、端正雙少し。威德巍巍として、衆寶もて裝飾し、一切欲界天の宮殿中、匹喩するものなし。色界の諸天、彼の化殿を見、自らの宮殿に於て、是の如き心、塚墓の如き想を生じぬ。

時に、護明菩薩、已に過去に於て、實行を行ひ、諸の善根を種ゑ、福聚を成就し、功德具足して、成せる所の莊嚴の師子の高座に、昇上りて坐しぬ。護明菩薩、彼の師子高座の上に在り。無量の諸寶の莊嚴間錯し、無量無邊の種種の天衣を、彼の座に敷き、種種の妙香もて、彼の座を薰じ、無量無邊の寶爐に、香を燒き、種種微妙の香花を出して、其の地上に散ず。高座の周帀に、諸の珍寶有り、百千萬億の莊嚴、光を放ちて、彼の宮を顯耀す。彼の宮の上下、寶網羅覆し、彼の羅網に、多く金鈴を懸け、彼の諸の金鈴、聲を出すこと微妙なり。彼の大寶宮、復、無量種種の光明を出し、彼の寶宮殿や、千萬の旛蓋、種種の妙色、上に映覆す。彼の大宮殿、諸の旒蘇

を垂れ、無量無邊の百千萬億の諸天玉女、各、種種七寶の音聲を持つて、樂を作して讃歎し、菩薩の往昔の無量無邊の功德を說きぬ。護世の〔三三〕四王、百千萬億、左右に在りて、彼の宮を守護し、千萬の〔三四〕帝釋、彼の宮を禮拜し、千萬の梵天、彼宮を恭敬す。又、諸の菩薩、百千萬億那由他衆、彼の宮を護持し、十方の諸佛、萬億那由他數有りて、彼の宮を護念す。百千萬億那由他劫に、修行する所の諸〔三五〕波羅蜜の、福報成就し、因緣具足して、日夜增長し、無量の功德、悉く皆莊嚴すること、是の如く、是の如く、說き難く、說き難し。菩薩、彼の大微妙師子高座の上に坐し、一切の諸天衆に告げて言く、『汝等諸天、今、此の一百八法明門は、一生補處の菩薩大士の、兜率宮に在り、下つて人間に託生せんと欲する者、天衆の前に於て、要らず須く此の一百八法明門を宣揚して說き、諸天に留與して、以て憶念と作し、然る後に下生すべし。汝等諸天、今、至心に諦聽し、諦受すべし。我、今、之を說かん。一百八の法明門とは何ぞや。正信は是れ法明門、堅牢の心を破らざるが故に。淨心は是れ法明門、濁穢なきが故に。歡喜は是れ法明門、安隱の心なるが故に。愛樂は是れ法明門、心を清淨ならしむるが故に。身行淨行は是れ法明門、〔三六〕三業

【三三】四王とは、四天王なり。
【三四】帝釋は欲界忉利天の主なり。梵天は色界諸天に住す。
【三五】波羅蜜（Pāramitā）。到彼岸又は度と譯す。吾人を運載して彼岸に到らしむる六件の行法をいふ。
【三六】身・口・意を三業といふ。身の三業は、殺生・偸盜・邪婬

淨きが故に。口行淨行は是れ法明門、(三七)四惡を斷ずるが故に。意行淨行は是れ法明門、(三八)三毒を斷ずるが故に。(三九)念佛は是れ法明門、觀佛淸淨なるが故に。念法は是れ法明門、觀法淸淨なるが故に。念僧は是れ法明門、得道堅牢なるが故に。念施は是れ法明門、果報を望まざるが故に。念戒は是れ法明門、一切の願具足するが故に。念天は是れ法明門、廣大心を發すが故に。

(四〇)慈は是れ法明門、一切生處の善根攝勝るが故に。悲は是れ法明門、衆生を殺害せざるが故に。喜は是れ法明門、一切不喜の事を捨つるが故に。捨は是れ法明門、五欲を厭離するが故に。(四一)無常觀は是れ法明門、三界の欲を觀ずるが故に。苦觀は是れ法明門、一切の願を斷ずるが故に。無我觀は是れ法明門、我に染著せざるが故に。寂定觀は是れ法明門、心意を擾亂せざるが故に。慚愧は是れ法明門、內心寂定なるが故に。羞恥は是れ法明門、外惡滅するが故に。實は是れ法明門、天・人を誑らざるが故に。眞は是れ法明門、自身を誑らざるが故に。法行は是れ法明門、法行に隨順するが故に。三歸は是れ法明門、三惡道を淨くするが故に。知恩は是れ法明門、善根を捨てざるが故に。報恩は是れ法明門、他を欺負せざるが故に。不自欺は是れ法明門、自ら譽めざるが

【三七】四惡は、妄語・兩舌・惡口・綺語。
【三八】三毒は貪欲・瞋恚・愚癡。
【三九】佛・法・僧・施・戒・天を念ずるを六念といふ。
【四〇】慈・悲・喜・捨を四無量心といふ。
【四一】無常・苦・無我・寂定を四法印といふ。

故に。爲衆生は是れ法明門、他を毀呰せざるが故に。爲法は是れ法明門、如法に行ずるが故に。知時は是れ法明門、言說を輕んぜざるが故に。攝我慢は是れ法明門、智慧滿足するが故に。不生惡心は是れ法明門、自ら護り他を護るが故に。無障礙は是れ法明門、心に疑惑なきが故に。信解は是れ法明門、第一義を決了するが故に。不淨觀は是れ法明門、欲染心を捨つるが故に。不諍鬪は是れ法明門、瞋諍を斷ずるが故に。不癡は是れ法明門、殺生を斷ずるが故に。樂法義は是れ法明門、法義を求むるが故に。愛法明は是れ法明門、法明を得るが故に。求多聞は是れ法明門、法相を正觀するが故に。正方便は是れ法明門、正行を具するが故に。知名色は是れ法明門、諸の障礙を除くが故に。除因見は是れ法明門、解脫を得るが故に。無怨親心は是れ法明門、怨親中に於て平等を生ずるが故に。陰方便は是れ法明門、諸苦を知るが故に。諸大平等は是れ法明門、一切和合の法を斷ずるが故に。諸入は是れ法明門、正道を修するが故に。無生忍は是れ法明門、滅諦を證するが故に。[四三]身念處は是れ法明門、諸法寂靜の故に。受念處は是れ法明門、一切諸受を斷ずるが故に。心念處は是れ法明門、心を觀ずること幻化の如きが故に。法念處は是れ法明門、智慧翳無きが故に。四正勤は是れ法明門、一切の惡を斷じて諸善を成ずるが故に。四如意足は是れ法明門、身心輕きが故に。

【四三】身・受・心・法の念處を四念處といふ。

〔四三〕信根は是れ法明門、他語に隨はざるが故に。精進根は是れ法明門、善く諸智を得るが故に。念根は是れ法明門、善く諸業を作すが故に。定根は是れ法明門、心清淨なるが故に。慧根は是れ法明門、諸法を現見するが故に。〔四四〕信力は是れ法明門、諸魔力を過ぐるが故に。精進力は是れ法明門、不退轉の故に。念力は是れ法明門、他と共ならざるが故に。定力は是れ法明門、一切の念を斷ずるが故に。慧力は是れ法明門、二邊を離るるが故に。〔四五〕念覺分は是れ法明門、如諸法智の故に。擇法覺分は是れ法明門、一切諸法を照明するが故に。精進覺分は是れ法明門、善知覺の故に。喜覺分は是れ法明門、諸定を得るが故に。除覺分は是れ法明門、所作已に辦ずるが故に。定覺分は是れ法明門、一切法の平等を知るが故に。捨覺分は是れ法明門、一切の生を厭離するが故に。〔四六〕正見は是れ法明門、漏盡の聖道を得るが故に。正分別は是れ法明門、一切の分別を斷じて分別無きが故に。正語は是れ法明門、一切の名字音聲語言、知ること響の如きが故に。正業は是れ法明門、業無く報無きが故に。正命は是れ法明門、一切の惡道を除滅するが故に。正行は是れ法明門、彼岸に到るが故に。正念は是れ法明門、一切法を思念せざるが

【四三】信根以下の五を五根といふ。

【四四】信力以下の五を五力といふ。

【四五】念覺分以下の七を七覺分又は七覺支といふ。

【四六】正見以下の八を八正道といふ。以上の四念處・四正勤・四如意足・五根・五力・七覺分・八正道を三十七助道品といふ。

故に。正定は是れ法明門、無散亂の三昧を得るが故に。菩提心は是れ法明門、三寶を斷せざるが故に。依倚は是れ法明門、小乘を樂まざるが故に。正信は是れ法明門、最勝の佛法を得るが故に。增進は是れ法明門、一切の諸善根法を成就するが故に。〔四七〕檀度は是れ法明門、念念相好を成就し、佛土を莊嚴し、慳貪の諸衆生を教化するが故に。戒度は是れ法明門、惡道の諸難を遠離して、破戒の諸衆生を教化するが故に。忍度は此れ法明門、一切の瞋恚・我慢・諂曲・調戲を捨てて、是の如き諸の惡衆生を教化するが故に。精進度は是れ法明門、悉く一切の諸善法を得て、懈怠の諸衆生を教化するが故に。禪度は是れ法明門・一切の禪定及び諸神通を成就して、散亂の諸衆生を教化するが故に。智度は是れ法明門、無明の黑暗及び著諸見を斷じて、愚癡の諸衆生を教化するが故に。方便は是れ法明門、衆生所見の威儀に隨つて教化を示現し、一切諸佛法を成就するが故に。〔四八〕四攝法は是れ法明門、一切の衆生を攝受し、菩提を得已りて、一切衆生に法を施すが故に。教化衆生は是れ法明門、自ら受樂せず、疲倦せざるが故に。攝受正法は是れ法明門、一切衆生の諸煩惱を斷ずるが故に。福聚は是れ法明門、一切諸衆生を利益するが故に。修禪は是れ法明門、十力を滿足するが故に。寂定は是れ法明門、如來を成就して、三昧具足するが故に。

【四七】 檀とは檀那（一二三）即ち施なり。以下の六を六度といふ。
【四八】 四攝法とは布施・愛語・利益・同事なり。

慧見は是れ法明門、智慧成就し滿足するが故に。入無礙辯は是れ法明門、法眼の成就を得るが故に。入一切行は是れ法明門、佛眼の成就を得るが故に。成就陀羅尼は是れ法明門、一切諸佛法を聞いて、能く受持するが故に、得無礙辯は是れ法明門、一切衆生をして、皆歡喜せしむるが故に。順忍は是れ法明門、一切諸佛法に順ふが故に、得無生法忍は是れ法明門、受記を得るが故に。不退轉地は是れ法明門、往昔の諸佛法を具足するが故に。從一地至一地智は是れ法明門、灌頂もて一切智を成就するが故に。灌頂地は是れ法明門、生・出家より、乃至、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得るが故に。』

爾の時、護明菩薩、是の語を說き已りて、彼の一切諸天衆に告げて言く、『諸天、當に知るべし。此は是、一百八法明門、諸天に留與す。汝等受持して、心に常に憶念し、忘失せしむる勿れ。』

巻の第七

俯降王宮品第五

爾の時、護明菩薩・冬分過ぎ已りて、最勝春初の時に至る。一切の樹木、諸華開敷し、天氣澄淸に、溫涼調適にして、百草新に出でて、滑澤和柔に、滋り茂りて光鮮かに、地に徧滿す。正に鬼宿星合するの時を取りて、彼の諸天の爲に、法要を說き、悉く其の心をして、愛樂歡喜し、踊躍充徧して、自ら勝ふる能はざらしむ。諸天を誡勸して、此の法を行ぜしめ、一切有爲の、生老病死を厭離して、無上法を求めしむ。

是の時、護明菩薩大士、彼の天衆を觀じて、師子王の如く、下生せんとする時、其の心安穩にして、驚かず、怖れず、畏れず、亂れず。復、更に、重ねて、諸天衆に告げて言はく、『汝等諸天、一切當に知るべし。此れ我が最後に受けたる(一)後邊の身なり』と。是の時、菩薩、正念一心に、兜率より下る。餘の諸天の如きは、天壽を捨つる時、五欲を離るるが故に、大憂苦を生じ、正念を忘失す。

【一】後邊身とは最後邊際の身にして、この後更に生身を受けざるをいふ。

菩薩の下れる時は、則ち是の如くならず、一切不可思議希有の法を具足す。護明菩薩、天より下る時、時に彼の諸天、菩薩を憶ふが故に、一時號哭すらく、『嗚呼苦しい哉、嗚呼苦しい哉。我等既に護明菩薩を失ふ。我、今より去、永く、更に、復、正法を聞くを得じ。我等、功徳の利を減損して、生死の根本、今、益增長せん』と。時に淨居天、彼の一切諸の天衆に告げて言く、『汝等、今、護明菩薩が下生せんとする時を見て、憂惱を生ずる莫れ。何を以ての故に。彼、下生の時、必定して當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、成じ已りて、還た、此の天宮に來至して、汝の爲に說法すること、猶、往昔の毗婆尸佛、尸棄如來、毗舍浮佛、迦羅迦孫駄佛、迦那迦牟尼佛、迦葉如來の如けん。彼等諸佛、皆此より去りて、汝を憐愍するが故に、悉く各還り來つて、此の天宮に到り、汝の爲に說法して、汝等を攝受せり。今、此の護明菩薩大士も、還、是の如く、來つて汝を攝化すること、前の如くにして異ならざるべし』と。

爾の時、護明菩薩大士、夜に於て下生し、當に降神して[三]摩耶夫人の胎に入らんとするの時、時に彼の摩耶、其の夜に當りて、淨飯王に白して言く、『大王當に知るべし。我、今夜より、八禁清淨、齋戒を受けんと欲す。所謂、不殺生、不偸盜、不婬逸、不妄語、不兩舌、不惡口、不無義語なり。又願くは不貪、不瞋恚、不愚

【三】摩耶夫人(Māyā-devī)。

癡、不生邪見ならん。我當に正見すべし。諸是の如き等の禁戒齋法、我、當に受持すべし。我、今、繋念して、恒常に勤行し、諸衆生に於て、當に慈心を起すべし。』

時に淨飯王、卽ち摩耶夫人に報へて言く、『夫人の心に愛樂する所の如きは、意の隨に行ぜよ。我も亦、國王の位を捨てて、汝の所行に隨はん。』而して偈有りて說くらく、

『王・菩薩の母を見て、座より恭敬して起ち、母の如く姉妹の如く、心に欲想を行ぜず。』

時に護明菩薩、一心正念に、兜率より下り、淨飯王の最大夫人、摩耶の右脇に託し、安庠として入りぬ。護明菩薩、正念正知もて、兜率より下りて母胎に入れる時、是の時、天・人・魔・梵・沙門・婆羅門等の一切世間を、光明普く照す。復、世界外の黑闇の處は、是の如く大勢力有り、大威神有る日月も、是の如き幽隱を、光明照さず、德及ぶ能はざるに、此菩薩の光のみは、悉く能く達して彼處を照す。有ゆる一切の衆生、各相謂つて言く、『云何ぞ此間に忽ち衆生有るか。』是の時、此の地、六種に震動しぬ。所謂、東湧西沒、西湧東沒、南湧北沒、北湧南沒、邊湧中沒、中湧邊沒なり。是の如く、乃至、起覺吼等の十八種の相、悉く皆普く現す。次で、復、千の(三)須彌山王有り。皆悉く震動す　千の(四)尼民陀羅山王、千の(五)持威德山王、千の(六)佉羅伽陀山王、千の(七)毗那耶迦

【三】(Sumeru)。妙高と譯す。
【四】(Nimindhara)。地持山と譯す。
【五】(Isādhara)。持軸と譯す。

山王、千の（八）馬頭山王、千の（九）彌尼陀羅山王、千の（一〇）善見山王、千の（一一）鐵圍山王、千の大鐵圍山王、是の如き等の山、悉く皆震動す。幷に、また、一切諸餘の小山は、湧沒低昂し、嵬崔峩嵳として、大煙氣を出す。四千の大海、及び餘の諸池は、浩汗奔濤して、洪波沸湧す。其の四大河たる恒河・辛頭・斯多・博叉、及び餘の諸水は、皆悉く逆流す。一切の叢林、一切の樹木、一切の藥草、一切の時苗、皆悉く肥濃し、長養し、滋茂す。其下、阿鼻泥黎に至るまでの苦惱の衆生は、皆快樂を蒙りぬ。

是の因縁を以て、菩薩の、兜率より初て下りて、大光を放ち、一切の世間を照し、幽冥黑闇を、悉く明著ならしめたるは、後時に、佛道を成じ已り、四眞諦の智慧の光明を以て、普く一切愚瞑の、衆生を照さんが爲、先づ瑞相を作せるなり。菩薩の、初めて兜率より下れる時、大地の六種十八相に動き、及び諸山王の、大煙氣を出し、四千の大海の濤波を湧沸せるは、煩惱、垢濁、淤泥に沒在する、未來世の、諸の惡衆生の爲に佛道を成じ已りて、拔き出して、涅槃の岸に置かんと欲するなり。

【六】(Khadiraka)。檐木と譯す。
【七】(Vinataka)。障礙と譯す。
【八】(Aśvakarṇa)。馬耳と譯す。
【九】(Yugamdhara)。持雙と譯す。
【一〇】(Sudarśana)。善見と譯す。
【一一】(Cakravāḍa)。鐵圍と譯す。
九山の順序は、倶舍論に從へば、妙高、持雙、持軸、檐木、善見、馬耳、象鼻、地持、鐵圍なり。

菩薩、初兜率より下れる時、一切の諸水、皆悉く逆流せるは、煩惱の流に隨順沒溺する、未來世の諸の惡衆生の爲に、佛道を成じ已りて、一切の衆生を說法度脫し、其をして本に反りて、生死の流に逆はしめんとするなり。菩薩、初兜率より下れる時、悉く能く、一切の樹木藥草叢林を增長し、皆肥膩滋茂せしめしは、未來世の諸の惡衆生の、未だ善根を種ゑざるに、善根を種ゑしめ、已に善根を種うるに、解脫を得しめんが爲なり。菩薩初め兜率より下れる時、阿鼻地獄に至るまでの衆生の、皆快樂を受けしは、佛道を成じ已りて、諸の衆生をして苦惱を解脫して、快樂を受けしめんとなり。是の因緣を以て、先に於て是等の瑞相を示現せしなり。又、復、菩薩、兜率より下れる時、自餘の衆生は產門より入るに、右脇より胎に入りしは、佛、成道を得て、諸の衆生の爲に、清淨法を說き、邪を廻して正に入らしめんとて、先に於て瑞相を示現せるなり。

菩薩、正念もて兜率より下り、淨飯王第一の大妃、摩耶夫人の右脇に託し、住まり已る。是の時、大妃、睡眠中に於て、夢に一の六牙の白象あるを見る。其の頭は朱色にして、七支もて地を拄へ、金裝の牙を以て、空に乘じて下り、右脇に入る。夫人、夢み已りて、明旦卽ち淨飯王に白して言はく、『大王當に知るべし。我、昨夜に於て、是の如き夢を作せしに、我が右脇に入るの時に當つて、昔より未だ有らざる所の快樂を受けぬ。今日より後、我、實に世間の快樂を用ひじ。此夢の

瑞相は、誰の占夢師か、能く我が爲に解する』と。

時に淨飯王、一りの宮監內侍の女人を召し、之に告げたまはく、『汝、速疾に來つて外に至り、勅を宣べて我國師、大那摩子に語り、急追もて八婆羅門大占夢師、所謂、祭德、鬼宿、自在德、毗紐德、梵德等、幷に老迦葉の三子を喚び、速に來らしめよ。』時に、彼の使人、王に白して言く、『大王の勅の如く、敢へて違逆せず』と。是の時、使人、大王の命を奉じて、宮門の前に至り、大聲に唱へて言く『誰か門前に在る。頗る入宮の婆羅門有りや否や。』時に彼の門前に、一の當直の婆羅門子有り。姓は〔三〕婆陀氏、名は羅耶那（隋に屋室と言ふ）宮監內の使人に報へて言く、『我此に在り。』其の使人言く、『大王勅有り、八大諸婆羅門の、能く占夢する者を喚ばしむ。所謂、祭德・迦葉子等なり』と。其の使、傳告す。國師大那摩子、彼の屋室使人の言を承け、卽ち八大占夢婆羅門師を召喚して、及び大那摩國子の子と同じく宮中に入る。時に淨飯王、諸の占夢婆羅門等に告げて、是の如きの言を作す、『昨夜、夫人、此かる異夢有り。是れ何の瑞相ぞ。何の徵感か有る』と。時に彼の占夢婆羅門等、王の語を聞き已りて、善く諸相を知り、能く夢祥を占ひ、具に諮りて、淨飯王に白して言く、『大王、善く聽かれよ。夢むる所の瑞相は、我當に具さに說くべし。我見る所の如くんば、往昔の神仙諸天が、經書

〔三〕 Bādarāyana（バーダラーヤナ）

典籍に載する所なり。』偈を說いて言く、
『若し母人夢に、日天右脇に入ると見ば、彼の母の生む所の子は、必ず轉輪王と作らん。
若し母人夢に、月天右脇に入ると見ば、彼の母の生む所の子は、諸王中の最勝たらん。
若し母人夢に、白象右脇に入ると見ば、彼の母の生む所の子は、三界に極みなく尊く、
能く諸の衆生を利し、怨敵悉く平等にして、千萬衆を、深煩惱の海より度脫せん。』
爾の時、占夢婆羅門師、大王に白して言く、『夫人の夢むる所、其の相甚だ善し。大王、今、當に自ら夫人の產む所を慶幸すべし。必ず聖子を生まん。彼、後時に於て、必ず佛道を成じて、名聞遠く至らん。』時に淨飯王、諸の占夢婆羅門師の、此の頌を說くを聞き已り、心大に歡喜して、踊躍無量、自ら勝ふる能はず。時に、王、備さに無量の餚膳を辦じ、喫噉舐啜すべき百味の飲食、諸の麨菓等、種種に施設す。彼の婆羅門、自ら恣に噉ひ、飯食し訖る時、淨飯王、復、無量の錢財寶物を將て、以用て布施す。
時に淨飯王、此の相師の、妃の夢を占觀して、是れ吉祥の瑞相といへるを聞きて後、卽ち其の國、迦毘羅城四門の外、幷に衢道の頭、街巷阡陌に於て、人有つて行く處に、大無遮義會の所を安じ、人來つて須むれば、盡く皆布施す。食を須むれば食を與へ、飲を須むれば飲を與へ、衣を

須むれば衣を與へ、香を須むれば香を與へ、鬘を須むれば鬘を與へ、塗香・末香・衣服・牀敷・氈褥・房舍・屋宅・牛羊・象馬及び車乘等、是、人の須むる者は、皆悉く之を與へぬ。是の如き等の種種の布施を作して、悉く菩薩を資益せんが爲の故に、是の供養を設けぬ。

爾の時、彼の處に一仙人有り、(一三)阿私陀と名く。能く外道種種の諸義を立て、以て五欲を捨てて、大威神有り、大德力有り、五通を具足し、常に能く三十三天集會の所に到りて、自在に能く入る。彼の仙、多く南天竺國、遮槃低城の聚落恒河怛と名くるに住す。彼を去る遠からずして一叢林有り、名けて增長と曰ふ。是の時、仙人、彼の林中に在りて、仙道を修學す。摩伽陀國の一切の人民、咸く皆謂へらく『此の阿私陀仙は、是れ阿羅漢なり』と。摩伽陀國の一切の人民、彼の仙を貴敬して、尊重承事す。時に、彼の仙人、知解する所有れば、悉く以て人に教へ、自ら知見し已れば、他に教へて見せしむ。時に、彼の聚落に一童子有り、那羅陀と名けぬ。彼の那羅陀、年漸く長大にして、八歲に至る。其母、將て阿私陀仙に付して弟子たらしむ。時に彼の童子、供養し、恭敬し、尊重して、阿私陀仙に師事し、弟子の禮を盡して暫くも休息する無し。時に彼の仙人、增長林に在りて、晝夜精進に攝心坐禪し、那羅陀の童子と一に處す。其の那羅陀侍者童子、仙人の後に在りて侍立し、拂を執りて

【一三】アシタ Asita

蚊蝱を駈逐す。時に菩薩、兜率陀天より、正念にして下り、淨飯王の宮に至つて、夫人の右脇より胎に入るや、大光明を放つて、徧く人天一切の世界を照し、復、此の大地に、六種十八相の動を具足す。時に、阿私陀、未曾有、希奇の事、異種の光明を見、復、此の地の六種の震動を見て、心大に驚怖し、毛孔悉く竪ち、自心に念じて言く、『今、何の緣有つてか、此の大地動くぞ。何の果報有りや。』時に彼の仙人、少時思惟し、默然として住し、正念正定に思惟し、知り已つて心に歡喜を生じ、踊躍無量、自ら勝ふる能はずして、是の唱言を作しぬ、『希有の大聖不可思議なり。世間、當に大（四）富伽羅を出すべし。』

【四】富伽羅(Pudgala)。人、有情又は數取趣と譯す。

菩薩、初め兜率より下る時、母の右脇に入り、受胎し訖る時、一天有り、名けて速往と曰ふ。諸の地獄に在り、大聲に唱言すらく『汝諸人の輩、一切當に知るべし、菩薩、今、兜率天より下つて母胎に入る。是の故に、汝等速かに誓願を發して、人間に生れんを願へ』と。地獄の衆生、此の語を聞き已る。有ゆる衆生は、往昔已來、曾て善根を種ゑ、復、雜業を造り、惡強きを以ての故に、地獄に墮ちぬ。彼等各面り相覩見して、地獄を厭離し、復、光明を得て、身心安樂に、復、速往世間諸天の聲を聞くを得て、地獄身を捨て、卽ち人中に生れぬ。有ゆる三千大千世界の諸衆生等、往昔已來、善根を種うる者、

皆此の迦毗羅城に來つて、四面に託生せり。

菩薩、母胎に入り訖れる時、天帝釋及四天王〔二五〕提頭賴吒、及び〔二六〕毗留勒叉〔二七〕毗留博叉〔二八〕毗沙門等、各相謂つて言く。「仁者當に知るべし。菩薩已に兜率天より、下つて母胎に入在す。我等、今、須く擁護守視すべし。其餘の或る人非人をして、菩薩を惱亂し、或は其便を覓めしむる勿れ。今この菩薩は唯これ極大威德の諸天のみ、乃ち能く守護す。是世間人の能く守る所にあらず。」此は是、菩薩未曾有の法にして、如來は此の四種の護持を有し、具足して缺くること無き瑞相なり。

世に衆生有り、母胎に入る時、正念なる能はず。或は母胎に住して、亦、復、專心正念なる能はず。或は、復、生時に、亦、正念せず。或は衆生有り、母胎に入る時、能く專ら正念し、胎中に依りて、亦能く正念し、胎を出づるの時、亦能く正念す。或は衆生有り、入胎に正念し、住胎に正念するも、出胎の時、正念する能はず。菩薩は、入胎にも亦正念し、住胎にも正念し、出胎にも正念す。此は是菩薩未曾有の法、如來、佛道を成ずるを得已りて、說法敎化せんに、忘るること無く、失ふこと無く、衆生の機根を知りて說きたまふ瑞相なり。母胎に在るの時、常に右脇に

〔二五〕(Dhṛtarāṣṭra)。持國天と譯す。
〔二六〕(Virūḍhaka)。增長天と譯す。
〔二七〕(Virūpākṣa)。廣目天と譯す。
〔二八〕(Vaiśravaṇa)。多聞天と譯す。

住して、曾て移動せず。自餘の衆生は、不定を以ての故に、或は右脇に至り、或は左脇に至る。是の因緣を以て、其の母患痛して無量の苦を受く。菩薩の胎に在るや、右脇に處して、轉ぜず動かず、起立坐臥にも、母胎を損せず。此は是、菩薩未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、菩提法を行じ、悉く成就するを得たまふ瑞相なり。

菩薩、胎に在りて、驚かず怖れず。大無畏を得て、惡物に染まず、有らゆる不淨の涕唾・膿血・黃白の痰癊、穢汚する能はず。自餘の衆生は、母胎に在るの時、種種不淨なるに、琉璃寶の、天衣を以て裹みて、不淨の處に置かんに、亦染汙せざる如く、是の如く、是の如く、菩薩の胎に在るや、一切の不淨、汙さず染めず。此は是、菩薩未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、一切法に於て、不染不著なる瑞相なり。

菩薩、母胎に在せし時、其の菩薩の母、大快樂を受けて、身、疲乏せざりき。自餘の衆生は、母胎に入りて、或は復九月、或は復十月、母、負重を受けて、身體安からず。菩薩の胎に在るや、母若くは行坐し、若くは眠り、若くは起くる、皆安樂を得て、身に苦を受けず。此は是菩薩未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、速に阿耨多羅三藐三菩提を得、正に諸通及び一切智を得たまふ瑞相なり。菩薩の胎に在るや、母、禁戒を受けて、心、常に戒行を奉持して行せ

り。自餘の衆生は、母胎に在る時、母、雜行を行ずれども、菩薩の胎に在るや、母、禁戒を持して雜行を行ぜず。此は是、菩薩未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已り、聲聞衆と共に最勝に持戒し、世間中に於て、沙門・瞿曇、持戒無比、持戒分勝の大名聞を出したまふ瑞相なり。

菩薩の胎に在るや、其の母、欲染の想を生ぜず、欲火の惱亂する所とならず。時に菩薩の母、恒に梵行を行じぬ。自餘の衆生、母胎に入る時は、久しからずして、其の母、欲心の熾盛、前に倍多す。菩薩の胎に在るや、其の菩薩の母、自らの夫の邊に於てすら、猶尚厭離して、婬欲を行ぜず。何に況んや餘人をや。此は是、菩薩未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、眼根善く伏し、善く藏し、善く護り、善く覆ひ、善く薰じ、復、能く此に因つて、上に知る所の如く、他の爲に說法す。是の如く、耳根・鼻根・舌根・身根・意根も、乃至、善く薰じ、復、能く是の如く他をして斷せしめんが故に、修習說法したまふ瑞相なり。

菩薩の胎に在るや、其の菩薩の母、異味を貪らず。自餘の衆生は、母胎に在る時、其母、貪り嗜みて、厭足するを知らず。菩薩の胎に在るや、其菩薩の母は寒熱及び饑渇を患へず、其身を惱まさず。此は是、菩薩未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、四種の食を知りたまふ瑞相なり。菩薩の胎に在るや、其菩薩の母は、志習し庶幾し樂喜して、(一九)檀を行せり。自餘の

衆生は、母胎に在る時、其の母慳貪にして布施を喜ばず、財物を悋惜す。菩薩の胎に在るや、其母、意に樂しんで布施を行じ、心意開解して、自家の內に居る。此は是、菩薩未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、不慳の法を說きたまふ瑞相なり。菩薩の胎に在るや、其菩薩の母、常に慈悲を行じ、能く一切諸の衆生の邊に於て、但、是の有識有命の類を、悉く皆愍念せり。自餘の衆生の、母胎に在るや、其の母仁ならず、威德少きが故に、諸の不善を行じて惡口罵詈す。菩薩の胎に在るや、其菩薩の母、恒に一切諸衆生の邊に於て、大利益安樂の心を作しぬ。此は是、菩薩未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已り、能く一切諸の衆生の邊に於て、平等心を行じたまふ瑞相なり。菩薩の胎に在るや、其の菩薩の母、前の如く端正、種種の相貌、悉く皆喜ぶ可し。自餘の衆生の母胎に在るや、其の母損瘦して、體洪滿せず、氣力の羸弱、常人に倍す。菩薩の胎に在るや、其の母、常に歡喜の心を生じ、戒行威德、身色最勝、最妙最尊なり。此は是菩薩未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、見身巍巍として瞻仰す可らず、體、黃金色にして、衆相莊嚴なる瑞相なり。

菩薩の胎に在るや、其の母、菩薩を覩んと欲する時は、卽ち菩薩の胎中に在りて、身體洪滿し、諸根具足すること、譬へば明鏡の面像を鑒つすが如きを見、其母見已りて歡喜踊躍、體に充徧し

【一九】檀（Dāna）。布施と譯す。

て、自ら勝ふる能はず。自餘の衆生は、母胎に在りて、(一〇)歌羅邏及び(一一)阿浮陀に覆蔽せられて現ずる能はず。菩薩、初、母胎に入れる時、身體充滿し、五支五根、皆悉く具足せり。此は是菩薩未曾有の法なり。

菩薩の胎に在るや、其の菩薩の母の見る所の衆生、若くは男、若くは女の、鬼に持せらるる時、菩薩の母を見るを得る者は、一切の魍魎、一切の鬼神、皆悉く遠離して、還つて本心を得、若くは、體、舊と諸餘の雜病有り、或は痿黃病、或は風癲病、或は痰癊病、或は等分病、或は餘の諸病、所謂、白癩・丁瘡・惡腫・疥瘙・消瘦・癰疽・癬瘻・癭腫・寒熱・眼耳鼻舌咽喉及び頭、一切の諸病に侵惱せらるるもの、彼等衆生、來つて摩耶大夫人の邊に至り、其の大夫人、右手に頂を摩し、其の頂を摩し已るや、皆安樂を得て、諸病悉く除けり。若くは來つて摩耶夫人を見る能はざる重病あり。摩耶夫人、或は草葉を取り、或は樹葉を取り、或は草莖を取り、右手に(一二)摩捋して、彼の病人に送るに、其の病人、此等の諸物を得て、或は食し、或は觸れ、或は身上に置けば、卽ち一切の諸病を斷除するを得て、便ち安樂を受け、身體輕便なり。菩薩の胎に在るや、是の如き等の、無量無邊の威神德力、未曾有の法有りき。

【一〇】歌羅邏（Kalala）。凝滑と譯す。胎內五位の第一。托胎後初七日間の位にいふ。

【一一】阿浮陀（Arbuda）。皰と譯す、胎內五位の第二。托胎後第二の七日間の位にいふ。

【一二】捋はなづと訓す。

樹下誕生品第六の上

爾の時、菩薩の聖母、摩耶、菩薩を懐孕して、十月に滿ち、將に生れんとするに垂んとせし時、時に彼の摩耶大夫人の父、(一)善覺長者、即ち使人を遣して、迦毘羅の淨飯王の所に詣り、（摩訶僧祇師云く、摩耶夫人の父を善覺と名くと）大王に奏して言く、「我が知る所の如くんば、我が女摩耶、王の大夫人は、聖胎を懷藏して、威徳既に大なり。若し彼産出せば、我が女の命短く、久しからずして必ず終らん。我が意、我が女摩耶を迎へて、還つて我家に來り、(二)嵐毘尼中に安らけく止住し、共に相娛樂して、父子の情を盡さんことを欲す。唯願くは大王、留難を生ずる莫れ。乞ふ哀を垂れて、遣り放ちて我家に來り、此に於て平安に生産し訖りて、即ち送還し奉らん。」時に淨飯王、善覺の使の、是の言を作せるを聞き已るや、即ち有司に敕して、其の迦毘羅城、及び提婆陀訶の兩間の中、道路を平治し、一切の荊棘・沙礫・糞穢・土塊を除却し、香湯を地に灑ぎ、種種雜妙の華香を持て、其の地に散じ、又、復、摩耶夫人を光飾し、諸種の香、諸種の華鬘、諸種の瓔珞を以て、其身を莊嚴し、諸の音聲を備へて、倡伎樂を作し、大王の力、大王の威風を持し、諸の宮内一切の婇女を從へて、其父、善

【一】善覺長者(Suprabuddha)。
【二】嵐毘尼(Lumbinī)。園の名。

覺の家に向はんと欲す。先に於て使を遣はし、彼に報知し、來り迎接せしむ。

是の時、摩耶大夫人、身、安然として、大白象の上に端坐す。時に象背上の諸天、微妙の寶帳を化作す。摩耶夫人、寶帳の裏に坐して、(三)提婆陀訶城內に至り、其父の家に詣らんとす。是の時、摩耶夫人、初始て提婆陀訶城に向はんとする時、時に淨飯王、一萬の大力香象を辦具し、皆金鞍を被らせ、七寶もて其身を校飾莊嚴し、竝に悉く精麗。備擬して以て摩耶夫人を送る。復、一萬の善好の良馬有り。皆紺青色にして、頭黑きこと烏の如く、皆悉く、(四)駿を被り、尾は垂れて地に著く。眞金の鞦轡、鞍鐙留羈、悉く亦金飾し、一切の雜寶もて、其身を莊嚴す。復、一萬の妙好の寶車有り。竝に四馬を駕す。其車の周帀には、旛蓋及び衆寶鈴を張懸し、鏗鏘として相和す。是の如く辦具して、皆摩耶夫人の後に隨はしむ。復、二萬の勁勇力士有り。一人當千、威猛捷健、端正絕殊にして、能く强怨を破る。身に鎧甲を著け、手に弓箭・刀杖・鬪輪・及び諸の戟矟、種種の戰具を執りて、夫人の後に隨ふ。復、更に、別に、一萬の寶車有り。十千の妃嬪、皆其上に坐し、諸の瓔珞、種種の衣服を持して、其の身を莊嚴して、摩耶夫人を左右に圍繞す。時に淨飯王、重ねて、更に切に、宮監大臣に勅して、好く防衛を加へて、司に非ざる其餘の浪人の、摩耶夫人の車に逼近するを聽さず。及び諸の妃嬪を雜合せ

【三】Devadaha。天臂と譯す。
【四】駿はたてがみなり。

しむる勿く、唯童女をして、車を牽いて進奉せしむ。是の如き次第もて、摩耶夫人の象乘中に處り、一萬の寶車に、各各一妃、其の上に坐し、左右圍繞し、前後導從す。摩耶夫人、最も上首たり。其の外、復、一萬の力士、皆鎧甲を服て、夫人の左右前後に隨從し、鹵簿して行き、皆各香象の上に坐す。又、復、一萬の步行の力士も、亦、鎧甲を著け、手に種種の戟矟諸杖を執りて、夫人を翼衞す。是の如く莊嚴して、摩耶夫人、父の所に詣り向ひ、無量の象馬、皆悉く嘶鳴す。又、無量の龍頭の大鼓、無量の小鼓、種種の樂器有りて、微妙の音を出し、無量の莊嚴、無量の威德もて、提婆陀訶の城に向ふ。時に彼の善覺大臣長者、自らの眷屬と共に、城よりして出で、逆へ前んで、女、摩耶夫人を迎へ、又、無量莊嚴の具を持して、夫人の前に引く。是の時、善覺大臣、妻有り、嵐毗尼と名けぬ。彼の婦、夫善覺に諮白して言く、『大聖釋子、若しは當に時を知るべし。諸の釋種族、各皆自ら園果樹林有り、遨遊觀瞻して、其中に至り、自ら相娛樂す。我が大聖子、今、清淨の園林を造作す可し。我等當に聖子と共に、娛樂して歡樂を受くべし。』時に善覺釋、摩耶大妃夫人の父、迦毗羅及び提婆陀訶兩城の間に於て、自らの境內に近く、婦の爲に一大園林を造り、善覺の婦、嵐毗尼と名くるを以て、彼が爲に此の園林を造立せるが故に、是の因緣を以て、卽ち之を名けて嵐毗尼園と爲す。彼の園の樹木、蓊鬱扶疎として、世間比無し。

其の中、多く種種の華樹、種種の果樹有り、以て莊嚴を爲す。復、種種の渠流池沼、種種の雜樹有り。無量無邊の摩尼諸寶、園苑に徧滿す。爾の時、善覺釋種大臣、彼の春初二月八日、鬼宿の合時に於て、女摩耶と共に、相隨ひて、彼の嵐毗尼園に向ひ、往いて大吉祥地を觀看んと欲す。彼の園に到り已りて、摩耶夫人、寶車より下り、先づ種種微妙の瓔珞を以て、其の身を莊嚴し、復、種種雜好の薫香を以て塗拭す。衆多の婇女、伎樂音聲もて前後に圍繞し、安庠として徐歩し、處處を觀看て、此の林より、復、彼の樹に向ひ、是の如く次第に周帀して行く。然して其の園中別に一樹有り、〔五〕波羅叉と名く、其の樹安住し、上下正等に、枝葉垂布して、半綠半青、翠紫相暉きて、孔雀項の如し。又、甚、柔輭にして、〔六〕迦隣提衣の如く、其の華香妙に、聞く者歡喜す。

摩耶夫人、安庠として漸次に彼の樹下に至る。是の時、彼の樹、菩薩の威德力を以ての故に、枝自然に曲り、柔輭に低垂す。摩耶夫人、卽ち右手を擧ぐるや、猶、空中に妙色の虹を出すが如し。安庠〔七〕頻申して、波羅叉の垂曲の樹枝を執り、仰いで虛空を觀る。時に菩薩の母、摩耶夫人、地に立ち、手を以て波羅叉樹枝を攀づる時、時に二萬諸天の玉女有り、摩耶大夫人の所に往き詣り、周帀圍繞して、十指の掌を

〔五〕Palāśa。
〔六〕迦隣提衣(Kācalindika)細輭輕妙衣と譯す。
〔七〕頻申(Vijṛmbhā)。開口し張開すること。

合せ、共に摩耶大夫人に白して言く、

『夫人の今生める子は、能く生死輪を斷す。
上下の天人師、決定して二有ることなし。
彼は是諸天の胎、能く衆生の苦を拔く。
夫人・倦を辭することなかれ、我等共に扶持せん。』

爾の時、菩薩、其の母摩耶夫人の、地に立ち、手を以て樹枝を攀づる時を見て、胎に在つて正念に座よりして起つ。自餘の一切諸衆生の母は、子を生まんと欲する時、身體遍く痛み、痛める因縁を以て大苦惱を受け、數數坐し數數起きて、自ら安ずる能はず。其の菩薩の母は、熙怡坦然として、安靜歡喜し、身に大樂を受く。是の時、摩耶、地に立ち、手を以て波羅叉の樹枝を執り訖りて、卽ち菩薩を生む。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、乏しきことなく、疲るることなく、勞せず、倦まず、能く一切の煩惱諸根を拔き、一切の諸煩惱結を割斷すること、猶多羅樹頭を截りて、畢竟生ぜざるが如く、無相無形にして、後生の法無き瑞相なり。

又、復、一切の諸衆生等、苦逼を生ずるが故に、胎內に在りて、處處に移動す。菩薩は然らず。

右脇より入りて、還た右脇に住まり、胎内に在りて、曾て移動せず。及び、出でんとする時、右脇より生れ、衆苦の逼切する所と爲らず。是の故に菩薩の此事や、希奇、未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、其後際を盡して、梵行を修行し、永く畏るる有るなく、常に快樂を得て、復、諸の苦無き瑞相なり。菩薩初め母胎の右脇より、正念に生るる時、大光明を放ちて、卽時に一切の諸天、及び人・魔・梵・沙門・婆羅門等、一切の世間を悉く皆遍く照す。乃至、各其に相謂つて言く、『云何ぞ此處に、忽ち衆生有る。』此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、無明黑闇の網を裂破し、能く明淨の大智慧光を出す瑞相なり。

菩薩、初め右脇より出で已り、正心に憶念す。時に菩薩の母、身體安常にして、傷まず、損はず、瘡無く、痛無く、菩薩の母身、本の如くにして異らず、菩薩生るる時、種種に資益す。是の因緣を以て、母、患苦無く、身口及び心に、一惱有る無きこと、譬へば、一大身の衆生有り、大威德有り、大氣力有り、地上に臥し、宛轉として自ら撲つも、其の地損せず、若くは滅じ、若くは破れざるが如し。是の如く、菩薩、母の右脇に在りて、正念に生るる時、其の菩薩の母、是の如き因緣もて、瘡無く損なし。是の時、彼の處に、一婦人有り、合掌して菩薩の母に諮白して言く、『大德夫人、兒を生むの時、身體痛苦無きを得たりや不や。』菩薩の母言く、『此の大人の威神

力を以ての故に、我が身體をして、痛痒を覺えざらしむ。我、今、身體缺くる無く、減ずる無きは、是の因緣を以てなり。』此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已り、梵行を行じて、缺けず減ぜず、具足して少からざる瑞相なり。菩薩、初め母胎より出でし時、苦なく惱なく、安庠として起ち、一切の諸穢、汙染する能はず。或は屎或は尿、黃白の痰癊、或は膿、或は血、皆穢著せず。自餘の衆生は、母胎を出づる時、諸惡雜穢なり。菩薩は爾らず、彼の諸の衆生類に同じからずして、一切の諸穢、皆染著せず。正心正念に、安庠として起ち、胎より出生すること、譬へば、如意琉璃の寶の、(八)迦尸迦衣を用つて裹む時、各相染まざるが如し。是の如く、是の如く、菩薩の母胎に在る時、一心正念に、安庠として起ち、淸淨に出生して、一切の穢無し。乃至、膿血屎尿の臭處、穢さず染せず。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、世間に在り、世間に住まるも、世に有ゆる法、世間の穢濁に汙れず染まざる瑞相なり。

菩薩、初め母胎より出でし時、時に天帝釋、天の細妙の(九)憍尸迦衣を將つて、自らの手に裹み、先に於て、承接して、菩薩身を擎げぬ。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已

【八】 Kāsikasukṣma（カーシカスークシマ）。迦尸細輭布の衣。
【九】 Kauśeyaka（カウシエーヤカ）。野蠶衣。

り、創めて娑婆世界の主と爲るや、大梵天王、先に於て、如來に說法を勸請する瑞相なり。
菩薩、初め右脇より生れし時、四大天王、菩薩を抱持し、將て母前に向ひて、其の母に示して言く、『世の大夫人、今、歡喜すべし。夫人、子を生みて、旣に人身を得、諸天だも猶尙歡喜讃歎するを、況んや、復、人に於てをや。』是れ故に菩薩希奇の事、未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、無量衆多の一切の比丘・及び比丘尼、諸の優婆塞・及び優婆夷、皆如來に向つて、法を聽受し、如來の敎に依りて、違はず背かざる瑞相なり。
菩薩の生るるや、立ちて地に在り、仰いで母の右脇を觀る時、口に是の言を作す、『我が此の身形は、今日より後、復、更に、母胎の中に受けず、胎に入つて臥さず。此は是、我が最も末後の身、我當に佛と作るべし』と。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、口に是の言を作し、『我、今、生分、一切已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辦じて、後有を受けじ』とのたまふ瑞相なり。

卷の第八

樹下誕生品第六の下

菩薩生れ已り、人の扶持するなくして、卽ち四方に行き、面ごとに各七步し、步步足を擧ぐるや、大蓮華を出し、七步を行き已りて、四方を觀視、目未だ曾て瞬かずして、口自ら言を出す。先づ東方を觀て、彼の小嬰孩の言の如くならず。自らの句偈に依つて、正語正言すらく『一世間の中、我・最勝たり。我・今日より、生分已に盡く』と。此は是、菩薩、希奇の事、未曾有の法なり。餘方悉く然り。初め生れし時、人の扶持するなく、四方の面に於て、各七步を行くは、如來、佛道を成ずるを得已りて、(一)七助道菩提法分を得る瑞相なり。菩薩生れ已りて、四方を觀視るは、如來、佛道を成ずるを得已りて、四無畏の法を具足して得る瑞相なり。菩薩生れ已り、口に自ら、『我・世間に於て、最も殊勝たり』と唱言せるは、如來、佛道を成ずるを得已りて、一切世間の諸天、及び人の、悉く皆尊重恭敬承事する瑞相なり。菩薩生れ已りて、口自ら、『我・生死を斷ず』と唱言せ

【一】七助道菩提分とは、或は七覺支といひ、又七菩提分といふ。

るは、是れ最後邊の如來、佛道を成ずるを得已りて、一に、語る如く行ひたまふ瑞相なり。

菩薩生れ已りて、諸の眷屬等、水を求覓めて、東西南北に、皆悉く馳走して、終に得る能はず。卽ち彼の園に於て、菩薩の母の前に、忽然として自ら二池水を湧出す。一は冷かに、一は煖かなり。菩薩の母、此の二池水を取り、意に隨つて用ふ。又、虛空中より、二水注下す。一は冷か、一は煖かなり。此の水を取つて菩薩の身を洗浴す。此は是、菩薩未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、〔三〕奢摩他・毗婆舍那を得て、欲事を遠離し、勞苦を假りて、其の資財を求めず、一切自然なる瑞相なり。

菩薩初めて生るる時、諸天等しく金牀を持して、菩薩に與へて坐せしむ。坐し已りて、菩薩、其の身を澡浴しぬ。是れ人身なりと雖も、諸天扶持せり。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、彼の四種の蓮華の座を得て、如來を扶持する瑞相なり。

菩薩初め生るるや、大光明を放ちて、一切有らゆる光明を障蔽せり。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、一人の、能く如法論の、如來に勝つ者有ることなき瑞相なり。菩薩の初めて生るるや、身に光明を放ち、日光を障蔽して、猶晝星の如からしむ。此は是れ菩薩希奇の事、未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、諸の聲聞弟子

【三】Samatha は止・Vipasyanā は觀と譯す。定慧に同じ。

衆の邊に於て、自在に最上の供養、最上の名聞を獲得したまふ瑞相なり。菩薩初めて生るるや、一切の樹木、一切の藥草、時に隨つて開敷せり。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、諸の衆生あり、未だ信解を得ざるものは、卽ち信解を得、已に信解せる者は、復、增長を得るの瑞相なり。菩薩初めて生るるや、上界の諸天、其の白繖を持して、眞金を柄と爲し、大さ車輪の如し。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、不瞋を以ての故に、解脫を得て、離欲饒益し、勞勤苦せずして資財を獲たまふの瑞相なり。

菩薩の初めて生るるや、上虛空中の一切の諸天、各白拂を持し、悉く衆寶を用て、以て其柄と爲して、菩薩の上を拂ふ。菩薩初めて生るるや、虛空淸淨にして、煙雲有ること無く、塵霧有ることなくて、但、雷聲を聞く。菩薩の初めて生るるや、上空中に於て、諸の雲霧無くして、微細の雨、淸淨の香水有り、八功德を具して、諸の衆生をして、皆快樂を受けしむ。菩薩の初めて生るるや、四方の空中に、微妙の風を起し、淸涼にして惱み無く、一切八方、淸淨光澤にして、煙雲塵埃の翳障有ることなし。菩薩の初めて生るるや、上空中に於て、人の作す有る無くて、自然に妙梵音聲を出す。菩薩の初めて生るるや、上空中に於て、自ら種種諸天の音樂、種種の歌聲

を出し、種種の華、種種の諸香を雨し、日光に曝すと雖も、萎れしむる能はず。此は是、菩薩希奇の事、未曾有の法にして、如來、佛道を成ずるを得已りて、諸の世間の爲に、諸の智慧を以て、大神變を現じ、淸淨の諸通、世間に比無く、如來を首と爲すの瑞相なり。菩薩の初めて生るるや、上虛空に於て、一切の諸天、各無量の優鉢羅華・鉢頭摩華・拘物頭華・分陀利華、諸是の如き等の、種種の雜華を持し、復、雜種微妙の諸香を持し、復、種種衆寶の華鬘を持して、菩薩の上に散じ、散じ已りて更に散じて、是の如く相續す。菩薩の初めて生るる時、五百の諸天玉女有り、諸天華の熏ずる所の油を持し、菩薩の母の前に詣り向ひて立ち、安慰問訊して、是の如き言を發す、『善く菩薩を生みたまふ、疲惓無きか』と。菩薩初めて生るる時、五百の諸天玉女有り、天の塗香を持して、菩薩の母の前に詣り向ひて立ち、安慰問訊して、是の如きの言を作すらく、『善く菩薩を生みたまふ、疲惓無きか』と。菩薩初めて生るる時、五百の諸天玉女有り、天の種種の寶、微妙の衣を持して、菩薩の母の前に詣り向ひて立ち、安慰問訊して、是の如き言を作すらく、『善く菩薩を生みたまふ、疲惓無きか』と。菩薩の初めて生るる時、五百の諸天玉女有り、天の種種の雜寶瓔珞を持し、菩薩の母の前に詣り向ひて立ち、安慰問訊して、是の如き言を作すらく、『善く菩薩を生みたまふ、疲惓無きか』と。菩薩の初めて生るる時、五百の諸天玉女有り、天の種種微妙

の音聲を持し、菩薩の母の前に詣り向ひて立ち、安慰問訊して、是の如き言を作す、「善く菩薩を生みます、疲惓無きか。」菩薩の初めて生るる時、此の大地に、十八相を具して、六種に震動し、一切の衆生、皆快樂を受けぬ。彼の時に當つて、一の衆生だも、欲心を生ずる無く、復、瞋恚及び愚癡も無く、慢無く、怖なく、一の衆生だも惡業を造る者無く、一切の病者は皆悉く愈ゆるを得、飢者は食を得、渇者は飲を得、皆飽滿せしめて、乏少する所無く、惛醉せる衆生は、皆醒寤するを得、狂者は正を得、盲者は視を得、聾者は聞を得、完具せざる者は皆具足するを得、貧者は財を得、牢獄に繫閉せられしは、皆解脫を得、地獄の衆生は皆休息するを得、畜生の衆生も、諸の恐怖を除き、餓鬼の衆生も、皆充足するを得ぬ。菩薩の初め右脇より生れし時、是の如き等の無量無邊の希奇の事、未曾有の法有りき。

從園還城品第七の上

爾の時、一大臣國師有り、姓は（一）婆私吒、名は（二）摩訶那摩。諸の國師婆羅門等と、俱に共に嵐毘尼園に往き詣り、彼の園に至り已りて、門外に在りて立つ。時に婆私吒、諸の國師婆羅門に語つて言く、『汝、此の大地を觀よ。何が故に是の如く震動する。譬へば、船に乘りて水上に在るが如し。日月覆蔽して、本の光儀を失ひ、狀畫星の如くにて、僅に形影有るのみ。一切の樹木、時に隨つて開敷し、上空中は、淸淨皦潔にして、諸の雲翳無くて、但、雷聲を聞く。又、虛空中、澄靜朗耀にして、殊妙微細の香雨有り。功德具足し、自然に八種の味を含む。又、八方より微妙の風を起し、其の風淸涼、冷煖調適に、一切諸方、悉皆淸淨にして、煙雲・塵霧・黤黮有ることなし。又、虛空中、人の唱ふる有るなくて、自然にして深梵の聲を聞く。復、虛空中に、種種諸天の音樂を聞き、復、天歌・天讚・天詠を聞き、天の香華を雨らし、日光曝すと雖も、萎れしむる能はず。』

時に一國師、彼の大臣婆私吒に報じて言く、『此の事然りと雖も、怪と爲すに足らず。何を以ての故ぞ。地性是の如し。何の不祥か有る。』又、一人言く、『今、此の大地、六種に震動し、虛空

〔一〕Vasiṣṭha
〔二〕Mahānāma

敞晃にして、日光を隱蔽すること、猶、從來、晝に星宿を看るが如し。復、天華を雨らし、衆光照ると雖も、異らしむる能はず。甚だ希奇なり』と。

其の婆私吒、彼の國師と共に、是事を議せる時、時に彼の園中に一女人有り、嵐毗尼より疾走して出で來り、門外に到る。時に彼の女人、門外に至り已り、婆私吒及び國師を見て、歡喜踊躍、自ら勝ふる能はず。婆私吒及國師に語つて言く、『諸釋種の子、汝速に大王の所に往き至るべし。』是の時、大臣及び國師等、彼の女人の是の如き言を作せるを見て、兼て、復、歡喜して、自ら勝ふる能はず。彼の女に問うて言く、㈢『汝、我等をして大王の所に至らしめ、當に何をか聞徹して奏を爲すべき。歡喜か、疑怪か、恐怖か、不祥事か。』彼の女報へて言く、『汝釋種子、我今汝に一大慶幸歡喜の事を白さん。』其の摩訶那摩及び國師等、彼の女に問うて言く、『何の喜慶有りや。』彼の女答へて言く、『國の大夫人、一童子を產めり。端正にして愛すべく、世間に雙少なし。然るに此の童子は、直に是、眞天、所以に處處に天華を散じ、天の光明を放つ。』時に大臣等、是の語を聞き已りて、心大に歡喜し、踊躍充徧して、自ら勝ふる能はず。是の時大臣、卽ち衆寶妙好の瓔珞を解きて、彼の女人に賜ひ、是の如き歡喜の事を聞けるが爲の故に、解きて賜へる後、更に、復、思惟

【三】（原文）汝令我等至大王所、當何聞徹爲奏、歡喜疑怪、恐怖不祥事乎。

すらく、『今、此の女人は、是、王宮内時幸の人、王、是の女を見て、極めて大に愛敬す。我、今、身の瓔珞を解きて賜與せり。後に脱しや患を爲さん』と。即ち還、收め取り、取り已りて轉持し、彼の國師に施し、捨て已りて呪願して、是の如き言を作しぬ、『今、瓔珞を以て國師に施し、有ゆる功德を彼の女に廻施せん。何の因緣を以てぞ。喜事を聞くが故なり』と。

時に、彼の大臣、摩訶那摩、國師婆羅門に語つて言く、『大婆羅門、汝、今、還、大王の所に向つて、是の喜事を奏すべし。』時に大那摩、彼の婆羅門を發遣し已り、更に、復、重ねて彼の女人に問うて言く、『汝、先きに、我が國の大夫人の產める童子は、是、天似天、天の光明を放つと語れり。汝、復、更に、何の異相有るを見るか』と。時に、彼の女人、大臣に答へて言く、『唯、願くは、善く聽け。彼の童子は、相貌人に過ぎて、大威德有り。摩耶國大夫人をして、地に立つの時、童子自然に右脇より出で、國大夫人の脅脇腰身を、破らず缺かざらしむるを致せり。童子生る時、一切の諸天、虛空より好細妙の迦尸迦衣を持し、童子の身を周匝して徧く裹み、持して母の前に向ひて、是の如き語を作しぬ、「國大夫人、當に自ら慶幸して、倍歡喜を生ずべし。何を以ての故ぞ。今、大夫人、聖子を產育せり」と。是の童子の初めて出でんと欲する時に當り、仰いで母の脇を觀て、是の言を說く、「我、今日より、復、更に、母人の胎を受けじ。此は即ち是、

我が最後邊の身なり。是よりして已去、我、當に佛と作るべし」と。卽ち地に立ち、人の扶持するなくて、卽ち七歩を行くに、足の履む所の處、皆蓮華を生じぬ。一切四方を正眼もて觀視て、目暫くも瞬きせず、驚かず怖れず、正しく東面に立ちて、言辭辯淨、字句圓滿、孩童の如きにあらずして、此の言を說く、「諸の世間に於て、我は最勝たり。我當に一切生死の煩惱の根本を濟拔すべし」と。童子、彼の立つ所の地の處に在るや、是の童子の身、淸淨なるを以ての故に、虛空中より二水注下せり。一は煖かに、一は冷かなり。復、金床を持し、童子をして坐せしめて、其の身を澡浴せり。童子生れ已りて、身より光明を放ち、日月を障蔽しぬ。上界の諸天、其の白蓋を持し、眞金を柄となして、大さ車輪の如くにして、虛空中に住まれり。復、諸天有り、手づから白拂を持し、衆寶を柄となし、童子の上に搖かしむ。又、虛空中の一切の音樂、鼓せずして自ら鳴り、復、無量無邊の微妙の歌詠の聲を聞けり。又、香華を雨らして、處處に徧滿し、日光照すと雖も、鮮潔常の如く、異ならしむる能はざりき。』

爾の時、大臣摩訶那摩、此の語を聞き已りて、卽ち自ら思惟すらく、『希有なり、希有なり。此の惡時に於て、大士の世に出興するを感ずることや。我、今、應に、自ら、淨飯大王の所に往きて、是の如き希有の事を奏聞すべし。』時に、彼の大臣、善く調せる馬を取りて行くに、疾きこと風の

如く、寶車を駕馭して、嵐毗尼園の門外より發して、徑ちに彼の迦毗羅城に至り、未だ王を見ず、先づ歡喜の鼓を撾打せんとて、其の身力を盡して、之を扣撃しぬ。

時に淨飯王、寶殿の上に坐し、輔相・弼諧・治理國政の群臣・郷士・百辟・官僚、或は後に、或は前に、左右圍繞して、皆悉く彼の歡喜の鼓聲を聞く。時に、王、驚いて諸の群臣に問ひて言く、『卿諸臣等、是れ誰か忽然として、敢へて、能く、我が甘蔗種門の歡喜の鼓を撃ち、其力を盡し打つて、此大聲を出せる。』時に守門の臣、前んで王に白して言く、『大王當に知るべし。王の大臣婆私吒、姓は摩訶那摩、四馬の車に駕して、迅疾風の如く、嵐毗尼園の門外より來り、忽ち跳つて車を下り、其身力を盡して、即ち大王歡喜の鼓を撃てり。更に言語無くして、直に云く、「我、今、大王を見んと欲す」と。』時に淨飯王、諸臣に語つて言く、『何の喜事か有る。宜しく速に彼の婆私吒、姓は釋種の大臣摩訶那摩を喚び來り、急に我が前に到らしむべし。』臣、王の勅を奉じ、白して言く、『大王、謹んで教命に依り、星の如く速かに往いて、彼の釋大臣、摩訶那摩を喚び、勅して急疾に王の所に到らしめん。』

時に摩訶那摩、王の勅を聞き已り、即ち王の前に至り、高聲に唱言すらく、『願くは王、常勝なれ、願くは王、常尊なれ。今、此の言を奉る、身力を増益せよ。』時に淨飯王、此の語を聞き已

りて、大那摩釋種の大臣に告げ、是の如き言を作しぬ、『汝釋大臣、何が故に怱遽速疾にして來り、身力を盡して、歡喜の鼓を打つか。』時に彼の大臣摩訶那摩、卽ち王に報へて言く、『彼の天臂城、嵐毗尼園に、大王の夫人、中に在つて遊戲し、彼の樹下に於て、一童子を生みぬ。身、黃金色にして、其の狀天に似たり。乃至、端正にして、天の光明を放てり。』

時に淨飯王、復、更に、重ねて、審實の相好を問ふ、『其の事云何ん。』時に彼の大臣、復、王に報じて言く、『夫人地に立ち、乃至、右脇裂けず壞れず、童子生れ已りて、仰いで母脇を觀て、口に是の如く言ひぬ。「我、當に佛と作り、生死・苦惱の根本を拔斷すべし。」澡洗せる放光、日月を障蔽し、樹木藥草、時に依つて開華し、虛空の諸天、白蓋の拂を持ち、童子の上に搖かし、虛空の雷聲、微細の天雨、涼風四もに來りて、其の形を見ず。梵響・樂音、鼓せずして自ら鳴り、華照りて萎まず』とて、上に說く所の如く、一一次第に、具さに王に諮白す、『大王、當に知るべし。我、是等の希有の事を見たり。是の故に、我、今、歡喜の緣を以て、歡喜の鼓を擊ち、敢へて徧く告げ知らす。』時に彼の大臣、復、諸天供養の餘花を持ち、敬んで大王に奉りて、是の如く備さに說きぬ。時に、淨飯王、是の語を聞き已り、大臣に告げて言く、『汝、旣に、是の歡喜の事を持して、我に白して知らしむ。汝の深心の如くんば、何の願を求めんと欲する。我當に盡く與

へ、意の隨にして違はざるべし』と。其の婆私吒大臣、答へて言く、『臣、王の恩を蒙りて、乏少する所無し。』時に淨飯王、復、大臣に告ぐらく、『法、當に乞願すべし。必ず當に相與ふべし。』大臣、復、更に、重ねて、王に白して言く、『願くは、王、歡喜せよ。臣、王の恩を蒙りて、乏少する所無し。』

時に淨飯王、復、大臣に告げたまはく、『汝、今、應に王の勅に違ふべからず。要らず須く乞願すべし。我、當に汝に與ふべし。』時に、婆私吒大臣、白して言く、『大王、若し當に必定して歡喜し、臣の願を乞ふべくんば、唯、願くは、大王、臣に太子の左右に奉事し、時に隨つて給侍するを聽せ。所以の者は何ぞ。此の童子、今、既に生れ已りぬ。必定して還、甘蔗日種轉輪聖王を續いで、苗裔絶えざらん』と。時に淨飯王、大臣に報へて言く、『善く時を知る者ぞ。意の樂む所の隨なり』と。時に淨飯王、諸臣に告げて言く、『汝等大臣、應さに彼の婆私吒大臣の、典掌する所の吉祥なる國法の如く、次第に具錄すべし。缺減せしむる勿れ。』時に淨飯王、大那摩釋大臣に告げて言く、『大臣、汝我が國に來つて、既に是の如き太子を生めり。今、當に、是の勝上太子の爲に生法を作すべし。』時に淨飯王、大威德の力、王の威神を以て、諸臣百官、左右圍繞して、猶半月の如く、左右に侍立し、及び摩訶那摩諸大臣等、發して彼の嵐毘尼園に向ひ、菩薩を

迎へんと欲して、其の中路に至る。時に淨飯王、摩訶那摩及び大臣に告げて言く、『汝等大臣、我が生子を聞き、復、是の如き希有の事、未曾有の法を見たり。豈歡喜して自らの憂愁を覆はざらんや』と。摩訶那摩大臣、復、言く、『大王、要らず當に歡喜自慶すべし。愁を懷くべからず。何を以ての故ぞ。天人の生む所、是の如き法不可思議、大希有の事有り。大王聞かざる可し。往昔、一婆羅門有り、多弖吒迦華生と名けぬ。彼生れ已りて後、人に從つて學ばず。自然に能く(四)四種の毗陀を解せり。又、復、大王聞かざる可し。往昔に於て、一頂生の王有り。父の頂より生れ、生れ已りて、還た孩童の如く一種なるも、漸漸長大して、四天下に王たり。又、復、大王聞かざる可し。往昔に於て、一王有り、毗迦と名く。父の掌より生れて、母の腹の出に非ず。又、復、大王聞かざる可し。往昔に於て、一王有り、留婆と名く。父の髀より生れぬ。又、復、大王聞かざる可し。往昔に於て王有り、迦輸婆と名く。父の臂より生れぬ。又、復、大王聞かざる可し。大王の先祖に於て、昔より以來、甘蔗王と名け、甘蔗より生れぬ。是等の諸王は、人間に生ると雖も、不可思議なり。』

時に淨飯王、復、更に、摩訶那摩、釋大臣に語つて言く、『汝大那摩、彼等諸王は、皆是、大明

【四】**四種の毗陀**とは(一)Ṛg-veda(二)Yajur-veda(三)Sāma-veda(四)Atharva-vedaなり。

にして、大威德有り。此は彼に方べず』と。摩訶那摩、歡喜心を以て、復、王に白して言く、『大王、當に知るべし。此の太子は、必定、彼の一切の諸王に勝らん』と。淨飯王言く、『何の勝相有るか。』摩訶那摩大臣答へて言く、『彼等の輩の生と、此の太子の生とを、臣、比挍量するに、相の大に勝るを知る。』王、復、語つて言く、『汝戲調する勿れ。所以の者は何ぞ。凡そ人の父たる者、子の他に最も勝るるを欲せざる可けんや。或は見聞多く、或は智解廣く、或は善く修行し、或は禮義を備へ、或は治道を明かにし、或は懃精進、是の如き者有れば、心則ち歡喜す』と。時に淨飯王、是の語を說き已りて、漸漸に彼の嵐毗尼園に至り、彼の園に至り已りて、大門の外に在り。卽ち使人を遣はし、夫人に白して言く、『夫人、福德善くして、聖種を生めり。夫人、宜しく太子の生處に於て、吉祥事を作し、莊嚴を敷說して、速かに訖了らしむべし。吾、面り親しく太子を觀視んと欲す。是の子、胎に在り。吾、先に於て、種種希奇の瑞相、未曾有の法を觀ると雖も、但、我、今、心に子を愛念するが故に、自ら往いて看んと欲す』と。是の時、摩耶國大夫人、童子の爲に、世の應じて、吉慶の禮と爲す所を、種種に備辦して、皆悉く訖了るや、卽ち使人を遣はして、王に奉報して言く、『大王、時を知つて、應に是の園に入るべし。』時に女人有り、淨飯王の已に園內に入るを見、菩薩を抱持して、王の所に將て詣り、是の如き言を作し

ぬ、『童子、今、父王を敬禮すべし。』王言く、『然らず。先づ、我が師、婆羅門を禮し、然る後に我に見えしめよ。』是の時、女人、菩薩を抱持し、先づ將て往いて婆羅門の所に詣る。是の時、國師婆羅門等、菩薩を見已り、淨飯王に白し、因りて呪願して言く、『唯、願くは、大王、常に尊く常に勝れまさんこと、子の勝れたまへるを見るが如くなれ。願くは、王釋種の芽葉、常に興らんことを。大王、此の子、必ず、當に、轉輪聖王と作るを得べし。』

時に淨飯王、復、國師婆羅門に問うて言く、『然るを知る所以は』と。是の時、國師、復、王に白して言く、『我所見の如くば、毗陀羅論所說の諸相、此子の法に合す。是の事、眞實なり』と。時に淨飯王、復、國師婆羅門に問うて言く、『若し是の如くば、我が釋氏轉輪聖王、甘蔗の種、必ず當に增長すべし。何を以ての故に。今、世の諸王、其の福德、苦行精勤に於て、皆悉く缺滅せり。若し、今、是の童子を生みて、此等の福力有り、昔の劫初の諸王の如く、福德・大力・勇健の相、具足せば、是卽ち我家、必ず當に興盛して、還、劫初の諸轉輪王の時の如くなるべし。』

時に菩薩の母、摩耶夫人、淨飯王、幷に國師婆羅門等の面色、熙怡なるを見て、卽ち淨飯王に諮白して言く、『大王、我に轉輪聖王の相貌の云何んを示せ。善い哉、我が爲に、略其要を說き、我心をして喜ばしめよ。』時に淨飯王、國師婆羅門に問うて言く、『仁者大師、願くは、爲に、轉

輪聖王の形狀相貌を解釋せよ。』時に、彼の國師及び婆羅門、淨飯王及び夫人に報へて言く、『唯、願くは大王、諦かに我が說を聽かれよ。我、先聖の諸論の相傳に從ひて、轉輪王の有ゆる自在功德を悉く具するを說かん。若し、轉輪王の人民を治化するや、彼の轉輪王、必ず能く虛空を飛騰して、行きて地上に住す。若し、時、亢旱せば、念の隨に卽ち雨ふらす。若し王界の內に、瞋恚の諸惡衆生有り、更迭ひに相嫌ひて、心に恨を懷かば、轉輪王の威德力を以ての故に、國內の衆生、各各歡喜せしむ。轉輪聖王は七寶具足す。所謂、金輪・神珠・象・馬・玉女・主藏・典兵臣等、是を七寶と名く。轉輪聖王、壽命長遠にして、終に橫死なく、病少く、惱少く、身體の端嚴、世間無比なり。其の境內に於て、一切の人民、是の王を愛敬する、猶一子の如く、轉輪聖王の、人民を愛護すること、赤子に過ぐ。』時に淨飯王、復、國師婆羅門に白して言く、『大婆羅門、仁の所說の如くんば、夫、轉輪聖王爲らん者、皆是の事有り。然らば我に非ざらんや。』時に菩薩の母、摩耶夫人、復、更に、重ねて、淨飯王に白して言く、『大王、是の事未だ怪となすに足らず。所以の者は何ぞ。此の童子は、今日、甘蔗種姓、剎利の家に生るるが故に。』時に淨飯王、復、是の言を作しぬ、『希有の事かな、轉輪聖王、人間に生れぬ。但、彼の轉輪聖王の威德、是の如く大に果報の勝業を受けて、我が心に怪を生ぜしむ。往昔、一切の轉輪聖王に、

是の如き諸ろ奇特の相有ることなし。所謂、甘蔗日種姓の王、尼拘羅王・憍拘羅王・瞿瞿羅王、或は復、我が父、師子頬王、及びまた我が身に、是の如き奇特の相有ることなし。其の事云何、復、何の因有りや。』是の時、國師及び婆羅門、復、更に淨飯王に諮白して言く、『大王當に知るべし。前有り、後有り、未だ怪と爲すに足らず。大王聞かざるべし。往昔に於て、一國王有り、耶耶坻と名く。一切の功德、悉く皆具足せり。父を婆流と名く。其の一子有り、名けて不流と爲す。不流に子有り、屯頭摩囉と名く。屯頭摩囉に子有り、伽叉福と名く。伽叉福に子有り、阿囉祇不と名く。阿囉祇不に子有り、曼帝隷耶尼と名く。曼帝隷耶尼に子有り、因羅婆毗羅と名く。因羅婆毗羅に子有り、頭疏般那と名く。是の如き等の王、大威德を具して、然かも轉輪聖王と作るを得ず。彼等の最後の頭疏般那、一子を生めり。婆羅陀と名けぬ。其の婆羅陀、方に始めて轉輪聖王と作るを得たり。往昔劫初に、刹利種有り、摩訶三摩多と名けぬ。天從りして下つて、而かも轉輪聖王と作るを得ず。其の後、次第に展轉相承して、頂生轉輪聖王に到り、王領、乃至、三十三天・祖父・子孫・苗裔、繼續すれども、猶自ら退滅して、轉輪聖王と作るを得ず。』時に淨飯王、復、是の言を作すらく、『大婆羅門、此の言善となす。何を以ての故に。我、亦、我が子の、是の如きを得んを欲す。亦、我が子の、汝の彼の言の如くならんを願ふ。』時に、淨飯王、自

ら心に思惟すらく、『我、今若し童子を將て城に入らば、何の莊嚴を作さん』と。時に淨飯王、是の心を生じ已るや、是の時、工巧(五)毘首羯摩、卽時に七寶の莊嚴を化作す。自然にして成り、人作に由らず、端嚴微妙、殊特雙少し。時に淨飯王、卽ち嚴勅を出し、勸めて伽毘羅城を修理せしむ。一切の荊棘・沙礫・(六)磽石・糞穢・土塊を灑掃し、耘除し、惡露不馨なるを、悉く淨潔ならしむ。其の伽毘羅の種種の莊嚴、猶乾闥婆城の如く、一種も異ることなし。其の城の有ゆる種種の雜戲、一切の樂人、能く歌ひ能く舞ひて、巧みに幻化を爲す。或は弄珠有り、或は能く水を出し、或は身を莊嚴して、以つて婦女と爲る。斯の如く、種種の變化の能くする所、彼等一切皆悉く雲集す。時に、彼の大衆、或は、身を踊らして、虛空に擲在する有り。或は、復、鈴を騰げ、或は、復、鼓を打ち、或は、(七)屩屐を著け、或は竿頭に緣り、或は、復、倒行して、首下足上し、或は復、反擲すること、猶旋輪の如くし、或は虛空に懸り、繩を上りて走り、或は、復、槃槊し、或は復、跳刀し、諸の是の如き等無量無邊、種種に戲笑し、種種に示現し、或は聲を揚げて、大叫大喚するあり、或は復、吹指し、或は衣裳を弄す。

爾の時、護世の四大天王、各其の身を變じて婆羅門となり、悉く竝に幼年、端政にして喜ぶ可

【五】Viśvakarman。工巧神なり。
【六】磽。地に小石多きをいふ。
【七】屩。草屝なり。屐は卽ち鞵履なり。

し。頭に螺髻を爲し、躬ら菩薩の寶輦を擔ひて行く。是の時、釋天も亦、本形を隱して、化して童年の婆羅門子と作り、端政なること前の如し。頭に螺髻を旋らし、身には黃衣を著け、其の左手を以て、金の澡瓶を執り、復、右手を以つて寶杌を擎げ持して、菩薩の前に在り。人の行くを斷ちて、口に是の言を發す、『卿諸人の輩、宜しく各道を避くべし。最勝の衆生、今城に入らんと欲す』と。上來の四句は、梵本に再び誦して、以て心に重んずるを明かにす

爾の時、色界の大梵天王、往昔の偈を述べ、菩薩を讚じて言く、

『天上天下佛の如きなし。十方世界亦復然なり。有ゆる世間我觀じ盡すも、一切更に佛の如き者無し。』

爾の時、菩薩、天臂城、嵐毘尼園より、初めて伽毘羅に入らんと欲す。時に、一切の諸天、道路を灑掃し、復、五千の諸天玉女有り、各各、手内に一金瓶を執り、香水を盛り滿てて、以て地に灑ぎ、菩薩の前に在りて、次第に行く。復、五百の諸天玉女有り、各、諸天の微妙の播帶を持して、菩薩の前に在り、地を掃ひて行く。復、五百の諸天玉女有り、各諸天の雜寶の香爐を持し、種種微妙の香を焚燒して、菩薩の前に在り、菩薩を供養しつつ、道を引いて行く。復、五百の諸天玉女有り、金の寶瓶を持し、妙香を盛り滿てて、菩薩の前に在り、道を引いて行く。復、五百

の諸天玉女有り、各各、天の妙多羅樹葉の扇を執持し、菩薩の前に在りて、道を引いて行く。復、五百の諸天玉女有り、各各、孔雀王の尾を執持し、以て拂と爲し、菩薩の前に在りて、道を引いて行く。復、五百の諸天玉女有り、各各、多羅樹葉にて作られたる（八）筌提を執持し、菩薩の前に在りて、道を引いて行く。復、五百の諸天玉女有り、各各、手に諸天の胡牀を執り、菩薩の前に在りて、道を引いて行く。復、五千の諸餘の天女有り、各各金鈴を執り、時時搖り動かして聲を揚げ、吉祥の音を大唱し、菩薩の前に在りて、道を引いて行く。復、二萬五千の香象有り、悉く金の（九）鞦轡に、金を鞍（一〇）韉と爲し、皆金甲を被り、一切の挍餝、悉く是れ純金、其の莊具の上を、復、金網に籠め、菩薩の後に在りて、次第にして行く。復、寶馬有り、其の數二萬、悉く皆青色にして、頭黒きこと烏の如く、（一一）騣披いて地に垂れ、一切の鞦・轡・鞍・韉・鐙具、純金もて莊嚴し、天の金羅網を以て、其の上を覆ひ、菩薩の後に隨つて、次第に行く。復、二萬の衆寶妙車有り、駕するに駟首を以てし、幡蓋もて莊嚴し、天の金羅網を以て、其の上を覆ひ、菩薩の後に在りて、次第に行く。復、四萬の步兵壯士有り、皆悉く勇健にして、各千に敵し、竝に好丈夫にして、大

【八】筌提。或言遷提、謂可以遷從提挈也。或作筌提、言以筌草爲之也。非此方物、出崑崙山也。（惠琳音義）筌は一種の香草なり。

【九】鞦、牛馬の尾にかくる紐、しりがき。

【一〇】韉はしたぐら。

【一一】騣は馬冠也、又馬頂上長毛鬣也。（可洪音義）

筋力有り、能く怨隙を破る。身に甲鎧を被り、手に弓刀を執り、或は鐵輪を把り、或は戟槊を持ち、是の如く、次第に、菩薩の後に在り、(三)翊從して行く。復、色界の無量無邊の最大威德の諸天衆等有り、菩薩の右廂に在りて行く。復、欲界の無量無邊の最大威德の諸天衆等有り、菩薩の左廂に在りて行く。復、無量無邊の龍王・夜叉・揵闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽・(三)鳩槃茶・羅刹・(四)毗舍遮等有り、半身を出現し、各各衆雜の妙華を執持し、虚空中に滿ち、菩薩に隨つて行く。復、無量無數、無邊億百千萬の諸天神王有り、歡喜踊躍、皆悉く遍滿して、自ら勝ふる能はず、聲を揚げて叫喚し、或は、又、指を吹き、或は舞ひ或は歌ひて、殊異の音を發し、或は衣裳を弄し、或は手足を弄して、諸の戲樂を作し、或は種種の末香・塗香・華鬘・瓔珞、蔓陀羅等の種種の諸華を持し、各自手に擎げて、菩薩の上に在り、虚空中に於て、行く行く菩薩に散じ、散じ已りて、復、散ず。一切の諸天、是の菩薩の威德力を以ての故に、人氣を聞かず。一切の諸人、天色を觀ると雖も、亦、驚嗟せず、復、放逸ならず。

爾の時、一切の釋種眷屬、四種の兵、——車兵・馬兵・象兵・歩兵——を將ゐて、菩薩を圍繞し、或は前、或は後、或は左、或は右に、菩薩に從つて行き、迦毗羅城に充塞遍滿す。其の淨飯王は、

【三】翊はつつしむなり。

【三】Kumbhāṇḍa。甕形と譯す。

【四】Piśāca。食血肉鬼と譯す。

大王の力、大王の威德を持つて、無量の大鼓小鼓を擊ち、復、無量無邊の螺貝を吹く。諸是の如き等の無量無邊の、種種異類の雜妙の音聲は、菩薩を娛樂せしめ、導引して將に迦毗羅城に入らんとす。

時に、迦毗羅に、城を去ること遠からずして、一天祠有り、神を增長と名けぬ。彼の神舍の邊に、常に無量の諸釋種族有り、童男・童女、跪拜して乞願し、恒に心に稱ふを得たり。時に、淨飯王、菩薩を將て還り、彼の天舍に至り、諸臣に告げて言く、『今、我が童子に、是の大天神を禮拜せしむべし。』爾の時、乳母、菩薩を抱持して、彼の天祠に詣る時、更に、別に、一の女天神有り、名を無畏と曰ふ。彼の女天の像、其の自の堂より、下りて菩薩を迎へ、合掌恭敬して、頭面に菩薩の足を頂禮して、乳母に語りて言く、『是の勝れる衆生よ、侵毀を生ずる莫れ。此の上の兩句梵本に重ねて稱す。彼をして我を跪拜せしむべからず。我應に彼を禮すべし。何を以ての故に。彼に禮せらるるや、能く人をして面破れて、七分ならしむればなり』と。

卷の第九

従園還城品第七の下

爾の時、迦毗羅城に、諸釋種の五百の大臣有り、皆悉く是菩薩に於て眷屬たり。還つて、復、五百の精舍を造立して、菩薩の坐に擬し、菩薩の初めて城に入る時に當り、各各立つて自家の門前に在り、歡喜の心を以て、合掌恭敬して、是の言を作す、『願くは、天中天、我が精舍に入れ。願くは、大船師、我が精舍に入れ。願くは、身金色、清淨の衆生、我が精舍に入れ。願くは、一切に歡喜心を施す者、我が精舍に入れ。願くは、名遠く聞えて毀缺する無き者、我が精舍に入れ。願くは、德最も尊く、無等等なる者、我が精舍に入れ』と。時に、淨飯王、是の如き等の五百の親眷の爲に、憐愍を生ずるが故に、菩薩を將て、次第に歷巡して、其の精舍に入り、悉く皆周遍し、然る後に始めて將て自宮に入る。

爾の時、菩薩の生日に當りて、即ち五百の諸釋種の子有り、同日にして生る。菩薩魏魏として、最も御首たり。復、五百の諸釋種の女有り、亦、同日に生る。(一)耶輸陀羅を上首と爲す。復、五

【一】 Yaśodharā（ヤショーダラー）

百の諸釋の奴僕有りて、亦、同日に生る。淨飯王の宮の〔二〕車匿を首と爲す。復、五百の釋種の婢〔三〕媵有りて、亦、同日に生れ、淨飯王の宮に、太子に侍衞す。復、五百の鮮白なる馬駒有りて、亦、同日に生る。淨飯王の厩の〔四〕揵陟を首と爲す。復、五百の大香象王有り、色の白きこと雪の如く、齊しく六牙有り。王宮の門に在り、忽然として現れぬ。復、五百の大臣の伏藏有り、四面を周匝し、迦毗羅を繞つて、自然に現れぬ。復、五百の妙好の園林有り、流泉・浴池、種種の華果、皆悉く遍滿し、竝に現れて迦毗羅城に在り、四面に周匝す。悉く是、太子の威德の力の故なり。復、五百の大商賈主有り、諸の錢財を積み、多饒の珍寶を相隨へて、迦毗羅城に來り詣る。復、五百の微妙の傘蓋、五百の金瓶有り、竝に是れ五百の粟散諸王、使を遣はして送り來り、淨飯王に上つて、是の如き言を作す、『今、是の物を以つて、大王に奉獻し、太子を慶賀す』と。復、五千の諸の婆羅門、及び刹利種の大富長者有り。各、己が女を持し、將て來つて淨飯王に奉上す。時に、淨飯王、凡そ所須の者は、皆悉く備具しぬ。時に淨飯王、自ら心に思惟すらく、『我、太子を生む。今何の名をか作さん。』復、更に思惟すらく、『彼が生れたる日に、一切の衆事、皆悉く自ら成れり。今、我、太子の爲に名を立て、名けて成利と爲すべし』

【二】Chandaka（チャンダカ）
【三】媵。王侯に嫁せる夫人に從ひ來る同姓の女子をいふ。
【四】Kanthaka（カンタカ）

と。時に、淨飯王、即ち藏を開いて百億兩の金を出し、成利を供養し、爲に名字を立てぬ。是の故に偈に言く、

『是の如く王宮の内、衆事悉く豐饒なり。
今太子の名を作つて、應に成利と名くべし。』

相師占看品第八の上

時に、淨飯王、卽ち相師の占觀を解する者を召し、呼んで前に來らしめ、太子を看しめて、是の如き言を作す、『汝、諸の相師、婆羅門等、是の太子の、我が族中に在りて、好たるか惡たるかを占へ。汝等好く吉凶の相を看よ』と。

是の時、諸の相師、婆羅門等、王の勅を聞き已り、一心に太子の形容を瞻仰し、各、先聖の有ゆる諸論に依つて、共に相量宜す。量宜し訖るや、王に白して言く、『大王、今、大に衆利を得たり。何を以ての故に。此の太子は大威德有り。此の大衆生、今、王家に生れぬ。大王、當に知るべし。此の太子の身に、三十二大丈夫の相有り。凡そ一人有りて、三十二丈夫相を具せば、世間中に於て、則ち二種の果報の差はざる有り、更に餘異無し。何等をか二と爲す。一は、若し家に在りて世樂を受けば、則ち轉輪聖王と作るを得て、四天下に王となり、大地を護持して、七寶具足し、乃至、刀杖を用ひずして人を化し、自然如法、海內に遍からん。若し王位を捨て出家學道せば、如來應正遍知を成ずるを得、名稱遠く聞えて、世界に充滿せん。』

時に淨飯王、是の記を聞き已り、復、更に、重ねて、婆羅門に問うて言く、『太子の何れの處

か、是れ大丈夫三十二相なる。』婆羅門言く、『三十二種大人の相とは、一は太子の足下、安立して皆悉く平滿なり。二は、太子の雙足下に、千輻輪の相有り。端正、中に處り、淸淨にして喜ぶ可し。三は、太子の手指、纖長なり。四は、太子の〔一〕足跟圓かに好し。五は、太子の〔二〕足趺高隆なり。六は、太子の手足柔輭なり。七は、太子の手足の指間に、羅網を具足す。八は、太子の〔三〕腨、鹿王の如し。九は、太子正立し、曲らずして二手膝を過ぐ。十は、太子の陰、馬藏の相あり。十一は、太子の皮膚、一孔に一毛旋り生ず。十二は、太子の身毛、上に靡く。十三は、太子の皮膚、細輭にして〔四〕兜羅綿の如し。十四は、太子の身毛、金色なり。十五は、太子の身體、淳淨なり。十六は、太子の口中、深好にして喜ぶ可く方正なり。十七は、太子の頰車、方正にして師子王の如し。十八は、太子の兩脛、廣闊なり。十九は、太子の身體、上下縱廣、正等なること、〔五〕尼拘樹の如し。二十は、太子の七處滿好なり。二十一は、四十齒を具す。二十二は、諸齒齊密なり。二十三は、齒、疎缺ならず、〔六〕齟ならず、〔七〕齲ならず。二十四は四牙白淨なり。二十五は、身體滿淨、純黃金色なり。

【一】跟はきびす。
【二】趺はあしのかふ。
【三】腨はこむら。或は踹(くびす)に作る。
【四】兜羅(ツーラ)綿とは、草木花絮、又は野蠶繭。
【五】尼拘樹(Nyagrodha)、端直無節、圓滿愛すべく、地を去る三丈餘にして、方に枝葉あり、其の子の微細なる、柳花子の如しといふ。
【六】齟は齒齊はず、くひちがふ。
【七】齲はやへば。

二十六は、聲、梵王の如し。二十七は、舌、廣長・大・柔輭・紅薄なり。二十八は、食する所のもの皆上味なり。二十九は、眼目紺靑なり。其の三十は、太子の眉・眼・睞[八]、牛王の如し。三十一は、眉間の白毫、右旋宛轉し、具足、柔軟、清淨の光鮮かなり。三十二は、頂上の肉髻、高廣平好なり。大王、此は是、太子三十二種の大丈夫相、是の如く具足せり。若し一人有りて、此等の丈夫の相を具足せば、是の人の得る所の二種の果報、在家と出家と、上に說く所の如し。』

時に、淨飯王、諸相師の是の語を說くを聞き已り、心大に歡喜して、遍體踊躍、自ら勝ふる能はず。卽ち種種百味の飲食を出して、彼の相師婆羅門等に設け、其をして自恣隨意に飽滿せしめ、復、種種雜妙の衣服、種種の諸寶、及び餘の資財を以て布施するの時、淨飯王、迦毗羅大城の內に於て、四衢の道頭及び諸の街巷の處處に遍滿して、無遮會を立て、凡そ所須の物は、皆悉く給與す。食を須むるには食を與へ、飲を須むるには飲を與へ、衣を須むるには衣を與へ、香を須むるには香を與へ、牀敷を須むるには牀敷を與へ、房舍を須むるには房舍を與へ、資財を須むるには資財を與へ、駄乘を須むるには駄乘を與へ、有ゆる功德、皆悉く廻施して、並に太子の身を資益するを爲しぬ。

【八】睞は映、卽ちまつげなり。或は睫に作る。

是の時、菩薩、天臂城の嵐毗尼園に在りて、母胎より初めて出生する時、正憶正念にして、大光明を放ち、世界に遍滿す。又、此の大地、六種に震動して、十八相を備へぬ。爾の時、地居の諸天・諸仙、此の瑞を見已り、歡喜身に遍ねく、自ら勝持せず、聲を揚げて叫喚し、大語を發して言く、『今日、閻浮の嵐毗尼中、菩薩出生して、一切の天人世間の爲に、大安樂を作し、諸の無明黑闇の衆生の爲に、大光照を作す』と。時に四天王、彼の地居の諸天諸仙の大聲を發するを聞き已り、其四天王、所在の諸天、此の語を傳聞して、復、大に歡喜して、大音聲を發し、衣裳を戲弄して、是の如き言を作す、『今、人中に於て、菩薩の出生せるは、諸世間の安樂明の爲の故なり。』三十三天、四天王の叫喚の音聲を聞き、亦、大に歡喜し、是の如く、乃至、須夜摩天は忉利より聞き、兜率陀は夜摩より聞き、化自樂天は兜率より聞き、他化自在は化樂より聞き、展轉して、復、色界に至り、梵天は他化より聞き、梵衆天は梵天の處より聞き、梵輔天は梵衆天より聞き、大梵天は梵輔天より聞き、光天は彼の大梵天より聞き、少光は彼の光天の處より聞き、無量光天は少光より聞き、光音天は無量光より聞き、淨天は彼の光音天より聞き、少淨天は淨天の處より聞き、無量淨天は少淨より聞き、偏淨天は無量淨より聞き、廣天は彼の遍淨天より聞き、廣天より少廣天に到り、少廣天より無量廣に至り、無量廣より廣果天に至り、廣果天より熱

天に至り、熱天より無熱天に至り、無熱天より無比天に至り、無比天より善現天に至り、善現天より、是の如く、次第に、一剎那の頃に、乃至阿迦尼吒一切の諸天に到り、各各唱言すらく、『今日、菩薩、世間に生れて、天人の爲に、大安樂を作し、黑暗盲冥の衆生の爲に、大燈明と作る。』

爾の時、(九)一阿私陀仙有り、三十三天の上に在りて安居す。彼の諸天の、歡喜踊躍して、自ら勝ふる能はず、或は衣裳を弄して、聲を揚ぐること前の如きを見、見已りて、卽ち彼の諸天に問うて言く、『仁者大德、三十三天、今、何を以ての故に、歡喜踊躍、身中に遍滿して、自ら勝ふる能はず、復、大に叫喚して、手に衣冠を弄するか』と。是の語を說き已りて、三十三天、彼の仙人、阿私陀に報へて言く、『阿私陀仙大德、聞かずや。今、人世間、閻浮提の地・北方雪山の下に當りて、釋種の城有り、迦毗羅と名く。彼の城に王有り、名を淨飯と爲す。彼の王の最大夫人、子を生む。極大端正、喜ぶべく、絕殊、身色黃金、頭は傘蓋の如く、鼻高くして圓直、兩臂下垂し、形體端嚴に、六根具足して、處處皆充つること鑄金の(一〇)挺の如く、三十二大丈夫の相を具し、八十種の微妙の好を備ふ。大仙、彼の菩薩、決定して阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、成じ已りて、決定して無上の淸淨法輪を轉ぜん。而して彼の菩薩、能く一切の天・人・魔・梵・沙

【九】Asita

【一〇】挺（挺に通ず）又鋌に作る。挺はてこにして、鋌あらがねなり。

門・婆羅門等の諸世間中に於て、自ら諸通を證し、諸通を證し已りて、正法を闡揚せんに、其の法祕密にして、初・中・後ともに善く、義味深妙に、具足して清淨の梵行を說かん。彼の說法の時、有ゆる一切の諸衆生等、聞法を以ての故に、生法ある者は生法を斷絕し、老法を受くる者は其の老法を斷じ、病法を受くる者は病法を斷ずるを得、死法を受くる者は死法を斷ずるを得、憂愁苦惱、悉く斷除するを得て、其の根本を滅せん。』阿私陀仙、彼の三十三天より聞き已りて、心に重信を生じ、卽ち彼の天に於て、身を隱し、來下して增長林に現ず。

爾の時、復、說いて是の如く言ふ有り、『南天竺の地に一城有り、〔一〕優禪耶尼と名く。城を去る遠からずして、山を〔二〕頻陀と名く。其中間に於て、更に一山有りて、阿私陀と名く。是の時、仙人、彼の山に於て居る。彼の山を以ての故に、卽ち仙人を稱して、阿私陀と名く。其仙人、忉利天より下りて、彼の山に在る時、阿私陀仙、一侍者の那羅陀と名くるを將て、彼の山中より、隱身して、此迦毗羅城に來り、城を去る遠からずして、下りて立ち住り、是の思惟を作しぬ、『我、昔、此の迦毗羅城に於て、衆國師及び婆羅門の、淨飯王、菩薩子を生めりと云へるを聞きぬ。彼は是、天人及び我等の師、輕忽なるを得ず。若し我、今、迦毗羅城に於て、神通を現じて入らんは、此の理有ること無し。何を以ての故に。

〔一〕Ujjayanī。
〔二〕Vindhya。

迦毗羅城は往昔に同じからず。今日、若し往かば、應に、更に其の餘の異相を現ずべし。我、應に、彼を敬ひて尊神に事ふる如くすべし。我、寧ろ歩行して、彼の城内に入らん』と。時に、阿私陀及び其の侍者那羅陀、身ら徒歩して共に迦毗羅城に入り、小巷の裏より、竊に淨飯王の所に向はんと欲して、宮門の前に到る。時に迦毗羅は、人民稠閙して、處處に徧滿し、間に空有ることなく、菩薩の爲の故に、大莊嚴を作す。

時に、諸の大衆、彼の仙人の、歩行して來りて、迦毗羅に入り、復、小巷より淨飯大王の宮門に趣向するを見、見已りて、無量無邊の人民、雲雨のごとく集り、仙人に隨逐して、心に驚愕を生じ、怪めども、何の義を以ての故に、仙人の此に至るかを敢へて問はず。時に、彼の大衆、城内の人民、或は自家の門前に在りて立ち、或は窻邊に在り、或は构欄に倚り、或は臺頭に在り、或は屋上に在りて、彼の仙人を觀、各相謂つて言く、『往昔、此の仙、迦毗羅婆城に來入せし時や、大神通に乘じ、空に騰りて行きて、淨飯大王の宮中に到りしを、今日歩行して來つて城に入るは、我等、何の義を以ての故に、歩渉して來れるかを知らず』と。

時に、阿私陀、淨飯王の宮門の前に至り已り、門に當る人に語つて、是の如き言を作しぬ、『我婆羅門は、久來耆耄して、猶祖父の如きに、今日の歩行、翻つて年少二十の小兒に似、那羅陀童

子と來る。其の那羅陀は、年始めて八歳なり。汝、我が爲に淨飯王に白すべし。』時に守門の者、仙人に語つて言く、『尊者の教の如く、我當に奉諮すべし。』卽ち宮門に入り、漸漸にして行きて王前に到り、具に以て王に白す。時に淨飯王、此の語を聞き已りて、心大に敬仰して、歡喜無量なり。卽ち座より起ち、彼の通事守門の人に語つて言く、『汝、急疾に、仙人を引きて、將て來れ。淹遲せしむる勿れ』と。時に守門の者、仙人の所に還りて、是の言を作さく、『大仙、時を知れ。宜しく速かに宮に入るべし。』時に阿私陀、彼の語を聞き已るや、卽ち侍者那羅陀と共に、淨飯王の宮に入る。時に淨飯王、遙かに殿に在りて、阿私陀仙の、漸漸にして行き、將に王の所に至らんとするを見、是の時、大王、卽ち座より起つて、仙人の所に詣り、承事迎接し、其の腋を扶持して、好最勝、最妙第一、希有の寶座を將つて、安置して坐せしめ、坐し已つて禮拜し、口に是の言を唱ふらく、『我、今、恭敬して尊者を禮拜す』と。是の時、仙人、口づから卽ち淨飯王を呪願して言く、『唯願くは、大王、常に安樂を得んことを』と。時に、淨飯王、仙人に白して言く、『尊者、何を求むるが故に、屈して此に到れる。衣を須つが爲か。食を須つが爲か。復、其の餘の諸事を求め須つが爲か。須つ者は但道へ。我、悉く備具し、必ず與へて違はざらん』と。時に阿私陀、王に諮白して言く、『大王、當に知るべし。今、我が來れるは、乏少する所無し。

衣食を求めず。一切の諸事、悉く須たざる所。然るに、我、今、故らに遠くより來れるは、大王の最勝の童子を見んと欲すればなり。大王の慈恩、願くは當に我に善勝の童子を示すべし』と。是の時、童子、寶座に在りて、睡臥眠寢す。淨飯王、阿私陀に語つて言く、『尊者大仙、少らく心を留めよ。童子、今、眠りて猶未だ覺悟せず。願くは、須臾を待て』と。時に、阿私陀、即ち王に白して言く、『大王、是の如き語言を說きて、童子を、睡ると稱ふなかれ。何を以ての故に、我等は寤むと雖も、猶、睡人の如し。大王の童子は久來斷除して、復、眠睡無く、晝夜恒に諸の衆生等の、安樂を得んが爲の故に、大利益の故に、禪定に入る。』

時に、淨飯王、童子の眠、寤むる時の至らんとするを知り、即ち宮內に入り、勅して、宮舍殿堂を莊嚴せしめ、淨水を地に灑ぎ、糞穢を掃除し、香水を重ね灑ぎ、華を其の上に散じ、在在處處に香鑪を安置し、雜の妙香を燒き、復、種種の繒綵の幡蓋を懸け、諸の旒蘇を垂れ、大寶幢を竪て、復、無量の眞珠の瓔珞、眞珠の羅網、種種の寶鈴を懸け、其上に垂覆して、衆くの雜寶を懸くる、猶日月星宿の光の如し。復、種種の妙寶の衣裳を掛くること、喩ば飛天の、手に華瓔を持つが如し。復、雜色、朱紫紅黃の種種の〔三〕衆毦を懸く。諸是の如き等の校飾もて精麗に宮中を莊嚴すること、乾闥城の如くにして、一種

〔三〕毦、毛飾也(可洪音義)、罽也、織毛曰罽(慧琳音義)

も異ることなし。復、釋種内外の眷屬、最大最勝の威德尊者を召して、來つて宮に入らしめ、摩耶夫人と共に一處ならしむ。是の時、摩耶、童子の所に詣り、至り已りて、手もて童子の頭を抱きて仙人に向はしめ、仙人の足を禮拜する如くに擬す。是の時、童子、威德力の故に、其の身自ら轉じて、足、仙人に向ふ。時に淨飯王、更に、復、共に扶けて童子の頭を廻らし、仙人を拜せしむるに、童子の力の故に、足還、自ら轉じて、彼の仙人に向ふ。時に淨飯王、復、童子の頭を廻らして、仙人に向はするに、還、復、足を轉ず。是の如くして三たびに至りぬ。其の阿私陀、遙かに童子を見るに、是の時、童子、常光明を放ち、大地を照燭す。童子の威德、端正、喜ぶべく、色は純黃金にして、頭は寶蓋の如く、鼻直くして圓かに、脩き臂下垂し、支節正等にして、缺くる無く、減ずる無く、具足莊嚴す。

時に、阿私陀、卽ち座より起ち、王に白して言く、『大王、童子の聖頭を將つて、我に廻らし向はす莫れ。何を以ての故に。彼の頭は、我が足を頂禮すべからず。我が頭、應當に彼の足を頂禮すべし。』復、是の言を唱ふらく、『希有なり、希有なり、大人の出世。最大の希有なり、大人の出世。我、本、天より聞く所の者。卽ち此童子は、眞實なり。定んで是、彼の如くにして、異ならず』と。時に阿私陀、衣服を整理し、右肩を偏袒ぎ、右膝を地に著け、其兩手を伸し、童子を

抱持して、其の頂上に安んじ、復、本座に還る。本座に坐し已りて、還、童子を下して膝上に置く。是の時、摩耶國大夫人、卽ち大仙阿私陀に白して言く、『仁者尊師、當に童子をして大仙の足を禮せしむべし。』阿私陀仙、夫人に報へて言く、『國大夫人、是の語を作す莫れ。今、是の童子は、應に我を禮すべからず。我、及び一切の諸天、世人は、應に足に接して童子を禮拜すべし。』時に、淨飯王、卽ち種種雜妙の珍寶を持て、阿私陀仙に(四)嚫施す。時に、阿私陀、自らの澡罐を持し、水を以て手を洗つて、此の施物を受け、受け已りて、卽ち持して童子に廻らし奉る。時に淨飯王、阿私陀大仙人に白して言く、『尊者大仙、我、此の物を以て、尊者に施しぬ。唯願くは納受せよ』と。仙人報へて言く、『大王、我に施せり。我、今、最勝の童子に廻施す。』淨飯王言く、『我、大王の(五)福田勝るを知るが故に、大師を供養す』と。阿私陀仙、復、王に報へて言く、『我、今、是の勝因緣を見るが故に、童子に廻施す』と。淨飯王言く、『大聖尊仙、我、今、尊師の此の意を解せず』と。仙人、復、言く、『大王、當に知るべし。我、今、身心、深く自ら此の童子に歸伏す。』淨飯王言く、『何の因、何の緣ぞ。願くは爲に解釋せよ』と。時に、阿私陀、卽ち王に報へて言く、『大王、諦心に、善く是の義を聽かれよ。我、當に、王

【四】嚫は噠嚫(Dakṣiṇa)、卽ち布施の略

【五】福田、將來の福德の果を收むべき田に喩へていふ。

の爲に其の本末を說くべし。大王、當に知るべし。我、昔、忉利天の上に在りて、安居行道せり。忽ち忉利の一切の諸天の、歡喜踊躍、其身に充遍して、自ら勝ふる能はず、衣冠を舞弄して、跳擲悅豫せるを見、我、時に、彼に於て、卽ち問うて言く、「諸天仁者、何の因、何の緣もて、歡喜騰躍して、自ら勝ふる能はず、衣冠を執持して、舞弄〔二六〕躑躅するか」と。是の語を作し已るや、忉利の諸天、卽ち我に答へて言く、「大德仙人、汝、今、知るや不や。下世間、北方地內、雪山の下に於て、釋種の城有り、迦毗羅と名く。彼の城に王有り、名けて淨飯と爲す。彼の城の最大第一夫人、一童子を產めり。端正にして喜ぶ可く、人の見るを樂む所なり。身、黃金色にして、頭圓く鼻直く、足滿ち臂長くして、猶金像の如く、三十二大人の相、八十種の好を備具す。必定して阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得て、當に無上の淸淨法輪を轉ずべし。今、此の童子、相貌具足す。決して是れ疑無し。今、此の童子、自らの神力を以て、能く此の世及び過去未來世等を知り、天・人・魔・梵・沙門・婆羅門等の、一切の世間を、自ら證知し已りて、法相を分別し、乃至、種種の苦惱を略說して、解說すべき者に解說を得しむ。」大王、我、彼の時に於て、是の語を聞き已るが故に、來つて此に至りて、童子を觀看る』と。

〔二六〕躑躅。行いて進まず、卽ち足を駐めて進まざるをいふ。

時に、淨飯王、仙人に報へて言く、『若し是の如くんば、大に我を憐愍し、大に我を饒益して、（一七）復、憂愁無からん。更に何の法有つてか、四種行を過ぎ、四行過ぎ已りて、能勝能最たらん。今、此の童子は、既に人の生む所、能く未來に於て無上道を得んや。』阿私陀仙、復、王に白して言く、『大王、當に知るべし。彼等一切の諸婆羅門、在在處處に、云何んが勝を得て證知するか。』時に、淨飯王、復、更に、仙人に諮白して言く、『我、今、大仙の前に在り。願くは爲に解說して、我をして樂み聞かしめよ。』時に、阿私陀、答へて言く、『大王、我が婆羅門家に相傳する如きは、四毗陀經に說く、往昔、一婆羅門有り、名けて羖羊と曰ふ。復、婆羅門有り、拔迦利と名く。復、婆羅門有り、拔伽婆と名く。復、婆羅門有り、末檀地と名く。復、婆羅門有り、迦叱囉唎と名く。復、婆羅門有り、般遮尸棄と名く。彼等、皆、阿修羅王の算計の法を得、勝を得、上を得たり。復、仙人有り、阿帝利耶と名く。復、一王有り、鉢囉摩檀那と名く。復、一王有り、闍那迦と名く。是等の諸人は、皆身苦を除滅する方便を得たり。大王、當に知るべし。是の如く是の如し。今、此の童子、人間に生ると雖も、人に過ぎ、勝人の法を得たり。大王、復、一王有り、婆伽羅と名く。大海奔濤して、波浪山の如く、甚だ渡るを得難きを、祖にあらず、父にあらず、彼の身能く渡れり。大王、諸の是の如き

【一七】無復憂愁を諸本に無復憂愁に作る。

等、人間に生ると雖も、大威德有り。威德を以ての故に、諸の天人に過ぎたり。』

時に、淨飯王、仙人に答へて言く、『若し尊師の宣說する所の如くんば、我、疑有ること無し。但、我れ子を愛して其の心狹劣なるが故に、驚恐を生ず。』阿私陀仙、復、王に語つて言く、『大王の有ゆる心の狐疑なるものを、今、諮問すべし。悉く爲に之を決せん。』時に、淨飯王、白して言く、『大師、我、實に疑を懷く。彼往昔に有りし如き、調淨王、多羅求王、知離婆王、達離波王の諸是の如き等は、曾て見るを得ず、曾て知るを得ず。我が此童子、云何ぞ、此事を知るを得、見るを得ん。願くは因緣を說け』と。時に、阿私陀、復、王に報へて言く、『大王、我も亦、王の、是の疑惑有るを知る。言の無きを得ず。何を以ての故に。大王、但、他の說く所の事を聞き、意を以て消息籌量して之を取り、用て自ら疑を決せよ。凡そ諸王の作す所の前後は、未だ必ずしも一向に證驗有らず。大王、彼等諸王子及び父祖は、勝劣同じからず。是の故に、大王、種姓のみ、獨り其の勝を取るべからず。家を以てのみ、獨り其の勝を取るべからず。先生を以ての故に勝る、後は如かずと爲す可からず。或は後出して先生に勝るあり。大王、[一八]譬へば天曉の時、先づ明相を現はし、然る後に日を出す如し。其の明相を論ずれば、未だ照明する能

【一八】原文「譬如天曉之時、先現明相、然後出日、爲其明相、未能照明、其日後出、普光大地」

はず、其の日後に出でて、普く大地を光らし、一切の闇を破りて遺餘有ることなし。大王、世間は是の如く是の如し。或時は生子、父に勝り祖に勝る。』時に淨飯王、仙人に白して言く、『大德尊師、善く譬喩を以て事を證明し、我を慰解して疑を決し、心の大安穩を得しむ。大仙尊師、善く我を攝受す。』時に阿私陀、復、王に白して言く、『大王、當に知るべし。我が齒、衰邁して餘殘幾くも無し。今、此の童子は、幼稚の少年、春秋方に盛なり。長大成就して、當に山林に向つて出家學道すべし。恨むらくは、我、朽耄して、慈眼を覩ざるを』と。時に、淨飯王、仙人に白して言く、『大仙尊師、今、是の童子、決して出家するや。』阿私陀仙、王に報へて言く、『大王、今は疑慮すべからず。』時に、淨飯王、迴頭顧視して、國師の面を看ぬ。時に、阿私陀、王に問うて言く、『大王、內心に何の語を作さんと欲する。』淨飯王言く、『大德尊仙、此の我が國師婆羅門等、曾て我に語つて言く、「今、此の童子、必定して轉輪聖王と作るを得べし」と。』阿私陀仙、復、王に白して言く、『大王、我が意の如くんば、終に虛妄ならず。我が今語る所は、誠實至眞なり』と。時に淨飯王、是の語を聞き已り、復、更に白して言く、『大仙尊師、若し審に然らば、乃ち我が心をして、更に大に憂愁して、我が心を切割し、肝腸惱沸せしむ』と。時に阿私陀、復、王に報へて言く、『大王の智慧、是の言を作す勿れ。大王、往昔、高曾、祖父、福業を行

せる功德の緣を以ての故に、衆生を度して彼岸に到るを得たり。是の如き匠導、託して王の兒と作るは、但、獨り人民を治化して、安樂を得しめんが爲めのみにして、王子と爲れるにあらざるなり。』時に、淨飯王、復、仙に白して言く、『大師、我が意も亦然り。思惟するに、是の如し。今、此の童子、我が王世を種ゐ、重擔を荷負して、我が憂ふる所に代らば、我、老年に到り、出家入山して、當に古道を修すべし』と。

時に、淨飯王、復、仙に白して言く、『大師、我が意は我が子をして常に在らしめんと欲す。云何が方便もて、今の幼年に及んで、我を捨てしむる勿らん。』阿私陀仙、復、王に白して言く、「大王、我、實に專正に決定して、是の方便を說きて、障礙を作さしむる能はず』と。時に、淨飯王、復、仙人に語つて、是の如き言を作す、『大師、善く聽け。我、今、當に種種の方便を作し、方便を設け已りて、我が子をして今の幼稚より、及び盛年に到り、暫くも離るるを聽さず、我を捨てて出家せしめざるべし。』阿私陀仙、卽ち王に問うて言く、『大王、今、何事に因っての故に、是の如きの語を說くか。』時に、淨飯王、彼の仙人阿私陀に報へて言く、『尊師當に知るべし。我が國内の有ゆる相師、婆羅門等の如き、皆我に語つて言く、「若し是の童子、在家せば、當に轉輪聖王と作るべし」と。是の因緣を以て、我、是の如くに語る。』阿私陀仙、復、王に白して言く、

『大王、當に知るべし。彼等相師、皆大に妄語せり。何を以ての故に。是の如き勝相は、是、轉輪聖王の相に非ず。今、此童子は百の（一九）善相、八十の隨形有り、挺特殊好、分明炳著にして、皆悉く具足す』と。時に淨飯王、仙人に問うて言く、『大師、何等か是、此童子の八十隨形の好なる。』時に阿私陀、具さに王に白して言く、『大王、當に知るべし。今、此の童子、兩手の掌內に、金剛の文あり。大王、今、是の童子の諸指の爪甲、薄くして且つ輭なり。大王、今、是の童子の諸指の爪甲、其の色赤紅にして、猶（二〇）銅鍱の如し。大王、今、是の童子の諸指の爪甲、悉皆潤澤なり。大王、今、是の童子の諸の指妙色あり。大王、今、是の童子の諸の指皆（二一）牖し。大王、今、是の童子の（二二）踝骨現はれず。大王、今、是の童子の兩膝團圓にして大光液あり。大王、今、是の童子の進止、雍容安詳として徐歩す。大王、是の童子の行くや師子王の如し。大王、是の童子の行くや猶牛王の如し。大王、是の童子の行くや猶鵞王の如し。大王、是の童子の行くや、安詳として徐歩すること、猶（二三）耳璫の如し。大王、是の童子の行くや、安庠として住まるが如し。大王、是の童子の身は形體（二四）挺直なり。大王、是の童子の身は形體柔輭なり。大王、是の童子の身は形體滑澤なり。大王、是の童

【一九】相の三十二、好の八十を合して、相好といふ、共に容姿の具備せるにいふ。
【二〇】鍱はいたがねなり。
【二一】牖はひとし又直しの意。
【二二】踝はくびすなり。
【二三】耳璫は耳に貫く飾。
【二四】挺は特にぬき出るなり。

子の身は、膚體上充す。大王、是の童子の身は、妙なる薫香を出す。大王、是の童子の身は膚體無上なり。大王、是の童子の身は膚體整肅なり。大王、是の童子の身は支節分解して各自分明なり。大王、是の童子の身は、膚體顯現じて大梵王の如し。大王、是の童子の身は膚體戻ること無し。大王、是の童子の身は、膚體淸淨にして（二五）黒皯有ることなし。大王、是の童子の身は、諸病有ること無し。大王、是の童子の身は圓滿正等なり。大王、是の童子の身は七處齊滿なり。大王、是の童子の身は、諸好を具足す。大王、是の童子の身は遍體端正なり。大王、是の童子の身は、行く處淳淨なり。大王、是の童子の身は、最勝無垢にして諸毛淸淨なり。大王、是の童子の身は、垢障有ること無く、能く淨光を出す。大王、是の童子の身は、常に一尋を光らす。大王、是の童子の腰は猶（二六）弓弝の如し。大王、是の童子の腹は破壞有ることなし。大王、是の童子の（二七）齌は、深隱妙好なり。大王、是童子の齌は、團圓にして散せず。大王、是の童子の齌は、猶車輪の如し。大王、是の童子の齌は、分明にして右旋す。大王、是の童子の手は、麤ならず澁ならず。大王、是の童子の手は兜羅綿の如し。大王、是の童子の手は、掌心の中、文理晝深なり。大王、是の童子の手は、文理（二八）冊

【二五】皯。くろし。或は皯に作る。皯は病の爲に黒氣あるをいふ。
【二六】弝。弓を手に執る處、ゆづか。或は把に作るべし。
【二七】齌は臍に同じ。
【二八】冊。簡冊にして手文の象が之に似たるをいふ。

畫して、柔輭の光澤あり。大王、是の童子の手は、文、破散せず。大王、是の童子の手は、有らゆる冊文、分明に次第す。大王、是の童子の兩腕は闊大なり。大王、是の童子の頭は、猶髁骨の如し。大王、是の童子の口脣の色は、猶(二九)頻婆羅果の如し。大王、是の童子の面は、顔貌寂靜なり。大王、是の童子の舌は、薄くして且長く、赤銅色の如し。大王、是の童子の聲は、深くして清亮なり。』

【二九】頻婆羅果（Bimba-phala）。林檎に似て、其色鮮明の赤なり、以て婦人の唇色に喩ふ。

卷の第十

相師占看品第八の下

『大王、是の童子の音は、言語哀美、淸揚にして遠く震ふ。大王、是の童子の口は、四牙廣大なり。大王、是の童子の牙は、悉く皆銳利なり。大王、是の童子の牙は、缺けず破れず。大王、是の童子の鼻は、端立圓直にして鸚鵡鳥の如し。大王、是の童子の眉は、齊平にして密なり。大王、是の童子の耳は、穿環して垂埵す。大王、是の童子の耳は乖かず戾らず。大王、是の童子の耳は麤ならず澀ならず。大王、是の童子の眼は缺減有ること無し。大王、是の童子の眼は傷損有ることなし。大王、是の童子の身は、諸根寂定なり。大王、是の童子の面額は、最勝上なり。大王、是の童子の髮は純紺青色なり。大王、是の童子の頭髮は、色潤澤なり。大王、是の童子の髮は、麤ならず澀ならず。大王、是の童子の髮は、稠ならざるも厚し。大王、是の童子の髮は、齊くして細密なり。大王、是の童子の髮は缺けず破れず。大王、是の童子の髮は、拳卷して旋る。大王、是の童子の髮は、圓くして右旋し、狀、萬字の如し。大王、是の童子の頭は、其の上の肉髻、猶

山頂の如し。大王、是の童子の頭は、（二）頸額堅鞕なり。大王、是の童子の頂は、若しは人も非人も破壞すべからず。大王、是の童子の頂は、巍巍として甚高く、人の能く見るもの無し。（本に三好を闕く）大王、若し一人有りて、身體に、三十二大丈夫の相を具足し、復、是の如き八十種好あらんか、彼の人、一向に決定して、阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、菩提を得已りて、無上最妙の（三）法輪を轉せん。』

爾の時、尊者、阿私陀仙、王の爲に說き已りて、是の思惟を作しぬ、『今、此の童子、幾時出家して、佛道を成ずるを得、最上勝妙の法輪を轉せん』と。彼、是の如く思惟を作せる時、自身に智を生じて、即ち能く知見す。今より已去、三十五年、此の童子、必ず阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得て、無上最勝の法輪を轉ずべきを知見しぬ。時に彼の仙人、此に因りて繫念思惟する時、復、自ら諸根の純熟せるを見已り、覆つて自ら呵責して、是の如く歎き言ひぬ、『嗚呼、嗚呼、我、今、是の如き童子の法教の外に在りて、此の時に値はず』と。

是の如く觀じ已りて、悲號啼哭し、歔欷哽咽して、淚流れて面に滿つ。時に淨飯王、阿私陀仙人の、是の如く、啼哭し懊惱して、自ら勝ふる能はざるを見、王も亦悲哀し、聲を失して哭す。

【二】頸はひたひ。鞕はかたし。
【三】法輪を轉ぜん、說法のこと、輪寶の轉ずる處、一切摧破せざるなし、以て法寶の一切の疑惑暗黑を摧破するに喩ふ。

摩耶夫人、既に是を見已りて、亦、復、涙を流して哽塞嗚咽す。彼の諸釋種の大臣眷屬、皆各號咷し、聲を失して叫吼し、宮內の大小、亦悉く悲啼し、流涕、雨の如し。時に淨飯王、涕涙交も横はり、潸然として面に滿ちて、阿私陀大仙人に白して言く、『大德尊師、此の童子、初めて生れんとせる時、卽ち五百の釋種童子有り、日を同じうして生れぬ。略說せんに、乃至、五百の童女、日を同じうして生れ、五百の奴僕、五百の婢媵、五百の馬駒、五百の六牙白象、一時に日を同じうして宮門の外に集り、五百の伏藏、自然に涌出せり。五百の園林、迦毗羅城の四面に在りて、自然に現はれ、五百の商主、五百の傘蓋・五百の金瓶もて、諸方より迦毗羅城に來り、外方の諸王、隣境の珠珍もて、悉く來つて我に送り、復、我を跪拜せり。復、一萬の天の諸童女有り、竝びに長者及び婆羅門・刹利の家に在りて生れぬ。大仙尊師、童子生るるの日、我一切の利は、皆悉く成ずるを得、我が心の願は、皆滿ちて具足せり。我、國內の善く相を解する諸婆羅門等の、吉凶に明なる者を喚びて、悉皆召集せしに、彼等是の童子の形容を見て、皆大に歡喜し、踊躍充遍して、自ら勝ふる能はざりき。唯、獨り、尊師、今、童子を見て、何故に悲啼し、何故に流淚して、我等眷屬をして狐疑せしむるか。大師、我が爲に此の由を辯說せよ。我が童子に、災禍、不祥の事有りと爲すか。(その災禍不祥の事は)自身の〔三〕祟と爲

【三】祟。鬼神の災禍をいふ。

すか。外より來ると爲すか。」

時に阿私陀、淨飯王の涕涙瞼に交はり、愁憂悵怏たるを見て、王に白して言く、「大王、今は愁ふる勿れ、憂ふる勿れ。所以の者は何ぞ。我、今、是れ童子に災有り、變有るを見るに非ず。亦諸餘の苦惱あるを見ず。身内及び外の不祥を見ず。大王當に知るべし。今、此の童子は長壽、巍巍として大威德有り、端正にして喜ぶ可し。黃白の金容、頂は傘蓋の如く、鼻は截筩の如し。身體洪滿し、支節自ら稱ひて、猶金像の如く、身に三十二の丈夫の相有り。大王、此童子は、兼て八十の微妙種好有り。大王、是の如き諸相は、是轉輪聖王の種に非ず。大王、是の如き相は、皆、是諸佛菩薩の相なり。大王、是の故に、我、童子が、決定して阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、無上清淨の法輪を轉じて、彼の諸天・世間人等の爲に說法し、一切の衆生を安樂ならしむるを見る。而して彼の法寶や、初・中・後ともに善く、乃至、清淨の梵行を說かん。若し是の邊に於て、法を聽受し已らんか、應に生るべきの衆生は、卽ち生法を斷じ、應に老ゆべき衆生は、卽ち老法を斷じ、應に病むべきは病を斷じ、應に死すべきは死を斷じ、憂悲苦惱の一切の衆生は、皆解脫を蒙らん。大王、我、今、自ら年耆い根熟して、衰朽老邁し、爾の時に當つて、覩見するを得ずして、此の大利を失ふを恨む。是の故に、我、今、【四】悲惋

【四】惋。驚嘆の貌。

して自ら傷むのみ。彼の不吉に非ず。』即ち、大王の爲に偈を說いて言く、
『自ら恨む我に大顚倒有りながら、此の得道すべき時に値はざるを。
空しく一生を過ぎて聞く所無きは、豈是れ我の大利を失ふに非ずや。
我今年老い根純熟し、死時將に至らんとす復耆らじ。
此の生分に遭逢を得るを念じて、所以に一は喜び一は憂懼す。
大王釋種方に興盛にして、此の童子福德の人を誕めり。
一切の諸苦に逼らるる世間に、此悉く能く安樂を得しめん。』
『大王、無量無邊の諸衆生等、(五)貪・恚・癡の諸火の爲に惱まん時、此、當に能く滅して、能く微妙甘露の法水を與ふべし 無量無邊の諸惡衆生が、已に邪見の曠野澤中に入りて、正道を見ず、迷惑するの時、此、當に能く淳直の涅槃、平坦の好道を與ふべし。無量無邊の諸苦衆生が、煩惱牢獄の中に閉在するを、此、當に能く一切の業縛を解くべし。無量無邊の愚瞑の衆生の、長夜の昏闇に覆翳せらるる重盲を、此、當に爲に大智慧眼を生ずべし。無量無邊の染著の衆生、煩惱の毒箭に射らるるを以て、此、當に拔濟して其の苦を免れしむべし。我、今、年垂れ、身心退敗して、彼の時に此の法を見ざるを慨き恨

【五】貪・恚・癡を三毒の煩惱といふ、一切の煩惱の根本なり。

む。是を以て啼泣するなり。大王、優曇華の、無量無邊億千萬年に、時に一たび出現するが如く、諸佛も是の如し。無量無邊千萬億劫に、出世や甚難し。大王、今、此の童子は、決定して阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、決定して無上法輪を轉せん。我自ら此の時に値はず、今、彼に背くべきを傷み過む。是故に悲泣す。大王、彼等衆生は、大に財利を得、大に福業を得ん。若し能く、此の大聖童子の、彼の地方の菩提樹下に在り、坐して四魔を降すを見、能く視るを得ば、彼等衆生は、大に善利を得、大に度脫を得ん。大王、若し能く此の大聖童子の、菩提を得已りて、漸漸に波羅㮈國に至り、當に無上最妙の法輪を轉ずるを見ば、一切衆生、大に勝果を獲ん。大王、此の童子は、莊嚴淸淨なり。是の閻浮提の諸聖沙門を、皆悉く敎令して、阿羅漢を得しめ、其の弟子と作さん。是の故に我は啼く。大王、彼等衆生は、善く人身を得、善く此の世に來りて、大に財利を得、大に福業を種ゑん。又、復、童子の、三十三天の、諸天に圍繞せられ、七寶の梯に乘りて彼處に下るを見て、無量無邊の衆生は禮拜せん。大王、王も今、亦、善く、此の人身を得て、大に財利及び法利を得たり。若し、王、自らの子の、得道して、天人中に於て、是の妙法を說くを見て、證を得ること疑無かるべし』と。

阿私陀問瑞品第九

時に淨飯王、彼の仙人阿私陀の邊より、此の語を聞き已るや、大歡喜を生じ、即ち座より起ち、衣服を整理し、右膝を地に著け、十指の掌を合して、仙人に向つて、歡喜常に倍し、未曾有なるを得、遍身の毛竪ちて、其の足を頂禮し、却いて一面に住まり、二十具の上妙の衣裳を將つて、仙人に布施す。時に阿私陀、施す所の衣、二十具中に於て、唯一具の、己が用に稱へる者を受けて、爲に之を受け、一具を受け已るや、自餘の諸衣は、還、持して淨飯王に廻施して、是の言を作す、『大王常に知るべし。我は出家人婆羅門種、多くの威德無ければ、少欲にして求むる無く、應に須く足るを知るべし。大王は國主、賜賚の處寬かなるも、財物限有り、任意に用ふること、自他已に然るべし。大王、童子の母胎に在るや、希有の事、理應に無邊なるべし。生育已前の有ゆる瑞相、唯、願くは大王、我が爲に盡く說け。我聞くを得已らば、是大布施なり。我をして歡喜せしめ、踊躍充遍して、自ら勝ふる能はざらしむ。此、則ち、是、我が大に財寶を得たるなり』と。時に淨飯王、仙人に白して言く、『理師、諦かに聽きて、專心に、諦かに受けよ。我、理師の爲に、次第に說かん。童子の胎に在る、希奇の事、未曾有の法、及び童子の生るる、有ゆる異相、

我悉く之を說かん。大仙尊師、我、念ずるに、一時童子の母、樓上に在りて、妙なる牀敷に臥して、睡眠の中に、安庠として覺め起きて、我れに語つて言く、「大王、我が夢に見し所の事を聽け。今、王に向つて說かん。我、昨夜に於て、夢に一白象の、六牙なるあるを見る。身鮮かに頭赤く、七支地を拄へて、形體端嚴なり。然して、其の六牙は、皆是れ金裝、虛空を飛行して、北方より來つて、我が右脇に入り、入り已るや我が身卽ち快樂を受けぬ。快樂の希有なること、世間中に於て、物の喩ふ可き無く、耳にだも曾て聞かず。又快樂の來るや、世間の事に於て、我が心樂えず、又、更に、大王と共に一處に樂を受くるを願はず。一切の五欲、皆悉く捨てんを願ふ」と。』

『大仙尊師、我、彼の時に於て、卽ち廣く、諸の婆羅門の、能く占相し、善く先典を諳んじ、經に依り書に據りて、變出を敎ふるあるを召喚して、卽ち之に語つて言く、「我が大夫人、夜に夢見する所、事相前の如し。果報云何ん。我が爲に解說せよ」と。是の時、一切の諸婆羅門、卽ち先書、諸聖の說く所に依り、此の夢相を占して、我に白して言く、「大王、今、特意歡喜すべし。是の夢大に善し。大に吉祥有り。此大夫人は、必ず世間中に於て、大に名聞を得、天下の最尊、雙匹有ること無き童子を生まん。」時に、我、是の諸の婆羅門の、是の如く語るを聞き已りて、大美

食を設け、好き財寶を持し、彼等に布施して、之を發遣せり。我、彼の時に於て、此の城内に在りて、有らゆる街陌、四衢の道頭、或は復、坊巷、隨處に、大無遮會を立て、有らゆる財寶、皆悉く布施し、食を須むるには、食を與へ、乃至、資生・五行・調度、皆滿足せしめ、此の功德を童子に廻施して、其の身を莊嚴せんを願ひぬ。」

「復、次に大師、童子の胎に在るや、四天王有り、來りて我が家に至り、四方に在つて、各童子の母を嚴に守護せり。復、次に大師、童子の胎に在るや、童子の母、大快樂を受け、身體〔一〕敷愉にして疲るるなく惓むなかりき。復、次に大師、童子の胎に在るや、母、常に戒を持し、諸根調伏して、瞋恨有ること無かりき。復、次に大師、童子の胎に在るや、童子の母、欲心有ることなく、亦、曾て欲心に惱まされず、身口に唯清淨の梵行を行ぜり。」

「復、次に、大師、童子の胎に在るや、童子の母、寒熱を患へず、飢渴に苦しまざりき。復、次に大師、童子の胎に在るや、其の母、有らゆる錢財、珍奇の寶物、人の須むる所の者は、意の恣まに之に與へ、心に歡喜を生じて、慳悋を生ぜざらんを庶幾へり。復、次に大師、童子の胎に在るや、其の母恒に慈悲を行じて、一切の命を憐愍せり。復、次に大師、童子の胎に在るや、童子

〔一〕敷愉。和悦して色の美はしきをいふ。

の母、端正にして喜ぶ可く、世に雙有ること無く、先時の光澤、倍更に增進して、轉前に勝れたり。復、次に大師、童子の胎に在るや、其の母、童子を觀んと欲するの時、卽ち童子の胎內に在るを見るに、身體洪滿し、諸根完具して、喜ぶ可きの端正、猶淨鏡の、其の面像を見るが如し。母、此を見已りて、大歡喜を生じ、踊躍身に遍くして、自ら勝ふる能はざりき。』

『復、次に大師、童子の胎に在るや、諸の有病の人、來つて童子の母の所に到らんと欲すれば、其の童子の母、手を以て摩觸するに、或は草葉を以てし、或は樹葉を持ちて、彼の邊に送るに、彼等衆生、皆安樂を得、身體患ひなく、諸苦惱なかりき。大師、童子の胎に在るや、是の如き等の、無量種種の希奇の事、未曾有の法有りき。』

『復、次に大師、時に童子の母、摩耶夫人の父、善覺釋、使を遣はして我に語らく、「大王、時を知れ。我が女、懷孕せり。此の勝衆生、威德甚大なり。若、彼出でなば、我が女久しからずして、必ず命終を取らん。我が意、今、自らの女を喚び來り、我が園、嵐毗尼の中に向つて、我と共に相娛みて快樂を受けんと欲す。亦、是の處に吉祥を保するを得んを願ふ。唯願くは、大王善く好く發遣せよ。」我、彼の使の、是の如く語るを聞已りて、卽時に宣告して、駕を嚴にして摩耶夫人を發遣し、乃至、此の迦毗羅城より、彼の天臂に到り、兩城の中間は、一切の荊棘・砂礫、

種種の糞穢を耘除して、皆清淨ならしめ、香湯を地に灑ぎ、諸の妙華を持して、其の上に散じて、童子の母を遶り、諸の妙香、諸種の華鬘を以て、其の身を莊嚴し、諸の音樂を作し、王の勢力を持し、王の威神を持し、及び其の宮內の一切の婇女、前後に圍繞し、大白象に乘つて、善覺の天臂城中に歸向せり。其の童子の母、摩耶夫人、遙かに迎へられ來りて、卽ち種種無量無邊の莊嚴の具を持し、相隨ひて、共に嵐毗尼園に入りて、逍遙娛樂せり。時に、童子の母摩耶夫人、白象より下り、宮內の婇女、左右に圍繞し、前後に侍衞し、安庠として進んで嵐毗尼園に入り、林樹を觀視して、此の樹下よりし、是の如く次第に、波羅叉樹下に到りし時、右手を伸擧し、彼の樹枝を攀ぢ、安庠として息へり。是の時、童子、其の母摩耶夫人の、手に枝を攀づるを見已り、彼の胎中より、一心正念に、安庠として徐に起ちて、右脇より出づるに、其の母の右脇、亦疼痛無く、亦患難無く、劈げず、裂けず。是の時、童子、右脇より生るる時、身より大光を放つて、世間を照曜せり。大師、是を、童子の、母の胎內に在り、初生の時、是の如き等の希奇の事、未曾有の法有りと名く。一

一復、次に大師、童子の胎に在るや、憂へず愁へず、其の胎內より、安庠として徐に起つに、身體鮮淨にして、種種の涕唾・痰癊・屎尿・淤血の穢汙する所と爲らざりき。復、次に、大師、童

子の初めて胎内より出でし時、一切の諸天、迦尸迦を以て其の身を纏裹し、懷抱執持して、將て母前に向ひ、母に語つて言く、「大德夫人、今、應に歡喜すべし。夫人、今日、聖子、天人中の尊を生めり。」復、次に、大師、童子の初めて生るるや、人の扶持するなくて、地に住り立ちて、各七步を行くに、凡そ履む所の處、皆蓮華を生ず。四方を顧視して、目督て瞬かず、畏れず驚かず、東面に住りて、孩童の（二）呱然として啼叫するに似たらず、言音周正に、巧妙の辭章もて、是の言を説けり、「一切の世間、唯我獨り尊し。唯我最も勝れり。我今當に生老死の根を斷ずべし。」復次に大師、童子の生るる時、卽ち是の處に於て、忽ち二池有り。一は暖かにして、一は冷かなり。童子の母が、恣意に取り用ふる隨なり。上界の虛空に、復、二水流れ、冷暖前の如くにて、童子を洗浴したり。復、次に大師、童子の生るる時、眞金の榻有り、童子の身を坐ゑて童子を浴せしめたり。復次に大師、童子の生るる時、身に光明を放ち、一切諸寶の火燄、一切の光明を翳障したり。復、次に大師、童子の生るる時、身に光明を放ち、日月の光を蔽ひて、形、星宿の如かりき。復、次に、大師、童子の生るる時、一切の樹木、時に隨つて敷榮し、華果茂盛して、非時の諸樹も、亦、復、鮮かに開きぬ。復、次に大師、童子の生るる時、虛空の諸天、其の白蓋を持し、眞金を柄となして、童

【二】呱然。小兒の啼聲をいふ。

子の上を覆ひぬ。復、次に、大師、童子の生る時、虚空の諸天、復、白拂を持し、摩尼を柄と爲して、童子の上を拂へり。復、次に大師、童子の生る時、虚空清淨にして雲無く、霧及び諸の煙塵無く、但、雷聲を聞くのみなりき。復、次に大師、童子の生る時、虚空に雲無くして細雨を下らし、清淨の妙水、八味具足せり。復、次に大師、童子の生る時、一切諸方、涼風忽ち起り、其の風、調適にして惱患を爲さず、諸方清淨にして、煙雲及諸の(三)氛翳有ること無かりき。復、次に、大師、童子の生る時、上空中に於て大梵聲を出す。人の作す所に非ず。自然にして響けり。復、次に大師、童子の生る時、童子の上に於て、自然にして無量の音聲有り。人の作す所に非ず。復、無量の歌樂の聲を聞き、復、無量の種種の華香を雨らす 日光に照らさるるも、常に鮮かにして異らざりき。復、次に大師、童子の生る時、上虚空に於て、一切の諸天、種種の天の諸妙華——優鉢羅華・分陀利華・拘物頭華・波頭摩華——を雨らし、復、無量種種の末香を持し、復、無量種種、殊妙最勝の華鬘を持して、童子の上に散じ、散じ已りて更に散じぬ。復、次に大師、童子の生る時、自然に忽ち無量無邊の諸天玉女有り、種種の香、及び種種の油、塗香・末香を持し、天の妙衣服、種種の天樂もて、或は歌ひ或は舞ひ、種種の聲を出して、漸漸にして行き、摩耶童子の母の前に詣り

【三】氛。妖氣をいふ。

向ひ、問訊して言く、「善く童子を生めり、疲惓無きを得るや」と。』

『復、次に大師、童子の生るる時、此の大地、六種に震動して、十八相を具せり。復、次に、大師、童子の生るる時、三千大千の一切世界の諸衆生等、一時に樂を受けぬ。復、次に、大師、童子の生るる時、我、一切の大利、種種の吉祥を成就するを得、我が心の願の隨に、具足せざるなかりき。復、次に大師、彼の時、我が臣、婆私吒の子、摩訶那摩、來りて我が邊に向ひて、我に語つて言く、「唯、願くは大王、常尊常勝なれ。國大夫人、淸淨最勝の童子を産み生せり」と。』

『次に人有り、來つて、復、我に語つて言く、「唯、願くは大王、常勝一切に、家室隆盛なれ。諸釋種眷屬の中に於て、復、各五百の童子を生めり。」次に人有り、來つて、復、我に語つて言く、「唯、願くは大王、常滿一切なれ。今日、釋種眷屬の中に、復、各、五百の童女を生めり。」次に人有り、來つて、復、我に語つて言く、「乃至、宮中一時に、五百の奴僕を産み生せり。」次に人有り、來つて、復、我に語つて言く、「乃至、五百の婢媵を産み生せり。」次に人有り、來つて、復、我に語つて言く、「乃至、五百の馬駒を産み生せり。」次に人有り、來つて、「乃至、自然に五百の香象、身白きこと雪の如く、齊しく六牙有るが、宮門の外に在り。」次に人有り、來りて、「乃至、五百の金藏、隱伏せるもの、自然に顯現せり。」次に人有り、來りて、「乃至、此の處、

迦毘羅城に、自然に五百の園林有り、忽爾として出現したり。」次に人有り、來りて、「乃至、他方の五百の商主、多く財寶を齎し、此の迦毘羅城に來り至りぬ。」次に人有り、來りて、「乃至、五百の白蓋、五百の金瓶を將つて、(四)粟散諸王より、送り來つて奉獻し、幷に、復、人を遣はし我に諮白して言く、「我等、皆、大王の教命を待ち、敕に依つて行はん。」次に人有り、來つて我に語つて言く、「願くは王、常勝なれ。萬の童女有りて、刹利及び婆羅門長者の家に在りて生れたり」と。』

『大師、我、爾の時に於て、是の如く思惟すらく、「我、何の乘を作してか、我が童子を將て、安隱に迦毘羅城に還り向はん。」是の時、空中に一の天轝有り、七寶の成す所、人工もて造るに非ざるが、忽然として現はれ、端正にして喜ぶ可く、種種莊嚴せり。大師、我、彼の時に於て、是の思惟を作さく、「誰か此の轝を負ふ。」是の時、四方に、自然にして四天子有つて來り、來り已るや、各各寶轝を擔負し、地を離るること遠からず、空に乘じて行く。我、爾の時に於て、是の童子を將て、宮殿に入り、覆ねて、復、思惟すらく、「今、我が童子、何の名を作さんか。」我、更に、思惟すらく、「其の生るるの日、我が一切の利、自然にして成れり。」我、時に、知り已りて、便ち名字を作りて(五)悉達多と號けぬ。』

【四】粟散。點點諸方に散在するに喩へていふ。
【五】Siddhārtha。一切義成と譯す。

『大師、爾の時、我、復、此の城内に於て、有らゆる相師の、能く吉凶を占ふを、一切召喚して、此の童子を示して、其をして觀看しむ、「汝等一切の諸婆羅門、我が爲に、好く此の童子を觀せよ―何の相貌有りや。復、何の怪か有る。」相師等、我が語を聞き已りて、共に童子を瞻、各各相議して、我に報じて言く、「大王、汝、大利を得たり。是の如く、童子に大威德有り、大王の家に生れ、三十二大人の相を具足す。若し當に人有りて、是の如き丈夫の相を具足すべくんば、此人則ち二種の行有らん。若其れ在家ならば、必定して當に轉輪聖王と作りて、四天下に王として、七寶具足し、乃至、一切の兵戈を用ひずして、如法に治化すべし。若其れ捨家して聖道を修學せば、必ず佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と作るを得て、名聞遍く一切の世間に滿たん」と。』

『大師、我、彼の時に於て、百味の食を將つて、彼の一切の諸婆羅門に設け、皆悉く充足自恣せしめ、種種の衣服を布施しぬ。大師、我、彼の時に於て、此の城内の有ゆる街巷、四衢の道頭に在りて、皆布施を行じて、食を須むるには食を與へ、資財五行、皆持て施與し、乃至、得る所の諸功德を、供養の爲の故に、童子に廻施しぬ。大師、童子の胎に在り、初めて生るる時、是の如き等の種種の瑞相、希奇の事、未曾有の法有り。諸の是の如き等の在胎と生法と、我、今、具さに白して、大師に知らしめ、今、大師に奉じて、是の如く布施しぬ。唯、願くは、大師、領受し

て歡喜せよ。』

爾の時、尊者阿私陀仙、童子の父、淨飯王の邊より、此の微妙の諸瑞相等を聞き、大歡喜を生じて、自ら勝ふる能はず、座より起ち、王に辭して宮を出で、步して門外に至り、卽ち右手を以て、那羅陀童子の左臂を執り、門より身を隱し、虛に騰りて行き、南天竺に向ひ、(六)阿盤提(七)聚落に下る時、阿私陀仙、那羅陀童子に語つて、是の語を作すらく、『汝、那羅陀童子、當に知るべし。佛有りて今、世間に出現したまふ。汝、當に彼の邊に出家學道し、梵行を修習すべし。久遠の時、大に利益を得、大に安樂を得ん。』時に阿私陀、覆び復、思惟すらく、『我が滅度の後、有ゆる利養と、世間の名聞とを、一切、皆是の那羅童子が、悉く收斂して得ん。是の故に、此の那羅童子は、利養に因るが故に、世の名聞の故に、其の道行を盡して、精進を得ず、正念を得ず、信行を得ず。三寶の邊に於て、此は是(八)佛陀、此は是(九)達摩、此は是(一〇)僧伽と分別する能はず。是の故に、名聞は彼自身を損せん。』

爾の時、尊者阿私陀仙、更に、復、思惟すらく、『是の淨飯王の悉達童子は、何の國地に在つ

【六】Avanti（アヴンティ）
【七】聚落は村落。
【八】佛陀(Buddha)。覺者と譯す。
【九】達摩(Dharma)。法と譯す。
【一〇】僧伽(Saṅgha)。衆と譯す。以上の三は卽ち三寶なり。

て、當に阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得べき。復、何の處に在つて、清淨無上の法輪を轉ぜん。』是の如く、少時思惟し訖りて、內心に明に見知すらく、『是の童子は、其の後、彼の〔一〕摩伽陀國に於て、當に阿耨多羅三藐三菩提を得て　〔二〕波羅㮈國に、法輪を轉ずべし。我、今に於て、當に此の那羅童子を將て、波羅㮈に詣り、一の精舍を造り、安置し立て已らば、晝日に三時、暗夜に三時、彼に向つて其が爲に佛の名號を說きて、「汝、那羅陀、佛世に出でぬ。汝、那羅陀、佛世に出でぬ。汝應に彼の邊に出家修道して、梵行を勤行すべし。汝、後時に當つて大利益有らん、大安樂を得ん」と、是の如く三び稱へん。』時に阿私陀、是の念を作し已りて、那羅陀を將て、波羅㮈に向ひ、爲に精舍を造り、安置し立て已り、晝夜六時に、是の唱言を作す、『汝、那羅陀、佛世に興れり。』晝夜六時、是の如く三唱し、『汝、當に出家すべし。乃至、後時に大安樂を得ん。』時に阿私陀、是の如き方便もて、世に住する無量にして、壽終を取りぬ。時に阿私陀、命終の後、其の那羅陀侍者童子、世間中に於て、大利養を得、大名聞を得たり。時に那羅陀、世の利養に著して、名聞を貪るが故に、心自ら定らず、增進する能はず。利養を求めて足るを知らざるを以ての故に、此は是佛か、此は是法か、此は是僧かを、自ら念ずる能はず、自ら信ずる能はず、分別する能はず。彼の阿私陀、命終の後、

〔一〕 マガダ Magadha
〔二〕 ヴーラーナシー Vārāṇasī

時に淨飯王、諸の國師婆羅門に語つて言く、『大師、當に知るべし。今、此の太子は、既に王宮に生れ、久しからずして必ず當に聖行を行じて、聖道を證得せんこと、猶、尊者、大阿私陀仙人の〔三〕授記の如くなるべし。此の言眞實、恐くは當に虛ならざるべし、必ず應に是の如くなるべし。大師、我が王種族、若し嗣立を爲さば、當に大に損減すべし。』其の婆羅門諸國師、淨飯王に報へて言く、『大王、今は、是の念を作す莫れ。我が授記の如くんば、此の太子、必ず當に定めて轉輪聖王と作るべし。我等の語の如く、終に異ること有るなけん。』

【三】授記。行者の將來を豫言すること。

時に淨飯王、國師に語つて言く、『仁等大師、阿私陀聖師の言や、此の語虛謬に非ず』と。時に彼の國師婆羅門等、更に王に報へて言く、『彼の仙人の語、若し其れ虛ならず、是れ實と言はば、大王、今、應に須らく方便を作すべし。年少の時に及んで、世事を增益して、當に太子の何に著するかを觀じて、漸漸更に加ふべし。是の如くんば、則ち、彼、自ら家居を愛し、山林に向つて苦行を修せじ。』

時に淨飯王、復、國師婆羅門に問うて言く、『此の事云何ん。』時に國師等、復、王に白して言く、『大王、當に知るべし。往古の諸仙、或は風露を飲み、或は華果を食ひ、或は根藥を食ひ、

樹皮の衣を著け、少欲知足なるも、彼等諸仙、猶、俗事を愛し、一たび世に著するや、尙放逸を生ぜり。況んや、復、太子が日日に習近する一切の諸根の、自然に染著するをや。王の勢力を以て功德を具足し、家の內に住在せんに、能く捨てて出家せんこと、是の處有ること無けん。』時に淨飯王、復、是の言を作すらく、『此の事是の如く、大師の語の如し。世間、亦、方便の事有ること、大師の語の如し。但、彼の大仙阿私陀の說は、必ず虛言ならじ。是の故に我が心、常に疑惑を生ず。』時に淨飯王、是の如き未來の事を思惟して、心に疑ひて猶豫し、卽ち群臣、諸釋種族を集めて、之に告げて言く、『我、汝等に勅す。太子が增長の時、彼の前に向つて、阿私陀授記の事を說く勿れ。所以の者は何に。太子、若し此の如きの語を聞かば、其の喜や、菩提の心を捨てざらん。』

時に淨飯王、復、更に、重ねて、諸臣等に告げて言く、『卿、諸臣等、我が太子の爲に、國內の有ゆる禁繫の囚徒は、皆悉く放赦して解脫を得しめ、乃至、一切の諸禽獸等、亦、竝に、放捨せよ。』復、國師婆羅門に告げて言く、『大師、若し或は百、或は千、有らゆる精進の婆羅門等の、聚集の處を知らば、須むる所の意の隨に、悉く皆布施し、有らゆる天祠、及び神廟堂は、皆修治せしめ、法に依つて祭祀し、我が太子の爲に、大福を得しめよ。』爾の時、國師婆羅門等、卽ち王

の命に依り、四方より三萬二千の諸婆羅門を召し得て、日ごとに、別に、淨飯王宮に入らしめ、有らゆる資財、悉く持て布施し、七日を滿つるの夜、有らゆる功德を、太子に廻施して、增進せしめんを願ひぬ。而して偈有りて說くらく。

『淨飯王の心大に歡喜す。福德の太子を生めるを以ての故に。
一切の群臣皆聚集し、天下の囚繫に普く放すの恩あり。
誕育既に本心に稱適す、慇重に生法を爲作さんと欲し。
彼の百千の乳牛犢を持つて、皆金もて角を裝ひ銀もて蹄を飾る。
年齒悉く壯にして毛色鮮かなり、各各犢に從つて其の後に隨ふ。
膚體充肥して乳汁多く、一頭一び搾でて十斗を得たり。
更に無量種の珍奇有り、錢財と穀帛と諸の雜物と、
太子を增益せしめんが爲の故に、彼の婆羅門に布施しぬ。』

卷の第十一

姨母養育品第十

爾の時、太子、既に、誕生して、適に七日に滿ちたるを以て、其の太子の母、摩耶夫人は、更に諸天の威力を得る能はず。復、太子の在胎に受けたる所の快樂を得る能はず。力薄きを以ての故に、其の形、羸瘦し、遂に便ち命終す。或は師有りて言ふ、『摩耶夫人の壽命算數は、唯七日に在り。是の故に命終す。然りと雖も、但、往昔來、常に是の法有り。其の菩薩生れて、七日に滿ち已り、菩薩の母、皆命終しぬ。何を以ての故に。諸菩薩、幼年にて出家するや、母は是の事を見、其の心碎裂して、卽便ち命終するを以てなり』と。(一)薩婆多師、復、此の言を作す、『其の菩薩の母は、生みたる所の子を見るに、身體は洪滿、端正にして嘉ぶ可く、世に雙少し。既に、是の如き希有の事、未曾有の法を覩、歡喜踊躍して、身中に遍滿し、勝へざるを以ての故に、卽便ち命終す』と。

【一】薩婆多(Sarvastivada)。說一切有部と譯す。

爾の時、摩耶國大夫人、命終の後、卽便ち往きて忉利天上に生る。彼の天に生れ已るや、卽ち

勝妙なる、無量無邊の諸天の婇女有り、左右を圍繞し、前後に翼從し、各各、無量無邊の供養の具、曼陀羅等を持ちて、菩薩の所に詣り、處處に遍く散じ、菩薩を供養せんと欲せるが爲めの故に、虚空より下り、漸漸に墜ちて、人間淨飯王宮に到り、王宮に到り已りて、淨飯王に語り、是の言を作す、『大王。當に知るべし。我、善利を得て、善く人間に生る。我、往昔、彼の清淨の衆生なる、大王の童子を胎懷し、十月を滿足して快樂を受けたり。今、我、三十三天に生れ、還、快樂を受くること、前の如くにして異ならず。彼の樂も此の樂も、一種も殊なる無し。大王、今より已往、願はくは、我が爲めに大憂苦を受くる勿れ。今より已去、我は更に生れず。』時に彼の摩耶、卽ち天身を以て、偈を說きて言はく、

『〔三〕一切の怨親は心に平等に、精進勇猛にして暫くも息む無く、
善く眞如實諦の理を思ひ、念に錯亂無く始終有り。
形體は炳著なる眞金の容、諸根寂定にして善く調御し、
我が子巧に能く諸法を說かん。善く頂禮を行せよ最勝尊に。』

爾の時、摩耶、此の偈を說き已り、卽便ち身を隱し、忽然として現せず、彼の天宮に還る。時に、淨飯王、其の摩耶國大夫人の命終を見

【三】（原文）一切怨親平等心、精進勇猛無暫息、善思眞如實諦理、念無錯亂有始終、形體炳著眞金容、諸根寂定善調御、我子巧能說諸法、善行頂禮最勝尊。

たる後、卽便ち諸の釋種の、親しき年長者を喚召して、皆雲集せしめ、之に告げて言く、『汝等眷屬、竝に是れ國親なり。今、是の童子は、嬰孩にして母を失ふ。乳哺の寄、將た誰にか附囑し、敎令養育して、存活を得しめん。誰か能く時に依りて、看視瞻護せん。誰か能く至心に善く增長せしめん。誰か能く憐愍して、己の生めるが如くに愛し、携抱捧持せん。慈心を以ての故に、功德心の故に、歡喜心の故に。』時に五百の、釋種の新婦有り。彼等新婦、各各唱へて言く、『我能く養育せん。我能く瞻看せん』と。時に釋種の族、彼の婦に語りて言く、『汝等一切、年少盛壯、意、色欲に耽る。汝等は時に依りて、養育する能はず。亦復、法に依りて慈憐する能はず。唯、此の〔三〕摩訶波闍波提の親は、これ童子の眞正の姨母なり。是の故に能く童子の身を〔四〕將息養育するに堪へ、亦復、能く大王に奉事するに堪へん。』彼の諸釋種、一切和合して、彼の摩訶波闍波提に、母として養育せんを勸めぬ。

時に淨飯王、卽ち太子を將て、姨母、摩訶波闍波提に付囑す。これ、太子の親姨母なるを以ての故なり。而して之に告げて言く、『善來、夫人、是の如き童子、應に養育すべし。善く須らく護持すべく、應に增長し、時に依りて澡浴せしむべし。』又、別に三十二女を簡び取りて、養

【三】マハープラジヤーパテイー(Mahāprajāpatī)。大愛道又は大生主と譯す。

【四】將息。將はやしなふ、息はそだつるなり。

育を助けしむ。八女人を以て太子を擬抱し、八女人を以て太子を洗浴し、八女人を以て太子に乳せしめ、八女人を以て其を戯弄せしむ。

其の(五)淨飯王、二子を産生す。一は太子、字は(六)悉達多、二を(七)難陀と名づく。其の(八)白飯王、亦二子有り。第一を(九)難提迦と名づけ、第二を(一〇)婆提唎迦と名づく。其の(一一)斛飯王に、亦二子有り。第一を(一二)阿難多と名づけ、第二を名づけて(一三)提婆達多と爲す。(一四)甘露飯王に亦二子有り。第一を名づけて(一五)阿尼盧豆と爲し、第二を名づけて(一六)摩訶那摩と爲す。淨飯王の妹を(一七)阿彌多質多囉（隋に甘露味と言ふ）と名づく。一子を生む。名づけて(一八)底沙と爲す。

是の時、太子の姨母、摩訶波闍波提、淨飯王に白して、是の如き言を作す、『謹んで、王勅に依り、敢て乖違せず』と。時に波闍波提、王命に依り、太子を養育す。譬へば日月の、初一日より十五日に至りて、清淨圓滿なるが如く、太子も、亦復、是の如く、漸漸增長す。又復、譬へば尼拘陀樹の種の好地を得て、漸く增長し、後に大樹と成るが如く、太子も是の如く、日日に增長しぬ。

【五】Suddhodana シユツドーダナ
【六】Siddhārtha シツダールタ
【七】Nanda ナンダ
【八】Suklodana シユクローダナ
【九】Nandika ナンデカ
【一〇】Bhadrika バドリカ
【一一】Dronodana ドローノーダナ
【一二】Ānanda アーナンダ
【一三】Devadatta デーヴダツタ
【一四】Amṛtodana アムリトーダナ
【一五】Aniruddha アニルツダ
【一六】Mahānāma マハーナーマ
【一七】Amṛtacitrā? アムリタチトラー
【一八】Tisya テイシヤ

其の太子の、出生已來、淨飯王家は、日日に增長して、一切の財利、金銀珍寶、二足四足、乏少する所無し。而して偈を說きて言はく、

『五穀及び財寶、金銀諸衣服は、或は造り或は造らざるに、自然に充足するを得たり。
童子及び慈母のために、乳・酪・酥常に豐に、
慈母の少乳なる者も、悉く皆盈ち溢るるを得たり。』

時に淨飯王のあらゆる怨讎は、自然に皆悉く平等心を生じ、心を平等にし已りて、漸く親厚を生じ、既に親厚を生じて、王と同心して、卽便ち牢固、一心一意、同願同行なり。風雨は時に隨ひて、諸の災雹なく、亦、擾亂なく、少種にして收多し。彼の諸苗稼、一切の藥草、樹木園林は、色に隨ひて色を長じ、諸香豐足し、味に隨ひて味を具し、限に依りて成熟し、終に時を過さず。皆これ太子の威德力の故なり。一切の城內、懷妊する所の者は、安穩に生むを得、又諸の人民は、衆の疫横無く、亦夭死なし。此の太子の威德力を以ての故なり。側近の有ゆる一切の人民、長者居士、(九)各各自ら守りて、相求め及ばず。此になく彼に求めんに、彼當に我に與ふべし（との念を生ぜず）。設し事に因りて、須むる所の少多を、貸換假借せしめんに、彼

【九】（原文）各各自守、不相求及、無此求彼、彼當與我、設令因事、所須少多、貸換假借、彼應多與、不生是念、須若干者、卽與若干。

應に多く與ふべしとの念を生せず。若干を須むれば、卽ち若干を與ふ。城内の人民、各各相尊び、父母に孝養し、師長に敬事す。是の太子の威德力を以ての故なり。亦、往昔の、如法に行を行せる一切の諸王の人民士庶、皆、法に依りて行じ、悉く十善を持して、具足して行じ、國内に怖無く、五穀豐に登り、飢儉を遠離せるが如く、是の如く是の如し。淨飯王國の一切の境内も、飢儉有ること無く、亦驚怖無く、五穀豐饒に、一切の人民は、如法に行じ、種種に布施して、諸の功德を作し、諸の園林を造り、諸の大義を造るに、井泉池渠は、皆悉く自ら現はれ、天舍、廟堂、曹局、省府も、皆、亦、自然に、人に枉横無く、一切の人民、皆、竝に歡喜すること、猶、天上の如くにして、差殊有ること無し。太子の威德力を以ての故に、是の如き諸事、成就せざるなし。偈に說く所の如し。

「人民・尊教に順ひ、慳まず亦惜まず、如法に行せざる無く、慈心にして殺を起さず。
飢渴は既に解くを得、飲食は皆充足し、一切悉く歡喜し、幷に天の如き樂を受く。」

時に淨飯王、軫宿の辰を過ぎ、角宿の日を取り、太子の爲めに、衆寶瓔珞を作す。所謂、手腕指環の釧鐶、首飾、雜寶勝妙の華鬘、頸鏁、種種の瓔珞 (二〇) 珠璣印文の指環、臂釧、腰珮、金縷を帶と爲し、金鈴寶網、種種の摩尼を、莊嚴

【二〇】珠璣　[illegible]

具と爲し、靴履革屣は、雜寶もて莊嚴し、其の天寶冠は、最勝殊妙なり。

復、五百の釋種の諸親あり、太子の爲に、各、一具を造り、雜妙の瓔珞もて、上の如く莊嚴し、作し已り、將て淨飯王の所に詣り、王に白して言く、『善い哉、大王、我等所造の、此の妙瓔珞もて、七日七夜、唯、願はくは大王、此の瓔珞を以て、太子を莊嚴し、當に我等をして、空しく疲勞せざらしむべし。』

時に淨飯王、其の晨朝、鬼宿の日に於て、是の優陀夷比丘の父、優陀耶那と名くる一國師婆羅門、幷に及び五百の諸婆羅門と共に、皆、この言を唱ふ、『甚大吉祥なり。』共に太子を將て、彼の一園に至る。名づけて無垢清淨莊嚴といふ。往昔已來、之を貴ぶこと、塔の如し。時に彼の園内に、復、無量無邊百千一切の衆生有り。男子婦人、童男童女、相喚びて、雲の如くに會し、彼の園に集聚して、太子を觀んと欲す。復、更に別に、一乘の大車に駕し、種種の瓔珞、金銀、飮食、衣服を載置して、悉く充備せしめ、迦毗羅城内の〔三〕街衢、四衢の道頭、及び諸の小巷、諸の是の如き處に、大布施を設け、高聲に唱へて言く、『凡そ須つ所は、皆悉く給與せん。』是の如きの駕、太子の前に在りて行く。

復、八千の雜種の音樂有りて、種種の聲を作し、虛空より自ら無量無邊の雜妙花の雨を雨らす。

〔三〕衢はこみち。

復、無量百千の諸女有り、皆、種種諸寶の瓔珞を以て、其の身を莊嚴して、閣上に在り、或は高臺に在り、或は却敵にあり、或は城頭、及び女墻の邊、或は城樓の上、或は牕牖の中に在り、或は堂脊に居し、或は屋頭に立ちて、手に諸華を執りて、太子を觀看し、花を以て、太子の前に迸ひ散ず。復、八千の諸天寶女有りて、手に掃箒を執り、身體莊嚴なるが、太子の先に在りて、道路を耘除す。一切の釋種の眷屬、諸親、竝に悉く淨飯王の側、及び太子の前に在り、次第して行く。

是の時、摩訶波闍波提、太子を懷抱し、膝上に安置して、輦乘中に坐す。是の如く種種無量無邊の莊嚴、備はり已るや、太子を將引して、彼の園に往詣す。

爾の時、國師優陀夷の父、彼の五百の諸婆羅門と共なり。人人各、無量無邊の吉祥の言を以て太子を稱讃し、諸の瓔珞を持ちて、太子の身に繫くるに、皆悉く太子の身相に隱障せられて、彼の瓔珞、竝に各、昏暗にして、復、精光無きこと、猶は聚墨の、照曜する能はざるが如し。復、光顯無きこと、譬へば無價の閻浮檀金の邊に、丸炭を安置せんと欲するが如し。是の如く是の如し。彼の諸瓔珞を、太子に繫け已るに、猶は晝螢の自ら現ずる能はざるが如く、所有の瓔珞の、太子の身に至るに、顯れず現れず、照らさず曜かざること、亦復、是の如し。

時に彼の人衆、此の太子に、是の如き等の希奇の事、未曾有の法有るを見、各各唱へて言はく、『嗚呼、嗚呼、希有なり、希有なり。』各各歡笑し、人人手を拍ちて、歌舞叫嘯し、衣裳を擲弄す。時に彼の國内に一天神有り、名づけて離垢といふ。然るに彼の天神、虚空に在り、身を隱して現はれずして、偈を說きて言はく

『假此大地、及び城邑聚落、山河諸草木をして、皆閻浮金と成らしむるも、佛の一毛孔の光は、具足せる威德相もて、彼を翳ひて聚墨の如くす。百福の莊嚴に滿てる、瓔珞の光相滅するも、若し人諸相を具せば、第一の勝報果は、瓔珞の嚴を須ひず。』

時に彼の天神、此の偈を說き已り、卽ち種種無量の天花を持ちて、太子の上に散じ、其の本宮に還る。

爾の時、釋種の諸親族等。〔三〕卽ち無價の碎末栴檀及び細磨せるものを持つて、雜色の〔三〕牙席に盛り、雜色の諸藥を、具に諸器に滿たし、持ちて太子に與へ、身を莊嚴せしむ。復、眞金もて輦と爲せる鹿車、種種の船舫、諸の雜野獸、乃至、馬駒の、諸寶にて作せるを持ちて、具に太子に施こし、恣に嬉戲せしむ。八年を具足し

【三】（原文）卽持無價碎末栴檀及細磨者、雜色牙席、雜種諸藥、具滿諸器、持與太子、令莊嚴身。
【三】牙席。意義不明。

て、是の如き歡樂もて、太子を娛樂して、增長養育す。然るに、世の嬰孩の流涕、不淨なるに似ずして、諸の糞穢無く、亦、呱啼、呻吟、〔一四〕嚬縮せず、飢ゑず渴かず。諸母、養育するに、常に歡喜を生じぬ。

時に淨飯王、是の思惟を作す、『今、我が太子、端正なること雙少きも、未だ其の力を知らず。竟に復、如何ぞや。今、試みに、其の强弱を驗し看る可し。』爾の時、大王、卽ち諸の無量の釋種の童子と共に、同坐して飮食し、一純金の雕鏤の鉢を持ちて、歡喜丸を盛り、具足充滿せしめ、復、眞金を以て諸の環鏁を作り、諸の一切衆童子の前に置き、爭ひ食はしめ、又復、諸の小白象を聚め、童子と共に相競ひ食はしめ、諸の一切の衆童子に語りて言く、『汝等當に知るべし。是の如き白象、將に汝の食を奪はんとす。』時に諸童子、衆白象と爭ふに、力如かずと斷じ、遂に象をして食はしむ。然る後、始めて、太子に語りて知らしむ。『太子、汝の食は、今、他に奪はる。』是の時、太子、卽ち兩手を以て、彼の金鉢を執り、少身力を出して、彼の鏁を壞ち、象をして、却ぞき頓れて、太子に如かざらしむ。

時に淨飯王、復、太子の爲めに、多く羝羊を集め、宮内に安置す。太子をして歡喜を生ぜしめん爲めの故に、眞金もて鞍を爲り、雜寶もて莊飾し、種種の瓔珞、以て其の身を嚴り、金の羅網

〔一四〕嚬、正しくは顰に作る。眉を皺むる貌。

もて覆ふ。是の時、太子、彼の羊車に乘り、園林に至る。及び其の親叔、甘露飯等の白餘の諸釋も、各、諸子の爲に、諸の羝羊を莊り、具足すること前の如くし、彼の諸童子も、亦、羊車に乘りて隨意に遊戲しぬ。

習學技藝品第十一

時に淨飯王、其の太子、年、已に八歲なるを知り、卽ち百官、群臣、宰相を會し、之に告げて言く、『卿等、當に知るべし。今、我が化內、誰か、最も智有る。誰か技能を具し、種種悉く通じ、太子の爲に師匠と作るに堪へ、敎へて、書及び餘の諸論を學ばしむる。』時に、諸の群臣、卽ち王に報じて言く、『大王、當に知るべし。今、毗奢婆蜜多羅有り、善く諸論を知りて、最勝れ最妙なり。是の如き大師は、太子に、種種の諸論を敎ふるに堪へん。』時に淨飯王、卽ち使人を遣して、彼の(一)毗奢婆蜜多羅を召し、之に告げて言はく、『尊者大師、汝能く我が爲めに、此の太子に、一切の技藝、諸の書論を敎ふるや否や。』時に蜜多羅、報じて言はく、『大王、謹みて王命に依り、我、今、能く堪へん。』時に淨飯王、心に歡喜を生じ、卽ち好日、善宿、吉時を占ひ、大釋種の耆舊、有德と共に、其を莊飾せしめ、一切の禮儀、種種の須ふる所を、悉く充備せしめ、復、五百の諸釋種の童を嚴しめ、前後左右に、周匝圍遶し、更に復、別に無量無邊の童男童女有り、太子に隨順し、將に學堂に昇らんとす。時に彼の大師、毗奢蜜多、遙に太子の威德力の大なるを見、自ら禁ずる能はず。遂に

【一】 Viśvāmitra.

其の身をして、座より忽ち起たしめ、身を屈して、太子の足を頂禮し、禮拜して起ち已り、四面を顧視して、大羞慚を生ず。

時に蜜多羅、慙愧を生じ已るや、虛空中に、一天子有り、名づけて淨妙といふ。兜率宮より、恒常に是の太子を守護する、無量無邊の最大の諸天神王と共に、彼の虛空中に在り、身を隱して現れず。而して偈を說きて言く、

『世間の諸の技藝、及び餘の諸經論を、此の人悉く能く知り、亦能く他に敎示す。是の勝衆生は、世間に隨順するが故に、往昔より久しく習ひ來りて、今師に從ひて學ぶを示す。

出世の所有の智、諸諦及び諸力、因緣所生の法の、生じ已りて又滅無することを、一念に彼等を知り、(三)名色の現と不現を、猶尙能く證知す。況んや復諸文字をや。』

爾の時、天子、此の偈を說き已り、種種の華を以て、太子の上に散じ、卽ち本宮に還る。

時に淨飯王、卽ち種種の無價の珍寶を持ちて、以用て諸婆羅門に布施し、復、種種百味の飲食

【三】名色(Nama-rupa)心物といはんが如し。名とは名ありて形なき心をいひ、色とは形ある物をいふ。

を持ちて、衆座の諸婆羅門に施設し、是の太子を將て、彼の大師毗奢蜜多に付し、諸の乳母を留めて、太子に侍せしめ、卽ち王宮に還る。

爾の時、太子、歸て初めて學に就き、好最妙の牛頭栴檀を將て、書板と作し、純ら七寶を用て、四縁を莊嚴し、天の種種なる殊特の妙香を以て、其の背上に塗り、執持して、毗奢蜜多〔三〕阿闍梨の前に至り、是の言を作す。『尊者、闍梨。我に何の書をか教ふる（元、一書な少く。）或は復、〔四〕梵天所說の書（今の婆羅門書、正十四音是なり）か。〔五〕佉盧虱吒書（隋に驢脣と言ふ）か。〔六〕富沙迦羅仙人說の書（隋に蓮花と言ふ）か。〔七〕阿迦羅書（隋に節分と言ふ）か。〔八〕懵迦羅書（隋に吉祥と云ふ）か。〔九〕耶寐（亡毘の反）尼書（隋に大秦国書と言ふ）か。〔一〇〕鴦瞿梨書（隋に指書と言ふ）か。〔一一〕耶那尼迦書（隋に駄乘と言ふ）か。〔一二〕娑伽婆書（隋に犛牛と言ふ）か。〔一三〕波羅婆尼書（隋に樹葉と言ふ）か。〔一四〕波流沙書（隋に惡言と言ふ）か。〔一五〕毘多荼書（隋に起屍と言ふ）か。〔一六〕陀毘荼國書（隋に南天竺と言ふ）か。〔一七〕脂羅低書（隋に裸形人と言ふ）か。〔一八〕度其差那婆多書（隋に右旋と言ふ）か。〔一九〕優伽書（隋に嚴熾と言ふ）か。〔二〇〕僧佉書（隋に算計）か。〔二一〕阿婆勿陀書（隋に覆と言ふ）か。〔二二〕阿㝹盧摩書（隋に順と言ふ）か。〔二三〕毘耶寐奢羅書（隋に雜と言ふ）か。〔二四〕陀羅多書（烏場邊の山）か。〔二五〕西瞿耶尼書（隋に言無し）か。〔二六〕珂沙書（疏勒）か。〔二七〕脂那國書（大隋）か。〔二八〕摩那書（斗斛）か。〔二九〕末荼叉羅書（中字）か。〔三〇〕毘多悉底書

【三】阿闍梨（Ācārya）軌範師と譯す、軌範となりて弟子を導く人。
【四】Brāhmī
【五】Kharoṣṭhī
【六】Puṣkarasārī
【七】Aṅgalipi
【八】Vaṅgalipi
【九】Yavanī
【一〇】Aṅgulīyalipi
【一一】Yānanika
【一二】Śakārilipi
【一三】Brahmavallīlipi

尺か。(三一)富數波書花か。(三二)提婆書天か。(三三)那伽書龍か。(三四)夜叉書隋に語無しか。(三五)乾闥婆書天の音聲か。(三六)阿脩羅書不飲酒か。(三七)迦婁羅書金翅鳥か。(三八)緊那羅書非人か。(三九)摩睺羅伽書大蛇か。(四〇)彌伽遮迦書諸獸の音か。(四一)迦迦婁多書烏音か。(四二)浮摩提婆書地居天か。(四三)安多梨叉提婆書虛空天か。(四四)鬱多羅拘盧書須彌の北か。(四五)逋婁婆毘提呵書須彌の東か。(四六)烏差波書擧か。(四七)膩差波書擲か。(四八)娑伽羅書海か。(四九)跋闍羅書金剛か。(五〇)梨伽波羅低梨伽書往復か。(五一)毘棄音牒か。(五二)多書食殘か。(五三)阿㝹浮多書未曾有か。(五四)奢婆多羅跋多書如伏轉か。(五五)伽那那跋多書算轉か。(五六)優差波跋多書擧轉か。(五七)尼差波跋多書擲轉か。(五八)波陀梨佉書足か。(五九)毘拘多羅波陀那地書從二增上句か。(六〇)耶婆陀輸多羅書增十句以上か。(六一)末茶婆哂尼書中流か。(六二)梨沙耶娑多波惨比多書諸仙苦行か。(六三)陀羅尼卑叉梨書觀地か(六四)伽伽那卑麗叉尼書虛空を觀ずか。(六五)薩蕃沙地尼山陀書一切藥の果因か。(六六)沙羅僧伽阿尼書總覽か。(六七)薩沙婁多書一切種音か。』

爾の時、太子、是の書を說き已り、復、蜜多阿闍梨に諮うて言く、

【一四】 Paruṣalipi(?) パルシヤリピ
【一五】 Vitaḍalipi(?) ギタダリピ
【一六】 Drāviḍalipi ドラーギダリピ
【一七】 Kirārilipi キラーリリピ
【一八】 Dakṣiṇalipi ダクシナリピ
【一九】 Ugralipi ウグラリピ
【二〇】 Saṁkhyālipi サンキヤーリピ
【二一】 Apāvṛttalipi(?) アパーヴリタリピ
【二二】 Anulomalipi アヌローマリピ
【二三】 Vyāmiśralipi(?) ギヤーミシユラリピ
【二四】 Daradalipi ダラダリピ
【二五】 Aparagodānilipi アパラゴーダーニーリピ
【二六】 Khāṣyalipi カーシヤリピ
【二七】 Cīnalipi チーナーピ
【二八】 Hūṇalipi フーナリピ
【二九】 Madhyākṣaravistaralipi マデヤークシヤラギスタラリピ
【三〇】 (?)
【三一】 Puṣyalipi プシヤリピ
【三二】 Devalipi デーヴリピ
【三三】 Nāgalipi ナーガリピ
【三四】 Yakṣalipi ヤクシヤリピ

『此の書、凡そ六十四種有り。未審し、尊は我に何の書を教へんと欲するか。』是の時、毘奢婆蜜多羅、太子の、是の書を說くを聞き已り、內心に歡喜し、〔六八〕悅豫熙怡して、密に、私慙を懷き、貢高我慢の心を折伏して、太子に向ひ、偈を說きて言く、

『希有なり淸淨の智慧人、善く諸の世間の法に順じ、自ら已に一切の論に該通し、復更に來りて我が學堂に入ること。

是の如き書名我未だ知らざるを、其今悉く皆誦持し得て、これ天人の大尊導たるに、今復更に師を覓めんと欲すること。』

爾の時、復、五百の釋種諸臣の童子有り。太子と共倶に、齊しく學堂に入り、書を學び字を唱ふるに、是の太子の威德力を以ての故に、復、諸天の神力の加はる有るが故に、諸の音響中に、種種の音を出す。

阿a字を唱へし時、『諸行無常』と、是の如き聲を出せり。

伊i字を唱へし時、『一切の〔六九〕諸根、門戶、閉塞す』と、是の如き

【三五】Gandharvalipi ガンダルヴリピ
【三六】Asuralipi アスラリピ
【三七】Garuḍalipi ガルダリピ
【三八】Kiṃnaralipi キンナラリピ
【三九】Mahoragalipi マホーラガリピ
【四〇】Mṛgacakralipi ムリガチャクラリピ
【四一】Kākarutalipi カーカルタリピ
【四二】Bhaumadevalipi バウマデーヴリピ
【四三】Antarīkṣadevalipi アンタリークシャデーヴリピ
【四四】Uttarakurudvīpalipi ウツタラクルドギーパリピ
【四五】Pūrvavidehalipi プールヴギデーハリピ
【四六】Utkṣepalipi ウトクシエーパリピ
【四七】Nikṣepalipi ニクシエーパリピ
【四八】Sāgaralipi サーガラリピ
【四九】Vajralipi ヴジユラリピ
【五〇】Lekhapratilekhalipi レーカプラテイレーカリピ
【五一】Vikṣepalipi(?) ギクシエーパリピ
【五二】Prakṣepalipi(?) プラクシエーパリピ
【五三】Adbhutalipi アドブタリピ
【五四】Śāstrāvartalipi シャーストラーヴルタリピ
【五五】Gaṇanāvartalipi ガナナーヴルタリピ

聲を出せり。

優u字を唱へし時、『心に寂定を得たり』と、是の如き聲を出せり。

噎e字を唱へし時、『諸の（七〇）六入の道、皆、證知するが故に』と、是の如き聲を出せり。

嗚o字を唱へし時、『當に大煩惱の海を渡るを得べし』と、是の如き聲を出せり。

迦ka字を唱へし時、『當に諸有の業報の所作を受くべし』と、是の如き聲を出せり。

佉kha字を唱へし時、『一切煩惱の根本を拔くことを致へん』と。是の如き聲を出せり。

伽ga字を唱へし時、『十二因緣は甚深にして越え難し』と、是の如き聲を出せり。

㖶gha字を唱へし時、『諸の無明の蓋の覆翳は甚だ厚し、當に淨く除滅すべし』と、是の如き聲を出せり。

【五六】Utkṣepāvartalipi　ウトクシエーパーヴルタリピ

【五七】Nikṣepāvartalipi　ニクシエーパーヴルタリピ

【五八】Pādalikhitalipi　パーダリキタリピ

【五九】Dviruttarapadasaṁdhili-pi　ドギルツタラパダサムデイリピ

【六〇】Yāvaddaśottarapadasaṁ-dhilipi　ヤーヴツダシヨータラパダサムデイリピ

【六一】Madhyāhāriṇīlipi　マツデヤーハーリニーリピ

【六二】Ṛṣitapastaptā　リシタパスタプター

【六三】Dharaṇīprekṣaṇīlipi　ダラニプレークシヤニーリピ

【六四】Gaganaprekṣaṇīlipi　ガガナプレークシヤニーリピ

【六五】Sarvauṣadhiniṣyanda　サルヴウシヤデイニシヤンダー

【六六】Sarvasārasaṁgrahaṇī　サルヴサーサングラハニー

【六七】Sarvabhūtarutagrahaṇī　サルヴブータルタグラハニー

【六八】悅豫の豫は、安なり、樂なり。

【六九】諸根　眼耳鼻舌身の五根、又は意を加へて六根。

【七〇】六入　又は六處、また六根をいふ。

俄ṅa字を唱へし時、『如來は當に、佛道を成ずるを得已りて、餘の諸方に至り、恐怖せる衆生に無畏を施與すべし』と、是の如き聲を出せり。

遮ca字を唱へし時、『應に〔七一〕四眞聖諦を證知すべし』と、是の如き聲を出せり。

車cha字を唱へし時、『今は應に所有の諂曲、邪惑、意迷を、皆、悉く除滅すべし』と是の如き聲を出せり。

闍ja字を唱へし時、『應に超越して、生死の海を出づべし』と、是の如き聲を出せり。

社jha字を唱へし時、『魔の煩惱幢は、當に碎破して倒すべし』と、是の如き聲を出せり。

若ña字を唱へし時、『當に〔七二〕四衆をして皆、敎行に順はしむべし』と、是の如き聲を出せり。

〔七三〕吒ta字を唱へし時、『諸の凡夫、一切の衆生の、處處に畏敬する、此を無常と言ふ』と、是の如き聲を出せり。

咃tha字を唱へし時、『應に此の咃字を憶念すべし。若し根純熟すれば、諸法を聞かざるも、即

【七一】四眞聖諦。苦集滅道の四個の眞理。
【七二】四衆。衆は僧伽の譯。比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷をいふ。
【七三】（原文）唱吒字時、其諸凡夫、一切衆生、處處畏敬。此言無常、出如是聲。

ち證知を得ん』と、是の如き聲を出せり。

茶ḍa字を唱へし時、『應に彼の（七四）四の如意足を得て、卽ち能く飛行すべし』と、是の如き聲を出せり。

（七五）嗏ḍha字を唱へし時、『合歡花は嗏の如き言語を作し、散るとき諸行及び十二緣生滅の法、無常顯現すと唱ふ』と、是の如き聲を出せり。

拏ṇa字を唱へし時、『（七六）得道の人は利益を受くる時、一微塵等の諸煩惱の、散滅せざるなく、他の供に應ずるに堪ふ』と、是の如き聲を出せり。

多ta字を唱へし時、『當に苦行に向ふべし』と、是の如き聲を出せり。

他tha字を唱へし時、『一切の衆生、其の心は斧の若く、諸塵の境界は猶竹木の如し。當に是の觀を作すべし』と、是の如き聲を作せり。

陀da字を唱へし時、『當に布施を行じ、諸の善行を行ずべし。卽ち和合を得ん』と、是の如き聲を出せり。

【七四】四の如意足とは、欲、念、精進、思惟の四は、意の如く所願を滿足せしむるを以ていふ。

【七五】（原文）唱嗏字時、作合歡花如嗏言語、散唱諸行及十二緣生滅之法無常顯現、出如是聲。

【七六】得道の人を阿羅漢といふ應供と譯す、他の供養を受くるに堪ふるをいふ。

咃dha字を唱へし時、『當に法聲有るべし』と、是の如き聲を出せり。

哪na字を唱へし時、『當に須らく、彼の飮食を用て活命すべし』と、是の如き聲を出せり。

䥢pa字を唱へし時、『眞如實諦』と是の如き聲を出せり。

頗pha字を唱へし時、『當に成道して、妙果を證するを得べし』と、是の如き聲を出せり。

婆ba字を唱へし時、『一切の縛を解かん』と、是の如き聲を出せり。

嘙bha字を唱へし時、『世間の後、更に、有を受けざるを說かん』と、是の如き聲を出せり。

摩ma字を唱へし時、『諸の生死は、一切の恐怖の、最も畏るべしと爲すと說かん』と、是の如き聲を出せり。

耶ya字を唱へし時、『一切諸法の門を開穿し、人の爲めに演說せん』と、是の如き聲を出せり。

囉ra字を唱へし時、『當に三寶有るべし』と、是の如き聲を出せり。

邏la字を唱へし時、『諸の愛の枝を斷たん』と、是の如き聲を出せり。

婆va字を唱へし時、『一切身の根本種子を斷たん』と、是の如き聲を出せり。

奢śa字を唱へし時、『(七七)奢摩他(七八)毘婆舍那を得ん』と、是の如き聲を出せり。

【七七】Śamatha. 止と譯す。
【七八】Vipaśyanā. 觀と譯す
【七九】六界。又は六大。地水火風空識をいふ。

沙sa字を唱へし時、『當に(七九)六界を知るべし』と、是の如き聲を出せり。

娑sa字を唱へし時、『當に諸智を得べし』と、是の如き聲を出せり。

呵ha字を唱へし時、『當に一切諸の煩惱を打ちて却くべし』と、是の如き聲を出せり。

爾の時、彼の諸の五百の童子の、是の如く、諸字門を唱ふるを作せる時、是の太子の威德力を以ての故に、兼て復、諸天の護持の加はる所、是の如き微密祕奧の諸法門の聲を作せり。

時に淨飯王、又、復、群臣を集聚めて、議して言く、『卿、諸臣等、一切誰か知る、何處に師有りて、最便の武技、善功の軍戎、兵仗の智略を、我が悉達太子に敎ふるに堪へん。』時に諸臣等、王に報じまつりて言く、『大王、當に知るべし。此處に釋有り、名づけて善覺と爲す。其の善覺の子、(八〇)羼提提婆 隋に忍天と言ふ は、太子に兵戎法式を敎ふるに堪へん。其の解知する所、一切凡そ二十九種有り。善功善妙の技術精微に、所作輕便にて、勁捷(八一)勵勇なり。二十九種とは、所謂、象に騰る。車に跨る。坎を跳る。馬を越す。射妙。走疾。志猛性剛。身體輕便。所爲諦審。善能く調習して、象を捉へ鈎を(八二)搭つ。巧解安施して、象に(八三)羂索を擲つ。又、工に將て養ひ、畜生を飲飼す。處分(八四)指撝。善く兵馬

【八〇】Kṣāntideva

【八一】勵は輕健なり。

【八二】搭は剔(著也)に作るべし、搭と作すは誤なり、(慧琳音義)

【八三】羂はわななり。

【八四】撝は手にて指揮すること。

を總ぶ。曲直斜正の山川を暗練す。手に拳を握ること牢し。脚の地を蹋むこと穩なり。頭を梳り髻を結ぶに、(八五)新固甚だ牢し。能く破る。能く開く。能く劈く。能く斬る。射ては虚しく落ちず。(八六)挽靭無雙。遙に響聲を聞きて、射れば卽ち懸著す。放たれし處に、箭の入ること甚だ深し。黠慧聰明にして、辭清く辯捷し。謀謨策算して、巧解多知なり。古を討ね今を論じて、方便もて善く詐る。諸の是の如き等の、有ゆる兵家の祕要神能、悉く皆、通達す。唯、應に是れ彼は乃ち大王の太子に一切の戎技を教ふるに堪ふ可し。』

時に、淨飯王、是の語を聞き已りて、心に大に歡喜し、卽ち諸臣に勅して、忍天を喚ばしむ。其の忍天至るや、王、之に勅して言く、『羼提提婆よ、汝、能く我が悉達太子に、戎仗の智を教ふるや不や。』是の時、忍天、卽ち王に白して言く、『臣、甚だ能く教へん。』王、復、勅して言く、『汝、若し時を知らば、好く我が子に教へて、成就を得しめよ。』時に、淨飯王、太子の、遊戲せんを欲するが爲の故に、一園苑を造り、名けて勤劬といふ。是の時、太子、彼の苑内に入り、遊戲歡娛して、或は按摩せしめぬ。時に五百の諸釋種の臣、悉く其の兒の爲めに、各園苑を造り、以て戲笑に擬し、按摩・遨遊す。時に忍提婆、太子を將引して、勤劬園に入り、戎仗の智を教ふ。彼の諸釋種も、

【八五】新は、かたし。
【八六】靭。或は鞕(かたし)に作らる。挽は弓をひくこと、鞕はかたきものを射貫くこと。

各各自ら、其の園苑中に入り、遊戲學習す。時に忍提婆、其の數種の兵戎器仗を將て、太子に教へんと欲す。太子、見已りて、悉く皆、棄捨し、卽ち忍天に語りて、是の如き言を作す『汝其の餘の諸釋種の子に敎へよ。我は自ら此を解す。更に學ぶを須ひず。』時に忍提婆、卽ち以て、其の餘の釋種に、此の戎仗の智を教へぬ。而して彼、學び已り、久しからずして、人人悉く二十九種を成就し、竝に皆通達するを得たり。所謂、白象車馬を騰跳し、乃至、强きを挽くこと、一切處に於て、皆、最第一の智、輕便最能の聰明智慧を成就し得たり。又、是の如き等の諸の王技中の最善最勝(なるを成就し得たり。)所謂、書算。諸の計數を解す。印文を雕刻す。宮商律呂、舞歌戲笑（八七）䶗士洽の反䶢魚洽の反謾談。或は諸珍、瓌奇異寶を造る。衣を染めて色を出だす。草葉、種種の諸事を圖畫す。薫香を和合す。或は手筆を弄して、諸書を草正し、能く文章を制す。又復、能く白象の背上にて、能く廻り能く轉じ。鞍を施して、馬に、有ゆる象駝の頭頂尾脚に騙る、種種の諸技、竝に悉く便ち能くす。又、車邊に於て、亦、善く巧に弄れて、諸の異法を出だし、刀槊弓箭を、身中に得悉して、意氣（八八）容與。相撲ちて腕を拗り。捔力して斤を稱げ。按摩（八九）築擳恥皆の反して、脛を拗り臂を搦り。能

【八七】䶗（或誦）䶢或は唊、喻に作る、䶗䶢は俳戲人也（惠琳音義）唊喻は戲謔也（可洪音義）

【八八】容與。心のゆるやかなる貌。

【八九】築。擣也、つくこと。

く擲げ、能く走り。乃至、空しからず。及び聲を聞きて射。轉に入り、强を挽くに、箭の連ること雨の如きなど。太子、此の一切の諸技を、皆、悉く棄捨し、更に學ぶを肯せずして云く、『我、自ら解す。何ぞ敎を須ふるを假らん。』復、諸の王の要法を敎習せんと欲す。所謂、天文。祭祠。占察。前事を（九〇）懸射す。謬語の巧誦。諸獸の音を知る。（九一）聲論に達す。諸技を造作す。伎に因りて報答す。呪術雜事の十餘種の名、治化せる古先の、一切の書典を、太子に敎へ、及び自他の釋にも、亦、是の如くに敎へぬ。又、復、世人が、年を積み月を累ねて、學問せんに、或は成り（或は）成らざる、彼等衆技、一切の諸論を、太子は四年の中に能くし、及び餘の釋種も、皆、悉く學び得て、通達無礙、一切自在なり。是の時、忍天、卽ち太子の爲めに、偈を說きて言く、

『汝年幼き時に、安詳として學問し、多くの功力を用ひず、須臾にして自ら解し、少日月にて學べるもの、他の多年歲なるに勝れ、得たる所の諸技藝、成就して悉く人に過ぎぬ』

【九〇】懸射。あらかじめいひあてる義か。

【九一】聲論。文法のこと。

卷の第十二

遊戲觀矚品第十二

爾の時、太子、王宮に生長す。孩童の時、遊戲して未だ學ばず。年八歲に滿ち、閤を出でて師に詣り、學堂に入り、毘奢蜜、及び忍天の、二大尊の邊より、諸書、幷に一切論、兵戎雜術を受讀す。四年を經歷し、十二に至るの時、種種の技能、遍ねく皆、涉獵し、既に通達し已りて、世間に隨順し、目を悅ばし、心に適ひ、情を縱にして放蕩し、聲色を馳逐す。曾て一時、勤劬園に在り、遨遊射戲す。自餘の五百の諸釋種の童も、亦、各、其の自己の園內に在りて、優遊嬉戲す。時に群鴈有りて・虛空を飛行す。是の時、童子、(一)提婆達多、弓を彎きて射、卽ち一鴈に著す。其の鴈、射られて、箭を帶びて、遂に悉達の園中に墮つ。時に太子、彼の鴈の箭を帶び、傷けられて、地に墮ちたるを見、見已りて、兩手もて安徐捧取し、取り已りて、加趺し、鴈を膝上に安じ、妙滑澤、柔潤なる水波、萬字輪文の福德の手の、細輭なること、猶芭蕉の嫩葉の如き手を以て、左手もて擎持し、右手もて箭を拔

【一】 Devadatta

き、即ち酥蜜を以て、其の瘡を封ず。

是の時、提婆達多童子、使人を遣し、來りて太子に語りて言く、『我、一鴈を射、汝の園中に墮つ。宜しく速に付し來るべし。彼を留むるを得ず』と。是の時、太子、使人に報じて言く、『鴈、若し命終せば、即ち當に汝に還すべし。若し死せざれば、終に得べからず。』時に、提婆達多、復、更に、使人を遣して、語りて言く、『若しは死し、若しは活くるも、決して須らく相還すべし。我が手、先に、善く巧に射得て、遇、彼を墮落せるを、云何ぞ忽ち留むる。』太子、報じて言く、『我、已に、先に、此の鴈を攝受す。然る所以は、我、菩提心を發してより來かた、我、皆、一切衆生を攝受す。況んや、復、此の鴈、いかで我に屬せざらん。』是の因緣を以て、即便ち相競ひ、諸釋の宿老・智人を集聚めて、此の事を判決す。

是の時、一淨居諸天有り、身を變じて宿老長者に化作し、釋の會所に入りて、是の言を作す、『誰か養育するものは即ち是攝受せよ。射著のものは即ち是放捨せよ。』時に、彼の諸釋の宿老諸人、一時に印可し、高聲に唱へて云く、『是の如く、是の如し、仁者の言の如し』と。此はこれ提婆達多童子と、太子と、最初に怨讎を搆結せる因緣なり。

復、一時有り、其の淨飯王、多くの釋種の諸童子輩と共に、并に太子を將て、外に出でて野遊

し、田種を覩看る。時に彼の地内の有ゆる作人、赤體にて辛勤し、耕墾を事とし、牛を以て彼の(二)犂輻の端に縻繫す。牛、若し行くこと遲ければ、時時搖掣す。日長く、天熱し、喘嗽汗流れて、人牛竝に皆、困乏・飢渴し、又、復、身體羸瘦して骸を連ぬ。而して彼の犂の(三)撥せる場土の下に、皆、蟲ありて出で、人犂の過ぎて後、時に諸鳥雀、競ひて飛び下り來り、此の(四)蟲豸を食ふ。太子、玆の犂牛の疲頓し、兼ねて鞭撻せられ、犂輻領を研り、鞅繩咽を勒め、血、出でて下流し、皮肉を傷破るを見、復、犂人の、日に背を炙かれ、赤體を裸露し、塵土、身を坌し、烏鳥、飛び來りて、爭ひて蟲を拾ひ食ふを見、太子、見已りて、大憂愁を起す。譬へば、人有り、家の親族の繫縛せらるるを見る時、大憂愁を生ずるが如く、太子の、彼の諸衆等を憐愍する、亦復是の如し。是の事を見已りて、大慈悲を起し、卽ち馬王、犍陟の上より下り、下り已りて、安庠として經行し、諸衆生等の、是の如き事有るを思念し、卽ち復、唱へて言く、『嗚呼、嗚呼、世間の衆生、極めて諸苦を受く。所謂、生老、及び病死なり。兼ねて復、種種の苦惱を受け、其の中に展轉して、離るるを得る能はず。云何ぞ、是の諸の苦を捨てんことを求めざる。云何ぞ、苦を厭ふの寂智を求めざる。云何ぞ、生老病死の苦因を免脫せんと念せざる。我、今、何ぞ空閑

【二】犂。すき、輻は又は楅に作る、くびき。
【三】撥は拔土をおこすこと。
【四】豸。あしなきむし。

處を得て、是の如き諸苦惱の事を思惟せん。』

時に淨飯王、田作を觀已り、諸童子と共に、還、一園に入る。是の時、太子、安庠として矚盼し、處處を經行して、寂靜を求めんと欲す。忽ち一處に、閻浮樹有り。條幹滑澤、端正、憐むべく、鬱蓊扶疎として、人の樂み見る所なるを見、見已りて、卽ち諸の左右に語りて言く、『汝等諸人、各、我を遠離せよ。我、私に行かんと欲す。』

是の時、太子、左右を發遣し、悉く散せしめ已り、漸く樹下に至り、樹下に到り已りて、卽ち草上に、加趺して坐し、諦に心に思惟す、『衆生には、生老病死、種種の諸苦有り』と。慈悲を發起し、卽ち心の定まるを得。彼の時、卽便ち、諸欲を離れ、一切の諸不善法を棄捨し、境界を思惟し、境界を分別し、欲界の漏盡きて、卽ち初禪を得たり『我が身も亦、自ら、是の如き法有り、未だ此法を免れず、未だ此の輪を度せず。』

思惟の時に當り、（五）五神仙有り、虛空を飛騰して、自在に行き、大威德有り、大勢力有り。具足して毘陀の論に巧通し、善く諸術を解す。南より北に向ひ、彼の園林の閻浮樹上を經て、飛び過ぎんと欲して、卽ち去る能はず。各、相謂つて言く、『我等往昔去來、自ら恣に須彌をも穿過

【五】 五神仙。五種の神通、卽ち天眼・天耳・神足・他心・宿命の通力を有する神仙なり

し、諸の神通を出だして、種種に示現し、乃至、毘沙門宮大天王の所に到り、或は阿羅迦槃多城に至り、亦、能く彼の城を穿過しぬ。多く、種種の夜叉、諸惡神等有るも、我、亦、曾て彼の上を經たり。此の樹端を飛過して、我、亦、曾て、經ること無量過度なるも、曾て礙有らず、神通を失せざりしに、今日は誰の威德力を以ての故にか、我等をして、神通を退失して、過ぐるを得る能はざらしむる。』

彼等仙人、卽ち其の樹を觀て、遂に太子の樹陰の下に在りて、加趺して坐し、威光巍巍、顯赫として觀難きを見、彼等、見已りて、是の思惟を作す、『此に坐せるはこれ誰ぞや。將た是、彼の大梵天王世間の主に非ざるか。或は復、是や彼の(六)吃沙那天欲界の主か。或は天帝釋か。或は毘沙門大庫藏主か。或は月天子か。或は日天子か。或は復、これ轉輪聖王か。或は此に坐し給ふは、これ佛の、世に出現し給へるに非ざるを得んや。然り、今、此の人、威德甚だ大なり。』

爾の時、彼の林の守護の神、諸仙に告げて言く、『諸仙人輩、此は大梵世間天主に非ず。吃沙那欲界の主に非ず。亦、天帝及び毘沙門庫藏の主にも非ず。亦復、是、日月天子にも非ず。此の太子は、悉達多と名づけ、これ淨飯王、釋種の童子なり。諸仙當に知るべし。大梵天王所有の威德、

【六】 Kṛṣṇa（クリシナ）

其の吃沙那天主、帝釋、毘沙門王庫藏の主、月天、日天、轉輪聖王の諸威徳等を、悉達多太子所有の、一毫の威徳に比するに、彼の諸威徳は、十六分中、其の一にだも及ばず。是の故に汝等、此の樹林に至り、上を飛過せんと欲するも、神通に限有りて、度るを得る能はず」と。

時に彼の諸仙、護林神の、是の如き語を聞き已り、虚空より下りて、太子の前に住し、各偈を説きて、太子を讃歎す。時に一仙人、偈を説きて言く、

『世間の煩惱の火熾然なるに、是能く法の池水を出生し、既に是の如き微妙の法を得て、彼の煩惱の火を滅して（七）燼無せん。』

復、一仙有り、偈を説きて言く、

『世間の愚癡甚だ黑暗なるに、此能く智慧光を出生し、既に是の如き微妙の法を得て、彼の昏盲なる一切世を照さん。』

復、一仙有り、偈を説きて言く、

『曠野大澤の中に憂惱するとき、此の大馱乘のみ能く致るに勝ふ。既に是の如き微妙の法を得て、能く（八）三有の諸衆生を度せん。』

復、一仙有り、偈を説きて言く、

【七】燼。燒けたる木の餘りをいふ。

【八】三有。欲界・色界・無色界のこと。

『一切の世間は煩惱に纏はるるに、此能く方便もて解脫せしめん。
既に是の如き微妙の法を得て、能く一切諸結の羈を脫せん。』

復、一仙有り、偈を說きて言く、

『世間所有の生死の痾を、此の大醫師は能く救療せん。
既に是の如き微妙の法を得て、能く一切生死の(九)疣を治せん。』

時に、諸仙人、各偈を說き、太子を歎じ已り、接足頂禮し、右に繞ること三匝にして、虛空を飛騰し、相隨つて去る。

時に淨飯王、須臾の間、太子を見ず、心內に卽ち不喜不樂を生じ、人に問うて言く、『我が太子、今、何處にか在る。(此の上の兩句は梵本は重ねて稱す。)忽然として見えず』と。是時、諸臣、東西南北に、交橫馳走し、太子を尋ね覓むるに、所在を知る莫し。時に一大臣、遙に、太子の、彼の閻浮樹の陰の下に在りて、思惟坐禪するを見、復、一切の樹影の悉く移るに、唯、閻浮の陰のみ、獨り太子を覆ふを見、時に彼の大臣、太子の、是の希奇、難思議の事有るを見、卽ち大に歡喜し、踊躍充遍して、自ら勝ふる能はず。急疾に奔馳し、走りて王の所に詣り、至り已りて長跪し、見たる所の事に依りて、卽ち偈を說きて言く、

【九】疣或は肬、小腫也、いぼ。

『大王・太子は今、閻浮樹の陰の下に在りて端坐し、
加趺思惟して三昧に入り、光明の照曜すること日山の如し。
此は實に眞にこれ大丈夫なり。樹影卓然として移動せず。
唯願はくは大王自ら觀察せよ、太子の相貌・坐の云何なるかを。
譬へば大梵諸天王の如く、亦忉利天帝釋の如く、
威神巍巍光顯爀として、遍く彼の諸樹林を照す。』

時に淨飯王、聞き已りて、即ち閻浮樹の所に詣り、遙に太子の、彼の樹間に在りて、結加趺坐するを見るに、譬へば、黒夜、山の頂頭を視るに、大聚火光の、猛明の炎を出し、盛德顯著にして、炳照巍巍たるが如く、重雲の間に忽ち明月を出すが如く、亦、暗室に大淨燈を然すが如し。時に、王、見已りて、大希有、奇特の心を生じ、遍體戰慄し、身毛悉く竪ち、即ち頭頂もて、太子の足を禮し、歡喜踴躍して、是の言を作す、『善い哉、善い哉、我が此の太子、大に威德有り。』偈を說き讚じて曰く、

『夜の大火聚の山頂の如く、秋の明月の雲間に徹るるに似たり。
今太子の坐して思惟するを見て、覺えず毛竪り身戰慄す。』

時に、淨飯王、偈を說き讚じ已り、更に復、太子の足を頂禮し、重ねて偈を說きて言く、

『我今再度此の身を屈し、千輻勝妙の足を頂禮す。
生れしより已來今日に至り、忽ち復坐して思惟するを見るを得たり。』

時に、笙蹄を擎挾する小兒有り。大王に隨順して、(一〇)啾唧戲笑す。一大臣有り。彼の小兒を咄して、是の如き言を作す、『汝、小兒輩、幸に唱叫する勿れ。』時に諸小兒、彼の臣に報じて言く、『何の故に、我等の喧適を聽さざる。』爾の時、大臣、卽ち偈頌を以て、彼の一切の諸小兒に答へて言く、

『日光は極熱猛盛なりとも、彼の樹の陰涼を廻らす能はず。
復最妙なる一尋の光有りて、盛德・世間に匹ぶもの有ること無し。
樹下に思惟し端坐して、不動・不搖・須彌の如き、
悉達太子は內深心より、此の樹陰を樂んで當に捨てざるべし。』

【一〇】啾唧―小兒の戲聲なり。

捔術爭婚品第十三の上

爾の時、太子、漸く成長に向ひ、年十九に至る。時に淨飯王、太子の爲めに三時殿を造る。一は暖殿、以て隆冬に擬し、第二は涼殿、夏暑に擬し、其の第三殿は、用て春秋二時の寢息に擬す。冬の坐に擬せる殿は、一向に煖、夏の坐に擬せる殿は、一向に涼、春秋二時の坐に擬せる殿は、調適にして、溫和處平、不寒不熱なり。復、宮內後園の中に、水を堰き渠を流し、池沼を造作し、種種衆雜の名花、所謂、(一)優鉢羅華・(二)波頭摩華・(三)拘物頭華・(四)分陀利華を栽蒔す。太子の、喜樂を作さんが爲めの故なり。

復、無量無邊の諸人有り、各自の職司は、太子に侍衞す。或は復、人有り、太子を按摩す。或は復、人有り、太子を柔輭にす。或は復、人有り、諸の香油を以て、太子に塗茶す。或は復、人有り、洗浴の時、太子を揩拭す。或は復、人有り、澡浴の時、香湯を供す。或は髮を染め、頭髻を梳る者有り。或は復、鏡を執りて照らす者有り。或は塗香を執り、或は眼藥を執る。或は復、薫衣香を執る者有り。或は牛黃を執り、或は華鬘を執る。或は復、種種の雜色微妙の衣服を執り、太子の前に立ち、

【一】優鉢羅(Utpala)。青蓮花。
【二】波頭摩(Padma)。紅蓮花。
【三】拘物頭(Kumuda)。黃蓮花。
【四】分陀利(Pundarika)。白蓮花。

常に太子の著に供奉せんと擬する有り。其の衣は、悉く是れ（五）迦尸迦衣。執り已りて躬を曲げ、須ふれば卽ち進む。其の太子の父、輸頭檀王、所著の衣、裏若し迦尸迦なれば、外表は則ち其の餘の諸物を用ふれども、太子は然らず。所服の衣、內外悉く迦尸迦を用て作る。太子の左右、及び執作人、僮僕男女、諸の後從等は、皆悉く（六）餧ふに、（七）粳粮の飯、雜肉の（八）虀醬、或は（九）臛、或は（一〇）羹を以てすれど、太子一身には、別に妙香、好美の粳粮、精細に揀擇せる羹臛、雜（一一）奠、百味の（一二）蘭餚、種種の（一三）珍羞、及び諸の餅果を置き、是の如き無量を、日別に、恒常に、晝夜に修營し、各、皆、新造して、以て太子に擬す。又、白蓋を持て、太子の上を覆ひ、或は夜戲の零露・風霜、或は復、晝遊の塵埃と日照とを畏る。

時に淨飯王、既に太子の年、漸く大に向ふを見、心中に復、阿私陀仙（一四）授記の語を憶ひ、諸の耆舊釋種大臣を集めて、是の言を作す、「汝等親族、曾て聞き知れるや否や。我が此の太子、初生の時、諸の解相及び婆羅門阿私陀等を召したるに、皆、之に記して言く、「其れ若し在家ならば、定めて當

【五】迦尸迦　Kāśikasūkṣma
【六】餧。くひもの、くふ。
【七】粳は秔、うるしね。粮は糧、かて。
【八】虀は齏、なます。醬はひしほ又はみそ。
【九】臛　あつもの。
【一〇】羹。あつもの又はすひもの。
【一一】奠。すすむ、又そなへもの。
【一二】蘭。香氣ある草。餚は肴なり。
【一三】羞。そなへたる滋味。
【一四】授記。豫言のこと。

に轉輪聖王と作るを得べく、若し捨てて出家せば、必ず無上道を成就し得ん」と。而して我等、今、何の方便を作してか、此の童子をして出家せざるを得しむる。』諸釋の親族、卽ち王に報じて言く、『大王、今、當に、速に太子の爲めに、別に宮室を造り、諸婇娛樂女をして嬉戲せしむべし。是、則ち太子は捨てて出家せじ。』而して偈有りて說く。

『阿私陀の記する所、決定して移動する無し。
諸釋・殿を立つることを勸め、出家せざらしめんを望みぬ。』

「是の如く方便せば、我等釋種は、興盛を得て、能く一切をして恭敬尊重せしめ、粟散諸王の爲めに欺かれざるべし』と。

時に淨飯王、復、釋種の諸親族に語りて言く、『汝等、當に觀るべし。誰が釋の女か、我が太子悉達の與に、妃と爲すに堪ふる。』爾の時、五百の諸釋種の族、各唱へて言く、『我が女は太子の爲めに、妃と作るに堪ふ』と。上の兩句は、梵本悉く再稱すれど、今は略す。時に淨飯王、復、自ら思惟す、「若し我、今日、太子と、是の如く籌量せずして、忽ちに他女を取りて、其が與に妃と作し、脫し稱可せずば、則ち違負を成さん。若し我、今、太子と共に語論せんも、太子の意、深くして、終に道ふを肯せざらん。我、今、狐疑す。何の方便をか作さん。」』復、更に思惟す、『我、今、種種の雜寶を

以て、無憂器を作り、持て太子に與へ、太子をして、用て諸の女人に施さしめ、密に使を遣はし、覘ひて其の意を觀察し、太子の眼目の瞻矚の、誰が邊に在るかを看て、我は即ち娉取して、其が爲に妃と作すべし。』

時に淨飯王、即ち、雜寶玩弄の無憂の器を造作せしむ。所謂、金銀もて種種に雜飾す。作り已りて、即ち迦毗羅城に於て、鐸を振り、唱へて言く、『今より已去、七日に至る來た、我が太子、釋種一切の諸女を見んと欲す。見已りて、一切雜寶、種種玩弄の無憂の器を施さんと欲す。城内の有ゆる一切の諸女、悉く我が宮門に來集すべし。』

爾の時、太子、六日已に過ぎて、第七日に至り、先に出でて王宮の門前に在り、筌蹄に據りて坐す。是の時、城内の一切諸女、皆、種種雜寶の瓔珞を以て、各 其の身を嚴り、宮門に來集して、太子に見えんと欲し、復、種種諸寶の無憂の器を受け取らんと欲す。是の時、太子、諸女の來るを見、即ち種種の寶器を以て、彼等諸女に施與す。四方より來りて太子を見る者、是の太子の威德の大なるを以ての故に、諸女、正しく太子を看る能はず、但、寶器を取り、各低頭して速に疾く過ぐ。寶器、盡き已りて、最後に一(一五)婆私吒族、釋種大臣、(一六)摩訶那摩有り。其の女、名づけて(一七)耶輸陀羅と

【一五】婆私吒(Vasiṣṭha)。
【一六】摩訶那摩(Mahānāma)。
【一七】耶輸陀羅(Yaśodharā)。

爲す。前後に侍從する、衆多の婢媵に圍繞せられて來り、遙に太子を見て、峨峨として睛を注ぎ、目を擧げて雅步し、瞻觀直眄して、目、斜に〔一八〕闚ず、漸進〔一九〕前趍し、來りて太子に近づくに、舊相識の如くにして、曾て媿顏無く、卽ち太子に白して、是の如き言を作す、『太子、今、我に雜寶の無憂器を與へて來るべし。』太子、報じて言はく、『汝の來るや既に遲し。皆、悉く施し盡せり。』彼の女、復、更に、太子に白して言さく『我、何の過有りてか、汝、今、我を欺きて、寶器を與へざる。』太子、答へて言はく、『我、汝を欺かず。但、汝、後に來り、自ら及ばざるのみ。』是の時、太子の指邊に、一の所著の印環有り。價、百千に直る。指より脫して、耶輸陀羅に與ふ。耶輸陀羅、太子に白して言く、『我は爾の邊に於て、止、爾の許物のみに直るべしや。』太子、報じて言はく、『我が著する所の、自餘の瓔珞、意の取る所に任せん。』彼の女、白して言く、『我、今、豈、太子を剝脫すべけんや。只太子の身を莊嚴すべきのみ。』太子に語りて、是の言を作し已りて、心に喜歡せず、卽ち迴還して去る。

爾の時、世尊、成道已後、尊者〔二〇〕優陀夷、佛に白して言さく、『世尊、云何ぞ、如來の、王宮に在せる時、身の一切の無價の瓔珞を將て、脫して持つて耶輸陀羅に施與して、能く彼の心に歡

〔一八〕闚、音はけい、少しく視る。
〔一九〕趍は趨なり。
〔二〇〕優陀夷、(Udāyin)。

喜を生ぜしめたまはざりし』と。佛、尊者優陀夷に告げて言はく、『汝、優陀夷、至心に諦聽せよ。我、當に之を說くべし。耶輸陀羅は、但に今世に、其に瓔珞を與へて、歡喜せざらしむるのみに非ず。其の往昔來、曾て小緣に因りて、瞋恨を生ぜるが故に、復、多種の珍寶を布施すと雖も、猶ほ歡喜せず。』優陀夷言さく、『甚だ奇なるかな、世尊、此の事は云何。願はくは我が爲めに說き給へ。』

爾の時、佛、優陀夷に告げて言はく、『我、念ふに、往昔、無量世の時、迦尸國內波羅㮈城に、時に一王有り、邪倒の見を信じて、治化を行へり。彼の王に子有り、(二一)少罪愆を造る。父王、驅擯して、國界を出でしむ。漸漸に行きて一天寺中に至り、婦と相隨ひ、居停して住す。時に彼の王子、將つ所の食糧、皆、悉く罄盡く。王子は遊獵して、諸蟲を殺捕し、以用て活命す。所獵の處に一鼉蟲を見、(二二)趂りて之を殺し、即ち其皮を剝ぎ、水中に內れて煮るに、その熟するに向はんとして、汁便ち渴盡く。是の時、王子、其婦に語りて言はく、「肉は未だ好く熟せず、卿、更に水を取れ。」彼の王子の婦、即便ち水を取らんとす。婦の去りて已後、王子、飢うること急にして、忍耐する能はず。即ち鼉肉を食し、一切悉く盡き、片殘をも留めず。時に王子の婦、水を取りて廻還り、其の夫に問うて言はく、「此

【二一】愆。俗の愆あやまり。
【二二】趂は趁と同じ、はしる。

中の鼉肉は、今、何處にか在る。」王子報じて言はく、「鼉、忽然として活き、今、已に走り去りぬ。」其婦信ぜず、「何ぞ忽ち是の如けん。鼉は煮え已りて熟す。云何ぞ能く走らん。」婦、心に信ぜずして、意に思念す、「必ずこれ我が夫の、飢うること急にして食ひ盡し、我を誑りて、走れりと言ふならん」と。情懷瞋恨して、心、常に歡ばず。後、數年にして、其の父、命終す。時に諸大臣、卽ち王子を迎へ、灌頂して王と爲す。既に王と作り訖りて、得る所の衆寶、及び諸の奇珍、種種の衣裳、無價の物、皆、悉く妃に與ふ。其の妃、納むと雖も、而も面顏色の悦ばざること前の如し。爾の時、彼の王、其の妃に語りて言はく、「我が一切の寶、無價の物、以持て妃に賜ふ。何の故に顏色の歡悦ならざること、前の如くにして異る無きか。」時に其夫人、卽ち偈頌を說き、以て王に報じて言はく、

「最勝の大王聽きたまへ。
往昔遊獵の時、箭を執り或は刀を持ちて、野鼉を射殺して死なしめ、
皮を剝ぎて煮、熟せんとして我をして水を取つて添へしむ。
肉を食して殘し留めず。而して我を誑りて走れりと言へり。」

優陀夷に告ぐ、これ汝、當に知るべし。爾の時の王とは、我が身これなり。其の王后とは今日

の耶輸陀羅これなり。我、爾の時に於て、少許の犯觸、後時に續き、多く、財寶を以て、與へて和適を望めども、而も恨を懷きて、猶ほ喜歡せざりき。今日も亦然り。無量諸種の錢帛を將てすと雖も、亦、其の心をして歡喜せしむる能はず。』

時に淨飯王所遣の密使、太子を察する者、一心に太子の眼目の、其の瞻矚する所、諸女と相當語對する所を視、而して彼の密使委悉皆知り、知り已りて卽時に王の所に往詣し、王に白して言く、『大王、當に知るべし、釋大臣摩訶那摩なるもの有り。其女、後に來り、太子と共に語り、數番、往復して、兼ねて且つ微笑し、停住すること少時、調戲言語し、太子、彼の女の二顏、倶に悅び、彼此答對して、四目相當せり。』

時に淨飯王、彼の密觀の是の如く語るを聞き已り、心內に思惟すらく、『太子の意、彼の女を得んと欲するか。』時に淨飯王、好吉宿・良善の日を看て、卽ち國師婆羅門を喚び來り・釋種摩訶那摩大臣の家に向ひて、是の言を作さしむ、『卿に女有るを知る。今、我が太子の與に妃と作すべし。』此時、國師、王の語を聞き已り、卽ち釋種の摩訶那摩大臣の家に詣り、是の如きの言を作す。『摩訶那摩、王の勅、是の如し。』時に釋大臣、國師に報じて言はく、『我が釋迦の法、相承是の如し、（三）「若し技能の、一切に勝る者

【三】妙齡の女子が、一定の日を期して、國內の武藝に達せ

有らば、彼の人の邊に、卽ち女を嫁し與へん。若し技能無くんば、女を與ふるを得じ。大王の太子、深宮に生長し、耽媔嬉戲して、未だ曾て學習せず、技能有ること無く、弓射・天文・兵書・戎仗・一切の戰鬪・捔力・拳摑、悉く未だ工みに閑はず。我、何の故にか、今、無藝の人の邊に、女を嫁し與へん。』是の時、國師、是の語を聞き已り、還りて王の所に至り、是の如き語を將て、具に王に白す。

時に淨飯王、此の言を聞き已り、心に愁惱を懷きて、是の如く思惟す、『摩訶那摩の此の語、如法なり。我に向ひて實論し、一の虛妄無し』と。是の念を作すと雖も、王の內心、悵怏默然、迷悶して住す。其の狀、坐禪思惟するが如し。

太子、是の時、父王の面の、容色を失し、悵怏として歡ばず、猶ほ坐禪思惟と一種なるが如きを見、此事を見已りて、漸く王の所に至り、王に問うて言はく、『未審し、父王、何の緣を以ての故に、是の如く愁惱し、獨坐して思惟したまふ。』是語を作し已るや、時に淨飯王、太子に答へて言はく、『子、須らく我に是の如き事を問ふべからず。』太子再問す。父王、重ねて止む。太子、是の如く三問す、『父王、大王、要らず須らく我に報じて、所以に我が心の疑を解きたまふべし。』

るものに競技を求め、その最勝のものを以て、夫とするは、古代印度に於て行はれたる一種の結婚法なり。之をスヴヤムバラ(Svayambara)といひ、頗る華麗且つ壯快なる儀式なりき。

時に淨飯王、三たび太子の、是の如き事を問ふを見、卽ち太子に向ひ、前の所說の如くす。太子、知り已り、父王に問うて言く、『父王、頗る父王の城內に、人の能く出でて、我と共に技藝を試むるもの有るを知りたまふや不や。』時に淨飯王、是の語を聞き已り、卽ち大に歡喜し、踊躍身に遍ねくして、自ら勝ふる能はず。卽ち更に重ねて太子に審問して、是の如き言を作す、『善い哉、太子、汝、實に能く諸技藝を捔するや不や。』太子、答へて言く、『大王、善く聽きたまへ。我、今、實に能くす。大王、但、當に速に諸釋種の一切の童子を集め、我と諸有の技藝を捔試せしむべし。』

時に淨飯王、勅して迦毘羅城內の街巷四衢の道頭に、悉く鐸を振りて、大聲に唱令せしむ、『今より以去、計して七日に至らば、我の儲宮、悉達太子、今、其の有ゆる諸技を出さんと欲す。若し解する者有らば、悉く聚集し、共に捔試し看しめよ。』時に六日過ぎて、第七日に至り、五百の釋種の諸童子等、悉達を首と爲し、竝に皆、聚集す。聚集し訖已り、相共に城を出で、是の諸童子の技能を出す一寬地に至る。時に釋大臣、卽ち好く耶輸陀羅を莊嚴し、上勝の（二四）垜を爲し、是の如き言を作す、『誰か能く善く一切の技藝に通ずる。最勝上者に、卽ち此女を以て、其が與に妻と作さ

【二四】垜は垜、射的をかけおく處。或は垺に作る。吳人、土を積むを以て垺といふとぞ。

ん。』時に淨飯王、諸釋種の耆舊長德と共に、先に至る。復、無量無邊の雜姓の男子女人・童男童女有り。皆、悉く聚集し、彼の試場たる寬地の所に詣り、太子及び諸釋種の一切童子の、技能を捔試し、誰か最も勝れたるかを觀んと欲す。是の時、諸の釋種童子の、文學に快き者有り。先づ太子と共に。手筆を試む。時に釋種有り、相共に謂つて言く、『今は宜しく毘奢蜜多をして、爲めに試師と作らしむべし。』即ち之に語りて言はく、『汝、諸童子の內、手筆の誰が勝れるか、或は復、快書・疾書・善書・解多種書を觀察すべし。』爾の時、毘奢蜜多大師、先づ太子の、諸書中に於て、最勝最上なるを知り、熙怡微笑して、偈を說きて言はく、

『一切の人間及び天上、(二五)乾闥・(二六)修羅・(二七)迦樓羅の、
所有の文字諸の書典を、太子は遍歷して皆通達す。
我が身及び汝等輩は、此の如き書籍の名だも知らず。
(二八)人間悉く我が試み來れるを解せば、定めて知らん其が勝れて汝の如かざるを、』

爾の時、彼等釋種の徒衆、詳に共に齊しく淨飯王に白して言く、『我、今、已に知る。大王の太子は、書典中に於て、最も勝上たり。算計須らく試むべし。誰か明なるを知るを得ん。』是の

【二五】乾闥(Gandharva)。
【二六】修羅(Asura)。
【二七】迦樓羅(Garuḍa)。
【二八】(原文)人間悉解我試來・定知其勝汝不如

時、衆中に一の最大算計の師有り、〔二九〕頞誰那と名づく。一切の算計に、最、第一たり。時に釋衆は、頞誰那を喚び來り、試驗せしめんとし、語りて言はく、『尊者、汝、好く諸童子中、誰が算計の、最第一たるかを觀看よ。』時に、太子の算や、一釋種の明了なる童子をして、對して算籌を下さしむるに、供なる能はず。更に二童、下すも猶ほ供なはず。三童子、下すも亦、供なる能はず。乃至、一十の童子、供に下すも、而も亦、供ならず。二十、三十、四十、五十、一百が、共に下すも、亦、供ならず。二百・三百・乃至、四百・五百が、一時に盡く下すも、猶ほ供ならず。是の時、太子、是の如きの言を作す、『汝等、今、算せよ。我當に下すを爲すべし。』時に一釋種の童子、算を唱へ、太子下すを爲す。算し得る能はず。太子、復、言はく、『二人雙び計せよ。』復、及ぶ能はず。太子、復言ふ、『乃至、一百、一時に共に計せよ。』猶ほ及ぶ能はず。太子、復言はく、『汝等、何ぞ是の如く相競ふを假らん。但此等の輩、一切一時に各自計唱せよ。我當に下すを爲すべし。』時に諸釋種の五百の童子、一時に俱に唱ふ。太子、爲めに、一時に齊しく下すに、上に數へたるが如く、一より起りて、乃至、數を盡くすも、太子は錯らず、亦、復、亂れず、安詳、審諦に、次第に下す。彼等一切の諸釋童子は、力を盡して共に算するも、悉達太子の萬分の一にだも及逮ぶ能はず。時に頞

【二九】 Arjuna（アルジュナ）

誰那國大算師、心に密に驚き怪しみ、極めて歡喜を生じ、偈を説きて言はく、

『善い哉揵利に深く憶持し、分明に唱下して錯有る無く、

五百の釋童の算を解すと稱するもの、一時に共に對して當る能はず。

是の如き智慧正念の心より、算計する疾速にして甚だ深奧、

【三〇】是る算師や天下を計し、巨海の渧數をも悉く應に知るべし。

汝等默然として且つ聲を禁じ、須く彼と與に相捔競すべからず。

其れ既に是の如き術を解知す。應に我と相校量するを得べし。』

時に彼の釋衆一切、皆希有の心を生じ、坐より起ち、十指掌を合し、太子を頂禮して謂ふ、『悉達多太子、大勝なり、眞實の大勝なり』と。同聲に、復、淨飯王に白して言はく、『善い哉、大王、大に善利を得たり。善く人間に生れたまへり。大王、今や是の如き聰容大福德の子、智慧の子を生む。舌根、是の如く輕便囀滑にして、口業を成就す。』時に淨飯王、熙怡微笑し、太子に語りて言はく、『善い哉、太子、汝、今、能く此の頞誰那大算の師と、世間の方便智を計算して、能く相入るを得るや不や。』是時、太子、父王に答へて言はく、『大王、我能くせん。』時に淨飯王、太子に語りて言はく、『汝、若し能くせば、當に自ら時を知るべし。』

【三〇】（原文、是等算師計天下の中の等の一字解し難きを以て之を除けり。

時に頞誰那大計算師、太子に語りて言はく、『仁者太子、汝、億上の算數を知るや不や。』太子、答へて言はく、『我、甚だ之を知る。』時に頞誰那算師、復、言はく、『汝の知るは云何、我が爲に之を說け。』太子、答へて言はく、『凡そ億の中に入る算計數は、汝等、諦に聽け、我、今、之を說くべし。一百の百千、是を（三一）拘致（隋に千萬と數ふ。）と名づけ、百拘致を（三二）阿由多（隋に十億と數ふ。）と名づけ、百阿由多を（三三）那由他（隋に千億と數ふ。）と名づけ、百那由他を（三四）波羅由他（隋に十萬億と數ふ。）と名づけ、百波羅由他を（三五）咺迦羅（隋に千萬億と數ふ。）と名づけ、百咺迦羅を（三六）頻婆羅（隋に十兆と數ふ。）と名づけ、百頻婆羅を（三七）阿芻婆（隋に千兆と數ふ。）と名づけ、百阿芻婆を（三八）毘婆娑（隋に十萬兆と數ふ。）と名づけ、百毘婆娑を（三九）鬱僧伽（隋に千萬兆と數ふ。）と名づけ、百鬱僧伽を（四〇）婆訶那（隋に十京と數ふ。）と名づけ、百婆訶那を（四一）那伽婆羅（隋に千京と數ふ。）と名づけ、百那伽婆羅を（四二）帝致婆羅（隋に十萬京と數ふ。）と名づけ、百帝致婆羅を（四三）卑婆娑他那波若帝（隋に千萬京と數ふ。）と名づけ、百卑婆娑他那波若帝を（四四）醯兜奚羅（隋に十咳と數ふ。）と名づけ、百醯兜奚羅を（四五）迦羅逋多（隋に千咳と數ふ。）と名づけ、百迦羅逋多を（四六）醯都因陀羅陀（隋に萬咳と數ふ。）と名づけ、百醯都因陀羅陀を（四七）三蔓多羅婆（隋に十萬咳と數ふ。）と名づ

【三一】拘致（Koṭi）
【三二】阿由多（Ayuta）
【三三】那由他（Nayuta）
【三四】波羅由他（Prayuta）
【三五】咺迦羅（Kaṃkara）
【三六】頻婆羅（Bimbara）
【三七】阿芻婆（Akṣobhya）
【三八】毘婆娑（Vivāha）
【三九】鬱僧伽（Utsaṅga）
【四〇】婆訶那（Vāhana）
【四一】那伽婆羅（Nāgabala）
【四二】帝致婆羅（Tiṭibala?）
【四三】卑婆安他那波若帝（Vyavasthānaprajñapti）
【四四】醯兜奚羅（Hetuhila）
【四五】迦羅逋多（Karaphu 又は

け、百三蔓多羅婆を（四八）伽那那伽尼多（隋に十秭と數ふ）と名づけ、百伽那那伽尼多を（四九）尼摩羅闍（隋に千秭と數ふ）と名け、百尼摩羅闍を（五〇）目陀婆羅（隋に十萬秭と數ふ）と名づけ、百目陀婆羅を（五一）阿伽目陀（隋に千萬秭と數ふ）と名づけ、百阿伽目陀を（五二）薩婆婆羅（隋に十壤と數ふ）と名づけ、百薩婆婆羅を（五三）毘薩闍波帝（隋に千壤と數ふ）と名づけ、百毘薩闍波帝を（五四）薩婆薩若（隋に十萬壤と數ふ）と名づけ、百薩婆薩若を（五五）毘浮登伽摩（隋に千萬壤と數ふ）と名づけ、百毘浮登伽摩を（五六）婆羅極叉（隋に十溝と數ふ）と名づく。是の如き算計の數に入りて、其の須彌山も、若し斤兩銖分を算知せんと欲せば、悉く知るを得べし。此より以上に、復、一算有り、陀婆闍伽尼民那と名く。此の已上に、復、算計有り。奢槃尼と名く。此の已上に、復、算有り、波羅那陀と名く。此の上に復、算有り、伊吒と名く。此の上に復、算有り、迦樓沙吒啤多と名く。此の上に復、算有りて、薩婆尼差波と名く。此の計に至り、恒河沙等の一切の算數、總覽して收め盡す。此の上に復、算計の數有り、阿伽娑婆と名く。此の數は、一恒河沙の億百千萬の恒河沙の數計を數へ、取りて悉く皆、總て此に入る。而して此の上に復、更に

karabha)。

【四六】●●●●●醯都因陀羅陀、(Hetuindriya)

【四七】●●●●●三蔓多羅婆(Samāptalambha)

【四八】●●●●●●伽那那伽尼多(Gaṇanāgati)

【四九】●●●●尼摩羅闍 Nirvarana 又は Nimbaraja)

【五〇】●●●●目陀婆羅 Mudrabala)

【五一】●●●●阿伽目陀(Mahamudra)

【五二】●●●●薩婆婆羅(Sarvabala)

【五三】●●●●。毘薩闍婆帝、Visamjñāgati)

【五四】●●●●薩婆薩若 Sarvasamjñā)

【五五】●●●●●毘浮登伽摩 (Vibhūtaṅgama)

【五六】●●●●婆羅極叉 Balākṣa)

計有り、波羅摩㝹毘婆奢と名く。』

時に頞誰那大計算師、太子に語りて言く、『是の如く已に知る。其の微塵數算の計に入ること、更に復、云何。今、亦、須らく知るべし。』太子答へて言く、『汝等、諦に聽け、我、今、之を說かん。凡そ七微塵は一(五七)牕塵を成す。七牕塵を合して、一(五八)兎塵を成す。七兎塵を合して、一(五九)羊塵を成す。七羊塵を合して、一(六〇)牛塵を成す。七牛塵を合して、一(六一)蟣を成す、七蟣を合して、一虱を成す。七虱を合して、一(六二)芥子を成す。七芥子を合して、一大(六三)麥を成す。七大麥を合して、一(六四)指節を成す。七指節を累ねて、半尺を成す。兩半尺を合して、一尺を成す。二尺は一(六五)肘。四肘は一(六六)弓、五弓は一杖。其の二十杖を、名づけて一息と爲す。其の八十息を、(六七)拘盧奢と名く。八拘盧奢を一(六八)由旬と名く。此衆中に於て、誰か能く知る有りや。幾許の微塵、一由旬を成すか。』(隋の數計に依れば三百八十四里一百三十步を得。)

時に頞誰那大算計師、太子に報じて言く、『大德仁者、我だも尙は是の如きの數を知らず、我、

【五七】牕塵(Abraja)
【五八】兎塵(Sasaraja)
【五九】羊塵(Avraja)
【六〇】牛塵(Goraja)
【六一】蟣(Likṣa)
【六二】芥子(Yūka)
【六三】麥(Yava)
【六四】指節(Aṅgulipārva)
【六五】肘(Hasta)
【六六】弓(Dhanu)
【六七】拘盧奢(Krośa)
【六八】由旬(Yojana)

今、説くを聞かば、猶ほ迷悶を生ぜん。況んや、復、自餘の少智少聞愚癡の人をや。然りと雖も、
唯、願はくは、太子、我等の爲めに、幾許の微塵の一由旬を成すかを説きたまへ。』

卷の第十三

捔術爭婚品第十三の下

爾の時、太子、頞誰那大算師に報じて言はく、『汝等、諦に聽け。(一)其の一由旬の、微塵多少、漸漸積滿して、一阿㝹婆。是の如く更に復、一那由他。更に復、二十億那由他百千。復、六十億百千。復、三十二億。復、五百千。復、一百千、是の如き等の數の微塵多少、總計して、此の一由旬を滿足す。是の如く次第に展轉して、由旬の大小を數ふれば、此の(二)閻浮提は、縱廣正等、七千由旬なり。(三)西瞿耶尼は八千由旬なり。(四)東弗婆提は九千由旬なり。(五)北鬱單越は十千由旬なり。是の一の三千大千世界由旬の數や、縱廣是の如く、大小を次第す。此の由旬に依り、是の如くして、若干百由旬、若干千由旬、若干百千由旬を計取す。其の一由旬に、復、若干微塵の數有り。總計して得べし。所以は何ぞ。(六)此の計數や、一切の數に過ぐ。

【一】(原文)其一由旬、微塵多少、漸漸滿積一阿㝹婆。如是更復一那由他。
【二】Jambu-dvipa ジャムブドヰーパ
【三】Avaragodāniya アヷラゴーダーニーヤ
【四】Pūrvavideha プールヷヰデーハ
【五】Uttarakuru ウツタラクル
【六】(原文)此之計數、過一切數、故名算計、不可數得、不可計知、諸微塵等、三千大千世界之內、所有之者。

故に三千大千世界の內の所有の、不可得數、不可計知の、諸微塵等を、算計すと名く。』

時に頞誰那大算計師、及び諸釋種一切の宗族、大歡喜を生じ、踊躍無量、其の體に遍滿し、自ら勝ふる能はず。身上に唯一箇の單衣を留め、餘衣は悉く解き、以て太子に施し、復、無量無邊の瓔珞を脫して、太子に散施し、讃歎して言はく、『善い哉、善い哉、太子、甚深、快知し快解す。』是の如く次第に、算計の中に於て、太子、復、勝ちぬ。所謂、書算智計の淵玄なる、太子、無比なり。彼等諸釋、是の言を作す、『我等已に知る。今、此の太子、書算中に於て、最勝無比なり。其の次に、戎仗兵法を、須らく試むべし。これ誰が最も勝れたる。』爾の時、彼の諸釋種の宗族は、其の姓中の一大臣、〔七〕娑訶提婆と名づくるを推して、置いて證察と爲し、之に白して言はく、『大德和上、願はくは、好く心を用ひ、何の童子が、武技の中にて、最も勝妙なるかを觀よ。』——所謂、不空、及び聞聲等、射遠・射剛・挽强・牽背なり。』

爾の時、戲場に、〔八〕阿難陀童子の爲めに、鐵鼓を置立安施す。射所を去ること、二拘盧舍、以て其の表と爲す。〔九〕提婆達多童子の、射る所は、鐵鼓を、四拘盧舍に安置し、乃至、〔一〇〕難陀童子の爲めに、鐵鼓を六拘盧舍に安置し、大臣〔一一〕婆私吒氏〔一二〕摩訶那摩の爲めに、鐵鼓を八拘盧舍に

〔七〕サハデーヴ Sahadeva
〔八〕アーナンダ Ānanda
〔九〕デーヴダッタ Devadatta
〔一〇〕ナンダ Nanda
〔一一〕ヷシシタ Vasiṣṭha
〔一二〕マハーナーマ Mahānāma

安置す。是の如く次第に、自餘の童子、各相去り、遠及び近に隨ひ、射表を安置し、悉達太子の爲めに、十拘盧奢に安置し、牢剛なる鐵鼓、以て射表と爲す。

時に阿難陀、弓を彎き、彼の二拘盧舍に置ける所の鐵鼓を射て、纔に中つるを得たり。及び外の更に遠きは、則ち過ぐる能はず。提婆達多童子の所射は、四拘盧奢安置の鼓、射て卽ち著きしも、更に過ぐる能はず。摩訶那摩大臣の所射は、八拘盧奢の鐵鼓に著くを得しも、遠く過ぐる能はず。是の諸釋子、各所立の鐵鼓、遠近悉く皆、射著せしも、其の分已外は越過する能はず。

爾の時、次第に、悉達太子の射んと欲するに至り、有司、所奉の弓を進上す。太子、暫く手を以て張を施さんと欲し、弓の强弱を按じ、弦の牢（一三）靳を（一四）拼くや、其の弓及び弦、時に應じて碎斷す。悉達太子、卽便ち問うて言はく、『此の城内に、誰が好弓の、我が牽挽に堪へ、我が氣力に禁ふる有りや。』時に淨飯王、心に歡喜を懷き、卽ち報じて言はく、『有り。』太子、問うて言はく、『大王の有りと言ふは、今、何處にか在る。』王、太子に報ずらく、『汝の祖父を（一五）師子頰と名づく。彼に一弓有り。見に天寺に在り。常に香華を以て之を供養す。然るに彼の弓や、一切城內の釋種眷屬は、乃至、彼の弓を（一六）施張する能はず。

【一三】靳。惠琳音義に肕（かたし）也と註す。

【一四】拼は抨（はじく）、彈に同じ。

【一五】Siṃhahanu

【一六】施張の施を可洪音義に拖

況んや復、牽挽するをや。』太子語りて言はく、『大王、速に疾く、弓を取りて來らしめよ。』是の時、使人、彼の弓を將て來り、既に衆中に至り、先づ一切の釋種諸童子輩に持授するに、執る所の者、施張する能はず。況んや復、挽かんと欲するをや。其の後、次に將て摩訶那摩大臣に付與す。時に彼の大臣、其の有ゆる一切の身力を盡せど、彼の弓の弦を施張する能はず。況んや復、牽挽するをや。然る後、乃ち將て太子に奉進す。太子執り已り、安坐して搖かず、微かに少力を用ひて、身體を動かさず、左手もて弓を執り、右手にて弦を捋み、指を以て纔に挽くに、拼きて聲を作し、彼の聲、迦毗羅城に遍滿す。城内の有ゆる一切の人民、悉く皆恐怖し、各各問うて言はく、『此はこれ何の聲ぞ。』或は復、人有り、他より聞きて言はく、『悉達太子、其の祖父、師子頰王所用の弓を取り、暫く、施張し、牽挽して聲を作す。』此の因緣の爲に、淨飯大王、無量無邊の諸物を將て、用て太子に供ふ。

是の時、太子、彼の弓を施張し、右手に箭を取り、是の如き微妙の身力を出現して、彼の箭を牽挽し、平胸にして射、阿難陀、及び提婆達、乃至、大臣摩訶那摩、三人等の鼓を過ぎ、其の箭、十拘盧舍に安置せる處に射逮び、皆、悉く洞過して、虚空に沒す。爾の時、諸天、虚空に在り、

に作る。拖は曳也挽也。又、引也。拖又は拕（ひく）、或は扡（牽、ひく）にも作らる。拖の方、この條下に適すべきか。

偈を說いて言はく、

『是の如く最勝善地の中に。往昔の諸佛の座に坐して、摩伽陀國の人民衆が、今利箭と善勝弓とを觀るごとく、六度もて智慧力を成就して、一切の諸怨敵、(一七)天摩・煩惱及び陰等を降伏し、當に(一八)常・樂・我・淨の因を得べし。

菩提の眞實道を退かず、永く生死苦の根栽を斷じ、病老憂畏悉く蠲除し。彼の涅槃微妙の智を證せん。』

爾の時、諸天。是の偈を說き已り、各、種種の天の妙雜花を將て、太子の上に散じ、散じ已るや忽然として身を沒して現ぜず。是の時、太子が射たる所の箭を。天主帝釋、虛空中より、秉執りて、將て三十三天に向ひ、天上に至り已り、此の箭の爲めの故に、彼の天中に、箭節を建立し、常に吉日を以て、諸天聚集し。諸の香華を以て、此の箭を供養しぬ。乃ち今に至るも、諸天に猶ほ此の箭節の日有り。

爾の時、釋種の諸眷屬等、復、是の言を作す、『悉達太子、射技最も遠く、已に衆人に勝る。今、更に須らく射(一九)鞆の物を試むべし。これ誰か能く過ぐるぞ。』是の時、彼の地を相去る遠か

【一七】天魔・煩惱魔・陰魔に死魔を加へて、四魔といふ。

【一八】常・樂・我・淨は涅槃の屬性なり。之を現象界に見るを四顚倒といふ。

【一九】鞆。或は鞕(カウ、かたし)に作る。

らず、自然にして多羅樹の行有り。其の中に或は諸釋の童子有り。一箭射を用て、即ち一多羅樹を穿過す。或は二多羅樹を穿過するあり。或は三、或は四、及び五を過ぐる者有り。

是の時、太子、箭を執りて一射し、即便ち七多羅樹を穿過し、彼の箭、七多羅樹を穿ち已りて、箭便ち、地に墮ち、碎けて百段となる。時に諸釋種、復、更に、別に、鐵の猪の形を立つ。其の内に、或は釋種の童子の、箭を執りて、一の鐵猪形を射て過ぐるあり。或は二・三・四及五を過ぐる者有り。太子箭を執り、一射して便ち七の鐵猪を穿ちて過ぎ、七猪を過ぎ已りて、彼の箭地に入り、黄泉に至る。其の箭の穿つて地に入れる處、即ち一井を成す。今に於て人民、常に箭井と稱す。

時に諸釋の族、復、更に七口の鐵甕を立て、中に滿して水を盛る。其の中に、或は釋種童子の、箭鏃を熱燒して、極めて猛赤ならしめ、用て一鐵甕を射て徹す。或は二、或は三、ただ四・五に至る。太子、彼の燒熱せる赤箭を執りて一射し、便ち七の鐵の水甕を過ぐ。甕を去る遠からずして、即ち一大婆羅樹林有り、其の箭過ぎ已り、悉く彼の林を燒き、一時に蕩盡す。

時に諸釋の族、復、是の言を作す、「射御の技能は、太子、已に勝る。今、復、斫りて一下に斷つべきを試みん」と。其の中、或は諸の釋種の子に、手に利劍を執り、一下して一多羅樹を斫り斷

つあり。或は二、或は三、乃至、四・五なり。太子の手、劒を執り已り、一下して七多羅樹を斫り斷つ。彼の七根の多羅樹は、復、斫らると雖も、其の樹倒れず。彼の諸釋種、是の如き言を作す、『太子、一樹を斫りて徹する能はず』と。是の時、色界淨居の諸天、卽便ち化して大猛威風を作し、彼の樹を吹き倒す。其の次に難陀、一束の竹を將て、太子の前に來る。其の内に密に按摩所用の鐵棒を置きて中に著け、以て太子に奉る。太子、此の一束の竹を見、其の間に鐵棒の有るを謂はず。多力を用ひず、左手に劒を執り、一下して（二〇）剗斷すること、譬へば壯士の、手に利刀を執りて、一莖の竹を斫り、或は一箭を斫るが如し。是の如く是の如し。太子、彼の按摩の鐵棒を剗り、謂ひて竹束と言ひ、左手に劒を執り、多力を用ひず、一下して斬斫し、時に隨つて徹過す。

時に諸釋種、復、此の言を作す、『已に斬斫を試むるに、太子最勝なり。今、復、更に須らく、諸象の技を作すべし。跳擲上下、誰か復、能く爲す。』其の中に復、諸釋の童子有りて、象の鼻前より象背に跳上し、或は童子有りて、脚より跳上し、或は童子有りて、尾より跳上す。其の跳上する時、或は手に麤大の鐵棒を執持し、或は鐵輪を執り、或は鐵（二一）排を執り、或は戟槊を執り、

【二〇】剗を可洪音義に伐草也と註す。惠麟音義には芟に作り、除草也・亦斫也と註す。

【二一】排は（棑たて）の誤。可洪音義には棐に作り、盾軍器也と註す。

或は長刀を執り、左に執りて跳上し、上り已りて右接し、卽ち以て地に擲つ。太子、跳る時、(二二)偕立、却走し、脚象牙を蹋みて、象頂に上り、左手に種種の諸器を執持し、或は棒、或は輪、或は排、或は槊、及び長刀、左に執りて右に擲げ、右に執りて左に擲げ、而して地に投ず。諸釋種の族、既に及ぶ能はず。復、此の言を作す、『今、須らく馬上に、更に共に相試むべし。』其の中、或は釋種の童子有り、手に槊を執りて騰り、或は箭を執りて跳り、一馬より第二馬に騎りて、槊を槃め、刀を弄ぶ。或は復、箭を以て指環を射、或は遇中する有り、或は著せず。或は釋子有り、二馬を跳過して、第三馬に騎り、乃至射て著し、及び著せず。或は三馬を跳り、跳り已りて卽便ち第四馬に騎り、射て著し、著せず。或は四馬を跳りて、第五馬に騎り、及び著し、著せず。太子、是の時、手に槊を執り、或は弓箭を執り、六馬を跳過して、第七馬に騎り、箭もて射て、乃至、頭髪毛端、皆、悉く著を得たり。

是の如く次第に、或は車上に於て輕便を示現し、或は(二三)筋陡を現し、是の如く種種に、或は音聲を試み、或は歌舞を試み、或は(二四)相嘲を試み、或は漫話・戲謔の言談を試み、或は染衣を試

【二二】偕或は背に作る、同義なり。

【二三】陡は鬥。筋鬥（もんどり）。慧琳音義に便徒擲徒也と註す。

【二四】嘲。慧琳音義にいふ、又作啁、竹交反、蒼頡、啁調也、周相戲調也と。卽ちたはむれて互にいひあふをいふ。

み、或は珍寶及び眞珠等を造り、或は草葉に畫き、雜香を和合し、博奕・樗蒲、圍碁・雙六、握槊・投壺・擲絕・跳坑、種種の諸技、皆、悉く備さに現ず。是の如き技能、試むる所の者、一切處に、太子、皆勝れり。

時に諸釋種、復、是の言を作す、『我等、今、悉達太子が、一切の技能に、悉く皆、精勝なるを知る。今、須らく相撲つべし。誰が能くするを知り得んや。』是の時、太子、却いて一面に坐す。其の諸釋種一切の童子、雙雙に出で、各各相撲つ。是の如く、次第に、三十二(三五)黏まで、諸童子等、相撲つて各休み、却きて一面に住す。次に阿難陀、忽ち前著し來りて、太子に對して共に相撲んと欲す。太子、始めに手もて難陀を執らんと欲するや、太子の身力、及び威德力に、彼、禁へずして、卽便ち地に倒る。其の後、次ぎ至りて、提婆達多童子、前行し、貢高の心、我慢の心、曾て悉達太子に比數せざるを以て、太子と威力を捔競せんと欲し、太子と一種齊等ならんと欲し、挺身起出して彼の戲場を巡り、太子に面向し、疾走して來り、太子を撲たんと欲す。爾の時、太子、急ならず緩ならず、安詳として心を用ひ、右手に提婆達多童子を執持して行き、其の身を擎舉げて、足、地に著かず、三たび試場を遶り、三たび空に旋し、其の貢高を降伏せんと欲するが爲の故に、害心を生せず、慈悲を

【三五】黏はくみ。惠麟音義に註していふ、部也、類也。

起し、安徐として撲ち、地上に臥せ、其の身體をして損せず傷かざらしめぬ。太子、復言はく、『咄、汝等輩、人人の我と相撲つを假らず。汝の一切、一時に盡く來りて我と相撲て。』爾の時、彼の諸釋種の童子、一切、皆、憍慢の心を起し、竝に各奔り來り、走りて太子に向ひ、之を撲たんと欲す。是の諸童子や、各、手を以て觸るるに、彼等、是の太子の身力、復、威德力を以て、各各禁へず、皆、悉く地に倒る。爾の時、彼の釋の一切、皆、奇特の心を生じ、各、相謂つて言はく、『希有なるかな、希有なるかな。生れてより已來、嘗て學習せずして、今日乃ち是の如き等の種種の諸技を出せることは』と。時に彼の場內の有ゆる人民、之を觀看る者、悉く呼呼叫喚の聲を唱へ、或は種種諸異の音聲を出し、珠瓔珞及び衣服等を弄びぬ。上虛空の無量諸天、同じく一音を以て、偈を說きて言はく、

『十方一切の世界中の、有ゆる勇健の諸力士、悉く皆力敵・(二六)調達の如きも、太子の聖一毛にだも及ばず。
大人の威德力は無邊なり、暫く手を以て觸るれば皆地に倒る。
聖者の威神力は廣大なり。汝等云何ぞ比方せんと欲する。
假使不動なる須彌山も、大小の鐵圍甚だ牢固なるも、

【二六】調達。提婆達多の略。

幷に及び十方の諸山等も、一觸して能く碎くること微塵の如けん。
鐵等の强鞕なる金剛珠、及以び諸餘の一切の寶を、
大智力能く碎きて粉の如くせん。況んや復此の少力の人を撲つをや。』
爾の時、諸天、此の偈を說き已り、種種の華を將て、太子の上に散じ、虛空中に、身を隱して現せず。是の如く、次第に、悉達太子、一切處に勝れたり。時に淨飯王、其の太子の有ゆる技能、皆、悉く彼の一切諸人に勝れたるを、自眼もて旣に見、心に復、證知し、踊躍歡喜し、其の體に遍滿し、心意適悅して、自ら勝ふる能はず。尊上心を以て、勅して白象を喚び、瓔珞莊嚴し、悉く竟り、是の言を作す、『我が息、太子、此の白象に乘れ。將に城内に入らんとす』と。彼の大白象を、太子の乘に擬し、城内より出(でしむ)。
是の時、提婆達多童子、城外より入り、此の白象を見て、人に問って言はく、『此の象は誰が許ぞ。何處に將らんと欲する。』其の人、報じて言はく、『城を出でて、悉達の乘に擬し、城内に入らんと欲す。』時に提婆達多、釋の意氣・種姓・尊豪・我慢興盛にして、身力强きに倚り、縱逸放蕩にして、諸の忌憚無く、兼ねて復妬嫉せるを以て、彼の象の前に於て、少許の地を走り、便ち左手を以て象の鼻を執り、右手もて額を築き、一下して地に倒す。宛轉する三帀にして、遂に卽ち命終

す。白象、地に臥して、彼の城門の衆人の往來を塞ぎ、出入を通せず、道路塡咽す。調達過ぎ已りて後に又復、童子の至る有り、難陀と名づく。相續きて來り、城内に入らんと欲し、此の白象の臥して、城内に在りて死し已り、大身もて道路を塞ぎ、諸人民の過ぎて行くを得る能はざるを見、卽ち諸人に問ひけらく、『誰か是の事を作せる。』人輩答へて言はく、『此の大白象は、提婆達多の爲に殺さる。左手もて鼻を執り、右手もて額を築き、一下して地に倒すや、三旋して命終せり。』難陀の思惟すらく、『提婆達多童子、其の自身の力を試みて、以て白象を殺す。但、此の象身、極大極麤、城門を汙泥し、人の出入を妨ぐ』と。卽ち右手を以て、彼の象尾を執り、牽き取りて門を離すこと、七歩許なる可し。其の難陀の後、次に太子來り、城内に入らんと欲し、此の白象の城門に在るを見、見已りて諸の行人に借問して言はく、『誰か是の象を殺せる。』衆人の報じて言はく、『提婆達多、一築して殺す』と。太子、卽ち言はく、『提婆達多の此の爲や不善、何の故に殺せるか。』太子、復、問ふ、『誰か牽いて門を離せる。』衆人、復、言ふ、『難陀童子、其の右手を以て、彼の象尾を執り、牽いて門を離し、七歩に至る』と。太子、復、言はく、『善い哉難陀の作せる事、善なり。』太子、思惟すらく、『彼等二人、能く其の自らの氣力を示現すと雖も、但、此の象身、甚大麤壯、後に壞爛して、臭、此の城に熏せん。』是の如き思惟を作し訖り、左手

もて象を擧げ、右手を以て承け、空中より、城外に擲置するや、七重の牆を越え、七重の塹を度り、既に擲過し已りて、城を離るること、一拘盧奢有るべし。而して象の地に墜つるや、即ち大坑を成す。乃至、今、諸人相傳へ、此處に諾けて、象墮坑と爲すは、即ち是なり。

爾の時、無量無邊百千の諸衆生等、一時に唱へて言はく、『希有なり、希有なり、是の如き事や。甚だ大に怪むべし。』各各皆唱ふ、『善い哉、善い哉、大人、大士、希有なり希奇なり、未だ曾て聞見せず。』而して偈を說きて言はく、

『調達は白象を築殺し已り、難陀は七步牽きて門を離し、
太子は手に擎げて虛空に在ること、土塊を以て城外に擲ぐるが如し。』

爾の時、大臣摩訶那摩、太子の一切技藝の、勝妙智能なること、最も上首たるを見、是の言を作す、『唯、願はくは太子、我が懺悔を受けよ。我、先時に、謂つて言く、「太子、多種の技巧藝能を解せず」と。我をして心に疑ひ、女を嫁し與へざらしめき。我、今、已に知る。願はくは我が女を受け、用以て妃と爲せ。』爾の時、太子、良善の日、及び吉宿の時を占し、自の家資に稱ひて、具度を辦じ、大王の勢を持て、大王の威を將て、用て耶輸陀羅を迎へ納れ、諸の瓔珞を以て、其の身を莊嚴す。又、復、五百の婇女と共に、相隨ひて往き、迎へ取りて宮に入り、共に相娛樂

し、五欲の樂を受けぬ。是の故に、偈に言ふ、

『耶輸陀羅・大臣の女、名聞は國を蓋ひ遠近に知らる。吉日を占卜し取りて妃と爲し、迎へ將て來りて宮殿の內に入る。太子其と共に慾樂を受け、歡娛縱逸にして厭くを知らず。

猶ほ天主〔二七〕憍尸迦の、彼の〔二八〕舍脂夫人と共に戲るる如し。』

爾の時、世尊、成道を得已り、尊者優陀夷、佛に白して言さく、『世尊、如來、云何ぞ往昔の時、初め、耶輸陀羅を納れんと欲し給ふや、其の大家に生れしを以ての故に取らず、種姓の大なるを以ての故に取らず、富貴多財なるを以ての故に取らず、端正花色なるを以ての故に取らで、唯、技藝を出だして、彼の耶輸陀羅を取り得て、用以て妃と爲し給へる。』是の時、佛、優陀夷に答へて言はく、『汝、優陀夷、至心に、善く聽け。但、今日の、耶輸陀羅のみ、我が取る時、大姓尊豪を以ての故に取らず、乃至、端正の爲めの故に取らずして、唯、技藝を用て之を取得せるに非ず。往昔にも亦然りき。』優陀夷、言さく、『世尊、此の事云何ぞや。願はくは、爲めに之を說き給へ。』爾の時、佛、優陀夷に告げて言はく、『我、念ふに往昔、無量無邊の世を過ぎて、時に、波羅㮈城に一工巧鐵作の師有り。其に一女有り。端正喜ぶべし。身體正等、面目廣平、世に雙び少なき所、多人敬愛す。爾の時、彼の波

〔二七〕Kausika。帝釋天の姓。
〔二八〕Saci-devi

羅㮈城に、一長者有り。其の子、喜ぶべく、端正なること、前に說く所の如く、異なるなし。而して一時。其の長者の子、彼の工巧鐵師の女の、樓上に在りて、牕內に面を現はし、外に向ひて觀看るを見、彼の長者の子、是の女を見已り、卽ち愛心を生じぬ。彼の長者の子、私に心の中に、此の女を記し已り、速に往きて家に歸り、其の父母に告げて、是の如き言を作せり、「某工巧の家に、一女有り。我が意に貪愛し、取りて妻と爲さんと欲す。」彼の子の父母、其の兒に報じて言はく、「汝、今、須らく、此の工巧鐵師の女を取りて、我が門を汙辱すべからず。我、當に別に、長者の女、或は大臣の女、或は居士の女を覓め、汝に與へて妻と爲すべし。」彼の長者の子、是の如き言を作す、「我、永く餘人の女を用て、以て我が妻と爲さず。我が意、唯、此の工巧鐵師の女を取らんと欲す。我、若し此の女を妻と爲すを得ずんば、必ず自ら身を害し、終に用て活きじ」と。時に、長者の子の父母、心に愁へて、兒の命を沒せんことを畏れ、卽ち、彼の工巧鐵師を喚び、來りて其の家に至らしめ、而して之に語りて言はく、「汝の所有の女を、今、我が子に嫁し與へて妻と爲すべし。」工巧鐵師、是の如き言を作す、「我、今、工巧に非ざる者と。共に婚姻を作さじ。」其の長者の子の父母、答へて言はく、「仁者、何ぞ工巧の人を用て、婚を作すことを爲る。汝の女の、飢寒辛苦して、衣食に豐ならざるを愁ふる莫れ。」鐵師、復、言はく、「是の如きを知る

と雖も、但、我、今、同類の人を覓む。若し工巧を解せば、我、彼に女を與へん。假令、大資財の具無きも、但、彼に工巧の技有るを取り、家の辦ずる所に隨つて、我、卽ち、當に與ふべし。」

時に長者の子の父母、彼の是の如く言ふを聞き已り、卽ち其の子に語ること、前の所說の如し。

時に長者の子、既に彼の女と、心意相當り、兼ねて復、工巧の事を足り解す。精心細意もて、快く卽ち針を作り、卽ち別時に於て、多針を造作し、油脂を以て洗ひ、善好く明淨にし、一大束を作りて、竹筒中に置き、工巧鐵師の家に詣り向ひ、近巷に至り已り、道頭に在りて、此の偈頌を唱へ、以て其の針を賣る、偈に言はく、

「不澀滑澤の鐵、光明に洗ひて清淨、巧人の造作する所、誰か能く此の針を買ふ。」

爾の時、彼の工巧の女、樓上の牕門の內に在り。長者の子の、偈を說きて針を賣るを聞き、聞き已りて卽ち復、此の偈を以て長者の子に答へて言はく、

「咄なる哉狂顚の人、汝、甚だ心意無し。忽ち鐵師の舍に來り、針を賣らんとすと唱ふること。」

時に長者の子、更に復、偈を說き、彼の女に報じて言はく、

「喜ぶべき端正の女、我實に顚狂せるに非ず。性はこれ巧智の人、善能く針を造りて作す。

汝の父若し我の、妙に是の如き事を解するを知らば、

必ず汝を將て我に妻はし、兼ねて無量の財を送らん。」

爾の時、鐵師工巧の女、長者の子の、是の如く語るを聞き已り、速に疾く其の父母の前に往き、是の如き言を作す、「願はくは爺孃、外に一人有り、上の如く偈を說きて、父母に向ひて、善く針を造ることを解すと陳べて、高聲に唱說するを聽け」と。時に彼の工巧鐵師父母、卽ち彼の長者の子を喚び來り、入りて家內に至らせ、而して之に問うて言はく、「善い哉、童子、汝、實に善く針を造作することを解するか。」童子、報じて言はく、「我、甚だ能く爲す。」鐵師、復、言はく、「汝の針を出し來れ。我、試に觀看ん。」時に彼の長者の子、竹筒の裏より、一針を拔き出し、「此をこれ、汝、看よ」とて、彼の鐵師に示す。時に彼の鐵師、既に針を見已り、是の如き言を作す、「善い哉、童子、汝、巧に針を作り、大に能く孔を穿つ。」時に彼の童子、鐵師に語りて言はく、〔二九〕「此の針は是にあらず。竹筒の出す所、別に、更に、復、此に勝れたる者有り」とて、更に一針を出して、彼の鐵師に示す。鐵師、看已り、復、讃歎して言はく、「大に能善く穿てり。」童子、復、言はく、「此は好たるに非ず。更に勝れたる有り」とて、第三に別に復、更に一針を出し、以て鐵師に示す。鐵師、前の如く美言もて讃歎すらく、「善し。能く、善く、穿てり。」童子、復、言はく、「此も亦、未だ精ならず。更に勝れた

【二九】（原文）此針非是、竹筒所出、別更復有勝於此者。

る有り」とて、第四に更に一針を出し、以て示す。鐵師、看已りて、復、讃歎して言はく、「大に能く造作し、大に能く鑽孔せり。」童子、復、言はく、「此は猶ほ未だ善ならず」とて、更に一針を出して示現す。鐵師、看已りて復、言はく、「善く作り、善く穿てり。」童子、復、言はく、「此は巧なる者に非ず」とて、第六に復、一針を出して以て示す。鐵師、復言はく、「此は實に最勝・最妙、善く穿てり。」時に長者の子、還、彼の針を取り、手上に置きて、一一次第に、水中に下し著くるに、針悉く浮びぬ。時に彼の鐵師、是の希有・未曾見の事を見、歡喜踊躍して、長者の子に向ひ、偈を説きて言はく、

「我未だ曾て聞見せず、能く是の如き針を造れるを。今歡喜心を以て、女を嫁して汝に與へん」と。』

爾の時、佛、優陀夷に告げて言はく、『優陀夷、爾の時の長者の子を知らんと欲せば、今の我が身これなり。工巧の女は今の耶輸陀羅これなり。爾の時に當り、我、彼を取りて以て妻と爲す時、大家を以てせず、種姓を以てせず、乃至、端正なるを以ての故に取らず。但、工巧の試驗を以ての故に得たり。今、亦復、然り。耶輸陀羅は、種姓の端正なるを以ての故に得ず。乃至、工巧を以て得たり。』

常飾納妃品第十四の上

爾の時、釋種の有ゆる童子、皆、悉く端正、殊妙喜ぶべく、世間に雙少く、多く、衆人の樂見する所となり、並に皆、先づ一切の諸技に通じて、能く勝る有ることなし。所謂、書・畫・算計・造印、及び聲を聞きて著する諸神射等、一切悉く解し、捷利巧智・聰明黠慧なり。彼の童子の内にて、其の悉達多、最も初首たり。第二は難陀、第三は卽ちこれ提婆達多なり。唯、此の童子三人を除いては、餘に更に勝る無し。

時に、迦毘羅城内に、一釋種大臣有り、姓は（一）檀茶氏、名は（二）波尼といふ。彼の臣、大富にして、錢帛豐饒・資財備具す。如法に得、理に違ひて求めずして、五穀七珍、積みて山丘の如く、二足四足・象馬牛羊・奴婢僕僮・作使受雇、衆事自ら滿ち、皆、悉く充盈す。復、更に、別に、無量無邊の金・銀・琉璃・摩尼・眞珠・車渠・碼碯・珊瑚・琥珀有り。是の如き等の寶、須ふること心に稱ひ、乏少する所なし。彼の大臣の家内は、猶ほ毘沙門宮の如くにて、異有ることなし。

時に彼の波尼に一女有り、（三）瞿多彌と名づく。彼の女、端正喜ぶべく、雙少なし。短からず長

【一】Daṇḍa（ダンダ）
【二】Pāṇi（パーニ）
【三】Gautamī（ガウタミー）

からず、肥えず痩せず、白からず黒からず、偉ならず纖ならず。幼年に處在して、國内の寶たり。
時に淨飯王、其の化内の、釋の大臣、檀荼波尼に、是の如き女有るを聞き、聞き已りて良善宿の日を選擇し、卽ち國師諸婆羅門を喚び、波尼大臣の家に向ひ、是の如き言を作さしむ、『聞く、汝に女有りて、瞿多彌と名く。彼の女を、今、我が太子悉達に與へて、妃と爲すべし』と。
其の難陀の父、復、大臣檀荼波尼に女有り、悉達太子に求娉せられて、妃たらんと欲すと聞き、聞き已りて、亦、使人を遣はし、彼の檀荼大臣に語りて、是の如き言を作す、『汝が瞿多彌は、我が子難陀に與へて妻と作すべし。若し與へずば、我、必ず汝を損せん』と。
提婆達多、復、檀荼波尼大臣に女有り、悉達太子に求娉せられて、妃と作らんと欲すと聞き、彼も亦、使を遣はし、檀荼に語りて言はく、『汝の瞿多彌を、今、媒嫁して我に與へて、妻と作すべし。若し我に與へずば、我、當に汝の爲めに大禍を生ぜん』と。
爾の時、檀荼波尼大臣、是の如く思惟す、『此等の三人の釋種童子は、皆、悉く端正、喜ぶべく、無雙なり。一切の技能、並に各具足するも、悉達太子は、最も第一たり。其の次に難陀は、復、第二たり。提婆達多は卽ちこれ第三なり。我が唯一女を、今、若し偏に悉達太子に與へなば、彼の二童子、必ず當に我が爲めに大怨讐を作すべし。若し難陀に與へなば、則ち悉達及以

提婆に嫌〔四〕隟を作されん。若し提婆達多童子に與ふれば、則ち悉達及以難陀に怨惡を構造せられん。』是の時、檀茶波尼大臣、是の如く悅ばず、憂惱して愁を懷き、顏色怡ばず、思惟して坐し、自ら念ずらく、『我、今、何の方便をか作さん。』時に瞿多彌、父の是の如く默然として坐せるを見、其の父の邊に至りて、是の言を作す、『阿爺、今、何の故に樂まず、憂愁して坐せる』と。是の語を作し已るや、其の父、女瞿多彌に報じて言はく、『汝、瞿多彌、此の事を問ふ莫れ、爾の知る所に非ず。』其の女、第二に、復、父に問ひて言ふ。其の父、又報ずらく、『爾の聞く所に非ず』と。第三に、復、問ふも、又、報ずる所、前の如し。乃至、第四に、其の女、重ねて問ふ、『阿爺、必定して須らく女に語りて知らしむべし。藏隱するを得ざれ。』爾の時、檀茶波尼大臣、女の慇懃に顧問して已まざるを以て、第四に、乃ち其の女に是の言を報ず、『汝、瞿多彌、三たび我に問へり。汝、今、諦に聽け。我、當に之を說くべし。今、淨飯王、使を遣して語るらく、「我、汝に女有り、瞿多彌と名づくるを知る。我が太子に嫁し與へて、妃と爲すべし」と。難陀童子、復、使を遣し來り、「瞿多彌を索めて、持て婦と作さんと欲す。若し、與へずば、我、必ず當に汝を損すべし。」提婆達多も、亦、使人を遣し、「瞿多彌を索めて、婦と作すを得んと欲す。若し與へずば、我、要らず當に禍を生ずべし。」

【四】隟。古文の隙の字。

彼の三使人、是の如く汝を索む。我、聞きて愁悶し、是の思惟を作す、「一太子に與へなば、則ち二童子は我ために怨を作さん。」是の故に、我、今、悵怏して樂まず。愁を懷きて坐するのみ。』時に瞿多彌、其の父に語りて言はく、『[五]阿爺、愁ふる莫れ。我、當に自ら智慧方便を作し、必ず一人をして我が爲めに主と作らしむべし。事理や然りと雖も、阿爺、但、且らく女の寛恣を放せ。我、當に自ら嫁すべし。』

爾の時、檀荼波尼大臣、瞿多彌の是の言を作すを聞き已り、即ち王に奏して知らしめ。然る後、乃ち迦毗羅城の四衢の道頭に、鈴を振りて告げて白はく、『一切の遠近よ、今日より後、第七日に至り、釋種に女有り、瞿多彌と名づく。當に自ら嫁を求むべし。誰にても取らんと欲する者は、六日を過して後、第七日に至り、當に共に集聚すべし。』此の語を聞き已り、第七日に至り、五百の釋種諸童子輩、悉達を首と爲し、皆、悉く宮門に在りて集聚す。時に淨飯王、諸の耆舊釋種大臣を將ゐ、復、無量無邊の人衆、若しくは男、若しくは女、童男童女、竝に皆集聚して王の宮門に在り。是の時、悉達の有ゆる左右、自餘童子の有ゆる左右、皆、共に、瞿多彌女の、誰を取りて夫と作すかを觀看る。

【五】(原文)阿爺莫愁、我當自作智慧方便、必使一人爲我作主、事理雖然、阿爺但且放女寛恣、我當自嫁。

爾の時、釋氏の女瞿多彌、六日已に過ぎて第七日に至り、晨朝時に、澡浴清淨にして、好種種微妙の香を將て、用つて其の身に塗り、種種雜色の衣服を著し、種種瓔珞もて、其の身を莊嚴し、復、種種香華の鬘を著し、多く侍從を將ゐて、左右に圍繞せられ、復、乳母及び諸宮監有りて、部領導引し、前後遮擁し、漸く宮門に至り、安庠として行き、宮門の內に入る。諸の釋種童子、難陀、提婆達多を最上首と爲し、皆、晨朝に、香湯もて沐浴し、種種の香を以て、用つて其の身に塗り、莊嚴の事、前に說く所の如し。唯、悉達が、身を莊嚴せず、常服を服し、唯、耳璫と、頭上に三重の細金の華鬘とを著けたるのみなるを除く。

時に、瞿多彌に、一乳母有り、瞿多彌に語りて是の如き言を作す、『女よ、誰を取りて以て夫主と爲さんと欲するか。』其の瞿多彌、次第に五百童子を觀看て、乳母に報じて言はく、『阿母、當に知るべし。此の諸童子、極めて大に瓔珞もて、其の身を莊嚴すること、猶ほ婦女の如し。㈥我、女人の意情の下に見る所は、此の相、怯弱、これ、男兒大丈夫の相に非ず、此は、これ婦女媚惑の飾なり。男兒は其の身を莊嚴する事を假らず。丈夫の相には自ら服飾有り。悉達太子は、自身威光あり、瓔珞を以て其の身を莊嚴せず。外物を假り用つて容飾と爲すに非ずして、自ら內潤、丈夫の相有り。是の故に、我が心、彼の

【六】我女人意情下所見、此相怯弱、非是男兒大丈夫相。

悉達を、以て我が夫と爲さんを樂む。』

時に瞿多彌、右手に（七）須摩那鬘を執持し、遍ねく大衆を歷て、悉達の所に向ひ、到り已りて立住し、此の華鬘を將て、悉達の頸に繫け、攬き已りて項を抱き、是の言を作す、『悉達太子、我、今、汝を取りて、以て我が夫と爲さん。』悉達答へて言はく、『是の如く、是の如し。汝の言ふ所の如くせよ。』是の時、悉達、還つて復、一須摩那鬘を將て、彼の女瞿多彌の頸に繫け、是の如き語を作す、『我、今、汝を取り、用以て妃と爲さん。汝、今、應に我が妃と作るべし。』

時に淨飯王、是の如き希有の事を見、心に歡喜を生じ、踊躍無量、其の體に遍滿して、自ら勝ふる能はず。時に其の衆中の有ゆる人民、或は心中に悉達を愛する者有り。彼等一切、高聲に唱喚して跳鄭躑轉し、大叫大呼し、大歡大喜し、珠璣・衣冠・服飾を舞弄す。自餘の諸釋の五百の童子、及び其の左右、彼等の脊に鬧遶せらるるもの、面、顏色を失ひて、慘慘として光無く、皆、悉く歡ばず、低頭（八）赧愧し、各悵怏を懷き、四散して還る。

是の時、悉達、意に稱へる有ゆる珍寶資財、衆雜廣營の種種の禮事、辦具せざる無し。復、種種妙好の瓔珞を以て、瞿多彌の身を莊嚴顯飾し、卽ち使を遣はし、五百の婇女を將て、圍遶し

【七】Sumana 善稱意と譯す。
【八】赧は赧なり、顏あからむ。

て、宮内に迎へ入れて妃となし、娛樂して五慾の樂を受けぬ。

巻の第十四

常飾納妃品第十四の下

爾の時、世尊、後に於て最初の成道を得已り給へる時、優陀夷卽ち佛に白して言はく、『未だ審ならず、世尊、往昔の時、瞿多彌釋種の女と、何の因緣有りてか、乃ち能く彼をして餘の童子を捨てて、直に如來を取り、用以て夫と爲して、心に娛樂せしめたる。云何ぞ爾るを得たるか。』時に佛、彼の優陀夷に告げて言はく、『汝、優陀夷、至心に諦に聽け。其の瞿多彌釋種の女は、但、今世のみ、餘の釋童を嫌ひて、我を樂めるに非ず。過去世の時にも、亦、復、是の如く、彼等諸釋童子を用ひず、我を取りて夫と爲せり。』時に優陀夷、卽ち佛に白して言はく、『唯、然り、世尊、願はくは我が爲めに說き給へ。此の事云何ぞや。我、今、聞かんことを樂ふ。』

爾の時、佛、優陀夷に告げて言はく、『我、念ふに、往昔、雪山の下に、多く、雜類の無量無邊の諸獸有りて群遊し、各各相隨ひて、取るが任に食せり。時に彼の獸中に(一)一牸虎有り。端正雙少なく、諸獸の中に於て比類する者無し。

【一】牸。めす。

彼の虎、是の如く、毛色光鮮なり。無量の諸獸、求覓め取りて對と爲さんと欲せるが爲めに、各各皆言はく、「汝、我に屬して來れ、汝、我に屬して來れ。」復、諸獸有り。自ら相謂つて言はく、「汝等、且らく待て、共に相爭ふ莫れ。彼の牸虎が自ら誰を選び取りて、卽ち偶と作すかを聽け。彼の獸は卽ちこれ我等の王なり。」時に諸獸中に一牛王有り、牸虎に向ひ、偈を說いて言はく、

『世人皆我が糞を取り、持用て地に塗りて淸淨と爲す。
是の故に端正なる賢牸虎、應に我を取り以て夫と爲すべし。』

是の時、牸虎、彼の牛王に向ひ、偈を說いて答へて言はく、

『汝の〔二〕項〔三〕斛領は甚だ高大、ただ車を駕し及び犂を挽くに堪ふ。
云何ぞ是の醜なる身形を將て、忽ち我が爲めに夫主と作らんと欲する。』

是の時、復、一大白象有り、牸虎に向ひ、偈を說いて言はく、

『我はこれ雪山の大象王なり。戰鬪に我を用ひて勝たざる無し。
我既に是の大威力有り。汝今何ぞ我が妻と作らざるか。』

是の時、牸虎、復、偈を以て彼の白象に答へて言はく、

〔二〕項。うなじ
〔三〕領。うなじ。斛領の熟語は經中三處に見ゆ。

「汝若し師子王を見聞せば、膽懾ち驚怖して馳奔し、
屎尿を遺失し狼藉して去らん。云何ぞ我が夫たるを得るに堪へん。」
爾の時、彼の中に、一師子諸獸の王有り。彼の牸虎に向ひ、偈を說いて言はく、
「汝今我が此の形容を觀よ。前分は闊大にして後は纖細なり。
山中に在りて自ら恣に活き、復能く餘の衆生を存恤す。
我はこれ一切諸獸の王なり。更に能く我に勝る者有ること無し。
若し我を見及び聲を聞く有れば、諸獸悉く皆奔りて住まらず。
我今是の如く力猛壯なり。威神甚大にして論ずべからず。
是の故に賢虎汝當に知るべし、乃ち我が爲めに婦と作るべし。」
時に彼の牸虎、師子王に向ひ、偈を說いて言はく、
「大力勇猛及び威神あり、身體形容極めて端正なり。
是の如く我今夫を得已る。必ず當に頂戴して奉承すべし。」
爾の時、佛、優陀夷に告げて言はく、『汝、優陀夷、當に悟解すべし。彼の時の師子諸獸王とは、卽ち我が身是なり。時に彼の牸虎とは今の瞿多彌釋女是なり。故に彼の諸獸とは、現今の五

百の釋童子是なり。彼の時に當り、其の瞿多彌は已に諸獸を嫌ひて、意に願樂せず。我の偈を說くを聞きて、卽ち我が妻と作れり。今日も亦然り。諸釋種の五百童子を捨て、旣に嫌薄し已りて、我を取りて夫と爲しぬ。』

時に淨飯王、太子を安置するに擬せんとするを以ての故に、其の太子の爲に三等の宮を立つ。第一の宮内の有ゆる婇女は、初夜に當りて、太子に侍衞し、第二宮内の其の諸婇女は、夜半時に、太子に供承し、第三宮内の諸婇女輩は、後夜時に、太子に侍奉す。其の第一宮は、耶輸陀羅を最上首と爲し、二萬の婇女、圍遶侍立す。第二宮中は摩奴陀羅（隋に意持と言ふ）上首たり。諸師、復、言ふ。『此の意持妃は、唯、其の名を聞くも、現在及び往緣の事を見ず』と。第三宮内は、卽ち瞿多彌、上首たり。是の如く次第に太子に侍御する諸婇女等、合して六萬有り。復、師有りて言ふ、『太子に侍する諸婇女等は、合して十萬有り、以て三宮と爲す。二萬は悉くこれ釋刹利種なり。餘す所の八萬は、竝にこれ衆雜異姓の諸女なり』と。

時に淨飯王、阿私陀仙人の所說を念ふ。故に宮内に、復、更に、別に、一大好殿を造る。猶ほ秋雲の靉靆、㊃光潤なるが如く、作事微妙にして、實に思議し難く、一切時に須ひて快樂を受く。鉤欄閣道は一切正等にして、徧頗有るこ

【四】潤はつや、光澤。

と無し。何を以ての故に。太子の、處處遊行して、諸の濁穢を見んことを恐畏してなり。

復、宮内に、諸雜の音聲を色別置立せしむ。各各千數なり。其の中、所謂一千の（五）箜篌、一千具の（六）箏、一千の五絃、一千の小鼓、一千具の（七）筑、一千張の琴、一千の琵琶、一千の細鼓、一千の太鼓、一千具の笛、一千の銅鈸、一千具の簫、一千具の篳篥、一千具の（八）篪、一千具の螺、諸の是の如き等の一切の音聲、種別一千なり。一千種の歌、一千種の舞あり。其の手及び聲、常に宮内に於て、晝夜絶えざること、猶ほ大雲の内に、隱隱甚深の聲を出す如し。

是の如く、太子、最妙最勝の婇女百千の中に在りて、前後に圍繞せられ、諸の快樂を受く。恭敬侍養するに、一切、皆、種種の瓔珞を以て其の身を莊嚴し、復、金の釧、七寶の環を以て、手臂に串きて、音聲を作す。猶帝釋の、諸の玉女を受くるが如し。娛樂歌舞、最勝最妙に、語言姿媚もて、相（九）矚し相笑ひ、相抱き相嗚き、相觀て相（一〇）眄め、或は傾側して顧み、或は項を斜にして看、工に顰眉を解し、巧に（一一）頻睞に鬪ひ、五色綺靡、

【五】箜篌 くだらごと。二十三絃の樂器、抱きて兩手にて齊しく奏す。

【六】箏 十三絃のこと。

【七】筑 瑟或は箏に似たる絃器、竹にて鼓す。

【八】篪 可洪音義にいふ、直知反、樂器也。正作篪。惠琳音義によりて、又は䶵に作るを知る。七孔ある管、卽ちふえなり。

【九】矚 或は矚（みつめる）に作る。

【一〇】眄 は眄の俗字。ながしめに見る。

【一一】嚬 すがむ。

四目(一二)㛹娟、能く太子をして歡娛受樂して、遠渉して、宮外に出でて遊ぶを須ひざらしむること、帝釋天の王女と娛樂するが如し。是の如く、是の如く、太子、女寶中に在りて、諸の歡樂を受く。乃至、其の中の諸婇女等、巧に五慾を解し、常に能く(一三)沃弱にして、太子をして歡ばしめ、更に出でて宮外に至るを聽さず。

時に、淨飯王、太子の諸功德を增さんが爲の故に、苦行を建立し、一切の諸邪惡法を斷ち、一切の善を行じ、諸物を布施し、衆の福業を造り、備さに苦行を行じ、諸功德を增長せしめんが爲の故に、此の善根を以て、太子に廻資し、出家する莫らんことを願ふ。是の故に偈に言はく、

『大王・太子を增長せんが故に、復私陀の授記の因を以て、苦行し
調伏して諸非を捨て、恒に智臣と共に坐して思念す。』

是の如き次第もて、太子・父王の宮內に在り、唯獨り一人のみ五慾を具足し、娛樂逍遙し、嬉戲自恣して、十年を足滿し、曾て外出せず。

爾の時、南方(一四)摩伽陀國に一大王有り、姓は(一五)擅連尼、(一六)名は頻婆娑羅なり。怨敵を畏懼

【一二】㛹或は便に作る。㛹娟は美好也。便は媚好貌也。
【一三】沃、わかくかほよし。弱或は溺に作る。沃弱は柔順也、美也。
【一四】Magadha マガダ
【一五】Śreṇika シュレーニカ
【一六】Bimbisāra ビムビサーラ

して、心内恒に愁へ、群臣を集聚して常に相議論し、是の如き語を作す、『汝等諸臣、出入去來に、境の内外を觀、更に一人の、我に勝る有らしむる莫れ。若し我に勝らば、恐らくは彼の人來りて、我が王位を奪はん。』時に諸臣等、卽ち兩人を差し、境界を巡らしむ。時に彼の二人、王勅を聞き已り、自の境内及び隣界の音を歷り、周匝して還らんと欲して、人有りて言ふを聞く、『此より已北に、一最大高峻の雪山有り。彼の山麓下に別の種姓有り、稱して釋迦と爲す。族内に初めて新に一童子を產めり。其の人端正にして、善く生地を得、兼ねて彼の姓氏は第一特尊、脊屬豪强にして、衆事具足し、身に三十二丈夫の相有り、亦、復、八十種好をも備ふ。彼の生れし日、諸の解相婆羅門等有り、以て其に記を授くらく、「今、此の童子、身體に三十二相、八十種好を具有して、炳著分明なり。其れ若し家に在らば、必定して轉輪聖王と作るを得て、四天下を總べ、(二七)十善もて民を化し、七寶充備し、兵仗を用ひずして、自然に歸降せしめん。若し捨てて出家せば、當に佛・多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀と作るを得て、十號具足し、乃至、淸淨の梵行を說くべし」と。』

時に彼の使人、履涉して廻還し、卽ち其の王頻婆娑羅王に向ひて、上の所說の如く、是の事、

【二七】十善とは、殺生・偸盜・邪婬・妄語・綺語・兩舌・惡口・貪欲・瞋恚・邪見せざるをいふ。

乃至、梵行を白す。『是の故に大王、其の幼年なるに及びて、速に當に兵を起して彼の童子を滅し、後來に我等大王の位を奪はしむる莫れ』と。是の語を作し已るや、摩伽陀王、頻婆娑羅、卽ち彼の二使人に告げて言はく、『卿等二人、是の說を作す莫れ。何を以ての故に。若し汝の言の如く、脫し彼の童子、必定して轉輪聖王と作るを得て、如法に治化せば、我、當に敬奉して伏接隨從し、彼の威神に依りて、我等樂を受け、安隱に治化すべし。若し彼、捨家して佛と作るを得て、慈悲憐愍もて、衆生を度脫せば、我等は其の爲めに(一八)聲聞受法の弟子と作らん。今、是の如き二種の果報福德因緣を觀じて、害を彼に加ふる心を興すべからず。』

時に淨飯王、其の太子所住の宮院に於て、周帀して別に更に子城を造立し、唯一門を置き、名づけて野獸と爲す。彼の門下の關に、(一九)機發を安施し、開閉の時、五百人有りて、扶持擁衞して、方に開闔するを得、其の門の聲動、半由旬に聞ゆ。次に第二重中院の宮閤に、亦一門を開く。其の關の鍵鑰に、皆機發を安じ、開閉の時、三百人有り、其の聲、一拘盧奢に聞徹す。次に內宮の太子の坐殿に至るに、復、一門あり、鍵鑰もて關を繫ぎ、機發を安じ、開閉掣接するに、二百人有り、(二〇)禦備轉嚴なること、人間の比に非ず。其の聲、聞えて半

【一八】聲聞。說法の聲を聞くこと。
【一九】機發は觸れる事によりてひらきおこるしかけならん。
【二〇】禦は當なり。

拘盧舎に及ぶ。彼の三門の内外、悉く壮士を羅ねて防守す。身に鎧甲の精鋭牢強なるを著け、手に並に種種の戎具を執持す。所謂、弓箭・鉞斧・長刀・劍戟・三叉・鐵槌・鐵棒・鬪輪・槊矛もて（二）宮闈を禁衛す。是の如く、警むること嚴なるは、太子の（三）椒房を捨離して、踰越出家し、山藪に逃竄せんを恐畏してなり。

【二】闈。宮中の小門。

【三】椒房。皇后にいふ。椒を以て壁に塗り、その温煖を取るを以てなり。

空聲勸厭品第十五

爾の時、虚空に一天子有り、名づけて[一]作瓶といふ。彼の天、此の太子の、十年、宮内に在りて、五慾の樂を受くるを見、是の思惟を作す、『此の護明菩薩大士、縦に、極めて多時、彼の宮內に在り、諸の五慾を受けて、貪著を爲す莫きも、是の五慾の故に、心醉荒迷、情放盈溢す。百年迅速なり、時、人を待たず。護明菩薩、今、須らく覺察して、早く應に捐棄捨俗して出家すべし。我、若し、先づ、彼の爲めに厭離の相を作さずんば、則ち、彼、躭湎し、未だ醒悟して出家の心を發すこと有らじ。我、今、成就の爲めの故に、應に、其の事を讃助すべし。』作瓶天子、卽ち夜半に於て、偈を說いて言はく、

『身自ら縛を被りつつ他を說かんと欲するは、譬へば盲人の群瞽を引くがごとく、
己が身解脱して乃ち彼を免れしむるは、猶有目の能く人を導くが如し。
善い哉仁今年盛なる時に、宜しく速に出家して願を滿たしめ、
應に天人等を利益すべし。』

[一] Suddhavāsa（シユツダヴーサ）の音譯の略、淨居と譯す。色界最高の五天をいふ。

五欲の行者は厭ふべからず、【二】六塵に沒溺して境捨て難し。
唯出世もて大智を行ずるのみありて、乃ち能く此の五慾を厭離す。
是の故に仁今捐棄すべし。
衆生多く煩惱の患有り、仁當に爲めに大醫師、
妙種種の法藥を說くの王と作りて、速疾に將て涅槃の岸に向ふべし。
無明の黑暗に障蔽せらるる、諸見の羅網は種種に纏ふ。
速に智慧の大燈明を然して、早く天・人をして淨眼を得しめよ。」

爾の時、空中の作瓶天子、此の偈を說き已り、威神感動もて、因緣を發勸し、復、太子の宿世の善根福德力を以ての故に、彼の宮內の婇女伎兒が、作せる音聲歌曲をして、五慾の事に順はず、唯、涅槃住持信解微妙の聲を傳へて、自然に述べしめ、偈を說いて言はく、

「世間の事は無常なり、猶ほ雲の電を出す如し。
尊者今や時至る、應に捨家し出家すべし。」
一切の行の無常なること、【三】瓦坏瓶器の如く、
他物を借りて用ふるが如く、乾土を積める城の如し。

【二】六塵。色・聲・香・味・觸・法の六なり。人心をけがすものは、これ等なれば、塵と名く。
【三】坏。未だ燒かざる瓦。

久しからずして便ち破壞するは、猶夏の泥壁の如し。
河の兩岸の砂の如し。緣生は久しき能はず。
猶ほ燈の焰を出すが如し。生じ已りて速に還滅す。
風の暫くも住する無きが如く、急疾にして曾て停らず。」
恒常に眞實無し。猶ほ芭蕉の心の如く、幻化の人意を誑かし、空拳もて小兒を誘ふ(如し)。
一切の諸行は、皆悉く因緣より生ず。各各因緣有るも、愚癡の輩は覺らず。
猶ほ人の繩を索むるが如し。手と木と因緣を成す。
子に因りて芽を生ずる如し。子を離れて芽は生せず。
二相離れては成せず。復常にも無常にもあらず。
諸行は癡に因りて生ずるも、彼は無明に住せず。無明も亦彼に非ず、本性來空寂なり。
生滅は體無きが故に、印の印文をなすが如し。
彼に非ず彼を離るるに非ず。諸行も亦是の如し。」
眼は色を離れず。識は眼・色の因より生ず。此の三は相離れず。三も亦眞實ならず。
淨・不淨の法を空ぜよ。眼等の分別より生ずればなり。

此の顚倒分別は、皆悉く識に由りて生ず。
若し巧智の人有り、識の生ずる所を推求せば、
彼の去來無きを知り、我の幻化の如きを知らん。
兩木火を出すに、第三は手に因るが如し。若し此の三因無くんば、則ち火用を得ず。
若し智もて推求せば、彼亦去來無く、諸方を尋求し已りて、火の來去を見ず。
四陰・入・諸界等は、貪・癡・業に因りて生ず。
和合は衆生に因る。眞如に衆生無し。
咽喉・脣・口・舌より、諸の文字を出すも、
字はこれ咽喉に非ず、亦彼等を離るるに非ず。
彼等和合するが故に、出語・智に隨ふも、語言は智に在らず、亦
復色・形無し。
生處及び滅處を、智人も求めて得ず、觀ずる所悉く空寂、語言も響聲の如し。
木に因り諸絃に因り、人智の三・合するが故に、
箜篌より聲を出すも、彼の聲は三處に無し。

【四】陰・入・界は五蘊・十二入・十八界をいふ。五蘊は色受想行識なり、十二入は六根六境なり。十八界は十二入に六識を加ふ。以て萬法を攝するの目とす。

若し智慧の人有り、彼の聲の去來を求めて、諸方を求覓め已るも、去來や得可らず。
因あり及び緣あるものより、諸行は是の如くにして生ず。
諦了有るの人は、空觀すること應に是の如くなるべし。
陰・入・及び諸界の、內外悉く皆寂し。我を一切處に求むるも、虛空の形無き如し。」
是の如き諸法相を、仁は〔五〕定光佛に於て、往昔已に證知したり。
今天・人の爲めに說け。」
顚倒の分別の故に、欲等の火に焚燒せらる。
應に慈悲の雲を起して、甘露の法雨を施すべし。
仁昔億劫に於て、施を念じ及び戒を持し、
「我無上道を得ば、聖財を諸世に分たん」といへり。
尊者往昔を念へ、聖財を貧窮に施し、聖財を以將て攝し、調御して慳惜する莫りしを。
仁昔淨戒を持し、窮すること急なるも財を偷まざりき。
願はくは甘露の門を開きて、諸衆生の爲めに說け。
往昔の行を憶念して、當に地獄の門を閉ぢ、

【五】定光佛(Dīpaṅkara)。佛、過去世に於て菩薩の行を修し已りて、此佛より、將來成佛の豫言を受けたり。

善く解脱の路を開くべくば、戒行の心願成らん。
往昔忍辱を修し、他の毀罵等を聞くも、
忍辱を建立せるが故に、諸行の悉く空なるを觀ぜり。
世間に瞋恚多し、此の往行を念ずるが故に、
敎へて忍辱に住せしめよ、彼の願力を捨つる莫れ。
仁・精進を行じて、當に我が淨智を得、煩惱の海に在りて、衆を度して彼岸に到るべし。
往昔の願を念じて、衆を四苦の河より拔き、大精進力を出して、厄難等を度脫せしめよ
往昔禪を修習して、爲に諸煩惱を斷ぜり。諸根の不調なる者を、敎令調伏せるが故に。
仁・往昔を念ぜよ、衆の煩惱に在るを愍み、寂靜の諸慧等もて、彼の諸根を調伏せしを。
仁・昔智慧を修し、煩惱の暗を破り、衆の無明に在るを愍み、眞如眼を開示せんを願へり。
仁・往昔を念ぜよ、衆生の煩惱瞋きために、無濁穢の明を開きたりしを。
仁・最勝の智慧もて、應に諸の衆生を愍み、方便もて敎へて出でしむべし。
三界の生老病の火熾に、飢渴の熱炎曾て休まず。

應に世の爲めに大橋と作り、濟度して彼岸に歸到せしむべし。
衆生の煩惱の海に流轉するは、猶ほ蜂の竹孔の間に在るが如し。
(六)三有の循復は秋雲の如し。上下往還して止息する無し。
亦、戲場の諸の幻化の如く、又、山川の逝く水流に似たり。
衆の生老病死も亦然り。或は天・人・三惡道に生る。
諸有の欲癡は自在ならず、五道に展轉して覺知する無きこと、
猶ほ陶師の旋火輪の如し、處處の五欲に自ら纏縛せらる。
猶ほ飛鳥の羅網を犯す如く、亦獵師の・黐膠を布くが如し。
他の財寶を貪りて厭足無きは、魚の・餌を呑みて釣鈎に遇ふが如し。
諍競し忿怒して怨讐を結び、煩惱染著して諸苦を受く。
五欲の過患は利刀の如く、亦妙器に毒藥を盛れるが如し。應に棄捨すること糞穢の如かるべし。貪著愛戀せば正心を失ふ。」
是れ諸有の相續生して、欲垢を增長して曾て斷ぜざるに因りて、六塵境界の炎の熾盛なること、猶ほ乾草の猛火に燒かるるが如し。」

【六】三有。三界に同じく用ひらる。三界の存在のこと。

速に起ちて捨離し早く出家せよ。智人の・諸欲の境を觀察して、
畏る可きこと猶ほ猛火坑の如く、亦(七)魁膾屠の刀机の如し。
亦深泥の忽ち人を溺らす如く、利刃に蜜を塗り舌を將て舐る(が如く)、
虵頭に觸れ及び(八)屏を攪す如し。聖人の・欲を觀ずるも亦復然り。
箭の如く槊の如く劍戟の如く、毒もて射たる肉の食ふ可き難きが如し。一切の怨讐は欲を首
と爲す。
五欲の功德は水月の如く、影の如く亦山谷の響の如く、
亦戯場の衆幻師の如く、猶ほ夢の裏に喜事を見る如し。
智人の・欲を見るも亦復然り。
境界の諸塵は悉く空誑。怖畏して能く自在なるを得ざれ。
譬へば陽炎の・實有ること無きが如く、亦水上に聚まれる浮漚の如し。
此の事皆分別より生ず。智人應に是の如き等を觀ずべし。
凡そ人の世に處するや年少き時は、端正喜ぶ可く諸慾に著するも、
年老い頭鬢白きに至るに及び、衆の爲に棄薄せらるること枯河の如し。

【七】魁膾屠。西域記に屠釣魁膾とあり。魁膾は肉を切る人。屠は生物を殺す人。
【八】攪屏。屏は厠也　厠をかきみだすこと。

富貴饒財にして多放逸なる、是の如きの人は多く慾を樂むも、
後に財を失ひて貧窮に苦しみ、自在ならざるを以て慾を捨つ。
樹の多饒なる華果の故に、衆人競ひ來りて採り摘まんと欲する如く。
人の・布施を喜ぶも亦復然り。他に歸投せられて厭足無し。
それ人財盡き年老至り、他に乞求するや（人、之を）見るを喜ばず、
色美に財多く氣力充つるや、人喜んで見るを愛し聚集りて樂しむ。
財盡きて行乞すれば人喜ばず、年過ぎて脊を傴め手に杖を執れば、
雹に折れたる樹の如く人の愛するなし。是の如く畏るべきは衰老の法なり。
汝當に速に出でて正覺を求め、自ら證り已りて後人の爲に說くべし。
老病は諸人輩を瘦損す、摩樓迦の大樹を繞ふがごとし。
衰老せる身力に精進無く、乾枯するは猶ほ朽爛の木の如し。
老は好色を奪ひて惡色を生じ、怡悅の顏面皮膚を皺む。
老は華色を壞して悴色と爲し、欲樂より樂を奪ひて無樂ならしむ。
老は威勢を奪ひて命終に至り、衆病の到ること鹿の穽に投ずる如し。

汝世間の百病を見已り、速に解脱方便の處を說け。」
猶ほ冬天の風雪雨の、樹木の輭枝柯を摧折する如く、
世間の老病多種至るや、諸根の損瘦すること亦復然り。
老の至るや人をして倉庫を盡さしむ。世間の欺苦は老に過ぎたる莫し。
死命の鬼は人の氣を奪ひ去りて、日の山に沒して復現れざるが如し。
死命は人をして恩愛より離れしめ、人の憎嫉して喜ばざるに會せしむ。
恩愛の人と合せんと欲すれば、忽ち失すること葉の大水に墮つるが如し。
死の至るや人をして自由ならざらしむ。命の去るや水に漂へる一草の如し。
人の彼の世に到るは伴有ること無く、其の業緣に隨ひて有を受く。
死命鬼の、無量衆を飮むこと、猶ほ(九)摩竭の海舟を呑むが如く、
金翅鳥の大龍を噉ふがごとく、猛火の乾草澤を燒くが如し。
是の如きの苦惱逼切し已る。大士は往昔弘誓を起せり、
彼の願力を念ぜよ。今や時至る。欲を捨て應に速に出家すべし。

【九】摩竭（Makara）鯨。金翅鳥は(Garuḍa)。

憶へ往昔檀・戒・忍、及び精進・寂靜・禪・智等を行ぜるは、
他の爲にして自の爲ならざりき。
時至り今や願滿つ。速に出でて復他を脱せしめよ。
仁は昔諸珍、金銀及び瓔珞を施し、恒に無遮會を立し、他の願ひ須むる所に隨ひ、
子を乞へば其に子を與へ、孫を索むれば卽ち孫を與へ、女を求むれば他に女を與へ、
位を乞へば王位をも捨て、資財を乞へば違せざりき。
仁昔一王と作り、名づけて大聞德と爲す。復一大德王たり、尼民陀羅と名づけ、復阿私陀
と名づけ、復名づけて師子と爲す。是等の諸王輩は、千種の財を布施しぬ。
昔復大王有り、常思諸法と名づく。復一大德王あり、名づけて眞實行と爲す。
此等は法を思惟しぬ。
往昔大王有り、精進にして聞月と名づく。復一王子有り、
名づけて福業光といふ。〔一〇〕大威德を庶幾して、至知恩義を得たり。
仁昔一大王たり、名づけて月色仙と爲し、復健猛將と名づけ、次に實增長と名づけ、次に
求善言と名づけ、次に有善意と名づけ、次に調伏根と名づく。

【一〇】（原文）庶幾大威德・得至知恩義。

是の如き等の諸王は、法のままに大精進を行じぬ。

(二)仁・往昔より作し來りて、仁昔大王と作る、名づけて月光者と爲し、其の次に勝行と名づけ、其の次に蓮兎と名づけ、其の次に方主と名づけ、其の次に健施と名づけ、次に迦尸王と名づけ、次に寶髻王と名づく。是の如き諸大王は、卽ち仁とこれ異るに非ず。種種の珍寶貨を、來り乞へば皆隨ひて與へたり。

仁彼の世にて財施しぬ。今は法財を捨せんことを勸む。仁昔過去に、佛を見しこと恒沙の如し。彼の諸佛世尊を、仁悉く曾て供養し、無量の供養の具を、

布施して慳悋する無く、衆生の解脱の故に、道を求めて休息せず。

今、正に是れ其の時なり。速に出でて家に住する莫れ。

仁昔初めて佛を視たるを、名づけて不空見といふ。毗奢迦の華を

持ち、喜心にて彼を供養しぬ。

往昔に一佛有り、(三)毗盧遮那と名づく。一時歡喜して視たり。

往昔一佛有り、名づけて微妙音といふ。一呵棃勒を以て、彼の世尊を供養しぬ。

往昔一佛有り、名けて白栴檀といふ。彼の佛前に立ち、(三)暗に一草莖を然せり。

【二】(原文)仁往昔作來、仁昔作大王

【三】毗盧遮那(Vairocana)

【三】(原文)暗然一草莖

往昔一佛有り、名づけて蓮兎といふ。大城に入らんとする時、一掬の末香を散ぜり。
次の佛を法主と名づく。(四)說法に「善哉」と唱へ、法言快談を聞きて、
仁・稱す「說や(五)無量なり。尊應に供養すべし」と。
其の次に一佛を觀たり、名づけて普示現といふ。仁見て彼を讃歎す。
其の次に一佛有り、名づけて熾盛分といふ。仁・歡喜を以ての故に、彼の佛身を觀察し、又
金華鬘を將て、彼の佛を供養す。
今彼を憶念すべし、心をして忘失せしむる勿れ。」
其の次に一佛有り、名づけて光相幢といふ。一掬の小豆を持し、
用て彼の佛を供養す。
往昔一佛有り、號名を智幢といふ。仁・輪迦華を持し、以て彼の佛を供養す。
次に復一佛有り、名づけて調伏車といふ。仁彼の佛を見已り、前に立ちて讃歎す。
次の佛を寶勝と名づく。前に無量の燈を然し、妙無量の樂を施しぬ。
佛・一切勝と名くるに、嘗て眞珠の瓔を施しぬ。
次に大海佛を見、諸蓮華を布施す。

【四】(原文)說法唱善哉、聞法言快談、仁稱說無量、尊應當供養。
【五】量或は虛に作る。

蓮華藏佛に至り、大帳蓋を布施す。
師子兩佛の邊に、曾て輭草の〔二六〕鋪を施す。
娑羅王佛には、諸の須つ所を布施し、
敷華佛の前に至りて、微妙の乳を布施し、
耶輸陀佛の所には、拘陀羅華を施し、實に佛を見・覩已りて、歡喜して食を布施す。
　昔佛、智山と名づく。身を屈して彼の佛に禮す。
佛有り龍德と名づく。彼の佛に己が子を施す。
高飛容行佛に、曾て栴檀末を施す。
次の佛を帝沙と名づく。珠寶及び赤花をもて、曾て彼の佛を供養す。
大莊嚴佛を見て、贍蔔香華を持て、彼の佛を供養す。
曾て光王佛を見、衆寶を持て供養す。
昔釋迦文を見、妙多の銀花を持て、彼の佛を供養す。
其の次の帝釋相を、見已り喜びて讚歎す
昔佛有り名づけて曰く、廣大日天面。多く衆華嚴を持て、彼の世尊を供養す。

〔二六〕鋪。或は敷に作る。しきもの。

其の次に復佛有り、號して爲勝尊と名づく。妙多の銀華を持て、彼の佛の上を莊嚴す。
往昔如來有り、名づけて龍勝者といふ。然燈して彼の佛を照らし、
富沙如來の邊には、曾て白氈敷を施し、
藥師王佛の邊には、寶蓋を持て供養す。
佛あり大牟尼と名づけ、復師子相有り。世尊・勝功德もて、寶網を持て供養す。
佛有り迦葉と名づく。雜音聲もて供養す。
昔佛あり解脱と名づく。雜末香もて供養す。
寶相佛世尊をば、天華もて供養し、
阿朅婆諸佛には、坐像蟄を勸請し、
世間王尊佛をば、供養するに華鬘を以てしぬ。
尸棄佛世尊をば、王位を捨てて布施す。
佛有り難降と名づく。一切香もて供養す。
大然尊佛の邊には、自身の體を布施し、
蓮花上佛の前には、諸瓔珞を布施し、

法幢如來の上には、諸の妙花香を散じ、
然燈世尊の邊には、五青蓮を施し奉る。
是の如き等の諸佛、自餘・量有ることなし、說き難く不思議なり。
往昔の諸世の中に、仁並に曾て供養す。
復無量種の、最妙の供養の具を持て、彼の過去佛に供へ、疲惓の心有ることなし。
今彼の供養を念じ、往の諸佛を思惟して、諸の衆生輩の、慈・解脫を生ぜんが爲の故に、覺悟して家を戀ふる莫れ。
尊は過世時に於て、然燈佛の所に在り、彼の佛を供養し已り、
上無生を逮得し、及び五神通を獲、復（二七）順法忍を證る。
後に仁尊者は、佛を供養すること前に勝れ、僧祇數僧祇、
是の如き諸劫數、彼の諸劫皆盡き、諸佛も亦滅度したまひぬ。
仁が往昔の諸身、彼の世中に受けし所の、種族及び名字も、亦皆悉く滅して無し。
諸行の法は常にあらず、世間の相は不定なり。
速に空誑の境を捨てて、疾く早く城を出づべし。

【二七】順法忍　忍は忍可決定の義、法に順じて、法の理を、實の如くに、確實に悟ること。

生老病死の隨ふや、當り難く甚だ畏るべし。

猶ほ劫火起りて、炎熾として世間を燒かんが如し。無常の火も亦然り、一切の世を燒盡す。

是の如く諸苦逼る、云何ぞ暫くも停るべけん。

應に諸衆生を觀ずべし。沒して煩惱の暗に在るも、愚癡にして慧眼なく、自ら覺知する能はず。

大精進の心を發し、功德をして圓滿ならしめよ。

諸の衆生輩の爲めに、速に出でて家に住する勿れ。」

時に彼の宮內の諸婇女等、音聲を作せる時、其音聲の內に、皆、是の如き諸法の聲を出だし、太子をして、世間を厭離し、心に覺悟を生ぜしめんと欲しぬ。

出逢老人品第十六

爾の時、作瓶天子、太子をして出でて園林に向ひ、好惡を觀看、厭心を發さしめんと欲するが故に、漸く彼の宮中を捨離せしむ。是の時、宮中の有ゆる婇女、諸の音聲歌唱を作し、(一)疲極、自然に次第し、更に復、園林の功德を讚歎す。其の音に稱へ言ふ、「聖子、諦に聽け。園林の地たる、甚だ愛樂すべし。所謂、其の地や、青輭の草を布き、樹木は喜ぶべく、枝葉(二)扶疎、華果敷榮し、蓊鬱として滋茂す。復、諸鳥有り。所謂、種種の鴻鶴・孔雀・鸚鵡・鸜鵒及び(三)拘翅羅・鴛鴦等の鳥・是の如き微妙の聲を出す。」

爾の時、太子、是の聲を聞き已り、出遊の心を發し、卽ち馭者を喚び、之に謂ひて言はく、「汝、善馭者、今、速に疾く賢直の好車を嚴飾莊挍すべし。我、今、彼の園林に向ひ、善地を觀看んと欲す」と。是の時、馭者、此の語を聞き已り、太子に白して言はく、『謹んで敎命に依り、敢て違する有らじ。』是の時、馭者、速に疾く卽ち淨飯王に奏して言はく、「大王、當に知るべし、太子、今、出でて、園林に向ひ善地を觀看んと欲す」と。時に淨飯王、勅を出だして、迦毗羅城に宣令

【一】極。つかる。

【二】扶疎 疎は疏に 枝葉の盛なる貌

【三】Kokila。鴝鵒。

し、一切の內外、悉く灑掃して、清淨に莊嚴せしめ、(四)土埵・沙礫・穢濁・糞聚を除却して、皆、端平ならしめ、妙香湯を以て地上に灑散して、諸塵埃を滅し、又、香泥を以て、用て其の地に塗り、復、種種の香華を持て、諸の街巷に散上し、處處に皆雜妙好香を燒き、其の諸街巷、四衢道頭に、瓶に滿てる水を置き、諸の雜華を安んじ、芭蕉樹を以て、處處を莊嚴し、諸樹の間に、雜色の幡を懸け、復、樹上には、或は寶物を以て、或は繒綵を以て、蓋と作し幢と作し、用て樹を莊嚴し、樹間に、復、眞珠の瓔珞、七寶の羅網を懸けて其の上を覆ひ、其の羅網の目の節節に、復、金銀の寶鈴を懸け、風の吹動するに和して、微妙の聲を出さしむ。或は七寶を以て、日月の像、及び諸天の形を作し、各、瓔珞を持て羅網の間に厠ふ。羅網の間に於て、又、復、更に白猫牛尾及び(五)雜毦等を懸けたり。

時に淨飯王、是の如く敎勅して、雜妙に迦毗羅城を莊嚴し、精麗なること、猶は(六)乾闥婆城の如くにして、一種も異なし。城を莊嚴し已りて、復、園林を飾り、沙石及び諸糞穢を除却し、乃至、(七)交珞に衆の寶鈴を懸くること、上に說く所の如し。其の諸樹の中に、男名ある者は、男の瓔珞を以て之を莊嚴し、若し女名の者は、女の瓔珞を以て之を莊嚴す。復、打鼓振鈴して、遍ね

【四】埵は堆なり。
【五】毦。羽毛の飾。
【六】Gandharva。天の樂師、半人半神の性質を有す。
【七】珞。或は絡に作る。

く城内の人に告げしめて言はく、『汝等、悉く皆、道上より、或は老、或は病、或は復、死亡・盲聾・瘖瘂、六根の殘缺して、具足せざる者を除却して、悉く駈逐せしめ、但、この心意の好喜せざる所、及び吉祥ならざるものを、並に除擯し、太子をして路に之を見せしむる勿れ』と。

是の時、馭者、車乘を莊飾し、善調馬を駕し、悉く嚴備し已りて、太子に白して言はく、『聖子、當に知るべし、今、已に駕は車馬を被り訖了りぬ。正にこれ行く時なり。乘りて出で、善地を觀看たまふべし。』爾の時、太子、座より起ち、輦乘の所に至り、寶車に登上し、上り已りて、大王の威神を秉持し、巍巍たる勢力もて、城の東門より引導して出で、園林に向ひ、福地を觀看んと欲す。

是の時、作瓶天子、街巷の前にて、正しく太子に當りて、變身して一老弊の人と化作す。傴僂低頭して口齒疎缺に、鬚鬢は霜の如く、形容黑皺、膚色[八]黧黮にして、脊を曲げて傍行し、唯、骨と皮とのみにて、肌肉有ること無く、咽下は寬緩し、牛の[九]頷を垂るるが如く、身體萎摧して唯杖力を仰ぎ、上氣苦嗽・喘息聲麤・喉内吼鳴して、猶は挽鋸の如く、四支は[一〇]戰挑して行歩安からず。或は倒れ、或は扶け、杖を取りて正と爲り、是の如き相貌もて、太子の前に在り、路に傾ひて行く。太子、彼の老人の身體の、是の如く戰慄し、不祥なる衰相、

【八】黧・黮。共にくろし。
【九】頷は胡、たれにく。
【一〇】挑は掉・ふるふ。

上に說く所の如くにて、太子の先に於て、困苦匍匐するを見、太子、見已り、卽ち馭者に問ふらく、『此はこれ何人ぞや。身體(二)皺赧、肉少く皮寬み、眼赤くして涕流れ、極大醜陋なり。獨、爾く鄙惡にして餘人に似ず。兼ねて其の頭顱は、髮は稀にして脫落す。我が見る所の如くんば、餘人は然らず。又復、眼は深くして衆と特に異り、口齒缺破して、觀瞻すべき無し。』卽ち馭者に向ひ、偈を說きて言はく、

『善く駕乘を馭する汝今聽け。此はこれ何人ぞ我が前に在るは。身體不正にして頭髮稀なり。
生來然りと爲すか老の至れる爲めか。』

爾の時、馭者、作瓶天子の神力を被れるに因り、太子に白して言はく、『大聖太子、此の如きの人は、世名づけて老と爲す。』太子、復、馭者に問うて言はく、『世間の中、何者をか老と名づくる。』馭者卽事に太子に報じて言はく、『凡そ老と名づくるは、此の人、衰耄の逼る所と爲り、諸根漸く敗れて覺知する所無く、氣力(三)綿微、身體羸瘦して、既に苦處に到り、親族に駈はれ、所能なきが故に、依怙を知らず。兼ねて且つ此の人、亦、久しき能はず。朝に非れば則ち夕に、其の命、將に終らんとす。是の因緣を以ての故に老壞と名づく。』卽ち太子の爲めに、偈を說きて言はく、

【二】赧は赧、あからむ。
【三】綿は緜、微小なり。

『此の老は名づけて大苦惱と爲す。〔三〕劫は美色及び娛樂を奪ひ、
諸根は毀壞して所念を失ひ、支節擧動心に隨はず。』

爾の時、太子、此の偈を聞き已り、馭者に問うて言はく、『是の人は、これ獨り一家の法が、其をして此の如くならしむると爲すや。當に一切諸世間の相が、悉く皆、斯の如くなるべしと爲すや。』是の時、馭者、太子に報じて言はく、『聖子、當に知るべし、此の人、獨自一家の法が、其をして斯の如からしめたるに非ず。但これ一切世間の衆生に、皆、此の法有り。』太子、復、彼の馭者に問うて言はく、『我が今の此の身も、亦、當に是の如く老法を受くべきか。』馭者、答へて言はく、『是の如し、是の如し。大聖太子、貴賤殊なりと雖も、凡てこれ生有るもの、悉く皆、未だ是の如き老法を過ぎず。即ち今、人、身に、是の如き老弊の相を具有するも、但、未だ現れざるのみ。』太子、復、馭者に問うて言はく、『若し我が此の身も、是の老老の法を離れず、未だ是の醜陋衰惡の相あるを過ぎずば、我、今、假にも彼の園林に向ひ遨遊戲笑せじ。宜しく速に駕を迴らして、宮中に還り入るべし。我、當に、何の方便をなしてか、斯の苦を免るるを得んを思惟すべし。』是の時、馭者、太子に答へて言はく、『聖子の勅の如くにして、我、敢て違せじ。』即ち車乘を迴らし、還りて城に入る。

【三】劫は劫波(Kalpa)の略、譯して時といふ。

是の時、太子、其の宮内に至り、本座の上に坐し、正念もて思惟すらく、『我も亦、當に老ゆべし。老法、未だ過ぎず。如何ぞ縱逸にして自ら身心を放たん。』時に淨飯王、馭者に問うて言はく、『汝、善馭者、今、太子に從ひ、宮内より出でて園中に至り、遊戲觀看・恣情極目もて觀樂せりや不や。』其の馭者、跪き、王に報じて言はく、『大王、當に知るべし、太子出遊して半道に至り、駕を勒し廻還して、園苑に到らず。』時に淨飯王、馭者に問ひて言はく、『太子、何の故に園林に到らず、中道にして返れる。』馭者答へて言はく、『大王、當に知るべし、太子、園林に向ひ遊戲せんと欲し、始め半路に至るや、忽ち道傍に一老人を見る。乃至、身體戰慄して、杖を拄へ、或は倒れ或は起ち、正行する能はず。太子、是の如く、彼の人を見已り、卽ち勅して車を廻し、還りて宮内に入り、加趺して坐し、正念もて思惟す。』時に淨飯王、卽ち心に念言すらく、『希有なるかな、希有なるかな、此の形相や。阿私陀仙授記の語言は、必定して眞實なり。決して、太子の捨家し出家せんことを恐る。我、今、宜しく應に更に太子の爲めに、五慾を增益すべし。若しそれ、廣く五慾の事を見、心眼を充足し、情迷に染著せば、捨して出家せずして、我が意に稱適せん。』時に淨飯王、卽ち悉達の爲めに、種種五慾の諸事を加足し、悉く增廣せしめ、太子の心をして愛樂に著して、出家を聽さざらしむ。而して偈有りて說く、

『彼の宮内の中に多く樂を受け、出でて遊戲せんと欲して老人を見るや、
還りて宮内に入り心に憂愁すらく、「嗚呼我未だ此の老を脱せず」と。
父王此の語言を聞き已り、心思・子の捨てて出家せんことを畏れ、
五欲及び宮人を增益して、恩愛に著し王位を紹がしめんとす。』

爾の時、太子、宮内に在り、五欲を充足して娛樂遊戲し、疑難有ることなく、尊重貴勝なること、唯、獨一人なり。

卷の第十五

淨飯王夢品第十七

爾の時、作瓶天子、神通力を以て太子をして出家心を發さしめんと欲し、即ち其の夜、淨飯王に七種の夢相を與へぬ。時に淨飯王、床上に眠臥し、睡夢の裏に、是の如き相を見る。第一の所謂夢見は、一大帝釋の幢有り、其の幢の周匝に、無量無邊の人有り、擧げて迦毗羅城の東門より出づ。第二の所謂夢見は、太子、十大象に乘り、衆車を駕馭して、迦毗羅城の南門より出づ。第三の所謂夢見は、太子、駟馬車に駕して、其の上に端坐し、迦毗羅城の西門より出づ。第四の所謂夢見は、雜寶もて一輪を莊嚴し、迦毗羅城の北門より出づ。第五の所謂夢見は、太子、迦毗羅城の中央大街衢内に在り、手に一搥を執りて、大鼓を〔一〕撾打す。第六の夢見は、此の迦毗羅城の處中に、一高樓有り、太子、上に坐し、四面に無量の諸寶を散擲し、其の四方に、復、無量無邊億數の諸衆生有り、來りて此の寶を將ち去る。第七の夢見は、此の迦毗羅城外、遠からずして、六人有り、聲を擧げて大哭し、號咷流涙

〔一〕撾。うつ。

し、各、兩手を以て自ら頭髮を拔き、地に宛轉す。

時に淨飯王、夢裏に是の如きの相を見、心に大に惶怖し、恐畏して毛は竪ち、遍體戰慄し、驚愕疑惟して、忽然として寤め、覺め已りて、卽ち所當の宮內諸大臣を喚び來り、彼等に勅して是の如き言を作す、『卿等、知るや不や。我、今夜、夢に是の如き大恐怖事を見たり』とて、七種の次第、前に列する所の如くに、皆、悉く之を說き、復、勅して語り言ふ、『汝等、善く此等の諸夢を持ちて、忘失せしむる莫れ。明日殿に坐するとき、衆の內にて我に奏し、知らしむべし』と。而して諸臣等、王勅を聞き已り、卽ち王に白して言はく、『謹んで王勅の如くにし、實に敢て違はじ。』天、曉けて、王、坐し、卽ち衆中に於て、具に夜夢を以て、王に諮奏して知らしむ。時に淨飯王、臣の白すを聞き已り、卽ち國內の、善解占夢諸婆羅門を召し、之に告げて言はく、『汝等大智、我が夢むる所を解け。何の果報ありて、我、夢むること是の如きか』とて、前に說く所の如くにす。彼等大智諸婆羅門、王勅を聞き已り、各共に思惟し、可否を量宜し、王に白して言はく、『大王、當に知るべし、我等、未だ曾て是の如き夢を聞かず。我等、聞き已りて、心意迷荒し、此の夢、何の果報有るかを知らず』と。時に淨飯王、諸の占夢婆羅門等の是の如き語を作すを聞き、心に、復、憂愁して是の如き念を作す、『或は我が太子、轉輪聖王と作るを得ざるか。復

は得已りて、還、轉輪王の位より墜落する莫きか。今、我が心内、極めて大に憂愁す。誰か能く我が此の如き疑結を決せん。」

爾の時、作瓶天子、淨居宮殿の内に在り、遙に淨飯大王の、是の如く憂愁して樂まざるを見、見已りて、忽然、彼の天宮より身を隱して來り、化して一婆羅門身と作る。頭に螺髻有り、鬘を以て冠と爲し、智慧聰明、端正盛少、黑き鹿皮を著け、以て衣服と爲し、立ちて淨飯王宮の門外に在り、是の如き言を唱ふ、『我、能善く、淨飯王の夢を解き、所疑を決斷せん。』時に門に當る人、婆羅門の此の語を作すを聞き已り、速に疾く淨飯王の所に往詣し、長跪して、淨飯王に諮白して言さく、『大王、當に知るべし、門外に一婆羅門有りて立ち、口に是の言を稱ふ、「我、善能く一切の諸夢を解く」と。』時に淨飯王、即便ち勅して此の婆羅門を喚びて、宮中に入らしめ、入り已りて歡喜し、即ち勅を宣して彼の婆羅門に問うて、是の如き言を作す、『汝、巧智慧大婆羅門、今、知るや不や。我、昨夕夜半の時、是の如き等の七種の夢相を見たり。第一は、一帝釋の幢有り、無量無邊百千の人民、左右を圍繞して、共に此の幢を擧げ、迦毗羅城の東門より出づるを見、乃至、此の迦毗羅城を去る、道里遠からずして、六人有り、聲を擧て大哭し、手を以て髮を拔けり。我、今、恐怖し、心意、[二]迴遑

【二】迴遑は失心の貌。用例に滿堂變容迴遑如失。又、君心

す。夢相既に然り。未だ善惡を知らず。汝、我が爲めに一一之を解くべし。』時に淨飯王、是の說を作し已り、默然として住し、其の解釋を聽かんとす。爾の時、作瓶天子、卽ち王に白して言さく、『大王、當に知るべし、王の夢に見たる所の、一帝釋の幢に、無量無邊の人民有り、左右を圍繞して、共に此の幢を擧げ、城の東門より、將て出でしは、此はこれ、大王の悉達太子、無量百千の諸天の與に、左右に圍繞せられて、當に㈢太子を捨てて、宮閤の內より、城を踰えて出家すべし。此夢はこれ先に於ける彼の瑞相なり。又、復、大王の見たる所の、太子、十香象に乘りて、衆車を駕馭し、城の南門より出で行けるは、彼、出家し已りて、卽便ち㈣薩婆若及以び十力を證得せん。此の夢はこれ先に於ける彼の瑞相なり。又、復、大王の見たる所の、太子、駟馬車に乘じ、城の西門より出で行きしは、彼出家し已り、薩婆若を證し、具足して四無所畏を得ん。此の夢はこれ先に於ける彼の瑞相なり。又、復、大王の夢みし所の、雜寶もて一輪を莊嚴し、城の北門より出で行けるは、彼、出家し已り、阿耨多羅三藐三菩提を證得し、後、天・人の前に於て、無上微妙の法輪を轉せん。此の夢はこれ先に於ける彼の瑞相なり。又、復、大王の夢みし所の、太子、迦毗羅城の中央、四衢道內に在り、手に一撾を取り、大鼓を擊てるは、彼、出家し已り、菩提を證得

與我懷、離別便迴遑などあり。
【三】太子。恐くは大王の誤。
【四】薩婆若（Sarvajña）。一切智と譯す、佛智のこと。

して、法輪を轉せん時、諸天各各聲を揚げて唱言し、其の音、上りて乃至梵天に徹し、傳へて相告知し、響、色界に遍ねからん。此の夢はこれ先に於ける彼の瑞相なり。又、復、大王の夢みし所の、太子、迦毗羅城の處中樓上に在りて坐し、四面に種種の寶を散擲せるは、彼、阿耨多羅三藐三菩提を成じ已り、諸天人、（五）八部衆の前に於て、當に是の如き衆妙の法寶――所謂、（六）四念處及び四正勤・四如意足・五根・五力・七覺・八道の種種諸法――を散せん。此の夢はこれ先に於ける彼の瑞相なり。又、復、大王の夢みし所の、此の迦毗羅城を去る、其の外、遠からずして六人有り、聲を擧げて大哭し、手もて髮を拔けるを見たるは、太子出家して、阿耨多羅三藐三菩提を得べく、菩提を得已るや、彼の時に、諸の六師有り、其の心に應に大憂惱を生ずべし。所謂、（七）富蘭那迦葉・（八）摩婆迦羅瞿奢子・（九）阿耆那只奢甘婆羅・（一〇）波羅浮多迦吒耶那・（一一）删闍夷禆耶私致只子・（一二）尼乾陀若低子等なり。此の夢はこれ先に於ける彼の瑞相なり。」

【五】八部とは天龍八部のこと。即ち天・龍・夜叉・犍闥婆・阿修羅・迦樓羅・緊那羅・摩睺羅伽なり。

【六】四念處乃至八道を三十七助道品といふ。原始佛教の實行條目の總括なり。

【七】富蘭那迦葉（Pūraṇa Kāśyapa）。

【八】摩婆迦羅瞿奢子（Maskari Gośāliputra）。

【九】阿耆那只奢甘婆羅（Ajitakeśakambala）。

【一〇】波羅浮多迦吒耶那（Kakuda Kātyāyana）。

【一一】删闍夷禆耶私致只子（Sañjayi Vairatiputra）。

【一二】尼乾陀若低子（Nirgrantha Jñātiputra）。

爾の時、作瓶天子、淨飯王の爲めに、夢を解說し已り、大王に白して言はく、『大王、宜しく應に、心に歡喜を生ずべし。恐怖を懷き、憂畏して樂まざる勿れ。何を以ての故に。此の夢は吉祥なり。善果報を獲ん。須らく自ら慶幸すべし。愼みて慮有る莫れ。』是の如く淨飯王を安慰し已り、忽然として現ぜず。時に淨飯王、婆羅門の、是の如く夢を解し、說きて吉祥の善果報と云へるを聞き已り、卽ち太子の爲めに、更に重ねて五慾の具を增加し、太子の心をして染著戀愛せしめ、出家せざるを望む。爾の時、太子、宮內に在り、意を恣にして五慾の事を受くること、思議すべからず。

道見病人品第十八

爾の時、作瓶天子、復、更に、思惟すらく、『此の護明菩薩大士、彼の宮内に在りて、五慾に著し、放逸情蕩にして、已に多時を經たり。世間は無常なり。盛年失ひ易し。護明菩薩、應に早く宮内を捨てて出家すべし。我、今、先づ其が爲めに勸請覺悟を作して、速に厭離せしむべし』と。是の如く念じ已る。作瓶天子の神通力の故に、亦、護明菩薩大士の宿福因緣にて、宮内に坐して、忽然發心し、園林に出でて觀看遊戲せんと欲す。

爾の時、太子、馭者を召喚し、之に告げて言く、『善馭者、汝、速に疾く好車を莊嚴すべし。我、城を出で園苑に向ひ、遊戲して目を悅ばし、叢林を觀看んと欲す。』是の時、馭者、太子に白して言はく、『聖子の勅の如くにして、我、敢て違はじ。』馭者、既に太子の是の如き敎令の語を聞き已り、卽ち往き、淨飯王に奏し、白して言はく、『大王、當に知るべし、太子、今、出でて園林に向ひ、善地を觀看んと欲す』と。時に淨飯王、勅を出だして國内の人民に宣令し、悉く迦毗羅城を莊嚴し、掃灑し、淸淨ならしめ、幷に一切の諸草・沙礫・荊棘・朽木・土埠・糞穢臭の處を除却せしめ、皆、平坦ならしめ、乃至、園内の有ゆる女名の樹木には、還女の瓔珞の具を以て、之

或は太子の前に於て、道上に、乃至、用て校飾し、男の瓔珞を以て、男名の樹木は、を莊嚴し、

老、或に病の、出現するを聽さず、太子をして見已りて厭離の想を生ずる莫らしむ。

是の時、馭者、車を莊校し已り、太子に言を進む、『已に車を嚴め訖る。唯願はくは、聖子、善く自ら時を知れ。』是の時、太子、卽ち寶車に乘り、乘り已りて大王の威神を執持し、巍巍たる盛德もて、城の南門より、漸漸に出で、園林に向ひ、觀矚嬉戲せんと欲す。

爾の時、作瓶天子、卽ち太子の前路に於て、化して一病患人と作り、連骸困苦、水注腹腫して、大苦惱を受け、身體羸瘦・臂脛纖細・痿黃少色・喘氣微弱、命、須臾に在り、糞穢の中に臥し、宛轉呻喚して、起擧する能はず。語らんと欲して口を開き、纔に聲を出すを得、叩頭して唱へていふ、『乞ふ、我を扶けて坐せしめよ。』

是の時、太子、彼の病人の、乃至、口に言ひて、『我を扶けて起たしめよ』と唱ふるを見、太子、彼の病患の人を見已り、馭者に問うて言はく、『善馭者、此はこれ何人ぞ。腹肚極めて大きく、猶ほ大釜の如し。喘息の時、身遍ねく戰慄し、臂脛纖輭・身體尩羸にして、痿黃無色、或は、復、唱へて、「嗚呼阿孃」と言ひ、或は、復、稱へて、「嗚呼阿爺」と言ひ、悲切酸楚、見聞するに忍びず。他身に託するに依つて、方に能く起止す。』時に作瓶天子、神通力を以て、馭者をし

て、太子に報せしめて言はく、『願はくは聖子聽け。此を病人と名づく。』太子、復、彼の馭者に問うて言はく、『病人と稱するは、此はこれ何の名ぞ。』馭者報じて言はく、『大聖太子、此の子の身體、善く安隱ならず、威德已に盡きて、困篤無力、死時至らんとして、歸依する處無く、父母併に亡せて。告訴するに處無し。已に歸依無く、告訴無きが故に、此の人久しからずして、自ら應に命終すべし。活くるを求め得んと欲して、極めて大に困苦するも、必らず當に濟はざるべし。差る日を望み覓むるも、是の處有ること無く、唯、時を待つのみ。大聖太子、是の因緣を以ての故に、病と名づくる也。』而して偈有りて說く、

『太子・馭者に問ひて言はく、此の人何故に是の苦を受くる。
馭者・太子に報じ奉る、四大調はざるが故に病生ず。』

太子、復、馭者に問ひて言はく、『此の人の獨一家法なるべしと爲すか、一切世間の衆生、悉く是の法有るべしと爲すか。』馭者、報じて言はく、『此の病の法は、獨り一家のみに非ず、一切の天人衆生雜類、皆、悉く未だ免れず。』太子、復、言はく、(一)『我も、亦、此の病を未だ過ぎず、未だ脫せず。會らず當に彼に似て此の如き事を成すべし。嗚呼、畏るべし。』太子、卽ち其の馭者に告げて謂は

【一】(原文)我亦此病、未過未脫、會當似彼成如是事、嗚呼可畏。

く、『汝馭者、若し我が此の身、是の病を脱せず、茲の病法を具して、度するを得難くば、我今、假にも彼の園林に至り、遊戯して樂を受けじ。車駕を廻らし還りて宮内に入るべし。我、當に思惟すべし。』馭者、答へて言はく、『太子の勅の如くせん』と。

是の時、馭者、既に敎を受け已り、車を廻らして宮に向ふ。是の時、太子、還りて宮内に入り、端坐して思惟すらく、『我も亦病むべし。病法、未だ現れざるも、豈に情を縱にするを得んや。』

時に淨飯王、馭者に問うて言はく、『太子、園に遊びて觀樂を受けしや不や。』馭者報じて言はく、『大王、當に知るべし。太子、城外に向ひて出遊し、池沼を觀看んと欲して、半路に、一病人の、乃至、口に、「願はくは我を扶けて起たしめよ」と言へるを見、見已りて卽ち勅し、車を廻らして還り、宮中に靜坐して、思惟繫念す。』時に淨飯王、是の語を聞き已り、心内に思憶すらく、『阿私陀仙授記の語は、決定して眞實なり。太子、復、家を捨てて出家する莫らんや。我今、太子の爲めに、更に五欲の事を加へて、太子を增長し、五欲に著して、捨てて出家せざらしむべし。』時に淨飯王、卽ち太子に五欲の具を益して、復、倍增長す。而して偈有りて說く、

『太子久しく宮閤中に住し、出でて園に向ひ五欲を受けんと欲し、

路に一瘦羸の病者を見て、便ち慾を厭離せんとの想を生じて廻り、
端坐して老患の因を思惟す、「我今未だ超えず何ぞ樂を得ん。
(さはれ、)色・聲・香・味等・諸觸は、最妙最勝なり厭ふべからず」。
大士昔に行ぜる善業の緣より、今極樂を受くること比有るなし。』
是の如き次第にて、太子、宮內に在るの時、具足して五慾の功德を受け、晝夜絕ゆる無し。

路逢死屍品第十九

爾の時、作瓶天子、復、一時に於て、是の如き念を發す、『此の護明菩薩大士、宮内に在りて、極意歡娯す。今、時已に至る。護明菩薩、宜しく早く出家すべし。我、今、彼の大士の爲めの故に勸請し、出でて五慾を厭離し、捨家出家せしむべし。』是の時、作瓶天子、心に、護明を勸發せんと欲せるが故に、作意して、宮内より出でて彼の園林に向ひ善地を觀看しむ。

是の時、太子、馭者に告げて言はく、『善馭者、汝、速に駟馬寶車を駕すべし。我、城を出でて園に詣り、遊戲せんと欲す。』是の時、馭者、太子の命を聞き、卽ち疾く往き、淨飯王に奏して言はく、『大王、當に知るべし、太子、出でて園林を觀看んと欲す。』

時に淨飯王、勅して迦毗羅城を莊嚴し、街巷を掃灑し、荊棘・沙礫・朽木・[一]土埆・糞穢・瓦石を、皆悉く淨除せしめ、乃至、園内の有ゆる諸樹の、是れ女名なるは女の瓔珞もて嚴り、男の名字なるは男の瓔珞もて飾り、復、鈴鐸を振りて、是の如き言を唱ふ、『更に一人の不祥ありて、太子の前に在り、或は老、或は病、乃至、太子の眼に見ての後、厭離を生ぜしむる莫れ』と。是の時、馭者、卽ち太子の爲めに、好車を嚴備し訖已り、進んで太子に白して

【一】埆(かたきつち)。或は堆に作らる。

言はく、『聖子、善く聽け、車を莊校し訖る。唯、願はくは、時を知れ。』太子、車に坐し、威神大德もて、城の西門より出で、外に向ひて、園林を觀看んとす。

時に、作瓶天子、太子の前に於て、化して一屍と作り、臥して牀上に在り、衆人舁き行く。復、種種妙色の繒衣を以て、其の上に張施して、斗帳と作し、別に無量無邊の姻親有り、左右前後に、圍遶哭泣す。或は散髮なる有り、或は胷を搥つ有り、或は復、頭を拍ちて兩臂を交橫するあり、或は復、二手に塵土を取り、持て面頭を坌し、或は種種悲咽の音聲を出だし、涙の下ること雨の如く、大叫號慟して、酸哽聞き難し。太子、之を覩、心懷慘惻し、馭者に問ひ、言ひて謂はく、『善馭者、此はこれ阿誰ぞ、牀上に臥し、種種の華を以て、莊嚴圍遶し、乃至、雜色繒摩の衣服もて斗帳と作し、人、舁きて行き、大衆周匝して、〔一〕稱寃叫哭するは』と。偈を說き問ひて言はく、

『王子・妙色にして身端正なり。問ふらく善馭者此はこれ誰ぞ。牀上に臥して四人〔二〕轝せ、
諸親圍遶して叫喚して哭するは。』

爾の時、作瓶天子、神通力を以て、善馭者をして、太子に報ぜしめて言はく、『大聖太子、此を死屍と名づく。』太子、復、善馭者に問ひて言はく、『死屍とはこれ何ぞや。』馭者、報じて言はく、

〔一〕寃は怨。枉也、曲也、屈也、亦不理也(惠琳意義)
〔二〕轝は輿。のする、おふ。

『大聖太子、此の人は已に世間の命を捨てて、威徳有ること無く、今、木石に同じく、猶ほ牆壁の如く、別異有る無し。一切の親族知識を捐棄し、唯獨り精神のみ、自ら彼の世に向ふ。今より已後、復、更に、父母兄弟、妻子眷屬を見ず。是の如き眷屬も、生死別離して、更に重ねて見ること無し。故に死屍と名づく。』太子に向ひ偈を説きて言はく、

『已に心意等の諸根を捨てたる屍骸は、識無くして木石の如し。
諸親號咷して暫く圍遶するも、恩愛は此に長く別離す。』

太子、復、善馭者に問ひ、言つて謂はく、『善馭者、我も亦此の死法有りや不や。我、已に超えたりや、未だしや。』馭者報じて言はく、『大聖太子、太子の尊身、此の死法有り、亦、未だ免脫せず。世間一切の、若しくは天、若しくは人の、有ゆる親族眷屬識知、各各彼は此を見ず、此は彼を見ざる別離の事有り』と。而して偈を説いて言はく、

『一切の衆生此に業を盡すや、天人貴賤・平等に均し。
善惡の諸世間に處すと雖も、無常の至る時は異有ること無し。』

爾の時、太子、此を説くを聞き已り、馭者に報じて言はく、『若し我の此の身も、同じく是の死有りて、死法未だ過ぎず。我、卽し、今、天及以び天中所有の眷屬を見るを得ず、彼等も又亦、

我を見ずば、我、今、何ぞ假にも彼の園林に向ひ、遊戲して快樂せん。』速に車を廻らし、還りて宮內に入るべし。我、當に思惟すべし。』是の時、馭者、太子の命じて是の如く言へるを聞き已り、卽ち車駕を廻らし、還りて宮中に向へり。

爾の時、太子、宮內に至り已り、端坐して思惟すらく、『我、當に必ず死すべし。旣に未だ死法を超越する能はず』として、繫念し、默然として、是の如く世間果報の、無常に會歸するを思惟す。而して太子が、初めて宮に入らんとせる時、一の無智愚癡の相師有り、立ちて大王の宮門外に在り。太子の面顏、上下形容、丈夫の相を熟視瞻仰し、大聲に唱言すらく、『汝諸人輩、一切、當に知るべし。今日より後、七日に至る內に、此の太子は、七寶自然に成就し來應せん。』

時に淨飯王、馭者に問うて言はく、『汝、善馭者、太子を引導して園林の中に至り、頗る心に稱ふを得て、觀樂を受けたりや不や。』馭者、長跪し、王に報じまつりて言はく、『大王、當に知るべし、太子、今、出でて園林に至らざりき。』時に淨飯王、馭者に問ひて言はく、『太子、何の故に園林に至らざりしか。』馭者、白して言はく、『大王、善く聽きたまへ。太子の宮を出づるや、其の中道に、一死人の、臥して牀上に在り、四人にて【四】扛舁げ、乃至、親屬の圍遶して哭泣せるを見、見已りて卽ち廻還して宮內に入り、

【四】扛。かかへあぐ。舁。かきあぐ。

思惟して樂まず。』時に淨飯王、此の語を聞き已り、心内に思惟すらく、『阿私陀仙の記せる所は、必ず實ならん。太子、復、我を捨てて出家する莫らんや。我、今、更に、太子の五慾の事を增益し、其に染著せしめて、出家せしむる莫るべし。』時に淨飯王、太子の與に、服玩を增加して、種種充足す。而して偈有りて說く、

『無量劫海の功德行にて、太子・命終の人を見たるを以て、
心大に悵怏して憂愁を懷き、還りて宮內に入り當に死すべきを思ふ。
昔より此の城の宮殿の妙なるに置かれ、太子年盛にして極めて端嚴、
五慾心に稱ひ甚だ自ら娛む、猶ほ千日の歡喜苑に在るがごとし』

是の如き次第にて、太子、宮內に在り、具足して五慾を受け、意を恣にして歡喜しぬ。

耶輸陀羅夢品第二十の上

爾の時、作瓶天子、太子の、出でて死屍を觀、廻りて世間五欲の事を厭離し、宮内に還りて坐せるを見、六日を經たる後、復、更に是の如く重ねて思惟して言はく、『此の護明菩薩大士、五欲に著せるを以て、心迷ひ、放逸にして、肯て棄捐せず。今や、時、已に至る。護明菩薩、應に須らく速に疾く捨離出家すべし。我、今、爲めに勸請の緣を作すべし。』時に作瓶天子、太子に、出家心を發さしめん爲めの故に、亦是の作瓶天子の宿福因緣の感動より、自ら太子をして意を興し、園林の内に向ひて遊ばんと欲せしむ。爾の時、太子、馭者を召喚し、之に勅し、言つて謂はく、『善馭者、急ぎ駕乘を嚴めよ。我、園に入らんと欲す。』馭者、命を受け、卽ち往きて淨飯王に啓奏して言はく、『大王、當に知るべし。太子、今、出でて園林に向ひ、遊戲觀看せんと欲す。』時に淨飯王、勅して、迦毗羅城を淸淨にし、種種に莊嚴せしむること、前の如くにして異らず。乃至鐸を振り、城内に告げて言はく、『老病及び死、六根不具の一人をも、太子の前に在り、太子をして、見て厭離心を生ぜしむる莫れ。』馭者、敎を受けて好賢車を進む。太子、時を知り、卽ち車上に坐し、威德尊重にして、城の北門より駕を引きて去る。

爾の時、作瓶天子、神通力を以て、車を去る遠からずして、太子の前に、化して一人と作り、鬚髮を剃除し、（一）僧伽梨を著し、右肩を偏袒ぬぎ、右に錫杖を執り、左掌に鉢を擎げ、路に在りて行く。太子、見已り、馭者に問ひ、言ひて謂はく、『善馭者、此はこれ何人ぞ。我が前に在りて、威儀整肅、行歩徐庠、一尋を直視して、左右を觀ず、執心持行すること、餘人に似ず。剃髮剪髭、衣色は純赤にして樹皮を以て染め、（二）白衣に同じからず、鉢の色、紺光にして、猶ほ（三）石黛の如し。』時に作瓶天子、神通力を以て、彼の馭者をして、太子に白さしめて言はく、『大聖太子、此の人を名づけて出家の人と爲す。』太子、復、彼の馭者に問うて言はく、『出家と稱するは、これ何の行をか行ずる。』馭者、報じて言はく、『大聖太子、此の人は、恒常に善法の行を行じ、非行を遠離し、善く平等を行じ、善く布施を行じ、善く諸根を調へ、善く自身を伏し、善く無畏を與へ、能く一切諸衆生の邊に於て、大慈悲を生じ、善く諸衆生を恐怖せず、善く諸衆生を殺害せず、善能く諸衆生を護念す。太子、是の如きを以ての故に名づけて出家と爲す。』太子、復、彼の馭者に問うて言はく、『汝善馭者、此の人は善能く諸業を造作するよ。何を以ての故に。法行と言ふは、此はこれ善行なり。乃至、善能く衆生を害せず。是の故に汝、今、

【一】Saṃghāṭi。重複衣と譯す。

【二】白衣。俗人のこと、白衣を著くるを以てなり。

【三】黛。青黑色。

車を將て彼の出家人の邊に向へ。』馭者、命を承け、太子に白して言はく、『太子の勅の如くにせん。』卽ち車を引きて出家人の所に向ふ。是の時、太子、至り已りて彼の出家人に諮問し、是の如き言を作す、『尊者。大士、汝はこれ何人ぞ。』時に作瓶天子、神通力を以て、彼の出家剃髮の人をして、太子に報ぜしめて言はく、『太子、我、今、名づけて出家人と爲す。』太子、復、問ふ、『仁者、何故に出家人と名づくる。』彼、復、報じて言はく、『太子、我は一切世間の諸行、盡くこれ無常なるを見、是の如く觀じ已り、一切世俗の衆事を捨て、親族を遠離して、解脫を求めんが故に、捨家出家して、是の思惟を作す、「何の方便を行じてか能く諸命を活さん。」此の事、知り足りて善く法行を行じ、乃至、善能く一切諸命を殺害することを行ぜず。太子、是の如きを以ての故に、我を出家と名づく。』太子、又言はく、『仁者が爲せる此の業や大に善し。汝、能く一切諸行は、これ無常の法なりと觀じて、能く知ること是の如く、乃至、善く一切衆生に、怖畏無きを與へ、乃至、心に能く諸衆生を殺害することを起さず、又能く活命して其に安隱を施す。』

而して偈有り、言はく、

『世間はこれ滅法なりと觀見し、無盡の涅槃處を欲求して、
怨親に已に平等心となり、世間に欲求の事を行はず。

山林及び樹下に隨依し、或は復塚間の露地に居し、
一切諸の有爲を捨てて、諦に眞如を觀じ食を乞ひて活く。』
爾の時、太子、法を敬せんが爲めの故に、車より下り、徒步して彼の出家人の所に向ひ、彼の出家人を頭面に頂禮し、三帀圍繞し、還、車に上りて坐し、即ち馭者を勸めて宮中に廻還す。是の時、宮内に一婦人有り、名づけて鹿女といふ。遙に太子の、歸り來りて宮に入るを見、欲心に因りて、偈を說きて言はく、
『淨飯大王や快樂を受け、摩訶波闍や憂愁無からん。
宮内の婇女極めて姝妍なるも、誰か能く此の聖子の處に當らん。』
爾の時、太子、是の所說の偈頌の聲を聞き已り、遍體戰慄し、淚の下ること雨の如し。心内に涅槃の樂を愛樂し、淸淨の諸根、涅槃に趣向して、是の言を作す、『我、今、應に彼の涅槃の樂を取るべし。我、今、應に彼の涅槃を證すべし。我、今、應に彼の涅槃を行ずべし。』
爾の時、淨飯王、宮殿内に在り、諸臣百官、左右を圍繞す。太子、忽然、入りて王の邊に到り、十指掌を合し、躬を曲げて立ち、父王に白して言く、『唯願はくは大王、今、我に聽すべし。我、出家して涅槃を志求せんと欲す。大王、當に知るべし、一切の衆生、皆別離有り。』時に淨

飯王、其の太子の是の言を作すを聞き已り、象の搖るがす樹の如くに、遍體戰動し、支節〔四〕怡解し、涙下りて目に盈ち、語聲嗚咽して、太子に報じて言はく、『我が子、太子、此意且らく停めよ。子は今、これ出家の時に非ず。我も亦、曾て年少、諸根の動く時を經たるも、亦、未だ世間の衆患を見ず、法行を行せず。又、亦、未だ曾て諸惡欲を見て、苦行を行せず。子が是の心を起すは、甚だ堪忍ならず。我が子、童子よ、年少の時は心意未だ定らず、諸根も未だ伏せず。而かも彼の〔五〕阿蘭若に住せんと欲するも、時に苦行に堪へざらん。我が子、童子よ、我が年の老ゆるを待て。我、若し時至らば、法行を行せんと欲す。我、當に國を捨て、子に王位を付し、空閑に入りて苦行を行ずべし。我が子、童子よ、若し子にして、返逆し、我が心に順はず、我が語言に違ひて法行を生じなば、子は現世に於て不善の法を得、以て尊の語に違はん。是故に我が子よ、此の精進心を、且急に捨離し、宮中に住し、意を家内に安んじ、俗法を行せよ。我が子、童子よ、凡そ世間の人は、先づ須らく五欲の樂を受け、然る後に發意して、出家心に向ふべし。』太子、報じて言はく、『大王、今は子の出家心を障ぐるを得べからず。何を以ての故に。譬へば、人有り、彼の焚燒熾然たる猛焰の火宅の中より、走り出んと欲せば、此はこれ健人なり、

【四】怡、やはらぐ。
【五】阿蘭若（Araṇya アーラニヤ）。森林の義、森林は空閑寂靜にして、淨行を修するに適するを以てなり。

遮斷すべからざるが如し。大王、諸の生有る者、會に別離有り。若し人、世間の中に、皆別離有りと覺知して、而も別離の法を捐つる能はずんば、これ善利に非ず。又、人有り、事を作して成らず、死時、將に至らんとするも、疾く爲さざるは、これ善智に非ざる如し。』卽ち父王の爲めに偈を說きて言はく、

『(六)若し一切の決して無常にして、諸有の法の終に散壞するを視ば、寧ろ世間の諸親に別るるを忍ばん。死命至らんと欲す・事須らく成ずべし。』

時に淨飯王、更に復、慇懃に、重ねて太子に語るらく、『我が子、童子、決定して我を捨て、出家するを得ざれ。』又諸大臣も、昔の世論に依り、各見る所を以て、太子を諫めて言はく、『大聖太子、聞かざる可けんや、劫初已來、(七)韋陀論中、昔の諸王輩、年少の時は、各自境に在りて如法に治化し、年老ゆる時に至り、(八)嫡冑相承け、各、世子を將て、以て王位を紹がしめ、然る後、山に向ひ法行を修行せり。是の義を以ての故に、大聖太子、獨り先王の法に違ふを得ず。』時に淨飯王、諸大臣の是の語を作すを聞き已り、涙の下る、雨の如く、一心に太子の面を諦觀して、眼睛、瞬かず。是の時、太子、心內に狐疑し、憂愁して樂まず、還りて宮中に入る。

【六】(原文)若視一切決無常、諸有之法終散壞、寧忍世間諸親別、死命欲至事須成。
【七】Veda(ヴェーダ)
【八】嫡は正也。冑は連續也、緒也。

太子、宮に至るや、諸の婇女等、遙に太子を見、皆、悉く歡喜して、坐より起ち、或は手合掌し、或は面嬌姿し、或は舞ひ或は歌ひ、或は身承奉し、太子の坐せるを見て、各、欲心を以て、妖態熾盛、太子を圍繞して、相共に娛樂すること、自在天の、宮內に在りて、威德巍巍、衆相顯赫として、歡樂するが如く、亦然り。

爾の時、太子、同生の、諸相諸好、一齊に等しきものと、恒常に莊嚴して日夜遊戲す。又、太子の是の如き諸相の、顯赫炳著なるを見て、心に是の如き希有の想を生ず、『此はこれ月天の、自ら地に下れるなり』と。彼等婇女、太子の是の如き相貌を見、極めて羨心を起し、或は復、眉を揚げ、或は復、目もて視る有り、或は口に(九)詧言し、或は手もて相招くも、是の太子の威神力を以ての故に、其の欲心をして熾盛なる能はず、復、笑ふ能はざらしむ。

太子、亦、父王の邊より出づ。時に淨飯王、卽ち馭者を喚び、之に告げ、言ひて謂はく、『善馭者、太子は彼の園林に至らざるか。』馭者報じて言はく、『大王、當に知るべし。太子、彼の園林の中に向はんと欲し、其の半道に、一人有り、鬚髮を剃除し、身に染衣を服し、杖を執り鉢を持てるを見、彼の人を見已り、車を迴らして宮に入り、端坐して思惟す。』爾の時、淨飯王、是の

【九】詧はあきらかにす。察と同じ。一本切に作る。或は諞(よくものいふ)、又は誓(ほむる)の誤か。

語を聞き已り、是の如く思惟す、「大仙阿私陀の言は虚妄ならず。定めて恐らくは、太子、捨家出家せん。我、今、更に五慾を増益し、其に染著して出家せしむる勿らしむべし。」時に淨飯王、更に五慾を加へ、宮内に住して、心に快樂を受け、出家するを許さざらしむ。重ねて偈を說いて言はく、

『太子道に出家の人の、身體に樹皮もて染めたる衣を著けたるを見、
覩已りて無上道を志求し、深心唯出家に在らんを樂しむ。
老病死の苦の無邊なるを觀、又出家の乞食して活くるを見、
世間を厭離し三患を捨て、解脫を慕樂し〔一〇〕無爲を求む。
生老病死の諸瘡疣、太子彼等の苦を離れんと欲し、
道上に彼の出家の者を見て、心に大喜を生ず「此はこれ眞なり。」
貪等諸患の根を捨てんと欲し、「我應に剃除して山藪に入るべし」とて、
太子・至眞の法を求めんと欲し、彼の沙門を見て大に歡喜す。
善馴馬・調御の車に乗り、三界を出でんと欲するが故に苑を觀、
半路に彼の俗服を捨てたるを見て、心に「此はこれ上菩提なり」と喜びぬ。』

〔一〇〕無爲は有爲に對す、爲とは爲作。生滅變化せざるを無爲といふ。

爾の時、淨飯王、更に太子の爲めに、廣く五欲を設け、所有の功德、事事に加益して、悉く增多せしむ。復、舊宮城郭の外に、四面周帀、守護牢防、別に更に崇巨なる高壘を築きて、舊院を繞らし、坑塹極めて深し。その（一）墉堞の頭に、種種の七寶羅網を安置し、羅網の節目に、悉く鳴鈴を懸け、宮閤の門扉に、嚴しく禁衞を加へ、晨夕の出入開闔の時に、大聲有らしめ、四遠の門外に聞徹す。復、無量の兵車象馬、及び人の團體を置きて、相捉へしめんとて、皆、鞍甲を被り、悉く精牢ならしむ。其の次に、復、宮院の外に、無量百千の壯士を安置す。形容端正にして、喜ぶべきこと雙無し。悉く能く、他の有ゆる怨敵を破す。身に甲冑を帶び、手に三叉・弓箭・長刀・戟（二）稍・（三）鑽棒を執り、諸の是の如き等の種種の武仗もて、太子の內外城門を防護す。復、宮內をして、嚴に約勅を加へしめ、諸婇女等、晝夜停まる莫く、諸音樂を奏して、一切娛樂の事を顯現し、有ゆる女人の幻惑の能を、悉く皆顯現し、慾の枷縛を以て、慾心に著け、捨てて出家する勿らしむ。

【一】墉はかきね。堞は女牆なり。

【二】稍（馬上にて用ふるほこ）或は槊に作る。

【三】鑽（小さき稍）、或は穳（小さき稍）に作る。

巻の第十六

耶輸陀羅夢品第二十の下

爾の時、國師一子有り、〔一〕優陀夷と名く。聰明の智慧ありて衆の論辯巧なり。時に淨飯王、卽ち彼の優陀夷を喚び來らしめ、來り已るや、王、是の如き言を作す、『汝優陀夷は黠慧多智なり。今、往いて悉達太子に侍し、方便力を以て、我が太子に敎へて、心、穩に、宮中を愛樂せしめ、厭離捨欲して、出家せしむる勿るべし』と。時に淨飯王、更に、復、一切釋種の眷屬を召喚し、聚集めて之に語つて言く、『汝等宗族、我、意に疑ひ慮る、悉達は決定して家に住まり居らじ。汝等今は我を佐助くるに、何の方便を作して、其をして離れざらしむるか。』時に、諸の釋種、大王に報へて言く、『我等、詳かに共に太子を守護せば、其れ何の力有つてか、能く强ひて出家せんや』と。

爾の時、淨飯王及び諸の釋種、迦毗羅城の東門外に於て、五百の勇健なる童子を安置しぬ。善能く兵を用ひ、巧に神射を解し、多く方便有り。悉皆、大力なること猶壯士の如く、力敵雙び

〔一〕優陀夷 Udāyin 隋に聽辯と言ふ。

少し。一一の童子、五百車有りて、自ら圍繞し、一一の車邊に、復、五百の勁捷なる壯夫有りて、各、圍繞す。是の如く次第に、南西北門も亦、復、是の如し。乃至、各五百人の防有ること、上に說く所の如し。復、宿老たる諸の釋大臣有り、悉く皆各十字街巷、四衢道頭に住して、遞ひに共に悉達太子を守護しぬ。時に淨飯王、別に、五百の最勝壯健なる諸釋侍官を置き、其身に悉く皆鎧甲を帶持して、象に乘り、馬に乘り、四面圍繞し、淨飯王宮に、各、閤門の內外に在つて、通夜持更す。

爾の時、國大夫人、摩訶波闍波提・憍曇彌、宮內に在り、婇女を集聚めて之に語つて言く、『汝等當に知るべし、今より已去、晝夜に睡る莫く、諸の明寶を持つて、高幢の上に置き、夜を暗からしむる勿れ。又、復、處處に別に蘇油香燈、蠟燭を燃し、恒に火を覆はしめて、滅無ならしむる勿れ。諸門の管籥は、好く牢く關閉して、時に非ずして、人をして横に開かしむるを得ざれ。身體莊嚴に、皆瓔珞を著け、各手を連ぬること、猶ほ鉤鎖相捉へて住まる如くし、太子を圍繞して、浪に行くを聽す莫れ。若くは弓刀を執り、或は叉棒を持ち、或は戟槊を拄へ、是の如く坐立して、種種の器仗を、或は執し或は對し、晝夜に心を用ひて、太子の行動を覺らざらしむる勿れ。彼れ若し出家せば、我が宮、空虛にして娛樂すべき無けん』と。

時に、優陀夷國師の子、太子に侍衛し、儲宮の内に入つて、太子の殿中に住在し、思惟して坐し、宮内の婇女皆悉く默然たるを見る。是の如く見已るや、彼の諸女に語つて、是の如き言を作す、『汝等一切、巧に談論を解し、語言戲謔、善く人意を承け、惑を變じて歡と爲し、端正恰ぶべく、世間に比無し。各自ら是の如き伎能有るに、今日云何んぞ默然として住して、忘失すべけんや。是の如き功能は、應當に彼の北鬱單越國土の作せる莊嚴事の如くなるべし。又、復、汝等は、北方毘沙門天護世大王の爲に、妃后と作るに堪へたり。況や、復、人間の宮内に堪へざらんや。汝等婇女、豈此太子をして離慾せしむ可けんや。若し汝等の如くあらば、猶能く眞正の聖人をして五欲を行ぜしめん。況や、復、今日此の釋迦太子をして、世間に染著せしむる能はざらんや。汝等、婇女、能く、美言を作し、怒を廻して喜ばしめ、巧に他の心を取る。婦人の身に有せる方便幻惑の術は、假ひ女人を以てすとも、亦能く慾を行ぜしむ。況や、復、男兒の、汝等に著せざらんや。若し世間の人、汝等と共に一處に同じて、能く慾を行ぜざるを得んこと、終に是處無けん』と。而して偈を説いて言く、

「汝等婇女の輩、大に方便の力有り、巧に能く他を幻惑して、善く汝の境界を示す。
假ひ離欲の人、眞正の諸仙等ならしむるとも、汝を見るを得ば、必ず慾心を生ずべし。

況や復此の太子、汝等の娯樂を見て、
　五欲を行ずる能はざること、終に是處有ること無けん。』

是の如く汝等、自らの境界中、巧に方便を解す。我汝等を見るに、具足して皆是の如き方便あり。遂に王太子をして、汝等の邊に於て、慾心染著せしむる能はずば、我甚悦ばず。汝等、更に人人意を加へて、巧に方便を出し、悉達太子をして見已りて、汝等の邊に於て、別に慾心を生じて、厭離せしむる勿らしむ可し。汝等婇女、聞かざる可けんや。昔、迦尸國に一の仙人有り。提波耶那と名けたり。隋に誕上生と言ふ。孫陀梨婬女に誑惑せられたり。而るに彼の仙人や、天の如くに異ることなく、諸天すら猶、尙、奈何ともする能はざりしに、孫陀梨婬女に惑はされしが故に、彼に隨つて步行し、來りて城中に入れり。又、復、往昔、一仙人有り、名を獨角仙人の子と爲す。生れてより已來、未だ欲事を經ず。彼の時に當つて、一婬女有り、名けて商多と曰へり。隋に寂定と言ふ。彼の仙を誑惑して、遂に禪及び五神通を失はしめたり。又、復、昔、仙人有り、名を毗商蜜多と曰へり。隋に化支と言ふ。多時苦行し、十年を經て、噉食する所無し。彼の時に當つて、一婬女有り、彌迦那と名けたり。隋に一者と言ふ。極大端正なり。彼の仙、亦、復、其れに誑惑せられたり。諸、是の如き等の大神仙人も、多くは諸婬婦女に誑惑し牽取せられて、世慾の事を敎行せり。況や、復、今日の

悉達太子は、盛壯少年、身體柔輭、大王の子として、善く諸事を解す。汝等至心に承事供奉し、汝等に於て染著の心を生せしめ、其をして王の體胤を斷たしむる勿れ」と。

彼等婇女、國師の子、優陀夷の邊に於て、是語を聞き已り、太子に向つて、種種の巧媚幻惑を示現し、勝妙の欲心を生じ增上せしむ。或は婇女の、舞形を示現する有り。或は婇女の、微妙の聲を出して、唱頌歌讃するあり。或は音樂を作し、或は可笑奇異の面形を出し、或は百種の語言辭句を造り、或は復、太子の前に於て[二]透迤巧妙の行步を示現する有り。或は復、雜異種種の妙好鮮華を以つて、太子に奉ずる有り。或は種種百和の香を作つて太子の身に塗り、或に口中に於て指を吹きて、種種の鳥聲を造作し、或は復、諸白して是の如き言を作せり。『聖種王子、願くは我等が作す所の、種種の世俗の慾情・語言・嘲調を聞け」と。而るに王太子、宮內に在りて是の如き等、諸種の欲戲を聞くや、是の思惟を作す、「世間の中は苦に逼らる。所謂、生老及び病死等なり。惱患既に然るを、彼等の苦を厭離し捨して、歸依の處を求むるを知らず。我、今、云何が、巧みに方便を作し、能く此等世間の諸苦、生老病死を捨てん。」又、復、彼等諸の婇女輩、多種に歌舞音聲、或は復、種種諸妙の欲事を示現す。而かも彼の悉達太子、見已りて希有戀著の心を生ぜず。時に宮女中に一婇女有り、自らの手

【二】透迤は自得の貌。

に一の末利華鬘を將ち、前み出でて太子の頸下に繋く。而るに太子の眼、熟視して瞬かず、彼の女人を觀て、卽ち還、自ら末列の華鬘を解き、解き已りて手に持して、牕牖中より外に擲棄す。

時に國師の子、優陀夷、太子の端坐して正念に思惟し、世間有爲の境界に著せず、又妙の色聲香を染愛せざるを見、是の如く見已り、聰明の智慧もて、巧に種種殊方の善論を解せる其の優陀夷は、太子を諫めて言く、「大聖太子、我、大王の敕を被り、來つて此に至り、太子と友として娛しむ。我、今、諮白せん、願くは太子聽かれよ。我、太子の、世事中に於て、心意動かざるを以て、偈を說いて言はん。』

『我友相を略說せんに、惡は諫め善は行はんを勸め、
厄難相救濟する、是を眞の善友と名く。』

時に優陀夷、此の偈を說き已りて、復、是の言を作すらく、『大聖太子、我、今、既にこれ聖子の友たり。諸事の好惡、須く共に平章すべし。異を見て默然として我を捨てんと欲するは、名けて友と爲さず。是の故に、我、今、太子に向つて、諮白する所有らんと欲す。友の如き心に依つて、唯願くは領納せよ。太子、當今、盛壯年少なり。(三)我、今、太子の心を觀看るに、善事を作さず、諸婇女等を捨離せんと欲して、其の

【三】(原文) 我今觀看太子之心、不作善事、而欲捨離諸婇

邊を嫌恨するは、何の惡む可き有るか。凡そ心を繫縛するは隨順是なり。愛著の情は慾態を本と爲す。婦女の體は、唯丈夫の敬重を以て歡びと爲す。若し太子の心、必ず五欲の事に愛著せず、世間の富貴榮華を是れ難らば、但、當に口の美言善語を以て、宮人を慰喩し、其の意をして悅ばしむべし』と。而して偈を說いて言く、

『婦人は敬是れ樂む。敬を樂の最上と爲す。
敬無ければ唯色有り。樹の花有ること無きが如し。』

爾の時、太子、國師の子優陀夷の邊より、是の語を聞き已るや、即ち種種の善巧の語言、哀愁の聲を作す。猶、雲陰の、隱隱たる雷震の微妙の聲の如く、猶、善美和合の音聲柔輭なるが如し。優陀夷に報答して言く、『汝優陀夷、我も、亦、汝の、我が良朋たり、我が善友たるを知る。好心開發して、我が意を諫曉せよ。我、今、亦、汝の意の、我に向つて親密厚重なるを知る。我、今、亦、汝の心に違逆せじ。汝、今、我に是の如き過有るを見たり。我、今、汝に順はん。但し我は是れ世間五慾の樂を知らざるに非ず。我、世諦一切の諸事を見るに、了達分明なり。我、世間の無常敗壞を以て、是の義を以ての故に、畏る可き此處に、心意樂まざるなり』と。而して

女等、嫌恨其邊、有何可惡、凡繫縛心、隨順是也、愛著之情、慾態爲本、婦女之體、唯以丈夫敬重爲歡、若太子心、必不愛著五欲之事、世間富貴榮華是難、但當口美言善語、慰喩宮人、令其意悅。

偈を説いて言く、

『世の榮は快樂なりと雖も、生老病死有り。
此の四種若し無くんば、我が心誰か樂まざらん。』

是の時、太子、是の偈を説き已り、復、更に重ねて優陀夷に語つて言く、『汝、優陀夷、當に此諸の婇女等を觀るべし。既に老に盛壯の色を奪はれ已れば、各相觀て、意、喜樂せず。況や、癡人の、是の處に於て、愛樂の心を生ぜんと欲する有んや。』而して偈を説いて言く、

『生老病死の法よ、此の生老病に住し、若し住して樂心を生ぜば、鳥獸と異る無けん。』

爾の時、太子、國師の子優陀夷等と共に、往復來去して言論するの時、日遂に沒するに至りぬ。太子、既に日光の沒するを見已り、便ち宮中に入りて、諸の婇女と、五欲を行じ、快樂歡喜し、相共に聚集し、圍繞して住す。其の太子の妃、耶輸陀羅、即ち是の夜に於て、便ち娠める有るを覺ゆ。又其の夜に當つて、太子の姨母、憍曇姓氏、摩訶波闍波提、眠中に、夢に一白牛王の、城中に在り、聲を揚げて吼喚し、安庠として行くに、一人の能く彼の前に當つて、障礙を作す有るなきを見ぬ。又、復、其の夜、淨飯大王も、亦、夢に、城内の處中に、一の帝釋幢を竪立し、多くの雜種の衆寶を以て莊嚴し、復、種種の瓔珞を持して、校飾し、莊麗なること、猶、須彌山王

の、地より踊出して、虚空に在るが如し。彼の帝釋幢の其の中に、又、復、大光明を出し、四方皆悉く周帀に照耀す。又、復、四方に大雲を興起し、俱に來つて帝釋幢の上に至り、大雨を降り注ぎ、霶霈として彼の帝釋幢を灌洗す。又、空中に於て、種種の無量無邊の妙華の雨を雨らす。其の帝釋幢の周帀に、復、無量の種種微妙の音聲有り、作さずして自ら鳴る。更に、復、一の鮮白なる傘蓋有り。衆寶を竿と爲し、黄金を子と爲す。端正喜ぶ可く、自然に帝釋幢上の四方を覆ふ。復、四大天王、及び諸の眷屬有り。城中に來向し、門を開きて彼の帝釋幢を將て出づ。

爾の時、其の夜、耶輸陀羅、疲極睡眠して知曉する所無し。臥夢に二十種の畏る可きの事有るを睹見し、心戰き身動き、恐怖して安んぜず。疑怪驚惶して、忽然として寤む。時に、太子、耶輸陀に問うて言く、『汝、耶輸陀、何の故に是の如く驚怖戰悸し、氣喘ぎ心忪き、忽爾として起くるか。何の故に是の如きか。汝、耶輸陀、今は、又、尸陀林に在らず。又、復、諸の屍に繞らされず。亦、山に在らず、曠野に居らず。今、此の城內、無量無邊の兵仗もて、守護して王宮に在り。此の處深牢にして、野獸を懼れず。亦、復、盜賊の來り驚かすを慮はず。此の中安樂、これ無畏の處なるを、我、今、汝、耶輸陀羅が、心大に驚怖し、心大に憂愁し、心に疑畏を生じ、忽然として覺寤せるを見る。此の事、何に因れるか。』

爾の時、太子の妃、耶輸陀、涙下ること雨の如く、恐怖悲咽し、太子に報へて言く、「大聖太子、我、今夜に於て、夢に是の如き二十種の變を見ぬ。唯、願くは諦かに聽きたまへ。我、當に之を說くべし。聖子、我、向に、一切の大地の、周帀震動するを夢見ぬ。聖子、次に復、帝釋幢有りて、地に崩倒するを夢見ぬ。聖子、次に復、虛空の日月、及び諸星宿の、悉皆墮落せるを夢見ぬ。聖子、次に復、一の最大鮮潔の傘蓋有り、これ我が從來依蔭の處、我を守護せる者、我を憐愍せる者なり。而るに彼の婢生、車匿の子、忽ち壯力を以て、我より奪ひて將ち行くを夢見ぬ。聖子、次に、復、我が頭の髮髻、彼の諸寶に莊嚴せられし者、刀截して去るを夢見ぬ。聖子、次に復、我が身體上の有ゆる瓔珞、水の爲に漂はさるるを夢見ぬ。聖子、次に、復、我の身形、微妙端正なりしが、忽ち醜陋と成るを夢見ぬ。聖子、次に、復、我の身體上の有ゆる手足、自然に墮落せるを夢見ぬ。聖子、次に、復、我が此の身形、忽然として赤露するを夢見ぬ。聖子、次に、復、我の從來、常に坐せる牀に、我坐せし時、聖子に承事せしに、彼の牀忽然として自ら地に㊃蹈るを夢見ぬ。聖子、次に、復、我が常に共にする所の、聖子の眠臥受樂せし牀、彼の牀の四脚、竝に皆摧折せるを夢見ぬ。聖子、次に、復、一の衆寶所成の大山有り、纖利の四楞、無量高峻なるが、火に燒か

【四】蹈或は塌（おつ）に作る。可洪音義には搨（倒也）に作る。

れて、崩頽して地に墮つるを夢見ぬ。聖子、次に、復、淨飯大王の宮內、一の微妙の樹有り、風に吹倒さるるを夢見ぬ。聖子、次に、復、朗月團圓、衆星圍繞せるが、此の宮中に在りて、忽然として沒するを夢見ぬ。聖子、次に、復、淨日照明、千光圍繞せるが、此の宮內に在りて、忽然として沒し、彼、隱沒せる後、世間黑暗にして、光明有る無きを夢見ぬ。聖子、次に、復、此の宮城內に一火炬有り、出でて城外に向ふを夢見ぬ。聖子、次に、復、此の城を、從來護る所の神、徧體を種種の瓔珞もて莊嚴し、喜ぶ可く端正なりしが、彼れ忽ち悲啼して、聲を擧げ、大に哭して、門外に住まり在るを夢見ぬ。聖子、次に、復、迦毘羅城忽ち曠野と爲り、畏る可きこと夜の如く、心樂むに處なきを夢見ぬ。次に、復、夢に迦毘羅城の、有らゆる諸池、水、悉く皆濁り、有らゆる樹林の華果枝葉、竝に皆墮落し、徧く地に散じて、觀瞻すべき無きを夢見ぬ。聖子、次に、復、有らゆる壯士、手に刀杖を執り、身に甲鎧を著け、四方を周帀して交横馳走するを夢見ぬ。聖子、我、是の如き二十種の夢を見、心大に恐怖し、驚疑して安んせず。此れ何の徵祥ぞ。凶たるか、吉たるか。是れ何の果報ぞ。復、我が身の壽命、盡きんと欲するが爲か。聖子と、恩愛別離するが爲か。是の故に、我、今、心撞搗するが如く、戰動忙怕して、自ら持する能はず、睡眠中に於て、忽然として驚起せるなり。』

爾の時、太子、此の語を聞き已りて、自ら心に思惟すらく、『我、今、久しからずして、世を捨て、家を出でんとす。是の故に今、此の耶輸陀羅、是の如き大恐怖の夢を見たるなり』と、是の時、太子、即ち其の妃耶輸陀に報へて言く、『妃、耶輸陀、汝、彼の一千の帝釋幢、崩倒して地に臥すを見ると雖も、汝に於て何をか傷まん。設ひ復、一千の日月及び諸の星辰、地に墮落するを見るも、汝、亦、何をか苦まん。千の傘を、婢生車匿、力め揭げて將て行くを見ると雖も、既に是れ夢に奪ふのみ。白日に關するに非ず。汝の心何ぞ亂れん。憂愁を假らざれ。汝、善大妃、驚く莫れ。怖るる勿れ。分別を作す莫れ。世間法中、自ら是の如き虚妄の夢有り。懷愁すべからず。但、當に安穩に常に依つて眠睡すべし　汝、善大妃、年時嫩少、身體柔輭なり。爾かく憂懼を爲さば、恐らくは疲勞せんことを畏る』と。耶輸陀羅、受樂の身、未だ曾て苦を經ざるを以て、太子の、是の如く語るを聞き已りて、還、臥して眠りぬ。太子、耶輸陀を安恤慰喩せんと欲するが故に、五欲の樂を以て、共に相娛樂して、更に同じく睡眠す。

爾の時、太子、其の夜に、自ら、復、五大夢を見たり。第一夢には、此大地を席きて、持用つて榻と作し、須彌山を以て安じて頭枕と爲し、東方の大海に、左手の臂を安んじ、西方の大海に、右手の臂を安んじ、南方の大海に兩足を安置するを見ぬ。第二夢には、一草莖有り、名けて建立

と曰ふ。臍よりして出で、其の頭、上りて阿迦膩吒に至ると見つ。第三夢には、四つの飛鳥ありて種種の色を作し、四方より來り、太子の兩足の下に在りて、自然に變じて純一の白色となるを見たり。第四夢には四つの白獸有り、頭は皆黑色にして、足より已上、乃至膝頭まで、太子の脚を舐るを見ぬ。第五夢には、一の糞山有り、高大峻廣なり。太子、自身に彼の山上に在り、周帀經行して、彼の糞の汙染する所と爲らざるを見たり。

捨宮出家品第二十一の上

爾の時、太子宮内に在りて、夜睡眠の時、一の宿衛守宮の臣有り。諸一切持更の人に告げて言く、『汝、諸人の輩、更を行ふ時、宜しく、各、是の如く金毗羅を喚び、（金毗羅は隋に可畏と言ふ。）或は目帝羅を喚び、（目帝羅は隋に可解脱と言ふ。）或は鴦伽那を喚ぶべし。（鴦伽那は隋に落裏と言ふ。）汝等人輩、此に在りや不やと。彼等報へて言へ、我等、此に在りと。』是の時、大臣、復、更に、彼の諸人の輩に語つて言く、『汝等、並に、宜しく、心を用ひて持更すべし。汝等、並に、宜しく、心を用ひて持更すべし。今夜、已に深く、有らゆる諸類、或は水中に住し、或は陸地に居り、或は樹上に在り、或は窟間に處り、或は山谷の傍に、或は屋舍の裏に、皆悉く疲乏して睡眠に染著す。汝等諸人、今夜の持更には、悉く器仗を執り、共に門閤を守りて、應に警愼して、好く制持を加ふべし。自餘の(一)鋪に當つて、持更するの人、睡眠せしむる莫れ。大王　嚴重に是の如き勅有り。何を以ての故に。太子の此の城邑を捨てて剃髮出家するを恐畏してなり。若し宮内に保すれば、此の聖太子、必ず當に轉輪聖王と作りて、四天下を統ぶるを得べし。大仙國師、是の如く授記せり。』是の語を作せる時、初夜已に

【一】鋪。第十四卷の輭草鋪の鋪、一本敷に作れるに參照せば、しきものの意なり。

過ぎて半夜に至る。漏刻の人、大に唱へて言く、『我が聖大家、恒常に尊勝なれ。願くは我が大家、長命吉安なれ』と。初分已に過ぎ、次で中夜に入り、漏刻未だ半ならず。爾の時、色界の淨居諸天、下り來つて迦毗羅城に至る。是の時、城内の有ゆる人民、皆悉く迷悶して、沈重に睡眠す。淨飯王の身、幷びに諸左右、及び太子の厩・當馬の諸臣・宮人・婇女、皆悉く迷惑疲乏して重眠す。是の時、衆中に一天子有り、名けて法行と曰ふ。宮内に來至し、神通力を以て、諸婇女の身體の服飾を、縱橫不正ならしむ。或は、復、褰袒して、其の中に收斂する能はず。或は、諸婇女の輩有り、或は手を以て頤頷を拄へて眠り、或は、婇女有り、箜篌を擲却し、一邊に置きて、身倚臥し、或は、婇女有り、其の兩臂を以て、鼓を抱へて眠り、或は、兩手を以て、腮中に内著し、其の半身露出して、其の中に睡り、或は、各兩臂を以て、相抱いて眠る有り。或は、婇女有り、目睫交らず、睛瞳(二)睆睆、熟視して眠り、或は、婇女有り、諸の瓔珞に倚り、(三)垂嚲して眠り、或は、宮人有り、形容端正に、從來俯仰に、具さに羞慚を知り、一切の功能、皆悉く備足せしに、今は重睡の因緣に纏はるるを以て、放氣して聲を出し、大小麤細の臭處、(四)逢勃として都て覺知せず。或は、身の諸瓔珞の具を脫する有り。或は、諸の雜華鬘を擲却す

【二】睆(窮め視る、みわたす)。可洪音義に開眼似也と爲す。
【三】嚲。垂れ下る貌。
【四】逢勃。盛なるにいふ。

る有り。或は、衣裳を棄て、目を張りて眠ること、猶死屍の如くにして、一種も異ることなく、傍人これを觀看て、活想を作さざるあり。或は仰臥して、長く手脚を展べ、口を張りて眠る有り。或は、手脚を亂擲し、一邊に交横して眠るあり。或は、拳縮まり、手臂髀膝纏繞して眠るあり。或は、地に立ち壁に倚りて眠る有り。身體掉動して、猶醉人の如し。或は、頭を覆ひ鼾睡して眠る有り。或は、蹲坐して項を縮めて眠る有り。或は、面孔青白、色を失し、極醜にして眠る有り。或は、婇女あり、細腰鼓を以て、項上に懸け、腋に絡ひて眠り。或は、婇女あり。箜篌を以て、項に(五)搭けて眠り。或は、婇女あり、(六)齩齒 (七)詰齘、鳴喚して眠り。或は、垂頭(八)寱語して眠る有り。或は、伏面、猶、家間の死屍の如くして眠る有り。或は、大小の便利・不淨を失して眠る有り。

爾の時、太子、忽然として寤め、其の宮内を視るに、蠟燭及び燈、或は拳の如く麤に、或は臂の如く大に、顯赫朗耀、極甚光明、諸宮人、是の如、睡臥するを見るに、或は銅鈸・笙・瑟・箛・簫・琴筑・琵琶・竽笛・螺具を執り、口に白沫を出し、鼻涕涎流す。是の如き等の種種の相貌を見、見已つて、太子、是の思惟を作す、『婦人の形容は、ただ是の如き耳。不淨惡露、何の貪る可き

【五】搭。可洪音義に正しくは褡にして、横被也と爲し、惠琳音義に剳(著也)に作り、搭を非也といふ。
【六】齩。かむ。
【七】詰。いかる、いみならす。
【八】寱(ねごと)。或は讇(ねごと)に作る。

か有らん。外に粉脂を飾り、瓔珞・衣服・華鬘・釵釧もて、假りに身を莊嚴す。癡人知らずして、横りに誑惑せられ、色境界に於て、妄りに慾心を生ずるも、若し智人有り、正念に婦人の身體を觀察せば、體性是の如く空にして、主有ること無く、猶、夢幻の如し。是の中、應さに、人の、放逸にして貪を生ずるを得可きこと有るなかるべし。邪念を以ての故に、無明に縛せらる』と。

而して偈を說いて言く、

『世間の不淨衆の惑迷は、婦人の體性に過ぐるもの無し。
衣服瓔珞莊嚴の故に、愚癡は是の邊に欲貪を生ず。
人有り能く是の如き觀を作さば——、幻の如く夢の如く眞實に非ず——
速に無明を捨てて放逸なる勿れ。必ずや解脫功德の身を得ん。』

爾の時、太子、更に、復、專念に是の如く思惟す、『咄哉、世間、是の大患有り、咄哉、畏る可し。何の貪る可きか有らん。』慈哀の心を以て、衆生を愍むが故に、聲を擧げて大いに哭す。此の處に繫縛せらるる愚癡の人は、猶、屠兒の如く、諸命を割斷す。此の處不淨なり。愚癡の人の、妄りに愛樂を生ずるは、畫餠中に、糞尿を盛り滿つるが如し。此の處、虛假なり。愚癡の人の、埋沒沈滯するは、猶、淤泥の諸象を溺らすが如し。此の處、臭穢なり。愚癡の人の、以て香美と

爲すは、猶、猪の廁溷の中に在るが如し。此の處、空誑なり。愚癡の人の、橫に染著を生ずるは、猶、狗の無肉の骨頭を抱くが如し。此の處、損害なり。愚癡の人の、爭ひ競うて投入するは、猶、飛蛾の奔つて燈燭に赴くが如し。此の處、有毒なり。愚癡の人の、貪著愛好するは、猶、魚鼈の餌鉤を吞食するが如し。此の處、萎黃なり。愚癡の人の、樂著親近するは、濕生の華の水を離れて日に曝さるるが如し。此の處、危脆なり。愚癡の人の、行來履涉するは、猶、老牛の深泥に入在するが如し。此の處、懸嶮の如し。愚癡の人の、墜墮沒陷するは、猶、盲者の大峻崖より落つるが如し。此の處、循環す。愚癡の人の、生死に流轉するは、猶、瓦匠の旋器の輪の如し。此の處、纏綿す。愚癡の人の、其の繫縛を被るは、犬の枷に著して、自在を得ざるが如し。此の處、無潤なり。愚癡の人の、炙られて乾枯するは、猶夏天の盛熱の、草に旱するが如し。此の處、衰耗なり。愚癡の人の、日に消滅に就くは、猶、月虧漸く將に末に至らんとするが如し。此の處、無利なり。愚癡の人の、善根用ひ盡すは、猶、博戲して他に錢財を輸るが如し』と。

爾の時、太子、是の如く、諸の婇女の身を觀察し、復、更に思惟すらく、『我、今、分明に是の如き相を見たり。應に歡喜すべし。勇猛勤劬し、精進の心を發して、福德を增長し、弘誓の願を起し、世間を濟拔して、無救の衆生の爲に救護と作らん。養育無き者の爲に歸依と作らん。無

舍の衆生の爲に室宅を作らん。今、辦ずる所の事、已に我前に現れぬ。久しからずして、決ず當に斯の志を果すを得べし。何を以ての故に。此の諸の婇女、皆羞慚を捨て、重眠睡に著すればなり。』

爾の時、作瓶天子、夜半の時に於て、既に太子の睡眠已に覺めたるを見、安庠として至り、太子の所に向ひ、太子に白して言く、『太子や、往昔、眞實の事を成就具足せり。又、復、太子や、昔、人間に在りて、是の如き心を發せり。「願くは、我、身を捨て、兜率天に生れん」と。太子の彼の願や、時節已に過ぎぬ。又、復、昔時、兜率天に在りて、「願くは人間に生れて、母胎を受けん」と。彼の願成滿して、胎に在りし時、「願くは早く生出せん」と。彼の願、亦、畢りて、「生れ已りて、增長して宮中に在り、童子として、受樂して遊戲自在ならん」と。彼の願又過ぎて、「弱冠の時、精勤を得て、諸の技藝を學ばんと欲す」と。彼願已に成り、「壯年心を縱にして、世樂を受けんと欲す」と。彼の願現に驗あり。宜しく久しく耽るべからず。「今日、一切の諸天諸人、願くは太子をして捨離出家して、聖道を修學せしめよ」と。』

爾の時、太子、彼の作瓶天子の、是の如く語るを聞き已り、卽ち自ら其の八千億斤の金價の衆寶もて作る所の革屣を著け、脚に串ち已り、起たんと欲して迴顧して、其の坐する所の合榻寶牀

を觀て、是の如き大語言を發して云く『此はこれ我が身、最後に五慾を受けたるの處、今より已後、當に更に受けざるべし。此は是れ我が身最後に五欲を受けたるの處、今より已後、當に更に受けざるべし。』

爾の時、太子、右手を擧げて、衆寶の成せる羅網幢帳を褰げ、宮中より出で、安庠として徐歩し、始めて少地を行きて、殿內に住り、東面して立ち、十指の掌を合して、至心に一切の諸佛を念じ、念じ已りて頭を擧げ、仰いで虛空及び諸星宿を瞻ぬ。

爾の時、護世四大天王、及び天帝釋は、太子の出家の時至れるを知り、各其力に隨ひ、辦具して來らんと欲す。爾の時、〔九〕提頭賴吒天王、主領所部の〔一〇〕乾闥婆等の一切眷屬、百千萬衆、前後導從して、諸の音樂を作して、東方より來り、迦毘羅城を三帀圍繞して、地上に下り、却いて其の方に住まり、十指の掌を合し、低頭曲躬して、太子に面向す。

爾の時、〔一一〕毗留勒叉天王、主領所部の〔一二〕鳩槃茶等の一切眷屬、百千萬衆、前後に導從し、手に寶餅を執り、種種の微妙の香湯を盛り滿て、南方より來りて、迦毘羅城を三帀圍繞し、地上に下り、却いて其の方に住まり、十指の掌を合し、低頭曲躬して、太子に面向す。

〔九〕 Dhṛtarāṣṭra。持國天。
〔一〇〕 Gandharva。尋香。
〔一一〕 Virūḍhaka。增長天。
〔一二〕 Kumbhāṇḍa。甕行。

爾の時、(二三)毘留博叉天王、主領所部の(二四)諸龍王等、一切の眷屬、百千萬衆、前後に導從し、手に種種の妙眞珠寶を執り、復、種種諸雜の珍寶を持し、兼ねて種種の香雲・華雲・及び寶雲を起し、復、微妙柔輭の香風を起し、西方より來りて、迦毘羅城を三帀圍繞し、地上に下り、却いて其の方に住まり、十指の掌を合し、低頭曲躬して、太子に面向す。

爾の時、(二五)毘沙門天王、主領所部の(二六)諸夜叉等、一切の眷屬、百千萬衆、前後導從し、手に火珠を執り、或は燈燭を執り、或は火炬を執りて、猛燄を熾盛にし、身に鎧甲を著け、或は弓・刀・箭・槊・器仗、及び鉾・戟等を執り、北方より來りて、迦毘羅城を三帀圍繞し、地上に下り、却いて其の方に住まり、十指の掌を合し、低頭曲躬して、太子に面向す。

爾の時、天主、(二七)釋提桓因、其の眷屬、一切の諸天、百千萬衆と與に、前後導從し、天の華鬘・末香・塗香を將ち、或は、復、旛・幢・寶蓋を執持し、或は種種の諸妙瓔珞を執り、彼の三十三天より來り、迦毘羅城を三帀圍繞し、却いて上方に住まり、十指の掌を合し、低頭曲躬して、太子に面向す。

【二三】Virūpakṣa. 廣目天。
【二四】Nāga
【二五】Vaiśravaṇa. 多聞天。
【二六】Yakṣa 勇健
【二七】釋提桓因は Śakra-devānām-indra の音を寫せるもの、譯して諸天の帝たる釋といふ。帝釋天のこと。

爾の時、太子、諸方を觀見、仰いで虛空及び諸星宿を瞻・幷びに護世の四大天王を覩、諸ろ上妙の種種の瓔珞を以て、身體を莊嚴し、頭に天冠を戴き、次第にして行き、安庠として徐歩す。乾闥婆、及び鳩槃茶、一切の諸龍、幷びに夜叉等、百千の眷屬と共に、左右に圍繞し、各其の方たる東西南北より、來りて此に至り、方に依りて面たり住しぬ。又、天主釋提桓因が、百千諸天眷屬を將領し、前後闐塞して、虛空に在り、周帀して集聚するを見、復、鬼星の、已に月と合するを見る。時に、諸天等、大聲に唱へて言く、『大聖太子、鬼宿已に合し、今や時至りぬ。勝法を求めんと欲せば、此に住る莫れ。人王師子、時や至りぬ。速疾に棄捨出家したまへ』と。諸天、是の如く、更に、復、佐助して、此の言を讚唱す、『速に出でよ、住る莫れ。』

爾の時、太子、仰いで虛空を瞻、是の如く思惟す、『今、中夜、靜かに、鬼宿已に合し、諸天大衆、地及び虛空、竝びに皆佐助す。決定して、我、今、時至ること、虛しからず。宜しく出家すべきなり』と。太子、是の如く、心に思惟し已るや、卽ち同日に生れたる奴子、(一八)車匿を喚び、告げて言く、『車匿、汝、速疾に來つて、我に違ふ莫れ。急ぎ我と同日に生れし馬王、(一九)乾陟に被帶し、將ゐて前著し來れ。我が家の有らゆる眷屬、一釋種の子にだも、彼馬聲を聞かしむる勿

【一八】Chandaka
【一九】Kanthaka

れ。』是の時、車匿、太子の是の如き言を聞き已り、仰いで虚空を瞻て是の如く思惟す、『今、始めて中夜なるに』と。心に卽ち疑を生じ、徧體戰慄し、身毛皆竪ち、悚懼して安んぜず。太子に白して言はく、『大聖太子、云何ぞ、中夜に、我をして乾陟馬王に被帶せしむるか。何の恐怖か有る。何の怨敵か有る。何の急疾か有る。或は復、城外に、或は今、城内に、好惡有りや。』是の時、太子、車匿に語つて言はく、『汝、車匿。我、今、急疾に、怨敵を恐怖し、諸苦に逼らる。汝、那んぞ知るを得ん。但、速に我と同日に生れし馬王乾陟に被帶して、時に疾く將ゐて來れ。』

卷の第十七

捨宮出家品第二十一の下

爾の時、車匿、既に太子の是の如き語を聞き已り、自心に思惟すらく、『聖子、今は決らず出家せんと欲す。肯へて住まりたまはざるなり。』是の如く念じ已り、故に、大聲大言大語を發して、太子に問うて言く、『望むらくは宮人をして覺知せしめよ。太子聖子は、恒常に諸時節に作す所の事の、常に時に依順するを知りたまふ。今は是れ何の時にしてか、馬を喚び索めたまふぞ。聖子、若し往いて園林に詣り、善地を觀看て、遊戲せんと欲したまはば、此れ其の時に非ず。何ぞ馬を用ふるを爲ん。聖子、今日怨讐有る無し。復、違逆反叛の人無し。四方安靜にして、復、人の擾攘離亂する有る無し。邊疆一切、逃亡有ること無し。外方の隣邦も、亦、侵奪して聖子と鬪戰せんと欲する者無し。聖子は、一切の大地を覆蓋して唯一無二なり。今、何んぞ馬王乾陟を須ふることを假らんや。聖子、今日、此の處宮內の諸婇女等、共に相圍繞し、歡娛受樂すること、猶、天主の歡喜園中に、釋提桓因の諸天女と共に、周帀圍繞するが如し。聖子も亦然り。此の宮內寶

牀の上に在つて坐したまふ。何ぞ馬を用ひん。但、願くは心を安んじ、此の百千婇女の中に於て、音聲娛樂を作すを聽いて住まられよ。』是の時、車匿、口に是の如く言ひ、又、復、手を以て諸ろ婇女の頭髮を拔きて寤めしめ、又脚を以て、彼の婇女の身を蹋む。但、彼の婇女は、上、諸天の神通力を以ての故に、覺らず知らず。爾の時、太子、心内に疑を生じ、衆人の覺るを畏れ、私密かに細聲に、此の偈を以て、車匿に告げて言く、

『同生の車匿汝當に知るべし。我宮内を觀るに塚墓の如し。
赤蛆蟲穴に似て異ること無く、[一]羅刹と同く共に居るが如し。
東西南北狼藉して眠り、又受胎の初の泡水に類す。
車匿我五慾の苦を見て、心意此の宮に在るを願はず。
幷に諸方に遊ぶも我喜ばず、老病及び死屍を見るを以てなり。
車匿よ速に乾陟を將て來れ。我今決ず出家し去らんを欲す。』

爾の時、車匿、太子の是の如き言を聞き已り、猶、猛獸の毒箭に著きて、大苦惱を生ずるが如く、大聲に哭して、太子に白して言く、『聖子、今、諸尊を捨つ可きか。』太子報へて言く、『善生車匿よ、我、今、勝上の處を求めんと欲す。寧ろ現前の諸尊親族を捨つるも、未來の我及び眷

【一】Rakṣa（ラクシヤ）

屬をして、死命鬼口の中に入らしむる勿らん』と。更に、車匿の爲に、偈を說いて言く、

『我當に涅槃を求むるが故に、寧ろ親族を捨てて出家に向ふべし。
未來の死鬼は人を劫奪す。命の一たび口に入るや悉く食ひ盡されん。』

爾の時、車匿、重ねて、太子の是の如き言を聞き已り、復、更に、慇懃に、太子に白して言く、『大聖太子よ、一切の世人謂つて言く、太子は、決定して大轉輪王と作るを得んと。云何ぞ捨を欲し給ふか。』太子、又、車匿の此の言を斷ずらく、『咄、汝、車匿よ、是の如く語る莫れ。我、昔、(二)兜率天上に在りて、此の處に勝れり。嘗て天王と作りて、悉く彼の三十三天を領せり。我、是の時に於て、猶ほ彼の處の樂を樂まず。何を以ての故に。生死無常の患を見るを以ての故に。況や、復、今日、此の人間をや。少時、此の人境界に在るも、多く患濁有り。此の王位に處り、復、世を治めて暫時自在なりと雖ども、病・死の怖を離るるを得ず。但、世間中、死命鬼治世の處有り。彼の諸王は、卽ち自在安樂を得る能はず』と。車匿、復、更に、太子に報へて言く、『大聖太子、復、太子は世位を用ひずと雖も、但、淨飯王は、今、已に、年老い、太子は盛壯なり。大王をして、心に苦惱を生ぜしめたまふ勿れ。』太子報へて言く、『善生車匿よ、我、

【二】兜率天(Tuṣita)は六欲天の一にして、忉利天(三十三天)の上に在り。忉利天(Trāyastriṃśa)は譯して三十三天といふ。帝釋を以て天主とす。

今、此の大父王の邊に於て、心に愛敬を生じ、父の我を愛するが如く、我も倍父を愛せり。大王は奇特に親族を敬愛したまへり。我も、亦、諸の親族を捨つるを欲せず。我、親眷に於て、亦、復、諸餘の異心を作さず。但、我は諸有の中に、生死の苦を受くるを大畏し、大怖し、大驚す。今日、解脱の法を求めんと欲するが故に、暫く愛重する所の親を捨離せん。當來の世中、能く諸眷屬を愍み救護せんが故に。又、未來世に相離れざらんが故に。』

爾の時、車匿、太子に白して言く、『大聖太子、心決定したりや。要ず俗を捨て出家を求むべきか。』太子報へて言く、『善生車匿、我、已に要を立てぬ。』車匿、又、言く、『何事の爲の故に。』太子答へて言く、『我は世間の無常にして過ぐるを見るが故に、意に專ら彼の勝處を求めんと欲するのみ。』車匿、復、問ふらく、『何の緣を以ての故に、彼の勝處を覓むるか。』太子答へて言く、『若し世間をして、生無く、死無く、老無く、病無く、愛別離無く、怨憎會無からしめば、王位を得已るや、諸功德を受けて、無常有る無く、境界眞實にして、一たび人中に生るるや、濁穢有る無けん。若し、是の如くんば、我をして此の處に於て心樂ましむべし。汝、善車匿、我が心に違ふ勿れ。我、已に、汝に勅せり。急速に、我と同日に生れし馬王・乾陟を被帶せよ。』車匿白して言く、『太子の勅の如く、敢へて違ふこと有らじ』と。其の車匿、太子の是の如く敕

して語言するを聞き已りて、亦、太子深心の意を識りぬ。亦、復、先に、淨飯王の勅の嚴しく制禁の重きを知るも、但だ、諸天の神力加はるを以ての故に、心を發して乾陟を取りて、太子の前に將て來らんと欲す。而して偈有りて說くらく、

『車匿は天神力加はりしを以て、忍んで大王敕命の制に違ひ、
　兼て菩薩の昔願滿てるを以て、發意して遂に馬を取つて莊嚴しぬ。』

爾の時、車匿、即ち厩中に至り、槽櫪上に於て乾陟を搦取り、即ち、純金を以て迦毗遮と作し、七寶もて莊嚴し、馬口を㈢串き、牽き出して槽より離し、別に餘橛に繫ぎ、其の背を刮刷す。先づ柔軟輕細の物を以て、背上に㈣屧き、金にて成せる七寶莊嚴の鞍韉を以て被ひ、上に金網を覆ふ。是の如く馬を被帶し已りて、即ち牽き將て太子の前に向ふ。是の時、乾陟・同生の馬王、遙に太子の身力の壯なるを見るが故に、徧體歡喜して、大鳴聲を出す。時に、其の乾陟馬王、吼喚して聲を出せる時、半由旬に聞ゆ。時に、㈤首陀會一切の諸天は、神力を以ての故に、此の馬聲を隱沒して聞えざらしむ。人あり、太子を障礙して、出家するを得ざるを恐畏してなり。

【三】串は穿。
【四】屧は屜（くつしき、しきわら）。
【五】首陀會天（Suddhavasadeva）。淨居天と譯す。色界の上位に位する五天の稱。

是の時、太子、歡喜踴躍、其の體に徧滿し、即ち右手の柔輭綱縵の手指、猶ほ蓮華葉の如く、赤色、紫礦の如きを以て、馬王の脊背の上を摩拭し、勅語して言く、『汝、同日に生れし乾陟馬王、我、今、甘露の法を求めんと欲す。汝、須く努力すべし。是の如き善行、人の我が障礙を作す有らしむる勿れ。汝、善乾陟、鬪戰の時だも、尙、死力を出して、他に勝んと欲せるが故に、今日、我ために善く佐助を爲して、出世の樂を求めよ。世間の樂は、暫時の歡喜のみ。久しからずして、還失して、大憂惱を生ぜん。法の爲に力を出すは、此の事甚だ難し。我、今、一切世間の爲に、解脱を求めんと欲するが故に、出家修道す。汝、善く努力して、勇猛筋を出し、捷疾に行け。我、今、出家して、諸世間、及び汝等の輩の爲に、大利益を作さん。』

爾の時、太子、正念に地に立ち、大弘願を發し、是の如き言を作さく、『これ我が最後の在家の乘なり。我、今よりして去、更に、復、是の如きの乘に乘らじ』と。誓願を發し已りて、鞁を控へて、即ち乾陟馬の上に乘り、乘り已るや、重ねて、乾陟馬に語つて言く、『汝、乾陟馬、努力して、最後の負荷たる我を負へよ。我、今、諸天人世間の爲に、利益を作さんが故に、發心出家す』と。太子、亦、乾陟馬王の鞍上に坐するの時、一切無量の〔六〕阿脩羅衆・〔七〕迦婁羅・〔八〕緊那

【六】Asura。非天。
【七】Garuḍa。金翅鳥。
【八】Kiṃnara。人非人。
【九】Mahoraga。大腹行。
【一〇】Rakṣa。惡鬼。

羅・(九)摩睺羅伽・(一〇)羅刹衆・(一一)毗舍遮・地居の諸天、及び(一二)首陀會、乃至、(一三)阿迦膩吒天等、乾陟馬王に隨逐して行く。是の時、諸天、手に白蓋を持ち、復、種種の諸寶を以て、蓋柄の周帀を莊嚴し、諸の衆寶・眞珠・羅網を以て、其の上に懸け、其の網目の間に、悉く金鈴を懸け、擎持し、以て太子の上を覆ふ。是の時、太子、乾陟馬に乘り、漸く宮門に向ふ。乾陟行く時、蹄足の聲、一俱盧奢に聞ゆ。首陀會天、神通力を以て、彼の鳴聲を隱して、遠く聞えしめず。太子の出家に障礙有るを畏れてなり。

是の時、太子、出家の時、其の處空中に、一夜叉有り、名を鉢足と曰ふ。彼の鉢足等の諸夜叉衆、虛空中に在り、各手を以て馬の四足を承け、安徐として行く。太子の初め發足出家せんと欲するや、一天子有り、是の如きの言を唱へぬ、『願くは善吉利なれ。大法船師、今、無量の衆生を、煩惱海より度脫せんと欲す。』復、一天有り、是の如き言を唱ふらく、『願くは障礙無かれ。大聖世尊、今、出家して生死海を渡らんと欲す』と。

是の時、太子、車匿に語つて言く、『善生車匿よ、汝、今、我が前に在つて行き、我に道を示現し、宮內の門を出づべし。』(一四)彼の門の關鑰、開かんと欲するの時、其の聲一拘盧奢に聞ゆる

(一一) Piśāca、食血肉鬼。
(一二) Śuddhāvāsa、淨居。
(一三) Akaniṣṭha、色究竟。
(一四) (原文) 彼門關鑰、欲開之時、其聲聞於一拘盧奢、非人至門開彼關鑰、其開之時、首陀會天、以神通力、隱蔽彼聲、不令人聞、恐畏太子出家之時、有諸障礙、

に、人の門に至りて彼の關鑰を開くに非ずして、自ら開け、其の開く時、首陀會天、神通力を以て、彼の聲を隱蔽し、人をして聞かしめず。太子出家の時、諸の障礙有るを恐れてなり。是の時、車匿、太子に白して言く、『大聖太子、宮門已に開けたり。』と。太子報へて言く、『門已に開けたり。決定して我が心に願ひ求むる所の利、必ず當に成ずるを得べし。疑慮有る莫れ。』

爾の時、車匿、太子に白して言く、『大聖太子、希有甚奇なり。此の宮門、以前に開く時は、大に氣力を用ひて、方に開くを得たり。聖子、今、至れば卽ち開けぬ。大聖太子、亦、門邊に至れば、譬へば猛風の彼の雲隊を吹きて、兩邊に開散するが如し。』是の時、太子、內宮門より外に出で已りて、是の唱言を作すらく、『これ我が最後に宮門を出づるなり。今より已去、當に更に出でざるべし。』

爾の時、太子、宮よりして出で已り、安庠として毗耶離門に至る。其の門邊に一の夜叉將有り、名を善人と曰ふ。其の五百夜叉の眷屬と共に、既に太子の安庠として徐步して門に向つて來るを見、見已つて各共に相謂つて言く、『今、此の悉達大聖太子、夜半非時に、門下に來向す。我等、今、彼の爲にせんと欲するや不や。』時に、夜叉衆、各相謂つて言く、『我等、太子の爲に門を開き、彼の意に稱ふ隨に、東西に行動す可し。脫し、彼が心の如く、所願成就して、甘露の道を

得、既に自證し已らば、復、天人世間の爲に、當に大利益を作すべし」と。是の時、善人夜叉の將、急疾に彼の毘耶囉門を開く。其の門、已前に開闔せし時は、其の聲鳴徹して半由旬に至りしを、時に、淨居天、神通力を以て、門聲を隱蔽し、諸人をして其の響を聞くを得ざらしむ。太子の爲に、出家の障を作すを恐れてなり。

太子、此の迦毘羅城の毘耶囉門より、初めて出でし時、彼の門の有らゆる守門の諸將、或は關鑰を執捉する者あり。彼等諸人、或は睡眠に著して、太子の彼の宮を出づる時を覺えず。或は、復、是の彼の諸夜叉神に迷惑せられ、或は、是の諸天神力に迷惑せられて、有らゆる最愼の善持更人、彼等一切、悉く重睡眠して、人の出づるを覺らず。爾の時、欲界の魔王（三五）波旬、太子の初めて出家するを見る時、太子を恐怖せんと欲するが爲の故に、神通力を以て、諸聲を化作す。謂はゆる、虚空に大雲を出現し、雲中、復、更に大雷聲及び霹靂聲を出し、更に、復、諸の大水河を化作し、大石を吹きて、太子の前に出沒奔流す。復、大山を作す。其の山高峻にして、大崖岸を現はす。又、復、大猛火聚の、燄赫熾燃たるを化作す。

爾の時、淨居諸天、神通力を以て、彼の大雲を隱し、雷電霹靂、一切の諸聲、及び彼の大山・河

【三五】 波旬は波卑掾（Pāpīyān）。

石、高峻の崖岸、猛火皆現ぜざらしめ、彼の魔王波旬を將つて、無量百千由旬の外に擲著し、太子の出家を障礙する勿らしむ。

爾の時、太子、城門より出でて、外邊に至り已り、身を廻して迦毘羅城を觀看、師子吼を出して、是の如き言を唱へぬ、『我、今、寧ろ自ら身形を擲棄して、大石崖より墮ち、諸の毒藥を飲みて命終を取るも、亦、飲食せじ。若し、我、未だ心の願求の隨に、衆生を生死海より度脱するを得ずんば、我は終に迦毘羅城に入らじ。』其の諸天、太子の是の如く師子吼する聲を聞きて、皆悉く隨喜す。

爾の時、太子、此の師子吼の聲を出せし時、迦毘羅城を守護する有ゆる諸鬼神等、或は城門を守り、或は牆壁を守り、或は敵樓を守り、皆悉く是の如きの言を大唱す、『是の如し、是の如し。願くは太子の出したまへる師子無畏吼聲の如く、成就滿足せんことを』と。歡喜心を以て、各兩手を擧げて、太子に語つて言く、『大勇健兒、出で已り、廻りて迦毘羅城を觀よ。』是の時、太子、此の言を聞き已りて、驚かず恐れず、歡喜心を以て、身毛皆竪ち、更に是の言を作すらく、『此の城、我、今、終に廻り入らじ。若し、我、甘露の句、諸聖の歎ずる所を得、已に生死、煩惱の流を斷じ、涅槃道を證して、然る後に乃ち入らん』と。太子、城外にて此の師子吼言を出して、

要誓すらく、『彼の眞實眞如菩提を證して、然る後に還、來つて、城に入りて教化せん。』此の聲を出せし處、後に在つて諸人、塔を造作し、名けて太子出師子吼と曰ふ。而して彼の處に有る所の一の最大尼拘陀樹に神有り。其の神、偈を以て、太子に語つて言く、

『若し人樹木を伐らんと欲せば、要は必ず其の根本を盡すべし。
(一六)物頭を斫らば須く斷絕すべきが如し。水を渡らば彼岸に達せしむ可し。
(一七)言語一び竟る・虛しきを得ざれ。(一八)作怨亦訖る・復喜ぶ莫らんや。』

爾の時、太子、偈を以て、彼の護樹神に報じて言く、

『雪山の處所は動移す可く、海水は或は其をして枯竭せしむべく、
虛空は地に崩落せしむ可し。我が吐ける言語は終に虛ならじ。』

其の時、淨居諸天、偈を說いて言く、

『此の處今大藥王を出しぬ。當に衆生の煩惱毒を治すべし。
若し愛箭に射らるるあらば、此の匠今悉く能く拔除せん。』
此の處今大醫尊を出して、善く一切衆生の患を治す。
若し人老病死の(一九)疹有らば、此に設くる療治悉く能く愈さん。』

【一六】物頭の頭は接尾語ならん。
【一七】(原文)言語一竟不得虛・作怨亦訖莫復喜。
【一八】怨。あだ。
【一九】疹。熱病。

此の處今大智炬を出して、彼の顚倒の癡の衆生を燭らす。
所在の愚瞑黑闇の中、卽ち皆大光照を覩見せん。」
此の處今大顯赫を出して、能く世間の爲に大明を作し、
智圓滿の慧眼光を以て、普く十方諸境界を照さん。」
此の處今大船師を出して、未度の衆生類を度すべし。
牢く裝へる方便・智の舟艦もて、無量億の天人を濟度せん。」
此の處今大商主を出し、一切をして大積を度せしめんと欲す。
有らゆる迷惑せる無量衆を、示導して正路より行かしめん。」
此の處今是の大王を出しぬ。世間の法王・無上の王。
法幢・大法相を建立して、是法及び非法を知らしめん。」
此の處今是の大導を出して、能く一切の諸世間を伏す。
其の未だ調伏せざる諸天人も、一切當に能く善く調伏すべし。」
此の處今是の大王を出しぬ。出世の法主・無上の主。
當に微妙の大法輪を轉じて、一切諸の外道を摧伏すべし。」

此の處今是の大覺を出して、當に世間未だ覺めざる者を覺ますべし。
其の諸の煩惱纏を被る有らんに、能く一切の縛を斷じて脫れしめん。」
此の處今大帝幢を出しぬ。當に無邊の大法雨を雨らすべし。
十力具足して世に雙無く、能く一切諸外道を降さん。」
此の處今大白象に乘りて、氣明遠廣の磧を渡るを得。
利智の金剛杵を執持して、當に外道一切の邪を破るべし。」
此の處今大梵王を出して、世間一切の衆を憐愍し、
〔三〇〕愚騃衆生の輩を利せんが爲に、當に大法鐘・螺・鼓を鳴すべし。」
此の處今是の大龍を出し、當に世間に大法雨を雨らすべし。三界諸の衆生を潤益して、其の熱惱せる諸の邪病を除かん。』

爾の時、淨居諸天、此の偈を說き已るや、卽ち、口に、『南無尊者・大丈夫身』と稱言し、太子を禮拜し、太子に隨つて行く。時に淨居天、各、先業の果報に隨つて得る所の微妙の身、威德勇猛、志力精進にして、作し難きを已に作し、太子の爲に、身に光明を放ち、暗瞑を滅除して、道路を顯示すること、譬へば、日、重雲の中より出でて、大光明を放つが如し。是の如し、是の如

【三〇】騃・・・おろか。

し。淨居諸天、其の身體より、諸の光明を放ち、太子の爲に、道路を示現するも、亦、復、是の如し。』

爾の時、欲界の諸天子等、皆、各、端正喜ぶ可き〔二一〕摩那婆の身と化作して、太子の前に在り、太子を平坦の道路に引導し、大梵天王は、諸の梵衆眷屬と共に圍繞し、太子の右邊に在りて行き、忉利天王は、諸の釋衆三十三天の眷屬と共に圍繞し、太子の左邊に在りて行く。

四大天王は、各、種種微妙の瓔珞を以て、其の身を莊嚴し、妙天冠を以て、其の首を莊嚴し、諸の瓔珞を垂れ、復、無量の乾闥婆衆・鳩槃茶衆・諸ろの龍・夜叉、無量百千と共に、左右に圍繞し、身には種種堅牢の鎧甲を帶び、手には弓箭を執り、或は利劍を執り、或は長刀を執り、或は鐵棒を執り、或は矛戟を執り、或は三叉を執り、槊を執り、鉤を執り、〔二二〕排楯を擎持して、太子の前に在り、引導して行き、太子に語つて言く、『大聖太子、此の道より速かに行きて往まる莫れ。』上虛空中、復、無量無邊の諸天、百千億衆有り、歡喜踊躍、其の身に徧滿して、自ら勝ふる能はず。天・水・陸に生ぜる所の華を以て、太子の上に散じ、幷に〔二三〕栴檀・諸妙沈水・〔二四〕多伽羅等の天の諸末香と、自餘、更に、種種の雜香と有りて、太子の上に散ず。復、塗香・末

【二一】摩那婆（Māṇava）。或はMāṇavika。年少淨行と譯す。
【二二】排は排、たての誤か
【二三】（Candana）
【二四】Tagara

香・燒香有り。太子の行く時、各各手に持つて太子の上に散じぬ。以て太子を供養せんが故なり。爾の時、太子の宮內の有らゆる婇女、睡り寤めて、忽然として唱へて言く、『太子を見ず、太子を見ず』と。耶輸陀羅、既に臥牀を觀るに、獨自一身にして、太子を見ず。大に唱叫して、是の如き言を作す、『嗚呼、嗚呼、我等、今、聖子に〔二五〕誑逗せらる』と。卽ち大叫喚し、身を以て地に投げ、塵土を把撮して、以て頭上に散じ、又、兩手を擧げ、自ら髮毛を拔き、身の諸の瓔珞を拗折打破して、以て地に撲ち、手の指爪を以て、四支身體の皮肉を〔二六〕爴裂し、著くる所の衣服、皆悉く掣毀し、聲を擧げて大哭して、種種酸楚の痛言を出し、又諸餘の種種苦惱の逼切を以て、自身の支體を〔二七〕縈纏しぬ。

爾の時、宮內の婇女侍人、淨飯王に奏して、是の如き言を作すらく、『大王、當に知るべし。今夜、睡寤めて太子を見ず。』其の當馬の人、既に乾陟を失ひ、亦、復、淨飯王に諮奏して言く、『大王、當に知るべし。今夜廐上、亦、復、馬王乾陟を見ず』と。時に淨飯王、此の語を聞き已り、大聲に叫喚して、口に唱言すらく、『嗚呼、嗚呼、我が愛する所の子よ』と。是の如く唱へ已りて、悶絕して地に倒る。傍臣手に栴檀の冷水を持し、以て其の上に灑ぐ。少時くして還蘇り

【二五】誑はあざむく。逗はまげる。
【二六】爴。又は膕、攫なり。爴裂は打破也。(可洪)
【二七】縈はとりまく、からまる。

て、其の本心に復り、然る後に防守の城將を召喚して、之に勅して言く、『卿等速疾に四兵を莊嚴し、善く鎧甲を著し、速かに太子を求めて、所在を知らしめよ。』時に彼の防衛守城の將軍、王の是の如く嚴重に敕するを聞き已り、宮内より出でて、徧く諸餘の大征將に告げて言く、『汝等諸將、各當に知るべし。淨飯大王、是の如く敕有り、「所在の境界の百官大臣、其の我が封祿を受食するある者、或は我に依つて活命するある者、是の如き人の輩、皆悉く集聚して、速疾に分頭して、行いて太子を求めよ。若し見るを得ば、善言慰喩して、彼の山林磎谷に住まるを聽くこと勿く、迎へ將て廻還せしめよ」と。』

爾の時、百官諸群臣等、彼の防衛守城の將軍の、是の如く言ふを聞き已り、即時に、各、迦毗羅城内外の衞道に於て、鈴を振り告げて言く、『汝等一切の所有臣民、淨飯大王の國土封祿を食する者、及び大王に依つて活命する者、諸臣百官、悉く皆、速に迦毗羅城を出でて、太子を求むるを爲せ。若し見るを得ば、慰喩して宮中に還り入らしめよ。』

爾の時、釋種の諸臣百官、幷に及び一切迦毗羅城に所居の人民、其食祿有るものも、及び食せざる者も、皆城より出で、行きて太子を求む。爾の時、守城の大臣、徧く行く所の諸人に、是の如き言を告げ已り、漸次に太子の當馬大臣の家に至り、彼の當馬の臣に告げて是の如く言ひぬ、

「淨飯王、勅したまへり。速かに太子を求めて、城を出で行け』と。彼の大臣言く、『我は太子の居たまふ處に行くを得ざるべし』と。時に彼の守城の大臣、重ねて更に是の如き言を語るらく、「淨飯大王、是の如く嚴に勅りしたまふ。有らゆる太子の侍衞左右、悉く皆禁縛せよ。』彼の當馬の臣、是の如く報へて言く、『仁者、若し我を縛せんと欲せば、且く先づ、自ら汝の有らゆる眷屬・妻兒・兄弟・姉妹・姑姨・舅氏を縛し、皆禁縛すべし。』時に彼の城内の大衆人民、皆悉く出でて太子を求めて行く。爾の時、太子に諸天の神威力の〔二八〕障あるを以ての故に、太子を覓むれども、見るを得る能はず。

【二八】障はおほひ、ささへ、まもり。

剃髮染衣品第二十二の上

爾の時、太子、迦毗羅城の門より出で已り、其の車匿に敕して、是の如き言を作すらく、『汝、車匿よ、我、今、汝に語らん。汝、我が前に於て、引導して、直に羅摩村に向つて行け』と。是の時、車匿、太子に白して言く、『太子の敕の如くし、敢へて違ふこと有らじ』と。引き前みて、直に羅摩村の邊に向ふ。其の馬、乾陟、輕便に行くこと疾く、足を舉ぐること安穩に、夜半より行きて、明星の出づるに至り、行くこと十二由旬なり。〔一〕摩訶僧祇師、是の如く言ふ、『馬、半夜に行くこと十二由旬なり』と。或は復、諸師、是の如き言を作す、『夜半より起き、明星の出づるに至りて、百由旬を行き、一聚落に至る。彌尼迦と名く。』日出る時に至り、〔二〕跋伽婆仙人の居處に到り、彼處に到り已りて、車匿に問うて言く、『汝、車匿よ。此は何處なるか。』爾の時、車匿、太子に報へて言く、『大聖太子、此の處は羅摩村を去ること、勢、遙遠ならず。』

爾の時、太子、此の樹林、乃往仙人の居りし處、幷に諸の鳥・獸・流水・井・泉・池・渠・河等を見て、其の車匿、及び馬乾陟の行來已に乏るるを知り、車匿に告げて言く、『汝、善車匿よ、今、

〔一〕Mahāsaṃghika. 大衆部と譯す、小乘十八部又は二十部の隨一。
〔二〕Bhārgava.

若し時を知らば、宜しく此の處に於て、停下して歇息すべし』と。是の時、太子、其の馬王乾陟より下りて、口に是の如く大弘誓願を稱へぬ、『此は、今、是、我が最後の所乘を下れる處なり。此は、今、是、我が最後の所乘を下れる處なり』と。是の時、太子、乾陟を下り訖り、美き言語を以て、車匿を慰喩して、是の如き言を作すらく、『車匿よ、世に僕使有り、其の心、復、孝にして大家に向ふと雖も、自由無し。復、僕使有り、心は自由なりと雖も、孝順無し。復、僕使有り、心孝順ならず、兼ねて、且、力無し。復、僕使有り、心孝順にして、復、大力有り。善生、車匿よ。汝が今日の如きは、希有、希得の恭敬、孝順。好心もて我に向ひ、復、大力有り。車匿よ、我、今、汝に向つて、亦、大に歡喜す。是の如き業を以て、汝、我が邊に於て、心大に孝順に、大に我を愛敬す。是の如く我を愛して、汝が、今、我に事ふるは、利を求むるの故ならず。凡そ世間の事や、富貴の人には、還、愛著ありて、他に事ふるを求む。汝が、今、我に事ふるは、其の義然らず。世に又、人有り、富貴の時を見て、他に事へんと欲するは、物を求むるが爲の故なり。亦、貧賤を見ては、卽ち、復、背き捨つれど、汝は、今、然らず』と。而して偈を說いて言く、

『兒を畜ふは家を立てんが爲。父に事ふるは養育に答ふるなり。

利の爲に田作を營む。皆以て報を求むるを爲す。』

爾の時、車匿、此の偈を聞き已り、太子に問うて言く、『大聖太子、凡そこれ奴僕は、富貴の人の、有らゆる諸事、心を發して、作さんと欲するに向つて、一一、所以を借問する能はず。但、我、今日、既に、聖子の、來つて此の山に入るを見たり。是の故に、敢へて聖子に諮問せんと欲す。何の緣を以ての故に、是の如き心を發して、此に來り至り給ふか』と。是の時、太子、車匿に報へて言く、『汝、善車匿、我、汝に語らんと欲す。汝、今、亦復、何ぞ知るを用ふべき。』車匿、復、言く、『大聖太子、我は是、賤しと雖も、交、聖子と同日に生れ、是れ聖子の奴、聖子に隨順して、意に違逆せず』と。是の時、太子、車匿に語つて言く、『汝、善車匿よ、我、今、汝に語らん。汝、能く、作すや不や。』其の車匿、言く、『大聖太子、我、今既に是れ聖子の奴僕として、親しく聖子に事ふ。何ぞ敢へて作さざらんや』と。太子、復言く、『汝、善車匿、我、今、聖王の位を棄捨せるは、其の餘の、他を畏怖するを以ての故にあらず。唯、解脱を求めて、繫縛を離れんが故なり。車匿よ、我、今、是の如き王位を取りて、心に歡喜せず。車匿よ、一切の王位は、是れ大恐怖なり。我、今、內心に、是の如く明に見る。車匿よ、我、出家に、是の如き利あるを見るが故に、彼を割斷し來りて、山林に入る。復、更に、生死の爲に拘はるる莫けん。我、今、生

死を解脱するを求めんと欲す。汝、善車匿、今、廻還し、馬、乾陟を將て、王宮に歸向すべし。我今、出家の心意已に決す。』而して偈を說いて言く、

『復更に多くの言語を假らずして、我意に汝を愛する心を識知せよ。
我はや親愛を割捨して來りぬ。汝今速に乾陟を將て去れよ。』

爾の時、車匿、太子に白して言く、『大聖太子、凡そ人、出家せんには四種の事を見て、然る後に捨離す。云何が四と爲す。或は身、年老い、或は復、病を帶び、或は時に孤獨となり、或は資財無きなり。而るに聖子は、今、此の四種の中、現に一だも有ること無し。又、復、聖子、初めて生れし時、一切の解相の婆羅門等、多く經書を讀み、善く衆論を解し、占觀を能くする、諸巧智あるの人、昔、嘗て授記すらく、「是の如き童子は、必ず當に轉輪聖王と作るを得て、四天下を統べ、大地主と作りて、七寶を具足すべし。彼の七寶とは、謂はゆる輪寶・珠寶・象寶・馬寶・女寶・主藏臣寶・主兵臣寶なり。是の如くして、復、一千聖子の、悉く皆勇健にして、能く他の怨を破るを生まん。彼の轉輪王や、此の大地、一切海等を統べ、法の如く降伏して、治化するを得ん。」聖子、若し、金輪寶を得る時、〔三〕此の寶は天成にして、人の作る所に非ず。端正喜ぶ可く、虛空中に於て、前

〔三〕この以下、車匿、七寶具足の快樂を述べて、太子の意を翻さんとす。

に在りて行き、王が空に乘るに當りて、彼の寶輪を逐ひ、諸の親族等、左右に圍繞して、空より飛行せん。是の時、身、轉輪王の位に當つて、大功徳を受けん。是の時、聖子、明月珠〔四〕摩尼の寶を以て、夜暗の時に於て、七由旬を照さんに、其の地周帀に光明を得ん。是の時、聖子、是の如く無量に、王位の樂を受けん。大聖太子よ、仁、今、若し、白象に乘らん時、其の象の七支、皆、地に拄へ、其の六つの白牙、皆悉く金を以て裝校鏤飾し、金の〔五〕鞍韉を被、〔六〕鞦韆隱起し、金の瓔珞を以て、其の上を嚴飾し、復、羅網を以て、之を彌覆し、神通を具足して、飛騰自在ならん。是の象に乘り已りて、亦、能く、遍く此の大地を行くに堪へん。聖子、是の時、彼の王位を受けて、甚大快樂ならん。又、復、若し、當來の世、彼の馬王に乘らんに、其の馬王や、徧體は紺靑、頭は烏黑色に〔七〕騣尾甚だ長く、金の鞍韉を被、鏤寶の鞦韆、純金の瓔珞もて、其の身を莊嚴し、金の網羅を以て、其の上を彌覆し、彼の馬、神通、自在、無礙にして、善能く虚空を飛躍して行かん。若し、行かんと欲する時、聖子、上に乘り、此の大地を行きて、周帀能く徧ねからん。聖子、爾の時、是の王位を受けて、甚大快樂ならん」

【四】摩尼（Mani）は如意寶珠のこと
【五】韉。したぐら。
【六】鞦は牛馬の尾にかくる緡、しりがき。韆はくつは
【七】騣。たてがみ。

『又復、聖子、若し當來の世に、女寶を得ん時、眼目端正に、面首憐むべし。行歩安庠として、最勝最妙なること、猶ほ天玉女の、當に自ら出現すべきが如し。聖子、其の時、具足して受くる、自恣五欲の轉輪王位や、甚大豐樂ならん。又、復、聖子、若し當來の世に主藏寶を得ば、彼の主藏の臣、天眼を得るが故に、能く地より金銀藏等の一切の諸寶を出し、將つて聖子に與へん。爾の時、當に五欲具足の功德を受くべし。』

『又、復、聖子、若し、當來の世に主兵寶を得ば・其の主兵の臣は、善巧多智、聰明利根、閑ひ解して便ち能く四兵衆を領し、一念の頃に、太子の心を知りて、皆悉く能く鎧甲を著け、一切具足して、乏少する所なく、部分して將て往き、聖子の邊に詣りて、意の隨に用ひしめん。聖子、爾の時、其の王位を受けて、甚大快樂ならん。』

『又、復、聖子、若し、當來の世に、具さに是の如き七種の寶を得ば、爾の時に當つて、此の間の大地、幷に諸の四海、一切の山河、及び、林泉等の、屬せざるあるなく、其の諸の怨敵、一切の天下、悉く來つて歸降し、既に降伏し周くして、處として畏れあるなく、處として疑あることなけん。一切の人民、悉く各豐足して、賓せざる有ること無く、險難の處も、亦、刀杖兵戈を用ひずして、如法に行はれ、既に如法に行はれて、天下を治化せん。爾の時、太子、聖王

位を受けて、快樂極り無からん。』

爾の時、太子、是の如き等の、諸ろ語言するを聞き已りて、還、復、車匿に報問して言く、『汝、善車匿よ、其の相師等、諸婆羅門は、唯、是の如く我に記を授けしのみなるか。復、更に、餘の授記有りと爲すか。』是の時、車匿、太子に報へて言く、『更に、其の餘に、別に、授記の事有り』と。太子、問うて言く、『これ何なる授記ぞ。』車匿、答へて言く、『彼の諸の相師、婆羅門等、復授記して言く、「此の童子、若し、王位を捨てて出家せば、必定して阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得、菩提を成じ已りて、卽ち無上微妙の法輪を轉ぜん」と。』

爾の時、太子、車匿に語つて言く、『汝、車匿よ、愼んで妄語する莫れ。應に眞實なるべし。彼の時に當つて、阿私陀仙、一向に我に授記せり、「此の童子、必ず阿耨多羅三藐三菩提を成じて、當に無上法輪を轉ずべし」と。』是の時、車匿、是の語を聞き已るや、心、驚きて戰き怖ぢ、身毛徧く竪ちて、太子に白して言く、『大聖太子、能く是の如き授記の語を憶えたまへりや。此の記は、釋等諸眷屬の輩のみ、私竊かに聞きて、聖子をして此の記を知るを得しむる勿らしめたり。聖子の、菩提心を發すを恐畏れてなり』と。是の時、太子、車匿に語つて言く、『車匿よ、我、昔、彼の兜率天より下りて、母胎に入り、及び、胎中に在りての有らゆる諸事も、我が心に憶持し

て、猶尙忘れざるを、況や復、生れ已りて、我に授けたる記を忘れんこと、終に是の理無し。車匿よ、諸天、復、我に是の如き言を語れり、「仁者太子、速疾に出家せよ。必定して當に阿耨多羅三藐三菩提を得、菩提を成じ已りて、決定して無上の法輪を轉ずべし」と。車匿、是の故に、我は、決定して、當に阿耨多羅三藐三菩提を成就するを得べし。決定して當に無上法輪を轉ずべきを知る。車匿よ、我、今、實言もて汝に向つて說かん。車匿よ、我、今、寧ろ刀もて身肉を割かれん、寧ろ毒を食つて死せん、寧ろ大火に入らん、寧ろ大崖に投せん、寧ろ自勁して死せんも、我、今、終に、未だ生死の法を免離するを得ずんば、還家に向はじ。何を以ての故に。是の如き世間五欲の境界は、皆悉く無常にして、久しく停住せず。これ破壞法なればなり」

巻の第十八

剃髪染衣品第二十二の下

爾の時、太子、手を以てその天冠の頭髻より、天の無價の（一）摩尼寶を解き、車匿に付與して、是の如きの言を作す、『車匿、我、今、汝にこの摩尼寶を與ふ。汝この寶を將て、我が父、淨飯大王に還り、王邊に至り已りて、無量に頂禮せよ。汝、我が意を知れ、我、汝に付囑せん。汝、當に我を信ずべし。我、今、汝をしてこの寶を將て還らしむるは、父王の邊に至りて、啓白して一切の愁苦を除かしめんとなり。復、好く我が爲に父王に諮啓して、是の如きの言を作せ、「我、今、人に欺かれて、忽ちに父王の足下を捨離するにあらず。又、亦、嗔恨の心を以ての故ならず。亦、復、資財を求覓めんが爲ならず、又、亦、封祿少きを以ての故ならず、亦、天上に生れんを欲し求むるにあらず。唯、一切の諸衆生等が、不正の路に在り、黑暗に迷惑し、邪逕に行くを見て、光明と作らんと欲し、是の如き生死の法を除かんと欲し、世間を利益するの句を求めんと欲し、愁憂なき處（に至らんと欲し）無常有漏の行

【一】摩尼（マニ）如意珠と譯す

を斷せんと欲して、出家を求むるのみ。大慈の父王、我、是の如く樂んで家を出るが故に、憂愁すべからず」と。』而して偈を說いて曰く、

『假恩愛をして久しく共に處らしむるも、時至れば會に必らず別離あり。
この無常須臾の間を見て、是の故に我今解脫を求む。』

爾の時、太子、此の偈を說き已り、是の如き言を作す、『我、今、此の憂苦を離れんと欲するが故に、棄捨し出家す。是の故に、我が父、大王に愁憂すべからずと諮啓せよ。若し世に人あり、憂愁に緣るが故に、五欲に縛著せられなば、彼等諸人は、須らく憂愁すべし。所以は何に。世、多く人あり。父の子を生むや、財を求めんが爲の故に、所以に養育するを、父母に報い、法財を施すもの、世の子に有り難し。若し父王の意に、「我が子、今、出家の時に非ず」との是の如き心を作さんか、唯、願はくは、父王、是の如く念ずる莫れ。凡そ法を求めんもの、時節あるなし。所以は何に。人の世間に居る、命に限齊なし。是の如きを知るが故に、智人は決して、須らく、(二)捨て勝上の行處を求むべし。此は是、我が心決定の語なり。譬へば人あり、死命の怨と共に、同じく一室に處り、我が壽長しと言はんに、是の處あることなきが如し。車匿、汝、我が父、淨飯王の邊に至りて、是の如き等の多種

〔二〕捨とは捨家棄欲のこと。

の語言を作し、王の意をして定まらしめよ。汝、彼處に至らば、善く是の如きの方便慰喩し、我を憶はしむる莫れ。車匿、然りと雖も、我、復、汝に語らん。若し我が父、淨飯王の邊に至らば、但、我が惡逆の事、德行なき處を說け。「太子は是の如く、恩義あるなし、愛著の心なし」と。我が孝順の處を說く莫れ。所以は何に。已に愛を捨つるが故に、卽ち一切の憶念憂愁を捨てたればなり。』

爾の時、車匿、太子が是の如き等の諸語言を作すを聞き已りて、遍體熱惱し、滿面に淚流れ、十指の掌を合し、太子に向つて是の言を作す、『大聖太子、太子の敎が、但、前に言ふ所の如くば、諸親族、及び父王の邊に於て、大に憂愁を生じて、我が意喜ばず、心情斷絕し、大象王の、沒して深泥に在り、自ら出る能はざるが如し。是の語を聞き已りて、誰か淚流れざらん。』復、是の言を作す、『精進の心や、餘人の（これを）說くを聞くだも、猶大に驚かんに、況んや、我、車匿は、小より來、聖子と共に、日を同じくし、時を一にし、倶に愛敬の心を長じて、相樂しんで已まざりしをや。』而して偈を說いて言ふ。

『假使鐵を用つて持つて心と作すも、是の如く誓語を言ふを聞きて、
人誰か心酸楚毒せざらん。況んや我愛し戀ふる同日の生なるをや。』

爾の時、車匿、是の偈を說き已りて、聖子に白して言く、『我、馬王と聖子の乘とを將て、(三)彼の天の神通力を以ての故に、強ひて我が心をして遣はして與に來るを被らしむ。我が自らの意に非ず。我、今、云何ぞ能く聖子の、是の出家の事を斷せん。我、今、既に、是れ同日生の奴、及び此の馬王も、一種も異るなし。豈、能く聖子に遠離して、須臾だも獨り宮に還らんや。終に是の處なし。聖子も、亦、我が乾陟を放ちて、家に向つて復り、我をして此の憂悲愛別の語を傳へ、大父王に向つて、是の如き事を說かしむべからず。聖子も今、亦、老父王に背捨して、自ら出家すべからず。(四)彼の法は是に非ず。更に法の絕妙、越殊なること、(五)是の尊に過るもの、能く所生の父母に孝養せんに勝るあるなし。亦、乳哺の姨母、摩訶波闍波提を捨つべからず。是を以て論ずるに、聖子も亦恩義なきの人と成りて、舊の育養の時を憶はず、聖子、正妃耶輸陀羅は、貞潔の女、諸德具足す。亦、復、棄捨して相離るべからず。然りと雖も、若し聖子、今、一切の釋種の親族を捨離すとも、我、今、既に是れ同日生の奴なり、亦、放つべからず。但、是れ聖子が足の蹈まん地に、我常に隨順して、背捨するを得ざらん。大聖太子、是の故に、我、今、意中に、此の熾然たる憂悲の火に燒かるる心情を將て、廻りて城に

【三】(原文)以彼諸天神通力故、強令我心遣被與來、非我自意。
【四】(原文)彼法非是、更無有法、絕妙越殊過是尊者、能勝孝養所生父母。
【五】(原文)是尊とは所生の父母をいふ。

向ふに忍びず。而して聖子を放ちて、此の處、空閑なる林野に獨在せしめ、我をして自ら返りて、脫し城邑に至らしめば、淨飯王、我を責めて何とか言はん。又復聖子、既に家に還らず、我、獨り去る時は、聖子の有ゆる朋友智識、并に及び宮內の婇女妃后は、我に問うて何とか言はん。聖子、復、我に語りて、是の言を作す、「汝、今、我が惡辭毀辱、非法の事を將て眷屬に向ひて說き、我が眷屬をして、我を遺忘し、我を憎惡せしめよ」と。而も我、何ぞ、敢て此の毀辱の言を妄說しては、我が心、自慚、自羞、自愧、自恥せざるべけん。我の心意、及以び口舌に、若し、聖子の惡言を說かんと欲するが爲に、我が妄言もて、聖子を說かんと欲すと雖も、誰か、當に、我が妄言の事を信ずべき。聖子、譬へば、人有り、彼の月天の種種惡事、毀辱の言を說くも、人の聞く有ること亘きが如し。此の如き事は、能く信ずるや以不や。但、聖子は、今、恒常に慈情の心を行ずるに習へるを、聖子が此の言を囑託するは善ならず。聖子は既に大慈悲の行を行じ、恒常に美言もて衆生を慰喩せるを、今、諸親を捨つるは、此は是、善に非ず。是の故に、善い哉、聖子、心を廻らし家に向ひて樂を受けよ。』

爾の時、太子、其の車匿の是の如き、憂悲苦惱の語を聞き已りて、復、彼の車匿に報じて言はく、『汝、今、應に須らく、別離の苦を捨てて、憂惱を作す莫るべし。何を以ての故に。一切衆生

は、生有り老有り、悉く別離有り。車匿、一切衆生所有の、愛著染惑の心は、其の胎内に在りて養育せるもの、皆、悉く、これ虚なり、會には別離有り。彼はこれ我に非ず。我はこれ彼に非ず。』而して偈を說いて言はく。

『譬へば大樹に衆鳥の群るが如し。各諸方より來りて共に宿れど、
後日別れ飛びて各自ら去る。衆生の離別も亦復然り。
猶ほ盛夏の大雲を起すが如し。暫らく聚まり以て復還離散す。
衆生離別の法皆爾り、須臾聚合して復分離す。
既に相隨ひ來りて此の間に生れ、今は各本に歸還す。
我と汝とに異有りと言ふ勿れ。剎彼此去住の情を作すをや。
一切の去來に所依なし、但衆生の愛著有るに隨ふ。
強く自他を分別するの意を作すは、猶ほ樹木の枝と葉と莖との如し。
各別に色と形容と有るも、これ本來・染汙なきに緣る。
況んや復無常の衆生類は、譬へば樹蔓の・果蓏を生ずるが如し。
其の熟する時に隨ひて則ち墮落す。人命の脩短も亦是の如し。

長年も促壽も死すれば終に無し。往昔の一切諸仙人は、
恒に是の如く無常の事を說けり。設ひ壽命をして八大劫ならしむるも、
無常敗壞の時に至れば必ず死すること、更に疑慮の有ること無し。
猶ほ諸方より各自ら來り、河に至りて同じく共に水を飮まんと欲し、
或は復船に上りて彼岸に渡り、既に岸上に至れば還復分るるが如し。
父母の子を生むも亦復然り。幷に及び眷屬諸朋黨も、
少小のとき同じく一處に在りと雖も、長大すれば須臾に各別離す。
復業果にて同じく家を共にすと雖も、其の苦樂の報を受くるや等しからず、
無常の事催促するに至るに及びては、各相捨てて親疎無し。』

爾の時、太子、此の偈を說き已り、車匿に告げて言はく、『善生車匿、是の故に、汝、今、自心を惱す莫く、決定して還去せよ。所以は何に。汝、今、止、大家を愛著するが爲に、捨つる能はずば、汝、若し家に到るも、還り來つて我を覓めよ。若し汝、廻りて、迦毗羅城に至り、我が親族の、我の爲めに愁ふる者を見ば、汝、彼等に告げて是の如き言を作せ、「汝等眷屬は、太子の邊に於て、宜しく應に愛著の心を割捨すべし。何を以ての故に、我、今、彼に要誓の言有るを知ら

しめん」と。』爾の時、太子、即ち此の偈を說き、車匿に囑して言はく、

『假使我今身の血肉と、幷に及び支節と筋と脈と皮と、一切磨滅し盡く消亡するも、或は復性命全く保たざるも、我若し此の重擔を捨て、諸苦を越渡して本源に達せず、道場に坐して未だ解脫を證せずんば、終に虛爾還つて相見えじ。』

爾の時、車匿、既に太子の、此の偈を說くを聞き已り、即ち自身を以て、四たび地に佈き、其の兩手を持ちて、前著して太子の兩足を抱き、是の言を作す、『善い哉、聖子、今、乞ふらくは、歡喜して、是の如き苦切の誓言を作す莫れ。大聖太子、我、何の力有り、何の神德有りてか、能く聖子をして本宮に廻還せしめん。但、我、此より獨自ら家に向はば、聖子の眷屬は、必ず當に我を打つべく、或は復、聖子の父王淨飯幷に及び姨母摩訶波闍波提は、必ず當に、我に「我が妙梵聲、聰慧の子を、汝は、今、將ゐて何處に向つてか擲げ來れる」と問ふべし。』

爾の時、太子、車匿に報じて言はく、『車匿、是の言を作す莫れ、是の言を作す莫れ。我の父母、及び諸眷屬は、汝の此より、獨自ら廻還するを見るも、終に汝を打たじ。所以は何ぞ。我が眷屬等は、一切、悉く、皆、汝を愛念すればなり。車匿、速に起て、速に起て。上來論ずる所に、此の如き法有り。世に若し人有り、愛する所の人の言語意氣を將て、彼に向つて道ふ時には、必

ず賞賜を得るなり。汝決定して、須らく、速に還りて家に至るべし。我の父王、汝の還れるを見已りて、心に穌醒を得ん。然も、我が父王は、我の捨家せるを見、道に出家せるを聞き、大に苦逼を生じ、父王の身、及び諸の眷屬は、一切號眺して、悲咽哭泣し、城内の大小、一切の人民も、我が爲めの故に、重き苦惱を生ずれども、彼等、若し汝の還るを見るを得ば、心、少しく喜歡せん。』

爾の時、車匿、地より起ち、十指の掌を合せ、涙下ること流るる如く、聲を舉げて大哭し、太子に白して、言はく、『是の如きを以ての故に、我今、聖子を將ゐて、家に還り、大王の種姓を斷絕せしむる勿らんと欲す。』是の時、車匿、地より起ち已るや、馬王乾陟は、前膝胡跪し、舌を出だして、太子の二足を舐め、兩眼より涙を流す。是の時、車匿、太子に白して言はく、『大聖太子、此の馬は、復、是、畜生の身なりと雖も、猶尚ほ慈悲あり、涙を垂れて泣く。況んや復、聖子の諸眷屬の、心に、當に何の殃をか見るべきぞ。唯、願はくは、聖子、正しく、此の乾陟馬王を觀よ。今、聖子の、家に還らんと欲せざるを見、是を以て、胡跪して、前の兩膝を屈し、口を開きて舌を出だし、聖子の足を舐め、慈哀の心を以て、二目より涙下る。』

爾の時、太子、諸の功德萬字莊嚴の千輻相輪あり、猶ほ芭蕉の如く、内心柔輭なる、金色の右

掌の、網縵ある手指を以て、其の馬王乾陟の頂上を摩し、之に語りて言はく、『乾陟、汝、今、具に馬事を作し、大負の重任を度し得たるを以て、今より已後、汝、乾陟馬、家に還りて自ら養へ。此は、今是、我が最後の、家よりせる騎乘の務、大遠路を行くこと、汝が今日我を濟ふを得たるに賴る。乾陟、汝、今、憂惱を生ずる莫れ、泣く莫れ、悲しむ莫れ。汝の載せたる所の我は、當に大報を得べし。我、今、阿耨多羅三藐三菩提を求めんと欲す。後に證せん時に、當に甘露を得て、分布して汝に與ふべし。』而して偈有りて說く、

『太子右の羅網の指の、萬字千輻の輪相の現せる、
金色柔軟淸淨なる手を以て、用て馬王乾陟の頭を摩し、
猶ほ兩人の對して語言するが如く、汝同日生の馬乾陟よ、
悲啼に過ぎて懊惱を生ずる勿れ、汝が作せる馬の功已に訖了る。
我若し甘露味を證するに當りて、我を負載すべき所の者に、
密敎甚深の法を分別し、彼に報答して終に虛しからざらん。』

爾の時、車匿、太子に白して言はく、『大聖太子、今日、已に、廣大位を得たり。聖子は一切諸相玉女の寶を具足し、莊嚴する所の宮は、普ねく、皆、自餘の多種五欲の事を顯現して、最勝

最妙なること、人間に辨じ難きを、今、已に、之を得るに、何の故に、聖子、此の妙樂を捨て、諸獸百鳥の充滿せる曠野の内を愛する。又復、是の處、多く惡賊恐怖の事有るに、獨行獨坐、諸樂を遠離して、云何ぞ心に悅むや。』太子、報じて言く、『汝、善車匿、語る所は虛ならず。其の理、然りと雖も、汝、今、諦に聽け、我、汝の爲に說かん。世間の五慾は、會ず無常に歸し、究竟の法に非ず。心に安んずべからず。若し得るも、還、失ふこと速疾にして、流の暫くも停住せざるごとく、草上の露の、久からずして消散する如く、猶空拳の、小兒を誑く如く、芭蕉の心の、眞實有ること無きが如く、秋雲の起るや、乍ち布きて還收まる如く、閃たる電光の、忽ち出でて還滅するが如く、水上の沫の、常に定まる有ること無きが如く、熱き陽炎の、人を誑惑する如し。』而して偈を說いて言はく、

『諸の五欲の事は、猶ほ(六)魁膾の杌の如く、
刀刃に蜜を塗れる如く、(七)他の器用を借るが如し。
新死を哭泣する如く、夢に快樂を見、寤めて後覓むるも還無きが
如く、
猶ほ(八)劓きて貫く人の如く、樹の果子の熟して、久しからずして當に地に墮つべきが如く。

【六】魁膾。肉を切る人。
【七】（原文）如借他器用、如新死哭泣、如夢見快樂、寤後覓還無、猶如劓貫人
【八】劓（けづる、かる）は鼻（くし、くしさす）。惠琳は今の炙肉串也といふ。

惡人の刀仗の、怨を殺して慈心無きが如し。
猶ほ肉臠を割くもの、當に大苦惱を受くべきが如く、
大火炬を執りて、愼まずして身を燒くが如し。
妙色の人天の果は、久長に樂を受け已るも、心に厭離有ること無く、已に得ては復能く求む。
猶ほ人の熱にて渴し、更に復鹹水を飲むが如く、
諸の五欲等を求めて、厭離せざるも亦然り。
是の故に若し智人は、諸の五欲を離れんと欲すること、猶ほ毒蛇の頭の如くにし、
若し長壽命を求めば、遠離すること毒藥の如く、亦大火聚の如し。
若し智慧ある人は、應當に遠く捨離すべし。諸有の生死は、一切堅實ならず、
念念に暫くも停まらず、世法は應に是の如くなるべし。
壽命は自由無く、決して死鬼に至り向ふ。是の如く思量し已りて、世間に住する莫れ。』
爾の時、太子、此の偈を說き已り、車匿に告げて言はく、『車匿、五欲の事は、是の如き等の多種の過患有り。車匿、王位も亦然り。種種の苦と衆の患とを以て雜亂す。我是の如き畏るべき相を見るが故に、寧ろ此の曠野の中に住し、諸の飛禽走獸盜賊と共に、恐怖の處に、獨起獨行して、

欲樂を遠離するなり。我が意、此を樂むも、彼は願ふ所に非ず。車匿、汝、我の、是の如き語を作すを聞き已りて、復、我が此の大事に違する莫れ。車匿、我、是の如き法行の内に、當に法眼を開くべし。汝、須らく隨喜すべく、應に我を障ふべからず。』是の時、車匿、太子に白して言はく、『大聖太子、太子、若し定めて是の心を作さば、我、今、敢て聖子の勅に違せじ。聖子の敎の如く、我、還りて家に向はん。』爾の時、太子、車匿を讃じて言はく、『善い哉、善い哉、大善車匿、汝、今、是の如く、我が意に順從せば大善利を獲ん。汝の作す事や善し』と。

是の時、太子、身上の有ゆる諸寶瓔珞を、皆、悉く自ら解き、口に、是の如き大弘願を作して言く、『此はこれ、我が、今、最後の在家莊嚴の身飾なり。此はこれ、今、我が最後の在家莊嚴の身飾なり。』解き已り、手に持將て車匿に付し、車匿に付し已りて、復、是の言を作す、『車匿、汝、此等の諸寶瓔珞を將て、歸りて我が諸眷屬等に付與せよ。』是の時、車匿、卽ち彼等諸寶瓔珞を取り、受け已りて、更に太子に問うて言はく、『聖子、若し、我、家に至り、此の瓔珞を將て、聖子の諸眷屬に付せん時、脫し彼の眷屬、我に問うて言はん、「車匿、汝、今、何の故に、我が太子を將て、送りて他國に至り、捨てて獨來れる。車匿、悉達太子は、復、更に、我等に何事をか囑託せる」と。彼等、若し、我に是の如き事を問はば、當に何の報をか作すべき。』太子、又、言

はく、「車匿、汝、若し家に至り、我が爲に、父王淨飯、幷に及び姨母摩訶波闍波提と、自餘の尊者一切の眷屬を頂禮し、悉く皆、問訊せよ。車匿、我が爲に、淨飯大王に諮啓して、是の如き言を作せ、「我、今、實に父王の恩の深きを知るも、但、我、阿耨多羅三藐三菩提を證せんが爲の故に、所以に違離す。若し證するを得已らば、卽ち當に家に還りて大王を見奉らん。」又、別に、我が爲に、姨母摩訶波闍波提、國大夫人に諮白せよ、「我が爲めの故に、大憂惱を生ずる勿れ。聖子は、必ず大善利を成ずるを得て、廻還して、母と、歡喜して相見えん」と。又、我が宮內の一切の婇女、及諸親族、時年童子幷に餘の諸釋に、是の如き言を作せ、「我、今、無明の暗網を破らんと欲す。當に智の明を得べし。智の明を得已らば、我、當に廻還して、迦毗羅に入るべし」と。」

爾の時、太子、車匿の邊より、摩尼もて雜飾莊嚴せる七寶の把刀を牽取し、自ら右手を以て、彼の刀を執り、鞘より拔出し、卽ち左手を以て、紺青の優鉢羅色の螺髻の髮を攬捉し、右手に自ら持てる利刀にて割取し、左手を以て擎げて、空中に擲置す。時に天帝釋、希有の心を以て大歡喜を生じ、太子の髻を捧げ、地に墮ちしめず、天の妙衣を以て、承受接取す。爾の時、諸天、彼の勝上天の諸供具を以て、之を供養しぬ。

爾の時、淨居諸天大衆、太子を去ること、近からず、遠からずして、一華鬘の、（九）須曼那と名

【九】 Samana（スマナ）

づくる有り。其の須曼那華、下りて一淨髪師と化作し、利剃刀を執り、太子を去る、遠からずして立つ。太子、見已りて、是の如きの言を作す、『淨髪師、汝、我が爲に淨髪するや不や。』其の淨髪師、太子に報じて言はく、『我、甚だ能く爲ん。』太子報じて言さく、『汝、若し能くせば、今、時を知るべし。』爾の時、彼の化淨髪師、即ち利刀を以て、無見頂相紺螺の髻髪を剃る。頭を剃る時に當り、帝釋天王、希有の心を生じ、落つる所の髪を、一毛も地に墜墮せしめず、一一悉く、天衣を以て之を承け、受け已り、將て三十三天に向ひ、而して之を供養しぬ。此より、已來、諸天上をして、因りて節名し、供養菩薩髪髻冠節を立て、今に至りて斷えず。

爾の時、太子、自ら、其の身の一切の瓔珞、及以び天冠を解き、髪鬚を剃去し、剪落、既に訖りて、體上を覩るに、猶天衣有り。見已りて念言すらく、『此の衣は、これ出家の服に非ず。出家の人は、山間に在り。誰か、能く、我に袈裟色衣を與ふる。出家の法の如く、山林に居住するには、如法の衣を須つ。』時に淨居天、太子の、心に、是の如く念ずるを知り已り、時に應じて、化して獵師の形と作り、身に袈裟染色の衣を著し、手に弓箭を執り、漸漸に來りて、太子の前に至り、相去る遠からずして、默然として住す。是の時、太子、彼の獵師の、身に袈裟を著し、手に

弓箭を執れるを見、見已りて卽ち語りて、是の如き言を作す、『山野の仁者、汝、能く、我に此の袈裟色衣を與ふるや不や。汝、若し、我に與へなば、我、當に、汝に、迦尸迦衣を與ふべし。此の衣は、價百千億金に直し、復、種種栴檀香等の熏修する所たり。汝、何ぞ是の麁弊の衣服、袈裟色を用ひん。是の如き迦尸迦衣を取るべしと爲す。而して偈を說いて言はく、

『此はこれ解脫せる聖人の衣なり。若し弓箭を執れば著くべからず。
汝歡喜心を發して我に施せ。我と天衣を　〔10〕博るを惜む莫れ。』

爾の時、獵師、菩薩に報じて言はく、『善い哉、仁者、我、今、汝に與へて、實に悋惜まず。』是の時、化人、卽ち菩薩に袈裟の衣を與へ、菩薩より迦尸迦衣の、價數、百千金に直し、復、種種の栴檀を以て熏せられたるを取る。菩薩、爾の時、心に大に歡喜し、袈裟衣を受け、深く自ら慶幸し、卽ち身上の迦尸迦衣を脫して、彼の獵師に與へぬ。時に淨居天所化の人、菩薩の邊より、迦尸迦微妙の衣を取り已り、卽ち其の地に於て、神通を以て虛空中に飛上し、一念の如き頃に、還りて梵天に至り、彼の妙衣を供養せんと欲するが爲の故に、菩薩の前に於て、天の神通を以て、空に乘じて行きぬ。菩薩見已り、大歡喜、希有勝上、奇特の心を生じ、此の袈裟染色衣の邊に、復、更に、倍倍、殷重至到、歡喜の心を生じぬ。

〔10〕博。交換也。

爾の時、菩薩、頭を剃り訖り、身に袈裟染色衣を著くるを得て、形容改變し、既に嚴整し訖れるを以て、口に是の如き大弘誓の言を發す、『我、今、始めて眞の出家と名づくる也。』是の時、菩薩、車匿を遣して還し、涙灌面に流れつゝ、以て車匿を送り、分別し訖了りて、獨一無雙。體上、既に袈裟色服を披、安庠として徐歩し、跋伽婆仙人の居處に向ふ。是の時、車匿、躬を曲げて、菩薩の兩足を頂禮し、菩薩を圍遶し、三匝して廻る。車匿、既に菩薩が、割意して、家に還るを肯せず、兼ねて其の身體に袈裟衣を著し、頭に天冠無く、鬚髮悉く剪り、身體に、復、諸寶瓔珞幷に及び微妙の廻戸迦衣無く、是の如き一切の種種、悉く無きを見、既に遙に見已りて、兩手を上擧し、大叫して聲を盡し、天に號んで哭し、身を投げて地に撲ち、心意悶絕し、良久しくして乃ち蘇り、蘇り已りて、還起ち、諦觀して地に立ち、菩薩の行くを視て、更に、復、聲を擧げ、寃を稱して哭し、其の兩手を以て、乾陟の項を抱き、悲咽哽塞し、大聲に呼嗟し、良久しく哭し已りて、菩薩の、心意廻らず、冀望すべき無きを觀見し、諸の瓔珞及以び衣裳を將ち、幷に馬王乾陟を索き、廻返つて、家に向ひて歸らんと欲す。此れ是の身、還るも、實に心より捨てしに非ず。其の道路を行くや、或は時に思惟し、或は聲を擧げて哭し、或は復、悶絕して地に躄倒し、或處には、直立して、前行する能はず、或處には思慕し、樂まずして坐す。車匿、是の如くにして、

心に愁惱を懷き、多種に、自ら、諸の苦相を現じ已り、漸漸に、次に、迦毘羅城に到らんとす。其乾陟馬も、數數、頭を迴らし、菩薩を觀看し、聲を作して鳴喚し、車匿の後を逐ひて、涙を下して行く。其の馬、已前には、多く氣力足り、歡喜縱逸なりしも、菩薩の家を捨て出家し、鬚髮を剃りたるを見たるを以ての故に、苦逼憂愁し、恆常に懊惱して、身形羸瘦、氣力消盡す。假使、此の馬、瓔珞もて莊嚴するも、心菩薩に離別せるを以ての故に、威神有ること無く、威德有ること無く、迴顧して、數觀、菩薩を占看し、大聲を作し、涙下りて面に滿ち、悲鳴して行く。路上に在るや、水草を食せず。飢渴の逼るを以て、行歩羸弱、威力威神、悉く皆、減損して、復、行く能はず。其の眼中の涙、恆常に乾かず。菩薩の初騎には、發して到るまで、止、半夜に行きしが、今、苦逼り、身、羸弱なるを以ての故に、迴還八日にして、始めて家に至るを得たり。而して偈有りて言ふ。

「菩薩の初出には夜半に行きしが、車匿辭別して乾陟を牽くや、
苦逼ること切にして威勢を失へるを以て、迴還八日にして乃ち家に到りぬ。」

車匿等還品第二十三の上

爾の時、車匿、馬、乾陟を將て、太子に別辭し、廻還して歸り、迦毗羅城に至る。初めて入る時に當り、譬へば、人有り、空宅に入るが如く、其の迦毗羅城の內外、四面周匝、或は、復、園林、或は、復、泉池、或は、復、渠河、或は、復、苑囿は、太子、捨て行きて、出家せるを以ての故に、威神有ること無く、凋悴枯竭す。其の迦毗羅城內、所居の人民、大小、遙に車匿の、馬王乾陟を將領して、還歸せるを見て、太子を見ず。見ざるを以ての故に、悉く車匿及び乾陟の後に隨ひ、次第に行き、車匿に諮うて、言はく、『悉達太子、今、何處にか在る。』是の時、車匿、流淚滿面、哭泣哽咽して、言ふことを得る能はず。時に彼の城內の、一切の人民、悲泣啼哭し、車匿及以び乾陟に隨逐し、行けば則ち隨つて行き、心に疑惑を生じ、車匿に問うて、是の如き言を作す、『其の王子は、今、何處にか在る。我が國內に於て、大歡喜を生ぜるに、汝、今、何處にか捨離し來れる。』是の時、車匿、隨つて行き、隨つて、彼の諸人に報じて言はく、『我、實に、敢て聖子を捨備せるにあらず、彼の聖子、自宮を捐棄し、俗衣の形を捨て、幷に我及び馬乾陟を發遣して、來り還らしめ、太子、獨、自ら、山に在りて出家せり。』是の時、城內の一切の人民、

此の語を聞き已り、心に奇特希有の事を生じ、讃助して未曾有の法なりと言ひ、各對面して共に相謂つて言はく、『悉達太子、行じ難きを能く行ず』と。時に、彼の城内の一切人民、口に是の如く、彼の言を稱說すと雖も、其の涙の下ること、猶ほ流水の如し。復、各、身を呵して、是の如き言を作す、『咄、我も、今、共に其に隨ひ、相逐うて出家すべし。彼處に至り、(一)人師子の徒歩にて行くを看ば、我、今、寧ろ應に、彼に至り、隨つて行き、一日も聖子と離別して活命を存せしむる勿るべし。所以は何に。此の城、今、彼の聖子無きが故に、威神有ること無く、勢力有ること無し。此の城、太子無きを以ての故に寂寞、今、曠野と異る無し。彼の所居の處は、太子の威神力有るを以ての故に、山澤叢林も、還、聚落を成さん。』而して偈有りて說く、

『城内の人民此の言を聞き、口に稱ふらく「希有なるかな是の如き事や、
此は悉達無くして曠野と成り、彼は太子有りて國城の如けん。」』

爾の時、馬王、乾陟、鳴喚す。城内所有の一切の人民、悉く自家に在りて、各、其の聲を聞き已り、一切所有の人民、及び兩宮内の諸婇女等、是の如き心を作して、謂つて言はく、『太子、廻還して城に入りしならん。』是の時、人民及以び宮内所有の婇女、或は牕牖を開き、或は門簾を

〔一〕人師子は人中の師子なり。人中の王者、大人の意。

撥げ、歡喜心を以て、遙に太子を望む。時に、彼の人民、及び宮婇女は、唯、馬王及以び車匿の、太子に離別して獨自に來るを見、見已りて、各、還、牕門戸を閉ぢ、退いて家内に入り、稱寃大哭す。

時に、淨飯王、愛の苦惱、身に逼切するを以ての故に、思惟して悉達太子を見んと欲し、即ち齋堂に入り、潔戒淨心、苦行を修持し、憂愁悵怏として、内心に、日夜、守を一切の諸天諸神に求め、復、種種の方便因緣を作す。子を見て以て心を慰めんを欲求せるが故なり。爾の時、車匿、苦惱憂悲し、涙下ること雨の如く、手に乾陟を執り、幷に及び太子纓身の瓔珞と無價の寶冠とを擎持し、將て淨飯王宮に入る。譬へば、王子の、戰鬪場に於て、怨敵に殺され、其の左右に從へるもの、馬と瓔珞とを將て、王宮に入るが如く、是の如く、是の如し。其の奴、車匿、太子に離別し、馬と服玩とを將て、涙を雨らして、大王の宮中に入るも、亦、復、是の如し。車匿入る時、其の馬乾陟、淨飯王の宮門の外に在り、門内に入りて太子を觀瞻せんと欲し、坐臥の處を左右行動して、太子を見ず、涙の下ること流の如く、地を[二]爬きて大鳴す。譬へば、人あり、大衆中に於て、苦惱の事を說くが如し。時に淨飯王の宮内の、有ゆる種種の諸鳥、孔雀・鸚鵡・鸜鵒、命命、俱翅羅等の種種の諸鳥、乾陟の聲を聞き、

【二】爬、或は跑（足にて地をかく）。

亦、謂つて言はく、『これ太子、家に歸りしならん』と。彼等歡喜し、各自、聲を出だし、和雅に鳴く。是の如く、乾陟、聲を作し已るや、大王の廐内の有ゆる餘馬も、乾陟の聲を聞き、亦、『太子、家に向ひて歸來せるなり』と謂ひ、一切歡喜し、皆、悉く鳴喚す。其の淨飯王宮内の婇女衆多百千、摩訶波闍波提等、復、太子の宮内の婇女六萬餘人、及び其の大妃耶輸陀羅等、太子を念ずるが故に、大に憂惱を生じ、塵涙滿面、各、本容に任せて、復、洗梳せず、身體衣裳、皆、悉く垢膩のままにて、諸の一切の妙好瓔珞を捨て、憂愁悵怏して、心意安からず、或は哭し、或は啼き、或は思惟して坐す。犍陟の鳴くを聞き、各相謂つて言はく、『是の如く、乾陟の、是の鳴聲を作すは、決定して、これ、我が太子の、家に歸れること、疑有る無けん。』彼等、既に乾陟の聲を聞き已り、心大に歡喜渴仰し、太子を見んと欲せるが故に、摩訶波闍波提、耶輸陀羅等、多千の婇女、各、自房に於て、或は樓上に在り、或は殿中に在り、或は室内に在りて、太子を見んと欲し、渴仰して忽ち起ち、急走集聚し、車匿及び乾陟の邊に向ふ。彼の諸婇女、唯、車匿と、馬、乾陟の、太子に離別し、來りて宮に向ふのみなるを見、彼、既に見已りて、各、兩手を擧げ、叫喚大哭して、流涙滿面、口に太子の種種の諸德を唱ふ。而して偈有りて說く、

『彼等婇女心苦しむこと切、渴仰して太子の還るを見んと欲し、

忽ち車匿と馬との空しく迴れるを視て、涙下滿面叫喚して哭し、
瓔珞妙衣服を解きて絕ち、頭髮を散被し身は瘦羸し、
望を承くる無きに 各兩手を擧げ、啼號して眠らず天曉に徹す。」

卷の第十九

車匿等還品第二十三の中

爾の時、摩訶波闍波提、及び瞿多彌は、既に、太子の髻裏明珠、傘蓋横刀、幷に摩尼寶もて莊嚴せる蠅拂、自餘の瓔珞、乾陟馬王及び車匿等を見、是の如く見已り、心に大に驚怖し、各、兩手を擧げて身體を搥拍し、憂愁して車匿に問うて言はく、『今、我が愛する所の子、悉達多は、何處に留在し、汝自ら廻還せる。』車匿報じて言はく、『國太皇后、悉達太子は、五欲を棄捨し、道を求めんが爲めの故に、出家して山に入り、親族を遠離して、剃髮染衣し、思惟苦行す。』是の時、摩訶波闍波提、車匿の是の如く語るを聞き已り、譬へば〔一〕牸牛の、其の犢子を失ひし如く、悲泣號哭して、自ら勝ふる能はず。其の摩訶波闍波提、車匿より、太子の語を聞き、亦、復、是の如く、卽ち兩手を擧げ、心、驚怖に裂け、口に大唱して言はく、『嗚呼我が子よ、嗚呼我が子よ』と。淚、滿面に流れ、遍體戰慄し、忽然悶絕して、身、躃れ倒仆れて、土中に宛轉し、魚の、水より出でて陸地に在り、跳躑苦惱するが如

〔一〕牸はめうし。

く、摩訶波闍波提も亦、復、是の如く、地に躃れて宛轉し、〔二〕嗚噎して語り、車匿に問うて言はく、『車匿、我、今、自身に過有り、及び心口に失ありて、汝に〔三〕負特するを見ず。汝、今、何故に、忽ち我が子を將て、曠野に擲棄すること、猶ほ木を〔四〕擺つるが如く、汝、我が子を將て、彼の林内に置き、種種の諸惡蟲獸恐怖の中に、獨自に住ましめ、汝、棄捨し來りて、我が子を憐まず、身、背けるか。』車匿、報じて言はく、『國大夫人、奴身、敢て、太子を棄捨せるにあらず。夫人、太子は自ら奴を棄捨せるなり。太子は、我に乾陟馬王及び諸瓔珞を付し來り、廻還して、速に疾く家に向はしむ。大夫人の、心に憂愁を生ぜんを畏れ、安隱にして、惱患無きを得しめんとの故なり。』時に彼の宮中の諸婇女等、各啼哭し、口に唱へて、『嗚呼阿爺』と言ひ、或は、復、唱へて、『嗚呼兄弟』と言ひ、或は、復、唱へて、『嗚呼大家』と言ひ、或は、復、唱へて、『嗚呼我が夫』と言ひ、〔五〕此の種種愛戀の酸言を以て、欲染の根本より、叫喚して身を苦しめ、或は婇女の、目を轉じて哭する有り、或は婇女の、相視て哭する有り、或は婇女の、身を廻らして哭する有り、或は婇女の、頭を擧げて哭する有り、或は、面目を相視て哭する有り、或は、兩手にて肚を拍ちて哭する有り、或は、兩手にて心を撫して哭する

【二】噎はむせぶ。
【三】特 或は持に作らる。
【四】擺 兩手振擊也、ふるふ、おす。
【五】（原文） 以此種種愛戀酸言、欲染根本叫喚苦身

有り、或は兩臂を以て、相交へて哭し、或は兩手を舉げ、頭を拍ちて哭し、或は灰土を以て、頭を坌して哭し、或は髮を散じ、面を覆ひて哭する有り、或は鬢髮を拔き、低頭して哭し、或は兩手を舉げ、天を仰ぎて哭し、或は婇女の、悲苦を以ての故に、東西南北に、交横に馳走して、猶ほ野鹿の、毒箭に射られたるが如き有り、或は婇女の、衣を以て面を覆ひ、叫喚して哭する有り、或は婇女の、遍體戰慄して、猶ほ風の、芭蕉樹の葉を吹くが如く、低昂して哭する有り、或は地に倒れ、悶絶して知らず、少しく餘命有りて、纔に聲を出して哭する有り、或は婇女の、魚を水より出だし、陸地に擲置するに、宛轉して臥し、微に喘息あるが如く、劣餘の殘命もて、(六)綿惙して哭する有り、或は婇女の、猶ほ樹を掘りて倒せるが如く、臥して地に在り、宛轉して哭する有り。諸の是の如き等の、種種の苦惱、以て身を逼切して、太子を號哭す。是の時、車匿、及び馬乾陟、幷に彼の無量百千の婇女の、哭泣する聲は、聞くを得べからず。摩訶波闍波提、流淚悶絶し、少しく蘇りて卽便ち太子を大哭し、口に是の言を唱ふ。『嗚呼我が子よ、嗚呼我が子よ。汝の身は、本時より、種種の香を以て、摩塗揩拭し、威神大德にして、用て莊嚴せり。今は云何ぞ山谷に在りて、諸の蚊虻、細小の毒蟲に、汝の身を(七)唼唻せられ、能く此の苦を忍んで、

【六】綿。つらなる、ながくして絶えず。惙は憂也、亦意不定也。うれふ、つかる。

【七】唼はすする、くらふ。唻はすふ。

曠野に任せん。嗚呼我が子よ、汝の身は、恒に、迦尸迦衣薫香を以て覆はれしに、今、云何ぞ、麤澁の臭衣を、能く身に著くるに忍びん。嗚呼我が子よ、汝、家に在るの時、清淨の妙香、百味の作せる種種の羹臛、潔白の食のみにて、自餘の惡雜を曾て口に向けざりしに、今云何ぞ、麤澁冷淡の食飲を食するに忍びん。或は飯、或は麨、或は麪、或は漿を、〔八〕云何ぞ、空しく此を餐ふも、能く下すを得ん。嗚呼、我が子よ、宮内に在りては、細滑なる牀敷、柔輭なる氈褥あり、或は天衣を覆り、或は復、兩邊に倚枕を挾置し、或は臥し、或は偃して、隨意自在なりしに、今、云何ぞ赤露の地、或は棘針の叢、麤草の上に在りて、臥眠するを得るに忍びん。嗚呼我が子よ、家に在りし時、或は奴婢有り、或は左右有りて、恒常に供承し、哀愍の心もて、或は身を倚する有り、或は胡跪する有り、或は地に立つ有りて、汝に向ひて面觀し、奉事して、乏少する所無きを得たるに、今、云何ぞ瞋恚の人の、或は貧窮なる有り、或は焦煎なる有りて、汝に向ひて慈無きに、汝、何ぞ能く觀じて、其の意氣を取らん。嗚呼我が子よ、家内に在るや、妙華色の、喜ぶべく端正なる婇女の群隊を以て、左右に圍遶し、快樂を受けたるに、汝、今、云何ぞ、山曠に在りて、猶ほ野獸の如く、恒常に恐怖し、獨坐獨行して、心に乃ち娛樂せん。嗚呼我が子、善生羅網に覆はれたる長直の脚指、柔輭なる脚

【八】（原文）云何空餐此能得下。

(九)踝踹脛、猶ほ鹿王の如く、掌底柔輭にして、蓮華の華の如く、二輪莊嚴して、分明顯著なりしに、今、汝、云何ぞ、是の如き脚跡にて、徒跣にて地を蹈まんに、或は棘針有り、或は沙礫有り、或時は氷凍し、或時は炎埃なるを、何ぞ、東西に、此を將て行涉するに忍びん。』是の時、摩訶波闍波提、是の如き等の無量無邊諸種の語言を作し、太子を哭し已り、心薄く穌醒し、本念に復するを得、地より起ち、車匿に言つて言はく、『車匿、此の事已に然り。我が子、悉達、路を行くの時、汝に向つて何をか囑せる。車匿、我が子所有の、柔輭青色紺黑の頭髮を、復、誰か割れりや。車匿、我が子の頭髮は、今、何處にか在る。』車匿、報じて言はく、『國大夫人、妃子、悉達は我に語を囑して言はく、「車匿、汝、我が家に至り、我が爲めに、慇懃に我が母、摩訶波闍波提を再拜し問訊し、若し再拜し已らば、是の如き言を作し、大母に諮啓せよ。願はくは、大に愁ふる莫く、苦惱を生ずる莫く、我を憶ふ莫かれ。子は久しからずして、心の如くに願ふ所を得、得て卽ち廻還し、大母を奉覲せん」とて、其の聖子、手にて自ら刀を拔き、左に頭髻を執り、右手に刀を持ちて、自ら割截し、虛空に擲ぐるや、諸天接取し、將て梵天に還る。供養せんが爲めの故なり。』是の時、摩訶波闍波提、既に車匿の、是の語を作すを聞き已り、復、更に重ねて、太子の髮髻を哭す、『嗚呼、我が子の頭髮、甚

【九】 踝はくろぶし。踹はくびす。

だ長くして柔軟、螺髪は極めて能く端正、一一の毛孔に、一毛旋生し、亂れず斷せずして、王冠を著し、王位を受くるに堪へたるを、汝、今、何ぞ割截して擲棄するを忍べる。嗚呼、我が子の兩髀は、甚だ長く、行歩庠序として師子王の如く、兩目圓滿にして猶ほ牛王の如く、身體は金色に、（一〇）胸髆は寛大に、聲音隱隱として、鼓の如く、雷の如し。是の如き人は、何ぞ出家して山野に在るに堪へん。今、我が此の地に、福相有ることなく。若し是の人、如法の行を行じて、此の地に倒れ已らんか、復、起ちて、世の爲めに主と作る能はじ。（一一）我、一切有德の人、諸功德を具せるものに願ふ、法王の、世に出現するに値ひ、諸大衆をして、安隱快樂ならしめよ。』而して偈有りて說く、

『必ずそれ此の地に福有ること無くば、應に是の智慧の人を生ずべからず。既に是の如き功德身を現せり。應當に世の爲めに聖主と作るべし。』

爾の時、耶輸陀羅、大聲に叫哭し、一たび瞋り、一たび罵り、雜種の語音もて、車匿を呵責し、是の如き言を作す、『車匿、我、婦女人、年少にして、夜半に睡眠沈重して、覺知する所無かりき。汝、今、我が心中に愛する所の如意の聖夫を把り、將て何處にか置ける。車匿、此を去る近きか、遠きか。我の聖主、善大丈夫と、幷に汝と及び馬と、三、平等に行き、車匿と乾陟と、唯

【一〇】髆。かたぼね。
【一一】（原文）我願一切有德之人、諸功德具、值於法王出現於世、令諸大衆安隱快樂。

二は獨り來りて、我が前に在るも、我が心所愛の聖主を見ず。是の故に、我、今、身心戰慄す。車匿、汝は善人に非ず、我を潤益せず。車匿、我、今、要言す、假使、酷暴極瞋の怨家なりとも、猶ほ、是の如く損害せんこと、汝が、今日、我を躓頓するに似る能はじ。車匿、汝の如きは、これ我が歸依する所のもの、應に我を覆護すべく、應に我を養育すべきに、汝、今、云何ぞ、我、夜半に惛亂睡眠するを見て、汝、私に竊偸し、我が聖主を將て、何處に向ひて著せるか。車匿、卽ち、汝は、今、これ最大の怨讎なり。作す所の事、今、已に訖了る。汝、復、何ぞ懊惱啼哭するを須ひん。汝、宜しく面を拭ふべし。何ぞ用て强ひて悲しみ、虛しく目に淚を灑ぐか。車匿、汝の不善の業は、今や作し已竟りぬ。哀を須ふるを假らざれ。車匿、汝は我が聖夫の善友たるを以て、禁節の入出に、行く可きは則ち行き、不可なれば則ち制せるを、今、反りて相從ひ、我が聖主をして、意に隨つて出でしめたり。車匿、汝を用つて何をか爲ん。汝、今、是の不善事を作し已り、應に須らく歡喜すべし。我、汝が、今、大に果報を獲、大に福利を得るを知る。車匿、凡そ世間の人、寧ろ智有るを取りて、以て怨家と爲し、愚癡を將て共に朋友と作さず。車匿、汝は我が夫の處に於て、友たりと雖も、汝が作せる事や、曾て思惟だもせざりき。所以は何に車匿、汝、我が家に於て、今、已に不利益の事を造作しぬ。汝は今、應當に大慶幸を生ずべし。車

匿、此の諸宮殿は、高峻莊嚴にして、猶ほ雲隊の如く、復、種種瓔珞を以て厠塡し、財寶充滿するも、今、汝の爲めの故に、悉く皆、空虛たり。』即ち車匿に向ひ、偈を說きて言はく、

『凡そ人は寧ろ智慧の怨に近づくとも、愚癡を取りて朋友と作す莫らん。
汝の事を作す思審せざるに由り、我が合家をして苦惱に煎らしむ。』

爾の時、耶輸陀羅、是の偈を說き已り、重ねて車匿に語りて、是の如き言を作す、『車匿、我、今、何ぞ、心に憂愁せざるを得ん。(三)向に我が夫の、若し相對するに當りてや、今日の此等の諸婇女輩、色の白きこと雪の如く、脣の赤きこと朱の如く、喜ぶ可きこと雙少なく、端正第一なるが、身の瓔珞を解き、妙衣裳を脫して、應に須らく、共に同じく諸欲樂を受くべかりしに、誰か知らん、一朝孤寡と成り、主無きを以ての故に、眼の淚、晝夜、恒に水流の如く、啼哭呼號して、常に斷絕する無からんとは。車匿、又此の乾陟も、我と、長夜、恒に怨憎を作して、利益を爲さず。我の、忽に夜半に睡眠して知らざるを見、我が心中所愛の主を負ひ、城より出でたり。此馬の作業は、極深不善なり。何の故に、今、我が前に在りて、苦痛して鳴き、聲をして大王の宮內に遍滿せしむる。其の先に、我が聖子を將て出でし時、此不善の馬よ、何故に默然として、氣を飲みて行け

【三】（原文）向者我夫、若當相對、今日此等諸婇女輩、色白如雪、脣赤如朱。

る。若し初め去る時、是の如く鳴喚せば、彼の時、卽ち應に其の聲響を聞きて、諸人睡より覺むべく、我も、今、亦、應に、是の如き大苦惱の事を見ざるべし。此の不善の馬よ、假使、箭にて射、穴を其の身に穿ち、或は杖を以て殺すとも、應に出でて行き、山林に向ふべからざりしなり。是の故に、此の馬、我が家の爲めに利益を作さず。正に少鞭杖を畏懼せるを以ての故に、我が心内所愛の最上聖主丈夫を將て、出でて山藪に向へり。我が今の此の宮は、主無きを以ての故に、堂殿房室・聚落・城隍・國邑街衢・樓閣牕牖・門閤欄楯・曲尺琅玕・半月殿形の微妙殊勝・最上華麗なるも、今、悉く空虛なり。此の馬王惡乾陟の爲めの故に、我が皇闈をして、猶ほ曠野の如く、擧目灑地、處として貪るべき無からしめたり。』耶輸陀羅、是の如き多種の苦切・痛楚・悲泣・酸哽の言を作せる時、聞見すべからず、迷悶して暫らく停る。

其の車匿、耶輸陀羅の是の言を作すを聞き已り、低頭屛息し、十指掌を合し、涙を垂れて大哭し、聖子の妃、耶輸陀羅に報じて、是の如き言を作す、『妃、今、應に乾陟を呵責すべからず。亦復、我を瞋罵す合らず。我、過失無し。我及び乾陟は、實に罪咎無し。妃の聖夫の、初始めて去れる夜、我、多種衆諸の障礙を作し、所謂唱叫せり。我、爾の時に、大聲もて妃を喚び、種種の語を以て、是の如き言を作せり、「大妃、速に起きよ、大妃、速に寤めよ。今夜此の宮より、妃の愛

する所の夫は、我及び乾陟を將ゐて去らんと欲す」と。』手に頭髮を執り、一一出して耶輸陀羅に示す。『此頭髮は、爾の時、我、某婇女より拔き取りぬ。此はこれ某甲婇女の頭髮、此はこれ某乙婇女の頭髮なり』とて、各各名を稱へ、而して告げて彼に語るらく、『爾の時、覺めざりき。自餘の婇女、一切悉然りき。是の乾陟馬も、聖子の去らんとせる時、亦障礙を作し、一千餘遍、聲を出だして鳴喚し、蹄を以て地を踏み、前むも卻くも、（共に）行かず、又、以て車に〔三〕頷き、鼻を張りて震吼せり。此の馬、鳴く時、其の聲の聞ゆる所、半由旬に至り、其の蹄聲は一拘盧舍に聞ゆ。我、爾の時、唱へて妃に語り、「妃の所愛は、今夜去る」と言へるも、妃及び其の餘の諸婇女等、自ら是の如き等の聲を覺知せず。又、是れ、諸天の神力が、隱沒して聞くを得しめざりしなり。大妃、須らく知るべし。我及び乾陟は、實に敢て聖子を將て去れるにあらず。是の如く測度して、妃の聖主は、我が語を取りしや不やを知れ。聖子にして、若し我の語に依りて行せば、終に是の事無きなり。』即ち妃に向ひ、偈を說きて言はく、

『我今眼に淚の流るるに忍びず、合掌低頭して更に諮白す。
妃實に馬を呵責す合からず、幷に及び我が邊をも瞋るを得ず。』

【三】頷は、うなづく。

『大妃、我、昔、亦、淨飯大王の、舊、「一切左右、善く用心を加へて、太子を守護せよ」の嚴勅ありしを知る。我、先に、是の如き敎の有るを知ると雖も、但、自由ならず、諸天の力強くして、我が心意を迷はし、作さんと欲する所の事、心に從ふを得ざりき。(一四)聖子の所行は、並に天神の力。「宜しく出家すべし」と唱ふるや、爾の時、心に念ずるに、城門自ら開きぬ。彼の諸宮門は、從來、各多千人の衆有り、心、放逸ならで、諸門を守護せるに、彼等、皆、睡眠に著して覺めず。聖子の、初めて宮門を出づるの時は、日の初めて昇るが如く、大淨光を放ち、一切の暗を破りぬ。我、爾の時に、自ら此はこれ、諸天の所作なりと知れり。大妃、我、爾の時に、聖子の城を出で、路を行くの時、我、最も前に在り、徒歩して走りぬ。我、爾の時、身の、乏るるを知らざりき。大妃、此の乾陟馬も、路を行く時、脚、地を蹈まず、猶ほ人有り、舁きて將て行くが如くなりき。其の聲を作す時も、亦遠く聞えず。大妃、我、爾の時、私心に思念し、亦、此は是、諸天の所作なりと知りぬ。大妃、我、爾の時、聖子の、如法に、沙門の衣たる袈裟色服を樂み、他より乞ひて取り、其の自身の衣を、解きて他に付與し、髻髮を割截し、虛空中に擲ぐるに、地に落ちず、諸天接取せり。我、爾の時、心に念じて、これ諸天の所作なりと知りぬ。大妃、是の如くなるを

【一四】（原文）聖子所行、並天神力、唱宜出家、爾時心念、城門自開。

以ての故に、妃、今、應に我が輩の邊に、瞋恨を生ずべからず。所以は何に、我に由らざるが故に。亦、馬の、聖子を將て出づるに關せざるなり。」

爾の時、大妃耶輸陀羅、地上に臥して、少時思惟し、種種の語を以て、悲啼號哭して、是の如き言を作す、『嗚呼我が主よ、何故に、今、我、如法に行じ、孝順に、夫に向へるに、我を捨て去り、彼に向ひて法行を求めんと欲する。彼に正法無し。其の、法行に隨ふ能はざるを以ての故に。嗚呼我が主よ、彼を聞かざるべけんや。往昔の諸王、山林に向ひ、法を求めんと欲せる時、婦及び兒を將て、相隨へて去りしも、彼等諸王は、聖道を妨げらるる無く、亦成就するを得たり。嗚呼我が主よ、彼、豈に是の如き法有るを知らざらんや。諸人だも、猶尚、婦と共に頭を剃り、出家修道し、精勤苦行し、好馬を將て、諸天を祭祀し、無遮會を作し、未來世に、二人同じく上妙の果報を受けたり。若し(一五)韋陀論中の說法を知らば、何の故に、今、獨り、我が邊に、法を作すを慳惜み、共に法を行ぜず、咄咄、空しく往き、徒に人の中に生くる。若し世間の、共に、婦人に、恩愛の情有るを知らば、云何ぞ棄捨して、彼の三十三天に生れ、玉女を貪らんと欲するか。我が意。今、是の如きの事を見る。彼の天の玉女は、何の貪るべきか有らん。何の端正か有らん。何の五欲歡樂の事情か有らん。若し其

【一五】ヴェーダ Veda

れ彼の快樂を貪らずして、此の王位威神功德と、及び我等諸婇女輩とを捨て、既に棄捨し已りて出家し、空閑なる山林に入り、苦行を行ぜんと欲せば、我、今、天上の果報を取らず、亦、天の玉女の身を羨まず、我が心、足るを知り、我に是の力有り。我、此に在り、天に生るるを用ひず、但、此處に於て、苦行を修行し、是の如き願を乞ふ。若しくは人間に在り、若しくは天上に在るも、唯、願はくは、伏して汝の如き、主に事へんことを。彼の心、決定して、是の如く（二六）剛靭なり。若し我等を捨て、空山閑靜の林野に入らば、我が心も亦然り、堅固にして轉ぜざること、石の如く異る無く、最牢最實ならん。若し、我が今の如きは、夫無きの婦として、自が主の、家より出で、行きて山林に至るを見るを以て、我をして孤單、獨り空室に在らしむ。何ぞ、心をして破裂せざらしむるを得ん。』即ち偈を說いて言はく、

『我今身心甚だ大剛、鐵と石との如く異有る無し。
主は捨てて山に入り宮內空し。何の故に我今心破れざらん。』

爾の時、耶輸陀羅、是の如き因緣より、太子の爲めに、苦惱逼切し、心迷悶し、忽然地に躃れ、須臾にして還起ち、或時は聲を擧げて、悲哀號哭し、或時は默して住し、低頭して思惟し、或時

【二六】靭は鞕、或は硬に作る。かたし。

は忽ち驚きて、狂言漫語すらく、『彼はこれ我が夫なり、今、何方にか去れる。彼は我が聖主なり、今、何處にか停り、我をして（一七）孤煢、宮内に獨居せしめ、我を棄て、我を捐て、我を捨偝して行ける。我、今日より聖子を得ずんば、本牀に臥せず、亦、復、香湯を以て澡浴せず。亦、復、更に自身を莊嚴せず、（一八）楷摩拭せず、脂粉もて塗らず、又、更に雜色の衣服を著けじ。今より已後、雜種瓔珞の具を著けず、香華を以て身に熏佩せず、美食を食せず、美漿を飲まず、一切の酒等、悉く皆、飲まじ。常に食せる勝食を、今は更に食せじ。頭上の素髮、更に嚴治せじ。家に在りと雖も、恒常に山林の想を作し、苦行を行せん。乃至、彼の最上勝の大丈夫を見ざれば、我、一切の諸園・林池・泉水・殿堂を見るも、悉く塵土に滿ちて、猶ほ曠野の如く、一種も異るなけん。迦毗羅の聖子無きを以ての故に、一切の宮閣、一切の樓觀、悉く精光無くして、猶ほ、沙磧の如けん。』此の憂愁苦惱の心を以ての故に、自ら持する能はず、正念を失して、復、愧恥なく、復、羞慙無く、其の耶輸陀羅、臥して地上に在り、是の如き苦惱を作し、宛轉狂語せるの時、宮内の有ゆる諸婇女等、悉く皆聲を同じくして、叫喚大哭し、流淚面に滿ちぬ。而して偈有りて說く、

『是の如き苦惱彼に逼切し、婇女及び妃耶輸陀羅、

【一七】煢は孤、ひとりもの。
【一八】楷、摩拭すること。

各各相觀て眼に涙の流るること、猶ほ盛夏に大雨の降るが如し。』

爾の時、車匿、耶輸陀羅の、是の如き諸の苦惱を作すを見已り、諫めて言はく、『大妃、是の如き酸切の懊惱を生ずる莫れ。大に悲苦する莫れ。應に須く暫く停めて、聖子を憶ふ莫るべし。聖子の出でし時、人間に在りと雖も、天と異る無く、威神氣力、天と殊ならざりき。聖子の出でし時、諸天圍遶せり。右邊は則ちこれ諸梵天王及び梵の眷屬、左邊は帝釋及び諸の三十三天の眷屬なりき。其の東方に〔一九〕提頭賴吒・乾闥婆王有り。其の南方に〔二〇〕毗婁勒叉・鳩槃茶王有り。其の西方に〔二一〕毗婁博叉、及び諸龍王有り。其の北方に〔二二〕毗沙門天の諸夜叉を領する有りて、左右圍遶し、其の身、悉く金剛の鎧甲を著し、或は弓箭を執り、或は戟槊を執り、或は、復、聖子の前に在りて、道路を示現し、或は、復、後に在りて聖子を防衛し、或は左に在り、或は、復、右に在り、隨從して行けり。其の虚空中に、常に無量の諸天、玉女、百千萬衆有り、悉く大に歡喜して、其の體に遍滿し、自ら勝ふる能はず、天の雜華を將て、聖子の上に散じ、散じ已りて、復、散せり。是の時、聖子、彼等諸天玉女を見て、心内に、亦、復、喜ばず、樂まず、愛せず、瞋らず、取らず、觸れざりき。

【一九】提頭賴吒(Dhṛtarāṣṭra)。持國天。
【二〇】毗婁勒叉(Virūḍhaka)。增長天。
【二一】毗婁博叉(Virūpākṣa)。廣目天。
【二二】毗沙門(Vaiśravaṇa)。多聞天。

其れ聖子の情は、是の如く、彼等の用ふる所に著せず。國母大妃、聖子の出でし時、諸天は、是の如く神通を示現し、有ゆる諸事もて、聖子を供養したり。我、今、一一、具說すべき難し。』

是の語を說き已はるや、時に、第二妃、瞿姨聖女は、譬へば大樹の枝の、折れて下垂し、自ら擧がる能はざる如く、瞿姨聖女も、太子の爲めに、大苦惱を受け、其の心、煩毒し、彼の憂愁の爲めに、熱火に燒かれ、遍體戰慄して、地上に臥し、宛轉大哭して口に是の言を唱ふ、『嗚呼我が主、心常に歡喜したり。嗚呼我が主、面、滿月の如かりき。嗚呼我が主、端正にして雙少なかりき。嗚呼我が主、最上最勝にして、諸相具足せり。嗚呼我が主、清淨の身は、世間に比無く、支節缺けず、次第に善く生じて、猶ほ金像の如かりき。嗚呼我が主、功德最勝なりき。嗚呼我が主、大慈大悲にして、天人の供する所なりき。嗚呼我が主、勇健多力なること、(二三)那羅延の如く、怨敵有ること無く、能く彼を降伏したり。嗚呼我が主、梵音微妙にして、聲を出せば、猶ほ(二四)迦陵頻伽の如かりき。嗚呼我が主、名稱遠く聞えたり。嗚呼我が主、百種の莊嚴福德の聚にして、天人世に、與に等濟しき無かりき。嗚呼我が主、功德圓滿、諸仙見て、悉く皆、歡喜したりき。嗚呼我が主、名は上下四方(二五)四維に聞え、悉く皆、尊び、遍ねく、供養の聚、知慧林の

【二三】那羅延(Nārāyana)婆羅門敎の天即ち神の名。毘紐の異名。
【二四】迦陵頻伽(Kalaviṅka)。
【二五】四維、四隅のこと。

如くなりき。嗚呼我が主、世間中に於て、舌味最上なりき。嗚呼我が主、口脣紅赤にして、(二六)頻婆果の如かりき。嗚呼我が主、雙目紺餤にして、青蓮花の如くなりき。嗚呼我が主、口の四十齒清淨潔白して、乳の如く、練の如く、雪の如く、霜の如かりき。嗚呼我が主、鼻、高隆にして、直に、猶ほ鑄金の(二七)鋌のごとかりき。嗚呼我が主、眉間の白毫、正しく住して清淨なりき。嗚呼我が主、(二八)兩髆は團厚・寬廣・齊平、腰は細くして纖長、猶ほ(二九)弓弝の如く、手足柔輭なりき。嗚呼我が主、(三〇)腨脛臂肘は、猶ほ象鼻の如く、手足正等に、爪は皆紅赤なりき。嗚呼我が主、此の瓔珞は、吉星吉宿の日を看て、作せる所、大淨飯王、之を造作せる時、大歡喜を生じたるに、今、何の故に、乃ち別離を得たる。我も今、亦、復、此の瓔珞を見るを憙ばず。』

時に瞿多彌、苦惱の心を以て、數數恐怖し、數數驚惶し、猶ほ野鹿の、他に駈逐せられて、圍の內に落ちんに、手に刀槊、或は、復、弓箭を執り、用て其の身を射るや、大苦惱を受けて、東西に馳走し、四方を觀察すれど、能く救護して免脫せしむべき無きが如し。時に、瞿多彌の心も、亦、復、然り。語言不正、宮內に在りて、自ら殿中を討ね、東西南北に、求覓めて得ず、悲叫泣聲し、淚は滿面に流れ、救護有ること無く、大苦惱を受く。復、大

【二六】頻婆果（Bimbara）。
【二七】鋌（短き矛）、或は挺（てこ）に作る。
【二八】髆はかたぼね。
【二九】弝はゆづか。
【三〇】腨はもも。

に唱へて言はく、『聖子の此に在るや、此の處、猶ほ忉利天宮の如く、一種も異なる無く、諸物具足し、亦、帝釋の、威德巍巍、光明熾盛なるが如かりしに、今や、悉く失せ盡しぬ。聖子忽然として無きを以ての故に、其の城、猶ほ〔三〕尸陀林の如く、或は山澤の如く、或は曠野の如し。我、此の宮殿の中に在りて、聖子と共に、無比の樂を受け、大歡喜を生じて、厭離有ること無かりしを、今は聖子無くて、意、樂著せず。譬へば魚鼈の、水中より出で、陸地に居在する如く、暫くの樂有ること無し。何に況んや意樂をや。我も、亦、是の如し。聖子無きが故に、何ぞ心に樂しむ有らん。猶ほ、春を過ぎたる諸蜂の樂無きが如し。華無きを以ての故に、彼の林に著せず、彼の樹を貪らず。我も、今、亦、然り。聖子無きが故に、此の室內・何の歡樂か有らん。嗚呼我が主、坐起の處、恒に音聲を作し、宮中の婇女、歡喜心を以て、大歌舞を作せしを、今、此の宮殿は、一種も殊ならざるに、我をして忽ち憂苦を生じ、心意歡ばざらしむ。何に況んや伎樂をや。嗚呼我が主、身に微妙種種の香華を著し、瓔珞もて自ら嚴り、塗香・末香、時に隨ひて供足して、乏少する所無く、應に正しく樂を受け、稱心歡喜すべきに、云何ぞ忽然棄捨して去れる。譬へば虛空の、大雲隊を起し、閃電雷鳴して、大雹雨を放てるが、忽然と現ぜざるが如し。聖子も、亦、然り。次で王位を受けて、應に須らく

〔三〕尸陀林、死屍を委棄する處、即ち塚間のこと。

樂を受け、短乏する所無かるべきに、棄捨して去りぬ。必ず、我、往昔、精妙に施し已りて、心に還、悔を生じ、心に悔いたるを以ての故に、今、是の報を得るならん。果報を受くること、無量深善なりしと雖も、忽然として、復、失ひ、悔業を以ての故に、今、寡身と成る。我、今、薄福にして、是の如き最上の勝人を失ふ。咄、此の恩愛、會して多時無く、須臾にして便ち失ふ。猶ほ戲場に、大歡樂を作して、忽然に、還、散ずるが如く、現事も此の如し。又、傳へ聞道く、往昔、王仙、寂靜を修習し、諸根を制伏し、禪定を證せんとて、彼の空林に至り、一切を斷じて殺し、身專ら苦行し、諸の妙藥及び甘果を食し、隱れて山藪に處するに、婦と共に相隨ひて梵行を行じたりと。今、彼、何の緣ぞ、獨、山野に向ひて、自ら精勤するか。』

時に瞿多彌、乹陟の頭を抱き、聲を擧げて大哭すらく、『嗚呼、乹陟、慈無き馬よ、汝と一時同生の聖子は、今、何處にか在る。汝、復、何の故に、夜半に將て去り、我に語りて知らせざりしぞ。』車匿を呵責して、是の言を作す、『咄、汝、車匿、特に慈心無し。我、既に睡眠せば、何の故にか喚ばざりし。此は、既に、これ、我が心中に愛せる所、今、忽ち捨てて去るに、汝、何を以ての故に、我に語りて知らせず、我をして長久に獨眠り、獨坐して、眞實に大苦せしむるぞ。咄、汝、車匿、我の爲めに論說せよ。聖子の去る時、云何にして行き、復、誰か將て引き、此の

宮に在るを、これ誰か導き出し、行きて何方に向ひ、今、何所に至りしか。』妃瞿多彌、是の如く車匿を呵叱して責め已り、復、更に、和軟に、車匿に語りて言はく、『事、既に、以に然り。汝、善車匿、汝、親しく送り來りて、聖子の處を知らん。汝、我等を將ゐて、彼の所に往詣せよ。我等の身も當に聖子に隨ひ、苦行を修習し、專精に求道して、還、來生は、聖子と共に、同じく天上に生ぜんことを望む。』

爾の時、車匿、瞿多彌の、是の如く種種に瞋りつ喜びつする言を聞き已り、心に悵怏を生じ、倍、更に憂惱し、苦痛熾盛に、其の身に逼切し、涙、滿面に流るるも、強く自ら抑忍し、安庠として瞿多彌の心を慰喩し、是の如き言を作す。『願はくは、妃、善く聽きて、但、憂愁する莫れ。亦、復、須らく是の如く哭泣すべからず。計るに、應に、久しからずして聖子を見るを得べし。所以は何ぞ。聖子の、我を遣し還す時に當り、我に語りて言はく、「汝、車匿、去りて宮内に至り、我が爲めに、一切眷屬、幷に我が妃等、及び諸釋種童子知親を問訊せよ。我、故に汝を遣はし、廻還して宮に向はしむ。彼等を慰喩し、我が爲めに彼に語りて、是の如き言を作せ——我、今、已に貪恚癡の網を除き、久しからずして當に知慧等覺を成じ、〔三〕成じ已らば、卽許に廻り返還りて、迦毗羅城

〔三〕（原文）成已卽許廻返還入迦毗羅城、我知聖子、決得利智、稱心等願、廻還不疑。

に入るべし」と。我、聖子の、決して利智を得、稱心等願にして、廻還せんこと、疑はざるを知る。定めて知る、是の如き最勝の衆生の、虚妄に語らざるを。』

時に、淨飯王、是の如く苦惱し、其の宮裏に、諸天を祭祀せんとて、所作已に辦ずるや、遙に太子の宮閤の內に、大叫哭の聲を聞き、王、卽ち自らの宮殿より出づ。是の時、車匿、卽ち太子の瓔珞傘蓋、幷に馬乹陟を將て、牽きて王前に詣り、一一、太子より承けし命を顯示す。慇重の囑の故に、頭面もて、淨飯王の足を頂禮し、涕涙交流れ、嗚咽滿面、具に依て奏知す。時に淨飯王、其の太子の諸寶瓔珞、幷に及び傘蓋、馬乹陟等を見、兼ねて復、太子の囑せる所の恩慈の言語を聞き、覺えず、忽然大叫唱呼し、聲を失して大哭し、是の如き言を作す、『嗚呼我が子、心中に愛する所よ。誰か是の如きを期せん。』時に、淨飯王、太子を念ずるが故に、憂苦身に切り、迷悶して地に倒れ、醒覺する所無し。而して偈有りて說く、

『王・菩薩の誓願の重きを聞き、及び車匿・乹陟の還れるを見、
忽然迷悶して自ら身を撲つこと、猶ほ帝釋の喜幢の折るるが如し。』

爾の時、淨飯王宮の有ゆる釋種諸親族等、淨飯王の、身撲ちて地に倒れたるを見て、彼等、皆、悉く、大に、憂苦を生じ、心暫くも樂しむこと無く、各自聲を擧げ、號咷して哭し、口に種種

悲苦の言を唱へ、大叫大呼すること、上に說く所の如し。

時に迦毗羅城內の有ゆる人民、大小ともに、其の、聖太子に別離せるを以ての故に、各各〔三〕宛と稱して、大聲に哭し、太子を思念す。是の如き次第もて、諸眷屬等、齊しく共に淨飯王を慰喩す。時に、淨飯王、太子を憶ふが故に、憂惱の心、暫らくも捨つる能はず。諸親族等、或は言說もて王に開解する者有り、或は王を扶けて起坐せしむる有り。而も王は坐すと雖も、少時にして、還、倒れ、悶絕して醒めず、或は時に暫らく穌して、啼淚滿面にして、車匿に勅して、是の如き言を作す、『汝、車匿、何の故に太子を遣して、宮に還らしめざる。』

時に其の車匿、即ち王に白して言く、『大王、當に知るべし、我も、亦、大に慇懃の方便を作し、聖子をして、意を降して歸還せしめんと欲せしも、但、聖子の心は、世間中所有の俗法に染著する所無く、一切を棄捨して、心に樂しむもの有ること無し。即ち、我に語りて言はく、「汝、我を諫むる莫れ。我、今、一切の五欲を用ひず。一切の眷屬國城を棄捨して、唯、山林泉流の靜處を樂む」と。』時に、淨飯王、重ねて、車匿の、是の語を作すを聞き已り、兼ねて、太子の諸瓔珞の、地上に具在するを見て、身、即ち頂禮し、滿面に淚流れて、大聲に哭し。車匿に語りて言はく、『我、今、力、窮まりて、復、意氣無

【三】宛は古文に怨に作る、枉也、曲也、屈也、亦不理也。（慧琳）

く、手足悉く折れて、猶ほ杌株の如し。我、今、此の愛子に別離せるが故に、樹の、枝無くして、唯、根榦のみ在るが如し。外の諸國に、今は輕欺せられん。又、我、單身にして、能く作す所無し。樹の、雹を被りて、諸小兒の、戲弄する所と爲るが如し。嗚呼、我が子、最上最勝、微妙の丈夫、喜ぶ可き形容、端正にして匹無き、柔軟の童子よ。心願に違離して、何の故に出家し、五欲を棄捨して、心に樂しむ所のもの、我に背きて去れる。嗚呼、我が子は、諸相具足し、百福莊嚴して、一一の相中、皆、竝に悉く備はれるを。嗚呼、我が子は、身體の諸好、皆、悉く遍滿せるを。嗚呼、我が子は、諸婇女の、睡眠して覺めざるを伺ひ、忽然として出でぬ。嗚呼、我が子の、昔、宮內に在るや、我に一の愁無かりき。嗚呼、我が子は、諸王家の勝なりしを。嗚呼、我が子は、上世以來、恒に諸王上族の中に在りて生れしに。嗚呼、我が子は、何の故に、忽ち王位を捨てて出家せる。嗚呼、我が子は、恒に多人の喜びて見る所たり。若しくは男、若しくは女、老嫗も、丈夫も、眼に瞻視する時、歡悅せざる無かりしを。嗚呼、我が子は、善巧多智なりしを。嗚呼、我が子は、四方、及び諸七寶と、一切の眷屬とを棄捨して、獨自出家しぬ。嗚呼、我が子は、猶、白象の、大樹木を破るが如く、宮に背きて出家しぬ。嗚呼、我が子よ、汝の、宮を出でし時、所有る城門、開き難く閉ぢ難く、設し開閉する時は、其の聲、遠く徹するに、

云何ぞ、今、我をして聞かざらしめたる。これ決して當に諸天、彼の響を隱蔽せるなるべし。嗚呼、我が子よ、今、此の處、迦毗羅城の、諸釋種子は、望むべき所無し。汝、悉達が、捨して出家せるを以ての故に。嗚呼、我が子は、迦毗羅城の諸釋種子の、有ゆる資財・金銀珍寶・穀麥の倉庫・自餘の錢物を、能く棄捨するを得たること、猶、涕唾の如くにして、背いて出家しぬ。嗚呼、我が子よ、我、汝の爲めを以て、春夏秋冬諸時の殿を造れるを、汝、今、云何ぞ棄捨して行き、曠野無人の處を娛樂し、唯、諸獸と、山林を樂と爲るか。嗚呼、我が子よ。昔、諸仙は、二種に〔三四〕授記しぬ。是の因緣を以て、我、昔、歡喜、其の身に遍滿して、自ら勝ふる能はず、我、爾の時に於て、覺えず、兒の二足を頂禮せしを。嗚呼、我が子よ、汝、今、出家して、護城の諸神、悉く皆、此の城を棄捨して去りぬ。嗚呼、我が子は、面の圓なること、月の如かりき。嗚呼、我が子は、牙齒白淨、目は牛王の如かりき。嗚呼、我が子よ、昔、汝の語を聞き、心に歡喜を生ぜしを、今日憶想して、反つて憂苦を成す。嗚呼、我が子は、恒に妙好の〔三五〕多伽羅香〔三六〕栴檀・沈水・牛頭栴檀を以て、用て其の身に塗りき。種種の瓔珞もて、莊嚴せる所の身、末香・薰香・燒香に薰ぜられし柔輭の體、今、忽ちに見えず。嗚呼、我が子よ、愛戀の心、我が皮・肉・筋・脈・骨髓に徹して、

〔三四〕授記は豫言のこと。
〔三五〕Tagara タガラ
〔三六〕Candana チャンダナ

中に在りて住せしに、今、忽に捨して出で、山林の間に入りぬ。」

巻の第二十

車匿等還品第二十三の下

時に、淨飯王、復、是の言を作す、『我、今、心に願ふ。諸衆生を護る、四方護世神王よ。今、我が子の、利益を成さんが爲めの故に、恒に相佐助せよ。千眼の天王、(一)舍脂の夫、大力天王なる天上の帝釋、及び左右を圍遶する諸天衆よ。願はくは我が子の、有らゆる心求の爲めに、願はくは佐助を作せ。又、世の諸神・風神・水神・火神・地神、四方四維の彼等諸神よ。皆、佐助を作せ。汝、最勝者、無上丈夫よ、何の故に四大天下を棄捨せる。彼の我が子は、今、捐てて出家し、無上極妙の聖果を志慕す。其の欲求する所を、願はくは速に成就し、阿耨多羅三藐三菩提道を、早く證明せしめよ。』

其の淨飯王、地上に臥し、種種の語を以て、乾陟を呵責し、是の如き言を作す、『汝、不善の馬よ、從來、多種に、我が爲に、愛樂の事を作せるに、今日、何に緣りてか、忽ち饒益せずして、是の如く、釋種の家を損害せるや。我の太子、恒常に汝を愛し、我が心と合して、常に歡喜を作

【一】舍脂(シヤチー)(Saci)。

せるに、汝、今、是の如し。汝、須らく汝を覆滅すべし。汝、我を將て、太子の處に向ふ可し。我、愛子と共に、共に苦行を行せん。我、今、所愛の子に離別せるが故に、命、須臾に在り、久しく存活せじ。』而して偈を說いて言はく、

『乹陟 汝 馬速疾に行き、我を將て彼に詣り還迴返せしめよ。
我に子無きが故に命活き難く、重病人の醫を得ざるが如し。』

時に淨飯王、是の語を說き已り、愛子に因るが故に、苦切に逼られ、臥して地に在り。是の如き等の苦惱を受くる事を作し、聲を擧げて大哭し、乍ち撲ち乍ち起ち、言音哽咽す。爾の時、一智慧大臣幷に及び國師婆羅門等有り、淨飯王の、地に宛轉し、左に倒れ右に扶け。心、大に愁毒し、悲苦纏迫して、意、暫くも歡ばず、身心一時に、大熱惱を生ぜるを見て、其等は、王の意を開解せんと欲するが故に。故らに、自ら憂愁無き顏色を現じ、共に王に白して言く、『大王、今、宜しく諸の憂愁苦惱を捨つべし。自心を定めて、須らく健想を作すべし。應に是の如く悶絕して自ら撲ち、猶ほ凡人の涕泣流淚するが如くなるべからず。所以は何ぞや。大王、當に知るべし、昔の如き、過去に、多く、諸王あり、王位を棄捨すること、萎める華鬘の如く、偝きて山に入れり。又、復、大王、太子悉達の宿緣は、當に是の如き業報を受くべきなり。大王、今、應に、往

昔、阿私陀仙の、其の記を預授し、大王に白して、「彼の童子は、拘むるに人天の果報、幷に及び轉輪聖王の位を以て、之を期待し、貪愛をして暫くも世に住まらしむべからず」と言へり。大王、今、若し決定して太子を喚び還さんと欲せば、但、我等二人に勅して去らしめよ。當に王命に隨ふべし。終に敢て違せじ。』時に淨飯王、卽ち之に報じて言く、『汝等二人、若し時を知らば、速疾に往きて、太子の邊に至るべし。若し爾らずば、我、今、身命、吉祥有ること無く、諸苦惱の纏逼する所とならん。』是の時、大臣幷に及び國師婆羅門等、淨飯王の是の如き勅を聞き已り、卽ち共に發して行き、太子の所に詣らんとして、偈を說いて言はく、

『太子應に是の如き業を受くべし。王當に昔の私陀の言を念ずべし。
記すらく「彼天の轉輪だも貪らず。寧ろ人間の五欲の樂を樂まんや。」と』

時に彼の大臣及び國師等、是の語を說き已り、相與倶に行く。其の馬、乾陟、處處に、上の如き苦切呵責の言を聞き已り、意甚だ憂愁して、大熱惱を生じ、熱惱を以ての故に、暫時も歡ぶこと無く、心旣に歡ばず、卽便ち命盡き、命の盡きたる後、時に應じて三十三天に上生す。旣に彼の天に生れ、後に、如來の、成道を得已れるを知り、卽ち彼の天を捨て來りて、中天竺國の那波城に下生す。其の城に一婆羅門種有り、具に六法を行ず。卽ち彼の家の爲めに、子息となり、乃

至、漸く大にして、如來の邊に至る。如來、彼、往昔の時、馬身と作り、命終して天に生れしを知り、時に、佛、卽ち彼の馬の因緣を說きたまふや、既に法を聞き已り、漏盡解脫して、般涅槃に入れり。

觀諸異道品第二十四

爾の時、太子自ら手に刀を執り、頭髻を割き、鬚髮を剃除し、身に袈裟を著く。即時、無量百千の諸天、其の體に遍滿する大歡喜を生じて、自ら勝ふる能はず、歡喜心を以て、齊しく聲を出して叫び、大歌大嘯し、諸衣裳を弄し、口に大唱して言はく、『悉達太子、今、已に出家す。悉達太子、今已に出家す。それ、定めて、當に阿耨多羅三藐三菩提を得べく、得已らば一切生法の衆生は、當に彼の生法を解脫するを得べく、乃至、應に苦惱別離を受くる諸衆生等は、悉く此の繫縛より解脫するを得べし。』爾の時、菩薩の割髻せる處に、其の後、塔を起て、割髻塔と名け、菩薩の身に袈裟を著けし處に、後、塔を起てて、受袈裟塔と稱し、車匿・乾陟の、辭別廻還して宮に向ひし處に、後、塔を起てて、車匿乾陟廻還の塔と名けぬ。

菩薩の、路を行くや、諸親徐行し、人有りて借問するも、默然として答へず。彼等人民、各相語りて、『此の仙人は必ず釋種の子ならん』と言へり。此に因りて（二）釋迦牟尼の名を得たり。

爾の時、菩薩、自心に發起して、是の如く思惟す、『我、今、旣已に、王位を捨て、自らの眷屬

【二】Śākya-muni。釋迦種族の聖人の意。義によりて、古來釋迦を能仁と譯し牟尼を寂默と譯し、以て慈悲と智慧とを具備せる人の稱と爲す。

境界・國城を捨てて、悔を生ず可らず。此の事や、成り已りて、これ滅相の法なればなり。(一)是の如く念じ已りて、心轉勇猛なり。爾の時、菩薩、彼の阿尼彌迦聚落より、漸漸に(二)毗耶離に向はんと欲す。中路に一仙人の居處あり。彼の舊仙人は、跋伽婆（隋に瓦師と言ふ）と名く。菩薩、彼の仙人の處に入る時、光明顯爀として、彼の山林を照す。菩薩・既に諸瓔珞の具を除き、幷に一切の迦尸迦衣を捨てたるに、直に是の身威より猶尙は光を出して、彼の山林の諸仙人の眼に輝きぬ。

而して偈有りて說く、

菩薩の・象王師子のごとく行くや、妙衣及び瓔珞を除捨し、
直に袈裟麤法服を著くるに、身猶ほ彼の諸仙を威耀しぬ。

【二】 毗耶離（Vaiśālī）

時に、其の林内の有ゆる持行婆羅門仙、行住し坐臥し、或は手を執持して、威儀に隨つて住す。彼等一切、菩薩の面に向ひ、恭敬心を起し、受樂尊重し、或は復、疑を生じて菩薩を瞻仰す。然るに彼の林内に、諸の耆舊婆羅門の仙有り、或は華果、藥木、草根を取る。其の餘の他行して、未だ集聚せざるもの、彼等未だ見ざれば、疑心を生ぜず。但、遠く遙に菩薩の聲を聞き、既に聲を聞き已りて、心に驚きて、速疾に林中の本住せる處に來還して、作すべきもの、更に復、作さず、取るべきもの、更に復、取らず、其の餘の華果及び藥草根を、設し已に取れるもの、亦、悉

く之を捨て、但、心に速に菩薩の前に來らんと欲す。時に彼の林內所有の諸鳥、所謂、鴻・鶴・鵝・鴨・鸚鵡・鸜鵒・鴛鴦・命命・孔雀・及び迦陵伽・俱翅羅等の一切諸鳥——彼等諸鳥は、菩薩の、林中に入るを見已り、各各自ら和雅の音を出し、微妙の聲を作す。又、彼の林中所有の蟲獸、其等一切、悉く水草を捨てて、食せず飮まず、歡喜して來り、菩薩の前に向ふ。是の時、彼の林の諸婆羅門は、祭祀の爲めの故に、諸牸牛を㊂犖りて、乳汁を取る。彼等牸牛は、復、㊃捋り訖ると雖も、其の乳汁は、猶ほ更に初の如く、自然に流下す。時に、彼の一切諸婆羅門、各相謂ひて言はく、『曾て聞く、八婆婆婆天有りと。此の人は、これ其の一に非ざる莫きか。』或は、復、言ふ有り、『諸の婁宿天とは、此は、これ、其の一ならん。何を以ての故に。其の來りて、此の林中に入りてより、此の林、光を放ち、皆、悉く明耀なること、日の初めて出でて、世間を照すが如くなればなり。』

而して偈を說いて言はく、

『或は此はこれ八婆婆の一か、或は二婁宿中の一天か。
若し不ずば此の林は何の故に光りて、譬へば世間に日の初めて照るが如きか。』

爾の時、彼等諸婆羅門の、仙法を修習して、彼の林に居るもの、林の出せる供養の具に隨ひ、一

【三】犖は穀、ちちしぼろ。
【四】捋は指先にてとる、つまむ。

是の如き等の諸の供養の具を將て、菩薩に請ひ、各一心に、齊しく足を頂禮し、同じく共に白して言く、『善來聖者、我等諸仙は、聖者の此處に住せんことを請はんと欲す。此處の所有の華果、樹林、藥草根葉、流泉冷水は、時に隨ひて納受して用に充つべきに堪ふ。此はこれ古仙所居の處、解脫を求めんと欲するに、安心を得易し。此處は空閑にして、經行寂靜なればなり。』

爾の時、菩薩、(五)辭采音句、美麗觀るべく、聲は隱隱として深く、猶ほ雷鼓の如き微妙の語を以て、隨所に、堪受して、問訊相酬ゆ。是の時、諸仙の衆中に、一婆羅門仙有り、居林苦行の法に善巧なり。彼菩薩の好容儀を見已り、別に更に一婆羅門に告げて言く。『仁者知るや不や。此の天童子は、人心を洞識し、善く方便を解す。何を以ての故に。凡そ世間の人は、各相謂ひて言はく。「我、諸子を生めり、應當に養育すべし。諸子、長成せば、則ち能く我が爲めに、家計を興立し、販賣求財し、生活を造作せん。我、當時に於て、智を求め道を求めん。若し他に債を負へば、悉く償ひて了らしめん」と。是の如く思惟して、諸恩愛の故に、諸子を養育するも、此は則ち然らず。他の爲めに道を求め、自の死を計らず。自利を求めざればなり。』時に彼の衆中に、復、更に別に。一婆羅門有り、彼の已前の婆羅門に告げて言はく。『仁者、仁者、是の如し、是の如し、汝の言ふ所の如し。世間の人は、自ら覺

【五】 采。あやもやう。

知せず、自ら辨了せず、常に知足せず。但、言はく、「我、今、須らく、是の如く辨ずべし。明日は、復、須らく是の如く辨ずべし。我が行法の時は、猶尚未だ至らず」と。是の如く一切諸世間の人は、迷惑を以ての故に、既に、此の世の自利を辨ぜず。然も未來世も、亦、復、諸利を成就するを得ず』と。

爾の時、菩薩、兜率天より、下來の時、釋種の胎に入り、生を受けんとするの日、彼の時、先、其の跋伽婆仙人の、林中所居の處に、自然に、二の金色の樹を涌出す。時に、彼の二樹、高峻長大なり。而して彼の二樹、菩薩出家の夜に當り、忽然として地に沒して、一時に現れず。其の跋伽婆仙人、彼の二樹の、同夜に沒して現れざるを見已り、心に大に憂惱し、悵快低頭して、思惟念言すらく、『[六]必ず、我が衰時の相貌の至る所か、或は復、更に惡相の來る有るか。』菩薩、彼の跋伽仙人の、是の如く憂愁低頭して悵快し、心、歡樂せざるを見、漸く彼の邊に至り、仙に白して言はく、『尊者、何の故に顏色憂愁し、低頭して、坐するか。』時に彼の仙人、菩薩に報じて言く、『天善童子、此の我が居處に、往昔以來、二金樹有り、地より涌出せり。彼の樹、高峻にして、嚴麗觀るべかりき。我、彼の樹を見るに、今、忽ち現れず。其の沒せるを以ての故に、我、今、憂愁して、心意樂まず、是の如く低頭

【六】「原文」必我衰時相貌所至、或復更有惡相來耶

し思惟して坐するのみ。』菩薩、卽ち仙人に問ひて言はく、『尊者、彼等二樹の出で來りてより幾時なるか。』仙人答へて言く、『今に到る已來、二十九年なり。』菩薩、又問ふ、『彼の樹の滅沒してより、爾來幾時なるか。』仙人報じて言く、『昨夜半の時、始めて沒して現れず。』菩薩卽ち彼の仙人に語りて言はく、『彼の二樹は、これ我が福力果報の故に生ぜるなり。若し我が轉輪聖王と作るに當りては、我、此處に於て、一善地園林の所を作らん。我、今、旣に、それ捨離出家せり。是の義を以ての故に、彼の樹、昨夜、沒して現れず。是の因緣を以ての故に、尊者、復、自ら憂愁を生ずる勿れ。』爾の時、菩薩、彼等一切諸仙に、左右に圍繞せられ、前み行きて、彼の所居の處に至り、隨意に遊行し、種種の坐起、安禪苦行、精進求道の處を觀看す。時に彼の林內に、恒に苦行を修せる一仙人有り、菩薩の後に至りて、隨逐して行く。

爾の時、菩薩、彼の林中に入り、仙人居坐の處に至り已り、東西南北に、彼の中の行住坐臥せる苦行の居所を觀看す。彼等の最勝の處を求めんと欲せるが故に、彼等諸仙人に問て言く、『我、今、始めて入り、求道未だ久しからず。是の故に、我、諸仙に借問せんと欲す。唯願はくは、如法に我が爲めに、汝の此の法行を解說せよ。我、曾て未だ知らず。汝等示現して、我が爲めに宣說せよ。(七)我、聞

【七】(原文)我得聞已、如法奉行、此處求利眞實行者、如於汝等所有苦行、我亦依行。

くを得已りて、如法に奉行し、此處に利を求むる眞實の行者として、汝等所有の苦行の如く、我も亦依行せん。』彼等諸仙、菩薩に答へて言く、「仁、我等に、一切苦行、及び求道の法を問ふ。我等、仁の爲めに、此處に解釋せん。凡そ苦行を行ずるや、此の衆の内に、或は藥を食する有り、或は蕐を食する有り、或は尼拘陀樹の枝を食し、或は頭拘羅樹の枝を食し、或は迦尼迦羅の枝を食し、或は、復、止、一樹の枝を食し、或は牛糞を食し、或は麻滓雜果藕根を食し、或は雜種の諸樹の輭枝を食し、或は水を飲みて用て活命し、或は（八）蜣蜋の如く自ら活命し、或は、復、麞鹿の如く、草を食ひて以て活命する有り、或は、地に立ちて用て心に稱ふ有り、或は地に坐して消適を稱する有り、或は四口食を食して活命し、或は復、麻を持ちて衣と作す有り、或は黒羊毛もて、衣と作し、或は草を衣となし、或は野蠶の綿を以て衣と作し、或は龍鬚草もて以用て衣と作し、或は莎草を以て持ちて衣と作し、或は鹿皮もて作り、或は故破皮を以て衣と作し、或は亂髮もて作り、或は（九）毛氈もて作り、或は死人の幡を來て衣と作し、或は糞掃の衣なり。或は復、裸形にて蕀刺の上に臥し、或は板上に臥し、或は株上に臥し、或は杵上に臥し、或は復、尸陀林中に住し、或は蟻垤に住すること、猶ほ蛇居の如く、或は露地に住し、或は復、

【八】蜣蜋。くそむし。
【九】氈或は毹に作り、或は毿に作る。毿は布莽反、毛布をいふ。

水に入り、或は復、火に事へ、或は日を逐ひて轉じ、或は兩手を擧げ、安然として立住し、或は地に蹲坐し、或は洗梳せず、身塵土に坌れ、或は復、螺髻し、或は頭髮を拔き、或は髭鬚を拔く。然るに我等輩は、是の如き行を以て、自ら住持し已り、次に或は時を觀じ、思惟して行じ、或は復、願ひて天上に生れんと欲求し、或は復、人間に生れんと欲求する有り。苦行を以ての故に。然る後、其の身は始めて安樂を得。所以は何ぞ。法を求むるは甚だ難し。要ず苦行を修し、以て根本と爲す。』而して偈を說いて言く、

『是の如く苦行を修習する時、自ら三十三天の報有り。
諸苦行精進の後樂を得。是の故に苦を樂の因と爲す。』

爾の時、菩薩、諸仙の是の如く苦行して、而かも眼に未だ其の法の極處を見ざるを聞き、心に喜歡せず。而して此の言の、未だこれ眞善ならざるを知り、還つて聲を緩くし、彼の仙人に報じて言はく、『我、今、汝の法を觀看するに、然も苦の滅すべきあり、と雖も、後の果報は、更に去る所無く、唯、當に天に生ずべし。又、その一切諸天の宮殿の所有の果報は、是無常の法なり。上の如き少果報を行ずるを以ての故に、是の如く苦行し、既に所愛の親族を捐捨し、復、世間の一切の諸樂を去り、苦行を行じて、遠く諸樂を離れ、樂を求むるを以ての故に、乃ち更に大牢獄中に

入る』と。而して偈を說いて言く、

『汝は愛親及び世樂を捨て、苦行を行じて天に生れんと欲し、

復謂ひて此は出昇なりと言ふと雖も、未來に還つて獄に入るを覺らざるなり。』

爾の時、菩薩、此の偈を說き已りて、復、是の言を作す、『若し人有りて、苦の、身に逼るが爲めに、勝處を悕求し、天上に生ぜんと欲するも、天中に五欲の樂を受くるを以ての故に、厭離を知らずして、未來世に於て、煩惱に患害せらるるを免れず。彼等仙人は、苦行を以ての故に、還、大苦を求む。この諸衆生、命終の時、大怖を見るが故に、後の好生を求め、生を求むるを以ての故に、還、復、彼の無常を離れず。所以は何に。何處の世間にも、諸の恐怖有るに、還復、彼の處に染著すればなり。所以に、此の世に於て、苦の切逼の故に、天に生れて、樂を受けんを求め欲するが故に、悕望渴仰して、彼に生れんを願ひ求むるを、所作未だ辦せずして、還復、無利益の處に墮す。〔10〕而も、亦、苦行を厭離するを求めず、亦、苦身を離るるの法を求めず。天上樂に過る勝處を欲し覓めば、若し有智の人は、此の五欲を離れて、漸漸に須らく勝上の處を覓むること、足步の前むが如くにして、以て勝處を證すべく、更

【10】（原文）而亦不求厭離苦行、亦不求離苦身之法、欲覓勝處過天上樂・若有智人、離此五欲、漸漸須覓勝上之處、如是步前、以證勝處、更須求過彼最勝處。

に須らく彼に過ぐる最勝處を求むべし。若しそれ、身を苦しめて、以て法を得ば、此の苦身の法は、これを非法と名づく。若し身を苦しむるが故に、天上に樂を得ば、これ、行法に因りて、非法を得たるなり。但、此の身動は、心に由るが故に行ず。是の故に、應當に先づ心を調すべし。其の身を苦しむる莫れ。』而して偈を說いて言はく、

『此の身の動く時は心に由りて轉ず。應に先づ心を調すべし、身を苦しむる莫れ。
身は木石の如く知る所無し。何の故に心に隨ひて體を困しむる。』

爾の時、菩薩、復、是の言を作す、『前に說く所のごとく、斷食に因りて、當に福を得べくんば、その野獸等は應に大福を得べし。又復、貧人は、其の先業の果報微淺にして、深く植ゑざるを以ての故に、資財乏少す。猶ほ世間の無功德の人の、常に地上一切の神祇に功德の水を求め、以て身を澡浴し、心の所願の如きを得べきを望むが如し。其の事、然らざるなり。』爾の時、彼の諸苦行師等、菩薩に白して言はく、『明智なる仁者、仁は、此處に何等の患をか見る。』菩薩、彼の苦行師に答へて言はく、『汝、今、此の苦行の事を行ずるも、後日、還、來りて此の有處に入らん。』其の苦行師、復、更に、詳に共に菩薩に問ひて言はく、『我が此の處に、是の如き法行有り。』菩薩報じて言はく、『云何ぞ、此の如き苦行が、還、有處に入るを知るを得ん。汝等の此の行は、

究竟入に非ず、無畏處に非ず。』時に苦行師、復、更に重ねて、菩薩に白して言く、『大德仁者、唯、願はくは、仁者、是の如き說をなす莫れ。我、今、此居に、行く所の道路は、これ無畏處にして、大功德有り。若し、人、此の道路に依りて行かば、此の惡形を捨て、勝妙の身を得ん。』菩薩報じて言はく、『惡形を捨てて、後に妙身を得と雖も、而も實に未だこれ離有の法ならず。今、身を苦しむるに由り後身を得んに、然も彼の後身も、亦未だ苦を離れず。所以は何に。復、多種の苦行を行ずと雖も、樂を望み欲し求めて、苦を離れざればなり。』其の苦行師、復、更に理を執り、菩薩に白して言はく、『仁者、然らず。苦行するを以て、後に、還、苦を得るにあらず。但、我等、此の身を苦しむるを以ての故に、後世、決定して、快樂を得ん。』菩薩、復、答ふ、『此の如きの言、亦これ無智なり。何を以ての故に。譬へば人有り、利を求めんと欲し、其の內に大失有るを知らざるが如し。失を知るを以ての故に、利を求めんと欲するは、此、智人に非ず。』

爾の時、彼に一婆羅門在り、衆中に在りて、高聲に唱へて言はく、『希有なり、希有なり、此の王子は、これ眞實の智なり。譬へば人有り、美飲食の、雜毒を和せるを得んが如し。誰か樂んで噉はんと欲せん。是の如く、此の事も、後に樂を得と雖も、而も未だ有爲の生老病死の法を離れず。此、豈、これ、還、後生を求むるに非ざらんや。』爾の時、菩薩、復、是の言を作す、『苦苦

の世間が、死命鬼を惛みて、復、後生を求むるは、これ大癡騃なり。』苦行師の言はく、『善い哉、王子、仁、愼みて、此の行を深く諦觀する莫れ。此の行は、過去の無量の大德、共に此の行を行ぜり。此の居處に、往昔、無量の諸王仙等百千萬億、此の苦行を行じ、共に後世の樂を求めたり。』菩薩又言はく、『汝、今言ふ千萬歲の如きは、希有なる大癡なり。嗚呼妄語なり。此の處に、大德、苦行を以ての故に、境界を分別して、後世の樂を求め、未來世に於て、生死の有を受けて、曾て知足せず、煩惱の中に於て、所作をなさずして、其の中に展轉す。それ、世間に樂を求むるを以ての故に、取りて多く苦を得たり。』時に苦行師、復、此の言を作す、『仁者王子、此の境界の主、穼亡私の反。洟陀梨の反。羅城の王、無遮の會を作し、諸天を祭祀せんと欲して、衆生を殺害する、其の數少なからずして、後に樂を受けんことを求めたり。』菩薩、復言はく、『凡そ殺害を以て法を得ば、行と名くべきか。』其の苦行師、又復白して言く、『我の相承し來れる、諸天を祭祀するの法用は是の如し。』菩薩、報じて言はく、『何ぞ他を苦しむる有るを、名けて法と爲さん。塵の身を坌す有んに、還つて塵を將て拭ひて、能く淨め得んや。血の身に塗る有らんに、還つて血を以て洗ひて、豈、能く淨むるを得んや。非法を行ずる有りて、法を得べきこと、是の處有ること無し。』苦行師の言はく、『實に是の處あり。』菩薩、又言はく、『何の因緣か有る。』苦行師の言は

く、『韋陀論に依れば、往仙の所説なり。』菩薩又言はく、『此はこれ何の義ぞ。』苦行師の言はく、『若し諸人有り、諸天を祭祀する、是を名けて法と爲す。』菩薩、又言はく、『我、且、汝に世間の近法を問はん。若し人、羊を殺し、天を祭祀し已りて、如法たるを得ば、何の故に、所愛の親族を殺して、天を祭祀せざるか。是の故に、我知る、羊を殺して祭祀するも、功徳有ること無し。汝が雜法を行ずる、意欲、是の如し。』

爾の時、菩薩、遙に、此の坐處を去ること遠からずして、一叢樹有りて、尸陀林の如きを見、菩薩見已りて、彼の苦行諸師等に告げて言はく、『尊者、但、彼の地處所を看よ。何の苦行とか名くる。彼の林下に、或は死屍有り、諸鳥の食する所たり。或は死屍有り、白骨として聚るを、今、現に見る。或は死屍有り、火を以て焚燒して、一聚骨と成る。或は死屍有り、樹上に懸著し、或は死屍有り、其の眷屬に殺害せられたるを、其の座を莊嚴し、法に依りて葬り、後に慙愧を生ず。或は死屍有り、眷屬捐遺し、相逐り來りて尸陀林中に向ひ、地に安置し訖りて、還舍に歸る。』其の苦行師、又復、更に言はく、『仁者王子、然り、その、彼處の尸陀林は、四輩共同にして、簡選有ること無く、平等に身を施す福德の地にして、名けて曠野と爲す。此處の地方に、身を布施せれば、苦力を用ひずして、速に天上に生じ、世の勝處を求めて、速に樂を受くるを得。或は仁

者有り、身は絶崖に投じ、或は燒き、或は施して、天上に生る。』菩薩、復、言はく〔二〕『若し、是の如く、行を修行して、後に富貴を求むるは、嗚呼大癡なり。嗚呼無常なり。後世を求めんに、多く怨讎有りて、後に富貴を求むるは、嗚呼大苦にして、還、大苦を求むるなり。彼等、癡愚、無智の人、大火聚に入り、大蛇の口に入る。』菩薩、是の如き辯才の舌もて、諸仙人に向ひ、解脱の言を説き、微妙の語を作し、是の如く説く時、日將に沒に向はんとす。

是の時、菩薩、彼の仙人所居の處に還り、一夜停宿し、後日天の曉くるや、更に餘處に行くに、彼等諸仙、菩薩の後に隨ひ、次第に行く。爾の時、菩薩、少時行き已り、彼の諸仙の、後に隨ひて行くを見、菩薩見已りて、卽便ち一樹下に依りて坐するに、彼等諸仙、菩薩を圍遶し、或は坐し或は起つ。是の時、彼の諸衆仙の中の最老の仙人、菩薩に向ひ、希有の心を生じ、之に白して言く、『仁者王子、汝、我が所住の處に來至してより、時に彼の地方、自ら莊嚴せるに、仁者出で已るや、彼處は今の如く、卽ち曠野と成れり。是の義を以ての故に、唯、願はくは我が所坐の處を捨つる莫れ。何を以ての故に。凡そ、人の、疾く天上に生るるを得んと欲して、仁者、此の福地に在りて修行するもの、久しからずして、卽ち生れて天上に向ふ。是の故に仁者、

〔二〕（原文）若當如是、修行行者、後求富貴、嗚呼大癡、嗚呼無常、而求後世、多有怨讎、求後富貴、嗚呼大苦、還求大苦。

應に此の是の如き微妙なる、先聖所行の、淸淨の所を捨てて、餘處に行くべからず。』而して偈を說いて言はく、

『仁の來るや我が林威德嚴なるに、今去るや忽然曠野と成る。

〔三〕是の故に應に相棄背すべからず。人の・命を愛して身を捨つる莫きが如くに。』

爾の時、諸仙、是の偈を說き已り、卽ち更に白して言く、『仁者王子、今、此處に在りて、・恩義有ること無き鄙惡の人を見ざるを得んや。或は、雜行に墮せる人を見、或は、復、不淨行の人を見たるならん。若し是の如くならずんば・仁者、何の故に、我が居停する處を樂まざるか。我等諸仙は、・仁者に隨ひて、善友と作り、隨順して逆らはず、敎を奉じて隨行せんと欲し・仁者と共に、勝妙の處を求めんと欲す。假、歲星をして、仁者と共に居らしめんも、猶ほ勝處を得ん。何に況んや我等苦行の諸仙をや。』爾の時、菩薩、彼の諸仙の上首を得て、同じく解脫を求めんを請欲し、其の意を見已りて、卽ち自心に本、誓願する所を說き、兼ねて、復、彼等苦行の一切諸仙を讚歎し、之に語りて言はく、『仁者諸仙、今、已に無礙の辯を得たり。而して、身・久來。行に習ふこと法の如く、內心淨きが故に、能く未だ曾て識る所ならざる人の邊に於て、大慇重敬念の心を生ず。今、若し捨てんと欲するや、猶

〔三〕（原文）是故不應相棄背、如人愛命莫捨身

ほ親愛の如く、乃ち大愁を生ず。其の事、然りと雖も、但、仁者輩所求の法は、生天の果の爲なり。我は然らざる也。我、今、乃ち解脫を志求せんと欲して、有を取るを欲せず。我が意願、決定して是の如し。我、心に既に是の如き相を觀じ已りて、汝等所居の處を見るも、心に願樂せず。一は還らんことを欲求し、一は去らんことを欲求す。此の二甚だ遠し。然も我、亦、此處を樂まざるに非ず。又亦、復、他人を憎疾せず、亦、他人の過咎を見るに非ず。而も、此に住せずして、捨背して行く。然れども汝等輩、皆、法に住して、昔の仙聖の言說する所有るに隨ひ、汝等一切、皆、悉く已に大仙の法を得たり。』是の時、彼等諸仙人、菩薩所求の解脫の勝上なるを見、菩薩の所に、更に慇重愛敬の心想を生じぬ。

爾の時、彼の衆中に、一梵志仙人有り、恒に灰の中に、或は編椽の上に臥し、身に死屍の糞掃の衣服を著け、耳目青黃、鼻長く身は白く、手に(三)軍持を執る。菩薩の、是の如き語を說くを聞き已り、菩薩の面に向ひ、歡喜して以て報じ、菩薩を歎じて言はく、『仁者の語る所、極大極妙、最上の誓願なり。(四)汝、今、乃ち能く年少の時、未だ五欲を受けざるに、諸の過患を見て、若しくは渴仰せず、「天に生ずるを欲するもの、豈に能く天

【三】軍持は瓶の一種なり。

【四】(原文 汝今乃能年少之時、未受五欲、見諸過患、若不渴仰、欲生天者、豈能得知天上後患、如是觀已、而求解脫、彼人不久、便得解脫。

上の後思を知るを得んや」と、是の如く觀じ已りて、解脱を求めなば、彼の人、久しからずして、便ち解脱を得ん。若し當に、仁者、是の如き意有り、決定して彼の解脱を欲求すべくば、汝、今、宜しく應に、速に此より行くべし。此を去ること遠からずして、一仙人住止の處有り、日穿藏と名く。彼に一仙有り、〔一五〕阿羅邏と名く。彼の仙、已に決定正智清淨の眼を得たり。仁者、彼の邊に至りて諮問すべし。應に至眞方便の行路を聞くべし。仁者、若し此の方便を聞かば、必ず彼の眞に至らん。我が意に、觀るが如くんば、仁者の所見は、必ず彼に過ぎん。如今、仁者の心想及び身、一切の相貌は、決定して當に諸智の彼岸に度るべく、往昔の諸仙人等にも勝りて、未だ曾て證せざる者を、今、悉く之を得ん。」爾の時、菩薩、彼の梵志仙人等に報じて、言はく、「願はくは仁者所述の如くんば可なり。」是の時、菩薩、彼の仙人の、慇懃なる勸請を捨て、之に背きて行き、阿羅邏の所に向はんと意欲す。而して偈有りて說く、

「摩訶釋種の聖王子は、善巧の美語もて諸仙を慰め、
決して羅邏の邊に前向せんと欲し、有らゆる諸仙は還自ら住せり。」

【一五】 Arāḍa（アーラーダ）

王使往還品第二十五の上

爾の時、國師大婆羅門、及び一大臣、二人齊しく共に、淨飯王の、悲哀涕淚啼號の勅を受け已り、卽便ち賢善なる好車を整備し、駕馭して立ち、大王の威德勢力を奉承し、所住の城迦毗羅より出で、出で已りて菩薩の脚跡を尋ね逐ひ、速疾に行き、漸漸に彼の跋伽婆仙人の住處に至る。其の跋伽婆、遙に、使の來り、漸く將に近きに向はんとするを見、卽ち起ちて前み迎へ、口に唱へて言はく、『善來仁者、云何ぞ忽ち屈して、此の間に來到せる。願はくは且らく消息し、少時停止し、此の草鋪の上に、（一）解歇して暫らく坐せよ。我、當に具に甘果冷水を辦ずべし。隨意に飮食せよ。』時に二使人、卽便ち彼の跋伽婆仙人の足を頂禮し、禮し已り、却退して一面に坐し、安隱に坐し已るや、其の跋伽婆、種種に王の二使人を慰勞す。

爾の時、大臣、卽便ち跋伽婆を逆止し、語りて之に問ひて言はく、『大仙尊師、彼等、今、彼の甘蔗種大淨飯王の勅命を被りて來る。我が身は卽ちこれ彼の王の大臣なり。』國師を指し示して、『此はこれ彼の王國の尊師大婆羅門。彼の甘蔗王に一太子有り、字は悉達多。生老病死を畏

【一】歇。やすむ。

るるを以ての故に。解脫を欲求して、宮を捨てて山に入りぬ。其の已に此處に至ると道ふを傳聞し、我等、彼を求むるが故に。來りて此に至る」是の語を作し已るに、跋伽婆仙、卽便ち彼の二人に報じて言はく、『實に此の事有り。脩臂にして、功德具足せる勝上の丈夫、曾て此處に至り、此處に至り已りて、我が所修の行法を問ふ。我、實に依りて說きしに、彼、既に知り已りて、卽ち云はく、「此は人間に勝ると雖も、其の後、還、來りて生死中に入る。これ究竟解脫の處に非ず」とて。嫌へるが故に捨し去り。生死を出離解脫せんことを欲求し、今は進みて阿羅邏仙人の居所に向へり。』而して偈を說いて言はく、

『脩臂の丈夫・功德の具せるが、此に至りて我が法を聞きて眞に非ずとし、
至極の大涅槃を欲求して、我に背きて今阿藍の所に向へり。』

爾の時、二使たる大臣・國師婆羅門等、跋伽婆仙人の語を聞き已り、至孝心より、淨飯王を、殷重に敬せるを以ての故に、疲乏を覺えず、懈勸有ること無く、甘果を食せず、水漿を飲まず、跋伽婆仙人の語に依りて、卽ち其に相尋ねて、菩薩の處に向ひ、彼等、漸く菩薩の邊に至到し、遙に菩薩の、林中に在りて、一樹の下に、草を鋪きて坐せるを見るに、其の一切の諸寶瓔珞を除ける身體より光を放ち、巍巍顯赫として、自ら莊嚴すること、譬へは重雲の中に、忽然、日出で、

天下を照耀し、林樹の間に滿つるが如し。見已りて相與に車より下り、安庠として徒步し、菩薩の邊に向ひ、至り已りて菩薩の足を頂禮し、口に同じく唱へて言はく、『唯願はくは聖子、一切常勝なれ。』更に自ら前み立ちて、菩薩の邊に近づくに、爾の時、菩薩、彼等を慰勞するに、彼等の能く堪受する所に隨ひ、勞謝の語言もて、慰問し已るや、菩薩命じて相近づきて坐せしむ。二使坐し已りて、菩薩に白して言く、『大智太子、聖子の父淨飯大王は、心に聖子を愛敬するを以ての故に、大に苦惱を受く。所以は何。聖子の宮を出でし日に當り、大王聞き已りて、立地に自ら撲ち、迷悶して絕し、全く覺醒せず。水を以て灑噴せるに、良久しくして、乃ち蘇し、既に本心に復せるも、流淚滿面なりき。聖子を憶念するの狀、是の如し。今、我等を遣して、聖子の邊に來らしむ。唯願はくは聖子、正しく是の如く勅せるを正心專聽したまへ、「我、以て、汝の、正意に法を樂むを知る。我、以て、汝の、我が宮に住せず。必ず應に出家して無上道を求むべきを知る。其の理、然りと雖も、但、今はこれ、汝が入山の時に非ず。我、既に、汝の非時の入山を見る。是の故に、我、今、憂愁苦毒し、全身の然さるること、猶ほ猛火の大林を焚燒するが如し。汝、今、且らく意を割き、還り來りて我が宮に入り、暫らく汝の愛法の心を捨て、我が愛重を受くべし。若し此の如くば、これ汝は法行なり。㈢若し汝、還らずば、我が日下に至れよ。今、我

が受くる苦の、是の如くに增長すること、譬へば、大河の長遠流注するが、一時の頃に於て、兩岸の崩頽して、其の水塡められて、忽然に斷絕するが如し。又、猛風の、大雲陣を吹くが如し。譬へば、熱天に、乾草を火もて燒くが如し。譬へば旱川の、諸泉を煎涸するが如し。譬へば雹の、盛春の苗稼を摧くが如し。善子、今、我が心も亦、是の如し。汝を憶念し恩愛するが爲の故に、心、大に沸惱し、煎燒破碎す。是の故に、汝、且らく宮に向ひて廻還し、王位を享受し、天下を治化せよ。後に於て、若し善惡の事有るを見ば、當に汝の心の任に入山求法すべし」と。』

【二】（原文）若汝不還、至我日下、今我受苦、如是增長

卷の第二十一

王使往還品第二十五の下

『時に淨飯王、復、是の如く言ふ、「我が智慧の子、汝今、諸親族の邊に、愛戀の心無しと雖も、但、我が意を取り、還り來りて家に向ひ。我をして、今、汝の爲の故に、憂愁懊惱して、命終を取らしむる勿れ。善子、凡そ人の、法行を行ずるものは、皆、一切衆生の邊に、慈悲心を生ず。是の如くにして、乃ち名づけて法行と爲すを得。豈に但、獨自、身、深山に入りて、始めて法行と名づけん。所以は何に。我、昔、曾て聞く。往古より已來、或は諸人有り。自己の家に在りて、瓔珞を脫せず、種種に身を嚴り、長く鬚髮を養ふも、功德を具足し、解脫を求むるが故に、家內に在りて、亦、能く解脫の法を得たり。凡そ是く、解脫の行法を修習せんには、唯、智慧及以び精進に須つ。此の如きは卽ちこれ解脫の正因なり。汝、今、我に違ひて山に入らば、此の如きは乃ちこれ、五欲を避くる驚畏の法なり。然もそれ、彼等諸人の、家に在りて、諸の瓔珞を以て、自身を莊嚴しつつ、解脫を得たるもの、今、當に汝の爲めに、畧して之を說くべし。昔、仁

者の名づけて隋常といへる、仁者力金剛なる、仁者多有なる、仁者流行なる、仁者大富なる、仁者邊天なるあり。又、復、〔一〕毗提訶國王の、能生耶耶底王（隋に行行と言ふ）と名づる、仁者淨仙なる、又〔二〕羅摩王（隋に作喜といふ。）なる有り。是の如き等の無量無邊の在家諸王の、悉く解脱を得たる有り。汝、今、須らく家中に在りて、解脱の法を求むるを知るべし。亦、能く、未だ必ずしも出家せざるを得しめよ。是の故に汝、速に來りて家に還り、二種の願を滿すべし。一に、汝は五欲の樂を受くるを得、二に、我が心をして、常に喜歡を得しむ。凡そ世間の人、王位を受けて、若し心をして、願ふが如き功能を得しむるを、是を眞の王と名づく。我、今、能く汝の爲めに、此の願を滿てん。王位は捨て難きに、我、汝の爲めの故に、此の捨て難き事を、能く捨てて汝に與へ、汝の頂に灌がん。汝、若し是の如き因緣を建立せば、則ち我は歡喜して、便卽ち辭退し、世を捨てて出家し、山に入りて道を求めん」と。而して偈を說いて言はく、

「王位は親密にして實に捐て難きも、今悉く割斷して持て汝に付し、
汝の世間を治むるに堪ふるを見るが故に、我は歡喜を生じて卽ち山に入らん」と。」

爾の時、大臣、幷に及び國師婆羅門等、淨飯王の、是の如き口勅と、所說の偈とを宣し、悉く、

〔一〕Videha
〔二〕Rāma

委曲を具して菩薩に諮り已り、復、更に、別に三種の事意を以て、菩薩を諫めて言はく、㈡大智なる聖子、これは是、聖子の父王淨飯の、流涙嗚咽し、我等に向ひて勅せる酸切の語なり。是の故に聖子、今、父王の是の如き苦勅を聞かば、應に父勅を供養恭敬すべきに堪へん。違逆するを得ざれ。聖子の父王は、今、大深苦河に沒溺し、人の、能く智岸に拔出する無きを以て、唯、聖子の能く救護を作して、彼の苦を拔くに堪ふる有るのみ。猶ほ、最極深水に墜ちては、唯、大船師のみ、乃ち能く拔出するが如く、是の如く是の如し。聖子の父王は、今、深大の苦惱海に沒し、更に人の能く拔出する者有ること無きを以て、唯、聖子のみ、(能く拔出す)。又、復、聖子が小嬰孩の時、增長養育せるは、唯、㈢憍曇彌にして、兼ねてそは復、これ聖子の姨母なり。孤寡にして、其を命終せしむる莫れ。今、聖子を憶念せるが爲めの故に、大苦惱を受くること、譬へば牸牛の犢子を失へるが故に、悲喚して鳴くが如く、是の如く是の如し。彼の憍曇彌も、眼に聖子を見ざるを以ての故に、悲苦嗚咽し、常恆に啼哭す。是の故に聖子、應に捨離すべからず。復、往昔、養育の恩を以て、猶ほ彼の牛の、其の子を愛戀するが如し。幷に及び宮內の婦女眷屬も、亦、然かく苦を受け、又、迦毗羅城內の一切の釋種、男女、人民、大小も、聖子を愛する心の、煎迫せるが爲めの故に 苦惱の火に燒然せ

【三】ガウタミー Gautamī

らる。是の故に聖子、今、家に還りて彼等を見ること、譬へば大地の焚燒せらるる時、在上諸天の、大甘雨を降らして、彼の燋熱苦劇の火を滅するが如くなるべし。』

爾の時、菩薩、父王の使の、是の如き語を聞き已り、少時、思惟し、以て身心口の喘氣を調し已り、使人に報じて言はく、「我も亦、久しく人の父が、子に向ひて、皆、愛心有るを知る。我、我が父、淨飯大王の、我が邊に向ひ、極めて大に、憐念し、憶戀し、著心するを知るも、我、今、但、世間の生老病死を怖畏するも、自身見に沒しつつ、豈、能く沈むを救はんやを以て、度脱を求めんと欲するが故に、彼の諸眷屬を捨離するのみ。誰か復、樂んで此の親愛を捨て、恒に相見るを得んことを欲せざるべしや。若し世間の中に、愛別離無からば、誰か世を樂まざらん。復久しく住して、諸親と共に聚まると雖も、會ふものは當に別離すべし。是の故に、我は今一切所愛の親族及び父母を捨てて、菩提を志求す。汝の言ふ所のごとく、我を愛するに因るが故に、父王をして大苦惱を生せしむるを致すも、我は此の言を聞き、實に是の如き恩愛に戀著せず。所以は何ぞや。譬へば人有りて、睡眠中に於て、夢に、親愛の聚集合會を見、覺めて還、別離するが如し。若し是の凡人にして、方便を解せず、心に苦惱を生せば、これ無識愚癡の衆生なり。若し智有る人は、能く自ら、親愛の合會も、猶は路を行くに、道上にて伴を結び、相與共に行き、近遠

に隨逐して、至る處に到り、各、散じて本に還るが如しと思惟す。是の事を以ての故に、親愛眷屬の、聚集に離有ること、何ぞ愁惱すべけん。又、前世の時に、曾て眷屬と爲りしが、捨て已りて此に來り、此處の眷屬を捨てて後世に至り、後世に捨て已りて、復、後世に至らん。是の如く展轉して、更互に相捨つ。此の諸の眷屬の愛戀の心は、何處より來り、去りて何處に至るか。凡そ世間の人、初受胎より、一切處に至りて、是の如く念念刹那の時間、悉く皆、死命鬼の逐ふ有り。此の如く何れかこれ時なる非時なる。今、乃ち我に語るらく、「我が子、即ち今、山に入りて求道するの時に非ず」と。何ぞ況んや、家に在りて五欲を受くるの時に、若し我に、時と非時とを問ふべきものは、今當に之を略すべし。所以は何ぞ。彼の死命鬼は、一切時に、諸の衆生を攝して、攝せざる時なし。是の故に、我は今、彼の生老病死を離るることを欲求す。是の如きを以ての故に、時と非時と無し。」菩薩、復、言はく、「若し我が父、『子を喚んで、但、來れ。我、必ず子に灌頂王位を與ふべし』といはば、我が父、必ず大弘願の心有り、是の如き難事を、易く能く我に與ふるに、惜むべし、我をして道を修せざらしむること。但、我、此の王位を受くるを欲せず。親愛の繫縛は解脫道に非ず。譬へば、愚人の美食を思はざるが如し。云何ぞ智人は、是の世の樂を貪らん。其れ智想なき愚癡の身、乃ち能く此の王位を受けて、大に苦惱有るべきのみ。

既に王位に居て、放逸自在、酒色に耽荒して捨離する能はざること、譬へば金屋の、猛火に熾然ゆるが如く、譬へば美漿に諸の毒薬を和するが如く、譬へば花沼に、蛟龍有るが如く、是の如く是の如し。王位の快楽、意の娯楽する所に、諸患隨逐するも、覚らず知らず。是の因縁を以て、我、今、楽まず。亦、是れ法に非ず。』而して偈を説いて言はく、

『譬へば金屋の火の熾盛なるが如く、食の甘美なるに毒薬の和するが如く、
満池の花に蛟龍有るが如く、王位や楽を受くるも後に大苦あり。』

爾の時、菩薩、是の偈を説き已りて、復是の言を作す、『是の如きを以ての故に、往昔の諸王は、王位を得已り、年少の時、治化受楽し、後、老年に至り、五欲を厭離し、宮殿を棄捨し、便ち山林に入る。凡そ人、寧ろ山林に在りて、草を食して活命すべし、宮殿に居て、五欲の楽を受けざれ。黒蛇を養ふが如し。後に其の殃を受けん。初、楽を受くる時は、患害を知らざるも、後時に瞋発するや、遂に便ち人を螫す。寧ろ居家を捨てて、山林に入れ。山林を捨てて、還た家居に入ることなかれ。何を以ての故に。先聖に譏嫌せらるる為めの故に。我、今、既に善家に生るるを得たり。應に善法を修し、癡人の如く、不善法を行じ、自縦恣心なる莫るべし。既に鬚髪を剃り、袈裟衣を著す。山林に止住し、學問を修道せん。而して彼の後に於て、袈裟衣を捨てて、斷

愧を懷かずば、是を無羞愚癡の人と名づく。この人は、或は貪の爲の故に、或は瞋の爲めの故に、或は癡の爲めの故に、或は他を畏るるが爲めに、是の如く反退す。我今、天帝釋の宮を羨まず、況んや復、還りて自己の宅に入らんと欲せんや。譬へば人有り、已に美食を得、食し訖りて已後、此の食を吐變し、之を地に棄つるが如し。復還、喫せんと欲するも、得べしや不や。是の如く是の如し。若し人、彼の五欲を捨てて出家し、或は諸の緣の爲めに、還りて家に入らんと欲する、亦復、是の如し　譬へば人有り、已に火宅を離れて、還、入り來らんと欲するが如く。是の如く是の如し。已に俗の患を見、白衣の形を捨てて、入山修道するに、廻還すること亦爾り。』而して偈を說いて言はく、

『人火宅を捨てて走り、後時に忽ち復更に廻還するが如く、
既に俗の患を見て離れて出家せるに、林より反歸せんことも亦是の如し。』

爾の時、菩薩、此の偈を說き已り、二使に告げて言はく、『汝等、前に父王の所說を稱しぬ、「往昔、諸王、家に在りて法を修し、解脫を得たり」と。此の事、然らず。何を以ての故に。此の二事、因緣相乖き、甚だ大に懸遠すればなり。所以は何ぞ。解脫を求むる人は、其の心寂定にして、微妙の處に、卽ち居停するを得。若し宮中に在らば、五欲情蕩し、外に出でて民を治めば、鞭撻

を行じ、罪罰を瞋責すべし。是の心中に於て、解脱を求むること、是の處有ること無けん。若し人、意に無爲寂を樂はば、彼は則ち世間の王位を貪らず。設ひ位に在るも、應に須らく捨離すべし。若し王位を樂はば、其の人の心意、寂靜なる能はず。寂定を樂ふと、復、世務を貪ると、此の二、相乖き、天地懸遠す。譬へば水火の共に居るを得ざるが如く、是の如く是の如し。解脱の法を求め、復、五欲に著すること、終に是の處無し。是の故に、我、今、決定して知る、彼の往昔の諸王、王位を捨て已りて、然る後、乃ち寂定の法を得たるを。若し王位に在りて教化するの時や、其の知未だ成らず、且、心を用ひて民を治理することを學ぶのみ、必ず專ら解脱の法を求めじ。其の事、然りと雖も、彼等諸王は、各、其の意に隨ひ、或は解脱を求め、或は五欲を受けぬ。我は今、然らず。彼等を學ばず、亦復曾て此の如き心を發さず。我、今、已に家に住するの欲鎖を斷じ、解脱を得んとして、復、世間の五欲に貪著せず、豈に家に還るを得んや。』

時に二使人、菩薩の、是の如き等の、無染著を説ける言と、專正決定至眞の語とを聞き、更に復、詳らかに共に菩薩に白して言く、『大聖王子、今、無上の法を求めんと誓願するは、此はこれ眞實にして、道理無きに非ざるも、但、此の如くに行ずるは、今、未だ是れ時ならず。所以は

何ぞ。聖子の父王、今、是の如き憂愁苦惱を受く。是の故に聖子、此の心に違背するは、これ正法に非ず』とて、偈を說きて言はく、

『今法藏を求むるは實にこれ利なり。正理有りと雖も未だ時に合はず。
父王愁毒して心を切割す。孝德既に乖くこれ何の道ぞ。』

爾の時、二使、此の偈を說き已り、重ねて聖子に白して、是の如き言を作す、「大聖王子、我が見る所の如くんば、此の意は、これ細觀の法行に非ず。世の財利及以び五欲に於て、巧方便に非ず。所以は何ぞ。聖子は今、未だ曾て因を見ざるに、云何ぞ、果を求むる。現に果報を得つつ、便ち捨背して、方に未來を求むる。大聖王子、凡そ、是の世間一切の書典は、各各、皆、自ら、〔四〕悉檀有り。或は人有りて「未來世有り」と言ひ、或は人有りて「未來世無し」と言ふ。然も此の義の中、人多く疑ふ有り。是の故に聖子、果報を得たるを以て、現在に且らく受けよ。若し來世無くんば、何ぞ、須らく精勤して、彼の解脫を求むべけん。復、人有りて言はく、「決定して世間に善有り、惡有りて、未來世に受く」と。是の義を以ての故に、精勤修行して、解脫道を求むる、是を名づけて癡と爲す。若し諸根をして、決定して破壞せしめば、親愛と別離し、怨憎と聚會し、境界相合して、自然に、生老病死を捨離

【四】悉檀（Siddhānta）成就と譯す。宗要の意。

せん。何ぞ假にも、勤劬の方便を作すべけんや。當に知るべし、此の義は實有ること無き也。又、胎に在るの時、手足脊背、腹肚髮爪、諸節支脈は、自然にして成ず。或は復、人有り、身を成ずるを得已り、還復、破壞す。或は人有りて言はく、「既に破壞し已りて、還た自然に成ず」と。故に先典中に、是の如き語有り、「棘針の頭の尖なるは、これ誰か磨造せる。鳥獸の色の雜なるは、これ誰か之を畫ける。此の義は自然にして、人の所作無し。亦復、得んと欲して、即ち成すべからず。世間の諸物、心に隨ひて即ち迴轉せしむるを得ず。」而して偈有りて說く、

「棘刺の頭の尖れるはこれ誰か磨ける。鳥獸の雜色は復誰か畫ける。
各、其業に隨ひ展轉して變ず。世間に造作の人有ること無し。」

「復、人有りて言はく、(五)「世間の作者は、一切、皆、自在天に由りて作らる。若し自然ならば、人、亦、何ぞ勤劬して業を作すを須ひん。是れ流轉に因りて、自ら來り、其の去る時に及び、還、この彼、流轉に因りて自ら去らざる可けんや。」復、人有りて言はく、(六)「分別を以ての故に、則ち我相生ず。故に有を受く。有の盡くるも亦、然り。若し有を受くるの時も、勤求を假らずして、自然にして受け、若し有の

【五】「原文、世間作者、一切皆由自在天作、若自然者、人亦何須勤劬作業、可不是因流轉自來、及其去時、還是彼因流轉自去」

【六】「原文、以分別故、則我相生、我受果有、有盡亦然、若受有時、不假勤求、自然而受、若有盡時、自然而盡、亦不假滅。

盡くる時も、自然にして盡き亦、滅するを假らざらん」し復、人有りて言ふ、「世間に、人身を受けんと欲する時、其の父、他人の債を負はずば、則便ち生るるを得ん。天に生れ、仙に生るるも、一切、悉く然り。若し此の三處に、債を負はざれば、此の人、勤劬もて求むるを用ひず、自然にして彼處の解脫を得」是の如く次第に、諸經典中の各の悉檀に、自ら是の如く、各解脫を得るを說く。それ智有る人、精勤して勝處を求めんと欲する時、必ず其の心を損す。是の故に、我、知る。聖子、若し解脫を求めんと欲せば、理に依り法に依りて、應に、是の如く、解脫の路を求むること、古の書典、悉檀の所說の如くすべし。若し是の如くせば、必定して、當に疑有ること無きを得べし、聖子、慈父淨飯大王は、聖子の爲めの故に、愛心の苦を受くるも、當に除愈するを得べし。聖子、今や宮に還るの時、意中に、若し宮殿の患厭を見るも、此事、亦復、思惟すべからず。何を以ての故に。昔、諸王仙、家を棄捨し已りて、山林の中に至り、後、還、廻りて。自家の宮中に向へり。彼の王と言ふは、各、名號有り、所謂、(七)菴婆梨沙王(隋に虛空箭といふ。)は、家を捨離し已りて、山林中に在るや、諸臣、百官、開諫曉喩し、左右前後を、圍遶して還れり。その(八)羅摩王(隋に能喜といふ。)は、既に大地が、諸惡人に毀敗せられ、各相奪ひ、迭に相殺害するを見、心に看るに忍びず、山より出で來り、如

【七】 Ambarīṣa
【八】 Rāma

法に擁護せり。又復、往昔、[九]毘耶離城に、一大王有り[一〇]徒盧摩（隋に樹といふ）と名く。亦、山林より下りて、本國に來り、世間を護持せり。往昔、又、一梵仙王有り、婆枳（居蔵の反）梨低（隋に雷言といふ）、又羅枳提婆王（隋に喜天といふ）、達摩耶舍王（隋に法稱といふ）と名く。諸の是の如き等の梵仙諸王、無量無邊、各山林を捨て、本宮に還來して、大地を綏撫せり。是の故に聖子、此の往昔諸王の本事を聞き、今、若し宮に還らば、患苦有ること無けん。」而して偈を說きて言はく、

「是の如き名稱の諸王等は、各婇女を捨てて山林に入り。後並に
山を棄てて本宮に還る。聖子今還るも何の過か有らん。」

爾の時、菩薩、彼の二使の、是の如き語を聞き已り、彼の大臣、幷に及び國師婆羅門に告げて言はく、『有無の義、疑と不疑とは、我、自ら知るのみ。但、此の二義所有の眞理の、隱なると、顯なると、我これを忍受す。それ傳聞には、既に因緣無し。何に因りてか信ずべき。若し智有らん人は、應に、他の虛說に依りて行せざるべし。猶ほ盲人の、道路を行かんと欲するが如し。既に導者無ければ、眞實を見ず。云何ぞ行くを得ん。心に自ら、若しくは善と非善とを決せざれば、彼の盲者人は、假令、淨法にも、心に不淨と見ん。無智なるを以ての故なり。我、今、寧ろ精進の心を發さん。未だ果報に甘從するを得ずして、長く苦惱を受くと雖も、實に五欲の濁

【九】ヴイシヤーリー Vaiśālī
【一〇】Druma

泥に在りて、迷沒沈溺し、諸聖の譏訶する所と爲りて、暫くも快樂を受くるに忍びず。又、汝等言ふ、「往昔已來、盧容箭王及び能作喜は、並に、山林より還りて、家に入れり」と。彼等諸王をば、我は、取りて解脫法中に於て、用て證明と爲さず。何を以ての故に、彼等諸王は、其の學ぶ所、神通を盡せるを以ての故に、別に更に苦行の法有ること無し。是の故に、彼等は、廻反して宮に還れり。汝等、今、是の心を作す莫れ。我は當に誓を立つべし、「假使、日月、地に墮落し、此の雪山の王、本所を移離するも、我、若し、未だ正法の寶を得ずんば、世事を貪るが故に、凡夫の身を以て、還りて本宮に入らんこと、是の處有ること無けん。我、今、寧ろ、熾盛猛炎なる大熱火坑に入るも、自利を得ずして、還りて宮に入らんこと、是の處有ること無けん」と。』

爾の時、菩薩、此の誓を作し已り、座より起ち、此の林を捨棄し、彼の二人に背き、獨自に行く。時に彼の二使、菩薩の是の如き言を聞き已り、復、決定して、諸親族を捨て、是の如き願を發するを見、必ず廻らざるを知り、身を擧げて自ら撲ち、地より起ち、流涙滿面、大聲に哭し、菩薩に隨ひて行き、菩薩に近づかんと欲す。是の時、菩薩、威德甚だ大にして、彼等二人は、逼るを得る能はず。猶ほ日光の、彼等の目に耀くが如くにて、菩薩の身を視見する能はず。爾の時、使人、復、更に、重ねて、菩薩に、是の言を諮る、『唯、願くは、聖子、是の如き剛鞕の志意を

作す莫れ。願はくは、我等が戀慕の心を定めよ。我等の愛心、既に、未だ除斷せず。王子を棄捨して去るに忍びず。』彼等二人、菩薩を愛するが故に、兼ねて復、重意もて淨飯王に向ふ。是の因緣を以て、菩薩の後に隨ひ、東西に行き、或は住し、或は看、或は行き、或は走る。時に、彼の二人、更に、復、別に四人に敎ふ、『身を隱して菩薩の後に隨ひ、左右に行け。汝等人輩、王子に離るること莫く、何處に至るかを看よ』と。是の如く敎へ已る。時に彼の二人、心中に愁毒し、大苦惱を受けて、啼哭叫喚し、各、相問うて言はく、『我等、今、云何ぞ、城に至り、大王の面を見ん。大王の心情、王子の爲の故に、大に苦惱を受けぬ。我等が此の言、云何ぞ奏するを得ん。若し王の邊に至らば、復、何の語をか作して、能く王の心を解かん。』而して偈有りて說く、

『彼等二使王子の決定して、還りて自宮に至らざるを知り、
　別に四人を遣し後を逐ひて行かしめ、自ら廻りて王を見云何が說かん。』

問阿羅邏品第二十六の上

爾の時、菩薩、其の父王の大臣、使人、幷に及び國師婆羅門を捨てたる時、爾り、俱に、流淚す。既に分別し已り、漸漸に前行し、安庠として、毗舍離城に向ひ、未だ彼の城に至らず。其の中路に、一仙人修道の所有り。名は(一)阿羅邏、姓は(二)迦藍氏なり。時に、彼の仙人に、一弟子有り。遙に菩薩の、向ひて、已に、來るを見、見已りて大希有の心を生ず。生れてより、未だ曾て、斯かる事を覩見せず。見已りて、速に、疾く走り、其の師、所坐の處に向ひ、至り已りて、彼の諸の同學等、(三)摩那婆の邊に向ひ、大聲に彼等の姓名を唱喚し、各各、自ら、仁者跋伽婆・仁者彌多羅摩・仁者設摩と言ひ、諸の是の如きの類、摩那婆等に(向ひ、)皆、悉く告げて言はく、『汝等、今、各、心に喜歡すべし。應に祭祀の法を捨離すべし。今、此處に、遠方の客、大德の仁有りて來る。應に迎接すべし。然も此の仁は、已に能く、諸結煩惱を厭離して、最上至眞の解脫を求めんと欲す。卽ちこれ釋主淨飯王の子なり。諸相端嚴にして、猶は金柱の如く、身光明曜、巍巍堂堂たり。脩臂下垂して、手、膝を過ぎ、足趺は、下に千輪の輪を蹈み、行

(一) アーラーダ Arāḍa
(二) カーラーマ Kālāma
(三) マーナヴ Māṇava。年少淨行と譯す。

歩安庠として、牛王を視るが如く、圓光の威德、猶ほ日輪の如し。身、黄金のごとく、袈裟服を衣、我等の福利、最上の尊たり。漸漸に自ら來りて、我等の邊に向ふ。我等、今、應に須らく、具を辦じ、力の所有に隨ひて、供養承事し、虧少せしむる勿く、恭敬尊重して、頂戴奉迎すべし。』

爾の時、彼の摩那婆、卽ち偈頌を以て、菩薩を歎じて言はく、

『安庠善巧能く行歩し、顧眄猶ほ大牛王の如し。
衆相滿足して身を莊嚴し、一切の諸毛皆上に靡く。
足下の圓輪は千幅を具し、眉間に宛轉する妙白毫、
脩臂洪直にして自在に垂る、此はこれ人中の大師子なり。』

爾の時、彼の摩那婆、口に此の偈を說いて、菩薩を歎じ已り、重ねて、彼の諸摩那婆に告げて言はく、『汝等、一切の諸摩那婆よ、共に、相隨ひて、師の所に向ひ、此事を諮白すべし。』是の時、彼の諸摩那婆等、卽便ち相隨ひて、其の師、阿羅邏の邊に往詣し、到り已りて、師に、前の如き等の事を委具諮白して、言語、既に訖る。

爾の時、菩薩、安庠として行き、忽然として、阿羅邏の邊に來至す。其の阿羅邏仙人、遙に菩薩の、近づき來るを見、見已りて、覺えず大聲もて告げて言く、『善來、學子』と、菩薩、前みて

阿羅邏の所に至り、二人對面し、相共に、少病少惱なりや、安隱なりや已不やを問訊し、相慰問し訖りて、其の阿羅邏。菩薩を請じ、草鋪の上に坐せしむ。而して偈有りて說く、

『二人相見て大に喜歡し、各各少病惱なりやを問訊し、
相對語言して時未だ幾ならず、清淨の草座を即便ち鋪く。』

爾の時、菩薩、草鋪に坐し已るや、其の阿羅邏、諦心もて菩薩の身を觀察し、上下を觀じ已りて、大歡喜、希有の事を生じ、即ち菩薩に對して、美音辭を以て、往來談說し、菩薩を稱讚して、是の如き言を作す、『仁者、瞿曇、我、久しく、仁者、丈夫が、能く王位を捨て、踰城出家し、親愛染穢の羅網を割絕して、譬へば大象の、牢鐵鏁、或は鞹皮繩を斷じて、頓絕の後に、自在に走出して、心の行く所に隨ふが如きを承聞す。是の如く是の如し。仁者、今日、乃ち能く猛心より、宮を捨てて山に入り、一切處に於て、知足少欲にして、大に智慧有り。仁者瞿曇、既に是の如き希有の事、世間の富貴、果報功能を得。得已りて能く棄て、山林に剃落す。此、實に辦じ難し。往昔、諸王は、王位を得、果報具足して、備さに五欲を受け、年老の時に至りて、世子を喚びて、王位を付囑し、灌頂して王と爲し、後に、方に宮内を捨てて出で、山林に至り、行じて道を求めたりと雖も、彼は難しと爲さず、亦希有にも非ず。我が見る所の如くんば、仁は今、年少、五欲

を受けずして、是の富貴功德の事を捨て、能く是の心を辦じ、此に來りて道を求め、旣に是の如き、不可思議大聖の王位、最勝の境界を得たり。正に盛年の時、能く心意を斂め、諸欲に著せず、解脫を志求し、縛著を被らず、諸根境界の、染する所と爲らず、能く、中に一切の諸患有るを知りて、諸有に纏繞せられず。何を以ての故に。往昔、王有り、名づけて頂生といふ。彼の王、已に四天下を統ぶるを得て、猶ほ足るを知らず、騰上して彼の三十三天に至り、帝釋の半座を得て坐し、其の內心、足るを知らざるを以ての故に、五欲の境界、便卽ち失盡し、地に墮落せり。復一王有り、那睺沙と名づく。亦、四天下に王とし領するを得て、還復、上りて三十三天に至り、諸天を治化して、猶尚、足らず、亦、王位を失ひ、地に墮落せり。諸の是の如き類、羅摩王、陀盧呼彌王、阿沙羅吒迦王等の、多くの諸轉輪聖王有り。王位を得て、足るを知らざるを以ての故に、皆、境界を失ひ、富貴王位、悉く皆、滅盡す。世間に、境界を得已りて、心に足るを知る人無きこと、猶ほ大火の薪を得て熾盛なる如し。』其の阿羅邏、是の語を作し已るや、菩薩、報じて言く、『仁者、大仙、我、世間の是の如き相を見已り、復、一切は、猶ほ芭蕉の、心內牢ならず後に還、破壞するが如きを觀、境界を得ては、足るを知らざるを恐るるを以て、自利を求めずして、欲事を厭離す。我、是を知り已り、正路を尋求して、處處に遊行すること、猶ほ人有りて、

曠野を行き、伴を失ひ路に迷ひ、心、諸方に惑ふも、導師を得ず、導を求むるを以ての故に、處處に遊行するが如し。今、我も亦然り。』爾の時、菩薩、是の語を作し已る。時に、阿羅邏、更に。復、菩薩に諮白して言く、『仁者・瞿曇、我久しく大士の心相を見るに、仁、解脫に於て、大器と作るに堪へん。』

爾の時、衆中に、一摩那婆有り、これ阿羅邏仙人の弟子なり。合掌して、師に白し、菩薩を歎じて、是の如き言を作す。『希有なり此の人、思議すべからず、能く此の心を辦せることや。往昔の諸王は、年少の時、宮內に坐して、當に五欲を受け、後に年を得て、頭白の老時に、各、太子を喚び、王位を付囑し、灌頂して王と爲し、後、捨家して山林に入り、行を行じ、道を修めて、王仙たるを得たり。此は然らず。盛年少壯、正にこれ快意、五欲を受くるの時、少病少惱、氣力充足し、頭髮烏黑、身體柔軟、勇猛具足して乏少する所無く、父王は年老いたるに、王位を貪らず、世間を厭離し、果報を貪らずして、能く出家し、山に入りて道を求む。』

時に阿羅邏、菩薩に白して言ふ、『仁者、發心して、何事をか求めんと欲し、何の道をか辦へんと欲して、乃ち能く發心し、此處に來れる。』菩薩、報じて言く、『尊者大師、我、此の世間の衆生を見るに、生老病死の爲めに纏縛せられて、自ら出づる能はざるを以て、今、是の如き精勤の

心を發せり。』時に阿羅邏、復、此の言を作す、『仁者瞿曇、乃ち能く是の如き悲眼を生じ、是の如き想を發す。此の義眞實なり。所以は何に。』而して偈を說きて言く、

『一切法の勝は唯行ずるあるのみ。淸淨寂定なる不過の心を、
恩愛に染著するは最怨家たり。諸有の恐怖はこれ老死なり。』

爾の時、阿藍、是の語を說き已る。而して彼の衆に、一摩那婆有り、これ阿羅邏仙人の弟子なり。菩薩に白して言く、『仁者、今、親愛眷屬を捨て、背きて此に來るは、何の心意有りてか。』菩薩、報じて言く、『世界の有らゆる集聚合會には、決して別離有り。我、是の如く知るが故に、此の意を發し、至眞を求めんと欲す。』時に阿羅邏仙人、重ねて更に菩薩に白して言く、『仁者、今已に解脫を得たり。所以は何に。衆生、沒する所の此の泥は、渡り難く、世間を縛する此の繩は牢強なるに、仁者、已に能く獨り、此の心を辨じたり。我、當に此の解脫の法門を說くべし。所謂、愛心をば、仁、須らく遠離すべし。愛心は、これ世間中の大惡蛟龍なり。心水の内に居止停住して、一切の利を失はしむ。是の如くなるを以ての故に、我、今、世間の人を觀知するに、これ正行に非ず。その能く正行の法を取るは、唯、智有る人のみ。愛染を遠離して、應に須らく發心して、有相を見るを斷じて、無相を作すべし。』菩薩、答へて言く、『大仙尊者、我、是の語を

受けて尊の言ふ所の如くせん。』阿羅邏仙、復、菩薩に問ふらく、『仁、云何が受くる。』菩薩、報じて言く、『世間の人、相を作すを以て縛せらる。其の相縛とは、凡そ是れ父母の、子を生みて養育するは、家を立てんが爲めの故なり。兒息を養育せば、能く增長して、我が家を成就すること有り。是の因緣を以て、父母は子を養ふ。若し因緣無ければ、自許の眷屬も猶ほ親近せず。況んや復、他人をや。凡そ親近の人は、利を貪求するが故に、人に昵むも、終に覓むるに處なけん。』阿羅邏仙、復更に讚して言く、『善い哉、仁者、仁、今、已に世間の諸法を知る。瞿曇沙門、乃ち爾く、明に一切の諸智を證す。』

時に彼の衆に、一摩那婆有り、亦これ阿羅邏仙人の弟子なり。菩薩に白して言く、『仁者瞿曇、仁は今、已にこの最上の樂を得たり。何を以ての故に。能く漸く一切の愛相を離れ、即ち世間の諸無惱の法を得たり。所以は何ぞ。我、世間を見るに、人の、婦兒を怜まず、財物を求めず、兩手を舉げて世間を哭せざるもの有ること少く、人の、少欲ならざるを以て、厭足を知らず、資財を愛惜し、常に貪心を起して、世利に染著し、家家盡く皆、手を舉げて大哭する有るを見ること多し。』而して偈を說いて言はく、

『世間に知足の人を見ること罕なり。少欲にして求むる無ければ苦を受けず。

有らゆる恩愛に哭泣する者は、多くこれ貪著して資財を聚む。』

時に阿羅邏、菩薩に白して言く、『希有なるかな、仁者瞿曇、是の如き廣大の智慧や。是故に仁、今、是の勇猛を辦じ、諸根を制伏し、諸の欲染を增長せしめず、牽く所と爲る勿し。』是の時、菩薩、尊者阿羅邏に問うて言く、『大仙尊者、諸根は、何の故に、是の如く不定なる。降伏せんと欲せば、方便は云何。唯、願はくは尊者、我が爲めに解說せよ。』其の阿羅邏仙人、報じて言く、『沙門大士、凡そ人、世に在り、生を厭離せんと欲せば、我、今、當に大士の爲めに、方便の相を略說すべし。大士諦に聽け。』而して偈有りて說く、

『大尊仙人阿羅邏、菩薩の神智心を發遣せんと、
自己の論の悉檀中に於て、分別要略して宣說す。』

『瞿曇大士、凡そ諸根の體相、及び根境界を除かんと欲せば、應に須らく是の如く思量分別すべし。何を以ての故に。是の諸根等は、一切の境界を、既に分別して知る。悉く須らく、捐捨すべし。乃至、諸根境界の內に、諸の愛染有り。彼の愛の染する所、卽ち能く著せしむ。此の著を以ての故に、則ち衆生をして、世間に沈沒して、出づるを得る能はざらしむ。諸凡夫人が、貪愛繫縛等の苦を受くるは、一切、皆、境界に由るが故に、是の如き等の事を得るなり。大士、當に知

るべし、何の因緣にて爾るか。』而して偈を說きて言く、

『山羊の殺さるるは聲を作すに因り。飛蛾の燈に投ずるは火色に由り、
水魚の鉤に懸るは餌を呑むが爲めなり。世人の死に趣くは境に牽かるるを以てなり。』

爾の時、菩薩、此の偈を聞き已り、復、更に問うて言く、『尊者、今、諸根を調伏する方便相貌を說く。因緣と共に生じて、體性虛空、誑惑無實なること、猶、火坑の如く、猶、夢幻の如く、草上の露の如し。我、今、心想もて、以て是の如く知る。』時に阿羅邏仙人、復、菩薩大士に問ふ、『仁、何の故に、諸境界の內に、利益の想無しと言ふか。』菩薩、報じて言く、『凡そ、人の、諸の境界に依りて住して、果報を受けんと欲すること、猶は、人有り、屋舍を造立して、日光を蔽ひ、或は風雨を避けんと欲するが如く、人の、渴を以ての故に水を求むるが如く、又、人の、飢うるが故に、食を求覓むるが如く。人の、垢穢にして、身を洗浴せんと欲するが如く、人の、露形にして、衣を求めて體を覆ふが如く、人の、困乏せるが故に、乘騎を求むるが如く、寒を除くを得んと欲するが故に暖を求め、熱を除くを得んと欲するが故に涼を求め、疲勞を去らんと欲するが故に床鋪に坐する(如し)。是の如き等の事、諸の求むる所は、皆、苦の來りて身に逼るが爲の故に、所以に推求すること、病める人の、患重きが爲めの故に、方に良醫を覓むるが如し。

世間の人、一切悉く皆、是の如く悕望す。』

時に阿羅邏、讃じて言く、『瞿曇、希有なり。此の心。大德、云何ぞ世間中に、能く是の如く速疾に、即ち無常の想を生ずるを作せしか。希有なり。希有なり。能く眞實を見たり。大德は利根、聰敏にして悟り易し。若し能く是の如く明了に見る、是を眞見と名く 若し異りて見る、これを誑惑と名く。仁の言ふ所の如く、飢の爲めに食を求め、風雨を避藏して、此の寒熱、暫らく奪ひ易きを以ての故に、世間の人心、即ち樂想を生ずるなり。』又復、歎じて言く、『仁者瞿曇は、眞にこれ法橋、大器を任持せん。我、傳聞すと雖も、先づ弟子の、法を受くるに堪ふるや不やを觀じ、若し能く受くるに堪へなば、然る後に爲めに、種種の諸論を說く。我が見る所の如くんば、仁者、今日、即ち復、然らず。俯仰云爲、深く進止を得たり。觀ずるを假らず。我が論の中に、眞實の義有るが如きは、盡く仁の爲めに說かん。』

爾の時、菩薩、阿羅邏仙の、是の如く語るを聞き已り、大歡喜を生じ、重ねて問うて言く、『尊者大仙、今日、未だ我の本心を知らずして怱に我が爲めに、是の如き妙說を作す。(四)我は知る、是の相、未だ即ち證せずと雖も、今、已に利を得たるを。所以は何ぞ、譬へば人有り、色を見んと欲して、光明を得たるが如く、人、遠く

【四】原文）我知是相、雖未即證、今已得利。

行くに、須らく善導を得べきが如く、彼岸に渡るには、須らく船師を得べきが如し。尊者、今日、我心を顯示する、亦復、是の如し。唯願はくは、更に、我が爲めに、尊者の知る所を說け。云何が生老病死を度脫せん。」

卷の第二十二

問阿羅邏品第二十六の下

爾の時、尊者阿羅邏仙人、善く菩薩の心に至德有るを知り、更に己が論の決定悉檀を述べんとて、偈を說いて言く、

『瞿曇沙門善く諦に聽け、我が論中に說ける總悉檀は、
如今煩惱の中に在りと雖も、如後自然に還つて解脫す。』

爾の時、阿羅邏、是の偈を說き已り、是の如き言を作す、(一)『凡そ衆生は、此に二義有り。一には本性、二には變化なり。此の二種を合して、總じて衆生と名く。本性と言ふは、卽ちこれ五大なり。此の五大とは、所謂、地・水・火・風・空なり。我及び無相を、本體性と名く。變化と言ふは、諸根と、境界と、手・足・語言・動轉・來去と、及以び心識と、此を變化と名く、若し是の如き諸境界を知るを、境界を知ると

【一】 阿羅邏仙人の所說は、數論の二十五諦說なり。我(プルシャ Purusha)及無相(プラクリチ Prakriti)といふは、根本の二大原理なり。諸根といふは、眼・耳・鼻・舌・身の五知根なり。境界といふは、色・聲・香・味・觸の五唯なり。手・足・言語・動轉・來去といふは、五作根に當る。心識といふは、心根なり。以上に五大を加へて、二十五諦と爲す。

名く。能く彼の諸境界を知ると言ふは、これ、我、能く知るなり。我を思惟するは、これ智人の説なり。』而して偈を説いて言はく、

『若し能く諸根塵を識る有らば、是を善く彼の境界を知ると名く。
一切の境界を知ると言ふは、智慧人の説を思惟して知るなり。』

爾の時、阿羅邏、是の如き言を作す、『我を思惟するは、其の人即ちこれ[三]迦毗羅仙、及び其の弟子、以て、自ら此の意の境界を度量せり。波闍波提仙人の子、名けて深意といふの所見、亦然り。人の數數生老病死して、諸の苦毒を受くるが如きを、深諦に知り已りて、他の爲めに解説し、其をして遠離せしめぬ。此の理を思惟せば、應當に一切の無相を了知すべし。』又復、説いて言はく、『煩惱に因る者は、所謂無智にして、諸業に愛著す。是の如き等の業は煩惱の因に屬す。此の煩惱の因に、則ち四種有り。人の生死を解脱する能はざるは、未だ諸煩惱を離れざるを以ての故なり。四種とは云何。一には無信、二には著我、三には有疑、四には無定。餘殘有るを以て、即ち無方便にして、深く世間に著し、恒常に墮落す。是の如きを以ての故に、處處に生を受くるなり。無信とは、常に顚倒を行じ、應に是の如く知るべきを、反りて知らず。是を無心と名づく。著我とは、此はこれ我と云ひ、彼は

【三】Kapila。數論の開祖の名。

非我と稱し、我は是の如くに說き、我は是の如くに受け、我行じ、我住し、我の相なり、我の身なりといふ。是の如きを我と名け、自ら覺知せざるを、是を著我と名く。有疑とは、此はこれ一切を惑疑せざるを以て、此、是の一物、猶ほ泥團の如きを、是を名けて疑と爲す。無定といふは、是の如く是の如し、是を是とするも亦然り、是を非とするも亦然りとし、心意覺想、一切の諸業に、是に衆、是は我、是は彼、是は此とする、是を無定と名く。又餘殘とは、未だ勝處を知らず、未だ始覺を覺せず、未だ自性を證せずして、始めて證知すとするが故に、是を餘殘と名くと。又復、說いて言く、『無方便とは、即ち是智無く、智無きを以ての故に、方便を解せず。方便無きが故に、顯示する能はず、是の義を以ての故に、無方便と名く。又染著とは、謂はく、無智の人、見聞觸覺して、即ち染著を生じ、或時は、意著し身著し語著し、或は意業、一切の境界に著し、應に著せざるべき處に、之に惑著する、之を名けて著と爲す。又墮落とは、我はこれ彼處、彼處はこれ我、皆し是の如き思惟念有るを、是を墮落と名く。是の因緣を以て、煩惱に墮するを、是を無德と名け、是を無智と名け、是を五處の苦惱無藥と名く。此の無藥の處は、所謂黑暗・愚癡・大癡と、二種住と有り、是を五處と名づく。黑暗といふは、所謂癡惰なり。愚癡といふは、所謂生死なり。大癡とは、所謂行欲なり。所以は何に、此の處、假使大德有る人も、猶尙ほ迷惑し、

醒悟することを知らず。故に大癡と名く。二種住とは、所謂瞋恚なり。復、二種住とは、所謂意なり。無明の衆生は、是の如く修せず、迷沒して此の五塵所に染著し、煩惱苦海の中に住し、生死の流に順ひ、我見、我聞、我證し、我作す。我他をして作さしめ、我是の如くにして至ると。是の如きの心、是の如きの意を以ての故に、煩惱海に輪廻沒溺し、是の如きの四種、煩惱中に纏繞裏結して因果無しといふ。大德瞿曇、仁、應當に、是の如き諸事を知るべし。』而して偈を說いて言はく、

『若し人正見知を得んと欲せば、四禪淸淨解脫の處に、
心若し彼の智を覺了し已れば、諸の眞理及び非眞を知る。
上の如く分別して應當に宣すべし、是の故に名けて四禪解と爲す。
能く諸の行及び無行を捨てなば、此に卽ち字句名無きを知る。
是を以て彼處の大梵天は、世間に諸梵行を說く。
若し能く此の梵行を行ずれば、卽ち當に梵宮に生ずるを得べし。』

爾の時、菩薩、阿羅邏の是の如き語を聞き已り、復、更に重ねて、其の方便行を問ふらく、『若し方便を行じて所至の處、及以び梵行修行の、行ずべき行處行法を、尊者、我が爲に一切解說せ

よ。』爾の時、阿羅還、已が總論・義例・宗體に依りて、一切皆、菩薩に向ひて說く、『仁者耀曇、凡そ修行せんと欲せば、應に宮宅を捨て、出家の儀により、乞食して活命し、弘大の誓を發し、戒行を修持し、知足に住し、隨所に衣食臥具を辦ずるに堪へ、閑靜なる住處に、獨行獨坐し、諸論中に、智の知見する所の如く、貪欲・瞋恚・愚癡の過咎を、見已りて遠離し、諸欲の、最快樂を受くるを厭惡し、諸根を調伏して、禪定に入るべし。爾の時に當り、諸欲を遠離し、諸惡を遠離し、空閑の處に、離分別を生ずれば、卽ち（三）初禪を得るなり。初禪を得已りて、還復、思惟し、是の如く分別して、漸漸に樂を得、既に樂を得已りて、是の寂定を生じ、還、此の寂定の力に依因りて、意に重ねて欲瞋恚等を厭離し、既に數、厭離して、心、轉、喜歡し、既に喜歡を加ふれば、智を增長し、是の時、卽ち大梵宮に生ずるを得、彼處に生じ已りて、還、更に是の如く思惟分別して、此の亂我の智を、還復、棄捨し、既に喜捨し已りて、第二禪を得、大歡喜を生ず。歡喜を得已りて、心の、大歡喜に逼らるるを見、轉、勝上を求めて、卽ち光音に至る。光音天に至りて、受樂の處を見、彼處に至り已りて、喜樂を厭離す。既に喜樂を離れて、卽ち三禪を得、三禪中に到りて、卽ち轉、遍淨諸天に勝下して、一向に樂を受く。若し能く是の如く樂を得已りて捨し、受けず著

【三】初禪乃至四禪は、色界四禪といひ、色界の四天に生るべき定なり。

せずして、即ち諸の苦樂の處を遠離して、第四禪を得、既に苦樂及び攀緣心を離れて、一切皆捨つ。復、人有り、自慢心を以ての故に、解脫の相を求め、四禪の果報を出過するを得んと欲するが故に、内に此の四禪の法を思惟し、「廣果天中に、受くる所の果報は、此はこれ麤智もて思惟して之を觀じたるなり」と、又、是の如くに言ふ。彼の人、是の如き事を思惟し已りて、三昧より起ち、其の色身に諸の過患有るを見、色身を捨てて、上勝智を求めんと欲するが故に、是の心を發し、彼の人、是の如く諸禪を捨て已り、進みて、勝處を求めて、此の心を發し、前所說の如く、諸の欲事を捨て、是の如く麤色身を捨離せんが故に、厭離心を發す。彼の時、即ち、身中の、有らゆる虛空無邊の分別を得、此の一切の色相、又は色相內、及び樹木等、有らゆる諸物に於て、悉く皆〔四〕無邊虛空なりと分別し、是の如き等の一切色處を、無邊空なりと明了に分別するを得已り、即ち勝處を證す。」而して偈有りて說く、

「是の如き微妙の大梵處は、一切無相にして常に無言なり。
智人は彼の解脫の因を說き、即ち此を名けて涅槃の果と爲す。」

爾の時、阿羅邏、是の語を說き已り、菩薩に白して言く、「仁者瞿曇、此は即ちこれ我が解脫の

【四】無邊空は四無色天に生るべき四空定の第一たる空處定に於ける世界觀なり。

処、及び其の方便なり。我、今、仁の為めに顕示し已訖る。仁、若し、心意に此の法を喜楽せば、我が所説の如く、仁、領受すべし。』而して偈を説いて言く、

『是の如き清浄解脱の法を。我今知り已りて復広く宣す。
仁者心意に若し喜歓せば、唯願はくは此に依りて領納して受けよ。』

時に阿羅邏、復、更に説きて言はく、『乃ち往昔の時、耆沙仙人（隋に求勝といふ）毘蹉闍那仙人（隋に離別老といふ）波羅奢羅仙人（隋に他備といふ）等、及び余の諸仙、皆其に是の解脱の法を称説し、亦復、同じく此の解脱法に乗じて解脱を得たり。仁者は既にこれ大智の丈夫なり。此の法を行ずるに堪へ。此の法を行じ已りて、能く、善処の解脱の報果を得ん。』

爾の時、菩薩、阿羅邏仙人所説の徒行の法を聞き、受持して行じ、沙門の行を欲し、沙門の果を求めんが故に。此の法を行じて、即便ち證知しぬ。而して菩薩、阿羅邏の口下より、説法を聞き已り。此の法を信行して、違はず背かず。亦復、『我、先に自る知る』と言はず。但、受持し已り、此の法を思惟し、増進して、更に[illegible]の智心を発して、勝処を求め、既に勝処を見て、亦、慢を生じて彼の仙を譏毀せず、但、自ら思惟すらく、『独、阿羅邏に此の信行有るのみに非ず、我も今、亦、是の如き信行有り。独、阿羅邏に精進行と正念三昧、及び諸智等有るのみに非ず、我

も亦これあり、乃至、智等有り。我、今、阿羅邏所知證の如き法を求め已り、他に向ひて說きて、分別顯示し、及び勝處を作すべし」。爾の時、菩薩、阿羅邏所說の法行を、皆悉く證し已り、知見して行ず。然るに菩薩、彼等の諸の法を聞き、多く勤勞無くして、須臾の時頃に、盡く之を得、行せる如く、能く說き、宣通顯示して、一種も異る無し。

爾の時、菩薩、即ち更に前みて、阿羅邏の邊に至り、是の如き言を作す、『尊者阿羅邏、尊、能く是の如く、自證の法智を、他人に向ひて說けり。所謂、(五)無想の處に生るるを求むることとなり』と、是の語を作し已る。時に、阿羅邏、菩薩に報じて言く、『長老瞿曇、是の如き法智は、我、自ら證し已り、他に向ひて、顯說し、宣通開示す。』菩薩、復、言く、『我、尊者より、此の法を聞き已り、尊の所說の如くに、我、信知し行じて、已に此の法を證したり。若し智有るものの、知行の境界は、亦、應に此の如き法を捨てざるべし。但、我の見る所は、此の法、妙なりと雖も、未だ究竟を盡さず。所以は何に。我、意に是の如く觀察思惟す。此の法、猶ほ變動するの時有らん。(六)但、此の境界や、本性是の如しと知り已れば、此の智は、是れ無智なりと雖も、更に、別の、其の餘の諸法を生ぜんと欲す。然も尊者、說きて、「我、

【五】無想之處は、四空定の第二たる識處定を行ぜるもの〻生るべき天。

【六】（原文）但此境界、本性如是、知已此智、雖是無智、更欲生別其餘諸法

清淨解脫を得たり」と言ふと雖も、若し是の因緣の法を分別して觀ずるに、緣に遇へば、還生ずるをもて、眞の解脫に非ず。猶ほ種子を時ならざるに種ゑ、地中に藏在する如し。若し未だ時に順はず、水雨有ること無からば、芽は則ち生ぜざらんも、若し時に依りて種ゑ、潤澤調適ならば、諸緣具足し、和合して則ち生ぜん。今、此も亦然り。但、無智の、愛業に著する、是の如き等の法を、捨し已れるを分別して、「我、解脫せり」といふも、但、我に著する有り。皆、悉く須らく捨すべきなり。㈦即便ち、是の無智と愛等の業と合する無き處を捨て、此等を捨て已れば、前に勝るを得と雖も、未だ眞處に至らず、但、分別有我の處を行ず。彼等微細の三事、會ず有り。彼の微細の諸煩惱を以ての故に、復、更に別に㈧不用の處有り。壽命長遠の分別の故に、「我、解脫を得たり」と言ふ。」而して偈を說いて言はく、

「諸過患の微細なるに因るが故に、所以に不用處の身を受く。
壽命劫數既に久長なれば、便卽ち「我解脫を得たり」と說く。」

菩薩、復言はく、「尊の前に說ける如く、「我、已に我を捨つ」とて、旣に自ら稱して、「我、已に

【七】「原文」即便捨是無智愛等業無合處，此等捨已，雖得勝前，未至眞處，但行分別有我之處，彼等微細三事會有，以彼微細諸煩惱故

【八】不用之處は、四空定の第三たる無所有處定を行ずるものの生るべき天なり。

我を捨てたり」と言ふも、是、則ち眞實に我を捨てたりと名けず。若し分別に依りて、未だ解脫せざるものは、彼に患累有ること無しと言ふべからず。是を以て當に知るべし。患累有る處には、亦、解脫無我の處を得たりと言ふべからず。我の患有ること、異と作すべからず。猶ほ火色と熱とのごとし。熱は色を離れず、色は熱を離れず。此の二、各、體は先に無きを以ての故に合す。若し有らば、是の處有ること無し。我の如きも既に然り。一切諸患、悉く、皆是の如し。此に解脫し已るも、彼處に至りて、還復、縛せらる。智を以て境界を取るが爲の故に、彼、色を滅し已りて、但、識有り。彼、我の識を知る、卽ち是を有と名く。是の有を以ての故に、解脫と名けず。これ我が悉檀なり。(九)境界の大小、是の如く彼を知れば、還、是の如く勝處の所を求むるを得。是の義を以ての故に、何ぞ須らく分別すべき。此の我と非我とを、木の如く壁の如く、重重に相捨てよ。既に各、重重に、智有るが故に、故に我、思惟す。悉く、須らく、一切の境界を放捨して、自利を得しむべし。』而して偈を說いて言はく、

『重重次第に悉く皆捐てよ。是を乃ち名けて境界を捨つと爲す。
一切の根塵を悉く放つが故に、是を自利及び利人と名くるなり。』

【九】境界大小、如是知彼、還得如是、求勝處所。

爾の時、阿羅邏の徒衆の中に、一弟子有り、菩薩に白して言く、『大德瞿曇、今來りて此に至る。我等の住處は、悉く好器を成じ、又復、八種の自在を得。』菩薩、報じて言く、『此處に、云何ぞ、自在有ることを得ん。』時に阿羅邏、弟子を止めて言く、『汝、今、且らく、此の事を思量する莫かれ。所以は何に。自在と言ふは、諸事中に、能く決定を作して、他人と共ならず、等侶有ること無し。內身に自ら審定を證し得たるが故に、乃ち歡喜を生ずるなり。』菩薩、報じて言く、『此の事は然らず。』阿羅邏の言く、『其の義云何。』菩薩、即ち言く、『是の如く是の如し。』阿羅邏の言く、『仁者、但、說け。此の語を違する莫かれ。』菩薩、報じて言く、『若し尊者に依らば、此の行、穢有ること無しと說き言ふや。』阿羅邏の言く、『仁、何の故に此の問を立つるか。何處に疑有るか。』菩薩、報じて言く、『我、今、心に已に、厭離生せるが故に、眞正を問はんと欲す。』阿羅邏の言く、『仁者瞿曇、聞くを得んと欲せば、我、當に爲めに說くべし。凡そ世間を開化せんと欲するは、即ち我これ也。唯、名字有り。不生不老・不退不還・無邊無中・無前無後、是を名けて我と爲す。自在に能く輪轉に入り、生死の內に在りて、亦、暫くも住せず。彼の法と非法と、彼の天と彼の人と、及び諸有の趣に、彼に能く速く行き、彼、能く乘と作る。彼の乘に乘れば、能く深有海を渡りて、法轉去來し、能く生死を作し、亦、能く變化し、自在最勝、最妙

最大、能く世の主と作り、一切を攝化す。』菩薩、問ひて言く、『是の如く化する者、これ有りや以不や。』阿羅邏の言はく、『我、仁者の問ふ所の音聲を觀ずるに、必ず此の如き義を受けざらんと欲するならん。或は當に、仁者、意に貪樂せざるべし。』菩薩、報じて言はく、『我、患、有ること無し』阿羅邏言はく、『大德瞿曇、疑心を作す勿れ。意の樂む所に隨へ。但、自ら、向ふ所の義を論說し、善く思惟して、入り、以て自ら明照せよ。若し自ら見知して、他に誑かされず、他の敎を受けず、他の義に隨はずして、是の如く證する者を、自利を得たりと名く。餘人は能はざるなり。若し不定の心より、諸論師に隨ひて、義意を取らば、其の智滅損せん。仁者、聞き已り、眞正に思惟し、各各讀誦し、深義を觀察して、審に自ら證知せよ。知り已りて疑有らば、意に隨ひて我に問へ。我、當に爲めに說くべし。』菩薩、復、問ふ、『尊者の言ふ所の、能く世を化作して、自在を得との、此の義の中に於て、我が心に疑有り。』阿羅邏言はく、『仁者の意の如きは、此の義然らず。』菩薩、復、言はく、『我、是の如く見る。』阿羅邏の言はく、『何に因りて是の如きか。』菩薩、復、言はく、『此の緣唯一なり。所以は何に。[一〇]若し自在に此の世を化作せば、則ち次第に依りて相生じ、來者を現見するを得ず。其の煩惱輪は、應に是の如く次第して轉ずべからず。亦、應に樂

【一〇】若自在化作此世者、則不得依次第相生、現見來者、其煩惱輪、不應如是次第而轉。

生は、心に利を喜ばずして、自然に得べし。應に一の衆生も、患を離ふるを得ざるべし。應に諸の世人は自在を供養すること、父の如く母の如く、自餘の諸天は、供養を得ざるべし。貧窮の人は、應に彼所有の毀辱善惡の業を說かざるべし、悉く應に彼に在るべし。應に諸の衆生は、依著するに處無かるべし。應に求むる處無かるべし。應に所作の世人無かるべし。應に是の如く自在有り、自在無しと思惟せざるべし。世人、是の如く有無を分別して、應に諸業を作し、作さざるべし。應に自然の果報を得べし。彼の自在天、若し苦行を行じて、自在を成ずるを得ば、世間も亦、應に共に此の業を受くべし。一切も亦應に俱に自在と名くべし。若し彼、因無くして自在を作さば、處として人として、自在ならざるに非る無けん。彼、若し是の自在を建立するに非ざれば、亦、有と名けず。豈に自在を建立すと言ふを得べけんや。」其の阿羅邏、菩薩を讃じて言はく、「大德瞿曇、智慧深遠、善能く顯示し、諸論を承受し、總言總體、悉く智力を以て、分別して能く知る。是の故に平等に、諸悉檀、眞實の路を見る。願はくは我が爲めに說け。疲勞を辭し、法寶を慳惜する莫かれ。」菩薩、復、言はく、『我、今、應當に尊者を供養すべし。』阿羅邏言はく、『師に多種有り。仁者の供養、何に由りてか遍くすべき。然るに今、仁者、既に上首たり。亦、能く彼等を供養するに堪ふべし。』菩薩、復、言はく、『尊者、但、當に我が爲めに此の如き

す。』是の語を說き已る。時に彼の仙人、心に猶ほ忍ばず。阿羅邏の言はく、『大德瞿曇、解脫め道路を、仁は憎むや。此の如き事緣は、本來に非ず。』菩薩、報じて言く、『若し彼の解脫を求めんと欲する時は、須らく是の如くに求むべし。』爾の時、阿羅邏仙人の弟子、復、是の言を作す、『沙門瞿曇、仁は此を離れて、解脫を求めんとせば、徒らに身を損せんのみ。』菩薩、報じて言く、『人は世間の無常の樂を求むるだも、猶尚ほ乏しき有り、況んや復、不還の解脫を求めんと欲するをや。』時に阿羅邏仙人の弟子、復、更に白して言く、『仁者、今、既に、還來せずと言ふ。常に行くべきか。』菩薩、報じて言く、『今、行かんとする處は、既にこれ、意に樂むなり。今、彼處に至らば、復、何ぞ還るべき。』阿羅邏の言く、『行きて彼に至る莫く、還りて此に來る莫きこと、得ざるべきか。』菩薩、報じて言はく、『希有なり、此の事。尊者は、前に說きて、後に有を受くとせり。何の故に復、更に還らざれと言ふか。』阿羅邏の言く、『實に然り、仁者、これ大希有なり。彼の眞如寂靜の體は、無始無終、邊際有ること無く、初も無く後も無し。其の行を定めず、形を議すべからず。然も、無相師禪定主者の建立する所の、大梵天は是なり。』菩薩、復言はく、『我、今、更に大仙尊者に問はん。若し劫、盡きん時、此の諸大地、及び叢林、須彌山等、帝釋の宮殿、悉く劫火に焚燒せられん。爾の時、彼の天は、復、何處に在らんか。これ誰ぞ、字

は誰ぞや、云何が語言せん。功徳果報、云何が往せん。又、劫、盡きん時、諸物は皆盡きん。彼、何ぞ燒けざらん。」爾の時、阿羅邏、默然微笑す。時に阿羅邏仙人の弟子、菩薩に白して言く、『仁者の智慧、今、旣に最も勝る。仁者は自ら、過去一切諸仙の正道を得たるを知らざるべけんや。所謂、尊者波羅奢羅仙人・阿羅隨仙人・阿須梨耶仙人・跋陀那仙人・迦毘婆陀那仙人・陀那達多仙人・達利多耶那仙人・般遮羅波帝仙人・阿沙陀仙人・波摩達多仙人・那侯沙王子耶耶底仙人・韶波梨仙人・波羅婆遮那仙人・脾提阿仙人・闍那迦仙人・阿箕低闍羅低提婆仙人・闍耶沙毘耶仙人・提毘羅仙人・毗陀呵毗耶仙人・婆奴仙人・提婆耶那仙人・泥沙多那耶仙人・耶若多那仙人・尼耶薄那仙人・呵梨低仙人・跋闍羅婆睺仙人。諸の是の如き等の一切の仙人は、皆、日光に入りて正路を取れり。」

爾の時、菩薩、彼の仙に報じて言く、『今、旣に、日光に入りて解脫を求むといふは、此の義これ何に。(然るべくば)我、今、應當に彼の諸有を禮すべし。(さはれ)我は實に、是の如き自在を用ひざるなり。」是の時、菩薩、是の語を作し已り、內に自ら、『阿羅邏の法は、これ究竟に非ず』と思惟して、心に喜歡せざりき。時に阿羅邏仙人の弟子、量度して旣に菩薩の心を知り已り、即ち座より起ち、菩薩に白して言く、『仁者、今、此の法已外に於て、意に更に、勝解脫を求めんと欲するか。』菩薩、報じて言く、『我が意、當に是の如きの法を證すべきを願ふ。(そは)地無く、

水無く、火無く、風無く、及び虚空無く、色無く、聲無く、香無く、味無く、觸無く、相無く、安無く、畏無く、死無く、病無く、老無く、生無く、無有にして無有に非ざる、無常にして無常に非ざる、語言の說に非ず、邊際有ること無きなり。』而して偈を說いて言はく、

〔三〕『本より生老病死の過、幷に及び地・水・火・風・空無し。
三世に湛然たるを師敎無くて、常淨自然に證し解脫せん。』

爾の時、羅邏仙人、是の語を聞き已り、菩薩に白して言く、『仁者瞿曇、我、今、所有自證の法を、以て他人に向つて宣揚顯說す。仁者も、今、亦、自ら證する此の法を、他人に向つて說け。我が解する所の法を、仁者も亦解せり。我が如きは、今日、此の衆の師と作る。仁者も亦、是の如きの師たるに堪ふ。瞿曇、今、我と共に心を同じくすべし。我等二人、此の大衆を領し、敎化顯示せん。』是の時、羅邏、名は師たりと雖も、但、菩薩と平等の行分を取り、自ら半座を以て菩薩に分與し、菩薩を供養し、菩薩の意の堪ふる所に隨つて、供養の具を須ひ、最勝最妙の大歡喜を生じ、心意熙怡して、其の體に遍滿し、自ら勝ふる能はず。爾の時菩薩、是の如く思惟す、『此の法は、能く人をして涅槃に至るを得しめず。亦復、諸欲を遠離し、煩惱を越度する能はず。寂定にし

【三】（原文）本無生老病死過、幷及地水火風空。湛然三世無師敎、常淨自然證解脫。

て、諸漏を盡し、神通を得る能はず。又復、自覺覺他して、沙門の行を作す能はず。諸惡煩惱を滅除する能はず。所以は何に。此の法を行ずれば、唯、非想に生じて、而も諸業を爲す。故に知んぬ、此の法は、これ、究竟至極の果に非ず。』是の念を作し已り、即便ち羅邏を背捨して行く。

而して偈有りて言ふ、

『菩薩此の諸法を思惟し、其の心に甚だ大歡喜せず。
究竟して能く出昇するに非ざるを知り、即ち羅邏に背きて行き去る。』

爾の時、羅邏仙人の徒衆、即ち菩薩と共に、分別して相辭し、是の如き言を作す、『唯、願はくは、仁者、行を行ずるの處、常に吉祥を得んことを。』

答羅摩子品第二十七

爾の時、此の閻浮提地に、復、更に別に一大導師有り、名けて羅摩と言へり。其の命已に終りて、彼の徒衆の主は、即ち摩の長子なり。名けて（一）優陀羅羅摩子といひ、彼の衆を主領す。其の優陀羅、常に彼の衆の爲めに、（二）非想非非想に生れん法を説き、王舍城に近き、一阿蘭若林中に住す。是の時、菩薩、遙に、其の名、前の羅邏所説の法に勝るを聞き、聞き已りて思惟す、『我は今、應當に優陀羅羅摩子の邊に至りて、梵行を行ずべし』と。爾の時、菩薩、阿羅邏の居處より出で、安庠として行き、恒河を渡り、借問して既に知り、即ち其の所に到り、之に白して言く、『仁者優陀、我、仁の邊に於て、教誨を受け梵行を行ぜんと欲す。』時に優陀羅、菩薩に告げて言く、『大德瞿曇、我が觀る所の如くんば、瞿曇を見るに、既にこれ智人なり。我が法を受け梵行を行ずるに堪へん。若し法を受け、梵行を行ぜんと欲する時は、須らく我が法の清淨業果に順うて、行報を得べし。』爾の時、菩薩、優陀羅羅摩子の邊に於て、法を受け、行を行じ、沙門法、沙門の事を求むるが故に、恭敬合掌して白して言く、『仁者、未だ審にせず、仁者所行の

【一】Udraka-Rāmaputra。

【二】非想非非想處は、四空定の第四定を行ぜるものゝ生るべき天なり。

法は、何の境界に至るか。我が爲めに解說せよ。』其の優陀羅、菩薩に告げて言く、『大德瞿曇、凡そ相及び非相を取るは、此は、これ、大患、大癰、大瘡、大癡、大闇なり。若し細かに思惟せば、卽ち彼の微妙の有體を受くるを得ん。能く是の如き次第の解を作せば、此を、寂定微妙最勝最上の解脫と名く。其の解脫の果は、謂はゆ、非想非非想處に至る。我、此の最勝の妙法を行ず。』其の優陀羅、又復、更に言く、『此の非想非非想處に勝れる寂定は、過去の世に無く、現在既に無く、當來も亦無し。此の行は、最勝最妙最上なり。我、此の行を行ず。』爾の時、菩薩、此の法を聞き已り、思惟すること久しからずして、卽ち此の法を證す。是の時、菩薩、彼の邊より、口の出す所に隨ひ、聞き已りて心に信じ、彼の語に隨順して、是の念を作す、『此の如き法は、我も亦、得べく、我も亦、知るべし。我、今、見るべき所、卽ち能く見、知るべき所、卽ち知るを得ること、實語にして虛無し。』復、彼の優陀羅に語りて言く、『但、仁者のみに非ず。昔は父羅摩のみ、獨り信行有りしが、我も今、亦、是の如き信行有り。彼、獨りのみ精進・正念・禪定・智慧有るに非ず、我も今、亦、乃至智慧有り。我、今、彼の法行を行じ、羅摩を學び、自ら法を證し已り、他の爲めに顯說す。彼の法を知れるが故に、彼の法を見たるが故に、更に勝れたるを求めんと欲す。』爾の時、菩薩、其の法を證し已り、優陀羅羅摩子に白して言く、『仁者の父は、昔、此

の非想非非想處に於て、自ら證し、知見して、他に向ひて說けりや。』優陀羅言く、『大德瞿曇、我が父、是の如し。』菩薩、報じて言く、『仁者優陀、我、今、已に通じ、證知奉行す。』其の優陀羅、菩薩に白して言く、『大德瞿曇、若しそれ然らば、仁と我が父羅摩とは異無し。大德瞿曇、仁、今、若し此等の諸法を知り已りて奉行せば、我が父、羅摩仙人の如く、此の大衆を領し、教示宣通すべし。』

時に優陀羅、既に自ら行を修し、梵行を闕かず。㈢但、菩薩を取りて、同行建立せんとて、『菩薩若し同じく法智增上せば、最勝の供養もて、菩薩を供養して、心に歡喜を生じ、自ら勝ふる能はざらん。』爾の時、菩薩、優陀羅に語りて、是の如き言を作す、『仁者の此の法は、究竟に、諸欲を解脫し、煩惱を滅し、寂定一心に諸の結漏を盡し、及び諸神通あり、沙門の行を成じ、大涅槃に到る能はずして、是の法は、還、生死に廻入せん。所以は何に。既に非想非非想處に生じ、報盡きて、還、煩惱に廻入せん。』是の語を作し已るや、其の優陀羅、菩薩に白して言く、『大德瞿曇、聞知せざる可きか。我が父羅摩は、此の法を證せりと雖も、一切處に於て覺せず知らず。已に非想非非想に生ぜるが故なり。而るを還來して生死に入るとは、是の處有ること無けん。後生を取らず、亦

【三】（原文）但取菩薩同行建立、菩薩若同法智增上供養最勝供養菩薩、心生歡喜不能自勝。

復、生の處を見ず。』其の優陀羅、是の如き寂靜の法。㊃奢摩他の行を得たりと雖も、最上の勝法を辦求せず。唯、口に稱して言ふ、『我が父羅摩、是の如き說を作す』と。菩薩、是の如く思惟す、『此の法は、これ究竟に非ず。我、今、應に此の法に專著すべからず』とて、優陀羅を捨て、卽便ち背きて行く。而して偈有りて說く、

『菩薩・思惟して此の法を觀じ、『羅摩・往昔復行せりと雖も、既に解脫究竟乘に非ず』とて、卽便ち背行して捨て去る。』

【四】Samatha。止と譯す。定に同じ。

勸受世利品第二十八の上

爾の時、菩薩、優陀羅羅摩子の處より、辭別して行き、安庠として漸く至りて、(一)般荼婆山(隋に黄白色と言ふ)に向ひ、彼の山に到り已り、山麓の間に、平整の處を求め、一樹下に加趺して坐し、端身住心、正念不動なり。譬へば人あり、頭上に火の燃ゆるを、急疾速に滅して、地に擲つが如し。是の時、菩薩の心に、煩惱の邊際を斷除せんことを求むること、亦復、是の如し。爾の時、菩薩、內心に是の如く思惟籌量す、『我、何の時にか、當に此の大煩惱の聚を散ずるを得べき。我、何の時にか、當に此の大愚癡の藏を破りて、阿耨多羅三藐三菩提を證するを得べき。又諸の衆生、生死に沒在せるを、復、何の時にか、悉く解脫せしめん。』是の如く念じ已り、威德儼然たり。時に彼の山中に、多く雜人有り、或は草柴を取り、乾牛糞を拾ひ、或は復、捕獵し、耕墾して田を作り、或は放牧する人、及び道路を行く。彼等諸人、遙に菩薩の、般荼婆山の樹下に在りて坐するを見るに、猶ほ雜寶の妙金象の光の如し。見已りて各希有の想を生じ、共に相謂つて言はく、『汝諸仁者、此は常人に非ず。何方より來りて此處に到れるか。』或は言はく、『此は、これ、般荼山神なり。』或は言はく、『此は、これ、般荼

【一】 Paṇḍava (パーンダヴ)

婆山所居の仙人なり。』或は言はく、『此は、これ、何處の神明か。』或は言はく、『此は、これ、毗富羅山所護の神なり。』或は言はく、『此は、これ、耆闍崛山守護の神なり。』或は言はく、『此は、これ、大地の神、地より涌出せり。』或は復、言ふ有り、『此は是、虚空上界の天子の、此に下來せるなり。我等、是の如く、心に各、疑を懷く。何を以ての故に。此の神の身體、光明熾盛、威德巍巍として、遍ねく此の山を照らすこと、猶ほ日月の光明の、遍ねく諸婆羅樹を照して、花悉く開敷するが如し。此はこれ、人に非ず。人の光明は、是の如き事を顯現する能はざればなり。』

卷の第二十三

勸受世利品第二十八の中

爾の時、菩薩、是の夜を過ぎ已り、晨朝時に於て、正しく衣服を著し、般茶山より、安庠として行き、王舍城に至り、食を乞はんが爲の故に、諸陰等の苦・空・無常なるを觀じ、(一)無餘大涅槃を求めんと欲せるが故に、地を視る一尋、諸根を調伏し、染著せる處を、皆、悉く除斷して、汙を點せしめず。復、是の念を作す、『我、今、食を乞はんに、鉢器有ること無し。若し、我、食を得んに、何處にか盛らん。』是の時、菩薩、左右前後に、器を求めて未だ得ず。忽ち一處に、大花池有るを見、見已りて卽ち傍なる一人に語りて言はく、『仁者、汝、我に此の中池の蓮の藕葉を乞ふべし。』彼の人、聞き已り、卽便ち池に入り、彼の藕葉を取り、以て菩薩に奉る。是の時、菩薩、彼の藕葉を受け、城に向ひて食を乞ふ。

時に王舍城の内外の人民、菩薩を觀見すること、是の如く詳審に、復、菩薩の威神、巍巍たる

【一】無餘大涅槃は、有餘大涅槃に對す。前業の苦果たる身體の全く滅して、餘すなきをいふ。卽ち灰身滅智の所にあらはるる涅槃なり。

を見、見已りて各、大希有心を生じ、共に相謂つて言はく、『此は是、三目の大自在天の、此に來至せるなり』と。其の中、或は遠くに行く諸人有り。事を營まんと欲するが故に、他方に至り、彼等、既に菩薩を見るや、還、迴りて菩薩の所に向ふ。或は復、人有り、事を造作せんと欲し、中道にて既に菩薩の形容を見、便ち其の業を捨て、來りて菩薩に向ふ。若しくは坐する人有り、菩薩を見已り、覺えず自ら起ち、疾速に來詣して菩薩の所に向ふ。或は復、人有り、十指掌を合し、恭敬一心に、菩薩に向ひ、或は復、頭を以て菩薩を禮し、或は復、微妙の音聲を以て、菩薩に白して、『善來善來』と言ふ有り。

時に王舍城の、有らゆる人民、菩薩を見るもの、一人として、歡喜愛樂の心を生ぜざる有ること無し。其の王舍城の、或は多舌にして、亂言綺語する人、彼等諸人も、菩薩の前に在るや、默然として住し、菩薩に隨つて行く。又王舍城の周匝四方の、或は男、或は女、丈夫、婦人の、餘を營まんと欲する者、悉く捨てて來り看、希有心を生じ、菩薩を觀看して、眼目暫かず、觀る所の菩薩の、支節面額、眉目肩項、手足行步の、一一の處に、各、皆、愛樂し、更に其の餘處の相を看る能はず。

爾の時、菩薩、盛壯なる少年として、喜ぶ可く端正、與樂花鮮、花色の時に、宮を捨てて出家

し、眉間の毫相は、宛轉右旋し、眉は細くして脩揚、目は寛にして長廣、威德は其の體に遍滿し、光明は巍巍堂堂として、普ねく遠近を照らし、手足の羅網は、皆、悉く普く其の二十の指を縵にし、善能く一切の天人を治化して、菩薩の威神は、世間無比なり。而して偈有りて說く、

『菩薩・道路の上を行くや、有らゆる一切諸の看る人、
但身の一分光を覩、見已りて卽便ち愛著を生ず。
雙眉細揚にして初月のごとく、兩目靑紺にして牛王に似、
身體常に大光明を放ち、諸の手足の指に羅網有り。
觀者・微妙の色を見るを以て、衆人覺えず後に隨つて行き。
此の殊妙なる相の莊嚴を看て、各各心に大歡喜を生ず。』

爾の時、王舍の守護城神は、菩薩の是の威儀有るを見、心に驚怖を生じ、戰慄して安んぜず。謂つて言はく、『此は是、何處の大神の、來りて我が此の間の坐處を奪はんと欲するか。』爾の時、菩薩、彼の無量無邊の人衆が、左右に圍遶し、或は後に、或は前に、諸人翻看するを以て、安庠として徐に歩み、漸漸に行きて、王舍城に向ひ、食を乞はんと欲す。擧動俯仰、進止雍容、〔二〕躡足〔三〕前趍、遲からず疾からず、專注平視し、

【二】躡。踵ぐ。
【三】趍。俗の趨の字。

諸根を斂攝し、臂肘【四】臃齊、衣披整肅、擎げたる蓮荷の器、其の葉、萎まず、寂定一心、人、見て歡喜すること最上最勝、奢摩他を得て、柔輭調和すること、制伏の象の如く、濁穢有る無きこと、猶ほ清淨池のごとく、身を離るる一尋、常光の明照すること、娑羅樹の衆花の開敷せるが如く、金の象形の、地より涌出するごとく、具足圓滿の諸相の莊嚴は、夜の虛空に、衆星の圍遶するが如く、菩薩の日月は世間に朗らかなり。

時に王舍城に、諸人輩有り。彼等、皆、悉く大歡喜を生じ希有心を發し、菩薩の街巷を行くを見て、城內の商賈、估販の交關、一切、自ら停まりて、復市買せず。若し店舍に在りて、醉亂心迷せるものは、悉く醒酥を得て、復、飮酒せず。各、一切の讌會音聲を捨て、奔走して、皆、來りて菩薩の所に向ひ、或は復、左右に隨逐して觀、或は復、前に在りて、廻顧して觀、或は復、後に在りて、菩薩に順つて行く。

其の王舍城、無量無邊の諸婦女等、或は門側に倚り、或は廳閤に立ち、或は樓中に住り、或は屋上に居し、舊と作せる生活を、今、悉く爲さず、竝に事緣を廢して、遙に菩薩を觀、家家に戶より出て、各各歡喜し、共に相語つて言はく、『今、此は是誰ぞ。何より來到せる。是は誰の種族か。其の名字は誰ぞ。是の如く端正にして、喜ぶべき行動は、我等昔來、未た曾て見るを得ざり

【四】臃、傭に同じ。ひとし、直し。

き。或は復、沙門か、或は婆羅門か、相貌是の如く、容止異常なること』とて、稱歎の聲、城の內外に遍し。

爾の時、摩伽陀國、王舍城の主、姓は施尼氏、名は（五）頻頭婆羅、未だ王と作らざる時、曾て五願を乞へり。『一に、願はくは我、年少の時、早く王位を得んを。二に、若し王位を得たる已後、願はくは我が化內に、佛・世尊有りて、天下に出現したまはんを。三に、若し佛の、世に出現したまはん時、願はくは我、自身に承事供養せんを。四に、若し承事し得たる已後、唯、願はくは我が爲めに應の如くに說法したまはんを。五に、佛、若し我が爲めに法を說きたまはば、我、法を聞き已りて、願はくは謗毀する莫く、法を證するを得已り、依りて奉行せんを』と。

爾の時、頻頭婆羅王、高樓上に在り、諸大臣の與に、圍遶せられて坐し、遙に菩薩の、諸大衆に前後導從せられ、安庠として行きて、王舍城に入るを見、頻頭婆羅、既に菩薩を覩、心に大疑を生じ、卽ち樓より下り、宮門外に出で、菩薩の身を見るに、威儀擧動、端正にして匹無く、乃至、猶ほ夜空の衆星の如く、諸の觀者の愛樂する所と爲り、摩尼寶の內外の光明、表裏に洞徹するが如く、菩薩の身も、亦復、是の如く威德熾盛にして、照耀すること巍巍たり。時に頻頭

【五】頻頭婆羅は、蓋し頻毗婆羅（Srenika-Bimbisara）の誤。阿育王の父王の名に混ぜるものなり。

王、菩薩の是の如き相を見已り、諸臣に勅して言く、『我、生れてより已來、未だ曾て、人の是の如き形貌を見ず。身色面目、頂額廣平、皎潔分明に、顯赫照曜すること、蓮花葉の、水中に在りて、水の點著する所と爲らざるが如く、是の身の威徳、毛は悉く右旋し、眉間の毫相は琉璃の如くに淨く、亦白珂の如く、亦、泡乳の如く、色炎光具、滿月輪の如く、其の二足趺の蹈地の千輻、歩擧ぐれば文現はれ、跡、差移せず、怖れず驚かず、戰かず慄れず、智慧安靜にして、猶ほ須彌の如し。何所より來りてか、忽然此に至り、端正喜ぶべく、此を歴て遊行する。汝諸臣下、應當に觀看すべし。此は誰の種姓にして、誰の兒子ぞ、何國土の生にして、名字は何等ぞ。』爾の時、彼の諸大臣衆等、或は説いて『此は是天王』と言ふ有り、或は『帝釋』と言ひ、或は復、『これ大龍王』と言ふ有り、或は復、〔六〕『毗摩質多阿修羅王』と言ふ有り、或は復『此は是〔七〕婆梨阿修羅王』と言ふ有り、或は復、『これ毘沙門護世の神王』と言ふ有り、或は復、『此は是、日天』と言ふ有り、或は『月天』と言ひ、或は復、『大自在天』と言ふ有り、或は復、『此は、是梵天』といふ有り。復、更に餘の諸占相婆羅門有りて言はく、〔八〕『大王當に知るべし。我等が論の〔九〕先後に説く所の如くんば、此の人は必ず轉輪聖

【六】Vemacitra（ヴエーマチットラ）
【七】Vadiśa（ヴアイシャ）
【八】（原文）大王當知、如我等論先後所說、此人必成轉輪聖王。
【九】先後の後字、恐くは既字の誤か。

王と成らん。何を以ての故に。今、此の大士の身體に、一切諸相遍滿す。』爾の時、諸臣大衆の中に、別に一臣有り、王に白して言く、『大王當に知るべし。實に斯の事有り。所以は何に。此を去る遠からず、十由旬外、正に北方雪山の下に在りて、一種姓有り、稱して釋氏と爲す。然るに彼の釋氏に、一國界有り、名けて迦毗羅婆蘇都といふ。彼の國土中に、一王有りて治む、名けて淨飯と爲す。是れ釋種の王なり。彼の王、子を生む。字は悉達多。既に釋種の生として、姓は瞿曇氏なり。其の彼の太子、初生の日、父王卽便ち、解相婆羅門等を召集し、相を占せしめし時、諸相師既に占看し訖り、大王に白して言く、「大王當に知るべし。今、此の太子、二種の相を具す。若し家に在らば、必ず當に轉輪聖王を成就して、四天下に王となり、大地を守護し、乃至、如法に世間を治化すべし。若し王位を捨てなば、必定して多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀を成じて、名十方に遍ねきを得ん」と。大王、當に知るべし。此は必ずこれ、彼の太子なること疑はじ。所以は何に。其の人、現に今、鬚髮を剃除して、身は黃金色、袈裟衣を著け、國を捨てて出家し、遊行して此に到れるなり。』而して偈を說いて言はく、

『彼の國の相師此の言を說く、「王位に居らずんば定めて佛と作らん」と。
斯れ決してこれ彼の釋種の子が、出家苦行して菩提を求むるならん。』

爾の時、大臣、是の語を說き已る。是の時、其の王頻頭娑羅、內心に思惟すらく、『我が如きは、往昔、曾て誓願を發したり。若し是の如くんば、我が願、成るを得ん。』時に頻頭王、二臣に勅して言はく、『卿、若し知らば、速に彼に往き、此の出家の人の、何方に居停し、何地に在るかを看よ。汝等聽し已らば、速に我に報じて知らしめよ。然る後、我、當に自ら彼に至り、觀看供養し、未だ聞かざることを諮受せん。』時に彼の二臣、王勅を奉じ已り、卽便ち相共に菩薩の向ふ所に隨逐して行き、暫くも捨離せず。

爾の時、菩薩、王舍城に在り、食を乞ふ時、彼の大衆の、處處に充滿せるを見、內心に是の如き方便を思惟すらく、『此の諸の大衆は、歸依有ること無く、救無く護無く、常に生老病死の爲めに纏はれて、畏れず驚かず、怖れず恐れず、亦復、究竟道を求むることを知らず、導師有ること無く、愚道惛闇にして、煩惱に沒溺し、癡にして智有ること無く、日日に減損し、諸塵に染著し、苦空無常なるを厭離することを知らず。』爾の時、菩薩、是の念を作し已り、慈悲心を起し、倍更に精進勇猛を增加し、其の意を折伏して、是の言を作す、『我、今、當に一切世間の歸依の處と作るべし。我、當に苦惱の世間を救護すべし。當に世間の爲めに、生老病死の盡くる處を說くべし。』爾の時、菩薩、目を擧げて、唯、前の一犂輞を觀、默然として諦視し、徐徐に動歩し

て容儀を齊整し、遍ねく王舍城を、次第に乞食し、既に食を得已り、王舍城より、庠序として出で、漸漸に彼の般茶婆山に至る。其の山麓下に、一泉池有り。彼の水邊に坐し、正念安置し、麤細を得るに隨ひて、法の如く之を噉ひ、食ひ訖りて衣を斂め、手足を洗ひ、卽便ち進んで般茶の頂頭上に上り已りて、山の南に向ひて觀看し、林樹の、妙好なる枝條の、蓊鬱扶疎として、饒き諸鳥獸の、飛走遊戲し、花果泉流するを求覓め、好樹間を擇び、草鋪を安施し、東面に向ひ、端身正心して、結跏趺し、儼然として坐し、猶ほ師子の、孔穴中に入りて、畏れず驚かざる如く、袈裟服を著し、其の光顯赫、巍巍堂堂、熾盛に照曜して、日の初出の如し。而して偈有りて說く、

『彼の山蓊鬱として樹林饒く、鳥獸相娛みて諸樂を受く。
(一〇)身に袈裟を被たる人月者、光明熾盛にして日初の如し。』

爾の時、菩薩、彼の樹下に坐して、是の如く思惟す、『我、今、此處に學するに、更に(一一)人有ること無し。(一二)富伽羅無し。(一三)衆生無し。壽者無し。(一四)命者無し。(一五)禪兜無し。(一六)摩菟闍無し。(一七)摩那婆無し。(一八)養育者無し。此の五陰は、一切皆空にて、命無し、識無し。一切の諸法は、唯、假名の、衆生と名くる有るのみ。』

【一〇】(原文)身被袈裟人月者。
【一一】Puruṣa。人者、男子。
【一二】Pudgala。數取趣。
【一三】Sattva。衆生。
【一四】Jīva。命者。
【一五】Jantu。生者。
【一六】Manujana。意生。
【一七】Māṇavaka。儒童。
【一八】Poṣa。養育者。以上はいづれも我(Ātman)の別名なり。

爾の時、頻頭婆羅王が、使はす所の二臣、菩薩に隨逐して恒に捨離せず。其の一臣、菩薩を去る遠からずして、前に坐し、一臣、速に摩伽陀國頻頭王の邊に還り、到り已りて長跪し、王に白して言く、『大王、當に知るべし。彼の出家人は、王舍城より、飯食を乞ひ訖り、般荼山に到り、乃至、端身にして、南面して坐す。乃至、大王、今、若し觀んと欲すれば、宜しく須らく疾く往くべし。』

爾の時、頻頭婆羅王、其の使人の是の如き語を聞き已り、即便ち賢善の好車を裝束し、其の上に坐し、嚴駕して往き、般荼婆に向ふ。時に頻頭王、既に彼の山に至り、遙に菩薩の、喜ぶ可く端正なるを見、心に甚だ愛樂し、乃至、猶は夜空の衆星の如く、暗山の頭の大猛火聚の如く、大雲裏に電光の出閃するが如く、摩伽陀王が、菩薩の彼の樹下に在るを見るも、亦復、是の如し。見已りて大希有の心を生じ、歡喜、體に遍ねく、身毛皆竪ち、乘を下り、徒歩して、菩薩の邊に詣り、到り已りて問訊し、菩薩に白して言はく、『少病少惱にして、四大安きか。』而して偈有りて說く、

『王・菩薩の端嚴の如く、身光明曜なるを見て心に喜歡し、
起居を問訊す「四大和なりや、少病少惱にして身に患無きか。」』

爾の時、菩薩、微妙の口よりする和輭の語言の、梵天の如き音を以て、辯才字句、不染不著にして、摩伽王頻頭娑羅に告げ、慰勞問訊して、是の如き言を作す、『善治大王、大吉大祥、何より來れるか。坐して憩息すべし。何事を營求せんとて、此に詣れるか。』爾の時、頻頭娑羅王、菩薩の是の如き語を聞き已り、菩薩の前に進み、一石上に在りて、安隱に坐す。王、菩薩の意を度量せんと欲するが故に、菩薩に白して言く、『仁者、今若し疲勞を辭せずば、我、心內に疑ふ所を諮問せんと欲す。唯、願はくは仁者、我が爲に決斷せよ。』即便ち問ひて言く、『仁者は何ぞ、天たりや、龍たりや、梵たりや、釋たりや、人たりや、神たりや。』爾の時、菩薩、憍慢貪欲恚心無く、一切煩惱の諸刺を除斷せるを以て、不諂曲の語もて、摩伽陀頻頭王に報じて言く、『大王、當に知るべし。我は天に非ず、龍に非ず、梵に非ず、我はこれ人なり。大王、我、寂靜を求むるを以ての故に、所以に出家せり。』時に摩伽王頻頭娑羅、菩薩に白して言く、『仁者比丘、我、今、仁を見て、甚だ大に歡喜す。是の故に我、今、問を發する有らんと欲す。我、仁者を敬愛するが爲めの故に、一言を說かんと欲す。唯、願はくは聽受せよ。所以は何に。仁、今、壯少、正に盛年に在り、端正雙無く、身體微妙にして、當に嬉遊遊縱すべきに堪ふる時なるに、今、何の爲めに是の如き意を發し、行じて沙門と作り、王宮を厭離して、空山に獨坐するか。又、仁者の身、是

の如き相貌には、止、赤栴檀香を塗るべし。應に此の袈裟の服を著くべからず。仁の二手は、乃ち世間を指劃治化し、百味、前に盈てて、時に隨ひて飲噉すべし。豈に器を執りて、他より乞ひつつ行くべけんや。』而して偈を説いて言く、

『仁の身には赤檀末を塗るべし、應に此の弊袈裟を服るべからず。
手指に正しく世間を[二九]撝すべし。豈に他より食を乞ひて活くべけんや。』

時に頻頭王、是の語を説き已り、菩薩に白して言く、『仁、今、若し父を敬愛するが爲めの故に、王位を取らず、捨てて出家せるならば、我、今、請ふ、仁、我が境界に在りて、五欲を受けよ。種種の須むる所、當に仁の意に隨ふべく、財を須めば財を、及び諸婇女を與へん。若し我を佐助せば、我、當に仁と國を分ちて、半治すべし。我が境に居り、我が王位を受くべし。我、仁に承事して、乏少せしめじ。何を以ての故に。仁者沙門、身體柔輭なり。應に空閑なる蘭若に住すべからず。若し草鋪に坐して、地上に在らば、仁者の身を損じ、恐畏くは病を成さん。但、少時を經て、仁の父衰敗せば、還りて自ら本國の王位を受くべし。是の故に仁、今、若し我を愛念し、我を憐愍せば、我が王位を受け、我が境中に住せよ。如し、それ、仁者、大種姓を稱して、我が境の狭く、土地の纔なるを嫌はば、我及

【二九】撝、指揮也。

び群臣、諸の百官等、更に別に、仁の爲めに他國を開拓して、寛廣ならしめ、仁と共に治めん。又我、願はくは、仁者の貴族と共に因緣を作し、親厚の眷屬たるを得ん。願はくは疑を生じ、謂ひて實に非ずと爲さざれ。』而して偈を說いて言く、

『仁者若し大種姓を稱して、我が境の狹きを嫌ひ停まるを肯せずば、
我諸臣及び百官と共に、當に更に吞併して寛廣ならしむべし。』

時に摩伽王、是の語を說き已り、更に復、重ねて菩薩に白して言く、『我、仁の邊に、愛敬の心、尊重の心有り。仁者、今、旣に食を乞ひて、活身す。但、當に努力めて寛廣の意を發し、法を受け、財を受け、五欲の樂を受くべし。所以は何に。此の三種を受けて宮中に在り、諸婇女を觀て、歡娛受樂せば、亦、能く人をして現世の報を得しむ。未來も亦然り。若し人、此の三種の法を受けず、但、一事を捨つるも、彼の人は現世にも、或は復未來にも、終に能く果報を具足するを得ず。設しそれ、之を受くるも、必ず缺減有らん。是の故に、仁者、若し心を弘廣にせば、所以に、應に、須らく、具足して此三種の樂を受くべし。王樂を受けんが故に、年少時の端正の果報を用て、法を受け、財を受け、及び諸欲を受けよ。世間の丈夫、欲を受くるの時、生子繼立す。此は是大財なり。この故に仁者、空しく過ぎしむる勿れ。又復、仁者、是の如き臂髆は、弓

弩を牽くに堪ふ。斯の如き一世を徒らに損せしむる莫かれ。又復、往昔、頂生の王は、勇健を以ての故に、四天下及び忉利宮に王たり。是の如く、仁者、當に此の事に堪ふべし。所以は何に。我、今、亦、一切の諸衆生を憐愍するが爲めの故に、是の如く勸請す。我、亦、自の王位の爲ならざるが故に、仁者に勸請す。我、今、仁の身體の端正なるを見て、悲酸流涕、情懷忍びず。是が爲めに、倍、更に、希有の心を生ず。所以に、慇懃に是の如く苦請す。仁、今、盛年なり。且らく世欲を行じ、後衰老して法を行ずべきの時を待ちて、乃ち家を捨つべし。又復、仁者、先祖以來、自種姓の内にては、年老の時に到れば、乃ち國法に依り、王化の事を以て、其の太子或は復大臣に付し、方に始めて位を捨て、出家入山せり。又復、仁者、往昔の諸仙・是の如き說を作す。「凡そ年少の時、先ず欲事を行じ、中年には財を求めて、以て自ら養ひ活き、老耄の時に至り、乃ち棄捐して法を修學すべし。是の如くして、乃ち能く一切を建立す。又、人、年少にして諸欲を行ぜず、財を求覓めざれば、此は是身の怨、亦名けて賊と爲す。諸根を毀敗して、攝受するを得難し。又復、仁者、假使、年少にして、法を求めんと欲するも、但、諸根の爲めに五欲に奄著せらる。老時に至らば、內心に思惟し、衆事を斷絕し、能く諸根を攝して、心に慙愧を生じ、寬、寂靜なるを得ん。又復、仁者、世間の少年は、正に放逸の時なり。遠道を見ず、邊失

有ること多し。中年の時に至り、血氣漸く弱り、放逸已に過ぐ。譬へば人、行きて曠野を度るに、止りて歎息し、「我、已に此の處所を越えたり」と言ふが如し。是の故に、仁、今、正に年少の時、正に放逸の時なり。意の多少に隨ひて、願はくは且らく、欲を受けよ。又復、仁者、年少の時は、諸根廻らし難し。仁者、若し法事を行ぜんと欲して、法を愛樂せば、仁の家法に依りて、諸天を祭祀せよ。祭祀に因るが故に、亦、天に生るるを得ん。家內に在らば、自身を莊嚴し、金銀諸寶もて兩臂を校飾し、衆寶、光を放ちて、猶ほ明燈の如くにせよ。又復、仁者、往昔の諸王は、頭に寶冠を戴き、身體を嚴飾し、常に家內に在りて、諸天を祭祀し、法行を行じ、無遮會を立し、或は山に入りて、大仙の行を行じ、解脫を求むる有りき。仁者、今、既に、彼等を學ばば、時に順ひて行ぜよ。』

其の摩伽王、是の如き種種の譬喩語言もて、方便して、將て菩薩を勸請せんと欲しぬ。爾の時、菩薩、摩伽王の是の如き語を聞き已りて、怖れず驚かず、怪まず異とせず、猶ほ山王の如く、身心不動、寂然安住し、諸根を守攝して餘意を生ぜず、三業清淨にして、彼の王に報じて言ふ。

而して偈有りて說く、

『摩伽陀王の菩薩を諫むるは、猶ほ諸朋友の利して相敎ふるごとし。

菩薩・淸淨なる三業もて行じ、花の水に著せざるが如くに彼に報じぬ。』

『摩伽大王、吐辭、善からず。此の說は猶ほ無智の人の語の如し。天下王法の言たるに稱はず。王、若し我に、眞正の心有らば、此の語は實說に深利益に非ず、亦、我を愍むに非ず。我を甚だ損せん。世に惡人有りて、慈心有る無きこと、猶ほ富貴怯弱の人の如し。若し世間を利益せんと欲せば、應當に彼の往昔より相承し來れる如き事を教示すべし。是を朋友と名け、是を增長と名く。凡そ人若し厄難に至るを見るも、相捨離せずして、三業等同なる、是を知識と名く。我が意、是の如し。富貴の時、誰か能く朋友知識と作らざらん。〔三〇〕若し人、財を得んに、法に依りて處分し、散失せしめざる、是を知識と名く。是の人、久しき後に能く財寶を用て、教授せん時、彼、語を取らずして、或は先業を以て、自ら財を失ふも、後に悔を生ぜざらん。王若し我が與に知識の意を爲し、我を愛敬せば、是の事を顯示せよ。我、或は王を歎せん。或は王を歎せざらん。』爾の時、菩薩、是の語を作し已る。更に復、王の爲めに、是の如き言を說く、『大王、當に知るべし。我、今、道を求むるは、此、生老病死を怖畏するが爲めなり。是の義を以ての故に、解脫を欲求するが故に、此の形を受く。

【三〇】（原文）若人得財、依法處分、不令散失、是名知識、是人久後、能用財寶、教授之時、彼不取語、或以先業、自失其財、彼不生悔、王若與我爲知識意、愛敬我者、顯示是事、我或歎王、或不歎王。

親族眷屬は、實に愛戀すべく、敬すべく捨て難し。流涙滿面、啼泣懊惱して、或は我が爲めの故に命を捨てんものを、我は已に棄背し、來りて此處に至る。然もそれ世間五欲の事に、貪惜染著するは、多く不善に因る。又復、大王、我、今、實に彼の毒蛇を畏れず、亦復、天雷霹靂を畏れず、亦復、猛火炎の大風に吹かれて、野澤を燒くをも畏れず、但、五欲の境界に逼まらるるを畏る。何を以ての故に。大王、當に知るべし。諸欲は無常なること、猶ほ劫賊の如く、諸功德を盜む。虚空にして眞なきこと、猶ほ幻化の、世間に現はるるが如く、觀看して實と謂ふも、體これ誑惑なるを、世人知らず、强て心を以て著す。況んや復、正しく其の五欲を行ずるをや。』爾の時、菩薩、卽ち偈を說いて言はく、

『五欲は無常にして功德を害し、六塵は空幻にして衆生を損ず。
世間の果報は本より人を誑く。知者は誰か能く暫くも停住せん。
愚癡は天上も意に滿たず。況んや復人間の心に稱ふを得んや。
欲穢に染著して覺知せざること、猶は猛火の乾草を然くが如し。
往昔頂生の聖王主は、四域を降伏して金輪を飛ばし、
復帝釋の半座を得て居せしも、忽ち貪心を起して便ち墮落せり。

假使盡く此の大地に王たらんも、心は猶ほ更に他方を攝せんと欲す。

世人の嗜欲は厭くことを知らず、巨海の諸流水を納るるが如し。』

爾の時、菩薩、此の語を說き已り、復、更に告げて言はく、『大王、當に知るべし。往昔、一轉輪聖王有り、名けて那睺沙王といふ。四天下及び忉利天を統べ、總天人を化して、猶ほ足るを知らず。是の義を以ての故に、還世間に墮せり。又復、伊羅轉輪聖王も、亦復、是の如く、四天下及び忉利天に王たりしも、足ることを知らざりしが故に、命終を取れり。又復、婆梨阿修羅王は、既に王位を得、因りて帝釋と共に、鬪戰して如かず、遂に使奪せられぬ。帝釋は得已り、又復、彼の那睺沙轉輪王の爲めに奪はれぬ。那睺沙王は、既に獲得し已り、還復、更に天帝釋に奪はれたり。是の如き天人の境界は、飜覆して並に皆無常なり。誰か功德勝れて、彼の邊に至らん。若し有智の人は、能く是の如き思惟觀察を作す。無常の境界は、變壞須臾なり、云何ぞ信ずべけん。唯、山林に居住する諸仙のみ有りて、諸藥草の根果花葉を食し、身に樹皮を著し、或は復、諸死獸の毛革を衣、形體尫羸して、唯、皮骨のみ住まるも、世間の一切諸苦を度脫出離して、解脫涅槃無爲を希求せんと欲す。若し五欲を縱にして、纏逼せられなば、墜墮して還、來らん。有智の人、誰か此を貪樂せん。若し五欲に著せば、自ら怨を求むるが如し。』爾の時、菩薩、更に偈を

說いて言はく、

『山谷に居住する諸仙輩の、果を食し水を飲み樹皮を衣るは、
復、羈髻し身體羸ると雖も、解脫離欲を規求するが故なり。
彼等は自ら制伏する能はずして、猶ほ五欲に牽かるるも、
是の如き無常の諸欲の怨に、有智の人は應に著すべからず。』

爾の時、菩薩、是の語を說き已り、復、更に告げて言はく、『大王、當に知るべし。欲界の內や、味を取らんと欲するが故に、和合を作し、彼を得已りて後に、而も足るを知らず。若し無智の者は、現に諸欲を受けつつ、足るを知らざるが故に、大苦惱を受け、復、來世に於て、更に其の殃を受く。是の故に、智人は欲想を取らず。是を以て智者は、(二一)黑業法を行ずるある人を見て、大苦を受く。自ら安隱ならんと欲せば、作莫く樂莫く、一切の諸欲を、當に須らく捨離すべし。若し集會する有らば、卽ち離別を知れ。欲を縱にし情を恣にせば、卽ち心放逸となる。放逸にして、若し增さば、便ち不善を造す。不善成就すれば、卽ち(二二)泥犁に墮す。過去世の時に大苦行を作し、現に諸欲を得るも、諸欲を得て後に、勤劬保持して、守護する能はざれば、還、

【二一】黑業は惡業なり。黑は白に對す。白は善、黑は惡に譬へらる。

【二二】泥犁(Naraka)。地獄と譯す。

當に失落すべし。又復、大王、是の如き諸欲、若し智有るものは、是の思惟を作す、「世間の人天は、猶ほ假借の如し。既に常物に非ず。何の故にか、心に此の天人の一切の果報を貪らん。草上の露の如く、毒蛇の頭の如く、彼の空林の死屍骸骨の如く、又婦女初胎の肉搏の如く、夢の如く幻の如く、猶火聚の如し。是の如き種種、多諸の患殃は、恒に一切を苦惱逼迫せしむ。智人は當に愛樂著心せざるべし。又復、大王、諸論の說くが如く、乃ち往昔の時、(二三)寐捺羅城內に、一莾王有り、其の王を名けて(二四)提頭賴吒王といふ。目無しと雖も、多く諸子を育てて、一百人に滿ち、竝に才智有り。王の弟、別に復、子五人有り。伯叔弟兄、一百五に足る。其の父、各沒するや、國王と作らんを爭ひ、報せんと欲せる緣を以て、相殺害し盡せり。又復、大王、(二五)檀荼迦の空曠なる野澤の、火に燒かれし時の如き、其の(二六)頞誰那、諸權嬪を殺せり。又復、彼の須彌山下に、阿修羅有り、然も其の兄弟、各貪の爲の故に、一玉女を愛し、二人相爭ひて、自ら鬪戰し、傷害して俱に死せるが如く、又、世間屠膾の所は、諸木を竪立し、種種諸畜生の形を懸けて、宰戮を行ずるが如く、諸欲は是の如し。智者、云何ぞ心に貪樂せん。」便ち偈を說いて言はく、

【二三】Mithilā
【二四】Dhṛtarāṣṭra
【二五】Daṇḍaka
【二六】Arjuna

『往昔修羅の兩兄弟は、一玉女の爲めに自ら相殘へり。
骨肉の憐愛も染著より憎む。智人は觀知して欲を貪らず。』

菩薩、又言はく『大王、當に知るべし。或は復、人有り、五欲の爲めの故に、或は天に生れんと欲し、或は人間に生れんとし、既に生るるを得已りて、五欲に著するが故に、身を投じて水に(二七)透り、或は復、火に赴く。是の如き無常、誑惑の境界に、五欲の爲めの故に、自ら怨讎を求む。何の意か戀樂せん。』又、偈を說いて言はく、

『癡人は愛欲の故に貪窮し、繫縛傷殺して諸苦を受く。
意に此の欲の衆事を成すを望み、力盡きて後世の殃なるを覺せず。』

菩薩、復言く、『摩伽陀王、我、五欲の是の如き種種多諸の過患を知る。王、今、是の五欲を以て我に勸むべからず。我、今、道路を行かんと欲す。王、若し、これ、我が眞好の善友ならば、應當に、數數、我を勸諫し、是の如き言を作すべし、「仁の發せる所の弘誓の大願、願はくは早く成就し、速に煩惱を離れよ」と。何を以ての故に。我、既に他人に趂逐せられずして、山林に入りぬ。亦復、怨敵の爲めに駈られず、亦、他に王位を奪はれて走れるに非ず。又亦、往昔の古仙を求めて、還退せんと欲せず。是の故に、我、今、王の語を取らず。又復、大王、若し人有りて

【二七】透は跳也。

瞋毒の蛇頭を執り、既に放捨し已りて、復、還りて捉へんと欲すること、有り得べしや不や。猛火炬を、手を焼けるを以て放ち、放ち已りて更に捉ふる如し。是の如し、是の如し。我、已に彼の五欲を捨てて出家せるを、今、復、還りて取らば、亦復、是の如し。又復、大王、譬へば明眼有目の人の如し。豈、盲瞎の人を羨むべきや不や。譬へは、解脱無事の人の如し。豈、牢獄に繋縛せらるる有事の人を羨むべきや。譬へば、饒財巨富の人の如し。豈、貧窮飢凍乞索の人を羨むべきや不や。譬へば明了黠慧の人の如し、豈、狂顛の人を羨むべきや不や。然も、その彼等は猶、羨むべき有らんも、我は今、已に是の如き五欲を離れて、一の貪るべき無し。又復、大王、王の、前に「我が境界に住し、我が五欲を受け、意に随て娯樂せよ。我、多財幷に婇女を與へん」と言へるが如き、大王當に知るべし、我は今、世間の五欲、上に說く所の如き一切の諸事を取らず。又復、大王、我、本宮に在るや、五欲多饒なりしを、已に能く六萬の婇女を棄捨して、出家入山せり。大王、當に知るべし、諸欲は是の如く、無量無邊の患害有り、人を牽きて直ちに大地獄中に向ひ、餘報、復、來りて、畜生餓鬼に身を現す。又、一切の善根を離れて、聖人の讚美する所と爲らず。又復、大王、世間の諸欲は、猶、浮雲の、暫らくも住する有る無きが如し。猛風の起る、須臾も停らざるが如し。山水の流るる、奔濤迅急なるが如し。又復、大王、若し人、

愚癡にして、五欲に耽染し、本際を知らず、生死に沈淪し、煩惱の縛を被りて、解を得る能はざること、遠行の人の、困苦疲極し、乃ち鹹水を飲みて、更に其渴を增すが如し。是の如く是の如く、五欲を受くる人の、其の患を知らざる、亦復、是の如し。又復、大王、我、今、要說せん。若し當に人有り、天の五欲、及以び人間の上妙の五欲を得て、淸淨具足ならんに、彼等の諸欲を、一人にて得已るも、厭足を知らず、更に復、增長して、諸處に尋求すべし。又復、大王、王の前に言へるが如く、「我と共に摩伽陀國を治化せば、我、當に減半して、天下を分治すべし。」或は復、說きて言はく、「我が王位を受けなば、我、悉く捨て與へ、我も亦、承事し、或は復、兵を興し、境土を開拓して、淸淨寬廣莊嚴ならしめん」と。又復、大王、我は今、已に彼の四天下の、一切豐足して、乏少する所無きを捨てたり。舊、七寶有りしを、棄捨して出家せり。我、今、豈、更に、此の一國の細少なる王位を、貪羨することをせんや。又復、大王、譬へば、大海の娑伽龍王の果報の如く、既に大海水を得、停りて以て宮殿と爲し、寬博具足して、七寶莊嚴せるに、豈、復、牛蹄の水を貪るべけんや。大王、當に知るべし。是の如く、是の如く、我、今、既に勇猛心を發し、四天下の七寶宮觀を捨て、染衣剃髮して出家入山せるに、今、若し、還、世間の王位を貪らんは、亦復、是の如し。

巻の第二十四

勸受世利品第二十八の下

爾の時、菩薩、復、王に告げて言く、『王の前に說けるが如きは、『仁者比丘、身體柔輭なり。蘭若の空閑林中に住し、草鋪の上に眠臥坐止するなかれ』と。大王、當に知るべし、我、自宮に在るや、妙種種の諸寶を以て床と爲し、偃亞して坐せるを、既に厭離し已り、棄捨して、出家せり。所以は何に。大王、須らく識るべし。此の身は危脆、俱壞無常にして、牢固の形に非ず、是破散の法なり。(一)地の有る處に隨ひて、之を捨てて行き、猶、泥摶の如くにして、一種も異るなけん。又復、大王、若し智有る人は、既に擲てる死屍を、還、拾ふべしや不や。若し更に收めんと欲すること、終に是の處無けん。又復、大王、王の、前に言ふが如く、若し我が邊に於て、憐愍を生ぜば、應に須らく隨喜すべし。而るを忽ち我が乞食活命を嫌ふは、此の事然らず。大王、當に知るべし。我を憐愛せば、是の心を作す莫かれ。何を以ての故に。我は今、生老病死の苦患の海を過ぎ、行を行じて道に入らんと

【一】(原文)隨有地處、捨之而行、猶如泥摶、一種無異。

欲す。是の故に此の比丘の形を作すは、寂滅安樂處を求めんが爲の故なり。須らく此の喜好の服形を受くべきを要するは、又未來世に、一切の諸過患を除かんと欲するが故なり。大王、當に知るべし。若し復、人有り、現在世に、彼の五欲の功德果報を受けて、深く愛に著する、彼等諸人は、事須らく憐愍すべし。若し當に人有り、現世中に於て、寂定安樂の心を得ず、其の未來生に、決して諸苦を受くべき、彼等衆生の心は、須らく憐愍すべし。又復、大王、我は今、煩惱の苦を驚畏するが故に、捨てて出家し、寂定涅槃眞實を求めんと欲す。假使、我をして帝釋の天宮を得しめんも、意、亦、樂まず。況んや、復、人間の麤弊の果報をや。』而して偈を說きて言はく、

『我煩惱の箭に射られ、寂滅の膏藥を求めて塗らんと欲す。
設使天帝釋の宮を得んも、意に猶ほ貪らず況んや王位をや。』

菩薩、復言はく、『大王、當に知るべし。王、前に言ふが如くんば、「凡そ天下の人の、世間に在るや、一切須らく三時の利を取るべし」と。我が意、此を觀ずるが如くんば、此は則ち眞實利益の言にあらず。所以は何に。財を求めて多を得んも、會必ず盡くる有り。欲を求め欲を轉じて、厭足する時無し。若し法を求むと言はば、此は是眞の利なり。利に深淺有るも、必ず須らく求むべきを要す。之を求むれば則ち功能五種有り。』而して偈を說きて言はく、

『若し生老病死の患無ければ、此は是眞實の大丈夫なり。
財を求め欲を嗜むは悉く世情なり、我二求を捨てて唯法を取る。』

菩薩、復、言はく、『大王、當に知るべし。王の前言の如くんば、「但、且らく民を治めて、王位を取れ。乃至、未だ老いず。正しく少年の時は、且、彼の五欲の法道を受くべし」と。此も亦然らず。何を以ての故に。若し少年の時にして、是、常住ならば、一切の衆生は、當に老有ること無かるべく、在在處處に、應に彼の死命の鬼の爲めに、念念に牽かれざるべし。諸の衆生は、壽命定めなきを以て、是の故に、智人、若し寂定解脱の法を求めば、世間の王位、五欲の樂を取るを得べからず。是の故に、一切、若しくは少年に在るも、若しくは中年に在るも、或は復、老年も、但、須らく速に、應に辦せらるべきものを求めて、早く辦ずるを得しむべきなり。解脱を欲求し、或は禪を求めんに、淹遲せしむる莫く、宜しく速に疾く作すべし。又復、大王、王の前言の如くんば、「須らく家法に依りて、祭祀を作し、及び布施を行じ、意に隨ひて、彼の未來世の諸果報を規求すべし」と。大王、當に知るべし。我は今、是の如きの樂を取らず。若し苦の來り逼ること、切なるが爲の故に、求めて樂を得んは、此れ眞の樂に非ず。凡人、後世の果報を求めて、諸天幷に及び火神を祭祀せんに、必ず須らく他の衆生の命を殺害すべし。此は則ち理に非

ず。所以は何に。若し人、慈を行せば、應に他の身、命根を損害せざるべきなり。假使、衆生を殺害し、一切の諸天、及び火神を祭祀して、彼の常樂定の果報を得んも、猶尚、命を殺害して用て祭祀すべからざるなり。況んや復、一切所得の果報は、皆これ無常にして、破壞盡滅し、牢固の法に非ざるをや。又復、大王、凡そ人、解脫の法を行せんと欲せば、別利有ること無く、或は行を行ずる無く、或は持戒する無く、或は禪定無きも、猶尚、他の命を損害して、未來の利益果報を求むべからず。又諸凡夫の、世間に在るや、殺生を以ての故に、假使、安樂果を得んも、此も亦不善なり。所以は何に。慈無きを以ての故に。況んや復、未來に善報を得んを望むも、終に是の處無けん。』而して偈を說きて言はく、

『假使人生れて世間に在り、他の命を殺害して以て樂を得るも、
智者は此を非善なりと稱說す。況んや復來世に人天を求むるをや。』

爾の時、摩伽陀國、頻頭娑羅王、菩薩の是の如き語を聞き已り、便ち希有奇特の心を生じ、菩薩の前に在りて、慈悲を以ての故に、是の如き言を作す、『善い哉、善い哉、沙門瞿曇、大に難行苦行の德有り、世間中に於て、能く諸欲を捨てたり。仁者比丘、何方より忽然として來れる。何の聚落に生れたる。是は何の種姓ぞ。父母は何處に。自の名字は誰とかいふ。』是の語を作し已り

て、至心に諦聽す。爾の時、菩薩、正心直視し、溫和の言氣して、王に報じて言く、『大王、當に知るべし。此を去る北方、雪山の下に、大聚落有り、名けて釋種といふ。彼に一城有り、名けて迦毗羅婆蘇都（隋に黃頭居處と言ふ）と爲す。彼の城に一釋種の王有り、號して淨飯と名く。是れ我が父、我はこれ其の子なり。母を摩耶（隋に幻といふ）と名く。我が名は悉達（隋に成利といふ）なり。』時に頻頭王、此の語を聞き已り、泣涕悲啼し、少時頃を經、面淚を拭ひ、菩薩に白して言く、『希有なり、比丘、既に是の如き大種姓の家に生れて、云何ぞ、此の林内に在りて獨行するや。諸獸猛惡にして、畏るべく怖るべし。此の林は不善なり。獨自の娛樂にして、伴侶有ることなきに、云何ぞ住して、坐起自ら安きを得ん。』爾の時、菩薩、頻頭王に報じて言く、『大王、當に知るべし。我は今、諸惡禽獸を畏れず、亦復、驚かず怖れず怯ぢず。設、來らんと欲するも、亦復、我が一毛だも動かす能はじ。大王、當に知るべし。我、今、唯、生老病死に逼切せらるるを畏るるが故に、來りて此の諸惡獸中の驚畏なる林内に在り、獨一無伴にして、自ら娛樂す。大王、當に知るべし。老は最畏るべし。所以は何に。老の來逼する時、能く年少盛壯を奪ひ將て去り、身形を摧折し、腰脊は傴僂となり、行步する能はず。猶ほ枯樹の如し。誰か喜樂して看ん。此は最畏るべし。又復、大王、それ病の來るは、是を畏るべしと名く。所以は何に。平健の時には、不知不覺なるも、一朝痛切

なれば、宛轉呻吟し、花色の充鮮なるも、忽然に悴滅し、煩寃楚毒、眠坐不安、是の時に當り、一誰か能く代らんものぞ。臥して牀枕に在り、勢、心に從はず。是の因緣を以て、病は最畏るべし。又復、大王、死は最畏るべし。所以は何に。死の來らん日には、我が壽命を滅じ、忽ち撮りて將て去る。復、力、能く四天下を統べ、金輪摧伏し、七寶前に導くと雖も、利刃强兵もて、能く遮制し、爭奪せんこと得可らず。是の義を以ての故に、死は最も人を怖れしむ。』是の時、頻頭娑羅王、復、更に重ねて菩薩に問ひて言はく、『大聖太子、仁は今、何をか求むる。』菩薩、報じて言く、『摩伽大王、我の今、求むるは、唯、是、阿耨多羅三藐三菩提なり。得已れば當に無上の法輪を轉ずべし。是の故に求むるのみ。』時に頻頭王、菩薩に白して言く、『大聖太子、我が所見の如くんば、仁の心、勇猛なり。勤劬精進して、決定して阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得んこと、終に疑有ること無けん。又決して能く無上法輪を轉せん。善い哉太子、我、今、仁を見たり。善い哉、太子、我、仁の名を聞けり。善い哉、太子、仁は善く出家せり。仁は釋種の子なり。我、今日より、當に常に承事すべし。大聖太子、我、今、仁に請ふ。恒常に日日、我が宮に來至せよ。願はくは數、我を見んことを。仁の須ふる所の四種の事は、我、當に供養して乏少せしめざるべし。』時に頻頭王、是の語を作し已るや、菩薩、報じて言く、『大王、當に知るべし。

三汝、今より久しからずして、此より移去し、更に餘方に詣らん。』時に頻頭王、是の語を聞き已り、十指掌を合し、菩薩に白して言く、『大聖太子、仁の心に求むる所、唯願はくは諸魔の障礙有ること莫く、獲んと規する所、願はくは早く成辦せんことを。仁、釋種の子よ。願はくは、仁、若し、阿耨多羅三藐三菩提を得ん時、我は仁の邊に於て、恭敬供養し、仁の身を見已りて、即ち當に仁の爲めに、聲聞如法の弟子と作るべし。』即便ち偈を説き、讃歎して言はく、

『我れ頻頭王合掌して讃ず、唯願はくは太子の道を速に成ぜんことを。
若し所作辦じて今の言を憶はば、諸衆生の爲めに憐愍を賜へ。』

爾の時、菩薩、是の語を聞き已り、即ち王に報じて言く、『善い哉大王、願はくは王の言の如く、作す所の誓願、彼此倶に善なれ。』時に頻頭王、十指掌を合し、一心に頂禮し、菩薩に白して言く、『善い哉太子、今、我が爲めに懺悔を受くべし。我、無智なるを以て、大聖を惱亂せり。太子は欲を離れ、以て不淨と爲し、我が心は欲に染し、欲を以て淨と爲せり。唯、願はくは、恕量して、我が此の罪を除け。』爾の時、菩薩、熙怡として微笑し、頻頭王に報じて、是の如き言を作す、『善い哉大王、是の如く是の如し。我、王の清淨なる懺悔を受く。願はくは王よ、安樂に、少病少惱に、身心を謹慎して、更に放逸なる莫く、恒に善法を行じ、非法

【三】汝は恐くは我の誤。

を捨離せよ。若し是の如くば、王は安隱を得、多く吉利を受けん。』是の時、菩薩、頻頭娑羅王の心を慰喩し、法義の說の故に、其をして歡喜せしめ、勸請敎示し、顯說宣揚し、座より起ち、漸く餘處に行く。

時に頻頭王、即ち前みて菩薩の二足を頂禮し、圍遶三帀し、地に立ちて住し、面を菩薩に向け、觀矚すること少時にして、即ち彼處より廻還して宮に到る。而して偈有りて說く、

『菩薩は頻頭の說を印可す、「我成道するを得ば當に王を度すべし。」
大聖を思惟して行くゆく喜歡し、覺えず山より本國に還りぬ。』

精進苦行品第二十九の上

爾の時、菩薩、般荼婆山林より出で、安庠として徒歩し、〔一〕伽耶城に向ひ、既に彼に到り已りて、〔二〕伽耶尸梨沙山（隋に象頭といふ）に登上し、身心を攝し、諸惡を滅除せんと欲し、彼の山に上り已り、平整の處を選び、一樹下に在りて、草を鋪きて坐す。是の時、菩薩、內心に、三種の譬喩を思惟す。悉くこれ、世間希有の事にして、未だ曾て説けるを聞かず、未だ曾て観見せず、未だ曾て證知せざるものなり。何等をか三となす。「一には所謂若しくは沙門あり、若しくは婆羅門有り、復、身體に欲を行ぜずと雖も、而も其の彼等所有の欲中、心意（中にある）一切の、欲の愛・欲の惱・欲の熱・欲の著、滅すること盡きず、未だ正定を得ずして、猶ほ我相有りて自ら一身を度せば、彼等沙門及び婆羅門は、恒に苦惱を受けて、意喜ばず、心樂まず、知見する能はず、又復、上仁の法を得ず、亦、無畏の處を證する能はざるなり。〔三〕然もその彼等は、我相無くして、獨り身を度せず、苦惱を受けずと雖も、意の不喜不樂を受けずと雖も、猶ほ法、及び無畏の處を知見し證する能はざるなり。譬へば人有り、生濕の木、幷に及び濕糞を

【一】Gaya
【二】Gayaśīrṣa
【三】（原文 然其彼等、雖無我相・不獨度身、不受苦惱・雖不受意、不喜不樂・而猶不能知見當法及無畏處）

取りて、水上に置き、中に就きて火を攅るが如し。人有り、彼岸より來りて、其に就きて火を乞はんに、然も是の如きの人は、生濕の木、濕糞、水上より、力を出して火を攅り、能く火を得て、彼の人に與ふる有らんや不や。若し能く得んこと、終に是の處無けん。火既に出でざるに、彼の人、從て求むるも、何にして得んや。是の如く、是の如し。若し沙門及び婆羅門有り、欲を行ぜずと雖も、乃至、法を知見し、證する能はず。』此は卽ち是、初第一の譬喩、世に未だ曾て有らず、亦、未だ曾て聞かざるなり。

爾の時、菩薩、復、更に第二に思惟念言すらく、『若し諸沙門及び婆羅門、身を禁制して、欲を行ぜずと雖も、彼等所有の欲中、意の貪・熱・惱・及び著、滅すること盡きず、未だ正定を得ざるに、猶、我相有りて、自ら一身を度せば、徒に苦惱を受け、喜ばず樂まず、上仁の法、無畏の處を知見し證する能はず。【四】又復、彼等、我相無くして、獨り身を度せず、苦惱を受けず、及び心意の不喜樂を受けずと雖も、上仁の法、及び無畏の處を知見し、證する能はず。譬へば人有り、生濕の木を取りて、地上に置き、攅りて火を出さんと欲するが如し。亦復、人有り、來從して火を乞はんに、其の此の人に向ひ、生濕の木より、攅りて火を求めんと欲するも、能く火を得て、彼の人に與へん

【四】（原文）又復彼等、雖無我相、不獨度身、不受苦惱、及不受心意不喜樂、不能知見證上仁法及無畏處。

や不や。若し能く得んこと、是の處有ること無けん。是の如く是の如し。是の諸沙門及び婆羅門等、欲を行せずと雖も、乃至、法を知見し、證する能はず。』此の第二喩も、世に未だ有るを聞かず。

爾の時、菩薩、復、更に第三に思惟念言すらく、『若し諸沙門及び婆羅門、身を禁節し、欲を行せずして、彼等所有の欲中、意の愛・惱・熱・及び著、滅盡して正定ならば、此等の沙門・婆羅門等は、自利及以び利他を得て、心中に喜樂し、能く知り能く見て、上仁の法を得、無畏の處を證せん。譬へば人有り、乾燥せる木、及以び乾糞を取りて、地上に置き、攢りて火を出さんと欲し、亦復、人有り、還、此岸より、其に向ひて火を乞はんに、その是の人、少功夫を以て、即便ち火を得、持て彼の人に與ふるが如し。是の如く是の如し。若し沙門及び婆羅門有り、欲を離れて行じ、彼等、設し、欲中の、意の愛・惱・熱を、皆滅する有らば、乃至、彼の上仁の法を得、無畏の處を證せん。』此は是、菩薩第三の譬喩、自の意念より生じ、悉く是、世間の未だ曾て聞見せざるものなり。

爾の時、菩薩、彼の伽耶尸梨沙山より下り、摩伽陀の聚落内に來り、次第に行き、人に借問して言く、『此處に何なる功德の行ずべきか有る。何なる非法の、宜しく須らく除斷すべきか有る。』

我、今、最上の寂定最妙の音辭を求めんと欲す。』是の如く、前行して伽耶の南に至るに、一聚落有り、其の聚落を〔五〕優婁頻螺と名く。彼處に至るに及び、日は以に食時なり。菩薩、衣を著けて、彼の聚落に入り、一陶家に詣り、從ひて瓦器を乞ひ、得已りて手に持ち、彼の聚落を歴し、次第に食を乞ひて、一村主長者の家に到れり。然るに其の長者を、〔六〕難提迦（譯に自喜といふ）と名く。彼の家に至り已り、却いて一面に立ち、默然として住す。其の難提迦、自喜村主に一善女有り、〔七〕須闍多（譯に善生といふ）と名く。彼の女は端正喜ぶべく、雙無く、諸世人の樂見する所たり。其善生女、遙に菩薩の、手に瓦器を持ち默然立住して食を乞ひ求めんと欲するを見、善生見已るや、其二乳より、自然に汁出づ。時に善生女、菩薩に問ひて言はく、『最勝なる仁者、仁はこれ誰の子ぞ。これ何の種姓ぞ。名字は云何。父母は何處ぞ。今、何をか求めんと欲する。仁者、云何ぞ何の神異か有る。今、我一見して、我が兩乳汁をして自然に流れしむ。』爾の時、菩薩報じて言はく、『善姉、我名は悉達。此の名はこれ我が父母の所立なり。我、今、阿耨多羅三藐三菩提を欲求す。得已らば當に無上の法輪を轉ずべし。』時に善生女、是の語を聞き已り、菩薩の手より瓦器を取りて自家中に入り、香美甘味の飲食、并に及び種種の餅果、〔八〕羹臛を滿て盛りて、

【五】Urubilva 苦行林と譯す
【六】Nandika
【七】Sujata
【八】羹臛。肉のあつもの。

瓦器の中に溢れしめ、卽ち出でて胡跪し、菩薩に授け奉りて、口に是の言を作す、『最勝なる仁者、我、願はくは恒常に仁者に供養し、衣服・飲食・臥具・湯藥、四事の須むる所を、悉く充足せしめんを。唯願はくは仁者、慈悲もて納受したまへ。我、仁者が父母の立名を觀じ、復、仁者の精進勇猛、至意專心なるを見るに、必ず當に阿耨多羅三藐三菩提を成就し、決定して無上法輪を轉ずべきこと、眞實にして疑はず。仁者若し菩提を成ぜん時は、當に我が家に來りて我が供養を受け、我を度脱すべし。當に仁の聲聞弟子と作るべし。』是の時、菩薩、報じて言く、『善姉、當に願ふ所の如くすべし。』既に食を受け已り、卽便ち捨てて行く。

爾の時、菩薩、善生女より、食を乞ひ得已り、空靜の處にて、如法に食し、食し已りて經行し、漸く一處に到るに、地方平整にして、清淨喜ぶ可く、心に樂みて觀んと欲す。樹林蓊鬱として、枝條繁茂し、多饒なる花果・清淨なる流渠、香美なる諸水・河池泉沼、映發交横し、種種豐饒にて、乏少する所無く、彼等諸水は、淺からず深からず、澄清皎潔にして、度り易く取り易く、其の内に毒惡の諸蟲有ることなく、妙好の禽獸を周匝具足し、聚落を離れ去ること、近からず遙かならず、往來乞求に、疲無く乏無く、其の間の道陌、土地坦平にして、下からず高からず、行き易く渉り易し。若し當に人有り、無上最勝の利益を欲求せんに、得易く成じ易く、速に辦じ速

に證すべし。兼ねて蚊虻及び諸蟲蝎を絶ち、又喧鬧ならず、晝は行人の往來擾亂少なく、夜は音響を斷ちて、安靜淸閑に、冷暖調和し、風雨節に順じて、道を修し、禪定もて心を修むべきに堪ふ。

又往昔の時、一王仙有り、名けて【九】伽耶（隋に象といふ）といふ。中に在りて停住せり。これは彼の王仙の舊城居處なり。爾の時、菩薩、此の地を見已りて、是の如く思惟す、『此の中の地勢、快好方平なり。暫く視て、即便ち人の樂む所と爲り、乃至、道を修し、禪を行ずべきに堪ふ。若し丈夫有り、無上最勝の利を求め、諸惡を斷ぜんと欲せば、此の地に安止して住するに足り堪ふ。我、今、既に諸惡を摧伏し、諸善根を修せんと欲す。宜しく應に停止して、此處に坐し、以て菩提を求めて、必ず成就せしむべし。』菩薩、是の如く心に思惟し已り、即便ち草を取り、鋪きて此の地に坐し、禪を修習せんと欲す。既に坐定まり已りて、心に是の如く念ず、『諸衆生の解脱を求むる者は、悉く種種衆雜の苦行を行ず。所謂、或は諸衆生輩有り、一手を懸け住めて、以て世間一切の諸事を捨つ。有爲法の故なり。彼等、是の如き苦行の人、或は食を乞ふ時、【一〇】缸口の内より食を受けず、或は小口の鉢内より食を受け取らざる有り。或は兩羊の間より食を受け取らざる有り。或は人の糞穢の間より食

【九】Gaya.
【一〇】缸はかめなり。

を受け取らざる有り。或は杖に挂る人の邊より食を受け取らざる有り。(一)或は刀杖を執るの人の邊より其施食を受けず。是の如く、確間より、及び婦人の不淨の來る時を知れば、從て食を受けず。或は婦人懷妊の時を見るや、亦復、其の邊より食を受けず。或は人家に不淨の業有るを知れば、從て食を受けず。或は酒に醉へる人の邊より、其食を受け取らざる有り。或は兩人食を喫する時に、亦復、其の邊より食を受けざる有り。食を受けんとする時、狗の前に來る有れば、亦食を受けず。又食を受くる時、其の上に或は蚊虻等の來る有りて、不淨穢惡なれば、亦從て受けず。或は復、人有り、唱呼して、「來れ汝に食を與へん」と喚べば、亦從て受けず。人有り唱へて、「汝、住せよ、食を與へん」といふも亦從て受けず。或は人唱へて、「我は食施をなさん、汝當に待て取るべし」と言ふも、亦從て受けず。人有り、故に、爲めに食を造作するも、亦從て受けず。或は復、人有りて、諸天を祭祀せる殘餘の食も、亦從て受けず。食內に若し沙糖石蜜有るも、亦從て受けず。蘇油等有るも、亦從て受けず。食內に或は乳酪等の物有るも、亦從て受けず。食內に若し魚雜肉等有るも、亦從て受けず。或は食內に、(二)興渠・臭薫の諸辛味等有るも、亦從て受けず。(三)或は復、止一

【一】(原文)或不從執刀杖人邊受其施食、如是確間、及知婦人不淨來時、不從受食。

【二】興渠（[illegible]）。五辛の一。

【三】(原文)或復止受一家之食齋一日止、或受二家、至兩日止。

家の食を受けて、一口に齊りて止め、或は二家を受け、兩口に至りて止め、乃至、或は七家の食を受け、還復、七口を食して止め、或は復、一日、止一時に食し、或は復、一日兩時に食し、或は復、一日半に始めて食を喫し、或は三日を經て、乃ち、一食を喫し、或時は一日に少許を食し、或時は兩日に亦少許を食し、乃至、七日に亦少許を食し、或は唯菜を食し、或は唯稗根を食し、或は復、唯、樹の嫩き枝條を食し、或は唯、酪を食し、或は復、唯、迦尼迦羅樹の枝柯を食し、或は復、時有りては純ら羊糞を食し、或は復、時有りては純ら牛糞を、或は烏麻滓を食し、或は果子を食し、或は諸種一切の草根を食し、或は藕根を食し、或は種種の草の嫩き枝條を食す、或は復、唯、空しく水を飲み以て活命する有り、或は宜しきに隨ひ、得る所の多少、卽ち以て活命する有り。或は復、野獸の草を食し、以て活命を學ぶ有り。或る時には、地に立ちて、卓然として住し、或は復、一定に坐して移らざる有り。或は復、四支、地に拄著し、口を以て食を受くるあり。或は唯、純草の衣を著する有り。或は唯、塚間の弊衣を著する有り。或は復、種種の草衣を著する有り。或は復、憍奢耶衣を著する有り。或は白桃の皮を以て衣となし、或は龍鬚を以て衣と作し、或は復、諸畜生の皮を以て衣と作す有り。或は復、故畜生皮を用て衣と作す有り。或は諸の毛氄を以て衣と作す有り。或は諸畜生の皮を破り、條となして衣を作る有り。或は復、糞

掃を以て衣と作す有り。或は裸形なる有り。或は棘上に臥し、或は板上に臥し、或は復、摩尼の上に臥す有り。或は椽上に臥し、或は塚間に臥し、或は蟻垤の内に、猶ほ蛇居の如く、或は露地に臥し、或は復、水に事へ、或は復、火に事へ、或は日を逐うて轉じ、或は其の兩臂を擧げて住する有り。或は蹲坐する有り。或は復、沙土烟塵を用て、以て身に塗坌し、正立して住する有り。或は頭首面目を梳洗せず、髮は螺髻の如く、拳攣して住し、或は復、髮を拔き、或は髭鬚を拔き、或は復、泉池井河渠源の諸神・地神・樹神・林神・山神・石神・夜叉・羅刹・羅睺（隋に語青といふ）阿修羅王・婆梨（隋に曾といふ）阿修羅王・毗摩質多羅（隋に妙幟といふ）・睒婆利等の阿修羅王に事ふる有り。或は歲星に事へ、或は醫藥王仙人に事ふる有り。或は婆羅墮仙人に事へ、或は復、瞿曇仙人に事ふる有り。或は毗沙門天王に事へ、或は復、童子の天、或は自在天に事ふる有り。或は復、日に事へ、或は復、月に事へ、或は復、那羅延天、或は帝釋天に事ふる有り。或は梵天に事へ、或は護世の四大諸天に事ふ。是の如く各事へて、歡喜せしめ已り、從つて願を乞ひ求め、願を稱へ得已りて、各解脫を求む。菩薩、既に彼等の是の如く解脫を邪求するを觀じ、見已りて發心し、畏るべき極苦の行を行ぜんと欲す。而して偈有りて說く、

菩薩既に【四】尼連河に至り、淸淨心を以て岸邊に坐し、

【四】Nairañjanā ナイランジヤナー

諸の求道の眞ならざるが爲めの故に、大苦を行じて彼の邪を化せんと欲す。』

爾の時、菩薩、是の如く觀察して、專正に思惟し、坐し訖りて口を合し、(二五)齒を以て相柱へ、舌もて上腭を築き、一念に攝心し、是の如く繫念して、身意を調伏し、齒と舌と腭とを以て、攝心繫念して、修習する時、腋下に汗流る。菩薩、既に汗の是の如く流るるを見、更に復、重ねて勇猛なる精進を發し、心に著する所無く、錯まらず、亂れず、寂靜心に住して、一定不動なり。是の如く最上に身意口を苦しめ、悉く皆、不動ならしむ。是の時、復、是の如き念言をなす、『我は今、不動三昧に入るべし。』爾の時、菩薩、口より喘息及び鼻氣を、悉く皆滅除す。口鼻滅し已りて、卽時に便ち兩耳孔中より、大風聲を出す。其の風聲の氣は、猶ほ酥を攢めて大甕裏に在り、酪を搖攪して大音聲を出すが如く、是の如く是の如し。菩薩が、其の口鼻の氣を閉ぢて、出でしめざる時、兩耳孔より、風氣聲を出すも、亦復、是の如し。菩薩、復、念ずらく、『我、今、已に精進の心を發し、染著する處無く、懈怠を捨て、乃至、是の如く、最上の苦行し、最上の難行す。』重ねて復、思惟すらく、『我、更に不動三昧に入るべし。』

爾の時、菩薩、既に身及び口意を寂定し已り、還、口鼻及び耳の喘息を止め、一切皆柱づ。既

【二五】（原文）以齒相柱、舌築上腭。

に口鼻耳を、悉く寂定し已るや、内風壯大。出づるを得ざるが故に、氣、頂を衝く。譬へば、勇健最大力の人、好利斧を取りて、他の腦を打棒するが如し。是の如く是の如し。菩薩、其の口鼻及び耳より、氣を閉じて出さざれば、内風壯なるが故に、腦を打つ聲も、亦復、是の如し。

菩薩、復、念すらく。『我、今、已に精進の心を發し、染著する處無く、懈怠を捨て、乃至、是の如く最上の苦行し、最勝の苦行す。』是を思惟し已り、即便ち更に不動三昧に入る。爾の時、菩薩、口鼻耳及び頂より、喘息を一切皆停め、其をして出でしめず、乃至、遮止して、出づるを得ざるが故に、内風強盛にして、兩脇間に在り、廻轉鼓動す。譬へば屠兒の如し、或屠兒子は、善く牛を殺すことを解す。彼の屠等、或は利劍を執り、或は利刀を提りて、牛肚を破り、或は復、肋を破る。是の如く是の如し。菩薩、乃至、内風強きが故に、兩脇間に轉じて穿破するの聲も、亦復、是の如し。是を思惟し已り、乃至更に精進の心を發す、『最勝の苦行して、我、今、還、不動三昧に入らん。』爾の時、菩薩、口鼻耳より、氣を閉ぢて出さざれば、内風強きが故に、身をして熱惱せしめぬ。譬へば最大二壯力士の、一羸人を取り、各一臂を執りて、其を將て彼の大火聚の上に向ひ、或は燻まし、或は炙る如し。是の如く是の如し。菩薩、内氣の出でざるを以ての故に、身の熱惱を受くるも、亦復、是の如し。是を思惟し已り、乃至、更に精進の心を發し、一

切に著する無く、已に懈怠を捨て、正念を得、心、散亂せず、一切寂靜にして、身口及び意、並に正受を得たり。是の如く勝妙最上の苦行をなすや、爾の時、上界に、諸天の來る有り、菩薩の是の如き苦行を見、各相謂ひて言はく、『今、此の悉達大智太子、已に命終を取る』と。彼の衆中に、復更に別に其の餘の天子有り、共に相謂ひて言はく、『此の悉達太子、現に今、其の命、未だ終らざるも、始めて盡を取らんとす。』或は復、更に諸天子有りて言はく、『此の悉達大聖太子、現に今、死せず。後にも亦終らざらん。何を以ての故に。此の太子は、これ阿羅漢なり。凡そ羅漢には、是の如き行有り。須らく之を怪しむべからず。』

爾の時、菩薩、(一六)彼の蘭若、心を用ふる處に在りて、苦行を作す時、即ち最大の苦行を成ずるを得たり。是の時、菩薩の坐處の、四面周帀、有らゆる隣比の、聚落の諸人、皆來りて菩薩の是の如く苦行するを見て、是の如きの言を作す、『此の沙門は、既に大苦行を行せり。是の故に名を立てて大沙門といふ。』大沙門の名は、彼の唱に起る。是の義を以ての故に、此の名稱有り。爾の時、菩薩、復、更に是の如く思惟す、『世間に或は沙門有り、或は婆羅門あり、食を製限するが故に、行を建立し、各清淨を守る。彼等、或は復、唯、麥を食し、或は煮麥を食し、或は麥屑を食し、或は麥を以て種種の諸食を作し、

【一六】（原文）在彼蘭若、所用心處、作苦行時。

以て活命す。是の如く更に復、或は烏麻を食し、或は粳米を食し、或は小豆を食し、或は大豆を食し、乃至、或は純大豆の飯を、或は大豆の汁を、或は大豆の屑を食し、或は大豆を以て種種の食を作し、持用て活命す。或は沙門及び婆羅門有り、一切の食を斷じ、淨行を建立す。我も今、亦、一切の食を斷じて、苦行を行ずべし。』

菩薩、是の如く内心に思惟す。爾の時、彼處に、忽ち諸天有り、身を隱して現せず。菩薩の所に來り、菩薩に白して言く、『願はくは是の如く、是の念を思惟し、全く斷じて、一切食せざるを得んと欲する莫かれ。所以は何に。仁、今若し、一切の食を斷じて、行を行せんと欲せば、我等諸天、各一切の天味を將て下り來りて、仁者の毛孔中に入れ、仁者をして命を存活するを得しめん。又復、仁者、身を損害せざれ。』爾の時、菩薩、此の語を聞き已り、是の如く思惟す、『我、今、既に一切人に語りて、「我は全く一切の諸食を噉はじ」と言へり。而して今、諸天、自ら其身を隱し、天味を將て來り、我が毛孔に入れ、我をして活命せしめんと。此は則ちこれ我が最大の妄語にして、一切を誑惑す。」是の如く念じ已り、彼の天に告げて言く、「汝等諸天、此の心有りと雖も、是の事然らず。」爾の時、菩薩、彼の諸天の是の如き意を斷じ已り、日に、別に、止、一粒の烏麻、或は一粳米、小豆大豆、(一七)菉豆亦

【一七】菉。或は綠に作らる。

豆、大麥小麥を食すること、是の如く日日、各別に一粒なり。是の時、菩薩、復、更に思惟すらく、『我は今、手掌を以て、少少の汁飲を盛り取つて、命を活かすべし、或は小豆の臛、赤豆、豌豆、綠豆の臛等なり。』

爾の時、彼の聚落を去る遠からず、其の中に一の最大種姓の婆羅門有り、【一八】斯那耶那隋に將兵といふと名く。彼の婆羅門、摩伽陀國頻頭王の邊より、一聚落を得、以て封邑と爲す。其の邑は卽ち優婁頻螺聚落と相近し。彼の婆羅門、封邑を得已り、還、字を立てて斯那耶那と名けたり。復、更に別に一婆羅門有り、名けて【一九】提婆隋に天といふといふ。彼の婆羅門の生地は、彼の迦毗羅城に在り、一事を經營して、漸漸に行きて斯那耶那村邑に至りて住し、少日客と爲る。是の時、提婆婆羅門、更に別の事を經營し、因りて行き、漸く菩薩の住林に至る。時に其の提婆婆羅門、菩薩の。林に在りて大苦行を行ずるを見、見已りて卽ち識り、是の如き言を作す。『此はこれ我が國の悉達太子なり。乃ち能く是の如く大苦行を行ず。』彼は菩薩の、是の如く苦行するを見、心に大に歡喜しぬ。

爾の時、菩薩、彼の提婆婆羅門の、心を菩薩に向け、歡喜を生ぜるを見已り、卽ち提婆婆羅門に告げて言はく、『大婆羅門よ。汝能く我が爲めに少許の食を辦じ、我を活かすや不や。若しは

【一八】Senayana ?
【一九】Deva

小豆の臛にあれ、大豆・菉豆・赤豆等の羹にあれ、我、之を食ひて、持用て活命せん。』彼の婆羅門、心狹劣なるが故に、少見少知にして、廣大の意無きも、〔二〇〕布施を行ぜんと欲して、此の語を述可し、菩薩に報じて言く、『大聖太子、是の如きの食、我、能く之を辦ぜん。』彼の婆羅門、六年中に於て、日に別に上の如き所須の食を、以て菩薩に供へ、菩薩は日日此の食を受け取り、法に依りて食し、以て身命を活かしぬ。

爾の時、菩薩、但、手掌を以て、日に別に從て受け、少許を得るに隨ひて、食ひて命を活かす。或は小豆の臛及び赤豆等なり。是の時、菩薩、食を受くること既に少く、掌の容るる所に隨ふ。上の所說の如く、諸豆汁の食なり。菩薩、是の如く彼の食を食し已り、身體羸瘦、喘息甚だ弱りて、八九十の、衰朽せる老公の、全く氣力無く、手脚不隨なるが如し。是の如く是の如く、菩薩の支節連骸も亦然り。菩薩、是の如く食飲を減少し、精勤苦行して、身體皮膚の、皆悉く皺赧なること、譬へば、苦瓠の如し。未だ好く成熟せざるに、其の蔕を割斷して、日中に置けば、炙られて萎黄し、其の色以に熟するも、肌は枯れ皮は皺み、片片自ら離れて、枯頭骨の如し。是の如く是の如く、菩薩の髑髏も、猶は是と異なる無し。菩薩、此に食を進むる少きを以ての故に、其の兩眼の睛、深遠に陷入し、猶ほ井底の水

【二〇】（原文）欲行布施、述可此語。

に星宿を望見するが如く、是の如く是の如く、菩薩の兩眼も、之を視るに、纔に現はるること、亦復、是の如し。又復、菩薩、少食なるを以ての故に、其の兩脅肋、離離相遠かり、唯皮裏有るのみ。譬へば牛舍、或は復、羊舍の、上に椽木を著けたるがごとし。

時に彼の聚落の、有らゆる羊子・牛子・馬子、彼の林に行きて、菩薩の是の如き苦行を見、見已りて、各各大歡喜を生じ、希有の心を發し、恒常に承事して菩薩を供養しぬ。

巻の第二十五

精進苦行品第二十九の下

爾の時、淨飯大王、暨春の時至り、遊戲觀看して、諸園林を見たまふに、新に枝葉を出し、種種の雜卉、衆花を開敷して、淸淨の莊嚴、其内に遍滿し、水中の鵝・雁・鴻・鶴・鴛鴦、諸池に充溢し、樹上、復、鸚鵡・鶬鵲及び拘翅羅、或は、諸の孔雀・迦羅頻伽・命命鳥等有りて、自ら相娛樂し、或は復、命喚して、微妙の聲を作す。時に淨飯王、是の聲を聞き已り、長歎歎息し、淚を抑つて言く、「嗚呼、我兒悉達太子、忽然我を捨てて、奄ちに六年を經るも、旣にそれ出家して、我をして見ざらしむ。[一]唯哉、我、今、獨り用つて此に活くるも、復、何爲るかを知らん。我、今、子、悉達を見ざるが故に、此處に在つて、諸の婇女の中に、左右圍繞せられ、復、晝夜に、諸の音聲・箜篌・琵琶・箏笛・鼓吹、種種の音樂を作すと雖も、我今、此の上妙の五欲を受くるに、我が子、云何ぞ、獨り自ら彼の山林曠野、無人衆の內に在りて、種種の野獸、虎・狼・師子・及び白象等一切の諸獸に圍遶せらる。或は復、

【一】(原文)唯哉我今獨用此活知復何爲。

諸獸、各、爪牙を以て、自ら相殘害し、齩噉して食はんに、汝が彼處に在るを、誰か、復、知るを得ん。或は死か、或は生か、寂として消息なし。其の淨飯王の心地、是の如く憶念し、愁憂し、苦惱して樂まず。

爾の時、菩薩、彼の優婁頻螺の聚落に在りて、苦行を行ずる時、羸瘦困弊、起つて行動せんと欲するも、力身に勝へず、立てば便ち地に倒る。爾の時、彼の處の地居諸天、此の事を見已りて、謂つて言く、『菩薩の身命、將に終らんとす』と。心内の憂愁、傳へて相告げ語る、『悉達太子、今、忽ちに命終す。』時に彼の地居諸天衆の中に、一天子有り、速疾に淨飯王の所に往詣し、既に彼に到り已りて、淨飯王に白して、是の如き言を作す、『大王、當に知るべし。大王の太子、悉達仁者、四天下幷びに七寶を捨て、出家入山して、苦行するの時、今已に命終しぬ』と。其の天衆中、復、更に、別に、一地居天有り、速に王の所に往き、王に白して言く、『大王、當に知るべし。悉達未だ命終せずと雖も、但、其の餘命は、七日に過ぎず』と。

爾の時、淨飯大王、既に諸天の是の如く語るを聞き已りて、子を念ふが爲の故に、憂愁苦惱、心に逼切し、大唱して言く、『嗚呼、我子、何が故に獨り空林に於て死し、人身を得と雖も、五欲を受けず、復、無上の法味を證せざる。』是の語を作し已りて、身心迷亂し、悶絕して地に躃る。

時に淨飯王の諸釋種族、悉く此の聲を聞き、聞き已りて悉く各奔集して、淨飯王の宮に往詣し、到り已りて淨飯王の心を安慰して、是の如き言を作す、『大王、是の如き苦惱を作す莫れ。又、復、大王が現今の身體、極めて甚だ羸瘦す。此の事に因つて、命終を取ること莫れ。』淨飯王言く、『今日、此の處の迦毗羅城に、是の我が親族・眷屬・品類、凡そ幾數有つて、此の城に居住するか。』爾の時、彼等一切の釋種、卽ち王に白して言く、『大王、當に知るべし。今、釋の總數、一切凡そ九萬九千有り』と。時に淨飯王、復、是の言を作すらく、『汝等眷屬、若し我が命をして全活せしめんと欲せば、速疾に我が悉達太子の居停する處を示せよ』と。是の時、一切の諸釋種等、咸、共に報へて言く、『大王、當に知るべし。大王よ。乃ち、此の大地、及び諸山林、鐵圍山等の大海須彌を捉へ、一手を以て擎げて、他方に擲つべき理あらんとも、悉達をして煩惱未盡ならしめんと欲し、若しは當に一切の天上、世間の人物を聚集して、太子を將て來り、家に向はしめんと欲すること、終に是の處無からん』と。爾の時、釋氏の國師の子を[三]優陀夷と名く。淨飯王に白して、是の如き言を作すらく、『大王、當に知るべし。我、今、能く悉達太子、出家の處に往きて、其の意を思惟し、將て宮に迴向せん』と。其の淨飯王、是の語を聞き已りて、卽ち彼の國師の子に報へて言く、『善優陀

【三】Udayin 又は Udāyin

夷、汝能く太子の邊に詣り向はば、或は復、太子、汝の語を取り、歸來して家に向ひ、汝と共に一處に、速疾に還り來らん。若し、其の太子、背ひて來らざる時は汝が〔三〕永き一形、我が面を見ること莫れ。所以は何に。汝の此の言を發する、我が意を解くと雖も、若し子來らずして、我、汝の面を見ば、承望を以ての故に、更に倍我が憂愁を增長せん。』爾の時、國師の子、優陀夷、駕を嚴りて、即ち迦毘羅より出で、徑に往いて彼の優婁頻螺聚落の所、尼連河の邊に向ふ。既に彼に到り已りて、其の優陀夷、初先に〔四〕憍陳如等五人の、彼に在るを遙見し、見已りて、即ち憍陳如に問うて言く、『仁、憍陳如、悉達太子は、今、何處に在はすや。』時に憍陳如、即便ち彼の優陀夷に報へて言く、『悉達太子は、今、已に、林に入つて苦行を修行したまふ』と。時に優陀夷、復、重ねて問うて言く、『其の親侍する者の名字は、是れ誰ぞや。』是の憍陳如、即ち之に報へて言く、『汝、優陀夷、若し知らんと欲せば、其の人の名を、〔五〕阿奢踰時（隋に調馬を言ふ）と爲す。』時に優陀夷、即便ち進んで阿奢踰時に語つて、是の如き言を作さく、『阿奢踰時、汝、今、太子の所に往詣し、我が語る所の如く、我が爲に通じて道へ。仁が父、使有り、來つて此に到りて、相見ゆるを得んと欲す』と。時に調馬、優陀夷に報へて言く、『我、實に、敢へて、太子の邊に向つ

【三】永き一形。身體のあらん限り、即ち一生涯の意。
【四】Kauṇḍinya
【五】Aśvajit

て、此の語を通達せし。所以は何に。太子の苦行、已に六年を過ぐれど、出家より來、曾て面を將つて生地に向け、迦毗羅城邑に對して坐せず。何を以ての故に。生の患を厭ふが故なり。汝優陀夷、自ら林に入つて、面り太子を見て、父王が使する所の言語を對論すべし」と。

時に優陀夷、自ら林中に入りて、面り太子を見て、菩薩の、地上に臥すを見るに、頭より足に至るまで、皆唯筋を被りて、威光有ること無く、地と同色にして、身體瘦削し、復、肌膚無く、唯骨皮の身を裹む有るのみ。眼は深く坳陷して、井底の星の如く、徧體屈折し、節節離解す。其の優陀夷、菩薩の是の如き身形を見て、卽ち兩手を擧げて、大に唱叫し、咨歎し、號哭すらく、『嗚呼嗚呼、我が釋種の子、今日、忽ち是の如き厄難に至る。本時は是の如く端正喜ぶ可く、是の如く妙色なりしを、今、此る身と成りて、土と異ることなく、既に復、解脫安樂を得ずして、是の如きの妙身を徒勞損害したまふ。』」爾の時、菩薩、優陀夷の號叫する聲を聞き已り、卽便ち問うて言く、『此は是れ誰ぞや。內心に乃ち爾かく憂悲煩惱して、火に燒かるるが如く、啼哭して語るは』と。時に優陀夷、菩薩に報へて言く、『大聖太子、我は、是、太子が本國の國師の子、名を優陀夷と號す者、卽ち我が身是なり。太子の父、淨飯大王、我をして此に來つて太子を參迎せしむ』と。菩薩報へて言く、『汝、優陀夷、我、今、此の煩惱の使を須ひず。我は、唯、涅槃の使を得んと欲するの

み。父王の此の生死の使を欲せず』と。
時に優陀夷、復、更に、菩薩に諮請して言く、『大聖太子、仁、今、何等の誓願を建立してか、乃ち爾かく牢固なる。』菩薩、卽ち優陀夷に報へて言く、『唯。願くは、我が身の、此の地に在りて、破碎すること、猶鳥麻の白粉及び微塵の如くならん。若し我、自利利人を得ずんば、其の精進心を、終に放捨して懈怠を生ぜじ。我、今、身心に誓願すること、是の如し』と。時に優陀夷、菩薩に白して言く、『大聖太子、我、太子の父王の前より、是誓言を受け、我をして決定して太子と共に相隨つて城に入らしめんとす。（されど）今日、太子若し是の如き殷重の誓願有るに、儻し或は未だ自利利人を得ずして、命盡を取らば、我當に云何んぞ敢へて太子を捨てて、本誓願に違ひ、面を將つて空しく迦毗羅城に入るべき。』
爾の時、菩薩、復、更に重ねて優陀夷に語つて言く、『汝優陀夷よ、我、今、此の苦行の處に在り。儻し、我、未だ、自利を成就するを得ずして、其の中道に於て命終せば、汝優陀夷、我が屍靈を取りて、本出でたる門より、舁舉して迦毗羅城に將て入れ。汝、復、我が爲に彼の一切迦毗羅城內外の人民に語つて、是の如き言を作せ、（六）「此は卽ち是彼の精進の人、異語無きもの。誓願を立て、正意

【六】（原文）此卽是彼精進之人、無異語者、立於誓願、正意正心、骸骨之體。

正心なりし髓骨の體なり。」汝、優陀夷、更に復、我が爲に、我が父王の問訊する所の語に答へ、汝、我が父に語して、是の如き言を作せ、「大王、當に知るべし。王子已に勤精進を發しが故に、今、已に、命を捨てしは、懈怠に因るに非ず、如實の語なるもの、今既に命を捨てしは、是虚誑に非ず」と。汝　優陀夷よ、我、今、然りと雖も、但、我、此の林中に在りて、夜、是の如きを夢見ぬ、無量の諸天、身を隱して我が邊に來り、我が是を圍遶して、我に白して言く、「悉達太子、汝、今、當に大歡喜を生ずべし　今よりして已去、七日の内に至り、汝、必ず、最大利益を剋成せん。」汝、優陀夷、我が此の夢を得たるは、終に空しからじ。汝、優陀夷、今、家に還る可し。我は、汝が我と友と作るを用ゐず」と。爾の時、優陀夷、既に菩薩の是の如く語るを聞き已り、菩薩の所に於て、復、望心無し。即ち菩薩の坐せし林中より、獨自にして出で、出で已りて迦毘羅城に還り至り、淨飯王に見え、到り已りて即ち淨飯王に白して言く、「大王、當に知るべし。王子悉達は、平安勇猛、存活して死にたまはず」と。淨飯王言く、「若し我が太子、安隱にして死せずんば、我更に何をか惑へん」と。此の語を聞き已りて、心大に歡喜す。

爾の時、欲界の魔王、[七]波旬、菩薩の爲に擾亂を生ぜんと欲するが故に、彼の六年の苦行の内

【七】Pāpiyān

に於て、恒常に密に菩薩の左右に近づき。其の便を伺ひ求めしも、微毫の過失だも得る能はず。卽ち偈を說いて言く、

「阿蘭若の處既に精好なり、樹木叢林甚だ觀る可し。
優婁頻螺聚落の東、尼連禪河岸の隣側、
彼處を選擇して地を得已り、誓願牢固として跏趺を結び。
大精進勇猛心を發す「我今決定して解脫を得ん。」
魔王波旬彼に來り詣り、詐りて美語を以て白して言く、
「唯願はくは仁者の壽命長かれ、命長ければ乃ち能く法を行ずるを得。
命長ければ方に自利を得。自利し已りて後悔心無し。
仁今身體甚だ尫羸なり。定めて命盡を取ること當に久しからざる可し。
眞實に仁今や千分は死し、福德〔八〕悕ふに或は一分存するのみ。
但多くの布施もて天に承事し、諸の火神に於て祭祀を修せよ。
此の如きは或は大功德を得ん。用つて禪定を學ぶも何の爲にかせん。
勝出家を求むるは道甚だ難し。自心を調伏するも亦易からず。」

【八】悕。おもふ。ねがふ、かなしむ。

魔王是の如く菩薩に向ひ、種種の諸語もて稱揚す。

菩薩時に微妙の言を以て、音聲巧密に彼に報ふらく、

「波旬不善汝は放逸なり。自利を求むるが故に世間に行くのみ。

汝や此の福德心に於て、終に微塵等も求覓むるなし。

若し福德を欲求せば、豈是の如き言を發吐す可けんや。

我は死苦を觀ずる猶生の如し、實に一念も盡くるを怖るる無し。

若し諸の衆生皆滅沒すとも、我が心終に暫時も廻らじ。

今や欲海に架して大橋を建て、精進勇猛に梵行を修せん。

風災天下に起るが所以に、尚能く一切の流を乾竭せしむ。

況んや此の身內津血の間、其の汁寧んぞ枯涸せざるを得ん。

脂髓の潤澤先づ竭きて、然る後に皮肉方に乃ち乾かん。

肉消え皮立ち氣力微かにして、心意乃ち寂定なるを得可し。

一切の精進を增長せんこと、唯だ三昧門に入る有るのみ。

我今此の行を行ぜんと欲する時、彼の勝覺の處に至るを得んを望む。

所以に此の身命を惜まず。汝須く我が內の淨心を知るべし。
我が心今此の至誠有り、智慧の莊嚴甚だ牢固なり。
世間に未だ見ず人輩有りて、能く我が此の精進を斷ずるに堪ふるを。
我は寧ろ死の爲に命を奪はれて休むも、長年を以て在家に活きじ。
丈夫寧ろ當に鬪戰して死すべし、終に命在して他に降るを爲さざらん。
健兒既に能く他を降伏せば、降し已つて更に復何の畏るる所ぞ。
唯健のみ能く諸怨敵を破る。我當に久しからずして汝の魔を降すべし。
汝の軍第一は是欲貪なり。第二は名けて不歡喜と爲す。
第三は飢渴寒熱等にして、愛著は是れ第四軍と名く。
第五は即ち彼の睡及び眠。驚怖恐畏は是れ第六、第七は是れ狐疑惑なり。
瞋恚忿怒は第八軍、競利及び爭名は第九にして、愚癡無知は是れ第十なり。
自譽矜高を第十一とし、十二は恒常に他人を毀る。
波旬・汝等の眷屬然り、軍馬悉く皆黑暗を行く。
(九)其の此の惡行に墮するある者たる、是の彼の沙門・婆羅門は、

【九】（原文）其有墮此惡行者、是彼沙門婆羅門、汝軍恆常行世間、迷惑一切天人類。

汝の軍として恒常に世間を行きて、一切の天人類を迷惑せしむ。
我今汝が彼の軍馬を見ば、妙智慧を以て勝兵を嚴にし、
悉く能く降伏して餘なからしめ、盡く汝の大軍衆を破らんこと、
猶水の坏瓶器を破るが如く、汝の軍を消散せんこと亦復然らん。
我が心正念にして安きこと山の如し。智慧も方便も皆成就し、
無放逸の心もて行を行ず。汝何ぞ能く我が瑕疵を得ん。』

爾の時、菩薩、復、是の如き思惟を作して念言すらく、『若し沙門、及び婆羅門有りて、過去世の時に、自利を求めんが故に、大苦を受けて、或は心喜ばず、或は復、身心悉く皆喜ばず。是の如くにして、彼の諸沙門及び婆羅門の受くる所、此の苦に過ぎざりき。我の如きは、今、自利益を求むるが故に、今、此身意及び心に、不喜等の苦を受けぬ。若し復、未世、諸沙門及び婆羅門有りて、自利の爲の故に受くる所の、身心一切の苦も、此に過ぎじ。我の如きは、今、自利益を求むるが故に、身心に苦を受け、雖、未だ上人の法を證得せず、未だ知見を得ず、殊益を證せず。更に復、何れの道にてか、菩提を取らん。』菩薩、更に復、是の如く思惟すらく、『我は念ふ、昔、父王の宮内に在りて作田を觀し時、一の涼冷なる閻浮樹の陰に値ひ、我、彼を見已りて、

彼の蔭下に坐し、一切諸の欲染心を捨離し。一切の不善の法を厭薄し、分別心を起して、寂定を樂み、喜樂を生じて、初禪を證得せり。我、今、復、彼の禪定を念せん。此の路、應に菩提の道に向ふべし。』菩薩是の如く思惟し、念じ已りて如法に正觀一心にして、彼の寂定に入り、此の道に因つて菩提に至らんを望みぬ。卽ち偈を說いて言く、

『此の法既に是離欲に非ず、亦復正しく菩提に趣くに非ず。
又解脫の勝因に非ず、但是身心の苦の本。
若し我今に於て修學を欲せば、應當に昔彼の閻浮樹の下蔭に坐して、
作田を觀しが如くすべくば、染を離れて四禪定を獲證せん。』

爾の時、菩薩、復、是の如き思惟を作して念言すらく、『彼の樂のみ、唯、諸欲及び不善法に遠ざかる。我、今、豈、彼の樂を知らざるべけんや。我、今、乃ち、彼の樂を證すべきが故に、爲に一切の智見を成就せんと欲す』と。菩薩、更に、復、是の如く思惟すらく、『我、樂を成就し知見せんと欲せば、應に樂を生ずるを得べけんも、但、我、羸瘦して、氣力有ることなし。豈、身瘦無力を以ての故に、能く彼の樂を得可けんや。我、今、身に力を求めんが爲の故に、麤食を食ふ可し。或は復、麥豆、或は粆、或は麨、或は油、或は酥を、此の身に塗り。然る後に暖水の

澡浴を求めん。』

爾の時、菩薩、彼の侍者婆羅門に語つて言く、『提婆仁者、我、今より、更に、前の如き飲食もて活命するを用ひず。我が意、此の食に勝るを求め、食ひて以て活命せんと欲す。或は麨・麪・菉豆等を飲食し、或は酥油脂を、此の身に塗り、及び暖水浴せんと欲す。汝、能く、我が爲に此の事を辨ずるや不や』是の時、提婆、菩薩に白して言く、『我、今、是の如き諸事有ること無し。又、我が家は貧にして此等の諸物を辨ずるに堪ふる能はず。兼ねて復、我、今、若しは、即ち、仁の與に、亦、未だ卒かに得ず。仁、但、誓を立てよ。我、仁の爲に方便して求覓むべし。』菩薩問うて言く、『汝、今、我をして何の誓を作さしむるか。』是の時、提婆、菩薩に白して言く、『若し仁、苦行の訖了らん時、心願の滿つるを得ん。仁、彼の時に於て、仁、法分を分てよ。復、我が家に至りて、當に我が食を受くべし。』菩薩報へて言く、『汝の所願の如くせん。』爾の時、提婆婆羅門、菩薩の是の如く其を印可するを聞き已るや、即便ち菩薩を奉辭して去り、復、彼の斷郡耶那婆羅門の家に詣り向ひ、到り已りて彼の婆羅門に語つて言く、『仁者、庶幾くは、復、法行を樂しめ。今、此の聚落を相去ること遠からずして、一の沙門有り、大苦行を行ず。彼は食はざる事、年月淹かに久しく、今、食を求めんと欲す。或は飯・麨・麪・酥・脂・蜜等、或は復、菉

豆、及び身に油を塗り、幷に澡浴すべし。仁者、今、彼が眞に之を辦ずべし。」

爾の時、軍將斯那耶那婆羅門の家に二女有り。一を難陀（隋に喜と言ふ。）と名け、二を婆羅（隋に力と言ふ。）と名く。然して彼の二女、極大端正、喜ぶ可きこと比ひ無く、世間に雙び少なし。彼の二女、往昔、曾て聞けり。「此を去る北方雪山の下に、一の釋種の聚落の處所有り。名けて迦毘羅婆蘇都と曰ふ。彼の城の内に一釋王有り、名けて淨飯と爲す。彼の王の第一最大夫人を、名けて摩耶と爲す。而して彼の夫人、一太子を生めり。極甚端正、喜ぶ可く絶殊、容貌非常、身黄金色、頭頂の上圓きこと猶傘蓋の如く、鼻は鸚鵡の如く、臂は長くして膝に至り、一切の身體、悉く皆正等に、諸根充備すること、猶金像の如く、三十二大人の相を具足して其身を莊嚴し、周帀して八十種好を滿ず。時に彼の太子、既に誕生し已りて、將て相師婆羅門の所に向ひて占看せしむ。其記に云く、「此の太子、若し在家せば、必ず當に轉輪聖王と作りて、四天下を治め、大地主と作るを得べし。是の時、具さに七寶を得、正法もて世間を治化せん。若し捨てて出家せば、必ず多陀阿伽度・阿羅訶・三藐三佛陀を成じて、名稱遠く聞えん」と。』彼の二女、此の如き語を聞き已りて、早く曾て父に諮りて、是の如き言を作せり、『今は既に聞きぬ、是の如き釋種の其の子の端正、喜ぶ可きこと雙び無しと。彼の太子こそ、我が夫主と作す可けれ。』」

爾の時、軍將斯那耶那、彼の提婆婆羅門の邊より、菩薩の此の消息を傳聞し已り、二女に語つて言く、『汝姉妹等の心願應さに成る可し。所以の者は何ぞ。汝等、今速かに彼の最大沙門、苦行の處に往詣せよ。何を以ての故に。汝彼に至り已りて、彼の沙門に、布施及び食を請ひて、尊重供養して、油幷びに酥を奉り、以用て身に塗り、然る後に別に暖水の澡浴を供へよ。是の如き因緣もて、後に、應に汝等の心願を成すを得べし。』

爾の時軍將の二女、父の是の如く敕するを聞き已り、家の常に所有せる食及び油酥等を將て、菩薩苦行の處に至り、到り已りて菩薩の足を頂禮し、賚らす所の食を將つて、菩薩に奉上し、是の如き言を作さく、『大善尊者よ、願くは我が此に奉る所の食を食ひたまへ。』と。

爾の時、菩薩、彼の二女より食を受け已り、意の隨に食ひ、酥と油とを取りて、其の身に塗摩し、然る後に暖水を以用て澡浴す。是の時、菩薩、彼の油酥を以つて、身に塗摩するに、各毛孔に隨つて、悉く其の體に入ること、譬へば土聚に、或は復、疎沙に、酥及び油を瀉ぐに、悉く皆浸入して、並に、復、現はれざる如し。是の如く是の如く、菩薩の身體に塗る所の酥油は、皆悉く入り盡して、並に、復、現れず。菩薩、是の時、猶未だ本形の身相に復るを得ず。

爾の時、菩薩、飯食已に訖りて、彼の二女に告げて、是の如き言を作すらく、『汝姉妹等、此

の功徳に藉りて何の願を求めんと欲するか。』時に彼の二女、菩薩に白して言く、『大善仁者、我等、昔、聞きぬ。一釋種有りて、一太子を生めり。喜ぶ可きの端正、世に雙び無き所と。我、彼の人の、我が夫と作らんを願ふ。』菩薩報へて言く、『汝、姉妹等、我は即ち是彼の釋種太子なり。我、今より去、願くは更に五欲の樂を受けざらん。我、當來に於て、阿耨多羅三藐三菩提を成就せんと欲し、願くは無上法輪を轉せんを願ひ欲す。』

爾の時、彼の女姉妹二人、此の語を聞き已り、菩薩に白して言く、『大聖仁者、此の事若し然らば、仁者は必定して彼の阿耨多羅三藐三菩提を成ずるを得ん。成じ已らば、當に我等の家に至りて、願くは我等を見たまふべし。我等當に尊者の爲に、聲聞の弟子と作るべし』と。菩薩、復、彼の二女に報へて言く、『是の如く、是の如く。汝姉妹二人の所願の如くせん。』此よりして已去、彼の二女、日別に食を送りて、以て菩薩に與へ、幷に酥油を將つて、先以て菩薩の身に塗摩し、然る後、別に暖水を以て、菩薩の身體を洗浴し、乃至、漸漸に菩薩をして本身の飾相に復らしむ。

爾の時、菩薩、彼の二女に告げて、是の如き言を作さく、『汝姉妹等、今よりして已去、別意を作す莫く、息身の法を將つて、但、我に食を送れ。何を以ての故に。我、今より後、我、若し、

女人の身根と、兩ながら相觸るべきこと、是の處有る無く、我が意樂まず、我が意然らず』と。

是の時、一牧羊の子有り。菩薩の苦行を以ての故に、身大に痩損せるを見、彼の羊子、菩薩の是の如き大精勤苦を見て、菩薩に向つて、心に歡喜を生じ、卽便ち長跪して、菩薩に白して言く、『大聖尊者、我、今、意に、尊者に承事して、供養尊重せんと欲す。未だ審にせず、尊者、納受したまふや不や。』菩薩報へて言く、『若し時を知らば、汝が作さんとする所、是の如く早く辦せよ。』時に彼の羊子、卽ち菩薩の身體を塗摩せんが爲に、羊の乳汁を將つて、菩薩に奉上して、以用て食と爲す。又、菩薩の爲に、尼拘陀大樹の枝を折り、地上に挿して、蔭涼を作る。時に彼の折る所の尼拘陀の枝は、菩薩の威神力を以ての故に、卽ち地より生じて、更に枝柯葉華子等を著けて、皆悉く具足す。時の人之を見て、彼の樹を喚んで、羊子の種うる所の尼拘陀樹と爲す。

爾の時、菩薩、麤食を食ふ時、彼の五仙人、共に相謂つて言く、『悉達太子、今已に禪を失ひて、其の本性に復りぬ。何ぞ況んや、持戒を失はざらん。此の、今、是の懈怠を成すの人、寂定を得ずして、心に憒鬧を生ぜん。』彼等、是の如く平量し訖已り、菩薩の邊に於て、疲倦の心、誹謗の心を生じ、菩薩を捨離して、別れて他に行き、漸く【一〇】波羅捺國に至り向ひ、【一一】鹿野園に入つて、禪定を修し[illegible]、仙有りて說く、

【一〇】Vārāṇasī
【一一】[illegible]

『彼等苦行の五仙人は、菩薩の麁食を噉ふを見て、謂つて言く「禪定の行有る無く、放逸にして自ら五大の身を養ふ」と。』

向菩提樹品第三十の上

爾の時、菩薩、彼の麤食を求めんと欲するの時、止身をして少しく氣力を得しめんと欲せるのみ。是の時に當りて、彼の善生村主の女、初始めて菩薩を見てより已來、彼の日より起りて、菩薩の爲に、布施の熟食、幷びに器皿を作る。若くは他に布施し、或は復、前に於て未だ日中に至らざるに、若しは沙門、若しは婆羅門の、乞食し來るを見れば、乞ふ所の熟食、及び食器を、悉く、布施し、復、心口に是の如きの願を念ず。「此の施食に藉れる、有らゆる功德を、彼の釋種太子、苦行する所の者に迴施せん。願くは成就して、早く諸通を得しめよ。願はくは速に菩提の妙果を成就せよ。願くは苦行をして、心の所願の如く、悉く具足して滿せしめよ』と。(一)是の如く食幷に器を布施行して、六年を經過す。

爾の時、菩薩、六年既に滿ちて、春二月十六日に至れる時、內心に自ら是の如き思惟を作す、『我、今、應に是の如き食を將つて、食ひ已りて阿耨多羅三藐三菩提を證すべからず。我、今、更に阿誰の邊よりしてか、美好の食を求めん。誰か能く彼が如き美食を我に與へ、我をして食ひ已りて、卽ち阿耨多羅三藐三菩提を證取せしめん』と。時に菩薩、心に是の如き思惟を作す時、

【一】原文「如是布施行食幷器、經過六年」

一天子有り、菩薩の心に是の如く思惟するを知りて、速に善生村主の二女の邊に往詣し、彼處に至り已りて、卽ち之に告げて言く、『汝善生女、汝若し時を知らば、菩薩、今、好美の食を求めんと欲す。菩薩、今、最上の美食を須つ。美食を食ひ已りて、然る後に阿耨多羅三藐三菩提を證せんと欲す。汝等、今、彼の爲に備に十六分の妙好の乳糜を辦足すべし』と。

是の時、善生村主の二女、彼の天の是の如く告ぐるを聞き已り、歡喜踊躍、其の體に徧滿して、自ら勝ふる能はず。速疾に一千の牸牛を集聚して、乳を〔二〕搾り取り、轉じて更に將つて五百の牸牛に飮ましめ、更に、別日に、此の五百牛を搾り、轉じて乳を持ち將ちて、二百五十の牸牛に飮ましめ、後日、此の二百五十の牸牛の乳を搾り、還、更に、百二十五牛に飮ましめ、後日、此の一百二十五の牸牛の乳を搾りて、六十牛に飮ましめ、後日、此の六十牛の乳を搾りて、三十牛に飮ましめ、後日、此の三十牛の乳を搾りて、十五牛に飮ましめ、後日、此の十五牛の乳を搾り、一分の淨好の粳米を著けて、菩薩の爲に、上乳糜を煮る。其の彼の二女、乳糜を煮る時、種種の相を現じぬ。或は復、滿花の瓶相を出し、或は功德河水淵の相を現じ、或は時に萬字の相を現じ、或は功德千輻輪の相を現じ、〔三〕或は、復、斛領の牛相を現じ、或は象王・龍王の相を現じ、或は魚相を現じ、或は

【二】 搾は榨に同じ。
【三】 （原文） 或復現於斛領牛相

時に、復、大丈夫の相を現じ、或は、復、帝釋の形相を現じ、或は、時に、梵王の形相を現ずる有り。或は、復、乳糜の、上に向ひて涌沸し、上ること半多羅樹に至り、須臾に、還、下るを現出し、或は、乳糜の、上に向ひて、高さ一多羅樹に至り、訖已つて還、下るを現じ、或は、山高の一丈夫の狀を現じ、還、彼の器に入るに、一渧も、彼の器を離れて、餘處に落つる有るなし。乳糜を煮る時、別に、一りの善く海算數を解する古相師有り。彼の處に來り至りて、其の乳糜の是の如く、種種の相貌を出現するを見、善く占觀し已りて、是の如き語を作す、『希有なり、希有なり。是、誰か此の乳糜を得て食ふか。彼の人、食ひ已りて、久しからずして甘露の妙藥を證せん』と。爾の時、菩薩、二月二十三日に至り、晨朝時に、齊整に衣を著けて、優婁頻螺聚落に向つて行いて、乞食せんと欲し、漸漸にして難提迦村に至り、彼の村に至りて、村主の家の大門の外に在りて、默然として立つ。食を求めんと欲するが故なり。是の時、善生村主の女、菩薩の其の門の邊に在り、默然として食を求むるを見、見已りて、即便ち一の金鉢を取り、蜜を取り、蜜を和せる乳糜を盛り貯へ安置して、其の鉢中に滿て、自手もて執持して、菩薩の前に向ひ、到り已りて即も作り、菩薩に白して言く、『唯、願くは、尊者、我が此の鉢の、蜜を和せる乳糜を受けたまへ。我を憐愍するが故に。』

爾の時、菩薩、彼の乳糜の蜜を調和せるを見て、內心に是の如く思惟して念言すらく、『我、今、好き封療の藥を得たり。是の故に、我、今、應に、須く、精進の行を强發すべし。甘露及び正法を證せんと欲するが故に。又、我、久來、此の法體及び是の法行を失へり。今日應に須く道路を生ずべきが故に、我、今、是の誓願の相を發しぬ。我、是の意を辦ずるに、我が今日の如く此の蜜を和せる所の功德の乳糜、時に依つて奉持せる〔四〕摶食の食を、法に依つて食ひ已りて、我、應に須く死命鬼界を度り、彼の死命鬼軍の衆を伏して、彼岸に度るべし』と。

菩薩、是の如く思惟し、念じ已りて、彼の乳糜を受けて、善生村主の女に問うて言く、『善姉仁者、我、若し、此の乳糜を食ひ訖れる後、此の鉢器を將つて、付囑して誰に與へん。』善生女言く、『仁者に付與せん』と。菩薩、復、言く、『我に、是の如き器は、用有る處なし。』善生女言く、『仁者、意の思念の作す所の隨なれ。又、我、從來、他に食を布施するや、恒常に備に辦じ、幷に、器をも布施せり』と。爾の時、菩薩、彼の食を受け已るや、優婁頻螺聚落より、正念にして出で、安庠として漸く尼連河の岸に至り、到り已りて卽便ち得る所の食を持て、一邊の清淨の地に安置し、衣を脫して、彼の河中に入り、澡浴して身の熱氣を除きぬ。菩薩の、身體を澡浴

【四】摶食。識食に對す。肉體を養ふ有形の食物のこと。

せる時、虚空の諸天、天の種種の微妙の香末を以て、彼の水に和して雨らし、種種に雜へ下して、水上に雨らす。

爾の時、彼の處の尼連禪河は、諸の末香、種種の紫華を以つて、水上に彌滿し、合雜して流る。是の時、菩薩、彼の水中に於て、既に澡浴し已るや、其の袈裟を取りて、水中に潤さ、出し振つて曬乾し、體上に著けて、彼の水を渡らんと欲するに、波流湍疾、身體尫羸にして越ゆるを得る能はず。兼ねて、復、六年、苦行精勤して、身力劣弱、彼の河の岸に濟るを得る能はず。爾の時彼の河に一大樹有り、頞誰那（隋に今者と言ふ。）と名く。彼の樹の神を、柯倶婆（隋に小峰と言ふ。）と名け、住して彼の樹に依る。時に彼の樹神、諸の瓔珞もて莊嚴せる臂を以つて、菩薩を引向す。是の時、菩薩、樹神の手を執りて、彼の河を渡るを得たり。菩薩の浴せる河内の香水を一切の諸天、各各分取して、將つて宮殿に還り、此の功德吉祥水を以ての故に、將つて自らの宮に灑ぎぬ。

爾の時、彼の河尼連禪の主に、一龍女有り、尼連茶耶（隋に不[illegible]と言ふ。）と名く。地より踊出し、手に莊嚴せる天の妙【五】筌提を執り、菩薩に奉獻す。菩薩受け已りて、卽ち其の上に坐し、其の上に坐し已りて、彼の善生村主の女の獻せる所の乳糜を取りて、意の如く飽食し、悉皆都盡す。菩薩、既に

【五】筌提、又は荃提に作らる。荃草にて作らるるが爲なり。又[illegible]提に作らる。提[illegible]に誤り從ふな以てなり

彼の乳糜を食し已るや、過去世に（六）檀を行せる福報業力の薫せるに縁るが故に、身體の相好、平復して舊の如く、端正喜ぶ可く、圓滿具足して、缺減有る無し。

爾の時、菩薩、彼の糜を食し訖り、金の鉢器を以て、河中に棄擲す。時に、海龍王、大希有、奇特の心を生じ、復、菩薩の、世に現じ難きが爲の故に、彼の金器を取りて、供養せんと欲せんと擬し、將つて自宮に向ふ。是の時、天王釋提桓因、即ち其の身を化して、金翅鳥と作り、（七）金剛寶嘴もて、海龍の邊より、金鉢を奪ひ取り、忉利宮三十三天に向ひて、恒に自ら供養しぬ。今に於て、彼處の三十三天に、節を立てて、名けて供養菩薩金鉢器節と爲し、彼よりして已來、今に至つて斷えず。

爾の時、菩薩、糜を食し訖り、座よりして起ち、安庠として漸漸菩提樹に向ふ。彼の筌提は、其の龍王の女、還、自ら收攝し、將つて自宮に歸る。供養の爲の故なり。而して偈有りて說く。

『菩薩如法に乳糜を食しぬ。是、彼の善生女の獻せる所。
食し訖りて歡喜して道樹に向ひ、決定して菩提を證取せんと欲しぬ。』

【六】檀は檀那（Dana）。即ち布施の略
【七】嘴は嘴と同字か。

卷の第二十六

向菩提樹品第三十の中

爾の時、菩薩河にて澡浴し、乳糜を食して休らふに、身體の光儀、平復して本の如く、威力自在、安庠として菩提樹に面向す。時に是の行歩を作すこと、猶ほ往昔の諸菩薩の行の如し。所謂、漸漸調柔して、行歩意に喜び、來者隨施し、行歩の安住なること、猶ほ須彌山王の如く、巍巍として行く。恐畏なくして行き、濁亂せずして行き、心に足るを知つて行き、急疾ならずして行き、遲緩ならずして行き、蹶失せずして行き、兩足周正に相揩れずして行き、相逼らずして行き、星速ならずして行き、身を搖がさずして行き、安隱にして行き、淸淨にして行き、精妙にして行き、患害なくして行き、師子王のごとくに行き、大龍王のごとくに行き、大牛王のごとくに行き、雁王の如くに行き、象王の如くに行き、恇怯ならずして行き、疑滯無くして行き、怪惧なくして行き、廣寛博に行き、那羅延のごとくに行き、地に觸れずして行き、千輻相輪、地に下つて行き、脚の足指は網縵の羅する所、甲は赤銅の如き色澤なるを以て行き、行歩大地を振動し

て行き、行歩猶ほ大山の谷響の如き聲を出して行き、行歩の時、坑坎ある處を、皆悉く平正自然ならしめて行き、地上の有らゆる土沙礫石を、皆除きて行き、足の網縵より放てる光明に觸れたる、罪類の衆生、安住して動かざるを以て、善行して行き、行歩清淨にして妙蓮華を生じ、彼の蓮華臺上を踏んで行く。往昔に淨善行を行ぜるを以ての故に、此の行を得たり。往昔の諸佛、師子高座の上に坐せる行を承けて行き、心意の牢固なること、金剛の如くにして行き、一切諸趣の稠林を閉塞し、堂堂として行き、能く一切諸趣の衆生の爲に、安樂を生じて行き、一切の魔幢を摧折して行き、一切の魔力を破壞して行き、一切の魔氣を遏壓して行き、一切の魔威を打碎して行き、一切の魔業を滅削して行き、一切の魔衆を消散して行き、一切の魔勢を墮落して行き、一切の魔行を捐捨して行き、一切の魔軍を殺害して行き、一切の魔網を割斷して行き、諸の非法、一切の邪衆を伏し、如法に外道を攝受して行き、煩惱の翳暗を照朗して行き、煩惱の朋友を散助して行き、威力、釋天・梵天・大自在天・護世の諸天を覆蔽して、無畏にして行き、此の三千大千世界に於て、唯自一人のみ、獨尊として行き、他より學ばずして、自證の道、分明にして行き、一切種智を證せんと欲して行き、正念正意、知足正行、行を行じて行き、生老病死を滅せんと欲して行き、彼の常樂我淨、微妙最勝無畏の處に趣向せんと欲し、涅槃の城門に入

らんと欲して行き、是の如きの行有る菩薩として行き、面は正しく彼の菩提の樹に向ひ、直視して行く。

爾の時、菩薩、復、是の如き思惟を作して念言すらく、『我、今、此の菩提道場に至る。何の座を作してか、阿耨多羅三藐三菩提を證せんと欲する。』即ち自ら草上に坐すべきを覺知す。是の時、淨居の諸天子等、菩薩に白して言く、『是の如く是の如し。大聖仁者、有らゆる過去の諸佛如來の、阿耨多羅三藐三菩提を證せんと欲する者、皆悉く鋪草の上に坐して正覺を取れり』と。

爾の時、菩薩、復、是の如くに思惟す、『誰か能く我に是の如きの草を與ふる』と。心に思惟し已りて、左右前後を四顧視看す。是の時、忉利の帝釋天王、天智を以て菩薩の心を知り已り、即ち其の身を化して草を刈る人と爲り、菩薩を去ること近からず、遠からず、右邊にして立ち、草を刈り取る。其の草は青緑にして、顏色、猶、孔雀王の項の如く、柔軟滑澤にして、手に觸る時、猶、微細の迦尸迦衣の如し。其の狀、是の如く、色妙にして香ばしく、右旋宛轉す。爾の時、菩薩、彼の人の己れを去ること遠からずして、右邊に在りて是の如き等の草を刈るを見、見已りて漸漸に彼の人の邊に至り、到り已りて寬緩に彼の人に問うて言く、『賢善の仁者、汝の名字は何ん。』彼の人報へて言く、『我は吉利と名く』と。菩薩、既に彼の人の名を聞き已りて、是の如く

思惟す、『我、今、自身の吉利を求め、亦、他人の爲に以て吉利を求めんと欲す。此の吉利と名くるが、我が前に在り。我、今、決ず當に阿耨多羅三藐三菩提を證するを得べし』と。

菩薩、是の如く心に思惟し已りて、更に是の如き美妙の音響を出し、彼の人に語つて言ふ。其の語は、猶、過去一切の諸菩薩等の微妙の音聲の如し。所謂、實語、虛しく發せざるの言、眞正の言を用つて、清亮の聲、潤澤の聲、妙聲、喜聲、聞きて承奉すべき聲、聞きて違はざるべきの聲、聞きて流靡なる聲、化聲、道聲、(一)謇吃せざる聲、縮呻せざる聲、麤澀ならざる聲、雙破せざる聲、軟滑澤の聲、甜淡美の聲、分明的的、遙に耳に入るの聲、心口意に聞きて皆悉く喜ぶ聲、聞き已つて欲・癡・瞋恚・鬪諍・忿怒を除滅し、皆悉く清淨を得しむるの聲、聞くに迦羅頻伽鳥の如き聲、命命鳥の聲、雷の隱隱たる聲、諸音樂の歌讚し詠ずるが如き聲、深遠にして高き聲、無障礙の聲、鼻より出づるに非ざる聲、清淨の聲、眞正の聲、實語の聲、梵天の如き聲、海波の如き聲、山の崩るるが如き聲、震動の聲、諸天王に讚歎せらるる如き聲、諸阿修羅の訶詠する美聲、深くして底を得難き斷魔力の聲、一切の諸外道を降伏する聲、師子の聲、駛風の聲、象王の聲、雲の磨るが如き聲、能く十方佛刹土に至る聲、諸の所化の衆生に告ぐる聲、急疾ならざる聲、遲緩ならざる聲、停住せざる聲、缺滅せざ

【一】謇。どもる。

る聲、濁穢ならざる聲、一切を合する聲、諸聲に入る聲、解脱の聲、繋縛なき聲、染著なき聲、語義を合する聲、時に依つて語る聲、時を過たざる聲、巧に能く八千萬億の法門を宣説する聲、壅塞する無き聲、止息せざる聲、能く一切の諸聲を辯ずる聲、心に隨つて能く一切の願を滿たす聲、能く一切の安樂を生ずる聲、一切の解脱を示現する聲、一切の諸道路を流通する聲、衆中に説く時、衆外に出さず、諸の大衆をして歡喜せしむるの聲、聲出づるの時、一切の諸佛法に順ずる聲を出す。

菩薩は此の是の如き柔聲を以て、彼の草を刈る人に告げて、是の如き言を作さく、『仁者、汝、能く、我に草を與ふるや不や』と。其の化人、報へて言く、『我、能く與へん。』是の時、帝釋の化作せる所の人、卽便ち草を刈りて、以て菩薩に奉る。其の草淨妙なり。菩薩、卽ち彼の草の一把を取り、手に自ら執持す。菩薩、彼の草を取る時に當つて、其の地卽便ち六種に震動す。是の時、菩薩、此の草を將つて安庠として菩提樹下に面向す。

爾の時、菩薩、草を持つて行く時、中路に忽ち五百の青雀有り。十方より來つて菩薩を右繞し、三帀し訖已りて、菩薩に從つて行く。又、復、五百の拘枳羅鳥、四方より來つて、前の如く圍繞す。又、復、五百の孔雀來り、乃至、略說せんに、五百の白鵝、五百の鴻鶴、五百の白鷗、五百

の迦羅頻伽鳥、幷に其の五百の命命鳥、皆悉く六牙なる五百の白象、頭耳烏黑に、鬉尾悉く朱にして、美く技戯せる〔三〕五百の白馬、幷に皆同類の、猶黑雲の如くなる五百の牛王あり。是の時、復、五百の童子、五百の童女有り、各、種種、諸の妙瓔珞を以て、其の身を莊嚴す。五百の天子、五百の天女あり。五百の寶瓶あり、諸の香華を以て其の中に滿て、又、種種、諸の妙香水を盛り、人の執持する無くして自然に空を行く。

又、世間中の有らゆる一切吉祥の事、皆四方より雲雨して來り、各菩薩の右邊に在りて圍繞し、三帀を經已りて、菩薩に隨つて行く。又、世間中の有らゆる樹木、一切の藥草は、菩薩の行く時、根より悉く伏して、菩薩に向ふ。又、復、四方より微妙涼冷の調和の風、諸の塵障を吹いて、皆悉く清淨にし、雲無く霧無く、烟無く塵無くして、虛空中に上る。復、無量千萬の諸天有り、菩薩の菩提樹に向ふ時に當つて、悉く隨つて行き、皆、各、一時に歡喜踊躍し、其の體に徧滿して、自ら勝ふる能はず、歌唱叫喚し、或は口に呼嘯して種種の聲を作し、其の天衣及び寶瓔珞を弄す。又、復、聲を出して是の如き言を作す、「今、此の閻浮に佛世尊有りて、世に出現す」と。復、無量の淨居諸天有り、來つて菩薩の左右前後に在り、菩薩を頂禮し、是の如く白して言く、「大聖尊者、仁、昔、長夜、恒常に乞願したまひ、

【三】一本文三百牛王、丹青雜色、猶如黑雲。

今日、所願、以て成滿するを得たり。世間の有らゆる一切の諸天は、仁の爲に吉祥の事を作し、能く仁の與に吉祥の相を作すに堪ふ。又、復、能く仁の心願を成さば、彼等、悉く來つて菩薩の前に在らん。』菩薩の、菩提樹に面向する時、相隨つて進み、菩薩の菩提樹下に至らんと欲するや、是の時、其の地六種に震動す。

又、復、菩薩行歩の時、師子の歩むが如く、龍王の歩むが如く、牛王の歩み、白雁王の歩むが如く、象王の歩むが如し。怖畏無くして行き、障礙無くして行き、染著無くして行き、一切を除滅し、毛竪たずして行き、人に降伏する無き往昔の善行・禪定、眞正最勝にして行き、最上最妙、諸惡を伏して行き、一切の不利益を隔絶して行き、無上の法寶を取らんと欲するが故に行き、無上の業を取つて攝受せんが故に行き、最上の、寂定を取らんと欲するが故に行く。行歩の時地上の有らゆる一切の衆生、地の動く聲を聞く。地居の諸天・阿修羅等・一切の諸龍・諸乾闥婆・一切の諸鳥・圍陀・人等、皆、悉く彼の震動の聲を聞き、心に疑怪を生じ、『何の異事有り、何の因緣有つて、大地是の如く涌沒搖動するか』と、處處を觀看す。

爾の時、彼の地に一龍王有り、名を迦茶（隋に黑と言ふ）と曰ひぬ。其の龍、長壽にして劫數を經歷し、嘗て往昔の諸くの過去佛に見え來りぬ。又、龍の日月は、晝夜甚だ長し。睡眠未だ久しからずして大

地の動くを見、復、震ふ聲を聞くや、卽便ち驚き寤め、寤め已りて忽ち起き、速疾に自らの宮殿よりして出で、外に出でて四方を觀看する時、迦荼龍王、四方を觀已りて、自らの居處を見れば、相去ること遠からずして、一菩薩有り、安庠として行く。時に、彼の龍王、此の菩薩を見るに、預先の瑞相、猶は過去の諸大菩薩が、發心して菩提樹下に向はんと欲するが如くして、一種も異ること無し。是の相を見已りて、更に疑心無く、決定して此の菩薩大士の、當に阿耨多羅三藐三菩提を證するを得べきを知り、大歡喜を生じ、卽便ち偈を說き、一心に合掌して、讚歎して言く、

「威德巍巍たり大仁者、我曾て過去の時に、
諸の菩薩有つて此の中に來れるを見しが如く、仁今亦然り・異る有る無し。
今仁者の此の處に到れるを見るに、決定して佛と作らんこと必ず疑無し。
世尊の徒步甚安庠に、先つ右脚を擧げて行動し、
諸方を觀て心に諦視す、應に定めて佛世尊と作るべし。
仁今此の吉祥の邊より、一把の草を乞うて手に執持し、
正面して道樹に趣向す、決定して今三佛陀と作らん。
諸方四面の涼冷の風、猶牛王の如き聲響を作し、

又諸鳥有り來つて翼從し、前後左右に四面を圍む。
世間黑闇にして晝夜昏く、無明愚癡に覆はる。
仁聖・丈夫を成就し已りて、必ず大光を出して普く照明せん。
又復靈異の諸獸來りて、百千萬衆前後に繞り、
彼が如く輪廻して右に旋轉す。仁今決定して世尊と作らん。
又復象馬の諸畜生、幷に諸の幢蓋等しく來り至りて、
星速急疾に菩薩に向ふ。決めて知んぬ當に佛世尊と作るべきを。
又復一切の淨居天、其の淸淨莊嚴の禮を持つて、
躬を曲げて仁者を頂禮す。知る仁決めて佛世尊と作らんを。
仁今此の有漏の心を持つて、又一切煩惱に逼らる。
今夜の結惑を除滅するを得て、必ずや無上勝の菩提を成せん。
仁今微妙の法を具足して、甚深測り難く不思議に、
證し已りて俯仰し行歩寬かなり。是の故に我が心に疑滯無し。
仁今種種皆如法に、說く所最上にして更に過なし。

一切の天人・等倫無し。是の故に我が心に疑滯なし。』

爾の時、黑色龍王、是の如き偈を以て、菩薩を歎じ已り、心大に歡喜して、踊躍無量、十指の掌を合し、菩薩の前に在りて、菩薩を頂禮す。是の時、菩薩、龍王に語つて言く、『大善龍王、是の如く是の如し。汝の說く所の如く、我、今、必ず阿耨多羅三藐三菩提を成ぜん』と。而して偈を說いて言く、

『大善龍王・汝の言の如きは、此我が精進を增益するを爲す。
我今必ず無上道を成じて、一切世間に等雙無からん。
(三)餘の見る所の如く相莊嚴せる、大吉祥瑞我が助を爲す。
我今此の煩惱海に於て、必ず彼岸に度らんこと疑ひある無けん。』

爾の時、黑色龍王に、一龍妃有り、名を金光と曰ふ。而るに、彼の龍妃、復、無量の諸龍女等の與に、左右圍繞せられ、其手に、諸の妙香華、末香、塗香、雜色の衣服、寶幢、旛蓋、種種の瓔珞を執り、天の音樂を作す。其の樂音中より、各、種種の歌讚詠の聲を作して、菩薩を歎じ、菩薩に隨つて行く。歌音聲の中より、是の如き偈を出し、菩薩を頌して言く、

【三】（原文）如餘所見相莊嚴、大吉祥瑞爲我助・我今於此煩惱海、必度彼岸無有疑。

「世尊の身意・卓として移らず、驚き無く怖れ無くして定住し、
歡喜踊躍して諸欲を離れ、瞋癡悉く捨て貪るに處無く、
尊能く世の爲に醫師と作る。是の故に我今頭頂に禮す。
世間は諸使の煩惱厚く、能く解脫して彼の纏を離るる無きを、
諸根を自ら伏して復他を伏し、能く衆生の諸の毒箭を拔き、
無歸護の處に能く歸護となり、世間の幽暝に導師と作り。
三界の燈明として仁獨り尊し。是の故に我等今頂禮す。
世尊は人の能く伏し得る無き、貪・瞋・及び無明を盡すを以て、
諸の煩惱・欲染の情を離る、是の故に我今頭頂に禮す。
煩惱の刺・衆生の意に入り、人の能く之を拔出する有る無し、
世尊今大醫師と作りて、能く彼等の大煩惱を治す。
依止無きものに依止と作り、導師無き處に導師と作り、
黑暗の三界中に徧きを、世尊の光明普く能く照す。
我今見るが如く諸天衆は、妙香華を持して虛空に滿ち、

瓔珞を舞弄し皆散衣す。我是の如き預相を見已りて、
斯事を斟量するに虚謬無し。仁今佛と作りて心に喜歡せん。
速に菩提德樹の邊に往きて、彼等四魔衆を降伏し、
煩惱の羂羅網を摑裂して、疾く無上の寂涅槃を成ぜよ。
猶往昔諸の智人の、此の處に到つて正覺を取れるが如く、
仁者今已に此に來り至る、我は知んぬ佛と作る定めて疑無きを。
世尊昔因地に在りし時、行行の劫數千萬億、
精苦勤劬して暫くも息まず、正覺を取つて眞如を證せんと望めり。
今時已に至る・願くは停まる莫く、速かに道樹の下に詣つて坐せよ、
正心もて彼の樹王に依るもの、決ず菩提を證せんこと疑有る無けん。』

爾の時、菩薩、是の偈を聞き已り、安庠として行き、菩提樹に向ひ、其の中間に於て、心に是の如く念ず、『此の欲界の內は、是れ彼の魔王波旬が、主と爲つて自在に統領す。我、今、應當に彼に語つて知らしむべし。若し彼に告げずして阿耨多羅三藐三菩提を取證せば、我卽ち名けて大覺と爲すを成ぜじ。所以の者は何ぞ。魔・波旬を降伏せんと欲するが爲の故に。彼を攝受せんが

故に。亦兼ねて一切欲界の、諸天を攝受降伏せん故に。彼の魔衆の魔宮殿中に、復、無量無邊の諸魔の眷屬諸天有り。已に往昔に於て、諸善根を種ゑたり。若しくは、我が師子吼の聲を作すを聞き、若くは、我が阿耨多羅三藐三菩提を證するを見ん時、則ち彼悉く來つて我が邊に向ひて、當に阿耨多羅三藐三菩提心を發すべし』と。

爾の時、菩薩、之を思惟し已りて、眉間の白毫相中より、一の光明を放つ。能降伏、散魔軍衆と名く。此の光を放ち已るや、時に應じて卽ち魔の宮殿に至り、彼の一切諸魔の舊宮の本業の光を翳ふ。又、復、斯の光、三千大千世界に傍遍し、大光明を作して、一切皆滿つ。時に菩薩の放てる彼の光明中に、魔王波旬、自然に是の如き偈聲を聞きぬ。

『世間に一大衆生有り、多劫を經歷して行行滿ず。
淨飯大王の太子、王位を棄捨して出家し、
彼の甘露門を開發せんと欲して、今來つて菩提樹に趣向す。
汝の身若し大氣力有らば、樹下に詣つて共に試看すべし。
それ今已に彼の岸邊に達し、復他を度して彼に到らしめんと欲す。
菩薩旣に已に自ら覺了し、今復更に他を覺せんと欲す。

又自ら彼の寂定禪を得て、更に人をして寂定せしめんと欲し、
既に自ら無繫縛の路を行きて、他をして解脫城に趣かしめんと欲す。
三惡を破散して悉く空ならしめ、人天に充溢する道を滿せしむ、
禪定の五通力を示現して、安置して甘露宮を知らしむ。
それ今久しからずして大明を證し、必ず當に汝の境界を虛空にすべし、
愚癡黑暗瞋恚の侶たる、汝の朋黨を捐てて悉く餘す無けん。
既に摧碎せられて走るに方無く、爾の時に當りて心に何の計をか作さん、
彼若し甘露法を證せば、常樂我淨。湛然として安からん。」

爾の時、欲界の魔王、波旬、光明中より、是の偈を聞き已り、睡眠中に於て、心忽ち驚動し、自然に、夢に三十二種の不吉祥の相を見たり。何等か名けて三十二夢と爲す。所謂、夢に其の諸天界の自許の宮殿、悉く皆黑暗にして光明有ること無きを見る、一。自らの宮中に、諸の沙礫、糞穢ありて盈滿するを見る、二。自の身體、恐怖して樂まず、心情有るなきを見る、三。其の自身、諸方に馳走するを見る、四。其の自身の頭上の天冠、忽然として墮落し、革屣を遺失して徒跣にて行くを見る、五。自の咽喉、脣腭乾燥して、身體の寒熱なるを見る、

六。自の園中の有らゆる樹木、枝葉、華果、悉く皆乾枯せるを見る、七。諸池泉の有らゆる諸華、皆悉く枯竭せるを見る、八。自の園中の有らゆる諸鳥、鸚鵡・鸜鵒・孔雀・鴛鴦・鴻鶴・鸕鷀・及び拘翅羅・命命鳥等の翎羽衣毛、悉く皆(四)毻落するを見る、九。其の宮内の有らゆる音聲樂器の具、螺鼓・琴瑟・箜篌・笙簧の、有らゆる一切五種の聲、悉く皆破折し、斷壞し、故敗し、狼藉として地に在るを見る、十。其の從來愛せる左右、皆悉く自然に其の身を遠離し、憂愁困苦して、却いて一面に住まり、獨り地上に臥すを見る、十一。其の端正喜ぶ可き玉女の、赤露拳擊し、自ら兩手を擧げ、以て頭髮を拔いて、地上に臥すと見る、十二。諸魔子の巧智辯なるもの、悉く皆菩提樹下に趣向して、彼の菩薩の足を頂禮するを見る、十三。其の愛する所の四箇の女、各兩手を擧げて、大聲に號哭して、一嗚呼嗚呼、阿爺阿爺と言ふを見る、十四。其の自身の著くる所の衣裳、垢膩不淨なるを見る、十五。其の自身、諸塵土の坌穢する所となり、周遍して體に滿つるを見る、十六。其の自身、忽然瘦劣して、精光有る無きを見る、十七。自の宮殿の城壁・戸牖・樓櫓・窻門・却敵、(五)雀探・天井、皆悉く崩頽落壞するを見る、十八。其の有らゆる諸天の兵將、夜叉、羅刹、或は鳩槃茶、或は、復、龍王、彼等悉く、皆兩手を垂れ、或時に胄を擧げ

【四】毻、毛羽の落けること。
【五】雀探、又は擗陛に作る。探は恐くは探の誤、探は堂榭也。

て頭を拍ち胸を搥ち、各極大の苦惱を受くるを見る、十九。其の有らゆる一切の欲界の諸天主等、四鎭天王・帝釋・夜摩・兜率・化樂・他化自在、皆悉く號哭して、瀝涙滿面、走つて菩薩に向ひて、菩薩の面を觀、菩薩の前に立つを見る、二十。其の闘場の內に在るや、刀杖失壞し、自許の左右、及び眷屬等、悉く魔王を捨てて、諸方に馳走するを見る、二十一。其の從來の吉祥の、餅の、皆崩れて破壞するを見る。二十二。那陀羅天仙の、口に不吉祥の事を唱ふるを見る、二十三。一神有り、名を歡喜と爲すが、門に當つて聲を作し、是の如く唱說して、不歡喜と稱するを見る、二十四。虛空中に、塵霧、烟雲の、悉く皆遍滿するを見る、二十五。魔宮を守る功德大神の、聲を擧げて大に哭するを見る、二十六。その從來自在の處の、不自在と成れるを見る、二十七。自の朋友の、悉く怨讎と成るを見る、二十八。諸の魔宮の、或は黑暗と成り、或は、復、火を失して、悉く、皆、燒盡するを見る、二十九。其の一切の諸魔宮殿の、震動して安からざるを見る、三十。其の有らゆる樹木叢林の、或は他に斫られ、自ら地に倒るるを見る、三十一。其の有らゆる思念判事の、或は方計を作して、覓日籌量するも、一口だも得ず、唯、亂心あるを見る、三十二。

爾の時、欲界の魔王波旬、是の如き等の三十二夢不祥の相を見已り、睡より寤めて、遍體戰慄

し、心意安からず、內に恐懼を懷き、普く一切の魔家眷屬を喚びて、皆集聚せしめ、及び、其の宮內の左右の侍臣、幷びに諸城門の守護に當る大兵將に向つて、夜、夢に見し所の事を說く、『汝等諸人、我、昨夜、夢に諸の變怪を見たり。』前に說く所の如し。『我、是の如き不祥の夢を見已りて、甚大恐怖して、身心安からず。是を以て、疑を生じて忽然として睡覺めたり。我・應に久しからずして、必、此の處を失ふべし。恐畏らくは、更に或る大威德福力の人有り、此の處に來生して、我に替代らん』と。而して偈を說いて言く、

『昨夜・光明・自然に現はれ、光明中に此の偈言を說けり。

「釋種の太子今出家し、三十二相莊嚴の體もて、

出家の苦行・六年に滿ち、今漸く來つて道樹の間に向ひ、

自ら覺り他を覺らしむるに菩提を以てす、汝若し力有らば彼を試みよ。

彼善根を種うる千億劫、今菩提を得て正眞を證し、

汝の境界を破して悉く當に空ずべし。汝若し彼を折伏する能はずんば、

彼甘露身の常住なるを證して、汝等の此の魔宮を破らんと欲せん。

是の故に我・汝諸魔に告げん。若し强力有らば早く彼に向へ。

沙門は獨自にして樹下に在り、速疾に彼を破つて全からしむる莫れ、
汝等若し我が愛言を取らば、我が爲に四兵衆を辦具せよ。
世間多く辟支佛有り、彼今出で已らば涅槃せしめよ、
望むらくは我獨自。法王と作りて、如來の種を斷絶せしめざらんことを』。

爾の時、魔王波旬の長子、名を商主と曰ふ。時に、彼の商主、卽便ち偈を以て其の父に白して言く、

『父王何が故に面に色無く、心戰き身體に威光無きか。
此の形相を看るに大に驚けるに似たり。未だ審にせず曾て何事を見聞せしか。
唯願くは子等に向つて實說し、聞見する所の如く一一に論せよ。』

時に、魔波旬、還、偈を以て其の子商主に告げて、是の如き言を作す、

『子よ汝今當に善く諦かに聽くべし。昨夜の我が夢甚だ異常なり。
若し我衆中に具さに之を說かば、大衆聞いて皆地に絶倒せん。』

時に、魔波旬の長子商主、復、更に偈を以て、其の父に報へて言く、

『大衆の地に倒るるは敢へて辭せず、陣に入つて若し退けば是大苦なり。

若し夢に是の如き相有るを見ば、寧ろ住まれ。鬪うて他に追はるる莫れ。』
時に魔波旬、復、還て、偈を以て其の子に告げて言く。
『丈夫鬪に勝を取らんと發意す、勝たざるを以て卽ち鬪を休むべけんや、
彼の獨沙門何の能くする所ぞ、我樹下に到らば當に起つて走るべし。』
是の時、商主、復、更に、偈を以て其の父に白して言く、
「三有力・衆力は弱力の人なり、獨一の智慧の他の鬪に勝つ。
螢火蟲・三千界に滿つるも、一日の出世悉く能く遮せん。
若し人自ら慢じて心に思はず、貢高他を欺きて廣く問はず、
諸の智人來つて相開諫するに、若し語を取らずんば此れ治し難し。」

【六】（原文）有力衆力弱力人、獨一智慧勝他鬪。

爾の時、菩薩、菩提樹に向つて未だ彼處に至らず。其の間に一菴羅の樹を見て、謂つて言く、『此は、これ菩提の樹なり。』菩薩、彼の樹下に至りて、坐せんと欲し、意中以て菩提の樹と爲す。是の時、彼の地、菩薩身の威德力を以つての故に、重くして禁ふる能はず、下に向つて陷らんとす。爾の時、菩薩、是の如く思惟す、「世に二人ありて、行坐の處、其の地陷沒す。何等か二と爲す。一には諸善根を斷絶し盡すなり。二には福德の諸善、深多なり。計るに、我、卽ち、今、曾

根を斷じ盡せる人に非ざるべし。此、或は、菩提樹下に非ざるべし。「爾の時、色界の淨居諸天、眞の菩提樹を標幟せんが爲の故に、妙なる繒旛を懸けて、其の上に置く。又、復、彼の中に有らゆる諸樹の枝幹、悉く傾きて菩提樹に向ふ。是の時、菩薩、卽ち、此は是、眞の菩提樹なるを知り、便ち前舊の菴羅樹を捨て、歩を廻らし、安庠として、漸漸に菩提樹の邊に向ふ。

爾の時、菩薩の、菩提樹下に向つて行く時に當りて、一夜叉有り、名を香獸と曰ふ。彼の菩提の樹を守護し、樹を去ること遠からずして、其の中に停止す。菩薩の來るを見て、卽便ち更に一の同伴、名を赤眼と爲す別夜叉に告げて言く、『仁者、汝來れ、我、今、汝に語らん。汝、須く知覺すべし。汝、速に、我が爲に欲界の主、魔王の邊に往きて、斯の如き語を諮り道へ、「昔、拘留孫、及び拘含含、幷に迦葉等の諸大仙聖は、此の地中所居の處に於て、大等覺を成せり。今、復、更に、精進の人有り、功德圓滿し、菩提の行備はり、以て三十二相を具足し得て、魔王の境界所在を侵す。これ彼の釋種淨飯王の子にして悉達多と名く。已に苦行を捨て、正念を得て、此の、最勝地處に來至して、居停せんと欲す。願はくは大王時を知れ」と。』赤眼、香獸夜叉の此の如き語を聞き已り、速かに魔波旬の所に往詣し、既に彼に到り已りて、上に語る所の如く、具さに之を說く。

爾の時、欲界の魔王波旬、彼の赤眼夜叉の邊より、此の如き語を聞き已りて、即便ち他化自在の一切諸天・化樂・兜率・三十三天・四天王・幷びに地居の天・諸龍・夜叉・諸乾闥婆・及び阿修羅・緊陀羅・摩睺羅伽・鳩槃茶・羅刹・毗舍遮等の、一切大衆を召喚し。之に敕して言く、『汝等悉く集つて、我が處分を聽け。一釋迦種姓の子有り、菩提を取らんと欲す、我等相共に彼處に至り、その此の如き勇猛の心を斷じて、證を取らしむる勿らん』と。

爾の時、魔王の長子商主、其の父王魔波旬に白して言く、『父王、是の如くば、子の心樂はず。何を以ての故に。今、父王は、悉達菩薩大士と、怨讎を作さんと欲す。唯、恐くは、後時、父王、内心に悔ゆとも及ぶ所無からん。』是の語を作し已る時、魔波旬、子商主に告げて、是の如き言を作す、『咄、汝、小兒、愚暗淺短にして、未だ曾て我が變化の神通を知らず、未だ曾て我が自在の威力を觀ず』と。爾の時、商主、其の父に白して言く、『父王、當に知るべし。我は父王の愚癡の見に非ず。亦、父王の神通、威力の自在を知らざるに非ず。但、父王、今、未だ悉達菩薩の神通を知らず。未だ悉達菩薩の德力を見ず。其の事然りと雖も、但、願くは、父王、彼の邊に至りて、彼の神通を應當に自ら見るべし。應當に自ら知るべし』と。

爾の時、欲界の魔王波旬、其の子商主の言を取らず。聞き已りて、忽然、四種の精鋭の兵衆を

裝束して、悉く聚集して、甲を帶び仗を持せしむ。譬へば大力最猛健將の、畏る可き雜種の軍衆を率領し、人之を視る時、能く毛を竪たしむる如く、世に未だ曾て見ず、又未だ曾て聞かざるところ。是の如き無量百千萬億の天神鬼兵、所謂一身に能く多種百千の面孔を現じ、其の一一の面に、能く無量種種の蛇身を出し、手脚繚戾して、形容畏る可し。皆、弓箭・槊矛・槌・棒・斧鉞・刀劍・最勝金剛の諸器仗等を取り、或は復、身體・頭目・手足に、衆の異形を雜へ、或は復、頂上に大火熾燃し、或は肚の邊に於て極猛火を出し、或は復、語言麤澁にして叫喚し、或は橛木を執り、或は杵等を持つ。是の如き諸物の眼孔畏る可し。或は眼睛（七）睞りて高低を視盻し、或は口喎斜にして、復、齒多く、其の舌、廣大にして、多種の形を現はし、或は舌下垂し、或は舌、拳縮すること、猶、礓石の如し。或は眼に光を放つこと、猶、黑蛇の如く、其の中に毒滿つ。或は頸項に諸蛇を纏繞するあり。或は手に蟒蛇を執りて食ふこと、猶ほ金翅鳥の、海より龍を取つて、之を噉食するがごとし。或は、復、手に人の肉・骨・血・頭目・支節を執りて、之を噉食し、或は、手に人の五臟・腸肚・糞穢を取つて食ひ、或は青眼の、師子王の如く、喧張畏る可き有り。或は眼、凹凸して、開合に光を放ち、或は復、猛火の大山に騎り、空に乘じて來り、或は兩肩頭に、焰火の熾燃すること山の如きを擎げ、或は地上に於て、

【七】睞。かたよる。

雨下もて樹々抜き根を合せて擔ひ來る。其中、或は耳の、〔八〕羖羊の如き、或は簸箕の如き、或は蚌蛤の如き有り。或は猪耳の如く、或は桀耳を垂る。或は復、肚、病水人の如く、脚脛細弱、身體羸痩なる有り。或は、鼻、〔九〕匾虒に、或は、復、甕の如く、足、覆鉢の如く、身體皮乾きて、猶ほ曝脯の如く、其の肉枯燥し、血脈乾竭す。或は復、手足を割截して懸け、或は復、頭を斫つて手中に執り、或は身より血を出して、更互に相飲み、飲み已りて復吐く。或は白沫を吐き、或は融銅を飲み、或は鐵丸を呑む。或は手足を〔一〇〕刖り、〔一一〕肘膝にして行き、或は、唯、骨身のみにして、皮肉有ること無し。或は猪形を作し、或は驢騾形・象形・馬形・駱駝・牛羊・羖〔一二〕羝・犀〔一三〕兕・水牛・狐・兎・〔一四〕犛牛・〔一五〕犴㺜・〔一六〕摩竭・鯨・〔一七〕鷁・師子・虎・狼・熊羆・貐・〔一八〕狛・獮猴・豺・豹・野干・狸・狗・諸足の如き等の、種種の形容、大恐怖を作し、大可畏を作す。是の如き軍衆、皆悉く整備し、儼然として來奉し、命を待つて卽ち行かんとす。

〔八〕羖。めひつじ。
〔九〕匾はうすし。虒はうすし。
〔一〇〕刖。あしきる。
〔一一〕肘。ひぢ。
〔一二〕羝。をひつじ。
〔一三〕兕。野牛に似たる一種の獸。
〔一四〕犛。長毛の牛。
〔一五〕犴㺜は駏驉、騾馬に似たる一種の獸。
〔一六〕摩竭（Makara）。鯨。
〔一七〕鷁。一種の水鳥。
〔一八〕狛。狼に似たる獸。又、貊に同じく、一種の驢馬とせらる。

卷の第二十七

向菩提樹品第三十の下

爾の時、魔王、卽ち赤眼夜叉の使に告げて、是の如き言を作す、『汝赤眼に謂はん。汝、今、此の軍衆を見るや不や。誰か輙く我が境界を侵さんと欲する有んや。』是の時、赤眼夜叉の使、卽ち其の王。魔波旬に白して言く、『大王當に知るべし。此は是れ釋種淨飯王の子、悉達多と名く。彼の善生村主の女の前より、猶牛王の如き大音聲を作し、吉利なる刈草人の邊に向ひて、一把を乞ひ得。一樹有り、羖羊多羅尼拘陀樹と名くるに、漸漸に來る。復、五百の青雀有つて圍繞し、初春月に出づる所の愛す可き一切の樹木、悉く華果を著くるを以て、枝柯自ら垂れ。無識の諸樹、猶尙頭を傾け、低れて供養し、大地を震動して、彼の菩提樹下に向はんと欲す。』

爾の時、波旬、旣に菩薩の、彼の菩提樹下に向はんと欲するを見、是の思惟を成す、『願はくは、此の釋種、餘の樹下に向ひて、草を鋪いて坐し、此の菩提樹に向ひて坐する莫らんことを。』と。其の心に、是の如く思惟し、念じ已りて、彼の一切の夜叉衆に告げて言く、『汝等一切の諸夜叉輩、

宜しく少許の夜叉の衆を滅じて、速に彼の菩提樹の下に往詣し、伏藏して住り、愼んで此の釋種の子をして、彼の菩提樹の間に趣向せしむる莫るべし。』其の夜叉等、魔王に白して言く、『謹んで大王の嚴命の敎する所に依らん』と。是の時、夜叉、卽使ち少許の人衆を抽滅し、彼の菩提樹下を去ること遠からずして、伏藏して住まりぬ。其の彼の魔の家の諸夜叉衆、遙に菩薩の來つて菩提樹に向はんと欲する時、身體赫弈として、猶金山の如く、照耀して光を放ち、譬喩すべからざるを見、其の夜叉衆、既に覩見し已つて、卽ち偈を說いて言く、

『此れ必ず千光の新日出なり、威德照耀して金山の如く、
一切の諸天人を憐愍して、師子の如くにして漸く樹王に到る。』

時に彼の樹林を守護する所の神、卽ち偈頌を以て、彼の諸夜叉に報答して言く、

『世尊は千劫の功德圓やかに、備さに六度――施・戒・忍・
精進・禪定・及び智慧を滿じ、一切の諸莊嚴を具足したまふ。
今漸く來至して樹王に向ひ、無上菩提の道を證せんと欲す、
諸天及び人・八部の衆、是の如きを思惟して悉く隨行す。』

爾の時、彼の諸の魔の家の眷屬、夜叉衆等、此の偈を聞き已るや、皆悉く彼の菩提樹の側を離

れ、星散して走る。是の時、菩薩、漸漸にして來りて、十六種の相、功德具滿せる地分の處に到る。何等か名けて十六種相と爲す。所謂、彼の地劫燒の時、最後に燃え盡し、劫初めて立つ時、最も先に在つて成る一。又、復、彼の地の出す所の諸草、所謂優波羅・波頭摩・拘勿頭・分陀利は、最勝最妙、充足して少けず二。又、復、彼の地は閻浮提に於て、最も中に在り三。又、復、彼の地には頑鈍愚癡の衆生居らず。唯聖種に住する大福德人のみの行坐する所なり四。又、復、彼の地、諸の坑坎無く、四面空寬、平整の處たり五。又、復、彼の地は下からず、高からず、清淨洪滿なること、猶手掌の如し六。又、復、彼の地、多く、優波羅・波頭摩・拘勿頭・分陀利の諸華有り、自然に生長す七。又、復、彼の地は悉く一切聖人に通知せらる八。又、復、彼の地は、自然に顯現す九。又、復、彼の地は、一切時に於て、恒に聖人居して、曾て空闕せず十。又、復、彼の地は終に人の能く降伏するを得ること有るなし十一。又、復、彼の地の名稱遠く聞こゆ。所謂師子最高の座なり十二。又、復、彼の地は、心有りて覓むるも、過——所謂、若しは魔・魔家の眷屬——は得る能はず十三。又、復、彼の地は一切地に於て最も中齊に在り十四。又、復、彼の地は金剛の成す所たり十五。又、復、彼の地に生ずる所の諸草は、正高四指、柔軟青綠にして、孔雀の項の如く、觸る時は、猶、迦尸迦衣の如く、顏色美妙にして、喜ぶ可きの端正、香氣芬芳とし

て、頭悉く右旋す十六。往昔に諸の轉輪聖王有りて、悉く皆此の愛樂すべき希有の事を知聞す、是の故に、恒に來つて彼に往きて、此の地處を觀看せり。

爾の時、菩薩、臨みて彼の菩提樹の側に至らんと欲す。是の時、其の地自然に掃除せられて、清淨嚴麗に、香汁塗灑して、喜ぶ可きの端正、心をして樂觀せしめ、又、一切の沙礫・瓦石・蒺藜・棘刺・諸惡草等無し。是の時、菩薩、初めて草を執り行くに、左手を用ひ、後、樹下に至るや、則ち羅網を莊嚴して、赤色錦燕脂を塗れるが如き、右手柔軟の五指を以て、左手より彼の一把の草を取り、安穩に菩提樹下に置かんと欲し、東面に草を持つて、地上に擲てば、即ち樹に向ふ。菩薩、心に是の如きの願を發すらく、『我、今、此の處所に於て坐し已り、煩惱海を超えて、彼岸に度り至らん』と。時に、菩薩、彼の一把の草を擲てば、地に至りて箭筒中に草を置くが如く、或は河旋の如く、或は萬字の如し。爾の時、菩薩、自ら執る所の草を、漫ろに地に擲つに、自然に亂れずして、是の如き等の吉祥の相有るを見、口に是の言を作す、『我が今日擲つ所の草の如きは、應に亂るべきに亂れず。此れ吉祥の相表なり。我、亂世間中に在つて、必定して當に不亂の法を證すべし』と。菩薩、是の如く、草を擲ちて鋪き已りぬ。是の時、彼の地、六種に震動す。

時に欲界の王、魔王波旬、菩薩の所に至りて、是の言を作すらく、『刹利子に願はん。汝、今、

此の樹下に在りて、草を鋪きて坐すべからず。何を以ての故に、其の此の樹下は、夜半中に於て、多く無量の毗舍遮鬼、及び富多那夜叉羅刹有り。數恒に來つて、人肉を噉食す。今、此の樹の北に、別に一林有り。是れ大仙人の居停する所の處、彼の處所の名を、優婁頻螺聚落と曰ふ。喜ぶ可きの端正、人の樂觀する所なり。汝釋子、宜しく彼の地に至つて、意に隨つて坐すべし』と。

爾の時、菩薩、彼の魔王に報へて、是の如き言を作すらく、『汝、魔波旬、知らざるべけんや。我、山の阿蘭若の處、空閑の澤中に在るに、或は樹下に在り、或は塚間に在り、或は林内に居るに、夜半安然として、心に畏るる所無し。又、復、我、今亦、無智に非ず。亦、復、是れ無方便力に非ず。凡人の此の地に至る如きに非ず。但、我、久しく知る。往昔の諸佛、此の樹下無畏の所に在りて、聖道を成ずるを得たるを。是の如きの義を以ての故に、我、此に來る』と。

爾の時、別に更に一夜叉有り、魔王波旬の右に在りて立つ。時に彼の夜叉、菩薩に語つて言く、『汝釋種の子、今、何を苦んでか、此の樹下に坐するを用ひん。自外の四邊に、大に餘の樹有り。汝、速疾に、他處に移つて去る可し』と。時に菩薩、彼の夜叉に報へて言く、『我に心願有り、餘の樹下に於ては、所願を成ずるを得る能はず。唯、此の樹下に在りてのみ、決定して當に成ずべし。餘の處は得ず』と。時に、彼の夜叉、其の魔王に白して、是の如き言を作す。『大王、今、彼

の言を聞きたまへりや、不や。更に何事を作してか、能く彼を去らしむるを得ん。』魔波旬、彼の夜叉に報へて言く、『我、今、唯、種種の方便もて、勤劬の心を作し、彼に斷じて此の處に坐するを聽さざるべし』と。爾の時、菩薩、魔波旬の是の如き言を作すを見、草を鋪きて坐し、內心に思惟して、是の如き願を發しぬ、『我、今、彼の往昔過去の諸佛の坐する所の金剛の處に坐し、坐し已りて當に魔王波旬を伏すべし。我、今、此の處に坐し已り、欲・瞋・恚・癡の諸の煩惱等を斷滅せん。我、今、此の處に坐し已りて、當に微妙・甘露・清涼の法を證すべし』と。

爾の時、菩薩の鋪く所の草、其の根は內に向ひ、頭は皆外に向ふ。鋪き已りて彼の菩提樹を右繞三匝し訖竟り、加趺して坐す。身心端直にして、蛇の身に纏へるが如く、卓然として動かず、口に三唱して言く、『我、甘露を證せん。我、甘露を證せん。我、今、定めて當に甘露を證得すべし』と。而して菩薩、心に是の如き弘誓の願を發すらく、『我、此處に坐して、一切の諸漏、若しは除盡せず、若しは一切の心、解脫するを得ずんば、我、終に此の坐よりして起たじ』と。偈有り說いて言く、

『菩薩・樹下に加趺して坐する、大蛇を以て自ら身を纏ふが如く、
是の如き弘誓の心を發すらく、「事若し成せずんば坐を起たじ」。』

爾の時、魔王波旬、彼の地所より、身を隱して現せず、少時間を經て、卽ち其身を化す。頭髮解亂して、塵土身に滿ち、麤褐衣を著け。口脣乾燥して、狀飢渴せるが如し。手中に一大束書を執持し、速疾に來つて菩薩の所に向ひ、菩薩の前に立ち、所持の書を將つて、菩薩に擲げ與へ、口に是の如く言ふ、『此の一封書は、是、汝釋種〔一〕摩那摩の許より、我に遣はして送り來る。此の一封は、是れ、〔二〕尼婁馱の許より。此の一封は、是れ、〔三〕難提迦の許より。此の一封は、是れ、〔四〕拔提伽の許より。此の一封書は、是れ、〔五〕難陀の許より。此の一封は、是れ、〔六〕阿難陀の許より。自外の諸書は、各是れ彼の諸の釋種の子より、汝に寄與し來る。』時に一書もて、僞抄不實・虛妄の言辭を上りて、是の如き語を作す。〔七〕『提婆達多は、今、此の迦毗羅城に在り。已に王位を受け、汝の宮內に入りて、悉く皆汝の妃后を納受し、汝の父淨飯大王を取りて、牢獄中に繫ぎ、自餘の叔父、白飯・斛飯・幷に甘露飯・一切の宿老、諸の釋種王を、盡く皆城外に驅逐し遣出しぬ。汝、此の書を見ば、速疾に須く來るべし。汝、何ぞ彼の阿蘭若に住するを爲ん』と。

爾の時、菩薩、是の語を聞き已りて、心に是の如き三種の思惟を發すらく、『婇女に因るが故

〔一〕マハーナーマ Mahānāma
〔二〕アニルダー Aniruddha
〔三〕ナンデーカ Nandika
〔四〕バドリカ Bhadrika
〔五〕ナンダ Nanda
〔六〕アーナンダ Ānanda
〔七〕デーヴダツタ Devadatta

に、貪心を養す。而るに我妃后を、提婆達多は實に能く納れたり。提婆達に因りて、闘諍心を起す。彼、實に能く我が國土父王の位を奪へりとか。釋種に因るが故に、殺害心を生ず。彼等何が故に各自ら身を備へて我が父を護らざりしぞ。」菩薩復更に是の如く思惟すらく、『世間の境界は、悉皆無常、穢汙不淨にして、念念生滅し、暫くも住る時無し。一切を思惟するに、皆悉く是れ破壞の法、生じ已りて即ち滅す。是の如く思惟せば、便ち欲心を斷じて、出家心を發し、諍鬪心を息めて、悲愍心を起し、殺害心を斷じて、悲哀心を生ぜん。是の如き等の事、我久しく棄吐せり。』是を思惟し已りて、即ち捨心を發しぬ。

魔怖菩薩品第三十一の上

爾の時、菩薩、菩提樹下に在つて、坐し已りぬ。時に、菩提樹を守護する所の神、大歡喜を生じ、心意踊躍、其の體に徧滿して、自ら勝ふる能はず。卽ち其身の有ゆる瓔珞を解き、幷びに頭髻を散じて、速疾に菩薩の所に向ひ、最妙吉祥の事を以て、菩薩を讃美し、內心殷重に、大希奇を發し、悉く諸親及び其の眷屬に命じて菩薩を守護せしめて、恭敬儼然たり。

爾の時、彼處の四面の林木、大小を問ふ無く、有らゆる樹神各其樹より身を出し、菩提樹神の邊に來り到りて、問うて言く、『大善樹神、今、汝の樹下に在つて坐するは、此は是れ何人ぞや。我等、由來、未だ曾て覩見せざる最妙最勝の身、一切諸相の莊嚴を爲すこと、天中天の如し』と。是の語を作し已るや、其の護菩提樹神、彼の諸の樹神に告げて言く、『汝諸神の輩、當に知るべし。此は是れ淨飯王の子、甘蔗種姓なり。往昔劫初に、大衆推擧して、置立せる所の王、世世相承け、今に至つて來る。此は是れ其の胤なり』と。諸の樹神、復、菩提守護神に語つて言く、『菩提樹神、汝、今、眞に、最大の利益、大善福業を得て、汝の居處をして、是の如き勝上の衆生、三界の尊たる勝妙衆生有るを得しむ。此の衆生は、優曇華の如く、世に現じ難し』と。

爾の時、彼等一切の樹神、各、沈水・牛頭栴檀・諸の末香等を將て、又復、種種の妙好香華を菩薩の上に散じ、散じ已りて復散じ、歡喜踊躍、其の體に徧滿して、自ら勝ふる能はず、手を擧げ頭を低れ、十指の掌を合して、菩薩に向つて禮し、口中に、各、復、是の如く唱言すらく、『衆生の最首、唯、願くは、仁者、早く此の誓を成じ、速かに菩提を證せよ』と。次いで、復、四天所居の諸天、及び四天王有り。次で、無量の三十三天・夜摩・兜率・化樂・他化自在天等の無量無邊の一切の諸天、及び諸梵天有り。各、種種の天上の妙華・曼陀羅華・摩訶曼陀羅華・曼殊沙華・摩訶曼殊沙華・天の拘勿頭・及び波頭摩・分陀利等を將ち、復、種種の末香・塗香を持ちて、雨の如く菩提樹の上に散ず。其の菩提樹は、猶車輪の如く、周匝徧滿して、一由旬の內に、種種の香華、積つて膝に至りぬ。

爾の時、菩薩、彼の菩提樹下に坐せる時に、一の蚯蚓蟻子の聲を作す無し。況んや、復、大獸、一切の諸鳥は、亦、聲を作さず。假使風有るも、一切の諸樹、亦傾き動かず。菩薩の彼の菩提樹下に坐せる時に當り、淨居の諸天、心喜踊躍、其の體に徧滿して、自ら勝ふる能はず、菩薩を頂禮して、心內に各是の如き願を作して言はく、『一衆生の最首、願くは、仁、此の心早く圓滿を得て、速かに菩提を成ぜよ』と。

爾の時、菩薩、彼の菩提樹下に坐せる時、此の要誓を發すらく、『我成道せずんば、此の座を起たじ』と。是の時、魔王波旬、内心に大恐怖を生じて、即ち是の言を作す、『此の刹利釋種の子は、我が境界を除滅するを得んと欲し、我をして此の境界を出でしむるを得んと欲すべし。彼若し我に勝たば、我が前に在つて、必ず諸人を教へて涅槃を得しめ。諸人の爲に涅槃の方便を說き、我が境界をして當に虛空と成らしむべし。而るに、彼、即ち、今、未だ淨眼を得ずして、我が境界に在り。我、今、須く勤劬方便を作し、其の所行をして退失起走せしむ可し』と。而して偈を說いて言く、

『彼今若し菩提を成ずるを得ば、便ち廣く他の爲に正法を說き、
即ち當に我が境界を損耗すべし。衆人既に正路を開くを得ば、
自然に我が境界をして空ならしめん。境空ならば我は則ち寡婦と成らん。
其れ今未だ清淨眼を得ずして、乃ち復我が境界の中に住す。
我應に速疾に彼の邊に往き、先づ障礙を作して其の事を破るべし。
猶河水の來りて未だ至らざるに、逆に須く預め橋梁を造作すべきが如し。』

爾の時、魔王波旬、滿一千子を具足す。其の中間に於て、菩薩を助くるもの、五百子有り。商

主を首と爲し、魔波旬の右邊に在りて坐す。其の中、魔波旬を助くる者、亦五百有り。第一頭首を、名けて惡口と爲し、魔波旬の左邊に在りて坐す。時に、魔波旬、其の諸子に告げて、是の如き言を作さく、「汝等諸子、我、今、汝と共に、進退籌量して、汝等子別の意智を取らんと欲す。共に何の計を作してか、若くは力能く菩薩を降伏することを爲ん。」爾の時、右邊の長子商主、偈を說いて父、魔波旬に白して言く、

「若し人敢て大睡蛇に觸れ、復能く狂醉の象を盤廻し、
　曾て嚴熾の獸王と鬪はば、是乃ち能く彼の沙門を伏せん。」

爾の時、魔王波旬の左邊の次子、惡口、復、其の父の爲に、偈を說いて言く、

「若し人我を見ば心破傷し、諸樹根を拔いて卽ち地に倒れん。
　況んや彼の沙門若し我を覩ば、一氣に遠く走つて藏れざらんや。」

爾の時、右邊に一魔子有り、名けて妙鳴と爲す。卽ち、復、偈を以て其の父に白して言く、

「若し人大海に浮渡して、還つて海を飲んで悉く乾かめしんと欲する、
　父王此の事驚くに足らず、若し菩薩の面を見んこと怪む可し。」

爾の時、左邊に、復、一魔子あり、名けて百鬪と爲す。卽ち、更に偈を以て其の父に白して言く、

『我が身の髆上百臂生ず、一臂能く三百箭を射ん、
父王但去つて愁惱する莫れ、我獨能く彼の沙門を破らん。』
爾の時、右邊に一魔子有り、名けて善覺と爲す。即ち、復、偈を以て其の父に白して言く、
『若し其の力有ること象馬の如く、或は復(一)毗紐及び金剛なりとも、
人の宿業の忍辱威を藏するには、彼等の諸力及ぶ能はず。』
爾の時、左邊に、復、一魔子あり、名けて嚴威と曰ふ。即ち、更に、
偈を以て其の父に白して言く、
『我虛空に於て水火を雨らし、彼に至つて能く比丘の身を破り、
爾の身をして一聚灰の如くならしめん、猛火焰の乾草を燒くが如くに。』
爾の時、右邊に一魔子有り、名けて善目と爲す。即ち、復、偈を以て其の父に白して言く、
『若し最勝の須彌崩れ、一切の天宮殿盡く壞れ、
大海の諸水皆枯涸し、日月空より悉く墜來らしめんも、
能く日光をして冷氷の如く、天宮墮落して地に到らしめんも、
菩薩・樹下に一び坐し已るや、未だ正覺を成せずば終に移らじ。』

【一】Viṣṇu

爾の時、左邊に、復、一魔子あり、名けて報怨と曰ふ。卽ち、更に、偈を以て、其の父に白して言く、

『我が指能く日月を執持し、虚空の星宿及び諸辰、
彼等一切天を提搦し、四海の水を手掌の内に入る。
況んや此の沙門一釋子をや。卽ち今捻つて海水の邊に擲たん。
但、速に此の諸軍兵をして、疾く彼の沙門の所に向はしめよ。』

爾の時、右邊に、復、一魔子有り、名けて德信と爲す。卽ち、復、偈を以て、其の父に白して言く、

『日月の運移に朋を求めず、輪王の應化に等侶無し。
諸聖菩薩は衆を假らずして、獨自ら能く大魔軍を破らん。』

爾の時、左邊に、復、一魔子有り、求過失と名く。卽ち、更に、偈を以て、其の父に白して言く、

『戰鬪の器仗は刀に過ぎず、身に鎧甲を著くれば心怯るる無し。
是の如きの兵馬は必ず能く殺さん。父王彼の沙門を畏るる莫れ。』

爾の時、右邊に一魔子あり、名けて福德瓔珞莊嚴と爲す。卽ち、復、偈を以て、其の父に白して言く、

『彼の身の鞕きこと㈡那羅延の如く、破壞すべき難き四諦の體、忍辱の鎧甲㈢三脫の刀、智慧の箭を執つて我等を降さん。』

爾の時、左邊に、復、一魔子有り、名けて不廻と曰ふ。卽ち、更に、偈を以て、其の父に白して言く、

『好き乾草は火立ろに燃え、善解神射の箭は尅中し、霹靂山に擬すれば便ち突過するが如く、釋子我を見ば手から必ず降らん。』

爾の時、右邊に、一魔子有り、名けて法身と曰ふ。卽ち、復、偈を以て、其の父に白して言く、

『人有り彩を以て空中に畫くとも、諸の衆生を同一の心と作すとも、月天風神を羅網纏ふとも、菩薩の道場は動かす能はじ。』

爾の時、左邊に、復、一魔子有り、恒作罪と名く。卽ち、更に、偈を以て、其の父に白して言く、

【二】Narayana 天の名。毗紐天の別名。
【三】三脫とは、空・無相・無願の三解脫門をいふ。

『我は毒を飲みて消すこと人の食の如く、指器使に觸るれば悉く灰と成す。
若し彼が身を碎いて塵の如くせずんば、終に此の三手を畜へず。』
爾の時、右邊に一魔子有り、名けて成利と爲す。卽ち、復、偈を以て、其の父に白して言く、
『三千世界は毒中に滿つれど、世尊之を觀て怖畏する無し。
畏る可き三毒を彼は滅盡すればなり。我等宮に還らん・鬪を用つて(何をか)爲んや。』
爾の時、左邊に、復、一魔子有り、名けて貪戯と曰ふ。卽ち、更に、偈を以て、其の父に白して言く、
『我音聲の萬億を過ぐると、嚴飾せる玉女數百千とを將つて、
彼を幻惑して其の心を亂し、寂禪を失して諸欲を受けしめん。』
爾の時、右邊に一魔子有り、名けて法戯と爲す。卽ち、復、偈を以て、其の父に白して言く、
『彼は禪定の法を以て戯と爲し、常に解脫の甘露に入りて遊び、
諸の妙樂を用て衆の殃を拔き、五欲を持して以て適と爲さず。』
爾の時、左邊に、復、一魔子有り、名けて捷疾と云ふ。卽ち、更に、偈を以て、其の父に白して言く、

『我が力捷疾にして日月を搦め、亦能く勁き火風を裁斷す。
沙門を撮取して父前に置き、碎けし麥芒の吹散せらるるが如くせん。』
爾の時、右邊に一魔子有り、師子吼と名く。卽ち、復、偈を以て、其の父に白して言く、
『曠澤に無量の野干鳴くも、乃ち未だ大師子吼を聞かず。
諸獸若し師子吼を聞かば、四散奔馳して百方に走らん。
是の如く我等一切の魔は、未だ法王の大聲に唱ふるを聞かずして、
各其の意を說いて背へて止まざるも、彼の邊に至らば當に自ら休むべし。』
爾の時、左邊に一魔子有り、名けて惡思と曰ふ。卽ち、更に、偈を以て、其の父に白して言く、
『我今惡思彼を得んを願ふ、其れ此の魔軍を見ざる可けんや。
彼の心眞癡にして意懷なきも、云何ぞ走り起つて疾く避けざらん。』
爾の時、右邊に一魔子有り、名けて善思と曰ふ。卽ち、復、偈を以て、其の父に言して言く、
『彼も亦是れ癡無力なるに非ず、汝等自ら短く人情に乏し。
今汝未だ彼の（四）善權を知らざるも、後當に智を以て汝を降伏す可し。

【四】善權は方便に同じ。

汝等魔子恒沙の衆、是の如きの才辯三千に滿つるも、
彼の一毛頭を損ずる能はじ、況んや復殺害を能く起らしめんや。
汝等淨心もて彼處に向ひ、口に讃歎を言ひ身を曲躬せよ。
怨惡を作して自兵を殘ふ莫れ。彼當に必ず三界の主と成るべし。』

是の如くして、乃至、一千の魔子、其の中間に於て、或は白を助くるあり、或は黑を助くるあり、各、自心に隨つて、其の意見を說けり。

爾の時、魔王波旬に、一りの最大なる兵臣有り、名けて賢將と曰ふ。時に魔波旬、彼の兵臣大賢將に語つて言く、『汝、賢將、來つて我に隨つて行け。今此に一釋種の子有り。其れ無上菩提を成就せんと欲す。我、今、汝と共に、彼處に至りて、其の道法を斷じて、無上菩提を證するを得るを聽す勿らん。』時に賢兵將、即便ち偈を以て、其の大王魔波旬に白して曰く、

『王の統領する所の四天王、阿修羅王・緊那羅、
迦婁羅・摩睺羅迦は、頭に十指を戴いて彼に歸依す。
況んや復一切の諸梵世、光音・廣果・及び淨居、
地住欲界色界の天、悉皆彼に向つて足を頂禮す。

又王の諸子は智慧勝れ、勇力・世間に比倫無きも、
心內恒常に彼の尊を禮す。王の軍は八十由旬に滿ち、
夜叉・羅刹幷に諸の鬼、地上に住して王の前に在りと雖も、
心恒に彼の無過の人を念じて、十指合掌して頭頂に禮す。
魔軍千萬彼の聖を見るや、私に香華を以て遙かに之を散ず。
我此の類の相の分明なるを見る、菩薩必ず魔軍衆に勝たん。
魔家の兵馬の所住の處に、多く鵂鶹・鴝鵒の鳴、
或は復梟鴟・烏鵲の聲、驢・狐・諸畜の聽くを惡むの響あり。
我彼の菩提樹下を見るに、吉祥の諸鳥の種種の音、
鳧・鳫・鴛鴦・【五】倶翅羅、鸜鵒・鸚鵡・孔雀鳥、
彼の聖を圍繞して音微妙なり。是の如きの勝相あり・彼必ず强からん。
又魔軍の衆の住する所の營は、常に砂石埃塵土を雨らし、
菩提樹下に聖の坐する處は、天・種種の妙香華を降らす。
魔衆の住處は地平かならず、高下の垢坎塠埠多く、

【五】倶翅羅（Kokila）。好聲鳥と譯す、聲美はしきも貌醜き鳥、茂林を好みて枯樹に栖まず。

礓石・荊棘・叢穢除し。菩提樹下の地の周圍は、
金銀七寶を以て莊嚴す。是の如き等類の相有るを見て、
智慧人の若し意有らば、此の相を見已りて應に迴還す可し。
是の如きの莊嚴 徧地の間に、必ず當に無上道を成就すべし。
大王若し臣の諫に隨はずんば、夢に見る所の如く當に虛ならざるべし。
是の如きの仙人は近づく可らず、應に兵衆を廻して本處に向ふ可し。
往昔王・諸仙に觸れしが故に、國土を呪焚して 悉く灰と成しき。
過去に一梵德王有り、（六）毗耶娑仙の意に違犯せり。
王に妙園雜華果有りしを、呪咀して火を出し悉く燒燃せしかば、
多年彼の園に草生ぜず、況んや復樹林華果等をや。
世間の有らゆるを苦行もて、諸惡を斷じ梵行を修する時、
諸王來つて悉く足に頂禮せり。我等今本に還歸す可し。
王昔嘗に（七）韋陀論を聞きしなるべし。三十二相の明有る人、
彼の人道を求むるが故に出家せば、必ず諸煩惱の（八）結を斷じ、

【六】Vyasa（ビヤーサ）
【七】Veda（ヴェーダ）
【八】結は煩惱の異名。

無上正眞道を成ずるを得て、眉間より卽ち白毫の光を放ち、
普く十方億刹の中を照さん。況んや復此の魔軍の衆等をば、
豈降伏し得る能はざる可き。王若し鬪はんと欲せんも勝つを得じ。
彼が頭頂の如きは極天に至り、千萬の諸天も視る能はず、
應に彼の微妙の果の、世間未だ聞かず今聞くを得るを成ずべし。
猶須彌及び鐵圍、日月・帝釋・梵天王、
夜叉・羅刹の諸林木の、皆菩提樹に向つて身を屈するが如し。
疑無し此の大福德聚や、歷劫以來此の行を修せる、
施・戒・忍・進・禪・智の力なり。今決らず我が魔軍を退散せん。
象の諸瓦坯を蹈破するが如く、諸獸王の師子吼するが如く、
日の諸螢火を翳覆するが如く、世尊の魔を破る亦復然らん。
師子は獨り諸獸蟲を散じ、毒蛇は一螫して多衆を殺す。
菩薩の熏修せる善根力は、獨り自ら能く我が諸魔を破らん。」

爾の時、魔王波旬、大臣の邊より、此の偈を聞き已りて、心に恐怖を生じ、熱惱して安からず、

身心、憂愁・苦惱して樂まず、慚恥羞愧、爲す所を知らず。然れども、内心、猶、我慢を懷きて、廻還するを肯せず。復、逃走せず。復、更に餘の諸軍衆に語つて言く、『汝等、齊しく、意に驚く莫れ、怖づる莫れ、畏るる莫れ。走る莫れ。此の乃ち是の我、彼の心を試み看ん。我、今、美言もて更に彼を慰喩し、其の起つて菩提樹を離るるや不やを見ん。是の如き衆生の寶をして、忽ち大殃に値はしむる莫らん』と。

爾の時、魔王の長子商主、其の父に白して言く、『魔王大王、我が意は、父王と彼の釋迦種の子と、怨讎を作すを願はず。何を以ての故に。若し百千萬億の魔衆有つて、手に刀劍を執りて、此の釋迦の邊に來りて、障礙を作さんと欲するも、終に作す能はざらん。況んや、復、父王の獨自一身なるをや。父王、但、此の釋種の子の、此の閻の菩提樹下の師子座に在りて坐し、驚かず怖れざるを觀よ。父王、此の釋種の子の、搖がず動かざるを觀よ。又、復、虚空の無量の天衆、十指合掌して、彼を頂禮するも、是の如く諸天の頂禮供養讃歎する時にも、曾て歡悦せず。其の父王の瞋心惡意もて、來つて惱害せんと欲するを見るも、亦、瞋怒せず。父王、當に知るべし。假使、人有り、諸の妙色を以て、能く虚空に畫くとも、假使、彼の大須彌山王を、一人有つて、擔もて能く擧げ將て行かんこと、此の事亦可なりとも、或は、復、人有り、大海を浮渡して、彼岸

に至るを得んこと、亦、可なりとも、人有り、最大の風神、四方に吹く時、忽然として縛著せんこと、亦可なりとも、彼の日月星宿を取つて、地に下し置かんこと、亦可なりとも、一切の諸衆生等を合せて、一心と作さんこと、亦可なりとも、一切の諸衆生等を、諸處に移し置くとも、終に此の釋種の子の、魔に降伏せんことを得可からず』と。

時に魔波旬、偈を以て、其の長子商主に告げて、是の如き言を作さく、

『汝眞に我が怨なり是れ子に非ず。更に面を將つて我に向つて看ること莫れ。
汝の心今既に沙門に著す、汝宜しく彼の釋子の所に向ふべし。』

爾の時、魔王波旬、長子商主の諸諫するを取らず、其の諸女に告げて、是の如き言を作すらく、『汝等諸女、各相共に、我が言を聽き用ひよ。汝、宜しく、彼の釋種の子の邊に至つて、其の心に欲情有りや不やを試觀すべし。』其の諸の魔女、父の勅を聽き已りて、相共に、安庠として、菩薩の所に向ひ、彼處に到り已り、菩薩を去り離れて、近よらず、遠ざからず、種種の婦女の媚惑諂曲の事を示現す。所謂、覆頭、或は、復、露頭、或は、復、半面、或は全面を出し、或は微笑を作し、白齒を示現して、數顧眄して、菩薩を觀瞻し、或は、復、頭を以て菩薩を頂禮し、或は其の頭を仰げて、菩薩の面を觀、或は、復、低頭覆面して、地を觀、或は雙眉を動かし、或は

眼を開閉し、或は髻を解散して、手を以て髮を梳り、或は兩臂を抱へ、或は兩手を擧げて、腋下を示現し、或は、復、手を以て乳房を執弄し、或は胸背を露はして、腹臍の間を現はし、或は、復、手を以て臍上を拍ち、或は、復、數衣裳を解脫し、或は、復、數、還、衣服を繫け、或は、復、數、內衣を褰撥して、尻臗を露現し、或は瓔珞を解きて、地に擲著し、或は耳璫を解き、或は、復、還、著け、或は嬰兒を弄し、或は諸鳥を弄し、或は、復、行步して左右を顧眄し、或は、復、顚呻長噓して歎息し、或は脚指を以て、傍に地に畫き、或は歌ひ、或は舞ひ、或は腰身を動かし、或は意氣を作こし、或は、復、舊時に行へる恩愛の欲事、喜笑戲謔姿態の時を憶念し、或は、復、童女の身を現作し、或は時に、婦女の身を現作し、或は、復、新嫁の女の身を現作し、或は中年の婦女の身を現作し、是の如き等を作して、婦人の諂媚惑著の種種の事を示現す。

復、香華を將つて、菩薩の上に散じ、復、種種五欲の事を以て、菩薩を勸請して、欲心の姿態有りと爲すや不や、彼れ、今、復、欲心を以て、我等を觀察するや不や、或は欲心無くして、我を觀るや不やと、其の面を觀看し、其の心情を觀ず。彼等魔女、菩薩を見るに、深心寂定にして、本來、清淨、無濁無垢にして、面目の清淨なること、猶、滿月の、羅睺・阿修羅王の手中より出る所の如く、清淨無垢なること、日の初めて昇るが如く、光焔の顯赫たること、鎔金の鋌の

如く、清淨無染なること、猶、蓮華の水中より出でて、染著せざるが如く、火光焰の如く、須彌山の如く、確然として動かざること、鐵圍山の崚嶒高峻なるが如く、善く諸根を攝して、心意を調伏す。彼等、既に、菩薩の是の如きを見て、皆、慚愧羞恥の心を生じぬ。

大正七年十月八日印刷
大正七年十月十一日發行
大正八年六月廿九日再版發行
昭和二年七月廿五日三版發行

（岡山製本）

國譯大藏經　經部第十三卷

【非賣品】

編輯兼發行者　東京市神田區小川町一番地　國民文庫刊行會

右代表者　東京市本郷區西片町十番地　鶴田久作

印刷者　東京市小石川區久堅町百八番地　君島潔

印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　共同印刷株式會社

發行所　電話神田（一五三五番・一八三八番）　振替東京一八五七二番　國民文庫刊行會